

東京大学本郷構内の遺跡

医学部附属病院

看護職員等宿舎 5 号棟地点

看護職員等宿舎 3 号棟地点 (2)

2024

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 19

東京大学本郷構内の遺跡

医学部附属病院

看護職員等宿舎 5 号棟地点

看護職員等宿舎 3 号棟地点 (2)

2024

東京大学埋蔵文化財調査室



看護職員等宿舎5号棟地点 D面全景



看護職員等宿舎5号棟地点 1号石列



看護職員等宿舎 5 号棟地点 SK19 動物骨出土



看護職員等宿舎 5 号棟地点 SD206



看護職員等宿舎 5 号棟地点 SI201



看護職員等宿舎 5 号棟地点 SI201 土器出土状況



看護職員等宿舎 5号棟地点 S1201 出土土器



看護職員等宿舎 旧石器時代第3ブロック

例 言

1. 本書は、東京大学本郷構内、医学部附属病院看護職員等宿舍3号棟、同5号棟新営に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 看護職員宿舍3号棟地点は、2021年刊行の東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書15において、江戸時代の報告を行っている（東京大学埋蔵文化財調査室2021）。本書は、同地点報告(2)として、それ以外の報告を行っている。
3. 本書掲載の看護職員宿舍3号棟地点は、これまで東京大学構内遺跡調査研究年報や報告書などで、「本郷48 医学部附属病院看護師宿舍Ⅱ期地点」、看護職員宿舍5号棟地点は、「本郷74 医学部附属病院看護師宿舍Ⅲ期地点」と記載したものである。
4. 各地点の略称は、3号棟地点は「HN2」、5号棟地点は「HHN308」とした。出土遺物の注記は、それぞれ「HN2」、「HN3」と記している。
5. 両地点は、東京都文京区本郷7-3-1 東京大学本郷構内（東経139度46分01秒、北緯35度42分42秒、世界測地系9系X座標-32004.039～-31974.018、Y座標-5969.452～-6020.736）に所在している。
6. 本地点は、東京都遺跡地図「文京区47 本郷台遺跡群（本郷五・七丁目・弥生二丁目他、包蔵地 集落 貝塚 その他の墓 社寺 屋敷 その他（町屋）、旧 縄 弥 古 平 近」内に位置している。
7. 各地点の調査面積は、以下のとおりである。
看護職員等宿舍3号棟地点：525㎡
看護職員等宿舍5号棟地点：550㎡
8. 各地点の調査・整理期間は以下の通りである。
看護職員宿舍3号棟地点
『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書15』参照
看護職員宿舍5号棟地点
試掘調査 2005年7月12～14日
事前調査 2008年4月1日～8月1日
整理作業 2017年6月22日～2023年12月15日（遺物基礎整理、デジタル化、図版作成）
2022年12月23日～2023年12月8日（遺物基礎整理、デジタル化、図版作成）
2023年10月30日～2024年1月22日（事実記載、考察）
9. 両地点の試掘調査・事前調査は、東京大学埋蔵文化財調査室が行い、看護職員宿舍3号棟地点は、原祐一、大成可乃、看護職員宿舍5号棟地点は、堀内秀樹、追川吉生が担当した。
10. 本報告の編集は、堀内秀樹、香取祐一、小林照子が行った。
11. 執筆分担は以下の通りである
Ⅰ 遺跡の位置と環境 堀内秀樹
Ⅱ 看護職員宿舍5号棟地点
第Ⅰ章 堀内

- 第Ⅱ章 堀内
- 第Ⅲ章 堀内
- 第Ⅳ章 湯沢丈
- 第Ⅴ章 香取祐一（遺構）、山下優介（遺物）
- 第Ⅵ章 香取、内田仁（加藤建設株式会社）
- 第Ⅶ章 内田
- 第Ⅷ章 堀内

Ⅲ 看護職員宿舎3号棟地点（2）

- 第Ⅴ章 香取（遺構）、山下（遺物）
- 第Ⅵ章 香取、内田
- 第Ⅶ章 堀内

Ⅳ 考察

阿部常樹、高橋怜土、堀内秀樹、山下優介

12. 発掘調査に伴う図面、写真、出土遺物は、東京大学埋蔵文化財調査室が、駒場Ⅱリサーチキャンパス、茨城県石岡市八郷町柿岡414 東京大学工学部・工学系研究科柿岡教育研究施設内において、運用、保存、管理している。
13. 動物遺体の同定および分析は、阿部常樹氏（國學院大學學術資料センター）、高橋怜土氏（國學院大學大学院）に依頼し、原稿を賜った。
14. 旧石器時代の実測・分析は、内田仁氏（加藤建設株式会社）に依頼し、原稿を賜った。
15. 遺物の実測は、相川壤、雨宮健祥、笠見智慧、木之内忍、小久保竜也、小林優紀、柴原聰一郎、原口雅隆、宮原千波（東京大学）、梶原悠渡（早稲田大学）、今井雅子、杉浦あかね（東京大学埋蔵文化財調査室）、遺物の写真撮影は、青山正昭、デジタルトレース、写真合成、図版作成は、香取祐一、小林照子、渡邊法彦が行った。
16. 本書（PDF形式）および本書に関わる本文には掲載されていない遺構一覧表（詳細版）、遺物観察表（以上、xlsx形式）、遺構写真、遺物写真（以上、jpeg形式）は東京大学埋蔵文化財調査室公式サイト（<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp/index.htm>）に収録した。
16. 発掘調査および報告書の作成にあたり、下記の方々からご教示を得た。記して感謝を表したい。（敬称略、五十音順）
阿部常樹、小橋健二、金子佳史、篠原和大、久永雅宏、滝沢亮、西川修一、三木健裕、村串まどか、山口正憲
東京大学人文社会系研究科考古学研究室、東京大学経済学部、東京大学施設部、加藤建設株式会社、バリノサーヴェイ株式会社、文京区教育委員会
17. 発掘調査・整理作業参加者
発掘調査
大沢正吾、野村高広、林正之、守屋亮、役重みゆき（東京大学）、井口真理子、広木由美子（昭和女子大学）
加藤建設株式会社

整理作業
内田仁、太田圭、大沢正吾、笠見智慧、木之内忍、小久保竜也、小林優紀、柴原聰一郎、高屋昂平、富高直人、野村高広、原口雅隆、林正之、宮原千波、守屋亮、役重みゆき（東京大学）、梶原悠渡（早稲田大学）
青山正昭、安芸毬子、阿部常樹、石井龍太、今井雅子、大貫浩子、加藤理香、香取祐一、小林照子、杉浦あかね、坂野貞子、渡邊法彦（埋蔵文化財調査室）

凡 例

1. 本文中に記載した遺構の略号は、以下の通りである。
SB：基礎列 SD：溝 SE：井戸 SF：炉穴 SI：竪穴建物 SK：土坑 SP：ピット SU：地下室
SX：性格不明の遺構
2. 本報告の実測図の縮尺は、それぞれの図版に記した。遺物図版の縮尺は基本的に陶磁器類が1/3、瓦が1/6であるが、これと異なる縮尺の場合のみ倍率表記を行った。
3. 出土遺物の写真は、基本的に実測図にはめ込み合成を行った。遺構の写真などは東京大学埋蔵文化財調査室公式サイトに掲載している (<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp/index.htm>)。
4. 本文、挿図、観察表、写真で使用した遺物番号は、共通の番号を使用した。
5. 遺物図版に使用している記号は、以下のことを示している。
 - ・▲は、高台、見込みなどの釉際を表している。
 - ・\——/は、口唇部の口銹を表している。
 - ・遺物中心線上下の破線は、それぞれ推定口径、推定底径を表している。
 - ・— —は、断面を表している。
 - ・播鉢の↓——↓は、体部播目の範囲を表している。
 - ・口唇部の\↔/は、敲打痕を表している。
6. 本文中に記載した陶磁器・土器類は、「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類」（いわゆる東大分類）の最新バージョンである『医学部附属病院入院棟 A 地点』で示した分類（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）、および「東京大学構内遺跡出土土人形・玩具の分類」（安芸毬子・小林照子・堀内秀樹 2012）に準拠している。
看護職員宿舎5号棟地点からは、コンテナ箱にして百数十箱の遺物を取り上げた。これは調査時に必要と判断された出土状況などの記録以外に、遺物の取り上げを行わなかった瓦の細片、礎石や組石などに使用された石とその後込めに使用された割石、壁土、漆喰、炭化物、火山灰あるいは取り上げる際に崩壊するような一部の遺物を除外した出土遺物の総量である。この中には、胎質別に陶磁器・土器類、人形・ミニチュア、瓦、金属製品、石製品、木製品、骨角製品、ガラス製品、動物遺体等が含まれる。本報告では動物遺体については人工遺物と分けて記述を行った。人工遺物については遺構別に遺構番号降順に記載した。
遺物実測図は、出土遺物全てを行うことは量的に不可能であり、本報告では出土遺構ごとにその年代や性格などを代表すると判断される遺物を中心に、完形率、希少性などを含めて図化選択を行った。
7. 看護職員宿舎3号棟地点および看護職員宿舎5号棟地点の調査では、調査時期が異なるために各地点において任意のグリッドを設定して行った。本書では、各地点で設定したグリッドでの表記を行った。

○胎質

J (磁器) T (陶器) D (土器)

○生産地

A - 輸入陶磁器

- A1 景德鎮窯系
- A2 漳州窯系
- A3 德化窯系
- A4 龍泉窯系
- A5 宜興窯系
- A6 朝鮮
- A7 ベトナム
- A8 ヨーロッパ
- A9 福建・広東系
- A10 西アジア

B - 肥前系

C - 瀬戸・美濃系

D - 京都・信楽系

E - 備前系

F - 志戸呂系

G - 常滑系

H - 萩系

I - 万古系

J - 大堀・相馬系

K - 丹波系

L - 堺系

M - 益子・笠間系

N - 九谷系

O - 壺屋系

P - 淡路系

Q - 江戸在在地系*

R - 三田系

S - 飯能系

T - 薩摩系

Z - 不明

○器種

- | | | | | |
|-----------|----------|-----------|-----------|----------|
| 1. 碗 | 2. 皿・平鉢 | 3. 大皿・大皿鉢 | 4. 爛徳利 | 5. 鉢 |
| 6. 坏 | 7. 猪口 | 8. 仏飯器 | 9. 香炉・火入れ | 10. 瓶 |
| 11. 御神酒徳利 | 12. 油壺 | 13. 蓋物 | 14. 筆立て | 15. 壺・甕 |
| 16. 急須 | 17. 爛鍋 | 18. 合子 | 19. 水滴 | 20. 蓮華 |
| 21. 植木鉢 | 22. 花生 | 23. 片口鉢 | 24. 灰落し | 25. 鬢水入れ |
| 26. 茶入れ | 27. 水注 | 28. 漚瓶 | 29. 搦鉢 | 30. 餌入れ |
| 31. 火鉢 | 32. 柄杓 | 33. 鍋 | 34. 土瓶 | 35. 戸車 |
| 36. ちろり | 37. 薬研 | 38. 手焙り | 39. おろし皿 | 40. 油受け皿 |
| 41. 油徳利 | 42. 行平鍋 | 43. 十能 | 44. ひょうそく | 45. 瓦燈 |
| 46. カンテラ | 47. ほうろく | 48. 七輪 | 49. 涼炉 | 50. 五徳 |
| 51. 塩壺 | 52. 燭台 | 53. 蒸し器 | 54. 懐炉 | |
| 63. あんか | 64. 煙硝搦鉢 | 65. 乳棒 | 66. 硯屏 | 67. 釜 |

*本報告では人形・玩具のみで使用

東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器分類 Ver.4.1 (■は新規、▲は Ver.4 で修正を加えたもの。各分類の詳細は年報 10 参照)

- J A 1 -- 景德鎮窯系
- J A 2 -- 漳州窯系
- J A 3 -- 德化窯系
- J A 4 -- 龍泉窯系
- J A 6 -- 朝鮮
- J A 8 -- ヨーロッパ
- ○ J A 9 -- 福建・広東系

- J B 群 -- 肥前系磁器
- 1 -- 碗
 - ・ J B - 1 - a (高台断面が幅広「U」字状、いわゆる初期伊万里)
 - ・ 〃 b (底部無軸)
 - ・ 〃 c (高台断面三角の製品、長吉谷窯指標)
 - ・ 〃 d (高台断面シャープな「U」字状で高台高が高い、蓋付有、高尾窯Ⅳ～Ⅵ層指標)
 - ・ 〃 e (高台断面シャープな「U」字状で高台高が低い、蓋付有)
 - ・ 〃 f (高台径が小さい半球形の薄手碗)
 - ・ 〃 g (絵付・作りの粗雑な碗)
 - ・ 〃 i (高台高が高、慣用名：小広東碗)
 - ・ 〃 j (高台径が小さい腰の張る碗、慣用名：小丸碗)
 - ・ 〃 k (大振りの筒形碗、いわゆる初期伊万里)
 - ・ 〃 l (筒形碗)
 - ・ 〃 m (慣用名：広東碗、蓋付有)
 - ・ 〃 n (端反形碗、蓋付有)
 - ・ 〃 o (腰が張り、体部が直立する小振りの碗、慣用名：湯呑碗)
 - ・ 〃 p (高台から直線的に開く薄手の碗、蓋付有)
 - ・ 〃 q (高台が「ハ」の字状に開く碗、大振りで腰が張る、蓋付有)
 - ・ 〃 r (朝顔形、蓋付有)
 - ▲ ・ 〃 s (丸碗形、幅広高台)
 - ・ 〃 t (体部が直線的に開く大振りの碗、内側に主文様、慣用名：うがい茶碗)
 - ・ 〃 u (JB- 1 - d のやや小振りの碗形、コンニャク判が多い)
 - ・ 〃 v (梅樹文が描かれた粗製の碗)
 - ・ 〃 w (高台径が大きく腰の張る碗、コンニャク判が多い)
 - ・ 〃 x (見込み蛇ノ目釉剥ぎ、粗製)
- ▲ ○ 2 -- 皿・平鉢
 - ・ J B - 2 - a (高台断面が幅広「U」字状、いわゆる初期伊万里)
 - ・ 〃 b (高台断面三角で高台径が小さい、ダンバギリ窯指標)
 - ・ 〃 c (高台断面三角で高台径が大きい、柿右衛門B窯など指標)
 - ・ 〃 d (高台断面がシャープな「U」字状で上質の製品、南川原窯ノ辻窯指標)
 - ・ 〃 e (高台断面がシャープな「U」字状)
 - ・ 〃 f (やや深く、腰が張る、多くは輪花に成形)
 - ・ 〃 g (絵付・作りが粗雑な皿、扇面文様が多い)
 - ・ 〃 h (蛇ノ目高台、いわゆる初期伊万里)
 - ・ 〃 i (蛇ノ目凹形高台で高台高が高い)
 - ・ 〃 j (蛇ノ目凹形高台で高台高が低い)
 - ・ 〃 k (見込み蛇ノ目釉剥ぎで底部無軸)
 - ▲ ・ 〃 l (見込み蛇ノ目釉剥ぎで高台径が小)
 - ▲ ・ 〃 m (見込み蛇ノ目釉剥ぎで高台径が大)
 - ・ 〃 n (鍋島)
 - ・ 〃 o (器高が低く腰が張る皿)
 - ・ 〃 p (浅手で口縁部外反、輪花、墨弾き雲形文が多い、志田窯指標)
- ・ 〃 q (高台断面が「U」字状、輪花に成形、見込み全面に一枚絵)
- ・ 〃 r (糸切細工の貼付高台)
- ・ 〃 s (初期伊万里の系統で内山の影響を受けた外山で作られた粗製品、広瀬向窯など指標)
- ・ 〃 t (高台内蛇ノ目釉剥ぎ)
- ▲ ○ 3 -- 大皿・大平鉢
- ▲ ・ J B - 3 - a (いわゆる初期伊万里)
- ▲ ・ 〃 b (「U」字状の高台)
- ・ 〃 c (高台内蛇ノ目釉剥ぎ)
- ・ 〃 d (蛇ノ目凹形高台)
- ・ 〃 e (浅手で口縁部外反、輪花、墨弾き雲形文が多い、志田窯指標)
- ・ 〃 f (高台断面が三角形や逆台形)
- 4 -- 燗徳利
- ▲ ○ 5 -- 鉢
 - ・ J B - 5 - a (高台断面が幅広「U」字状、いわゆる初期伊万里)
 - ・ 〃 b (高台断面がシャープな「U」字状)
 - ・ 〃 c (高台内蛇ノ目釉剥ぎ、青磁に多い)
 - ・ 〃 d (蛇ノ目凹形高台)
 - ・ 〃 e (慣用名：八角鉢)
 - ・ 〃 f (高台断面三角形)
 - ・ 〃 g (鍋島)
 - ・ 〃 h (見込み蛇ノ目釉剥ぎ)
- 6 -- 坏
 - ・ J B - 6 - a (丸形)
 - ・ 〃 b (端反形)
 - ・ 〃 c (極めて薄手)
 - ・ 〃 d (腰折れ直立形)
 - ・ 〃 e (型作り、慣用名：紅皿)
 - ・ 〃 f (高台径が小さい半球形の薄手坏)
- 7 -- 猪口
 - ・ J B - 7 - a (底部蛇ノ目凹形高台状)
 - ・ 〃 b (底部輪高台状)
- 8 -- 仏飯器
 - ・ J B - 8 - a (脚部のえぐりが深い)
 - ・ 〃 b (脚部のえぐりが浅い)
 - ・ 〃 c (脚部のえぐりが浅く、壘付外周面取り)
- 9 -- 香炉・火入れ
 - ・ J B - 9 - a (底裏に円盤状の露胎部)
 - ・ 〃 b (底部蛇ノ目釉剥ぎ)
 - ・ 〃 c (高台状の露胎部)
 - ・ 〃 d (べた底)
 - ・ 〃 e (蛇ノ目凹形高台)
 - ・ 〃 f (蛇ノ目高台)
 - ・ 〃 g (底部・高台内無軸)
- 10 -- 瓶
 - ・ J B - 10 - a (大型長頸瓶)
 - ・ 〃 e (いわゆる初期伊万里、口縁部が朝顔形に開く)
- 11 -- 御神酒徳利
 - ・ J B - 11 - a (瓶子形)
 - ・ 〃 b (鶴首形)
 - ・ 〃 c (筒形)
- 12 -- 油壺
- 13 -- 蓋物

- ・ J B - 13 - a (丸形)
- ・ ♪ b (筒形)
- ・ ♪ c (段重)
- ・ ♪ d (型作)

- 15 -- 壺・甕
- 16 -- 急須
- 18 -- 合子

- ・ J B - 18 - a (扁平な球形)
- ・ ♪ b (筒形)

- 19 -- 水滴
- 20 -- 蓮華
- 21 -- 植木鉢
- 22 -- 花生

- ○ 23 -- 片口鉢
- 24 -- 灰落し
- 27 -- 水注

- ・ J B - 27 - a (銚子形、釣手)

- 29 -- 播鉢

- ○ 30 -- 餌入れ

- 35 -- 戸車

- ○ 52 -- 燭台

◎ J C 群 -- 瀬戸・美濃系磁器

- 1 -- 碗

- ・ J C - 1 - a (丸碗、蓋付有)

- ・ ♪ b (筒形碗)

- ・ ♪ c (蓋付有、慣用名：広東碗)

- ・ ♪ d (端反形碗、蓋付有)

- ・ ♪ e (腰が張り、体部が直立する小振りの碗、慣用名：湯呑碗)

- ・ ♪ f (高台から直線的に開く薄手の碗、蓋付有)

- ・ ♪ g (慣用名：小丸碗)

- ▲ ○ 2 -- 皿・平鉢

- ・ J C - 2 - a (蛇ノ目凹形高台)

- ・ ♪ b (輪高台)

- ・ ♪ c (蛇ノ目高台)

- ・ ♪ d (そり皿、木型打込など)

- ・ ♪ e (陽刻)

- ・ ♪ f (陰刻)

- 4 -- 欄徳利

- ▲ ○ 5 -- 鉢

- 6 -- 坏

- ・ J C - 6 - a (丸形)

- ・ ♪ b (端反形)

- ・ ♪ c (筒形)

- ・ ♪ d (極めて薄手)

- ・ ♪ e (寿文坏)

- ・ ♪ f (体部が直線的に開く)

- ・ ♪ g (型作り、慣用名：紅皿)

- 7 -- 猪口

- 8 -- 仏飯器

- 9 -- 香炉・火入れ

- 10 -- 瓶

- 11 -- 御神酒徳利

- ・ J C - 11 - a (瓶子形)

- ・ ♪ b (鶴首形)

- 12 -- 油壺

- 13 -- 蓋物

- 15 -- 壺・甕

- 16 -- 急須

- 18 -- 合子

- 19 -- 水滴

- 20 -- 蓮華

- 21 -- 植木鉢

- 22 -- 花生

- 34 -- 土瓶

- ○ 36 -- ちろり

◎ J N 群 -- 九谷系磁器

- 1 -- 碗

- ▲ ○ 2 -- 皿・平鉢

- 6 -- 坏

■ ◎ J R -- 三田系磁器

- ○ 2 -- 皿・平鉢

- ○ 5 -- 鉢

- ○ 13 -- 蓋物

■ ◎ J Z 群 -- 生産地不明

- 1 -- 碗

- 2 -- 皿・平鉢

- 6 -- 坏

陶器分類

- ◎ T A 5 -- 宜興窯系

- ◎ T A 6 -- 朝鮮

- ◎ T A 7 -- ベトナム

- ◎ T A 8 -- ヨーロッパ

- ◎ T A 9 -- 福建・広東系

- ◎ T A 10 -- 西アジア

◎ T B 群 -- 肥前系陶器

- 1 -- 碗

- ・ T B - 1 - a (大振りの丸碗、慣用名：呉器手)

- ・ ♪ b (外面主文様、慣用名：京焼風陶器)

- ・ ♪ c (内面主文様、慣用名：京焼風陶器)

- ・ ♪ d (刷毛目丸碗、渦巻状の刷毛目)

- ・ ♪ f (陶胎染付)

- ・ ♪ g (刷毛目丸碗、打・波状・鋸歯状の刷毛目)

- ・ ♪ h (刷毛目端反形碗)

- ▲ ・ ♪ i (青緑・灰釉、丸形碗、内野山窯指標)

- ・ ♪ j (卵手)

- ・ ♪ k (象嵌の施された碗、慣用名：三鳥手)

- ▲ ○ 2 -- 皿・平鉢

- ▲ ・ T B - 2 - a (青緑・灰釉、輪剥、内野山窯指標)

- ▲ ・ ♪ b (灰・青緑釉砂目)

- ・ ♪ c (慣用名：京焼風陶器)

- ・ ♪ d (透明釉砂目、内野山窯指標)

- ・ ♪ e (胎土目)

- ・ ♪ f (陶体染付)

- ・ ♪ g (刷毛目)

- ・ 〃 h (白土・鉄などで象嵌の施された皿・平鉢、慣用名：三鳥手)
- ・ 〃 i (いわゆる呉器手碗のような胎土、釉調を有す)
- ○3 -- 大皿・大平鉢
- ・ T B - 3 - a (刷毛目)
- ・ 〃 b (白土・鉄などで象嵌の施された大皿・大平鉢、慣用名：三鳥手)
- ・ 〃 c (慣用名：京焼風陶器)
- ・ 〃 d (内野山窯指標)
- ▲ ○5 -- 鉢
- ・ T B - 5 - a (刷毛目鉢)
- ・ 〃 b (白土・鉄などで象嵌の施された鉢、慣用名：三鳥手)
- ・ 〃 c (慣用名：京焼風陶器)
- ▲ ・ 〃 d (青緑・灰釉、内野山窯指標)
- ・ 〃 e (いわゆる呉器手碗のような胎土、釉調を有す)
- 6 -- 坏
- ○8 -- 仏飯器
- 9 -- 香炉・火入れ
- ・ T B - 9 - a (陶胎染付)
- ・ 〃 b (慣用名：京焼風陶器)
- ・ 〃 c (刷毛目)
- ・ 〃 d (青緑釉)
- 10 -- 瓶
- 13 -- 蓋物
- ・ T B - 13 - a (陶胎染付)
- ・ 〃 b (刷毛目)
- ・ 〃 c (慣用名：京焼風陶器)
- 15 -- 壺・甕
- ・ T B - 15 - a (ロクロ成形)
- ・ 〃 b (タタキ成形)
- ○22 -- 花生
- 23 -- 片口鉢
- ・ T B - 23 - a (深いタイプ、刷毛目、底部鉄釉)
- ・ 〃 b (浅いタイプ、刷毛目、蛇ノ目釉剥ぎ)
- ○27 -- 水注
- 29 -- 播鉢
- ・ T B - 29 - a (内外面全釉)
- ・ 〃 b (口縁部のみ施釉)
- ○31 -- 火鉢
- ◎ T C 群 -- 瀬戸・美濃系陶器
- 1 -- 碗
- ・ T C - 1 - a (天目碗)
- ・ 〃 b (白天目)
- ・ 〃 c (灰釉薄掛け丸碗)
- ・ 〃 d (灰釉に簡略な山水の呉須絵、慣用名：御室碗)
- ・ 〃 f (腰が張る二段の段を有する碗、渦巻高台、灰釉鉄釉流し)
- ・ 〃 g (灰釉、「ハ」の字状に開く、柳文の鉄絵が多い)
- ・ 〃 h (丸碗、慣用名：太白手)
- ・ 〃 i (筒形碗、慣用名：太白手)
- ・ 〃 j (慣用名：広東碗、太白手)
- ・ 〃 k (体部中位に大きな凹み有、灰釉)
- ・ 〃 l (半筒形碗、慣用名：せんじ)
- ・ 〃 m (半球形の小振りの碗、笹文など多い、京焼風)
- ・ 〃 n (平碗、見込みに文様、京焼風)
- ・ 〃 o (慣用名：尾呂茶碗)
- ・ 〃 p (漆黒釉に長石釉散らし、慣用名：拳骨茶碗)
- ・ 〃 q (錆釉斑状、横位や波状の沈線が多い)
- ・ 〃 r (トビガンナ状の押形文、掛分け、慣用名：鎧茶碗)
- ・ 〃 s (刷毛目)
- ・ 〃 u (内面・外面上半灰釉、外面下半錆釉、慣用名：腰錆碗)
- ・ 〃 v (半筒形碗、灰釉柿釉掛分け)
- ・ 〃 w (杉形碗、若松文、慣用名：小杉茶碗)
- ・ 〃 x (緑釉丸碗)
- ・ 〃 y (口縁部端反、蓋付有、白化粧に鉄絵など、慣用名：奈良茶碗)
- ▲ ・ 〃 z (端反形碗、内面白化粧、外面に白土鉄絵)
- ・ 〃 aa (灰釉丸碗)
- ・ 〃 ab (慣用名：小丸碗、太白手)
- ・ 〃 ac (灰釉錆釉掛分け、長石釉散らし、体部に凹み有)
- ・ 〃 ad (筒形碗、漆黒釉錆釉掛分け)
- ・ 〃 ae (体部灰釉、口縁部緑釉・瑠璃釉などの掛分け)
- ▲ ・ 〃 af (慣用名：広東碗、内面白化粧、外面に白土鉄絵)
- ・ 〃 ag (鉄釉丸碗)
- ・ 〃 ah (鉄釉平碗)
- ・ 〃 ai (鉄釉筒形碗)
- ・ 〃 aj (長石釉丸碗)
- ・ 〃 ak (長石釉平碗)
- ・ 〃 al (長石釉筒形碗)
- ・ 〃 am (高台高が高、高台断面は台形を呈す、窯ヶ根窯など指標)
- ・ 〃 an (沓茶碗)
- ▲ ○2 -- 皿・平鉢
- ・ T C - 2 - a (灰釉丸皿、ピン痕有)
- ・ 〃 b (灰釉丸皿、輪状直重ね痕有)
- ・ 〃 c (長石釉丸皿)
- ・ 〃 e (灰釉摺絵皿、鉄絵、白泥による施文、慣用名：御深井)
- ・ 〃 f (幅広高台、鉄・呉須による絵付多、慣用名：石皿)
- ・ 〃 g (内側面鉄絵扁平渦巻き文、慣用名：馬ノ目皿)
- ・ 〃 h (染付皿、輪高台、慣用名：太白手)
- ・ 〃 i (型皿、高台有)
- ▲ ・ 〃 j (鉄絵皿、ピン痕多)
- ・ 〃 k (菊皿、外面しのぎ有、黄瀬戸釉緑釉流し)
- ・ 〃 l (菊皿、外面しのぎ無、黄瀬戸釉緑釉流し)
- ▲ ・ 〃 m (輪禿皿)
- ▲ ・ 〃 n (口縁部または体部をひだ状成形、ヒダ皿)
- ▲ ・ 〃 o (油皿、直重ね)
- ・ 〃 p (把手付油皿、口縁部内側把手貼付)
- ・ 〃 q (灰釉丸皿、高台無)
- ・ 〃 r (見込み沈線・圏線文様、緑釉沈線文皿、ピン痕、慣用名：総織部)
- ・ 〃 s (罌緑、口縁部施釉、鉄絵文様、直重ね、慣用名：志野織部)
- ・ 〃 t (染付皿、蛇ノ目凹形高台、慣用名：太白手)
- ・ 〃 u (輪禿平鉢、口縁部折縁状多)
- ・ 〃 v (鉄絵、緑釉流し、口縁部外反、慣用名：笠原鉢)
- ・ 〃 w (灰釉緑釉流し、中央印花、内側側面波状描文、慣用名：黄瀬戸鉢)
- ・ 〃 x (型皿、脚付)
- ・ 〃 y (端反皿、ピン痕多)
- ・ 〃 z (鉄釉丸皿、ピン痕多)
- ○3 -- 大皿・大平鉢
- ・ T C - 3 - a (鉄絵、緑釉流し、口縁部外反、慣用名：笠原鉢)
- ・ 〃 b (灰釉緑釉流し、中央印花、内側側面波状描文、慣用名：黄瀬戸鉢)
- ・ 〃 c (幅広高台、鉄・呉須による絵付多、慣用名：石皿)

■ ・ ♪ d (内側面鉄絵扁平渦巻き文、慣用名：馬ノ目皿)

○4 -- 爛徳利

▲ ○5 -- 鉢

▲ ・ ♪ f (水盥、灰釉、口縁部一箇所凹み)

・ ♪ h (手鉢)

・ ♪ j (長石釉)

・ ♪ k (緑釉、鉄絵、元屋敷窯、窯ヶ根窯など指標)

・ ♪ l (こね鉢)

■ ・ ♪ m (刷毛目)

○6 -- 坏

○8 -- 仏飯器

○9 -- 香炉・火入れ

・ TC-9-a (灰釉)

・ ♪ b (鉄釉)

・ ♪ c (灰釉、摺絵、慣用名：御深井)

・ ♪ d (褐釉、半菊状のしのぎ)

・ ♪ e (鉄釉灰釉掛分け、横位の沈線に縦位のしのぎ)

▲ ・ ♪ f (袴腰)

・ ♪ g (筒形)

○10 -- 瓶

・ TC-10-a (二合半灰釉徳利、底部釉拭取り)

・ ♪ c (二合半灰釉徳利、つけ掛け)

・ ♪ d (五合徳利)

・ ♪ e (一升徳利)

・ ♪ f (舟徳利、漆黒釉または柿釉)

・ ♪ g (柿釉徳利、献上備前写し)

・ ♪ h (らっきょう形)

・ ♪ k (織部徳利)

○12 -- 油壺

○13 -- 蓋物

○15 -- 壺・甕

・ TC-15-a (柿釉、底部及び器面下端露胎、平縁、慣用名：赤津半胴・錢甕)

・ ♪ b (柿釉灰釉流し、底部及び器面下端露胎、口縁部外反)

・ ♪ c (水甕、灰釉に鉄釉や緑釉を流す、流水状の文様、斑状の刺突)

・ ♪ d (緑釉、貼付文)

■ ・ ♪ e (ベタ底)

■ ・ ♪ f (高台有、肩衝、有耳多し)

○18 -- 合子

○19 -- 水滴

○21 -- 植木鉢

○22 -- 花生

・ TC-22-a (盤口形)

・ ♪ b (朝顔形)

○23 -- 片口鉢

・ TC-23-a (筒形)

・ ♪ b (丸碗形)

・ ♪ c (「ハ」の字状に開く)

○24 -- 灰落し

・ TC-24-a (鉄釉灰釉掛分け、横位の沈線に縦位のしのぎ)

・ ♪ b (長筒形)

○25 -- 鬚水入れ

○26 -- 茶入れ

○27 -- 水注

・ TC-27-a (褐釉、底部露胎、らっきょう形、橋状把手)

・ ♪ b (円筒形の体部に注口、取手、蓋付、慣用名：汁次)

・ ♪ c (灰釉、摺絵、慣用名：御深井)

■ ・ ♪ d (灰釉、らっきょう形、橋状把手)

○28 -- 渡瓶

○29 -- 播鉢

○30 -- 鯛入れ

○31 -- 火鉢

・ TC-31-a (瓶掛)

・ ♪ b (風炉)

○34 -- 土瓶

○38 -- 手焙り

○39 -- おろし皿

○40 -- 油受け皿

▲ ・ TC-40-b (脚付)

・ ♪ c (脚無、錆釉)

・ ♪ d (脚無、灰釉)

・ ♪ e (高い受付)

○41 -- 油徳利

○44 -- ひょうそく

・ TC-44-a (脚付)

■ ○64 -- 煙硝播

■ ○67 -- 釜

◎TD群 -- 京都・信楽系陶器

○1 -- 碗

・ TD-1-b (高台径が小さい半球形の碗、薄手)

▲ ・ ♪ c (丸碗)

・ ♪ d (杉形碗、鉄または呉須で若杉文、慣用名：小杉茶碗)

・ ♪ e (端反形、口縁部緑釉体部灰釉の掛分け)

・ ♪ g (端反形、小振りで器面には細かい貫入)

・ ♪ h (平碗、多くは見込みに銹絵染付)

▲ ・ ♪ i (半筒形)

・ ♪ j (筒形、多くは鉄絵で文様)

・ ♪ k (体部中に大きな凹み有、灰釉)

・ ♪ l (軟質施釉)

■ ・ ♪ n (胴縮め、慣用名：大福)

■ ・ ♪ o (慣用名：小福)

■ ・ ♪ p (天目形)

▲ ○2 -- 皿・平鉢

・ TD-2-a (見込み櫛目有、灯明皿、多くは三箇所ピン痕)

・ ♪ b (見込み櫛目無、灯明皿、多くは三箇所ピン痕)

・ ♪ c (輪高台)

○4 -- 爛徳利

▲ ○5 -- 鉢

○6 -- 坏

○9 -- 香炉・火入れ

・ TD-9-a (型作り)

・ ♪ b (蛇ノ目高台、灰釉、体部に強いロクロ目、口縁部内折)

・ ♪ c (筒形)

○10 -- 瓶

○13 -- 蓋物

・ TD-13-a (丸碗形の身)

・ ♪ b (段重)

・ ♪ c (半筒形の身)

・ ♪ d (格子状のしのぎ、梅花文)

○14 -- 筆立

○15 -- 壺・甕
・TD-15-a (慣用名：腰白茶壺、三耳壺、鉄釉灰釉掛分け)

○18 -- 合子
・TD-18-a (扁平な球形)
・ク b (筒形)

○19 -- 水滴

○22 -- 花生

■ ○23 -- 片口鉢

○24 -- 灰落し

○25 -- 鬢水入れ

■ ○26 -- 茶入れ

○27 -- 水注

・TD-27-a (銚子形、釣手)

・ク d (筒形)

○32 -- 柄杓

▲ ○34 -- 土瓶

・TD-34-a (鉄砲口)

■ ・ク b (S字状注口)

○36 -- ちろり

・TD-36-a (長筒形、横手)

・ク b (段筒形、横手)

○40 -- 油受け皿

・TD-40-a (脚付、灰釉)

・ク b (脚無、灰釉)

○46 -- カンテラ

◎TE群 -- 備前系陶器

■ ○1 -- 碗

▲ ○2 -- 皿・平鉢

■ ・TE-2-a (ロクロ成形)

■ ・ク b (型皿)

▲ ○5 -- 鉢

○10 -- 瓶

▲ ・TE-10-a (かま形、薄作、鶴首)

■ ・ク b (底部付近に最大径を有す、体部三角形)

○12 -- 油壺

○15 -- 壺・甕

○22 -- 花生

○29 -- 搦鉢

○37 -- 薬研

○40 -- 油受け皿

○41 -- 油德利

■ ○65 -- 乳棒

◎TF群 -- 志戸呂系陶器

○1 -- 碗

▲ ○2 -- 皿・平鉢

■ ○9 -- 香炉・火入れ

○10 -- 瓶

○13 -- 蓋物

○15 -- 壺・甕

○29 -- 搦鉢

○40 -- 油受け皿

◎TG群 -- 常滑系陶器

○15 -- 壺・甕

◎TH群 -- 萩系陶器

○1 -- 碗

・TH-1-a (薬灰釉開口碗、渦巻高台)

・ク b (ピラ掛け、渦巻高台)

◎TI群 -- 万古系陶器

○1 -- 碗

○16 -- 急須

○34 -- 土瓶

◎TJ群 -- 大堀・相馬系陶器

○1 -- 碗

○6 -- 坏

◎TK群 -- 丹波系陶器

■ ○5 -- 鉢

○15 -- 壺・甕

○29 -- 搦鉢

◎TL群 -- 堺系陶器

○29 -- 搦鉢

◎TM群 -- 笠間・益子系陶器

○29 -- 搦鉢

■◎TN群 -- 九谷系陶器

○2 -- 皿・平鉢

◎TO群 -- 壺屋系陶器

○10 -- 瓶

○15 -- 壺・甕

■◎TP群 -- 淡路系陶器

○2 -- 皿・平鉢

○6 -- 坏

○20 -- 蓮華

■◎TS群 -- 飯能系陶器

○42 -- 行平鍋

■◎TT群 -- 薩摩系陶器

○1 -- 碗

○34 -- 土瓶

◎TZ群 -- 生産地不明

○1 -- 碗

▲ ○2 -- 皿・平鉢

■ ○4 -- 燗德利

▲ ○5 -- 鉢

○6 -- 坏

○9 -- 香炉・火入れ

■ ○10 -- 瓶

■ ○15 -- 壺・甕

○16 -- 急須

- 17 -- 燗鍋
- 20 -- 蓮華
- 21 -- 植木鉢
- ・ T Z - 21 - a (軟質施釉)
- ○ 22 -- 花生
- ○ 25 -- 鬘水入れ
- ○ 27 -- 水注
- ○ 31 -- 火鉢
- 29 -- 播鉢
- 33 -- 鍋
- ・ T Z - 33 - a (紐状把手貼付、柿釉)
- ・ ♪ b (軟質施釉)
- 34 -- 土瓶
- ・ T Z - 34 - a (青緑釉)
- ・ ♪ b (白土染付)
- ・ ♪ c (三彩)
- ・ ♪ d (糸目)
- ・ ♪ e (鉄釉)
- ・ ♪ f (鮫釉)
- ・ ♪ g (灰釉)
- ・ ♪ i (イッチン)
- ・ ♪ k (うのふ釉、やや紫色に発色する)
- ・ ♪ l (しのぎ、鉄釉)
- ・ ♪ n (軟質施釉)
- 42 -- 行平鍋
- ・ T Z - 42 - a (灰釉)
- ・ ♪ c (トビガンナ)
- ・ ♪ d (軟質施釉)
- 53 -- 蒸し器

土器分類

■◎DD群 -- 京都・信楽系土器

- 16 -- 急須
- 49 -- 涼炉
- 50 -- 五徳

◎DZ群 -- 生産地不明

- ▲ ○ 2 -- 皿・平鉢
- ▲ ・ D Z - 2 - a (小林C類・E類、梶原II b群)
- ▲ ・ ♪ b (小林F類、梶原II c群)
- ・ ♪ c (磨きかわらけ、底部に渦巻状の沈線)
- ・ ♪ d (磨きかわらけ、底部平滑)
- ・ ♪ e (耳かわらけ)
- ・ ♪ f (へそかわらけ)
- ・ ♪ g (手づくね)
- ・ ♪ h (透明釉)
- ・ ♪ i (底部穿孔)
- ▲ ・ ♪ j (見込みに浮文)
- ・ ♪ k (底径大、器壁厚、小林B類、梶原II a群を含む)
- ▲ ○ 5 -- 鉢
- ・ D Z - 5 - a (土師質、端反)
- ・ ♪ d (えぐり)
- 9 -- 香炉・火入れ
- 15 -- 壺・甕

- ・ D Z - 15 - a (硬質瓦質蓋付壺)
- 21 -- 植木鉢
- ・ D Z - 21 - a (土師質)
- ・ ♪ b (瓦質)
- ○ 24 -- 灰落し
- 31 -- 火鉢
- ・ D Z - 31 - a (土師質丸火鉢)
- ・ ♪ b (軟質瓦質丸火鉢)
- ・ ♪ c (鑄付角火鉢、掘炬燵)
- ・ ♪ d (硬質瓦質丸火鉢)
- ・ ♪ e (土師質角火鉢)
- ・ ♪ f (軟質瓦質角火鉢)
- ・ ♪ g (硬質瓦質角火鉢)
- ・ ♪ h (風炉)
- ・ ♪ i (火消壺)
- ・ ♪ j (硬質瓦質筒形火鉢)
- ・ ♪ k (カマド)
- ・ ♪ l (土師質筒形火鉢)
- 38 -- 手焙り
- 40 -- 油受け皿
- ・ D Z - 40 - a (透明釉、脚付)
- ・ ♪ b (透明釉、脚無)
- ・ ♪ c (無釉、脚付)
- ・ ♪ d (無釉、脚無)
- ・ ♪ e (透明釉、長脚付)
- 43 -- 十能
- 44 -- ひょうそく
- ・ D Z - 44 - a (無釉、脚付)
- ・ ♪ b (透明釉、脚無)
- ・ ♪ c (無釉、脚無)
- ・ ♪ d (ろうそく状)
- ・ ♪ e (透明釉、そろばん玉形)
- ・ ♪ f (施釉、脚付)
- ・ ♪ g (鉢形、蓋付、舌付。把手付もあり)
- 45 -- 瓦燈
- 46 -- カンテラ
- ▲ ○ 47 -- ほうろく
- ・ D Z - 47 - a (丸底)
- ・ ♪ b (平底)
- 48 -- 七輪
- ▲ ・ D Z - 48 - a (内部施設を持たない七輪)
- ▲ ・ ♪ b (内部施設を持つ七輪)
- ・ ♪ e (内底部に壁状凸帯を有す。コンロ)
- 49 -- 涼炉
- 51 -- 塩壺
- ・ D Z - 51 - a (輪積成形、ミなど藤左衛門)
- ・ ♪ b (♪ 、一重椀天下一堺ミなど藤左衛門)
- ・ ♪ c (♪ 、二重椀天下一堺ミなど藤左衛門)
- ・ ♪ d (♪ 、天下一御壺塩師堺見など伊織)
- ・ ♪ e (♪ 、御壺塩師堺湊伊織)
- ・ ♪ f (板作成形、御壺塩師堺湊伊織)
- ・ ♪ g (♪ 、泉湊伊織)
- ・ ♪ h (♪ 、小椀 泉州麻生)
- ・ ♪ i (♪ 、大椀 ♪)
- ・ ♪ j (♪ 、泉州磨生)

- ・ ♪ k (♪ 、サカイ 泉州磨生 御塩所)
- ・ ♪ l (♪ 、泉州麻玉)
- ・ ♪ m (♪ 、泉川麻玉)
- ・ ♪ n (♪ 、御壺塩師難波浄因)
- ・ ♪ o (♪ 、難波浄因)
- ・ ♪ p (♪ 、摂州大坂)
- ・ ♪ q (♪ 、伊津ミ つた 花塩屋)
- ・ ♪ r (ロクロ成形、御壺塩)
- ・ ♪ s (板作成形、大上々)
- ・ ♪ t (ロクロ成形、三など久左衛門)
- ・ ♪ u (♪ 、播磨大極上)
- ・ ♪ v (♪ 、大極上壺塩)
- ・ ♪ w (♪ 、筒形、無印)
- ・ ♪ x (鉢形、内湾)
- ・ ♪ y (♪、直立)
- ・ ♪ z (♪、碁笥底)
- ・ ♪ aa (輪積成形、無印)
- ・ ♪ ab (板作成形、無印)
- ・ ♪ ac (ロクロ成形、壺形、無印)
- ・ ♪ ad (板作成形、いつミヤ 宗左衛門)
- ・ ♪ ae (♪ 、堺本湊吉右衛門)
- ・ ♪ af (♪ 、堺湊塩濱長佐衛門)
- ・ ♪ ag (♪ 、泉川麻生)
- ・ ♪ ah (輪積成形、袋状)
- ・ ♪ ai (ロクロ成形、三など作左衛門)

○ 52 -- 燗台

- ・ D Z - 52 - a (筒形)
- ・ ♪ b (薄形、扁平)

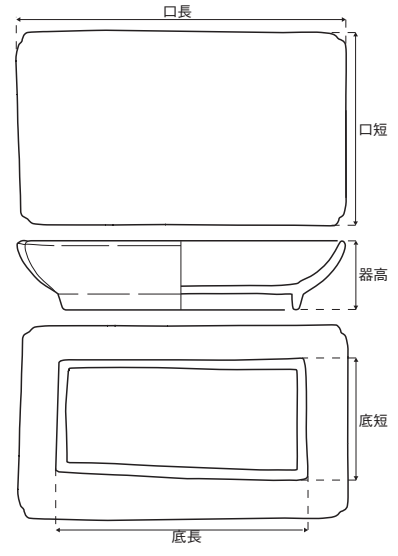
○ 54 -- 懐炉

■ ○ 63 -- あんか

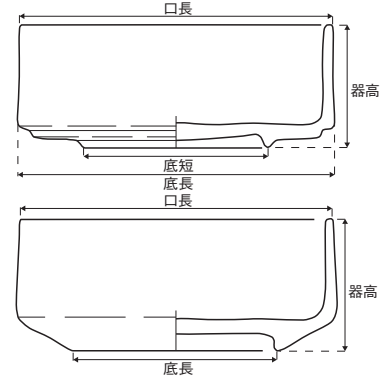
▲ ○ 00 -- 蓋

- ・ D Z - 00 - a (ドーム形、無印)
- ・ ♪ b (凹形、御壺塩師難波浄因)
- ・ ♪ c (♪、無印)
- ・ ♪ d (断面逆台形、無印)
- ・ ♪ e (断面長方形、イツミ 花焼塩 ツタ)
- ・ ♪ f (♪ 、深草砂川権兵衛)
- ・ ♪ g (断面長方形、無印)
- ・ ♪ j (ドーム形、いつミヤ 宗左衛門)
- ・ ♪ k (凸形、無印)
- ・ ♪ l (凸形、なんばん七度 本やき志本)

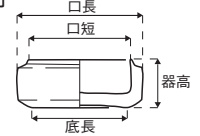
変形皿



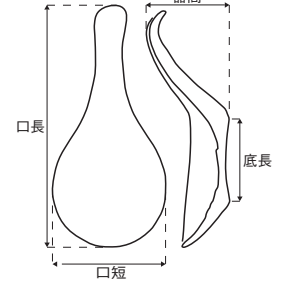
段重



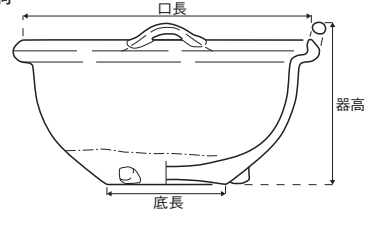
合子



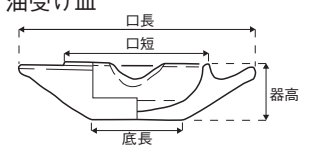
蓮華



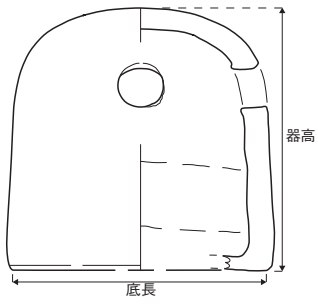
鍋



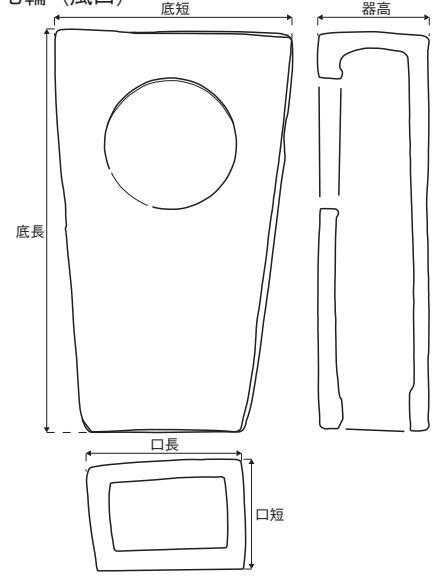
油受け皿



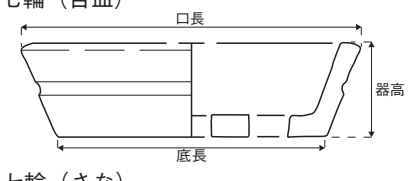
手焙り



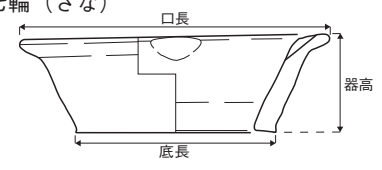
七輪 (風口)



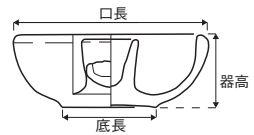
七輪 (目皿)



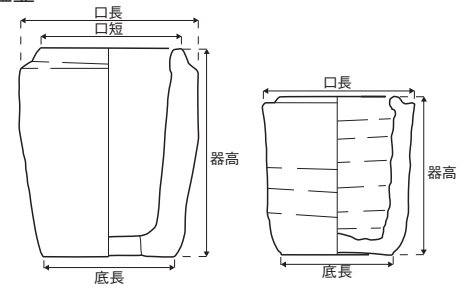
七輪 (さな)



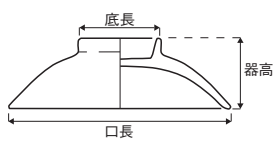
ひょうそく



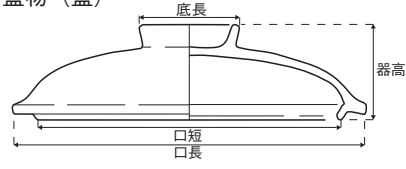
塩壺



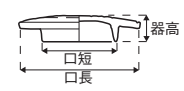
碗 (蓋)



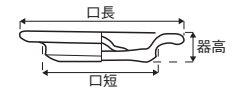
蓋物 (蓋)



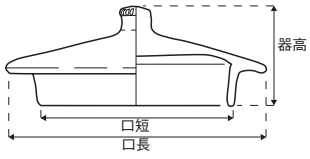
壺・甕 (蓋) 1



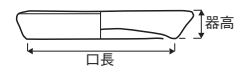
壺・甕 (蓋) 2



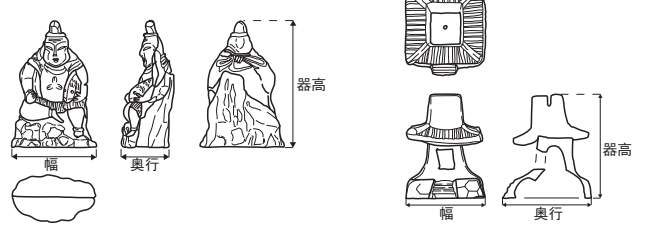
土瓶 (蓋)

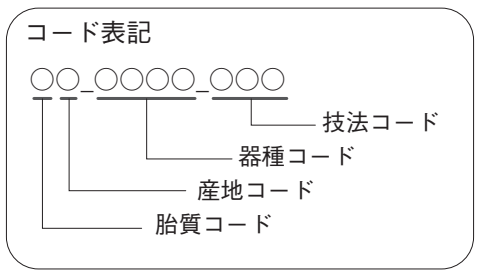


塩壺 (蓋)



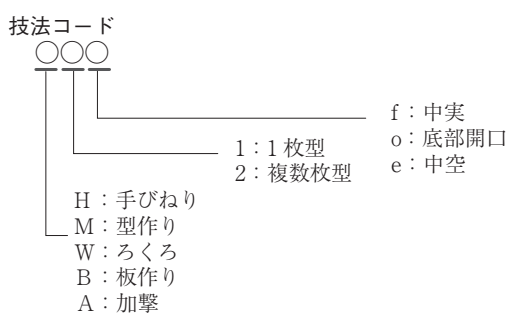
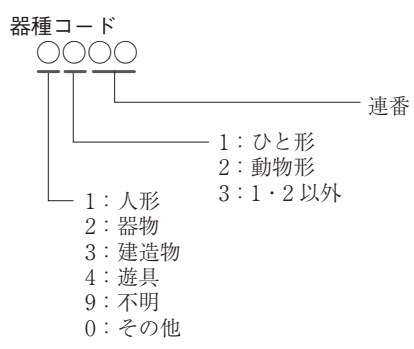
人形・玩具





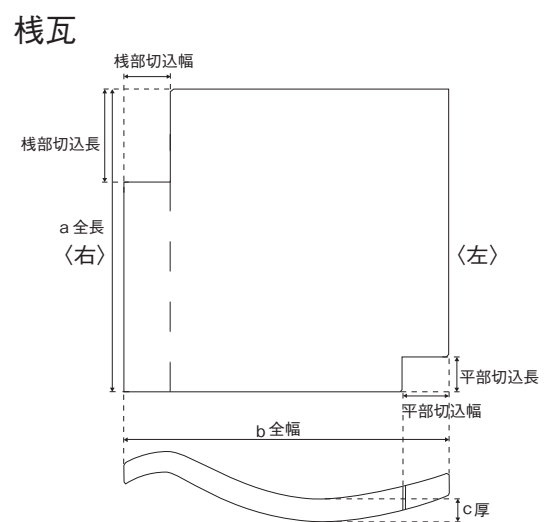
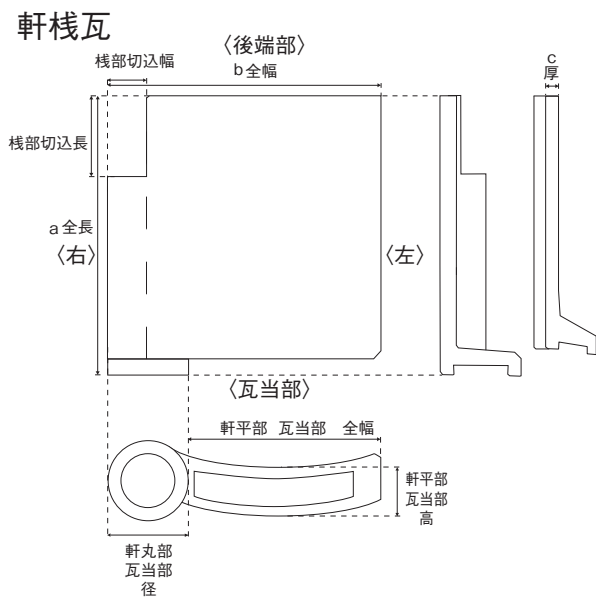
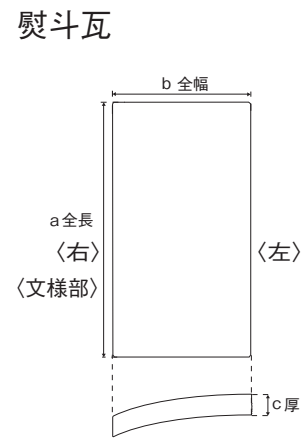
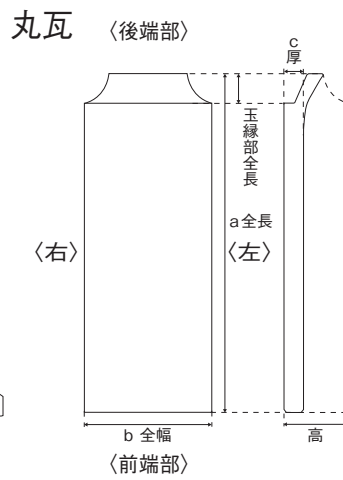
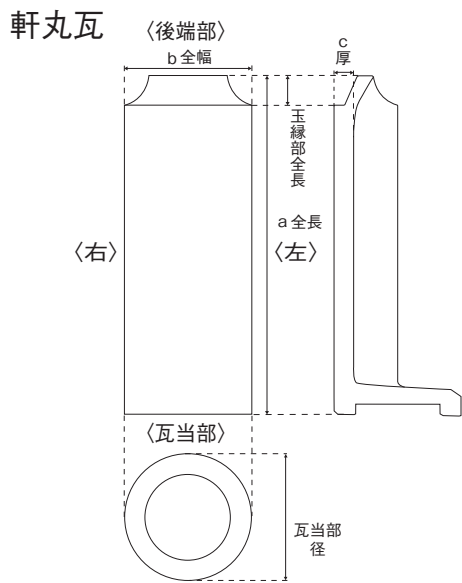
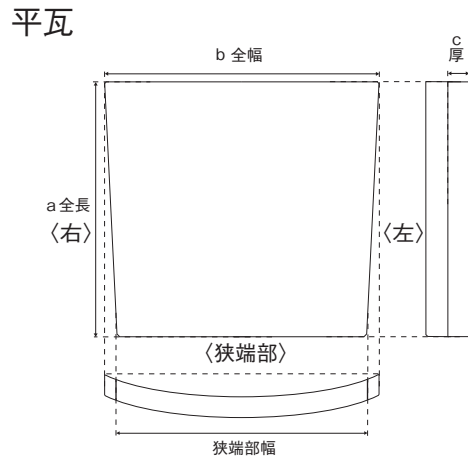
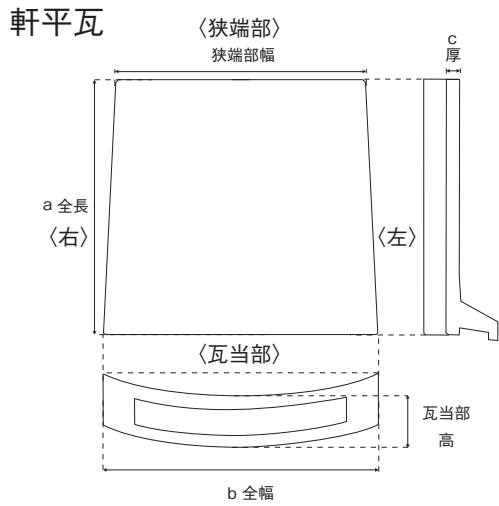
- 胎質コード**
- J：磁器（磁質）
 - T：陶器（陶質）
 - D：土器（土師質）
 - R：瓦（瓦質）

- 産地コード**
- A：輸入陶磁
 - B：肥前系
 - C：瀬戸・美濃系
 - D：京都・信楽系
 - E：備前系
 - Q：江戸在地区系
 - Z：不明



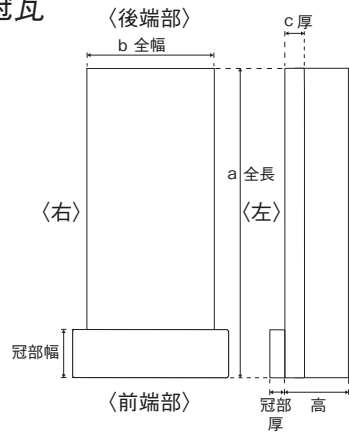
器種コード(詳細)				
1000 人形				
1100 ひと形				
1101 天神	1102 恵比寿	1103 大黒	1104 福祿寿・寿老人	1105 布袋
1106 不動明王	1107 地藏菩薩	1108 狸々	1109 西行	1110 袴人形
1111 力士	1112 朝鮮通信使	1113 蹴鞠人形	1114 坊主人形	1115 虚無僧
1116 狐師	1117 猿曳き	1118 福助	1119 笛吹き	1120 若衆
1121 姉様	1122 太夫(花魁)	1123 お多福	1124 三味線弾き	1125 裸婦
1126 おぼこ・禿	1127 唐子	1128 ぶら人形	1129 這子	1130 狎抱き童子
1131 亀乗り童子	1132 狎乗り童子	1133 面持ち童子	1134 金太郎	1135 桃持ち童子
1136 獅子舞	1137 鯛抱き童子			
1200 動物形				
1201 狛犬	1202 獅子	1203 猿	1204 犬	1205 馬
1206 狐	1207 牛	1208 猫	1209 兎	1210 鼠
1211 狸	1212 虎	1213 象	1214 鳩	1215 鶏
1216 鴛鴦	1217 木菟	1218 亀	1219 蛙	1220 鯉
1221 鯛・鯛車	1222 金魚	1223 蟬		
1300 その他(1100・1200以外)				
1301 達磨	1302 首人形	1303 獅子頭	1304 面	1305 陽物
2000 器物				
2001 碗	2002 皿	2003 鉢	2004 銚子	2005 瓶
2006 壺	2007 片口鉢	2008 急須	2009 土瓶	2010 鍋
2011 釜・茶釜	2012 播鉢	2013 蓋	2014 七厘・焔炉	2015 石臼
2016 竈	2017 器台	2018 硯	2019 水滴	2020 銭貨
2021 五鈴鈴	2022 袖でんぼ	2023 香炉・風炉		
3000 建造物				
3001 祠	3002 塔	3003 城郭	3004 橋	3005 塀・袖垣・石段
3006 民家・庵	3007 灯籠	3008 鳥居	3009 御輿	3010 舟
3011 庭園・背景	3012 仕切り盤			
4000 遊具				
4001 土鈴	4002 独楽	4003 笛	4004 碁石状製品	4005 面模
4006 泥面子・芥子面	4007 土玉	4008 円盤状製品	4009 車輪状製品	
9000 不明				
0000 その他				

人形・玩具分類コード

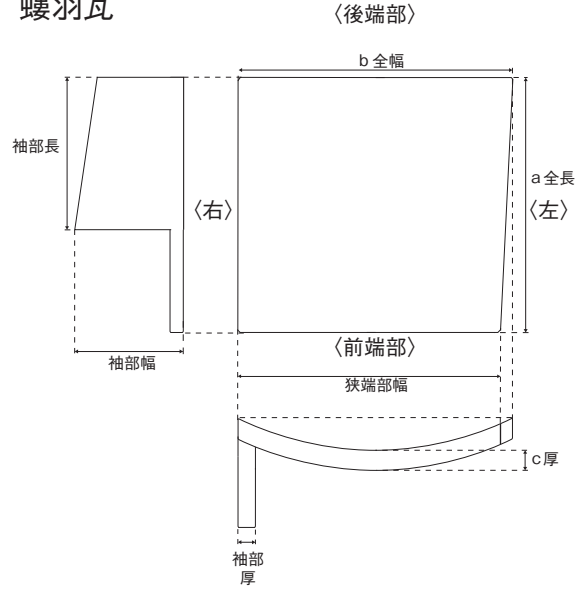


瓦凡例(1) 軒平瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦、熨斗瓦、軒棧瓦、棧瓦

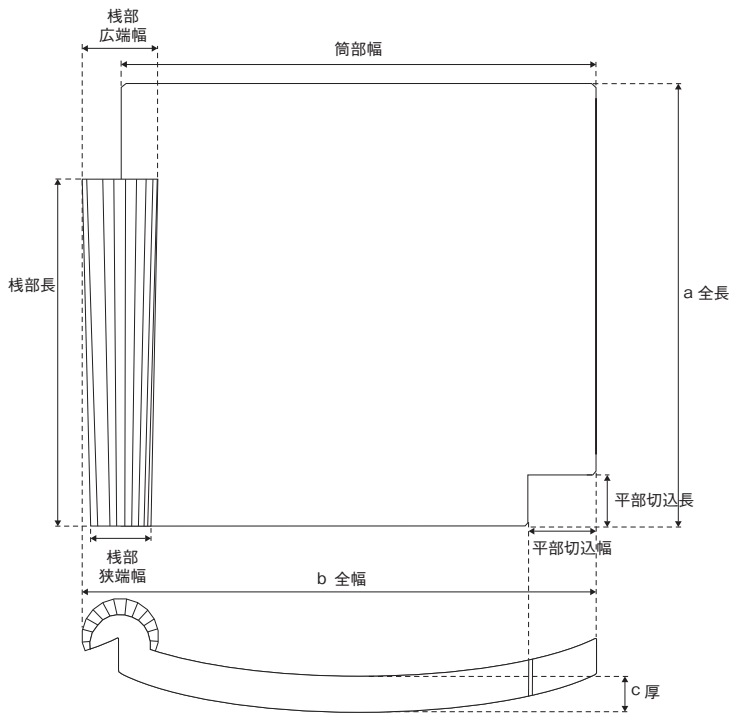
冠瓦



螻羽瓦



蠟燭棧瓦



瓦凡例(2) 冠瓦、螻羽(けらば)瓦、蠟燭棧瓦

東京大学本郷構内の遺跡
医学部附属病院看護職員等宿舎5号棟地点 看護職員等宿舎3号棟地点(2)
発掘調査報告書

目 次

例 言	
凡 例	
目 次	
I 遺跡の位置と環境	
第I章 遺跡の位置と環境	11
第1節 遺跡の位置	3
第2節 遺跡の地理的・歴史的環境	3
II 看護職員等宿舎5号棟地点	
第I章 調査の経緯と概要	11
第1節 調査に至る経緯	11
第2節 調査の方法と経過	11
第3節 調査の概要	12
遺構一覧表	21
第4節 基本層序	28
第II章 A面(近代)の遺構	29
第III章 B面(中・近世)の遺構	35
第IV章 歴史時代の遺物	56
第V章 C面(古墳時代)の遺構と遺物	94
第VI章 D面(縄文時代)の遺構と遺物	165
第VII章 旧石器時代	179
第VIII章 小結	191
III 看護職員等宿舎3号棟地点(2)	
第V章 古墳時代の遺構と遺物	195
第VI章 縄文時代の遺構と遺物	209
IV 研究	
研究1 本郷台地における古墳時代の集落変遷	山下優介 213

研究 2	医学部附属病院看護職員等宿舎 5 号棟地点の中世～近代の土地利用	堀内秀樹	……………	223
研究 3	医学部附属病院看護職員等宿舎 5 号棟地点の動物遺体	阿部常樹、高橋怜土	……………	235

参考文献

報告書抄録

I 遺跡の位置と環境

第 I 章 遺跡の位置と環境

第 1 節 遺跡の位置

2 箇所の調査地点（48 医学部附属病院看護職員等宿舎 3 号棟地点、74 同 5 同棟地点）は、東京都文京区本郷 7-3-1、東京大学本郷キャンパス東側にある 113 医学部附属病院入院棟Ⅱ期地点東側に位置している。

東京大学本郷構内は、全域を「文京区 No.47 本郷台遺跡群」、一部を「文京区 28 弥生町遺跡群」として周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。埋蔵文化財調査室では 1984 年以降、事前調査、試掘調査、立会調査などを含め、継続的に埋蔵文化財調査を行っている。本地点が位置する本郷キャンパス東側、附属病院周辺では、多くの調査が行われ、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、中世、近世、近代に比定される遺構・遺物が出土している。

調査地点周辺では、4 医学部附属病院中央診療棟（東京大学埋蔵遺跡調査室 1990）、10 医学部附属病院外来診療棟（同 2005）、19 医学部附属病院看護職員等宿舎 1 号棟（同 2021）、21 臨床試験棟（同 2021）、23 医学部附属病院入院棟 A（同 2016）、25 医学部附属病院看護師宿舎ゴミ置き場（同 1997）、55 医学部附属病院第 2 中央診療棟（同 2004）、60 医学部附属病院基幹整備外構施設等（同 2004）、91 医学部附属病院立体駐車場（同 2012）、113 医学部附属病院入院棟Ⅱ期（同 2017）、125 クリニカルリサーチセンター A 棟（同 2017）、148 国際科学イノベーション総括棟（同 2017）などの調査が行われ、本郷台遺跡群台地東縁部の旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、中世および江戸時代加賀藩本郷邸、大聖寺藩邸、富山藩邸、隣接寺地などの状況が次第に明らかになっている（I-1 図）。これらについての詳細は上記の報告書、年報を参考にされたい（I-1 表）。

調査区は、世界測地系 9 系に準拠して設定した東京大学本郷構内全域を対象としたグリッド（以降、「東大グリッド」と記す）（東京大学埋蔵文化財調査室 2017）の東西 Hq～Ig 区、南北 174～180 区内に位置している（I-2 図）。

第 2 節 遺跡の地理的・歴史的環境

（1）地理的環境

本郷キャンパスの地理的様相については、これまで理学部 7 号館地点の報告（鈴木 1989）、浅野地区 I の報告

（橋本 2009）などに触れられており、詳細は参照されたい。これらと江戸期における改変を略述すると、本郷キャンパス内は武蔵野台地の東端、南北に延びる本郷台地（神田台）上の M2 面上に存在する。このうち標高約 20～22 m の上位面と 15～17 m の下位面とが存在するが、このうち本地点は下位面に位置する。本郷台地の東は上野台地を挟んで、滝野川、千駄木、根津、湯島と南流する旧石神井川によって開折された谷が存在する。旧石神井川は、従来不忍池からさらに南流して江戸湾に注ぐものであったが、江戸幕府の水利政策により加賀藩下屋敷のある滝野川付近より人為的に東流させ、隅田川に流入するように改変されている。また、台地東斜面は小河川による谷が複雑に入り込んでおり、この状況は、東京大学本郷構内の発掘調査によっても確認されている（東京大学遺跡調査室 1990、同 2005、同 2016 など）。

調査地点付近の地形は、医学部附属病院入院棟 A 地点報告および成瀬論考で詳述されているので（東京大学埋蔵文化財調査室 2016、成瀬 2016）、ここでは概略を述べるに留めたい。調査地点は、本郷台地の東縁部に位置しており、調査地点内の立川ローム層上面は東に向かって緩やかに傾斜している。入院棟 A 地点北側→中央診療棟地点南東隅→第 2 中央診療棟地点東へと開折される支谷によって看護職員等宿舎 5 号棟地点の南縁を境に急激に南側に傾斜する。この谷は本郷台地の東を南流する旧石神井川へと続く支谷で、その頂部は 15 薬学部南館地点から確認される。また、調査地点東側は、本郷台地の東縁にあたり、不忍池に向かって傾斜している。5 号棟地点最東端から確認された古墳時代の住居址 SI212 は、西半のみが確認され、東側は調査区域外となっている。一方、現在、調査区東辺から急激に落ち、コンクリート製の擁壁になっていることから、江戸時代から近代にかけて切り土をしていることが推定される。

（2）歴史的環境

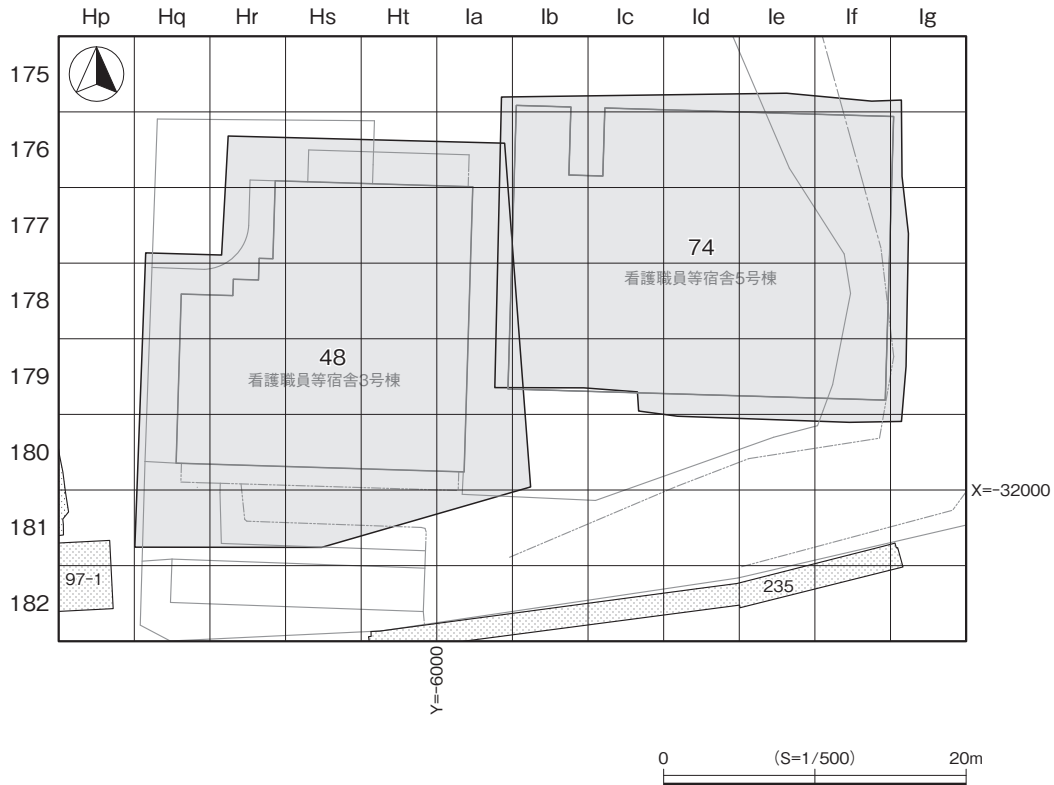
発掘調査で出土した遺構、遺物は、旧石器時代から近代にかけて重層的に確認され、人間の活動が長期間にわたって経営されたことが判る。

旧石器時代

旧石器時代には、武蔵野標準層位Ⅲ～Ⅶ層にかけて 3 群の石器集中区と 2 群の礫群が出土している。前節地理的環境で触れた 15 薬学部南館地点から続く支谷両岸の

I-1表 本郷地区東域の調査地点一覧

番号	略称	調査名 (旧略称)	掲載書名	遺構・遺物の年代				
				旧石器	縄文	古墳	古代 中世	江戸
4	HHC	医学部附属病院中央診療棟 (病中)・設備管理棟 (エネセン)・給水設備棟 (給水)・共同溝 (共同溝)	『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3 医学部附属病院地点』	●	●	● (後)	●	●
10	HG	医学部附属病院外来診療棟	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書5 医学部附属病院外来診療棟地点』					●
19	HN	医学部附属病院看護職員等宿舍1号棟地点	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収		● (早)	● (前・後)		●
21	MRI	医学部附属病院臨床試験棟地点	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収			● (前)		●
23	HW	医学部附属病院入院棟A	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』	●	● (晩)	● (前～後)	●	●
25	HND	医学部附属病院看護師宿舍ゴミ置き場	『東京大学構内遺跡調査研究年報』1所収		● (前～中)	● (前～中)		●
43	HWK1	医学部附属病院基幹整備共同溝等	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』					●
44	HWK2	医学部附属病院基幹整備共同溝等	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』					●
45	HWK3	医学部附属病院基幹整備共同溝等	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』					●
47	HWK4	医学部附属病院基幹整備共同溝等	『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書13 医学部附属病院入院棟A地点』					●
48	HN II	医学部附属病院看護職員等宿舍3号棟地点	『東京大学構内遺跡調査研究年報』2所収		● (前)	● (前～中)		●
55	HHC299	医学部附属病院第2中央診療棟 (2中)	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収		● (晩)	●		●
60	HWK6	医学部附属病院基幹整備外構施設等	『東京大学構内遺跡調査研究年報』4所収					●
74	HHN308	医学部附属病院看護師宿舍Ⅲ期	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収	●	● (早～前)	● (前～中)		●
87	HTG08	東京都下水道	『東京大学構内遺跡調査研究年報』7、8所収			●		●
91	HHP09	医学部附属病院立体駐車場	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収					●
97-1	HKS09	基幹整備 (流域⑧排水) A区	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収			●		●
97-2	HKS09	基幹整備 (流域⑧排水) B区	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収			●		●
101	HMH10	ドナルド・マクドナルド・ハウス東大	『東京大学構内遺跡調査研究年報』8所収	●		● (前～中)		●
113	HHWB12	医学部附属病院入院棟Ⅱ期	『東京大学構内遺跡調査研究年報』9、10所収	●	● (早～前)	● (前～後)	●	●
125	HCRA12	クリニカルリサーチセンターA棟	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10、11、12所収	●	●	● (前～中)		●
148	HIN14	国際科学イノベーション総括棟新営	『東京大学構内遺跡調査研究年報』10所収			● (前～中)		●
182	HCRG15	医学部附属病院CRC棟ほか外構設置	未報告					●
235	HNY	看護師宿舍擁壁	年報13					●
245	HCRB17	クリニカルリサーチセンターB棟	『東京大学構内遺跡調査研究年報』12所収					●



I-2 図 調査区の位置

期の竪穴建物 6 基確認されている。

江戸時代

文献史料、絵図面との対比から、調査地点は、寛永 16 (1639) 年以降、加賀藩本郷邸東域内に分与された富山藩邸に位置している。富山藩と藩邸に関わる歴史的環境の文献調査は小松によって、調査地点付近の歴史的環境は成瀬によって詳述されているので (小松 2015、成瀬 2016)、ここでは略述するに留めたい。「東邸沿革図譜」によると、加賀藩の本郷邸拝領は、元和 2～3 (1616～17) 年頃、加賀藩前田家が拝領すると記されており、それ以前は、大久保忠隣の家敷地であったとされる。大久保忠隣は慶長 19 (1614) 年に改易されるが、これまでの発掘調査の成果では、大久保氏関連と思われる遺構や遺物は出土していない。藩邸として拝領後は、下屋敷として利用をしているが、藩邸の開発は、「寛永三年丙寅、始て四界に木墻を環らし」(「東邸沿革図譜」) とやや遅れて寛永 3 (1626) 年のこととされる (石川県図書館協会 1938)。拝領当初の藩邸周辺の状態を示す図として、白杵市所蔵の寛永年間の状況が描かれたとする「江戸全図」がある (金行 2007) (I-3 図)。これを見ると、藩邸東域は、不忍池が藩邸東縁を通り水戸藩邸に続く道を挟んで確認される。この段階では、町地が道の西側には

存在せず、道の東には不忍池際に南側から後に茅町二丁目となる町地が伸びている。この道は、明確な位置は不明であるが、途中で終わっている。藩邸に東接して、「法界寺」という寺地が存在している。後述するがこの法界寺は、現在に繋がる講安寺、称仰院の祖で、正保 2 (1645) 年に開山廻誉重達がか称仰院に隠居所を設け、講安寺と改称した法界寺と寺域を分けた (本郷仏教会編 1984、宮崎 2016、文京区教育委員会 2020)。医学部附属病院入院棟 A 地点、中央診療棟地点などで最初期 (おそらく寛永期 (1624-44) 前半) の遺構が確認されている。

こうした時期に、寛永 6 (1629) 年に將軍徳川家光と大御所徳川秀忠の本郷邸への御成が行われている。24 医学部教育研究棟地点、15 薬学部南館地点・28 薬学部資料館地点、3 御殿下記念館地点、1 山上海館地点、54 経済学研究科棟地点などの発掘調査で多く確認されている金箔瓦は、藩邸西側～中央部に多く出土しており、この時期の御成御殿に関連したものと推定している。

寛永 16 (1639) 年には、3 代当主利常が本郷邸に隠居するが、同時に加賀藩 119 万石余りのうち次男利次に富山 10 万石、三男利治に大聖寺 7 万石を分与し、立藩させている。加賀藩は、本郷邸東域を富山藩と大聖寺藩に上屋敷として分与しており、富山藩は享保 2 (1717)

年の幕府からの上屋敷の面積の問い合わせに対して11,088.6坪と報告している（小松 2015）。以降、明治政府により加賀藩邸が収公されるまで上屋敷として機能する。

富山藩邸を描いた絵図面は、小松によると全景図3枚と表御殿図4枚の7枚知られるが、暦年が明確なものは、安政5（1858）年および文政8（1825）年12月8日類焼前と記された2点のみである。その他の絵図面は建物配置などで年代を推定することになるが、これらを含めて7点全ての絵図面は、江戸時代後期のものと言え¹⁾、前期の様子を描いたものは現存していない。少なくとも調査地点の状況を伺う手がかりとなる絵図面は、3枚の全景図であり、これらの絵図面は弘化年間（1845～48）以降のもので推定される。これら3枚の絵図面と調査地点を照射したものがI-4図である。これを見ると調査地点は、江戸時代後期には富山藩表御殿東側、大御書院東側に広がる庭園の東南端付近であることが判る。

小松の調査では、富山藩邸は、明治3（1871）年8月に富山藩官邸となり、翌年には上屋敷全体が御用地として上地となっている。

近代

小松によると旧加賀藩本郷邸拝領地は、司法省、東京府地を経て、明治6（1873）年5月に文部省用地となる。同年6月に東北側旧富山藩邸地にはヨーロッパやアメリカなどから招聘された御雇い教師が居住する教師館が建てられる一方、翌明治7（1874）年に移転が決まった東京医学校の建設が開始される。その際に旧富山藩邸の表御殿の一部が同校の通学生教場「別課医学教場」として使われることとなった。これも明治26（1893）年に現在の三四郎池と御殿下グラウンドの間、山上会館がある場所に移転され、当該地には小児科、婦人科などの病室や教室が作られ、以降、大学医学部や病院関係の用地として現在まで利用されている。

【註】

- 1)：小松によると制作年代は明確ではないが、「文政八乙酉年十二月八日類焼前ノ分」と記された御殿図は元禄16（1703）年全焼した藩邸を再建した宝永4（1707）年以降の様子が描かれていると推定している）

I 遺跡の位置と環境



(江戸全図) 臼杵市教育委員会所蔵

I-3 図 加賀藩本郷邸周辺の状況



I-4 図 「富山藩御上屋敷図」(富山県立図書館蔵をトレース)と本調査地点

Ⅱ 看護職員等宿舍 5 号棟地点

第 I 章 調査の経緯と概要

第 1 節 調査に至る経緯

平成 17 (2005) 年春に東京大学施設部から同埋蔵文化財調査室に、本郷構内東側医学部附属病院地区に予定した立体駐車場新営に伴う埋蔵文化財の調査に関する照会があった。新営予定地は、東京都遺跡地図によると文京区 47 本郷台遺跡群 (本郷七丁目・弥生二丁目、台地、集落・貝塚・大名屋敷、[平]住居・[近]礎石・土坑・地下式土坑・庭園・井戸・溝・杭・石垣[旧][縄][弥][古][平][近]) (当時) 内に位置しており、周知の埋蔵文化財包蔵地として認知されている。当該地区においても遺跡の遺存状態に応じた埋蔵文化財発掘調査を行う必要があった。

文京区教育委員会と協議の上、埋蔵文化財の遺存状況を確認するための試掘調査を行うこととなった。試掘調査は、同年 7 月 12～14 日にかけて埋蔵文化財調査室によって行われ、調査担当は堀内秀樹である。試掘トレンチ 2 箇所、合計 40m²を設定し、バックホーによって表土掘削を行った後、遺存状況の確認を行った (I-1 図)。その結果、近代以降の盛土が、北側で 2m、南側で 4m の厚さで堆積していることが確認され、以下、生活面と推定される 3 枚の遺構切り込み面が認められた。遺構最上面は、近代の遺物を包含する遺構の切り込みが認められた。その下面は焼土・焼瓦を含む遺構が確認され、中に包含されていた遺物から江戸時代面と推定された。また、ローム上面で確認された遺構から古墳時代の甕形土器がほぼ完形で出土した他、覆土中から多くの土器片が出土した。これら試掘調査の結果、開発予定地全体にわたって古墳時代、江戸時代の生活の痕跡が重層的、かつ良好な状態で遺存していることが明らかになった。

その後、平成 19 (2007) 年度に学内のキャンパス計画が変更され、立体駐車場予定地からやや南に寄った位置に位置し、新たな看護師宿舎新営が計画され、上記の試掘結果により、建築予定地域内全域を対象に埋蔵文化財発掘調査を行うことが確認された。

第 2 節 調査の方法と経過

(1) 調査の方法 (I-3～5 図)

発掘調査は、建物新営工事に伴って根切りを行う範囲を対象にした。調査対象面積は 550m²である。調査は、グリッド法を用いて行い、調査区全域を国土座標系 (当

時日本測地系) と合わせて 5 × 5 m でグリッドを設定した。グリッドの名称は、東西をアルファベット、南北をアラビア数字によって表し、それぞれ西から東、北から南に若い番号から付した。この交点に対し、A0、A1・・・とし、交点より南東の 5 × 5m の範囲を A0 区、A1 区・・・の様と呼称した。

(2) 調査の経過

発掘調査は、平成 19 (2007) 年 4 月 1 日から開始した。残土処理の関係で、調査区を東西二つに分け、東区より調査対象レベルまでの機械掘削を開始し、その後人力による発掘調査を行った。東区の重機による機械掘削は南東側より開始し、4 月 14 日に東区全域の表土掘削が終了した。

調査区東端では現表下約 3m、西側から中央部付近では約 2.5m で硬化した遺構面 (A 面と命名した) が確認され、4 月 9 日から機械掘削と平行して人力掘削を開始した。A 面は、良好な黒色土で平坦な硬化面を作り出していた。調査区中央部付近には、この硬化面上に平石を並べた配石遺構と硬化面を掘り込んで、動物骨が集中的に廃棄 (あるいは埋葬) した円形、方形の遺構が 40 基確認された。遺構中にはレンガが混入したものがあり、A 面の利用は、近代以降に降ることが確認された。A 面は地形に沿って緩やかに東南に傾斜していた。A 面の調査は、4 月 16 日に終了し、翌日から面下げを開始、順次下面 (江戸時代面、B 面と命名) で確認された遺構の調査を行う。B 面からは植栽痕が多く確認され、絵図面などで推定された富山藩邸庭園が復元されていった。4 月 25 日より古墳時代の遺構面 (C 面と命名、多くは関東ローム上面) まで面下げを開始、確認された遺構の調査を行う。5 月 7 日より調査区東側の住居址 SI202、SI203 の調査を開始する。古墳時代の遺構は、東区東南端を除き全域から確認され、特に中央部付近の SI201 と東壁際の SI212 からは多量の遺物が出土した。この間、調査区を南北に縦断するように確認された SD206 は、覆土の状況や出土遺物から当初古墳の周溝の可能性を考えていたが、溝底付近から古瀬戸期の皿、鉢の小片が出土し、中世の遺構であることを確認した。

5 月 14 日から調査区西側 (西区) を A 面までの機械掘削を開始、6 月 4 日に終了するが、調査区西際で看護職員等宿舎 3 号棟地点東壁を確認した。この間、東区と合わせて調査を行う。6 月 13 日からは、西区 B 面の調

査を開始する。一方、調査区南端付近は、入院棟A地点北側と中央診療棟地点南端にまたがる西へ延びる支谷の北斜面にあたり、やや急な落ち込みが始まるが、ここから境施設と思われるピット列、地下室などが確認された。古墳時代の調査は、東京大学考古学研究室や昭和女子大学の学生の参加もあり順調に進行するが、同時に古墳時代の調査が終了した地域から、それより古い時代の確認を行った。ローム上面からは調査区北西と北東から竪穴建物が2基、南側から炉穴が9基確認された。6月27日には遺跡見学会を実施、おおよそ150人の見学者が来跡した。

古墳時代、縄文時代の調査は、7月11日で終了し、同日全体写真の撮影を行った。7月14日より2×2mのテストピットを機械的に8箇所設定し、本格的に旧石器時代の調査を開始した。遺物は、調査区中央部付近、地形の変更点付近で集中的に確認され、武蔵野標準層位Ⅲ～Ⅸ層からフレーク・チップ類、礫が確認された。

梅雨の時期は降雨によってやや調査の進行が遅れたが、調査期間全体では、比較的天候にも恵まれ、8月1日には全体写真の撮影行い、全ての野外調査を終了した。

第3節 調査の概要（I-3～5図、I-1表）

本調査では、旧石器時代の遺物111点、縄文時代早期末の炉穴9基、陥穴1基、前期の竪穴建物2基と遺物、古墳時代の竪穴建物が16基と遺物、江戸時代加賀藩本郷邸（富山藩邸）に伴う遺構が177基、出土遺物はコンテナ箱にして100箱を取り上げた。

旧石器時代は、細石刃なども少量確認されているが、2つの文化層は武蔵野標準層位Ⅵ～Ⅸ層の深い層位からであり、周辺を俯瞰しても少ない事例としてあげられよう。

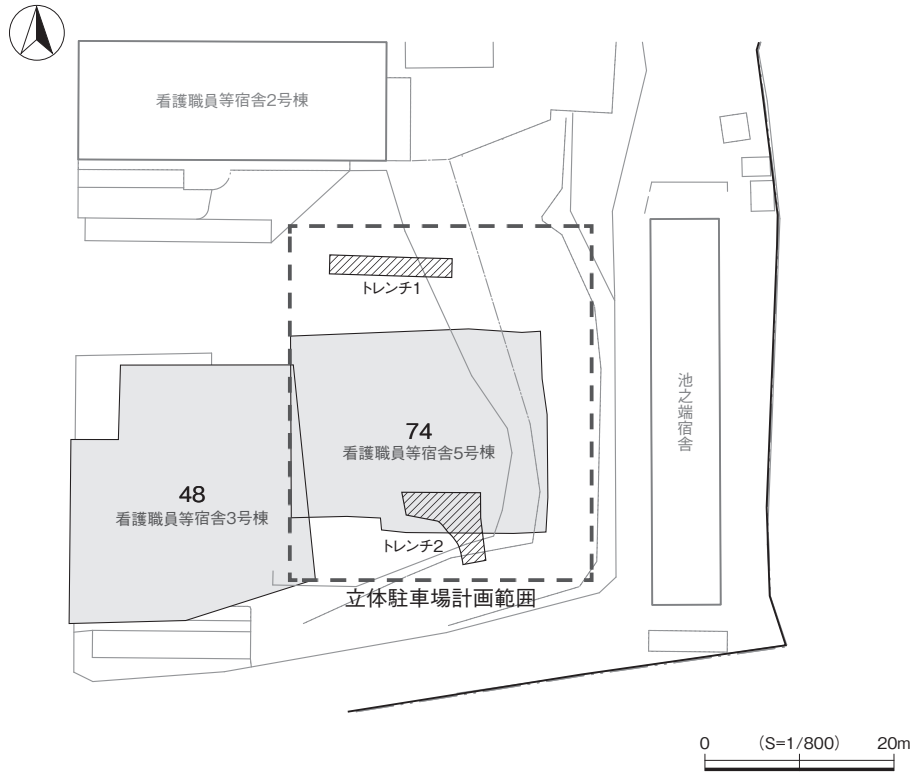
縄文時代は、早期末および前期中葉の竪穴建物が確認されている。本郷キャンパスでは本地点から約30m北側の25医学部附属病院看護師宿舎ゴミ置き場地点と本地点のみの確認にとどまっており、加えて住居壁や床面などもラフに作られており、単独に近い形で存在していた可能性が強い。また、炉穴は調査区東北端、南側と台地の突端に位置する地形の変更点付近から確認されている。

古墳時代は、前期から後期初頭にかけての竪穴建物が16基確認されており、北測は明確ではないものの、東隣する看護職員等宿舎から検出された5基を合わせて集落が形成されていたと考えられる。

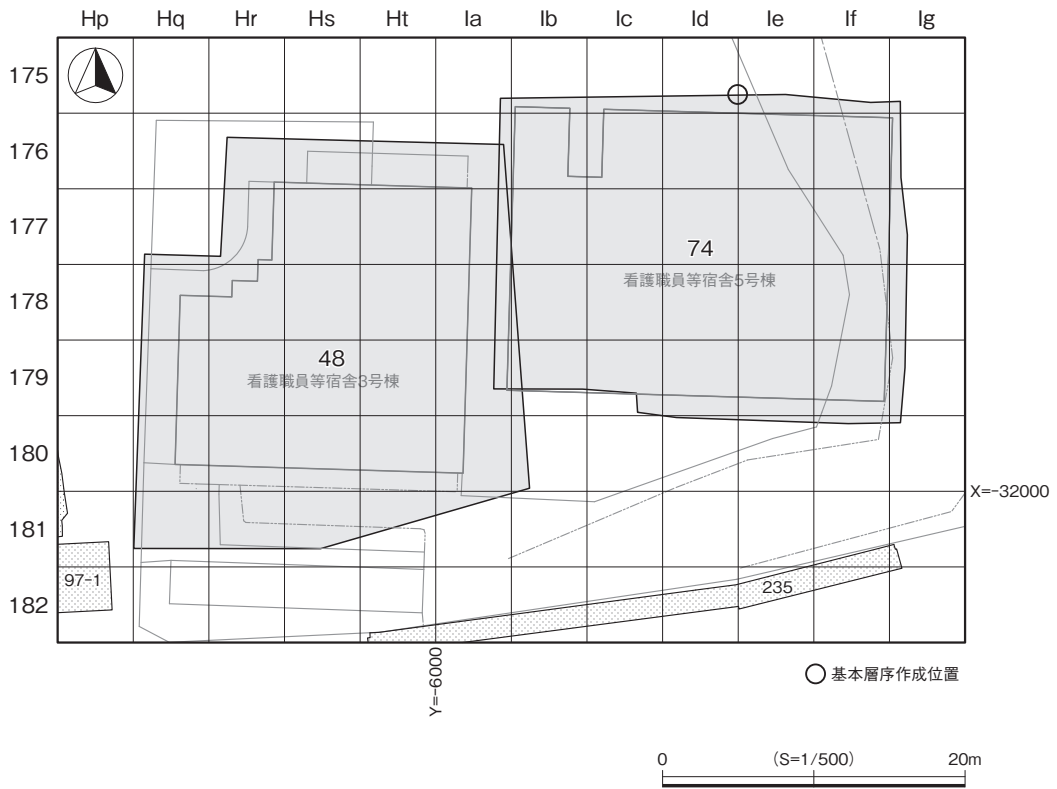
中世から近世は、調査区を南北に縦断する溝（SD206）

から、15世紀の陶磁器が確認されており、加賀藩邸以前の区画溝と推定できるが、該期の痕跡は本地点とその周辺を俯瞰しても確認できないことから明確な言及はできない。江戸時代には、18世紀前葉に大型地下室（SU149）などが確認されるのみでの活動の痕跡は濃密ではない。おそらくこの段階で、庭園として機能していたと思われる。遺物が多く出土している時期は、SK19、SK59、SK60などが構築された幕末期である。これらの遺構からは、陶磁器類の他に瓦が多く出土しているがいずれも二次的な火熱を受けていない。安政2（1855）年の安政江戸地震、翌年の大風雨から、明治4（1872）年の屋敷引き払いまでの間に廃棄行為が行われた可能性が高い。その間は「I遺跡の位置と環境」でも触れたように富山藩邸表御殿東側に広がる庭園であったと推定している。

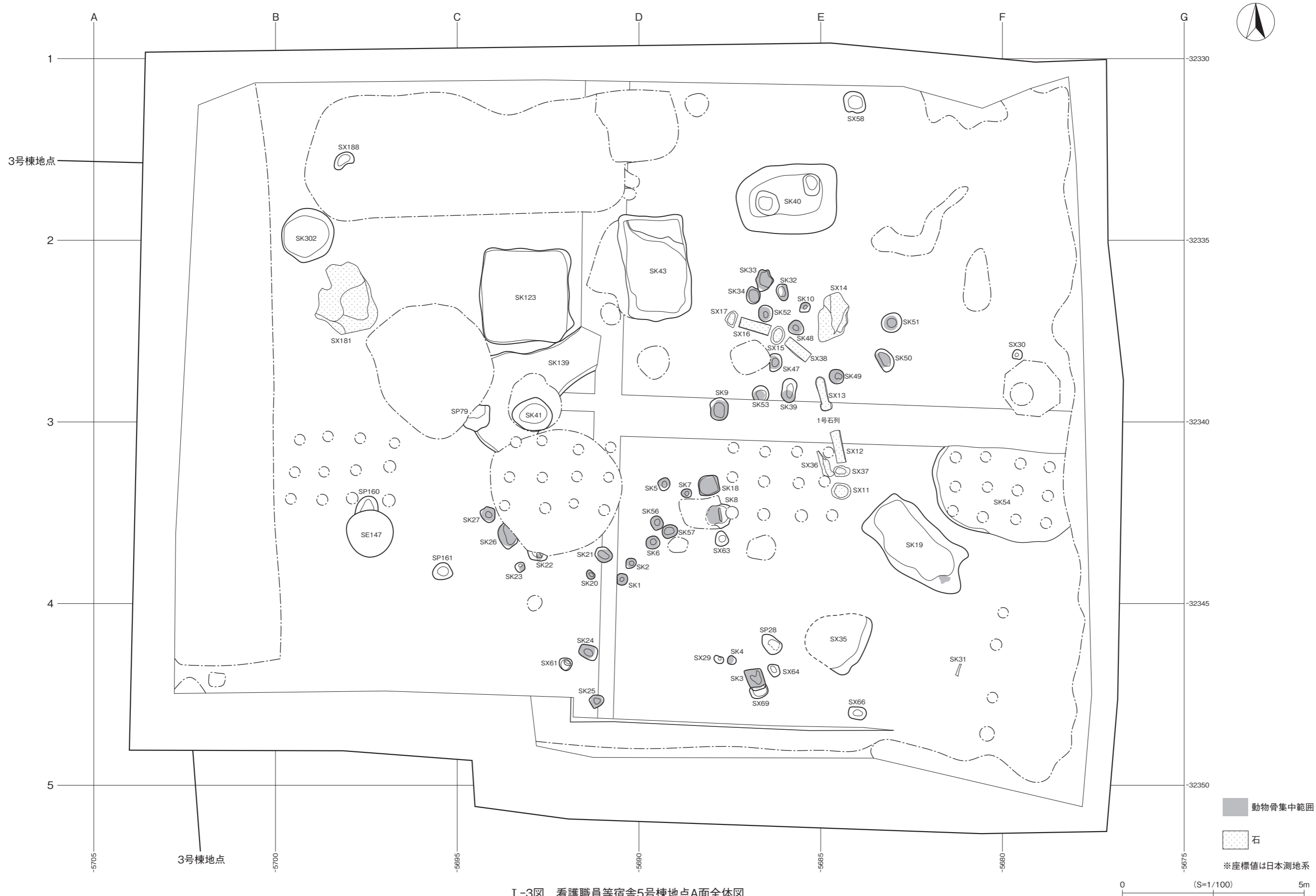
近代東京帝国大学に伴うと考えられる遺構が66基でこのうちの40基に実験動物と思われる動物骨が多量に包含されていた。遺跡は全体の遺存度は、比較的良好であった。出土した個別の状況は各章を参照されたい。



I-1 図 試掘調査の位置



I-2 図 看護職員等宿舎3号棟地点、同5号棟地点と東大グリッド



I-3図 看護職員等宿舎5号棟地点A面全体図

動物骨集中範囲
石
※座標値は日本測地系

0 (S=1/100) 5m



I-5図 C・D面全体図

I-1表 遺構一覧表(1)

種別	No.	グリッド	面	年代	遺構	遺物	切り合い	備考
SK	1	C3	A					
SK	2	C3	A					
SK	3	D4	A		II -1		3>69	
SK	4	D4	A					
SK	5	D3	A					
SK	6	D3	A					
SK	7	D3	A					
SK	8	D3	A					
SK	9	D2	A		II -1			
SK	10	D2	A					
SX	11	E3	A		II -4			1号石列
SX	12	E3	A		II -4			1号石列
SX	13	D2E2	A		II -4	IV -1		1号石列
SX	14	D2E2	A		II -4			1号石列
SX	15	D2	A		II -4			1号石列
SX	16	D2	A		II -4			1号石列
SX	17	D2	A		II -4			1号石列
SK	18	D3	A		II -1			
SK	19	E3	A	19前-中	II -1	IV -1 ~4		
SK	20	C3	A					
SK	21	C3	A					
SK	22	C3	A					
SK	23	C3	A					
SK	24	C4	A	19-近代	II -1			
SK	25	C4	A					
SK	26	C3	A					
SK	27	C3	A					
SP	28	D4	A					
SX	29	D4	A					
SX	30	F2	A					
SK	31	E4	A					
SK	32	D2	A					
SK	33	D2	A				34と不明	
SK	34	D2	A				33と不明	
SX	35	D4E4	A					焼土土坑
SX	36	D3E3	A		II -4			1号石列。縁石
SX	37	E3	A		II -4			1号石列。縁石
SX	38	D2	A		II -4			1号石列。縁石
SX	39	D2	A					
SK	40	D1E1	A	近代(ゴム版)	II -1	IV -4 ~6	40>70、206	
SK	41	C2,C3	A				41>139	
欠番	42	C1D1	A					
SK	43	C1C2D1D2	A		II -2			
SK	44	E3	B		III -1			
SP	45	E2	B				45>73	
SK	46	E1	B		III -1		46>74、206	
SK	47	D2	A					
SK	48	D2	A					
SK	49	E2	A					
SK	50	E2	A					
SK	51	E2	A					
SK	52	D2	A					
SK	53	D2	A					
SK	54	E3F3	A		II -2			
SK	55	E2	B		III -1		55>77・84	植栽
SK	56	D3	A					
SK	57	D3	A	?				
SX	58	E1	A					
SK	59	D3E3E4F3	B	19前-中	III -1	IV -6 ~11	59>60、81、82、106、113、127、128、 176、177	

II 看護職員等宿舎5号棟地点

I-1表 遺構一覧表(2)

種別	No.	グリッド	面	年代	遺構	遺物	切り合い	備考
SK	60	D3D4E3E4	B	19-近代	Ⅲ-2	Ⅳ-12	59>60>81、82、90、106、133、134、137、146、158、166、169、176、177、206、340	
SX	61	C4	A					
SK	62	C2	B				62>96	
SX	63	D3	A					
SX	64	D4	A					
SP	65	E4	B		Ⅲ-13 ~14			1号ピット列
SX	66	E4	A					
欠番	67		×					
SK	68	F1	B					
SX	69	D4	A				3>69	
SD	70	D1D2E1E2	B		Ⅲ-2		40>70>85、96、135、206	道路遺構か
SK	71	E1E2F1F2	B		Ⅲ-3			植栽
SK	72	D1	B					
SP	73	E2F2	B				45>73	
SK	74	E1	B		Ⅲ-3		46>74>205	植栽
SK	75	D4	B				75>149	
SP	76	E2	B				76>86、206	
SK	77	E2	B				55>77>78	植栽
SK	78	E2	B		Ⅲ-3		77>78>92	植栽
SP	79	C2C3	A				79>139	
SK	80	D2E2	B				80>88、96、103、116、117、206	植栽
SK	81	D3E3	B	19後-19	Ⅲ-3	Ⅳ-13	59、60>81>82、118、119、120、176、177	植栽
SU	82	D3D4E3E4	B	17中・18後-19中	Ⅲ-4	Ⅳ-13	59、60、81、106、158、166>82>177	
SK	83	D3	B				83>87、111、206	植栽
SK	84	E2F2	B		Ⅲ-4		55>84>294	植栽
SP	85	E2	B				70>85>206	
SP	86	E2	B				76>86>206	
SK	87	D2D3	B				83>87>119、120、145、206	植栽
SK	88	D2E2	B				80>88>206	硬化面
SE	89	D3	B		Ⅲ-4		90>89>111、129、133、140、141、206、340	
SK	90	D3	B				60>90>89、111、133、137、206、340	
SP	91	E1	B					
SP	92	E2	B		Ⅲ-4		78>92	
SP	93	F3F4	B					
SP	94	E4	B		Ⅲ-13 ~14		95>94>101	1号ピット列
SK	95	E4	B				95>94	
SK	96	C2D2	B		Ⅲ-5		43、62、70、80>96>103、135、152、153、159、206、331	
SK	97	C4D3D4	B	19前-中	Ⅲ-5	Ⅳ-13	97>121、133、149、206	
SP	98	E4	B				98>99	
SP	99	E4	B		Ⅲ-13 ~14		98、100>99	1号ピット列
SP	100	E4	B				100>99	
SP	101	E4	B				94>101	
SP	102	E4	B		Ⅲ-13 ~14			1号ピット列
SK	103	D2	B				80、96>103>115、116、117、206	
SK	104	D2	B				104>206	
SK	105	F4	B				155>105	
SK	106	D3D4E3E4	B	19前-中			59、60>106>82、166、169、177	
SP	107	E4	B		Ⅲ-13 ~14			1号ピット列
SP	108	E4	B		Ⅲ-13 ~14			1号ピット列
SP	109	E4	B					
SP	110	E4	B					
SK	111	D3	B				83、89、90、133>111>206	
SP	112・173	E4	B				112>173	173と同一
SK	113	E3F3	B	?	Ⅲ-5		59>113>323	

I-1表 遺構一覧表(3)

種別	No.	グリッド	面	年代	遺構	遺物	切り合い	備考
SU	114	F4	B				114>126	
SP	115	D2	B				103>115>206	
SP	116	D2	B				80、103>116>206	
SP	117	D2	B				80、103>117>206	
SK	118	D2D3E3	B				119>118>206	
SK	119	D3E3	B		Ⅲ-6		81、87>119>118、120、206	
SK	120	D3	B				81、87、119>120>206	
SK	121	D3D4	B				97、133>121>134、149、206	
SK	122	D4E4	B				122>206	
SK	123	C2	A	近代	Ⅱ-2	Ⅳ-13 ~14		
SP	124	D4	B		Ⅲ-13 ~14			1号ピット列
SP	125	F4	B		Ⅲ-13 ~14		125>132	1号ピット列
SP	126	F4	B		Ⅲ-13 ~14		114>126>132	1号ピット列
SK	127	E4	B				59>127>128	
SK	128	E4	B		Ⅲ-6		59、127>128>150	
SK	129	C3D3	B				89>129>130、131、140、141、206	
SP	130	C3D3	B				129>130、206	
SP	131	C3	B				129>131>140、141	
SD	132	F4	B				125、126>132	
SX	133	C3C4D3D4	B		Ⅲ-6		60、89、90、97>133>111、121、134、 137、144、146、149、206、340	
SK	134	D3D4	B		Ⅲ-6		60、121、133>134>206	
SK	135	D2	B				43、70、96、206>135	
SK	136	D1	B					
SP	137	D3	B				60、90、133>137>206	
SK	138	F4	B					
SK	139	C2C3	A		Ⅱ-3		41、79>139	
SP	140	C3D3	B				89、129、131>140>141	
SP	141	C3D3	B				89、129、131、140>141	
SP	142	E4	B		Ⅲ-13 ~14		143>142	1号ピット列
SP	143	E4	B		Ⅲ-13 ~14		143>142	1号ピット列
SP	144	D3	B				133、206>144	
SP	145	D3	B				87>145>146、206	
SK	146	D3	B				60、133、145>146>206	
SE	147	B3	A	18後・近代	Ⅱ-3	Ⅳ-14	147>160	
SK	148	B3	B		Ⅲ-7		148>162、309	
SU	149	C3C4D3D4	B	18前	Ⅲ-7	Ⅳ-14 ~19	75、97、121、133>149>191、206	
SK	150	E4	B				128>150	
SK	151	D2D3	B				151>206	
SP	152	D2	B				96>152>153、159	
SK	153	D2	B				96、152、159、206>153	
SP	154	F4	B					
SP	155	F4	B				155>105	
SK	156	C2	B					
SP	157	C4	B		Ⅲ-13			1号ピット列
SK	158	E4	B				60>158>82、112・173、166、169、172	
SP	159	D2	B				96、152>159>153	
SP	160	B3	A				147>160	
SP	161	B3	A					
SK	162	B3	B				148、167>162>309、310、315	
SP	163	B2B3	B					
欠番	164		×					
欠番	165		×					
SK	166	D3D4	B		Ⅲ-7		60、106、158>166>82、169	
SP	167	B3	B				167>162	
SP	168	F3	B					
SK	169	D4E4	B				106、158、166>169>82、112・173	
SK	170	C1C2	B	?	Ⅲ-8		123>170>193	

II 看護職員等宿舎5号棟地点

I-1表 遺構一覧表(4)

種別	No.	グリッド	面	年代	遺構	遺物	切り合い	備考
SP	171	E1	C				171>205	
SK	172	E4	B		Ⅲ-8		158>172>82	
SK	112・173	E4	B				158、169>112・173	112と同一
SK	174	B4	B				174>304	
SK	175	C4	B					
SK	176	D3	B				59、60、81、206>176>177	
SK	177	D3	B				59、60、81、82、106、176>177	
SE	178	C2	B		Ⅲ-8		123>178>187、192とは不明	
SK	179	A4	B				180>179>190	
SP	180	A4	B		Ⅲ-13		180>179、189	1号ピット列
SX	181	B2	A					
SD	182	A4	B					
SK	183	A4	B				184、185>183	
SP	184	B4	B		Ⅲ-13		184>183、185	1号ピット列
SP	185	B4	B		Ⅲ-13		184>185>183	1号ピット列
SK	186	C4	B		Ⅲ-9			
SK	187	C2	B				178>187	
SX	188	B1	A					
SP	189	A4	B				180>189	
SP	190	A4	B				179>190	
SK	191	D4	B				149、206>191>195	
SK	192	C2	B				178とは不明	
SK	193	C2	B				123、170>193>187	
SK	194	F3	B		Ⅲ-9			
SP	195	D4	B		Ⅲ-13 ~14		191、206>195	1号ピット列
SK	196	B2	B		Ⅲ-9		196>326、329、347	
SK	197	B3B4	B		Ⅲ-9		197>198	
SK	198	B3B4	B		Ⅲ-9		197>198>199	
SP	199	B3B4	B				198>199	
欠番	200		×					
SI	201	C2C3D2D3	C		V-1~ 6	V-43 ~47	201>214	
SI	202	C1D1	C		V-7~ 9		216>203>202	
SI	203	C1D1	C		V-7~ 9	V-48	216>203>202	
SI	204	E1E2F1F2	C		V-10 ~12	V-49	204>205>236、204>208	
SI	205	E1E2	C		V-13 ~15	V-50	204>205>236	
SD	206	D1-4E1E2	B		Ⅲ-10	Ⅳ-20	40、46、60、70、76、80、83、85、86、 87、88、89、90、96、97、103、104、 111、115、116、117、118、119、120、 121、122、129、130、133、134、137、 145、146、149、151>206>135、144、 153、176、191、195、340	
SF	207	E4	D		Ⅵ-4	Ⅵ-11		
SI	208	F1F2	C		V-16	V-51	204>208	SP234と関連
SF	209	F4	B					
SP	210	D4	C					
SF	211	D4	D		Ⅵ-5			
SI	212	E2E3F2F3F4	C		V-17 ~23	V-52 ~53	212>287>296	
SF	213	C3D3	D		Ⅵ-6		213>215	
SI	214	C2	C		V-22 ~23		201>214	
SF	215	C3	D		Ⅵ-6		213>215	
SI	216	D1	C		V-7~ 9		216>203>202	
SP	217	D1	C					
SP	218	D1	C					
SP	219	D1	C					
SF	220	E1	C					
SP	221	D1	C					
SP	222	D1	C					

I-1 表 遺構一覧表 (5)

種別	No.	グリッド	面	年 代	遺構	遺物	切り合い	備考
SP	223	D1	C					
SP	224	D1	C					
SP	225	D1	C					
欠番	226		×					
SP	227	C3	C					
SP	228	C3	C					
SP	229	C3	C		V -40			
SP	230	C3	C					
SP	231	D1	C					
SP	232	D1	C					
SP	233	D1	C					
SP	234	F1	C					SI208 と関連
欠番	235		×					
SI	236	E2	C		V -24 ~ 25	V -54	204>205>236	
SI	237	A2B1B2	C		V -26 ~ 28	V -55	237>242	3号棟地点 SI08
SP	238	F1	C				239>238	
SP	239	F1F2	C				239>238	
SP	240	F2	C					
SP	241	D1	C					
SI	242	A2A3B2B3	C		V -29 ~ 32	V -56	237>242、242>259	3号棟地点 SI07
SP	243	D1	C					
SP	244	D1	C					
SP	245	D1	C					
SP	246	D1	C					
SP	247	D1	C					
SP	248	D1	C					
SP	249	D1D2	C					
SP	250	C3	C					
SI	251	E1F1	D		VI -1	VI -11	251>265	
SP	252	B2	C					
SP	253	D2	C					
SP	254	D2	C					
SP	255	D3	C					
SP	256	C3	C				256>257	
SP	257	C3	C				256>257	
SP	258	C3	C					
SI	259	A3B3B4	C		V -33 ~ 35	V -57	242>259、283>259	
SP	260	F3	C					SI212 の一部
SI	261	A1B1	D		VI -2 ~ 3	VI -11 ~ 12		
SP	262	D2	C					
SP	263	D2	C					
SP	264	B3	C					
SK	265	E1F1	D				251>265	
SP	266	E1	C					
SK	267	B3	B		III -11			
SP	268	B3	C		V -40			
SP	269	A1	C					
SX	270	B4C3C4	C		V -41 ~ 42	V -58	270>285、270>283	
SP	271	C3	C					
SP	272	C3	C					
SP	273	C3	C					
SP	274	B1	C					
SP	275	D2	C					
SP	276	D2	C					
SF	277	F1	D		VI -7			
SP	278	B2	C					
SP	279	C3	C					
SF	280	C3D3C4	D		VI -6			

II 看護職員等宿舎5号棟地点

I-1表 遺構一覧表(6)

種別	No.	グリッド	面	年代	遺構	遺物	切り合い	備考
SK	281	B1B2	D		VI -8			
SF	282	F1	D		VI -7			
SI	283	A3A4B3B4	C		V -36 ~ 37	V -59	283>259、270>283	
SP	284	C3	C					
SK	285	B4	C		V -39	V -60	270>285	
欠番	286		×					
SI	287	E3E4F4	C		V -38	V -61	212>287>296	
SP	288	B1	D					
SK	289	A3B3	D		VI -9			陥穴、3号棟地点 SK171
SF	290	F1	D		VI -7			
SP	291	B4	C					
SP	292	C3	C					
SP	293	C3C4	C					
SP	294	E2F2	B				84>294>204	
SP	295	C3	C					
SI	296	F4	C				212>287>296	
SP	297	B2	C					
SP	298	C3C4	C					
SF	299	C4	D		VI -6			
SK	300	B2B3	D		VI -10			
SP	301	C1C2	B					
SK	302	B1B2	A					
SK	303	B4	B					
SK	304	B3B4C3	B		III -11		174>304	
SK	305	C3	B				305>316	
SK	306	B3B4	B					
SK	307	B2	B				307>318、342	
SK	308	C3C4	B		III -11			
SK	309	B3C3	B				148、162>309>310、311、315、322	
SK	310	B3C3	B				162、309>310	
SK	311	C3	B				309>311>315	
SK	312	A3B3	B				312>313、314、337、343	
SP	313	A3B3	B				312>313	
SP	314	A3B3	B				312>314	
SD	315	B3C3	B				162、309、311>315	
SP	316	C3	B				305>316>317	
SP	317	C3	B				316>317	
SK	318	B2B3	B		III -11		307>318>342	
SK	319	B3	B				319>343	
SK	320	B1	B				320>326	
SK	321	C3	B					
SK	322	B3	B				309>322	
SK	323	F3	B				113>323	
SD	324	B2	B					
SK	325	B2	B		III -11			
SK	326	B1B2	B				196、320、327>326>329、332、347	
SK	327	B1B2C1C2	B				327>326	
SP	328	B2	B		III -11		328>332	
SP	329	B2	B				196、326>329>347	
SP	330	B2	B				330>332	
SK	331	D2	B				43、96>331	
SK	332	B2	B				326、328、330>332>252	
SK	333	B3	B					
SK	334	C3C4	B		III -12			
SK	335	C2C3	B					
SK	336	B3	B		III -12		336>345	
SP	337	B3	B		III -12		312>337	
SK	338	B2B3	B				338>339、341	
SK	339	B2	B				338>339	
SP	340	D3	B				60、89、90、206>340	
SK	341	B3	B		III -12		338>341	

I - 1 表 遺構一覧表 (7)

種別	No.	グリッド	面	年 代	遺構	遺物	切り合い	備考
SK	342	B3	B				307、318>342	
SP	343	B3	B		Ⅲ -12		312、319>343	
SP	344	B3	B		Ⅲ -12			
SK	345	B3	B				322、336>345	
SK	346	B3	B					
SP	347	B2	B				196、326、329>347	
欠番	348		×					
欠番	349		×					
欠番	350		×					
SP	351	C3	C					
SP	352	C3	C					
SP	353	C3	C					
SP	354	D2E2	C					
SP	355	B4	C					
SP	356	B4	C					
SP	357	B4	C					
SP	358	E2	C					
SP	359	E2	C					
SK	360	A1B1	D					
欠番	361		×					SI-283P4 に変更
欠番	362		×					SI-283P3 に変更
SP	363	B4	C					
SK	364	A4	C					
SP	365	B4	C					
欠番	366		×					SI-283 炉に変更
SP	367	B4	C					

第4節 基本層序 (I-6図)

調査区は、台地東縁辺部に位置し、北に看護師宿舎2号棟、西に看護師宿舎3号棟が建ち(西側の宿舎は、看護職員等宿舎3号棟地点として1996年11月から翌1997年1月にかけて調査を行った)、南側は支谷、東側は不忍池へ向かって落ちる大きな段になっていた。調査開始前は、病院の駐車場として利用され、アスファルト舗装されていた現表の標高はおおむね15.3mであった。アスファルトを剥がすとレンガ、コンクリートなどが含まれる近代の盛土が、北側で2.5m、南側で3m程度の厚さで堆積していた。A面と命名した硬化面は、北西側が標高12.9m、南東側が12.3mで、北西から南東に傾斜を有して構築されていた。A面の地業盛土(A層)は、厚さ20~30cmの暗褐色土で、包含されている遺物から近代初期に盛土が行われたものと推定された。

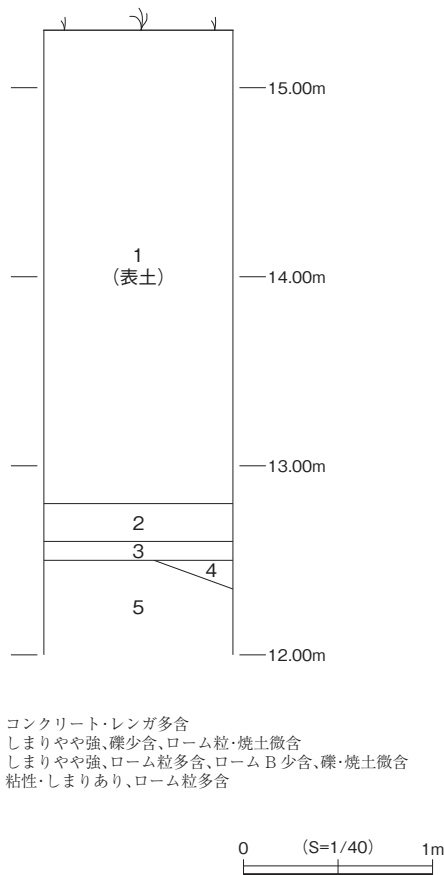
北西側標高12.6m、南東側で12.1m程度で江戸時代遺

構面(B面)が確認された。面は明確ではなく、凹凸が顕著であったが、これは庭園の地形によるものと推定された。

古墳時代の遺構・遺物は、江戸時代面(B面)の調査を行っている際に面のレベル差も大きくなかったことから、江戸時代の遺構内や、壁、坑底などから多く確認された。確認面としてのB面とレベル差は10~20cm程度であった。しかし、調査区西側看護職員等宿舎3号棟地点との境周辺や北東部から確認されているSI205、SI236、SI242などの堅穴住居は、壁高が低く、江戸時代初期の段階で大きく削平されたと判断される。

縄文時代の遺構が確認されたローム上面(D面)は、武蔵野標準層位Ⅲ層であった。ローム上面の標高は北西部で12.5m、南東部で12.1~12.2mで、自然地形も北西から南東に向かったの傾斜が看取された。

関東ローム層は最上層である立川ローム層Ⅲ層から確認され、以下、記録を取ったX層上位まで標準な堆積状況であった。



I-6図 基本層序

第Ⅱ章 A面(近代)の遺構

本地点は、近代初頭に行われた東京医学校の移転に伴って、使われた富山藩表御殿東側前庭部の整備のため、大きな改変を受けた。富山藩邸時代には表御殿大御書院東側に広がる回遊式庭園であったと推定される。近代面としたA面は、調査区東端では現表下約3m、西側から中央部付近では約2.5mで確認された硬化した遺構面である。A面は、良好な黒色土で作られ硬化面であり、地形に沿って緩やかに東南に傾斜していた。調査区中央部付近には、この硬化面上に平石を並べた配石遺構(1号石列)と硬化面を掘り込んで、動物骨が集中的に廃棄(あるいは埋葬)した円形、方形の遺構が40基確認された。遺構中にはレンガが混入したものがあり、近代以降の面であることが確認された。

SK3 (遺構Ⅱ-1図)

調査区南側D4区で確認されたややいびつな長方形を呈する土坑である。遺構南側でSK69と重複し、本遺構が新である。遺構の規模は、長辺60cm、短辺46cm、深さは確認面から最大40cmを計測する。坑底は凹凸が顕著で、やや平滑な壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がっている。覆土はしまりのない炭化物を含む茶褐色土単層で、小動物の骨が多量に含まれていた。

遺物は、動物骨以外には確認されなかった。

SK9 (遺構Ⅱ-1図)

調査区ほぼ中央D2区で確認された楕円形を呈する土坑である。遺構の規模は、長径66cm、短径47cm、深さは確認面から最大30cmを計測する。坑底は鍋底状を呈し、壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は炭化物、漆喰を含み、4層に分層されるが、いずれの層からも、小動物の骨が多量に含まれていた。

遺物は、動物骨以外には確認されなかった。

SK18 (遺構Ⅱ-1図)

調査区南東側D3区で確認された隅丸方形を呈する土坑である。遺構の規模は、長辺64cm、短辺54cm、深さは確認面から最大22cmを計測する。ほぼフラットな坑底はやや平滑で、壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は2層に分層されるが、下層は小動物の骨が多量に含まれていた。

遺物は、動物骨以外に、上層からレンガが出土している。

SK19 (遺構Ⅱ-1図、遺物Ⅳ-1～4図)

調査区南東側E3区で確認されたいびつな隅丸方形を呈する土坑である。本遺構が入れ子になるようにSK59と切り合っている。また、遺構上部は攪乱を受けていた。遺構の規模は、長辺280cm、短辺150cm、深さは確認面から最大80cmを計測する。凹凸が顕著な坑底はから、壁はやや開きながら立ち上がっている。覆土は多く遺存する西側で2層が確認された。本遺構は、近代後期以降に攪乱されA面が失われたこと、下層に漆喰が多く含まれていたことから、下にあったSK59と別遺構として調査を行った。しかし、SK59の下層は瓦が多く含まれる本遺構と類似した埋土であり、また、両遺構の出土遺物が多く遺構間接合例(実測Ⅳ図-20～24図6、11、16、23、24など)が存在することから、両遺構が同遺構の可能性も考えられる。下層から遺物が多く出土している他、一部に小動物の骨が含まれていた。

遺物は、陶磁器・土器、瓦、金属製品、動物遺体なコンテナ箱で6箱出土している。

SK24 (遺構Ⅱ-1図)

調査区南側C4区で確認された隅丸方形を呈する土坑である。遺構の規模は、長辺52cm、短辺40cm、深さは確認面から最大18cmを計測する。ほぼフラットな坑底はやや平滑で、壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は2層に分層されるが、下層は小動物の骨が多量に含まれていた。

遺物は、動物骨以外に、19世紀～近代の陶磁器・土器、金属製品がコンテナ箱で1箱出土している。

SK40 (遺構Ⅱ-1図、遺物Ⅳ-4～6図)

調査区北東側C1、D1区で確認されたいびつな隅丸長方形を呈する土坑である。遺構の規模は、長辺270cm、短辺200cm、深さは確認面から最大120cmを計測する。坑底、壁面はやや平滑で、坑底には2基のピットが確認された。西側ピットは、径60cm、深さ40cmの円形、東側のピットは長辺60cm、短辺40cm、深さ20cmの隅丸方形を呈する。壁は坑底から開きながら立ち上がっている。覆土は、近代の遺物が多く含まれる褐色土であった。

遺物は、陶磁器・土器、ガラス製品、金属製品なコンテナ箱で4箱出土しているが、Ⅳ-4図3、Ⅳ-5図14な

ど陶磁器に統制番号が入った資料が存在していることから、遺構の年代は戦時期まで下がると考えられる。

SK43 (遺構Ⅱ-2図)

調査区中央 C1、C2、D1、D2 区で確認されたややいびつな長方形を呈する土坑である。遺構の規模は、長辺 285cm、短辺 190cm、深さは確認面から最大 60cm を計測する。坑底、壁面は凹凸が顕著で、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は、4 層に分層される。

遺物は、出土していない。

SK54 (遺構Ⅱ-2図)

調査区東側 E3、F3 区で確認された楕円形を呈すると推定される土坑である。遺構の東側は調査区域外、北側を土層観察のために設定したトレンチで壊され遺構全体の様子は復元できない。遺存する遺構の規模は、長辺 350cm、短辺 250cm、深さは確認面から最大 20cm を計測する。坑底、壁面は凹凸があり、壁は坑底から開きながら立ち上がっている。覆土は薄く、暗茶褐色単層である。

遺物は、出土していない。

SK123 (遺構Ⅱ-2図、遺物Ⅳ-13～14図)

調査区中央 C2 区で確認された方形を呈する土坑である。遺存する遺構の規模は、東西 250cm、短辺 260cm、深さは確認面から最大 60cm を計測する。坑底、壁面は比較的平滑で、壁は坑底から垂直に立ち上がっている。覆土はレンガを含む茶褐色土を呈していた。

遺物は、近代の陶磁器・土器、ガラス製品、金属製品などコンテナ箱 1 箱出土している。

SK139 (遺構Ⅱ-3図)

調査区中央部 C2、C3 区で確認された遺構である。遺構の西側、南側を近代後半以降の攪乱され、一部を SK41、SP79 によって、東側を土層観察のために設定したトレンチで壊され遺構全体の様子は復元できない。遺存する遺構の規模は、長辺 430cm、短辺 250cm、深さは確認面から最大 40cm を計測する。坑底、壁面はやや凹凸があり、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 7 層に分層される。

遺物は、出土していない。

SE147 (遺構Ⅱ-3図、遺物Ⅳ-14図)

調査区南西部 B3 区で確認された井戸である。遺構の西北側で SP160 と重複しており、新旧は本遺構が新で

ある。規模は、確認面における直径 120cm、深さは確認面から最大 140cm まで調査を行った。坑底は確認していない。壁面はやや凹凸があり、径は確認面から徐々にすぼまっている。

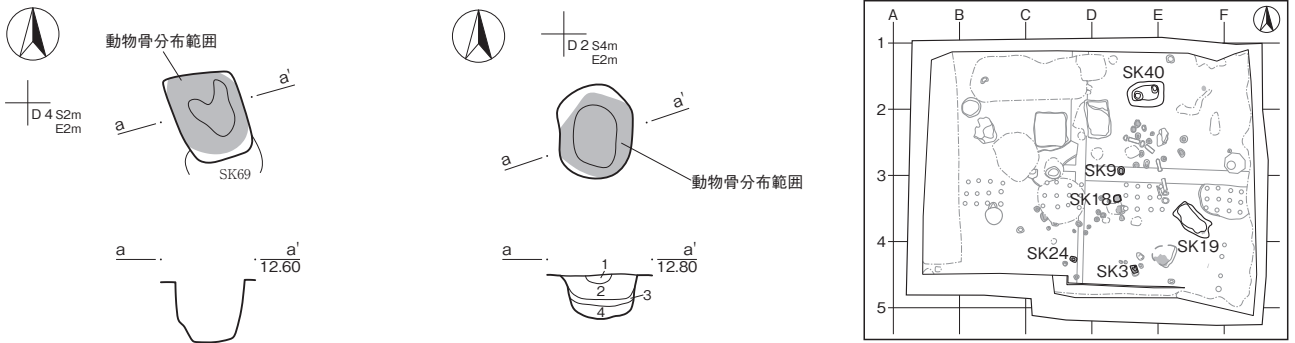
遺物は、近代の陶磁器・土器、ガラス製品などコンテナ箱 1 箱出土している。

1号石列 (SX11・12・13・14・15・16・17・36・37・38) (遺構Ⅱ-4図、遺物Ⅳ-1図)

調査区東 D-E2、D-E3 区で確認された石列遺構である。石列は、カーブしながら並ぶ 8 基の石とその付近にあった 2 基の平石とで構成される。カーブしながら並ぶ石列は、丸石（南から SX11、37、15、17）と角柱状の石（南から SX12、13、38、16）からなり、丸石は角柱状の石の間にある。丸石は自然石、角柱状の石は加工石で、ステップなどに利用されたものを再利用されたようで、長辺の角が面取りされている。このうち SX13 はやや軟質の花崗岩で、いわゆる織部灯籠あるいはキリシタン灯籠と称されるものの竿部である。松田重雄氏による昭和 43 年の集成によると、竿上部に文字様の刻書があるものが多く存在することが判るが、本例は竿上部の刻書、下部の人物像が認められない（松田 1988）。これらの石は、堀方が確認されなかったことから、A 面造成時に埋め込まれたものであろうと考えられ、面を上に向けてある点、列を呈している点から庭などの飛び石であろうと推定される。

遺物は、確認されていない。

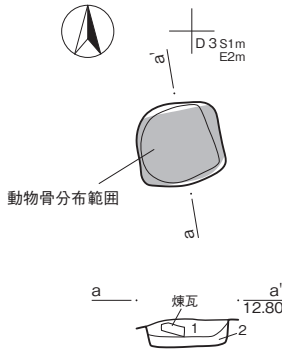
第II章 A面(近代)の遺構



SK 3

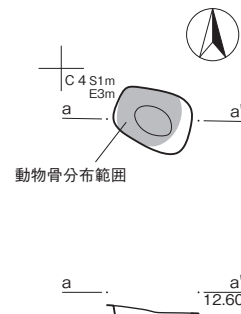
- 1 暗茶褐色土 粘性・しまりやや弱、漆喰片多含、炭化物含、骨少含
- 2 暗茶褐色土 粘性・しまりやや弱、骨極多含
- 3 暗茶褐色土 粘性・しまりやや弱、漆喰片少含
- 4 暗茶褐色土 粘性・しまりやや弱、骨片極多含、漆喰片微含

SK 9



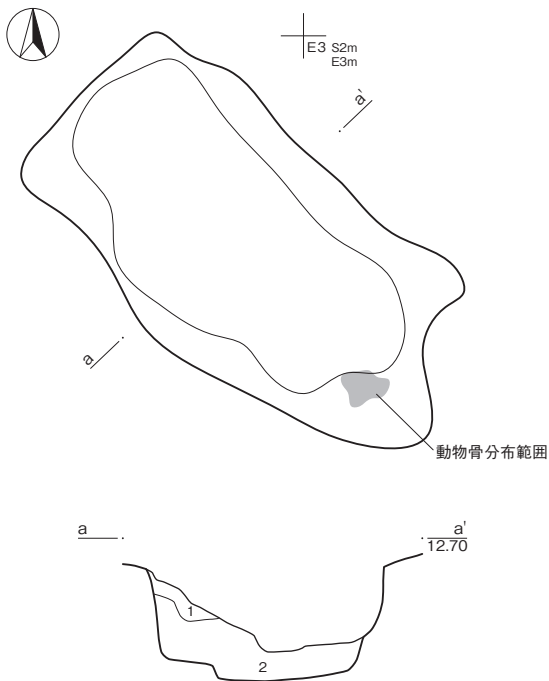
- 1 暗褐色土 粘性・しまりややあり、漆喰片・炭化物含、骨片少含
- 2 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、骨片極多含

SK18



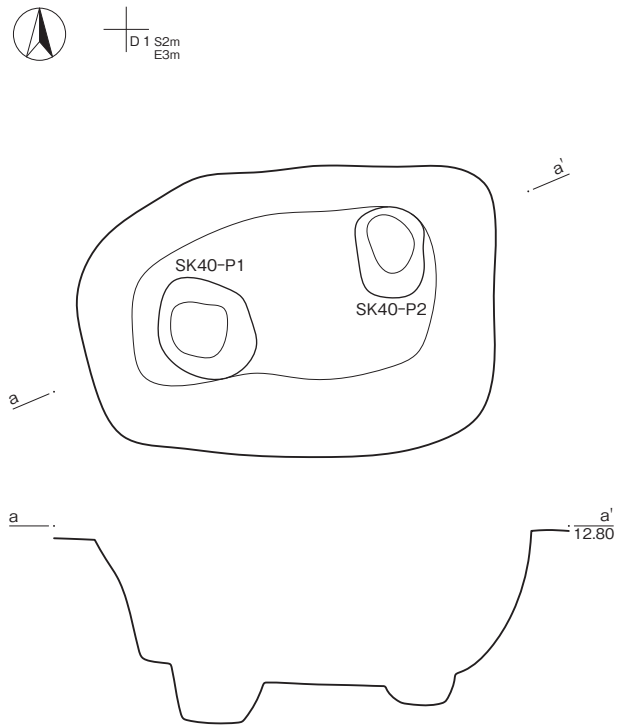
- 1 暗褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・漆喰多含、かけ土と思われる
- 2 褐色土 粘性・しまりややあり、骨片極多含

SK24

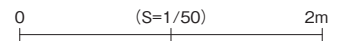


- 1 茶褐色土 粘性ややあり、しまりやや弱、ローム粒・B含、小円礫・瓦少含
- 2 暗褐色土 粘性・しまりやや弱、漆喰・瓦片多含、円礫・小円礫含、ローム粒・炭化物少含

SK19

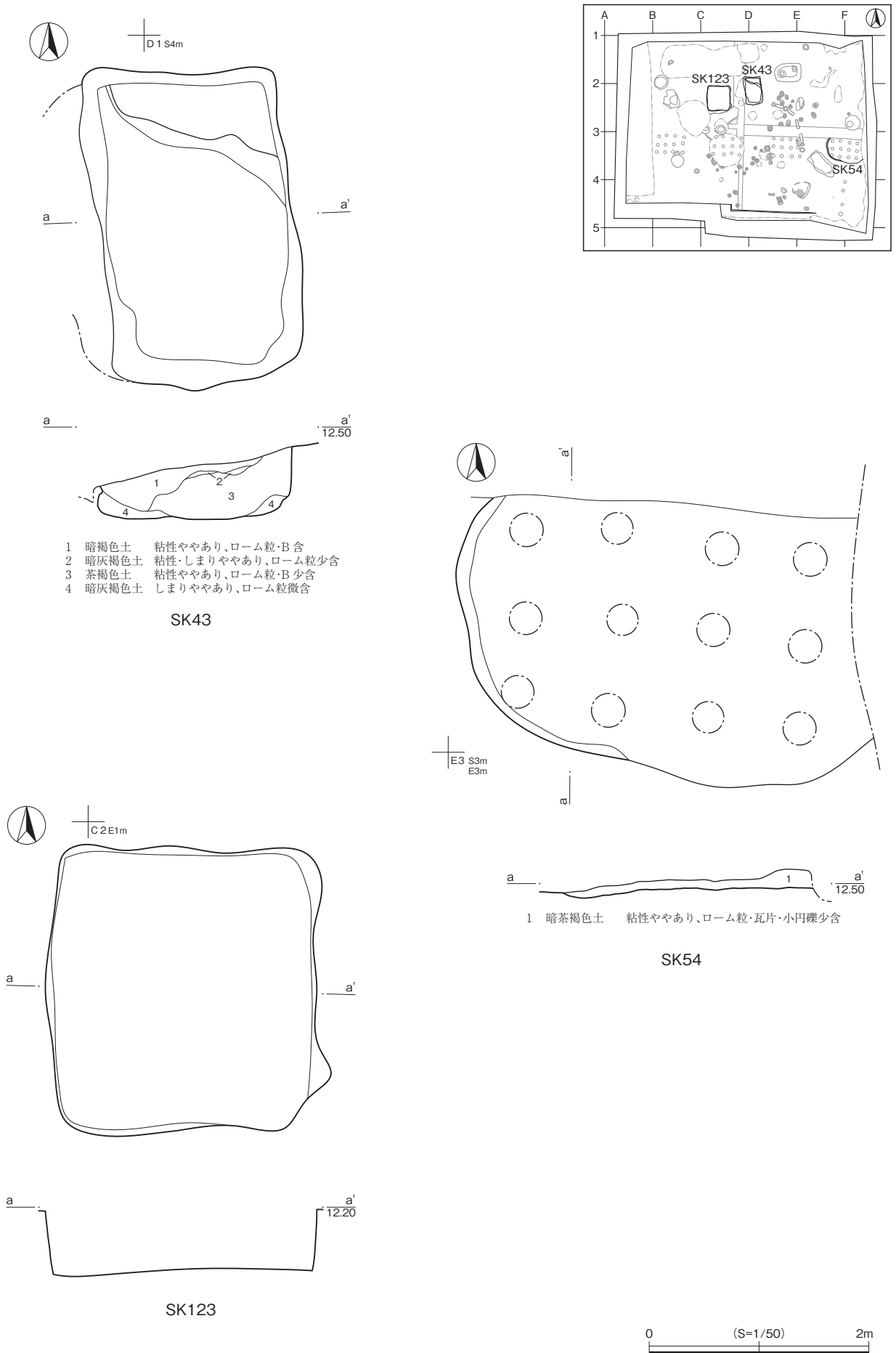


SK40

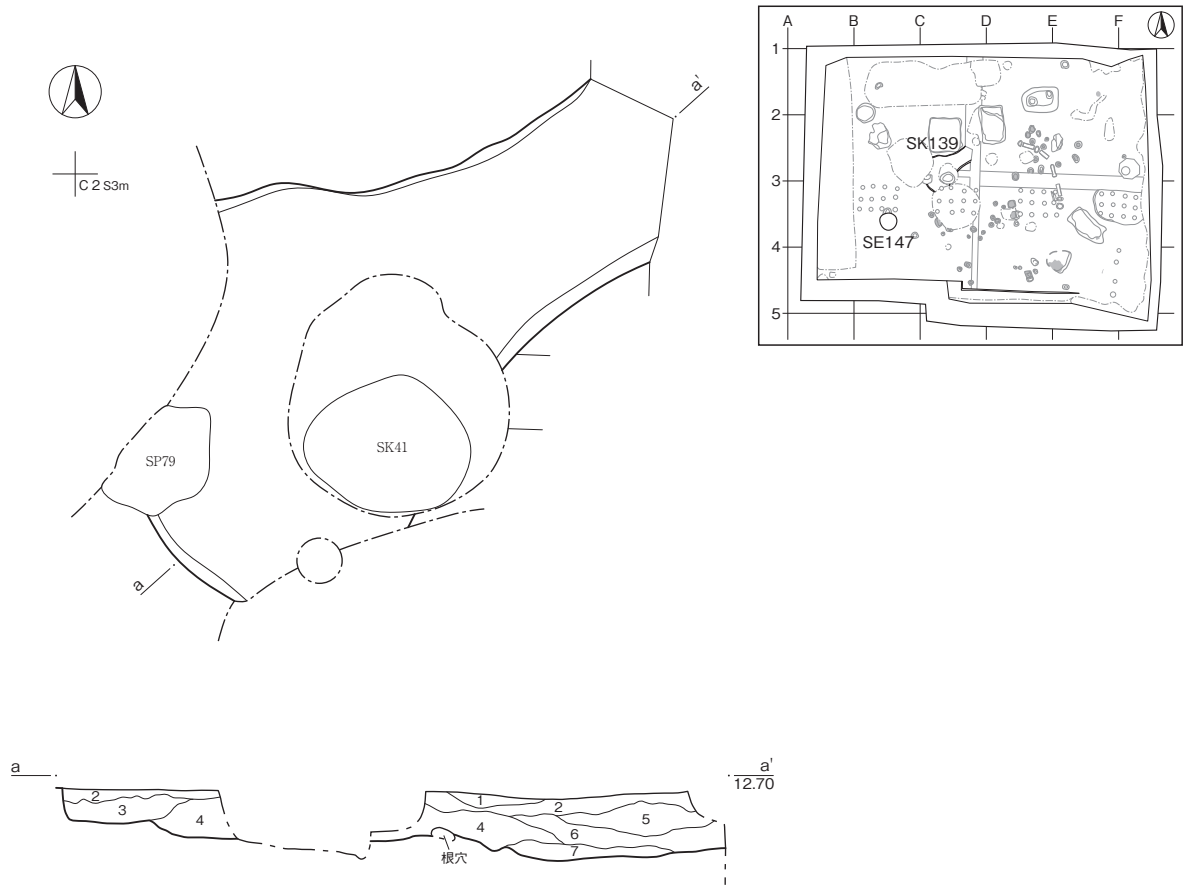


II-1図 SK3、SK 9、SK18、SK19、SK24、SK40(A面)

II 看護職員等宿舎5号棟地点

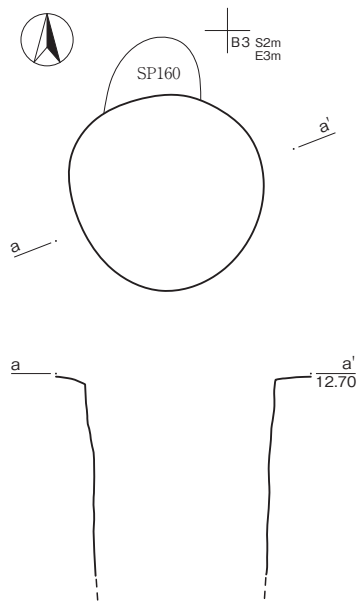


II-2図 SK43, SK54, SK123(A面)



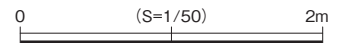
- 1 褐色土 粘性ややあり、ローム粒含、ロームB微含
- 2 黄褐色土 粘性・しまりややあり、ほぼロームで構成される
- 3 褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・B少含
- 4 褐色土 粘性ややあり、ローム粒多含、ロームB少含
- 5 褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・B少含
- 6 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含、小円礫・ローム小B微含
- 7 褐色土 粘性ややあり、ローム粒・B含

SK139

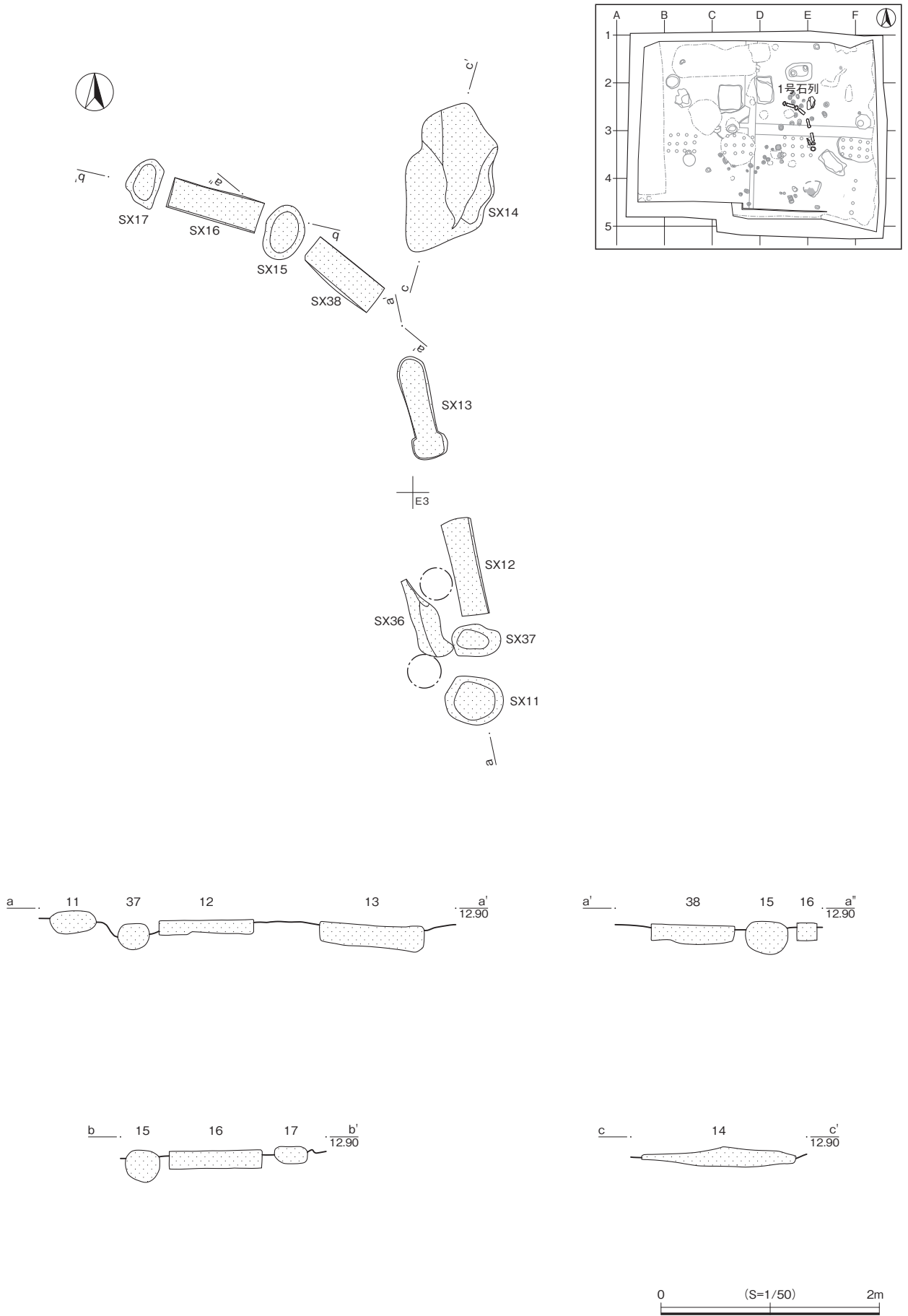


SE147

II-3図 SK139, SE147 (A面)



II 看護職員等宿舍5号棟地点



II-4図 1号石列(SX11、SX12、SX13、SX14、SX15、SX16、SX17、SX36、SX37、SX38) (A面)

第三章 B面（中・近世）の遺構

A面の下約20～30cmで、江戸時代の遺構が確認される。江戸時代の遺構群は、平面的に認識されたものではなかったことで、生活面が凹凸であると認識された。B面で確認された遺構は、176遺構である。内訳は、溝が6基、井戸が2基、地下室が3基、土坑が104基、ピットが58基、性格不明の落ち込みが4基である。樹木の植栽痕が多く確認された反面、建物基礎、井戸、地下室、廃棄土坑（ゴミ穴）など生活に伴う遺構が少なく、これが本地点の特徴となっている。

SK44（遺構Ⅲ-1図）

調査区東E3区で確認された円形を呈すると思われる土坑である。遺構の北側を土層観察のために設定したトレンチで壊されるが、遺構の規模から北半はトレンチ内で回っている可能性が高い。遺存している遺構の規模は、東西220cm、南北50cm、深さは確認面から最大40cmを計測する。坑底、壁面は細かい凹凸が確認され、壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は、2層に分層される。規模、壁や坑底の状況などから、本遺構は植栽痕と推定される。

遺物は、出土していない。

SK46（遺構Ⅲ-1図）

調査区東E1区で確認された楕円形を呈する土坑である。遺構の東側でSK74、西側でSD206と重複しており、新旧は両遺構より新である。遺構の規模は、長径（南北）140cm、短径（東西）100cm、深さは確認面から最大18cmを計測する。坑底、壁面は平滑で、壁は坑底より開きながら立ち上がっている。覆土は暗褐色土単層である。断面にかかっている腐食した木質は、後代に打ち込まれた杭状のもので、本遺構に伴ったものではない。

遺物は、出土していない。

SK55（遺構Ⅲ-1図）

調査区東E2区で確認された楕円形を呈する土坑である。遺構の西側でSK77、東側でSK84と重複しており、新旧は両遺構より新である。また、遺構の北側を土層観察のために設定したトレンチで壊され遺構全体の様子は復元できない。遺存している遺構の規模は、長径300cm、短径240cm、深さは確認面より最大30cmを計測する。坑底、壁面はやや平滑で、壁は坑底よりやや開きながら立ち上がっている。覆土は2層に分層される。

規模、壁や坑底の状況などから、本遺構は植栽痕と推定される。

遺物は、出土していない。

SK59（遺構Ⅲ-1図、遺物Ⅳ-6～11図）

調査区南東D3、E3、E4、F3区で確認されたややいびつな楕円形を呈する土坑である。遺構の中央をSK19、東側でSK113、南側でSK127、SK128、西側でSK60、SK81、SU82、SK106、SK177と切り合っており、新旧は切り合っている全ての遺構より新である。遺構の規模は、長径（東西）610cm、短径（南北）450cm、深さは確認面より最大88cmを計測する。坑底、壁面は凹凸が多く、壁は坑底より東側はやや垂直に、西側は緩やかに開きながら立ち上がっている。覆土は3層に分層され、下2層には陶磁器・土器類、瓦などが多く含まれる。遺構の規模、壁や坑底の状況などから植栽痕と推定される。これまで植栽痕からは出土遺物が少ないことが多かったが、覆土に陶磁器類が多く含有される点など異なっている。また、遺物の年代が幕末期である点、宝篋印塔の基礎部分が出土している（Ⅳ-11図66）点、釘が多く出土している点から、幕末から明治3（1871）年の屋敷引き払いの間に廃棄された遺構の可能性が高い。

遺物は、東大編年Ⅷd期（1850～60年代）に比定される陶磁器・土器類、瓦、石製品、釘がコンテナ箱で24箱出土している。

SK60（遺構Ⅲ-2図、遺物Ⅳ-12図）

調査区中央D3、D4、E3、E4区で確認された不整形の土坑である。遺構の東側でSK59、SK81、SU82、SK106、SK158、北側でSX133、SK146、SK176、SK177、西側でSK90、SP340、SD206、南側でSK134、SK166、SK169と重複しており、新旧は、SK59より旧であるほかは全ての遺構より新である。遺構の規模は、東西400cm、南北300cm、深さは確認面より最大34cmを計測する。坑底、壁面は細かい凹凸が確認され、壁は坑底より緩やかに開きながら立ち上がっている。覆土は3層に分層され、陶磁器・土器類、瓦などが多く含まれる。また、遺物の年代が幕末期であること、釘が多く出土している点から、明治3（1871）年の屋敷引き払いに伴う遺構の可能性はある。

遺物は、東大編年Ⅷd期（1850～60年代）に比定される陶磁器・土器類、瓦、石製品、釘が中心に近代の遺

物も混ざってコンテナ箱で5箱出土している。

SD70 (遺構Ⅲ-2 図)

調査区北側 D1、D2、E1、E2 区で確認された硬化面を伴う溝状遺構である。遺構の東側で SD206、南側で SP85、SK96、SK135 を切って構築されるが、SK40 には南北に分断するように切られ、北側は調査範囲外にあり、遺構の全容は復元できない。遺存している遺構の規模は、東西最大 300cm、南北 520cm、深さは確認面より最大 38cm を計測する。坑底、壁面は細かい凹凸が多く確認され、東西壁は溝底より緩やかに開きながら立ち上がっている。溝底より約数 cm 上には硬化面があり、道としての機能を有していたと考えられる。南側は徐々にレベルが上がっていた。また、本遺構の南側 SK80、SK88 状にも硬化面が確認されたが、おそらく坂道となっていた本遺構に関連するものと推定される。覆土は 4 層に分層され、溝状の荒掘りの後に作り出した硬化面かあるいは使用による硬化層 (3、4 層) と道の埋土 (1、2 層) に分層される。富山藩邸庭園の苑道と推定される。

遺物は、出土していない。

SK71 (遺構Ⅲ-3 図)

調査区北東 E1、E2、F1、F2 区で確認されたややいびつな楕円形を呈する土坑である。遺構の規模は、長径 (南北) 380cm、短径 (東西) 170cm、深さは確認面より最大 63cm を計測する。坑底、壁面は凹凸が確認され、壁は坑底より開きながら立ち上がっている。覆土は 5 層に分層される。遺構の規模、壁や坑底の状況などから植栽痕と推定される。

遺物は、出土していない。

SK74 (遺構Ⅲ-3 図)

調査区北東 E1 区で確認された不整形の土坑である。遺構の西側で SK46 と重複しており、新旧は本遺構が旧である。遺構の規模は、東西 130cm、南北 140cm、深さは確認面より最大 52cm を計測する。坑底、壁面は凹凸が確認され、壁は坑底より開きながら立ち上がっている。覆土は 2 層に分層される。壁や坑底の状況から植栽痕と思われるが、規模が小さいことから、本来の遺構面が確認面より高いと推定される。

遺物は、出土していない。

SK78 (遺構Ⅲ-3 図)

調査区北東 E2 区で確認されたややいびつな円形を呈する土坑である。遺構の南側で SK77、北側で SP92 と

重複しており、新旧は SK77 より旧、SP92 より新である。また、遺構の北側の一部を攪乱されている。遺存する遺構の規模は、東西 130cm、南北 110cm、深さは確認面より最大 28cm を計測する。坑底、壁面はやや平滑で、壁は鍋底状の坑底より開きながら立ち上がっている。覆土は 4 層に分層される。壁や坑底の凹凸は少ないが、覆土が周囲で確認されている植栽痕と近似している。

遺物は、出土していない。

SK81 (遺構Ⅲ-3 図、遺物Ⅳ-13 図)

調査区東側 D3、E3 区で確認されたややいびつな円形を呈する土坑である。遺構の東側で SK59、南側で SU82、SK177、西側で SK60、SK176、北側で SK118、SK119、SK120 と重複しており、新旧は SK59、SK60 より旧である他は、全てに新である。遺構の規模は、東西 240cm、南北 290cm、深さは確認面より最大 80cm を計測する。坑底、壁面は凹凸が顕著で、壁は立ち上がり中段で外側に大きく開くような立ち上がりを呈している。覆土は 5 層に分層され、瓦片が多く含まれている。壁や坑底の状況から植栽痕と推定される。

遺物は、18 世紀後半～19 世紀の陶磁器・土器、瓦がコンテナ箱で 2 箱出土している。

SU82 (遺構Ⅲ-4 図、遺物Ⅳ-13 図)

調査区南東側 D3、D4、E3、E4 区で確認された地下室である。遺構の主軸は、N-18°-E である。遺構の上で SK59、南側で SK106、西側で SK60、SK177、北側で SK81 と重複しており、新旧は SK177 より新である他は、全てに旧である。遺構は円形を呈する入口部と南東側に東西に主軸を持つ長方形の室部で構成される。室部と垂直に掘られた入口部との間には、遺構確認面下約 200cm から作られた緩い階段状の施設が設けられている。階段状施設のステップ両端には、杭が打たれた跡があり、本来は板材などでステップが補強されていたと推定される。入口部の規模は、径 140cm で、ほぼ垂直に掘られている。また、北東の壁面には、径 20cm、奥行 10cm 程度の制作時の足掛けと考えられる施設が 1 箇所確認される。ステップは遺存している北東側の壁上端より約 170cm 下から幅約 70cm で付けられており、ステップは 3 段確認され、最上段が 50cm、中段が大きく崩れているが約 20cm、下段が 30cm の幅を有している。室部は、間口 270cm、奥行 180cm、奥壁の高さが 130cm の規模を有し、天井は階段から奥壁に向かって天井が傾斜している。壁、坑底は平滑に調整され、壁は坑底から垂直に立ち上がっている。また、坑底には奥壁から約

50cmで奥壁に沿って4本、奥壁には坑底から約50cmの高さで杭跡が確認されており、奥壁に棚状の施設を構築した痕跡と考えられる。覆土は10層に分層され、入り口から奥壁に向かって埋め戻されていることが看取され、埋土のしまりも良好なことから、土を詰めて埋め戻されたと考えられる。

遺物は、17世紀中葉と18世紀後葉～19世紀中葉の陶磁器・土器、瓦、金属製品がコンテナ箱で3箱出土している。

SK84（遺構Ⅲ-4図）

調査区東側E2、F2区で確認された円形を呈すると推定される土坑である。遺構の西側でSK55、北側でSP294と重複しており、新旧はSK55より旧、SP294より新である。また、遺構の南側を大きく攪乱され、遺構全体の様子は復元できない。遺構の規模は、推定直径120cm、深さは確認面より最大82cmを計測する。坑底、壁面は凹凸が確認され、壁と坑底の境は不明瞭ながら、坑底から大きく開くような立ち上がっている。覆土は2層に分層される。植栽痕か？

遺物は、出土していない。

SE89（遺構Ⅲ-4図）

調査区中央やや南側D3区で確認された井戸である。SK90、SK111、SK129、SX133、SP140、SP141、SD206、SP340と重複しており、新旧はSK90より新である他は全てに旧である。危険のため、調査は確認面から190cm下までしか行えなかった。遺構は、やや南北が長く、緩い楕円形を呈する。規模は、東西125cm、南北145cmを計測する。壁面は凹凸が顕著に確認され、壁は確認面より垂直に掘られている。井戸の西壁には、幅15cm、奥行10cm程度のはぞ穴様の足掛けが50～60cm間隔で3基確認されている。覆土は7層に分層されるが、壁に沿って堆積が認められた7層は井戸側の痕跡であろう。

遺物は、出土していない。

SP92（遺構Ⅲ-4図）

調査区東側E2区で確認された楕円形を呈するピットである。遺構の上部をSK78に大きく切られ、遺構上部の様子は復元できない。遺存している遺構の規模は、東西60cm、南北50cm、深さは確認面より最大59cmを計測する。坑底、壁面は凹凸が顕著に確認され、壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は4層に分層される。

遺物は、出土していない。

SK96（遺構Ⅲ-5図）

調査区中央C2、D2区で確認された隅丸長方形を呈する土坑である。SK43、SK62、SD70、SK80、SK103、SK135、SP152、SK153、SP159、SD206、SK331と重複しており、新旧はSK43、SK62、SD70、SK80より新である他は、全てに旧である。また、遺構の西側は、土層観察のために設定したトレンチで壊されるが、トレンチ西側で遺構の続きが確認できないことから、トレンチ内で回ってると考えられる。遺存している遺構の規模は、東西460cm、南北270cm、深さは確認面より最大56cmを計測する。坑底、壁面はやや凹凸が確認され、壁は坑底よりやや開きながら立ち上がっている。覆土は6層に分層される。

遺物は、出土していない。

SK97（遺構Ⅲ-5図、遺物Ⅳ-13図）

調査区南側C4、D3、D4区で確認されたややいびつな円形を呈する土坑である。SK121、SX133、SU149、SD206と重複しており、切り合っている遺構全てより新である。遺構の規模は、東西170cm、南北180cm、深さは確認面より最大20cmを計測する。坑底、壁面はやや凹凸が確認され、壁は坑底より開きながら立ち上がっている。覆土は2層に分層される。壁や坑底の状況から植栽痕と推定される。

遺物は、19世紀前から中葉の陶磁器・土器、瓦、石製品がコンテナ箱1箱出土している。

SK113（遺構Ⅲ-5図）

調査区東側E3、F3区で確認された不整形の土坑である。遺構の西側でSK59、北側でSK328と重複しており、新旧はSK59より旧、SK328より新である。遺構の規模は、東西320cm、南北300cm、深さは確認面より最大40cmを計測する。坑底、壁面はやや凹凸が確認され、壁は坑底より開きながら立ち上がっている。覆土は4層に分層される。壁や坑底の状況から植栽痕と推定される。

遺物は、瓦が少量出土している。

SK119（遺構Ⅲ-6図）

調査区東側D3、E3区で確認された円形を呈すると思われる土坑である。遺構の南東側でSK81、北側でSK118、西側でSK87、SK120、SD206と重複しており、新旧はSK81、SK87より旧、SK118、SK120、SD206より新である。また、遺構の中央は調査前までに建っている。

た建物のコンクリート基礎に壊され、遺構の全容は復元できない。遺存している遺構の規模は、直径120cm、深さは確認面より最大30cmを計測する。坑底、壁面はやや凹凸が確認され、壁は坑底よりやや開きながら立ち上がっている。覆土は2層に分層される。植栽痕か？

遺物は、出土していない。

SK128 (遺構Ⅲ-6 図)

調査区南東側 E4 区で確認された円形を呈すると思われる土坑である。北側を SK59 に大きく切られ、遺構の全容は復元できない。南側では SK127、SK15 と重複しており、新旧は本遺構が新である。遺存している遺構の規模は、東西 250cm、南北 190cm、深さは確認面より最大 48cm を計測する。坑底、壁面は凹凸が顕著に確認され、壁は坑底よりやや開きながら立ち上がっている。坑底の中央部は周囲より盛り上げられている。覆土は 6 層に分層される。壁や坑底、土層の状況から植栽痕と推定される。

遺物は、出土していない。

SX133 (遺構Ⅲ-6 図)

調査区南側 C3、C4、D3、D4 区で確認された不整形の浅い落ち込みである。SK60、SE89、SK90、SK97、SK111、SK121、SK134、SP137、SP144、SK146、SU149、SD206、SP340 と重複しており、新旧は SK60、SE89、SK90、SK97 より旧、その他の遺構より新である。激しい切り合いで遺構全体の様子は復元できない。遺存している遺構の規模は、東西 340cm、南 390cm、深さは確認面より最大 40cm を計測する。坑底、壁面はやや凹凸が確認され、壁は坑底より開きながら立ち上がっている。覆土は 2 層に分層される。

遺物は、出土していない。

SK134 (遺構Ⅲ-6 図)

調査区南側 D3、D4 区で確認された円形の土坑が連なるような形状をした遺構である。SK60、SK121、SK133、SD206 と重複しており、新旧は SK60、SK121、SK133 より旧、SD206 より新である。遺存している遺構の規模は、長径（東西）160cm、短径（南北）100cm、深さは確認面より最大 26cm を計測する。坑底、壁面はやや平滑で、壁は坑底よりやや開きながら立ち上がっている。覆土は 2 層に分層される。

遺物は、出土していない。

SK148 (遺構Ⅲ-7 図)

調査区南西 B3 区で確認された円形の土坑である。SK162、SK309 と重複しており、新旧は両遺構より新である。遺構の規模は、直径 80cm、深さは確認面より最大 34cm を計測する。坑底、壁面はやや凹凸を有し、壁は坑底よりやや開きながら立ち上がっている。覆土は 2 層に分層される。

遺物は、出土していない。

SU149 (遺構Ⅲ-7 図、遺物Ⅳ-14～19 図)

調査区南側 C3、C4、D3、D4 区で確認された地下室である。SK75、SK97、SK121、SX133、SK191、SD206 と重複しており、新旧は SK75、SK97、SK121、SX133 より旧、SD206 より新である。また、遺構の南側は調査区域外で調査ができなかったことで、遺構全体の様子は復元できなかった。南側にある大きい入口部から室部は北と北東側二方に拡がっていた。北方の室部は、間口 90cm、奥に向かって少しずつ拡がり、奥行 90cm、高さは坑底から約 140cm であった。北東側の室部は、間口約 180cm、奥行 60cm、高さは坑底から約 140cm であった。天井は埋め戻しの際に落とされたと思われ、SK97 は本遺構の最上層の上から切り込まれていた。遺存している入口下の室部規模は、東西 250cm、南北 220cm、深さは確認面より 345cm を計測する。坑底、壁面は凹凸が顕著で、工具痕が明瞭に残っていた。壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がっているが、壁面の調整はラフである。覆土は 22 層に分層されるが、天井下の間隙も確認されず、土を奥に詰め込むように埋められた様子が覗えた。

遺物は、18 世紀前半の陶磁器・土器、瓦、金属製品などコンテナ箱 14 箱出土した。

SK166 (遺構Ⅲ-7 図)

調査区南側 D3、D4 区で確認されたややいびつな円形の土坑である。SK60、SK106、SK158、SK169 と重複しており、SK60、SK106、SK158 より旧、SK169 より新である。遺構の規模は、東西 170cm、南北 190cm、深さは確認面より最大 23cm を計測する。坑底、壁面は凹凸を有し、壁は坑底よりやや開きながら立ち上がっている。覆土は 2 層に分層される。壁や坑底、土層の状況から植栽痕と推定される。

遺物は、出土していない。

SK170 (遺構Ⅲ-8 図)

調査区北側 C1、C2 区で確認された長方形を呈する土坑である。遺構軸は、N-13°-E である。SK123、SK193

と重複しており、SK123より旧、SK193より新である。遺構の規模は、長辺（東西）220cm、短辺（南北）200cm、深さは確認面より最大80cmを計測する。坑底、壁面は凹凸を有し、壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は5層に分層される。

遺物は、瓦が少量出土している。

SK172（遺構Ⅲ-8図）

調査区南東側E4区で確認された長楕円形の遺構である。SK158に切られ、遺構全体の様子は復元できない。遺存している遺構の規模は、長径（東西）95cm、短径（南北）40cm、深さは確認面より最大22cmを計測する。坑底、壁面は凹凸を有し、壁は坑底より開きながら立ち上がっている。覆土は2層に分層される。

遺物は、出土していない。

SE178（遺構Ⅲ-8図）

調査区中央C2区で確認された井戸である。SK123、SK187、SK192と重複しており、新旧はSK123より旧、SK187より新である。SK192との新旧は不明である。調査は危険回避と切り合っているSI201保護のため、確認面から200cm下までしか行えなかった。遺構は、確認面ではややいびつな円形を呈する。規模は、東西160cm、南北170cmを計測する。壁面はやや凹凸が確認され、壁は確認面より垂直に掘られている。井戸の東壁には、幅20cm、奥行15cm程度のほぞ穴様の足掛けが40～50cm間隔で4基確認されている。覆土は10層に分層される。

遺物は、古墳時代の土器が多量に含まれていたが、江戸時代の遺物は出土していない。

SK186（遺構Ⅲ-9図）

調査区南側C4区で確認された隅丸方形を呈すると思われる土坑である。遺構の南側は調査区域外で、遺構全体の様子は復元できない。遺存している遺構の規模は、東西200cm、南北190cm、深さは確認面より最大54cmを計測する。坑底、壁面は凹凸を有し、壁は坑底よりやや開きながら立ち上がっている。覆土は4層に分層される。

遺物は、出土していない。

SK194（遺構Ⅲ-9図）

調査区東壁際F3区で確認された土坑である。遺構の西側の一部が確認されたのみで、多くは調査区域外にあり、遺構全体の様子は復元できない。遺存している遺構

の規模は、東西20cm、南北120cm、深さは調査区東壁面の観察から、最大140cmを計測する。坑底、壁面は凹凸が顕著で、壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は5層に分層される。

遺物は、瓦が少量出土している。

SK196（遺構Ⅲ-9図）

調査区北西側B2区で確認された不正円形を呈する土坑である。遺構の北側でSK326、東側でSP329、南側でSP347と重複し、新旧は全ての遺構より新である。規模は、東西100cm、南北110cm、確認面からの深さは最大40cmを計測する。壁や坑底ややや平滑で、ほぼフラットの坑底から、壁はやや開きながら立ち上がっている。覆土は、3層に分層される。

遺物は、出土していない。

SK197（遺構Ⅲ-9図）

調査区南西側B3、B4区で確認された円形の土坑である。遺構の西側でSK198を切って構築されている。遺構の規模は、東西120cm、南北110cm、深さは確認面より最大72cmを計測する。坑底、壁面はやや凹凸が確認され、壁は坑底よりやや開いて立ち上がっている。覆土は3層に分層される。

遺物は、出土していない。

SK198（遺構Ⅲ-9図）

調査区南西側B3、B4区で確認されたややいびつな円形の土坑である。東側でSK197、西側でSP199と重複しており、新旧はSK197より旧で、SP199より新である。遺存している遺構の規模は、東西80cm、南北120cm、深さは確認面より最大46cmを計測する。坑底、壁面はやや平滑で、壁は坑底よりやや開いて立ち上がっている。覆土は2層に分層される。

遺物は、出土していない。

SD206（遺構Ⅲ-10図、遺物Ⅳ-20図）

調査区東側を南北に縦断する大型の溝で、D1～D4、E1、E2区から確認された。溝の北端、南端は調査区域外に抜けており、主軸方位はN-16°-Eである。SK40、SK46、SK60、SD70、SP76、SK80、SU83、SP85、SP86、SK87、SK88、SE89、SK90、SK96、SK97、SK103、SK104、SK111、SX115、SX116、SX117、SK118、SK119、SK120、SK121、SK122、SK129、SP130、SX133、SK134、SK135、SP137、SP144、SP145、SK146、SU149、SK151、SK153、SK176、

SK191、SP195、SP340と重複しており、新旧は本遺構よりSK135、SP144、SK153、SK176、SK191、SP195、SP340が新であるほかは全ての遺構より旧である。B面から確認されたほとんどの遺構より旧であり、出土遺物から藩邸初期以前に遡る境溝と推定される。遺存している遺構の規模は、南北16m62cm、最大幅370cm、深さは確認面より最大120cmを計測する。坑底、壁面は凹凸を有し、壁は坑底よりいくつかの段を有しながら開いて立ち上がっている。覆土は、粒子の細かい黒色土が主体で、4層に分層される。

遺物は、古墳時代の土器が多量に含まれていたが、中世の陶磁器が2点出土している。

SK267 (遺構Ⅲ -11 図)

調査区南西側B3区で確認されたやや撥形に両端部が膨らむ楕円形の土坑である。遺構の主軸はN-5°-Eである。同軸で北側に位置するSK338、東側に位置するSK310、SK322、SK333と同時期に機能していた可能性も考えられる。遺構の規模は、長径(南北)90cm、短径(東西)40cm、深さは確認面より最大36cmを計測する。坑底、壁面はやや凹凸を有し、壁は坑底よりほぼ垂直に上がっている。覆土は2層に分層される。

遺物は、出土していない。

SK304 (遺構Ⅲ -11 図)

調査区南西側B3区で確認された円形の土坑である。遺構の南側の一部をSK174に切られている。遺構の規模は、直径130cm、深さは確認面より最大30cmを計測する。坑底、壁面は凹凸を有し、壁は坑底よりやや開きながら立ち上がっている。覆土は4層に分層される。壁や坑底、土層の状況から植栽痕と推定される。

遺物は、出土していない。

SK308 (遺構Ⅲ -11 図)

調査区南西側B3区で確認されたややいびつな円形土坑である。遺構の規模は、直径70cm、深さは確認面より最大20cmを計測する。坑底、壁面はやや平滑で、壁は坑底より開きながら立ち上がっている。覆土は3層に分層される。規模や壁や坑底の状況などは典型的ではないが、植栽痕の可能性も考えられる。

遺物は、出土していない。

SK318 (遺構Ⅲ -11 図)

調査区西側B2、B3区で確認された浅い不整形の土坑である。SK307、SK342と重複しており、新旧はSK307

より旧、SK342より新である。また、遺構の西端部の一部は、わずかに看護職員等宿舎3号棟地点にかかっている。遺構の規模は、東西220cm、南北160cm、深さは確認面より最大24cmを計測する。坑底、壁面はやや平滑で、壁は坑底よりやや開きながら立ち上がっている。覆土は3層に分層される。

遺物は、出土していない。

SK325 (遺構Ⅲ -11 図)

調査区西側B2区で確認された浅いドーナツ状の土坑である。遺構の東側の一部を攪乱されている。遺構の規模は、外径110cm、内径60cm、深さは確認面より最大26cmを計測する。坑底、壁面はやや凹凸を有し、壁は坑底よりやや開きながら立ち上がっている。覆土は暗褐色土単層である。本遺構は、坑底中央部がドーナツ状を呈するタイプの植栽痕で、上部が削平されて確認されたものと考えられる。

遺物は、出土していない。

SP328 (遺構Ⅲ -11 図)

調査区南西側B2区で確認されたややいびつな円形土坑である。東側のSK332を切って構築されている。遺構の規模は、直径70cm、深さは確認面より最大40cmを計測する。坑底、壁面はやや凹凸を有し、壁は坑底よりやや開きながら立ち上がっている。覆土は4層に分層される。

遺物は、出土していない。

SK334 (遺構Ⅲ -12 図)

調査区南側C3、D4区で確認された円形を呈する土坑である。遺構の規模は、直径150cm、深さは確認面より最大90cmを計測する。坑底、壁面は凹凸が顕著に認められ、壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は4層に分層される。遺構の深い点、壁や坑底の状況など典型的ではないが、植栽痕の可能性も考えられる。

遺物は、出土していない。

SK336 (遺構Ⅲ -12 図)

調査区南西側B3区で確認された浅い隅丸長方形を呈する土坑である。北側のSK345を切って構築されている。遺構の規模は、長辺(南北)130cm、短辺(東西)70cm、深さは確認面より最大30cmを計測する。坑底、壁面は凹凸が認められ、南北壁は坑底より緩やかに開きながら、東西壁はやや開きながら立ち上がっている。覆土は2層に分層される。

遺物は、出土していない。

SP337（遺構Ⅲ -12 図）

調査区南西側 B3 区で確認された隅丸長方形を呈する土坑である。遺構の主軸方位は、N-87° -W である。周囲でほぼ同軸の SP337、SP341、SP344 との関連性も想定されるが、明確ではない。SK312 に切られ、遺構上部の状況は不明である。遺構の規模は、長辺（東西）90cm、短辺（南北）40cm、深さは確認面より最大 36cm を計測する。坑底、壁面は凹凸が認められ、壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は黒褐色土単層である。

遺物は、出土していない。

SK341（遺構Ⅲ -12 図）

調査区南西側 B3 区で確認された隅丸長方形を呈すると推定される土坑である。遺構西側が調査前までに建っていた建物の基礎によって壊されており、遺構全体の様子は復元できない。北側上部を SK338 に切られている。遺存している遺構の規模は、長辺（東西）70cm、短辺（南北）40cm、深さは確認面より最大 34cm を計測する。坑底、壁面は若干凹凸が認められ、壁は坑底よりやや開きながら立ち上がっている。覆土は 2 層に分層される。

遺物は、出土していない。

SP343（遺構Ⅲ -12 図）

調査区南西側 B3 区で確認された隅丸長方形を呈すると推定される遺構である。遺構の主軸方位は、N-75° -W である。周囲でほぼ同軸の SP337、SP341、SP344 との関連性も想定されるが、明確ではない。SK312、SK319 と重複しており、新旧は両遺構より旧である。遺存している遺構の規模は、長辺（東西）90cm、短辺（南北）30cm、深さは確認面より最大 48cm を計測する。坑底、壁面は若干凹凸が認められ、壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 4 層に分層される。

遺物は、出土していない。

SP344（遺構Ⅲ -12 図）

調査区南西側 B3 区で確認された楕円形を呈するピットである。遺構の主軸方位は、N-69° -W である。周囲でほぼ同軸の SP337、SP341、SP343 との関連性も想定されるが、明確ではない。遺構の規模は、長径（東西）60cm、短径（南北）34cm、深さは確認面より最大 33cm を計測する。坑底、壁面は若干凹凸が認められ、壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は 3 層

に分層されるが、中央（2 層）は垂直に立ち上がっているため柱痕と推定される。

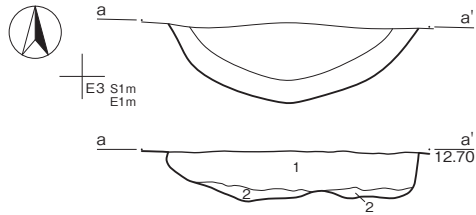
遺物は、出土していない。

1 号ピット列（遺構Ⅲ -13、14 図）

調査区南側に東西に並ぶピット列である。SP65、94、99、102、107、108、124、125、126、142、143、157、180、184、185、195 が該当する。調査途中で、ピット列と認識されたことで、遺構名はピット毎に振った。並びの主軸は N-86° -W である。列は、東側では南北に二筋存在するが、西側では明確ではない。列中央部分 - B ~ D ライン辺り - にはピットが存在せず、また、東西端は調査区域外に抜けていると推定される。ピットの平面形は、それほど規格性が高くないものの、二列のうち北側の多くは南北に主軸を有する楕円形あるいは隅丸長方形を呈し、南側は不整形のものが多い。ピットは約 120cm 間隔で並び、南北のピット間は 50 ~ 60cm で、対になるように位置している。列の中央付近に位置する SP157 は、平面形が明確は方形を呈している点、南側のピットが確認されていない点などやや多のピットと異なった点があり、列上に位置するものの、同じ機能を有するか明確ではない。また、西側の SP180、184 は、南側ピットの想定位置が調査区域外にあたるが、両ピットの距離が 240cm で、中央には SD182 として調査を行った遺構が本ピット列に伴う遺構の可能性もあることから、本ピット北側列であると推定した。各ピットの規模は、南北 40 ~ 60cm、東西 30cm、深さが 20 ~ 50cm 程度を計測する。覆土は単層または 2 層で構成されるものが多く、SP102、180 など柱痕と推定される垂直方向の土層堆積が確認されている。

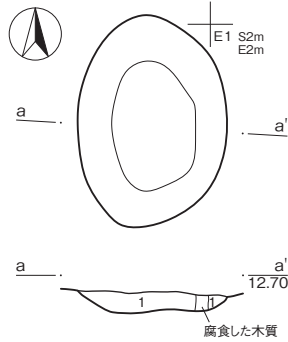
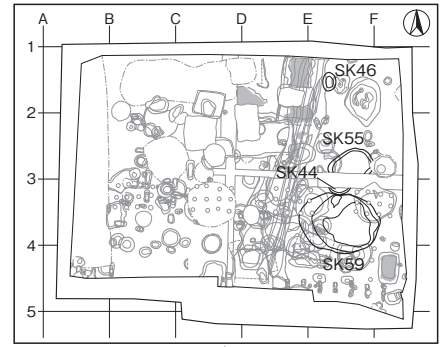
遺物は、出土していない。

II 看護職員等宿舎5号棟地点



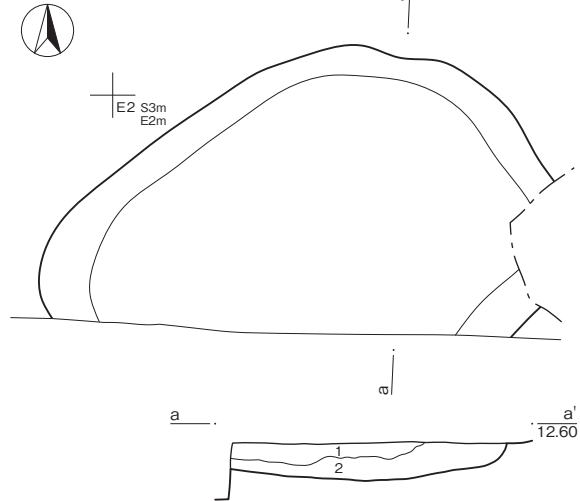
- 1 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒含、ロームB・円礫・小円礫少含
 2 茶褐色土 粘性ややあり、ローム粒少含

SK44



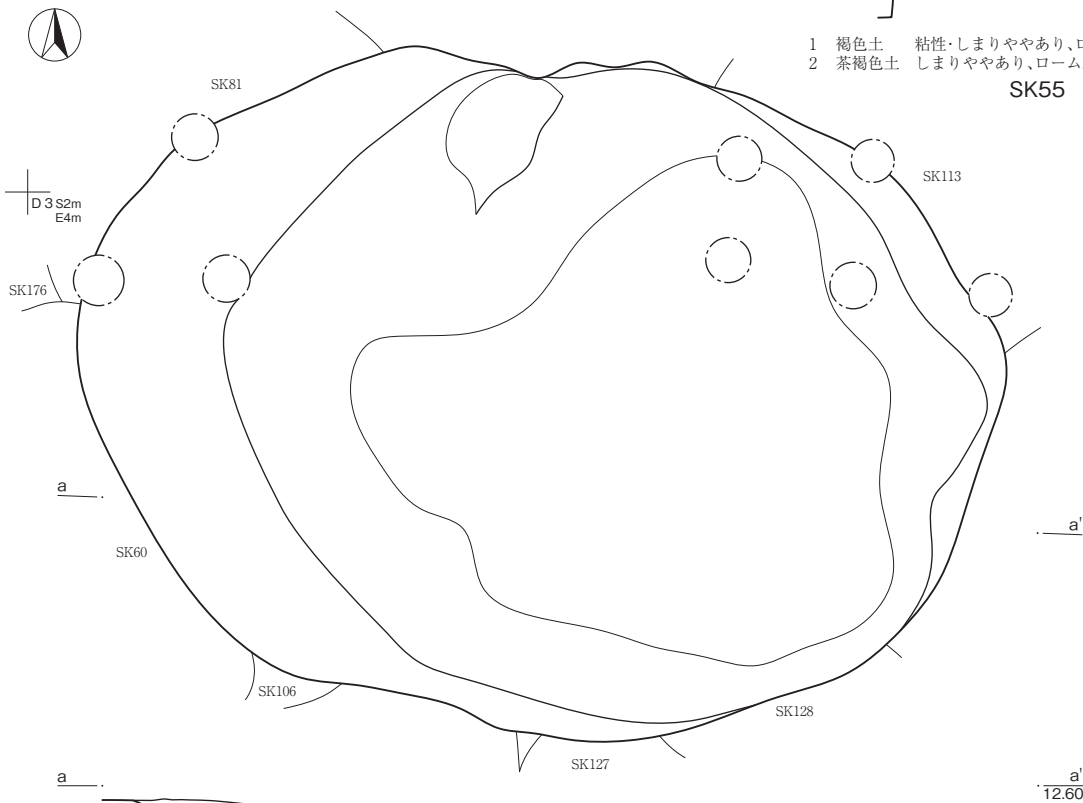
- 1 暗褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・小円礫少含

SK46



- 1 褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒多含、小円礫少含
 2 茶褐色土 しまりややあり、ローム粒・小円礫少含

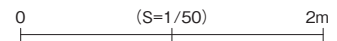
SK55



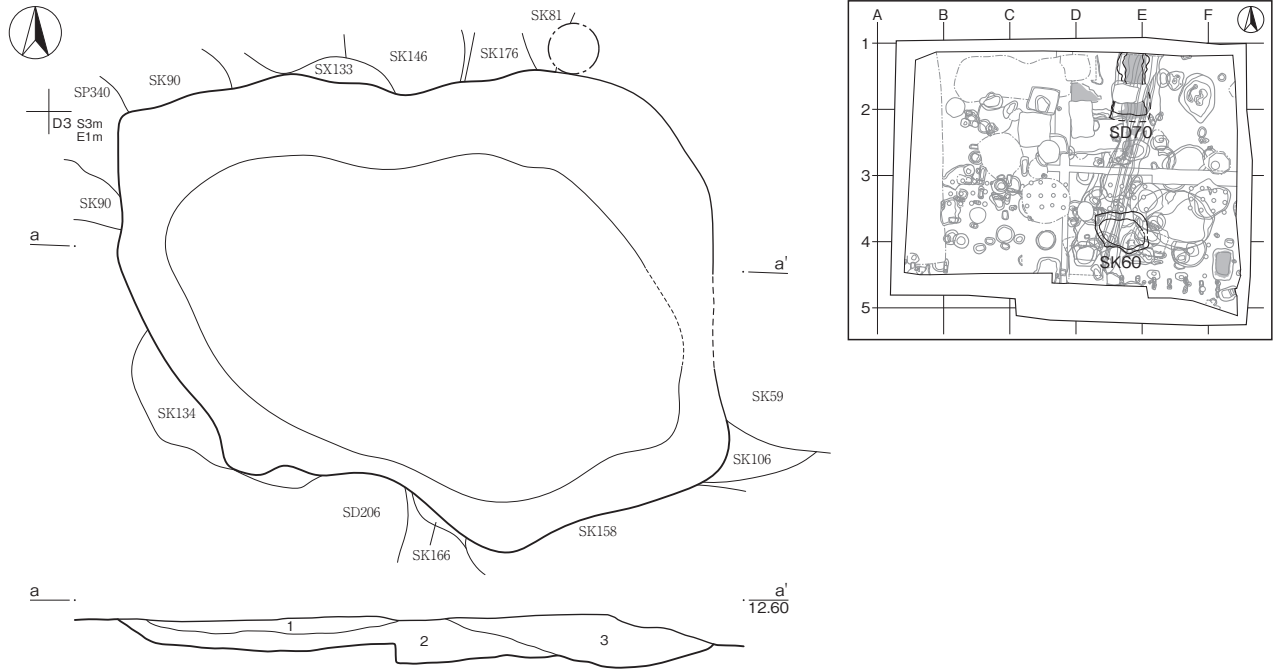
- 1 暗褐色土 しまりややあり、円礫・小円礫少含、ローム粒子微含
 2 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、円礫・小円礫多含、破碎瓦片含、貝・遺物少含

SK59

- 3 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、円礫・小円礫多含、破碎瓦片少含、2層よりやや明

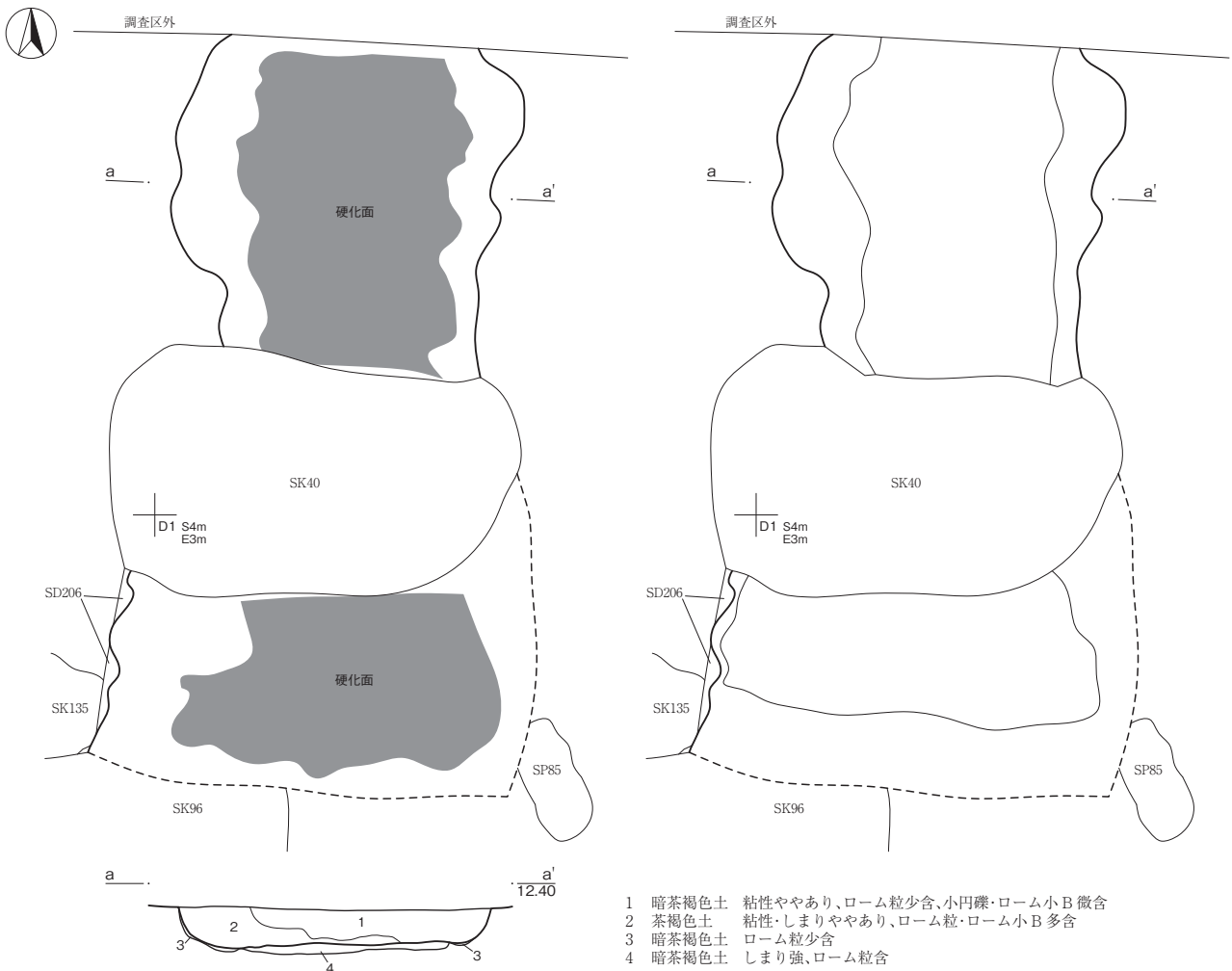


III-1図 SK44、SK46、SK55、SK59(B面)



- 1 暗茶褐色土 粘性ややあり、炭化物・瓦片・小円礫少含
- 2 暗褐色土 粘性・しまりややあり、瓦片多含、小円礫含、炭化物・ローム粒・貝少含
- 3 暗褐色土 粘性・しまりややあり、瓦片含、ローム粒・小円礫少含、炭化物・貝微含

SK60

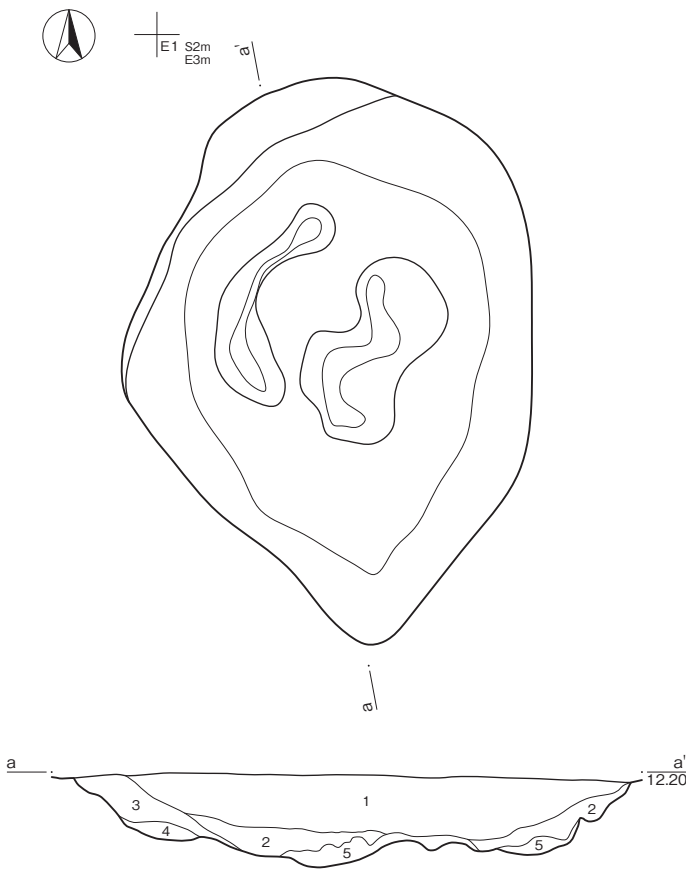


- 1 暗茶褐色土 粘性ややあり、ローム粒少含、小円礫・ローム小B微含
- 2 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・ローム小B多含
- 3 暗茶褐色土 ローム粒少含
- 4 暗茶褐色土 しまり強、ローム粒含

SD70

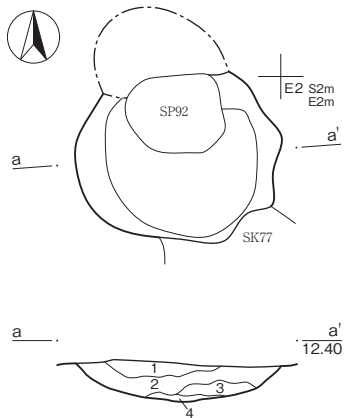
Ⅲ-2図 SK60、SD70(B面)

II 看護職員等宿舎5号棟地点



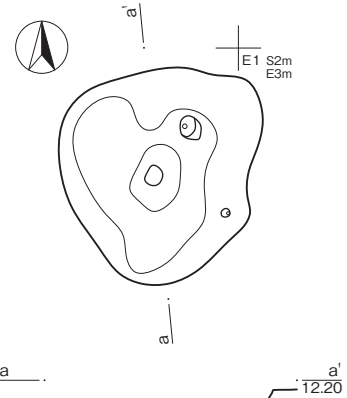
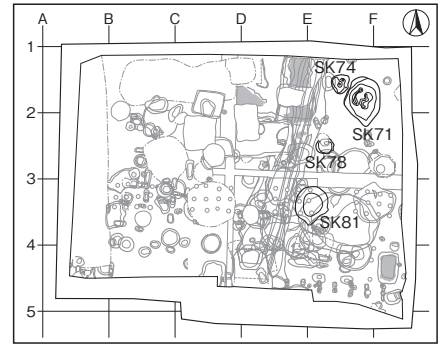
- 1 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・B・小円礫少含
- 2 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・B含
- 3 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・B少含、2層より明
- 4 暗褐色土 しまりややあり、ローム粒微含
- 5 黄褐色土 粘性・しまりややあり、ほぼロームで構成される

SK71



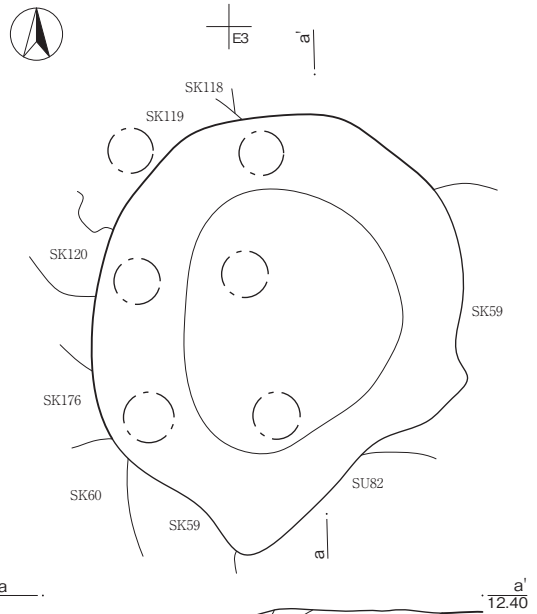
- 1 暗褐色土 粘性ややあり、ローム粒少含、焼土粒・炭化物微含
- 2 褐色土 粘性ややあり、ローム粒多含、ロームB少含
- 3 茶褐色土 ローム粒少含、焼土粒微含
- 4 黄褐色土 ほぼロームで構成される

SK77



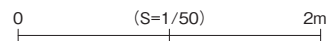
- 1 暗褐色土 しまりややあり、ローム粒・炭化物・小円礫微含
- 2 褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・B多含

SK74

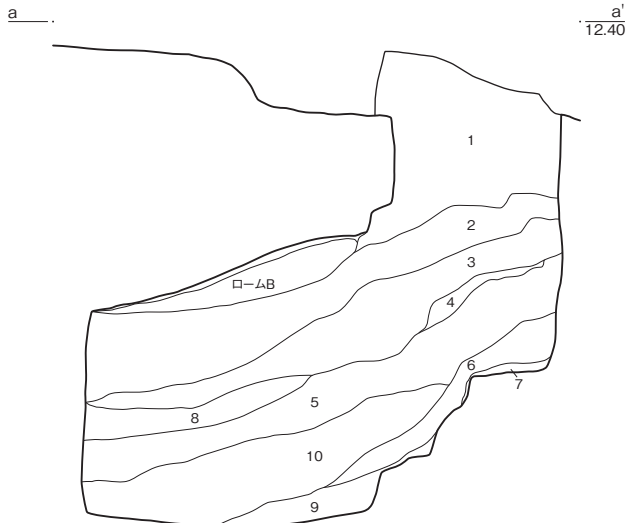
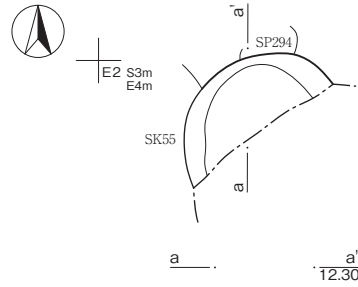
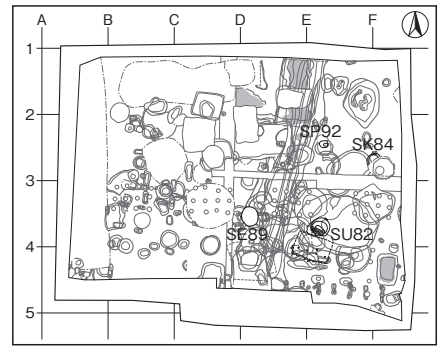
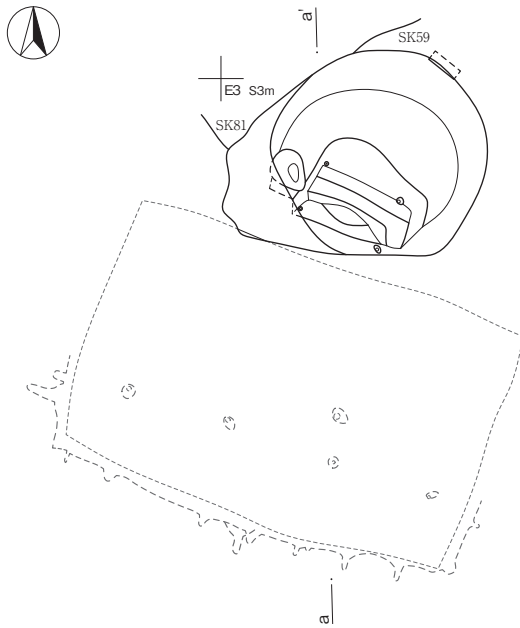


- 1 暗褐色土 粘性やや弱、しまりややあり、ローム粒・小円礫少含、瓦片・焼土粒微含
- 2 暗灰褐色土 粘性・しまりややあり、円礫・小円礫・ローム粒少量含
- 3 暗褐色土 粘性・しまりややあり、瓦片・円礫・小円礫含、ローム粒少含
- 4 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、瓦片・円礫・小円礫・ローム粒含、焼土粒少含
- 5 茶褐色土 しまりややあり、ほぼロームで構成される

SK81

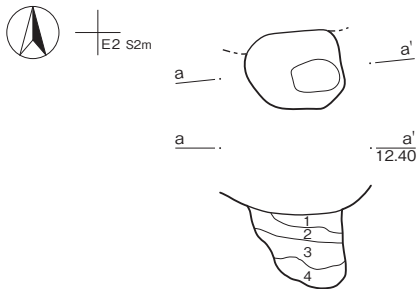


III-3図 SK71、SK74、SK78、SK81 (B面)



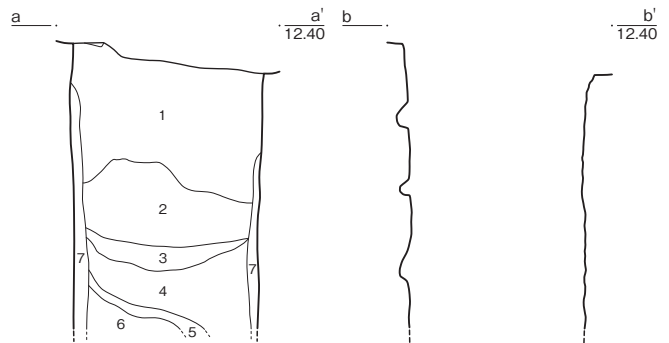
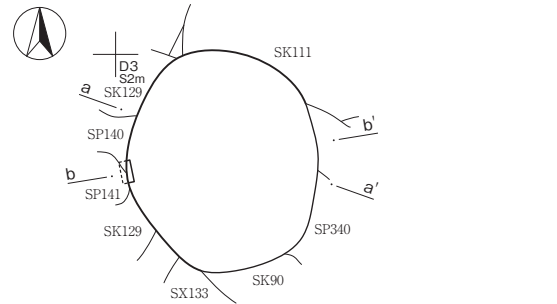
- 1 暗褐色土 しまりややあり、瓦片・小円礫含、ローム粒・B・炭化物微含
- 2 暗褐色土 粘性やや強、しまりややあり、小円礫少含、貝片微含
- 3 褐色土 しまりややあり、ローム粒・B・小円礫含
- 4 黄褐色土 しまりややあり、ほぼロームで構成される
- 5 明褐色土 しまりややあり、ローム粒・ロームB多含、小円礫中含
- 6 褐色土 しまりややあり、ローム粒・ロームB極多含、貝片・焼土微含
- 7 黄褐色土 しまりややあり、ほぼロームで構成される
- 8 暗茶褐色土 粘性強、しまりややあり、ローム粒・小B微含
- 9 褐色土 しまりややあり、ローム粒・B多含
- 10 茶褐色土 しまりややあり、ローム粒・B含、炭化物・小円礫少含

SU82



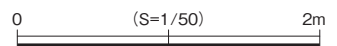
- 1 褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・B含
- 2 茶褐色土 粘性・しまりやや弱、ローム粒・B少含
- 3 褐色土 粘性・しまりやや弱、ローム粒・B含
- 4 褐色土 粘性・しまりやや弱、ローム粒・B極多含

SP92



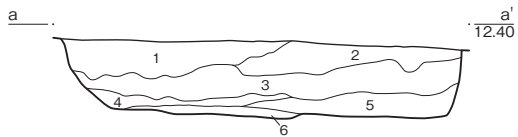
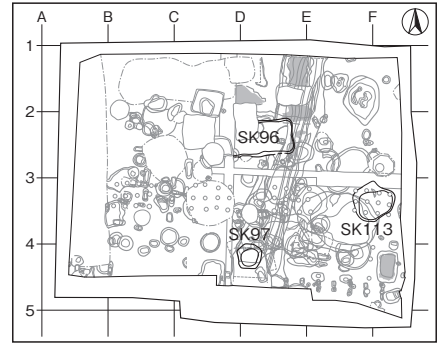
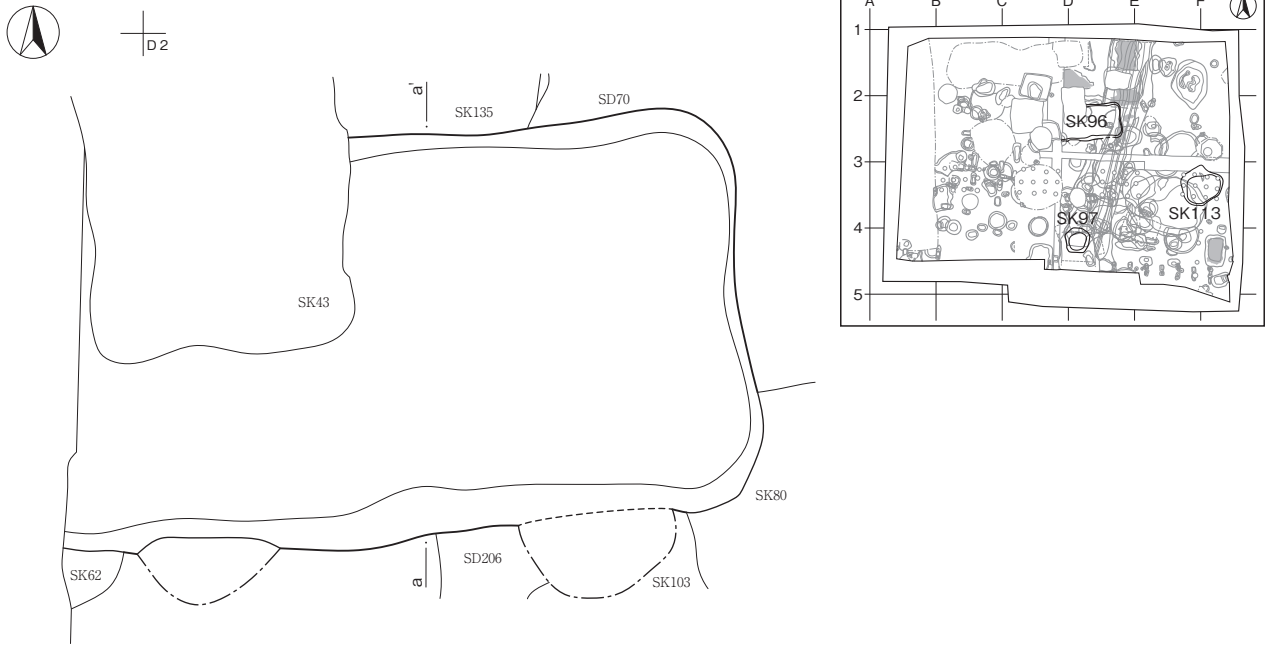
- 1 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・B・小円礫少含
- 2 茶褐色土 粘性ややあり、ローム粒・B多含、小円礫少含
- 3 暗褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒微含
- 4 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒多含、ロームB含、小円礫微含
- 5 炭化物層
- 6 茶褐色土 粘性ややあり、ローム粒・B含
- 7 茶褐色土 粘性弱、しまりなし、ローム粒・小円礫微含、井戸側の痕跡と思われる

SE89



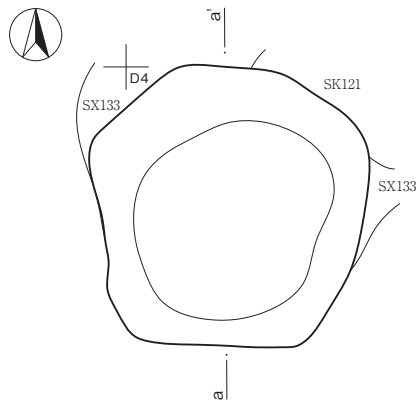
III-4 Ⅲ SU82、SK84、SE89、SP92(B面)

II 看護職員等宿舎5号棟地点



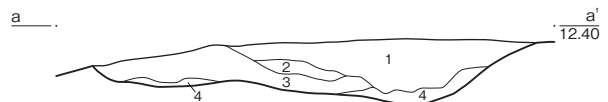
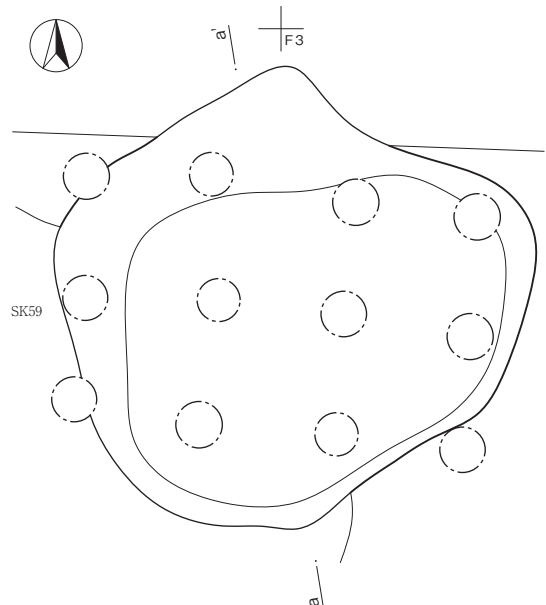
- 1 黒褐色土 粘性ややあり、しまりやや強、ローム粒・B少含
- 2 暗褐色土 ローム粒・B含
- 3 暗褐色土 ローム粒含、ロームB少含、小円礫・瓦片微含
- 4 暗褐色土 しまり強、ローム粒少含
- 5 黒褐色土 ローム粒・B少含
- 6 暗褐色土 しまり強、ローム粒微含

SK96



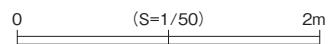
- 1 暗褐色土 粘性・しまりややあり、小円礫・破碎瓦・炭化物少含
- 2 暗茶褐色土 ローム粒少含

SK97

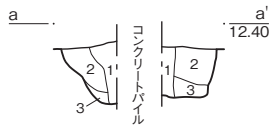
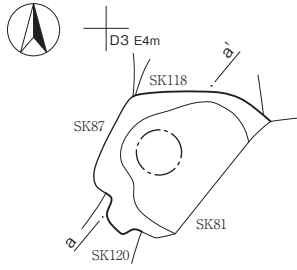


- 1 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含、小円礫微含
- 2 暗褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒微含
- 3 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含、小円礫微含
- 4 黒褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒微含

SK113

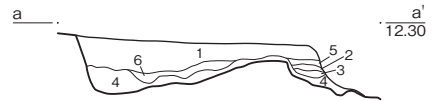
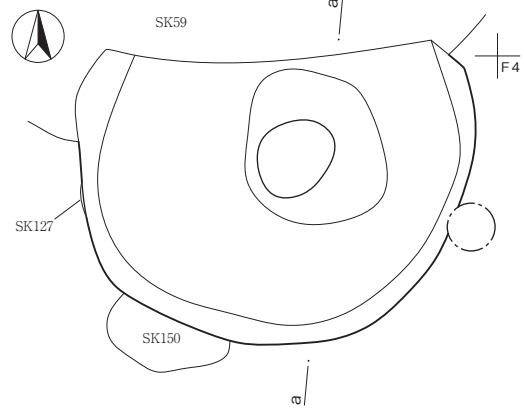
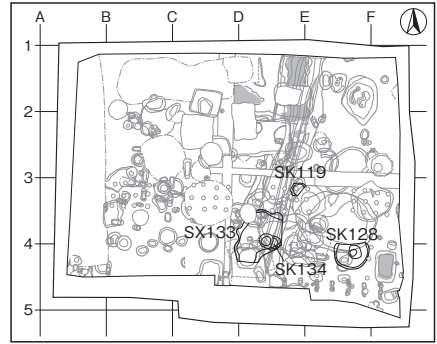


III-5図 SK96、SK97、SK113(B面)



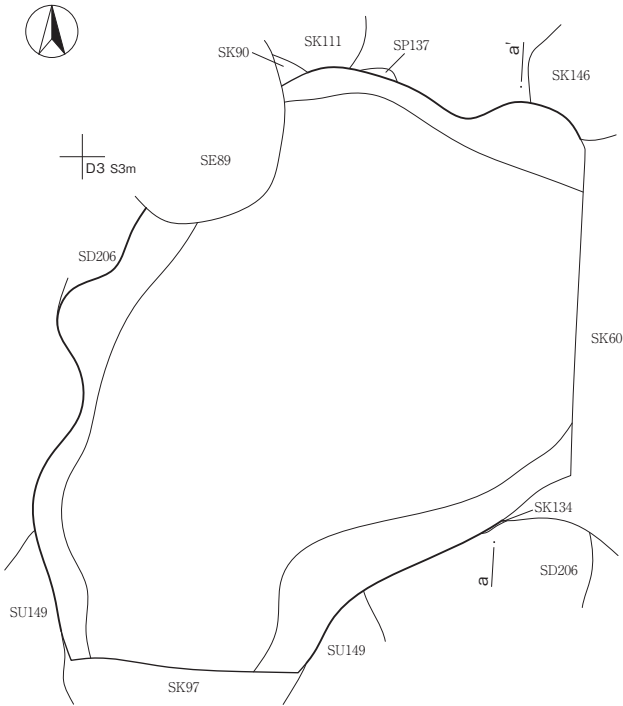
- 1 パイル打ち込みによる硬化
- 2 褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒極多含、ロームB少含
- 3 黄褐色土 ローム粒多含、ロームB含

SK119



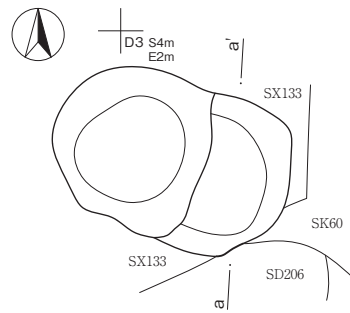
- 1 茶褐色土 しまりややあり、ローム粒多含、ロームB少含
- 2 黄褐色土 粘性・しまりやや弱い、ほぼロームで構成される
- 3 明茶褐色土 粘性・しまりやや弱い、ローム粒極多含
- 4 黄褐色土 粘性・しまりややあり、ロームで構成される
- 5 暗褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒子微含
- 6 褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒多含、ロームB含

SK128



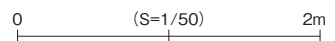
- 1 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒含、ロームB・小円礫微含
- 2 暗茶褐色土 粘性ややあり、ローム粒少含、ロームB・小円礫・焼土粒微含

SX133

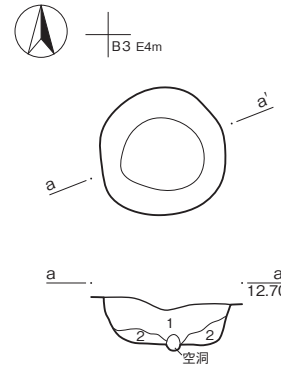
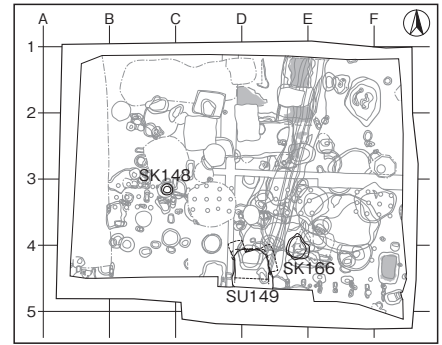
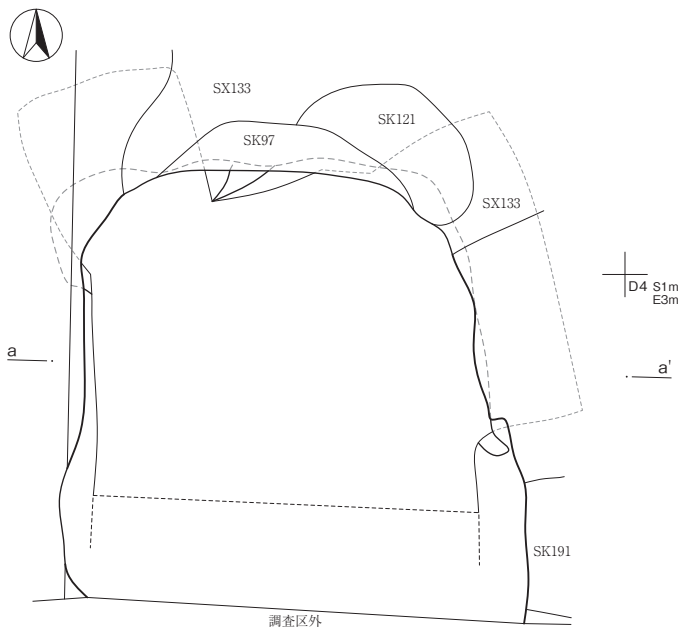


- 1 暗褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含
- 2 褐色土 粘性ややあり、ローム粒多含、ローム小B微含

SK134

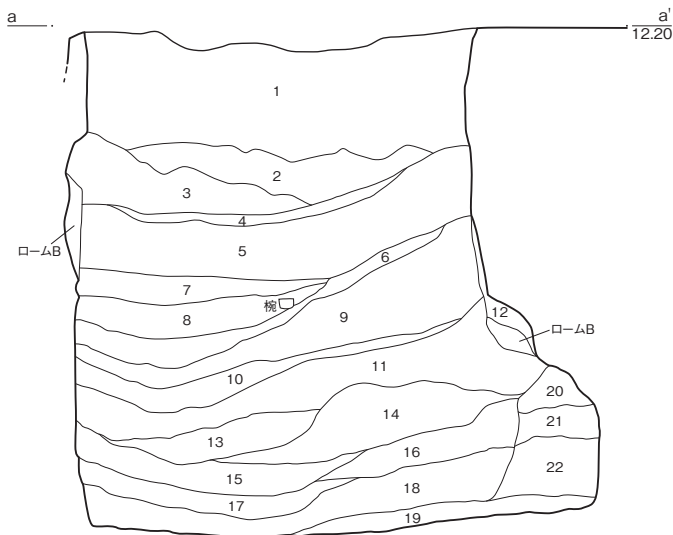


III-6図 SK119, SK128, SX133, SK134 (B面)



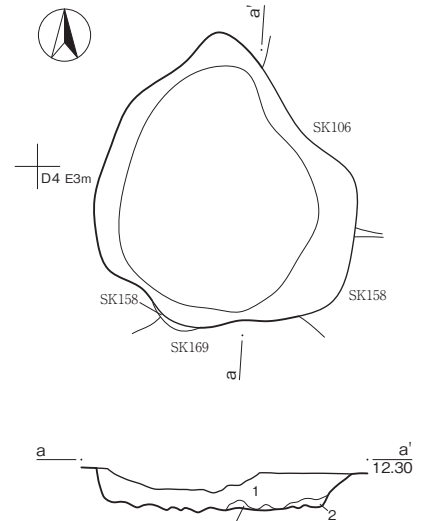
- 1 暗褐色土 粘性ややあり、ローム粒微含
- 2 暗褐色土 ローム粒多含

SK148



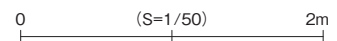
- 1 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・小円礫少含、瓦片微含
- 2 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒多含、ロームB少含、焼土粒微含
- 3 暗茶褐色土 しまりややあり、ローム粒・B・小円礫少含、炭化物微含
- 4 暗灰褐色土 しまりややあり、灰褐色粘土多含、小円礫・瓦片微含
- 5 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒極多含、ロームB・小円礫少含
- 6 暗褐色土 しまりややあり、ローム粒・B多含、灰褐色粘土少含
- 7 暗茶褐色土 ローム粒・焼土粒・小円礫少含
- 8 茶褐色土 しまりややあり、ローム粒多含、ロームB含、灰褐色粘土・焼土粒少含
- 9 黄褐色土 しまりややあり、ロームで構成される、炭化物微含
- 10 暗茶褐色土 しまりややあり、ローム粒多含、焼土粒・炭化物・灰褐色粘土粒少含
- 11 黄褐色土 しまりややあり、ロームで構成される
- 12 暗茶褐色土 粘性やや弱、しまりなし、ローム粒少含
- 13 褐色土 粘性やや強、しまりややあり、ローム粒多含、灰褐色粘土多含、炭化物・焼土粒・小円礫含
- 14 暗黄褐色土 粘性やや強、しまりややあり、ほぼロームで構成される、灰褐色粘土・炭化物・小円礫少含
- 15 茶褐色土 粘性やや強、しまりややあり、ローム粒極多含、灰褐色粘土含、炭化物・小円礫少含
- 16 灰褐色土 粘性やや強、しまりややあり、灰褐色粘土極多含、炭化物・円礫・ローム粒少含
- 17 褐色土 しまりややあり、ローム粒極多含、ロームB少含
- 18 灰褐色土 粘性強、しまりややあり、灰褐色粘土極多含、炭化物多含
- 19 灰褐色土 粘性強、しまりややあり、ほぼ灰褐色粘土で構成される、ローム粒・炭化物少含
- 20 茶褐色土 粘性強、しまりややあり、ローム粒多含、ロームB・炭化物微含
- 21 褐色土 粘性強、しまり強、ローム粒・B多含、炭化物微含
- 22 茶褐色土 粘性やや強、しまりややあり、ローム粒・B多含、小円礫微含

SU149

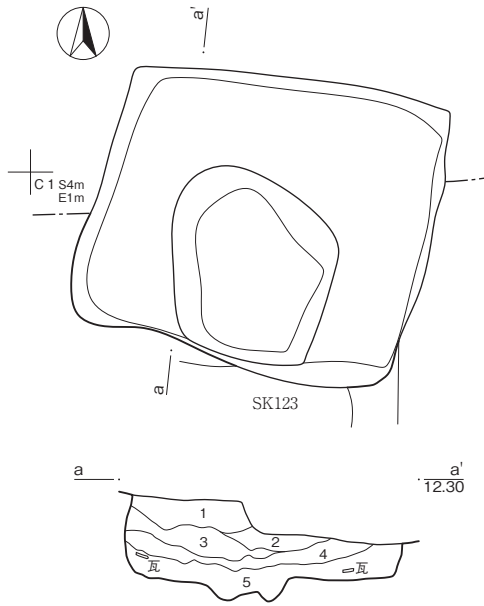


- 1 褐色土 しまりやや弱、ローム粒極多含、ロームB・小円礫少含
- 2 黄褐色土 しまりややあり、ロームで構成される

SK166

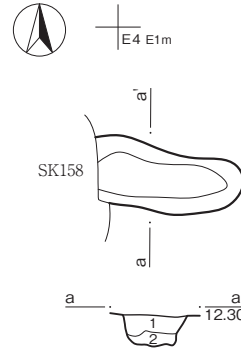
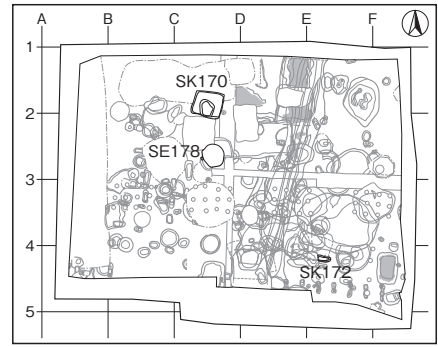


III-7図 SK148、SU149、SK166(B面)



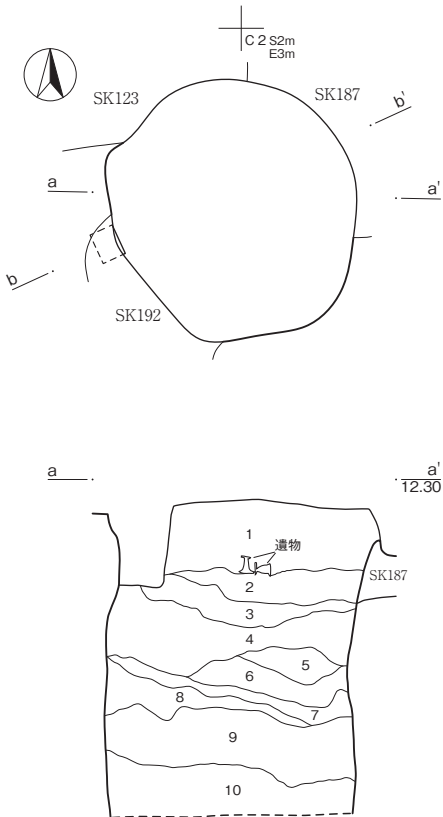
- 1 暗褐色土 粘性ややあり、ローム粒・小円礫少含、瓦片・ローム B 微含
- 2 黄褐色土 粘性ややあり、ほぼロームで構成される
- 3 暗褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒多含、ローム B 含
- 4 黄褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・B 極多含
- 5 暗褐色土 ローム粒・小円礫少含

SK170



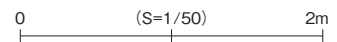
- 1 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含、ローム小 B 微含
- 2 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒含

SK172



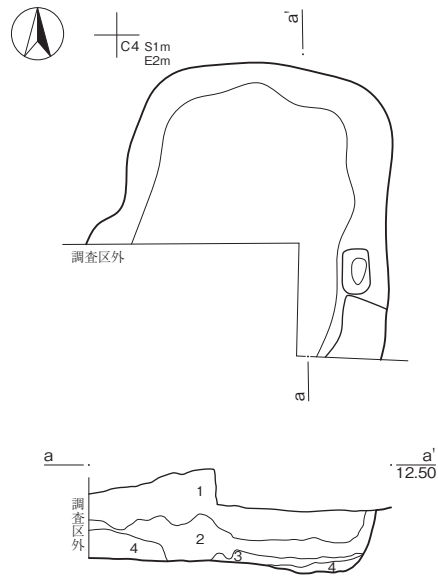
- 1 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒含、ローム B・小円礫少含
- 2 暗褐色土 しまりややあり、ローム粒・B 含、小円礫・炭化物少含
- 3 褐色土 ローム粒含、ローム B 多含、小円礫微含
- 4 暗茶褐色土 しまりややあり、ローム粒含、ローム B 少含
- 5 褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒多含、ローム B 少含
- 6 暗茶褐色土 しまりややあり、ローム粒含、ローム B 少含
- 7 茶褐色土 しまりややあり、ローム粒含、ローム B 少含、小円礫微含
- 8 暗茶褐色土 しまりややあり、ローム粒少含、ローム B・小円礫微含
- 9 茶褐色土 粘性ややあり、ローム粒含、ローム B・小円礫少含、炭化物微含
- 10 茶褐色土 しまりややあり、ローム粒含、ローム B 少含

SE178



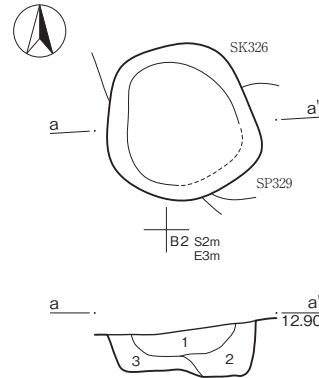
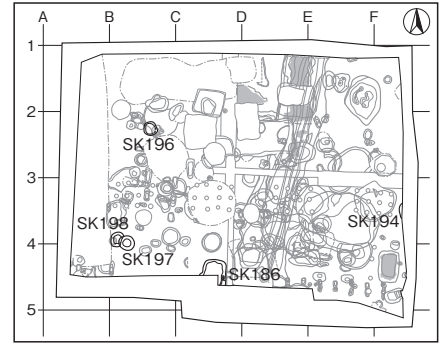
III-8図 SK170、SK172、SE178(B面)

II 看護職員等宿舎5号棟地点



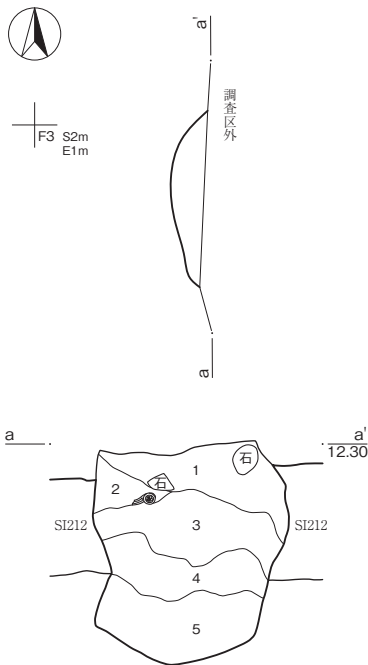
- 1 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含、ローム小B・炭化物・小円礫微含
- 2 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒含、ローム小B少含
- 3 暗茶褐色土 粘性やや強、ローム粒少含
- 4 褐色土 ローム粒・B含

SK186



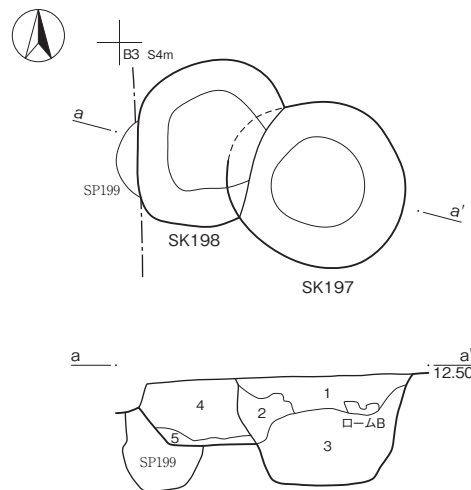
- 1 暗褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒微含
- 2 褐色土 しまりややあり、ローム粒多含、ロームB少含
- 3 暗茶褐色土 しまりややあり、ローム粒・小円礫微含

SK196



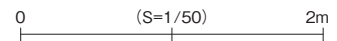
- 1 茶褐色土 粘性弱、しまりやや弱、円礫・小円礫含、ローム粒少含、炭化物微含
- 2 暗茶褐色土 粘性・しまりやや弱、円礫・小円礫含、ローム粒少含
- 3 暗茶褐色土 粘性やや弱、しまりややあり、小円礫・ローム粒少含
- 4 暗褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒微含
- 5 暗茶褐色土 粘性やや弱、しまりややあり、ローム粒微含

SK194



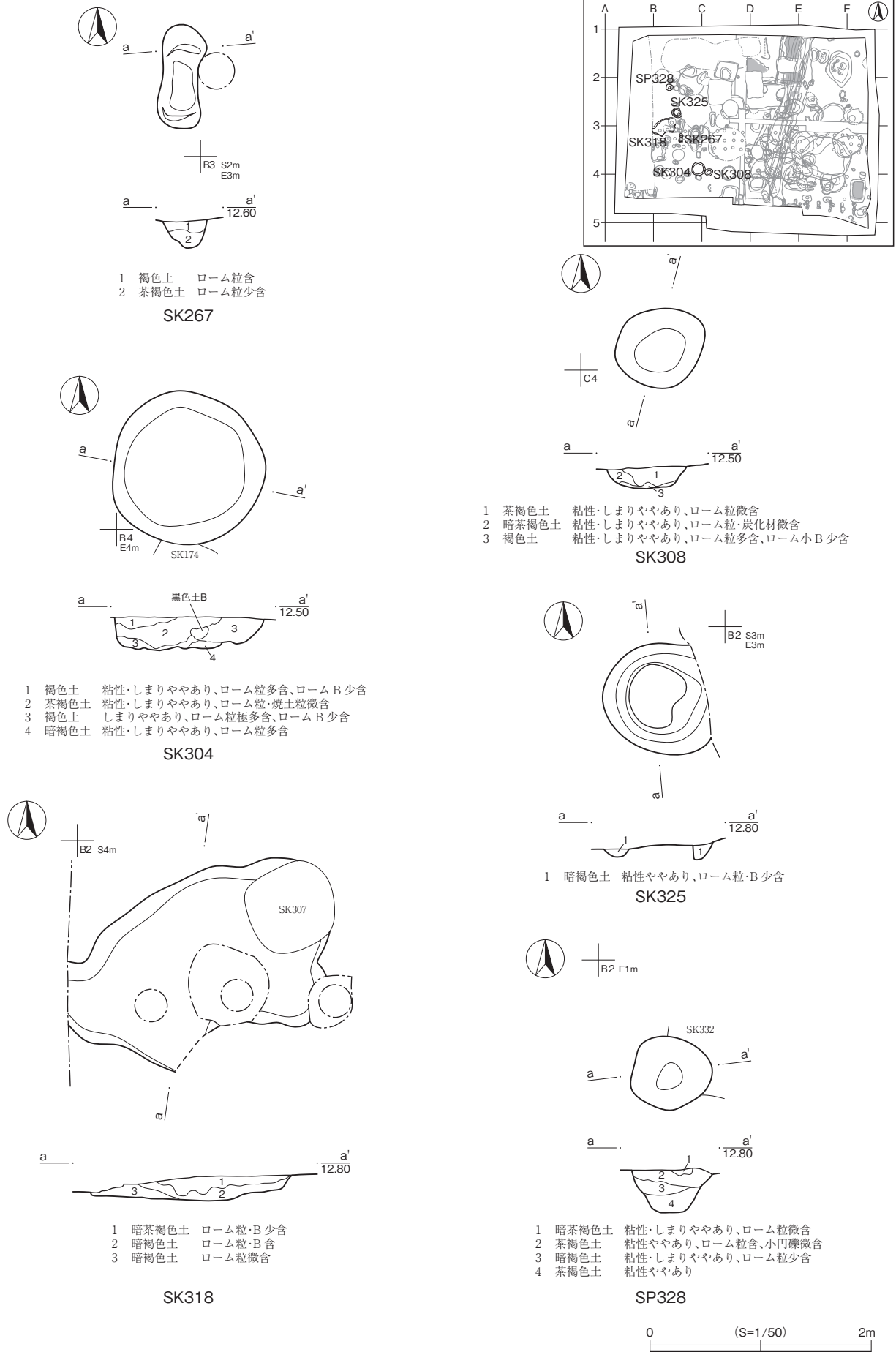
- SK197
 - 1 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含、ローム小B・小円礫微含
 - 2 褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・B多含
 - 3 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含
- SK198
 - 4 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒含、ロームB少含、炭化物・小円礫微含
 - 5 褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒多含、ロームB含

SK197, SK198

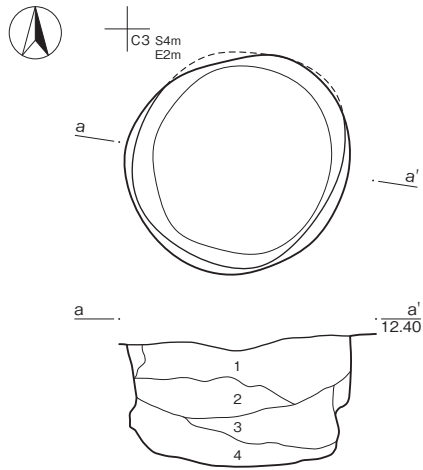


III-9図 SK186, SK194, SK196, SK197, SK198 (B面)

II 看護職員等宿舎5号棟地点

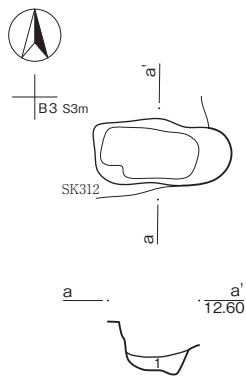


III-11図 SK267、SK304、SK308、SK318、SK325、SP328(B面)



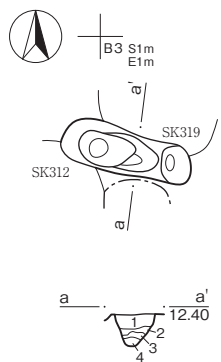
- 1 暗茶褐色土 粘性ややあり、ローム粒・小円礫・焼土粒少含
- 2 暗褐色土 粘性・しまりややあり、小円礫含、ローム粒少含
- 3 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、小円礫・ローム粒微含
- 4 暗褐色土 しまりややあり、ローム粒・小円礫少含

SK334



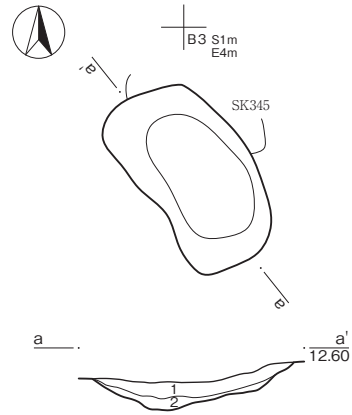
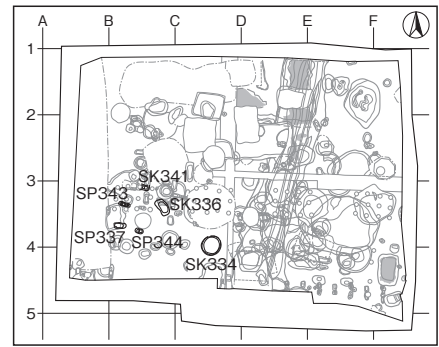
- 1 黒褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・ローム小B多含

SP337



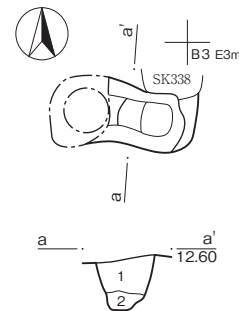
- 1 黒褐色土 粘性強、しまりやや強、ローム小粒(1~2mm)を多含
- 2 暗褐色土 粘性・しまりやや強、ローム粒(5~mm)を多含
- 3 暗褐色土 粘性強、しまりやや強、ロームを含まない
- 4 黄色土 粘性強、しまりやや弱、ローム主体、一部暗褐色土が混じる

SP343



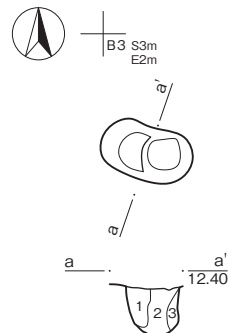
- 1 暗褐色土 粘性ややあり、しまり弱、φ5mm ローム B 少含
- 2 黒褐色土 粘性なし、しまり弱、ローム粒少含

SK336



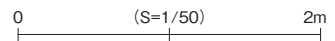
- 1 暗褐色土 粘性ややあり、しまり強、ローム粒・小B多含
- 2 黄褐色土 しまり強、ほぼロームで構成される

SK341



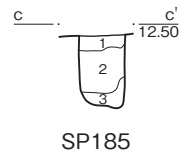
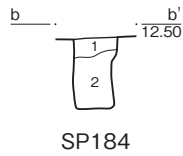
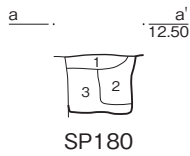
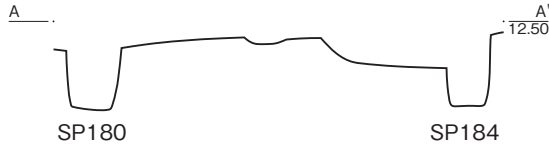
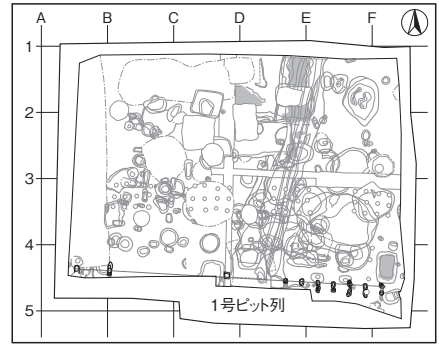
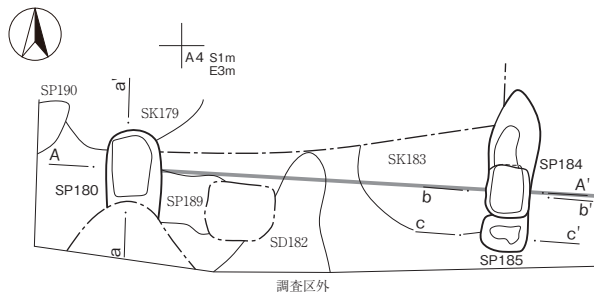
- 1 黒褐色土 粘性強、しまりやや弱、ローム粒(約1mm)を微含
- 2 明茶褐色土 粘性やや強、しまり弱、ローム粒(1~2mm)が全体に混じる
- 3 暗黒褐色土 粘性強、しまり弱、ローム粒極微含

SP344



III-12図 SK334、SK336、SP337、SK341、SP343、SP344(B面)

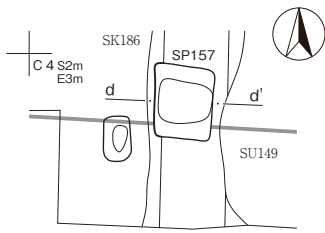
II 看護職員等宿舍5号棟地点



- 1 褐色土 しまりややあり、ローム粒多含
- 2 暗褐色土 しまりややあり、ローム粒・小円礫微含
- 3 褐色土 しまりややあり、1層より明、ローム粒多含、小円礫微含

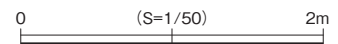
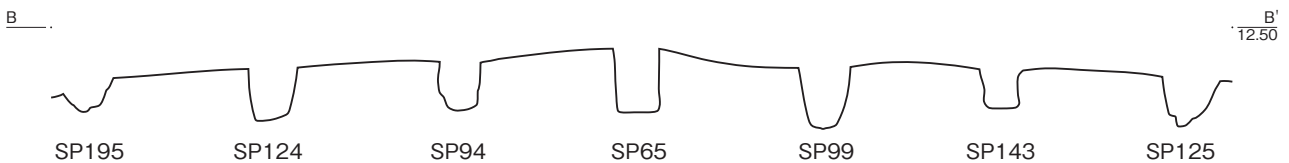
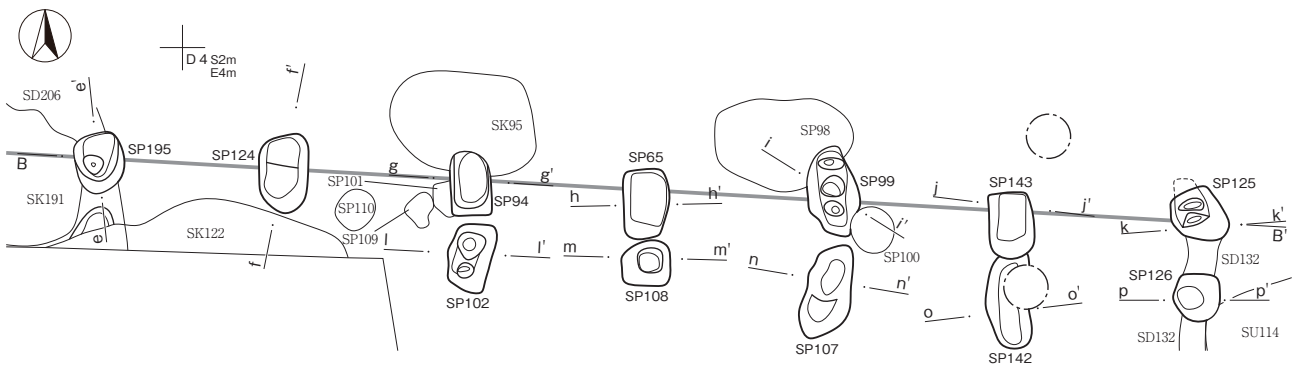
- 1 褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒多含、ロームB少含
- 2 暗褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・小円礫微含

- 1 褐色土 しまりややあり、ローム粒少含
- 2 暗褐色土 しまりややあり、ローム粒・小円礫微含
- 3 茶褐色土 しまりややあり、ローム粒含



SP157

- 1 褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒多含、ロームB・焼土粒少含



III-13図 1号ピット列(1)(B面)

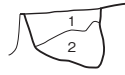
e. e'
12.50



SP195

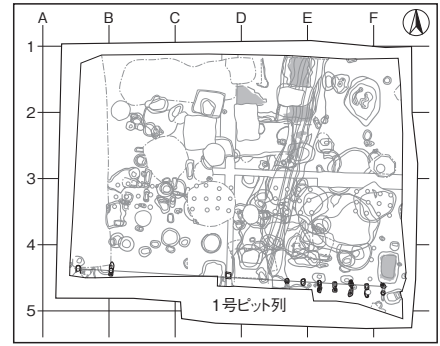
- 1 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含
- 2 黄褐色土 しまりややあり、ロームで構成される

f. f'
12.50



SP124

- 1 茶褐色土 粘性ややあり、ローム粒・B少含
- 2 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含、焼土粒微含



g. g'
12.50



SP94

- 1 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・B含

h. h'
12.50



SP65

- 1 褐色土 しまりやや強、ほぼロームで構成される
- 2 茶褐色土 ローム粒・B少含

i. i'
12.50



SP99

- 1 暗茶褐色土 粘性ややあり、ローム粒・小円礫少含

j. j'
12.50



SP143

- 1 暗褐色土 ローム粒少含

k. k'
12.50



SP125

- 1 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含
- 2 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒極多含

l. l'
12.50



SP102

- 1 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・小円礫微含
- 2 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含

m. m'
12.50



SP108

- 1 暗褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含

n. n'
12.50



SP107

- 1 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含

o. o'
12.50



SP142

- 1 暗茶褐色土 ローム粒少含
- 2 茶褐色土 ローム粒多含

p. p'
12.50



SP126

- 1 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含

0 (S=1/50) 2m

III-14図 1号ピット列(2)(B面)

第IV章 歴史時代の遺物

看護職員等宿舎5号棟地点からは、コンテナ箱にして100箱の歴史時代の人工遺物（陶磁器・土器、瓦、金属製品、ガラス製品など）が出土した。全体の遺物量は、幕末（東大編年Ⅷd期）、近代前期に集中して確認され、他の時期の遺物は少ない。

本章の報告で使用している陶磁器・土器の分類基準は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)」(東京大学埋蔵文化財調査室1999)を基に作成した最新版(分類Ver.4)に準拠している(東京大学埋蔵文化財調査室2016)。人形・玩具の分類基準は、「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」(安芸・小林・堀内2012)に、瓦の分類基準は加藤氏の分類(加藤1992)に拠っている。

また本文中の東京大学構内遺跡の段階設定や年代などの記載は「東京大学構内の遺跡における年代的考察」(堀内1997)「東京大学構内遺跡編年修正について」(堀内2021)を基にし、遺構の年代は、遺物個々の出土年代を推定した「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(2)」(大成2011)を参考にしている。なお、上記分類基準は江戸時代の出土遺物を主に対象としている。近代以降の製品については基準を設定しておらず、また分類が困難な製品も多く存在することから判別可能な製品についてのみ表記を行った。

SX13 (遺構Ⅱ-4図、遺物Ⅳ-1図)

1は石製品で、石灯籠の竿石と考えられる。全体は角柱状であるが、上面は平らに整えられ、上部は隅丸方形、中央部は台形を呈し、下部は不整形である。中央は砲弾形の凹みが設けられる。下部が不整形であることから、これは台座を持たない、いわゆる織部灯籠の竿石である。織部灯籠は、茶道史では露地の灯りとして重用され、古田織部の好みとされる(斎藤1986)。また織部灯籠について、背景に切支丹信仰を想定して「切支丹灯籠」という呼称もある(松田1988)。松田によると、切支丹灯籠の年紀で最古のものは慶長20年(1615)銘である。SX13の竿石の上部には文字の刻みや、中央部に人物像等が認められず、松田の分類では「無刻時代型」に分類されるが、竿石全体・各部の形状が松田の分類とは異なる。従って切支丹信仰との関連は何えないものの、織部灯籠の名の通り、特別な趣向によって設けられた灯籠と言えるだろう。

SK19 (遺構Ⅱ-1図、遺物Ⅳ-1～4図)

1、6は肥前系、2～4は瀬戸・美濃系の磁器である。1は染付の鉢で腰がやや張り、JB-5-bに分類される。口縁は輪花に成形される。高台内には山に「三」と釘書される。2は白磁皿で、いわゆる木型打込の皿で、JC-2-dに分類される。見込みには「寿」字の陰刻が施され、表面の釉薬を削った痕跡が認められる。3は染付急須でJC-16に分類される。漉穴は5つ、底面には左回転渦巻が認められる。4は染付合子でJC-18に分類される。型作りで、器形は菱形を呈し、側面には雷文様が描かれる。6は肥前系の瓶でJB-10に分類される。側面に屋号と思われる刻書が確認できる。

5、7～14は陶器である。5は京都・信楽系の灰釉皿で、TD-2-bに分類される。7～8は瀬戸・美濃系の灰釉徳利である。7は二合半でTC-10-aに分類され、側面には「中」や山に「門」カの釘書が施される。8は五合徳利でTC-10-dに分類される。9は産地不明の急須で、TZ-16に分類される。体部は五角形を呈する。体部、底部を板状の粘土を組み合わせ、受け部、注口、把手を貼り合わせて成形している。口唇から胴部にかけて白と黒のまだらな泥を塗り、上から透明釉を施す。黒色の下絵を描き、白色の盛り絵具を施す文様が2側面に認められる。漉穴は7つである。10は堺系の播鉢でTL-29に分類される。見込みの播目は、9条1単位で、播目は摩耗している。11は産地不明の軟質施釉陶器鍋で、TZ-33-bに分類される。外面は鉄釉、内面は透明釉を施す。12は京都・信楽系の脚を有する灰釉の油受け皿でTC-40-aに分類される。完形である。13は産地不明の行平鍋でTZ-42-cに分類される。胴部外面にトビガンナを施し、口縁部を除く内面全体と、外面は把手と注口周辺にのみ鉄釉を掛ける。14は生産地不明の土瓶の蓋である。15～21は瓦である。15～17は棧瓦で、軒丸部には剣梅鉢文が施される。18～20は軒平瓦あるいは棧瓦の軒平部である。18～19は「江戸式」と「大坂式」の折衷形である(金子1996)。20は「江戸式」I Ljに相当する(加藤晃1989、同1992)。21は丸瓦である。

SK40 (遺構Ⅱ-1図、遺物Ⅳ-4～6図)

近代を中心とした遺物が見られ、統制番号の記された磁器も認められ、遺物群の年代の下限は戦中、戦後間もなくまで降ると考えられる。

1～22は磁器である。1～5は碗で、この内2、4～5は端反である。1は口縁にクロムで圏線を付し、胴

部外面に「好仁会」と記される。好仁会は大正11(1922)年に当時の東京帝国大学医学部教授3名の寄付金のもとに設立された財団法人である。2は染付で枝葉を描き、上絵付けで赤・金・緑でドングリ等の文様を描く。3の染付文様の内、胴部の花はゴム判を押したもの。高台内には丸に「カ」の陽刻と、統制番号「瀬422」が記され、瀬戸産である。4～5は染付で、どちらも口縁部が吹絵胴部外面または見込みに「好仁会」「KJK」のマークが付される。6は坏で、胴部外面に「好仁会」「KJK」のマーク、高台内にはゴム判で二重菱形枠内に「菊水」のマークが緑色の上絵で記される。7は猪口で、口縁部は無釉で口唇に赤色の顔料が塗布される。胴部外面には銀・赤色の上絵付けが施され、高台内には赤色の上絵で角枠に「硬質陶器」とゴム判で記される。8～12は皿である。8は青磁で、口縁部に雷文を陽刻し、呉須が施される。見込は陰刻で文様を施し、底面は露胎で同心円の陰刻を施し、統制番号「岐□□□」(判読不明)が刻印され、岐阜県産である。9は器面全体に貫入が入り、見込には黒色の絵の具で文様を描き、裏には橙色の釉を施している。10は内面に施釉前の布目状の圧痕が認められ、口縁を青く染め、見込に「好仁会」「KJK」のマークを描き、高台内には陰刻で二重楕円内に「光山」の刻印が押されている。11、12はクロムで内面に「好仁会」「KJK」のマーク、高台内には二重角枠内に「日陶」と記される。13～16は鉢である。13は器壁が垂直に近い低めの鉢で、11、12と同様に胴部外面に「好仁会」「KJK」のマーク、高台内には二重角枠内に「日陶」と記される。14～16は碗形で、蓋受けを有する鉢である。14は口縁部にクロムで2本の圏線を引き、胴部外面にも「K」字を含む文様を描かれる。欠損して全容は不明だが、10～13の「好仁会」「KJK」のマークに類似する。高台内には統制番号「岐122」が付される。これは岐阜県の西南部陶磁器工業組合に属する加藤三津治の登録番号である(土岐津町誌編纂委員会1997)。西南部陶磁器工業組合は当時の多治見市・土岐郡笠原町・市之倉村・鶴里村・可児郡小泉村・高山市の業者によって構成された組合である。

15は赤・金・緑の上絵で、胴部外面には「好」「仁」「会」と記される。16は口縁部に緑色の圏線が2本引かれ、高台内にはマークが記される。17は円筒形の、いわゆる衛生陶器で、豊付には目痕が11箇所認められ、胴部外面に西洋コバルトで「つばはき」と「醫學部附属醫院」と石版転写されている。18、19は陶器で、鉄釉を施し、18は小壺で、側面には山と帆船を型で陰刻し、口縁と豊付周辺以外は内外面共に鉄釉が施釉される。19は釉

調と胎土、径から、18の壺と考えられる。20、21はカップである。20は赤色の上絵が描かれ、高台裏に「愛知硬質磁器」「Aichi Seitoshu」と記される。21は口唇・胴部下端・把手に赤褐色の釉が掛け分けられ、底部にはクロムの上絵で「昭和硬質陶磁器」「SHOWA-TOUKI」の文字と、「STMK」のマークが記される。22は鉢の蓋である。下端付近に緑色の圏線を2本引き、14や16の蓋であろう。

23～29は陶器である。23は鉄釉鉢である。器形は低めの円筒形で、口唇部が露胎であるため、段重の可能性が考えられる。24は鉄釉鍋、25はその蓋である。24は馬蹄形の耳を2箇所貼り付けられている。25は完形で、1箇所穿孔されている。26は無釉の急須、27はその蓋である。26は胴部ロクロ成形で、把手下には刻印「とよ□□(判読不明)」が押される。27はほぼ完形で、その中心、つまみ部分は穿孔されている。28は体部が四角柱形の容器で、胴部に青色顔料で「P」のマークが描かれる。豊付以外の内外面に施釉される。パリピオクリーム瓶。29は素焼きで、上面に二重の三角形が陰刻される。蓋であろう。30はガラス製のスクリュウ栓を採用した容器で、体部は四角柱形で底は厚く、内面は丸味を帯びる。クリームの容器だろうか。

SK59 (遺構Ⅲ-1図、遺物Ⅳ-6～11図)

1～15は磁器であり、1～5、7～11は瀬戸・美濃系、6、12～15は肥前系で、9以外は染付である。1～5は碗であり、1～2は丸碗でJC-1-aに分類され、3～5は端反碗でJC-1-dに分類される。いずれも手描きの文様で、特に5は幅広の高台を有し、口鏽を施す。6は皿で、JB-2-eに分類される。裏文様は恐らく蝶が3箇所に配されるだろう。7～8は爛徳利でJC-4に分類され、7の口縁部は1箇所(実測図正面)が注ぎ口状に少し曲がる。焼き継ぎあり。8の花の文様部分は白泥で盛り上げている。9は瑠璃釉の香炉・火入でJC-9に分類され、恐らく3足が伴う。胴部内面と見込み、底面が露胎である。10～11は御神酒徳利でJC-11-bに分類される。11は完形である。12は丸形の蓋物で、JB-13-aに分類される。13は合子でJB-18に分類され、蓋受けを有する。14は散蓮華でJB-20に分類される。15は端反碗の蓋である。

16～40は陶器である。16、18、19は瀬戸・美濃系である。16はいわゆる拳骨茶碗でTC-1-pに分類される。17、18は皿である。17は京都・信楽系の灰釉油皿で見込にピン痕が3箇所、4条の櫛目が認められ、TD-2-aに分類される。欠けた口縁の断面にも煤が付着する。18は灰釉の輪皿でTC-2-mに分類される。19

は灰釉のいわゆる石皿で、TC-3-cに分類される。見込にトチ痕が5つ認められる。20は見込には鉄絵で馬が描かれた、大堀相馬の灰釉坏でTJ-6に分類される。21は京都・信楽系の端反の灰釉碗で、TD-1-gに分類される。貫入が全体的に見られる。22は瀬戸・美濃系の筒形の香炉・火入れでTC-9-gに分類される。外面には陰刻で圏線を引き、その間に雷文などの印を押し、緑釉を施す。口唇部のほぼ全周に敲打痕が確認される。23、24は瀬戸・美濃系の瓶で、どちらも完形品である。23は二合半の灰釉徳利でTC-10-cに分類され、底部には丸内に「平」字が墨書される。24は一升徳利でTC-10-eに分類される。25、26は京都・信楽系の筒形の合子でTD-18-bに分類される。25の見込にはピン痕が3つ認められる。26は25の蓋と考えられ、上面以外は露胎で、上面には目痕が2つ残存し、恐らく合計で3つあったものだろう。27は京都・信楽系の把手の付いた鉢でTD-5に分類される。胴部には菊が銕絵染付されている。28は京都・信楽系の植木鉢でTD-21に分類される。脚を有し、内面と体部底面は無釉で、外面には黄釉がかけられ、雲と竜の文様を掻き落としている。29は堺系の播鉢でTL-29に分類される。播目は8条1単位で、体部内面は放射状に、見込にクロス状の播目が施される。見込み周囲の摩耗が確認される。30と32は土瓶、31と33は蓋である。30、31は産地不明でTZ-34-cに分類される。鉄砲口で、漉穴は3つ、白土の上に鉄絵、緑釉と褐釉で文様を描く三彩である。32、33は瀬戸・美濃系でTC-34に分類される。32は鉄砲口で、漉穴は5つである。32の底部脇には「タチ」? 33の内面には、「駄知」の刻印が押される。34、35は京都・信楽系の灰釉油受け皿である。34は脚付でTD-40-aに分類され、ほぼ完形品である。35は脚の無いタイプでTD-40-bに分類される。36、37は生産地不明の行平鍋でTZ-42-cに分類される。胴部にはトビガンナを施し、底部には煤が付着する。38～40は蓋で、39、40は完形ある。38は飯能系の合子の蓋で、イッチンで紅葉文を描き、鉄釉を施す。39は常滑系の急須の蓋で、表面から裏面に向かって1箇所穿孔される。40は生産地不明の鉄釉土瓶の蓋である。

41～54は土器である。41は透明釉が施された皿で、DZ-2-hに分類される。42は上製の底部平滑、見込みに「寿」字の浮文を施した皿で、DZ-2-jに分類される。胎土には白色に光る粒子を若干含み、見込みと底部の表面は黒色を呈し、見込みの「寿」字の部分に金を塗付している。43は壺でDZ-15に分類される。ロクロ成形で、底部糸切り痕は左回転である。表面は滑らかで、指の

痕が残る。44は瓦質の植木鉢でDZ-21-bに分類される。ロクロ成形で、底部には焼成前穿孔が認められる。45は施釉され、脚を持たないひょうそくで、DZ-44-bに分類される。底部糸切り痕は左回転である。46は硬質瓦質の七輪で、DZ-48に分類される。口唇と側面が磨かれる。47はロクロ成形の筒形の塩壺で、DZ-51-wに分類される。刻印は認められず、内面にロクロ痕、底部には糸切り痕が見られる。48は塩壺の蓋で、DZ-00-gに分類される。刻印は認められない。

49～55は人形・玩具である。49～51は泥面子でDQ-4006に分類される。何れも型成形で無釉、片面に形で文様が施されている。それぞれ文様は、49は一部欠損しており不明、50は三つ星に一文字、51は雪持ち笹である。52は基石状製品でDQ-4004に分類される。手捻り成形、無釉で、彩色はされていない。53は皿でDQ-2002に分類される。型成形で、口唇は平坦、内面には離型剤が付着する。54は鉢で、DQ-2003に分類される。ロクロ成形で無釉、円筒形を呈し、底径より口径が少し広く、口縁部はやや鐙状になっている。

55～65は瓦である。55～60、62は軒棧瓦である。55～57は軒丸部のみ残存し、55、56の瓦当文様は剣梅鉢文、57は丁子梅鉢文である。58の瓦当文様は、軒丸部が剣梅鉢、軒平部は「江戸式」であり（加藤1989）、中心飾は欠損して不詳だが、唐草・子葉はそれぞれLiに相当する。59の軒丸部は圏線のない三つ巴文である。軒平部は「江戸式」で、中心飾は欠損して不詳であるが、唐草・子葉はそれぞれKiに相当する。60の軒丸部の瓦当文様は、連珠三つ巴文で、巴文と連珠の間に圏線が巡らない。軒平部の瓦当文様は3分の2程度残存し、加藤の「江戸式」ⅢKgに相当する。62は軒丸部が欠損した痕跡が認められる。軒平部の瓦当文様は加藤の「江戸式」ⅡKjに相当する。61・63は軒平瓦あるいは棧瓦の軒平部である。61は加藤の「江戸式」ⅣLjに相当する。63の中心飾りは加藤の「江戸式」Ⅳに類似するが、花卉が左右に1枚ずつ多いもので、唐草・子葉はKjに類似する。64は棧瓦である。実測図の右下には棧部切り込みが残存し、端部に、やまに「木」の刻印が押される。65は鬼瓦であり、頭部の下部のみが残存する。文様は梅鉢か。

66は石製品で、宝篋印塔の基部である。直方体を呈し、底面はドーム状に削られている。1側面に複数文字が彫られているが、判読できない。

SK60（遺構Ⅲ-2図、遺物Ⅳ-12図）

1～5は磁器で、1～3、5は瀬戸・美濃系、4は肥

前系で、いずれも染付である。1は端反碗で、JC-1-dに分類される。ほぼ完形品である。2は蛇ノ目凹形高台の皿で、JC-2-cに分類される。3は爛徳利で、JC-4に分類される。花の文様部分は白泥で盛り上げられている。4は肥前系の鉢でJB-5に分類される。口唇が露胎で、蓋を有すると考えられる。5は合子で、JC-18に分類される。

6、7は陶器である。6は京都・信楽系の灰釉油皿で、見込にピン痕3箇所と3条の櫛目が認められ、TD-2-aに分類される。口縁部に灯火痕が見られる。7は生産地不明の土瓶で、TZ-34に分類される。褐色の胎土に白土を施し、鉄絵に透明釉と緑釉を掛けている。黒色の上絵具で文様を描く。漉し穴は3つ、注口は鉄砲口である。

8～11は土器である。8は瓦質の植木鉢で、DZ-21-bに分類される。底部中央に、焼成前穿孔が認められる。9は油受け皿で、透明釉が施され、脚を有し、DZ-40-aに分類される。10は無釉のひょうそくで、DZ-44-cに分類される。小型だが灯芯立てには灯火痕が見られる。11はロクロ成形、無印で筒形の塩壺で、DZ-51-acである。12は人形・玩具で、手捻り成形の碁石形土製品であり、DQ-4004_Hに分類される。

13、14は瓦である。13は軒丸瓦で、瓦当文様は劍梅鉢文である。14は軒棧瓦で、軒丸部の瓦当文様は劍梅鉢文、軒平部は左側のみ残存するが「江戸式」で（加藤1989）、唐草・子葉はそれぞれJ1に相当する。穿孔が1箇所確認できる。

15は砥石である。四角柱状を呈し、側面の内、実測図の左面は、ノコギリ痕すなわち切断痕が認められ、3面は研磨のために平滑である。上端はノミ痕すなわち調整痕が認められ、下端は欠損している。

SK81（遺構Ⅲ-3図、遺物Ⅳ-13図）

1は瓦である。軒棧瓦の軒平部が残存し、「江戸式」II Ljに相当する（加藤1989）。

SU82（遺構Ⅲ-4図、遺物Ⅳ-13図）

1～4は陶器である。1は京都・信楽系の油皿で、TD-2-bに分類される。2・3、4は土瓶である。2・3は、鉄釉の上から、うのふ釉が掛けられた生産地不明の土瓶で、TZ-34kに分類される。ほぼ完形で、漉し穴は4つ、内面には褐釉と黒釉が施される。3は2の蓋で、内面は無釉で、露胎部は黄色みを帯びた白色を呈する。4は糸目を有する生産地不明の土瓶でTZ-34-dに分類される。内外面に褐釉を施し、外面には藁灰釉を掛ける。漉し穴は3つ、底部は露胎で煤が付着する。5は軒丸瓦で、瓦当文様は劍梅鉢文である。

SK97（遺構Ⅲ-5図、遺物Ⅳ-13図）

1は京都・信楽系の灰釉の皿で、TD-2-bに分類される。口縁部外面に灯火痕が認められる。2は瀬戸・美濃系灰釉二合半徳利で、TC-10-cに分類される。3は砥石である。形状は四角柱で、断面はやや菱形を呈する。全ての面が研磨によって平滑になり、1側面だけ2条の溝が確認される。

SK123（遺構Ⅱ-2図、遺物Ⅳ-13～14図）

1～4は磁器である。1は染付の碗である。器形は直口丸形を呈し、外面には緑色の顔料を吹き付け、内面には染付で山水画を描き、口銹を施す。2は染付の鉢である。腰がやや張り、口縁は外反し、側面は型によって放射状に凹凸を持たせ、内面文様は凹凸に合わせて区切られる。高台内に角枠の「吉」字銘を記す。3は染付の坏である。完形であり、腰がほぼ直角に折れ、高台の周囲にも青海波が描かれる。高台内には「内□周製」銘が記される。4は染付の土瓶で、体部は丸形、注口はS字状を呈す。内外面に施釉され、底部と蓋受のみ無釉である。口縁に2条の圈線を引き、体部には水裂文を一周描き、その中に桜の花と蕾を交互に描く。漉し穴は10ある。5は完形の陶器瓶である。体部は円筒形で、上部に小さな注口を持ち、頸は短い。外面に鉄釉を施し、底部無釉で、底部際に楕円二重枠の刻印が押されるが、「TOKYO」以外の文字は判読が難しい。インク瓶と考えられ、大貫の分類ではタイプBに相当する（大貫2009）。

6～9はガラス製の瓶である。6は無色透明のガラス瓶で、体部が楕円柱状で、側面に文字、底部にマークが陽刻されている。側面には「レートフード」「LAITFOOD」と陽刻され、底部には菱形枠のマークが陽刻される。化粧水瓶と推測される（桜井2019）。7はやや黒っぽいガラス瓶で、体部が四角柱状で、底部にトンボと植物の文様が陽刻される。8はやや緑色を帯びたガラスで、体部が円柱形で、肩部に「KINSEN」の陽刻が3箇所に施され、底部際には「LTD., KINSEN INRYO CO.」の陽刻が一周に認められる。「INRYO」の表記から、飲料の瓶と推測される。9は僅かに青みを帯びたガラスで、やや体部が円柱形だが、頸が長く、肩がなだらかな器形をしている。側面2箇所と底部1箇所に陽刻が施される。側面は「愛光舎」と「全乳一合入」、底部は「一」である。陽刻された文字から牛乳の瓶と推測される。

SE147（遺構Ⅱ-3図、遺物Ⅳ-14図）

1は磁器碗である。器形は丸形直口でやや浅めである。畳付は釉剥ぎされ、体部外面と口縁部内側に、銅版転写で文様が施される。2は無色透明のガラス瓶である。体部円筒形で、頸部は短い器形を呈す。底部に「M」字が陽刻される。インク瓶と考えられる（桜井 2019）。

SU149（遺構Ⅲ-7図、遺物Ⅳ-14～19図）

1～15、17は肥前系の染付、16は白磁である。1～5は碗である。また高台内の銘は、一部欠損しているが1、2、6、8、9は高台内に二重角枠内に渦福、3、4、7、10は崩れた「大明年製」を記すと考えられる。1は高台断面がシャープなU字状でJB-1-e、2は文様がやや粗雑でJB-1-gに分類される。3は梅樹文が描かれ、JB-1-vに分類される。4は小振りの碗で、JB-1-uに分類される。5は釉の透明度が低い粗製の碗で、JB-1-gに分類される。6～13は皿である。6は腰が張り、文様は口縁部内外の七宝、見込みの梅等は輪廓線を引いて内部を呉須で埋めるという丁寧な作りの皿で、JB-2-dに分類される。7、8は高台断面がシャープなU字状を呈し、JB-2-eに分類される。7の見込みには五弁花のややつぶれたコンニャク印判、口銹を施す。高台内にハリ支え痕が1箇所認められる。8は器高が低く、口縁は輪花に成形されている。見込みの五弁花と周囲の蛸唐草、裏文様の唐草共に輪廓線を引いて丁寧に描いている。9は深めの皿で、JB-2-fに分類される。口縁が端反り、呉須の発色は暗めだが、殆どの文様は輪廓線を引いて丁寧に描き、特に体部内面の風景はダミは、呉須の濃淡を使い分けて描いている。高台内にハリ支え痕が1箇所認められる。10、11はJB-2-gに分類され、見込みにはコンニャク印判でつぶれた五弁花を施す。裏文様の省略された唐草も1本線で描かれる。12、13は見込み蛇ノ目剥ぎで、12は高台径が大きくJB-2-m、13は高台径が小さくJB-2-lに分類される。12は焼成はやや悪い。見込みにコンニャク印判でつぶれた五弁花を施し、内側面、裏面に手描きの圏線や文様を描く。13は高台周辺が露胎で、ラフな文様が内面に2箇所描かれている。14は鉢で、JB-5-bに分類される。器形は丸形直口で、文様は見込みに手描きの五弁花、二重圏線、外面には松・竹・梅・菊等の丸文を配し、高台内に二重角枠内渦福を記す。15は丸形の坏で、JB-6-aに分類される。見込みに若干降り物が認められる。16は仏飯器で、脚部のえぐりが浅く、JB-8-cに分類される。17は蓋物の蓋である。

18～39は陶器である。18～21は瀬戸・美濃系の碗である。18は灰釉碗で、TC-1-cに分類される。19は完形の腰鍔碗で、TC-1-uに分類される。畳付に灰色

の砂が付着し、焼成時に付着したものか。20は灰釉に呉須でラフな文様が描かれる、いわゆる御室碗で、TC-1-dに分類される。21は体部外面に横位に沈線を施し、腰部には凹凸を持たせて、内面と口縁には灰釉、その他の外面には褐釉を施し、畳付は露胎とする。更に外面下半には白釉を散らし、畳付には刻印を押す。TC-1-qに分類される。22は瀬戸・美濃系の摺絵皿で、TC-2-eに分類される。見込みに鉄で施文し、高台周辺は露胎である。23は志戸呂系の皿で、TF-2に分類される。底部に糸切り痕、口縁に灯火痕が認められる。24は京都・信楽系の鉢で、TD-5に分類される。口縁は波状を呈し、透かし彫りが複数認められる。見込みに内面に赤色の粉末が付着する。25は瀬戸・美濃系の褐釉を掛け、半菊状のしのぎを施した香炉・火入れで、TC-9-dに分類される。足は粘土を貼り付けてから摘まんでおり、恐らく三足である。内面と底部は露胎で、口唇には敲打痕が認められる。26～28は瀬戸・美濃系の徳利である。26は灰釉の二合半徳利で底部の釉が拭き取られており、TC-10-aに分類される。完形で、内部から油のような臭いがする。底部には溶着した陶片が認められる。そして頸部には金属の紐が巻き付けられている。この金属紐は、徳利の頸を4周ほど回り、2本取りで紐同士を絡ませており、その端は途中で折れている。この徳利を掛けるため、あるいは提げるために巻き付けられたものか。27はほぼ完形の五合徳利で、TC-10-dに分類される。褐釉を施すが、高台際と底部は釉を拭き取っている。高台内には円状の窯道具痕が認められる。28は壺で、TC-15に分類される。褐釉を施し、内面と外面の高台際から底部は無釉である。29は備前系の油壺で、TE-12に分類される。胴部はソロバン玉状を呈す。30は瀬戸・美濃系の鉢で、TC-5に分類される。器形は腰がわずかに張り、口縁がすこしすぼまる。褐釉を内外面に施すが、やや白みを帯びる。底部は無釉である。31は丹波系の甕で、TK-15に分類される。胴部には糸目が認められ、内外面に施釉される。32～34は片口鉢である。32、33は肥前系であり、32は深めの器形でTB-23-a、33は浅めの器形で見込みに蛇ノ目剥ぎが認められTB-23-bに分類される。どちらも内外面に、白泥による刷毛目が認められ、底部は無釉である。34は瀬戸・美濃系の鉄釉鉢で、TC-5に分類される。高台際から器壁が立ち上がり始める器形で、内外面に施釉し、底部は無釉である。使用により、見込み表面の凹凸がなくなり、ドーナツ状に胎土が露出している。播るのに用いたと考えられる。35は瀬戸・美濃系の水注である。円筒形の器形で灰釉に雷文が摺り絵され、TC-27-cに分類される。36は瀬戸・

美濃系の播鉢で、TC-29に分類される。外面の釉は不均一で、播目は18条1単位、見込みと底部に目積みの痕跡が認められる。37は志戸呂の油受け皿で、TF-40に分類される。受けの開口部はアーチ状を呈す。38は完形の瀬戸・美濃系の脚付ひょうそくで、TC-44-aに分類される。内面と体部外面に黒釉を施し、底部には糸切り痕、底部中央には穿孔が認められる。39は肥前系の壺あるいは蓋物の蓋である。外面に褐色の絵の具で文様を描き、透明釉と緑釉を塗り分け、内面には褐釉が施される。

40～54は土器で、40～44は皿で、いずれもロクロ成形である。41は内外面が調整された、磨きかわらけで底部が平滑であり、DZ-2-dに分類される。器厚は薄く、口縁部に灯火痕が見られる。40は外面を削り、内面も調整されるものの、胎土が赤みを帯び、黒色と白色の粒子を含み、41と比べて器厚が厚く、DZ-2に分類される。口縁の全体に灯火痕が認められる。42、43は、いわゆる江戸式のかわらけで、DZ-2-bに分類される。どちらも底部糸切り痕は左回転である。43の内面と底部に墨書が認められ、底部には「大」と記される。44、45はDZ-2に分類される。44は器厚が厚く、胎土に褐色の粒子を含む。底部糸切り痕は左回転である。45は底径が約12cmの皿の底部で、底部に糸切り痕が認められる。46は土師質の丸火鉢で、DZ-31-aに分類される。輪積み成形で、足は底面に3箇所貼り付けられる。口唇と口縁内側に煤が付着する。47は無釉の脚を持たない油受け皿で、DZ-40-dに分類される。完形で、受け部はU字状に切り取られる。底部糸切り痕は左回転である。48は瓦灯の身で、DZ-45に分類される。ほぼ完形で、底部は平坦、受け部には舌状の突起を有する。受け部はやや内傾する。49は瓦灯の蓋で、胴部に平行するスリットが等間隔に4本認められる。肩部にも複数穿孔される。内面には指頭圧痕が見られる。頂部の皿部に灯火痕が認められる。なお48の口径より49の径が大きいため、両者はセットではない。50はいわゆる風口である。板作りで5つのパーツから成り立ち、内面には煤が付着する。51は板作りの塩壺で「泉川麻玉」の刻印が押され、DZ-51-mに分類される。胎土には金雲母の粒子が含まれ、胴部は板作り、底部の粘土栓の2パーツから成り立つ。胴部内面には離型材の布目が残りに、口縁と底部の径が異なるため、離型材には複数の重複が見られる。底部立ち上がり付近が不整形なのは、内型の頂部に、折り重なった離型材によって生じたと考えられる。52はドーム状を呈する無印の塩壺の蓋で、DZ-00-aに分類される。胎土に金雲母の粒子を含む。上面と肩は調整され、上面中

央部がやや凹む。内面には離型材の布目痕が認められる。径は51とほぼ同じである。53、54は人形・玩具である。53は瓶で、DQ-2005に分類される。ロクロ成形で透明釉が施される。54は蓋で、DQ-2013に分類される。型作りで、無釉、摘まみを中心に、花卉状の陽刻が施される。

55～57は石製品であり、55は温石、56、57は硯である。55は板状の直方体を呈し、1箇所穿孔される。各面共に平滑だが、実測図左側面に数条の擦痕が認められる。56、57は高嶋硯である。硯堂から硯池にかけて墨を磨った痕が認められる。

SD206（遺構Ⅲ-10図、遺物Ⅳ-20図）

1～2は瀬戸・美濃系の陶器である。1は灰釉皿である。口縁部にのみ施釉される、いわゆる緑釉皿で、見込みには釉が少し散っている。2は銹釉の鍋・釜類である。内外面に褐色のザラツとした釉を施す。1と2はどちらも古瀬戸後期第三～IV期で、大窯以前の製品である（瀬戸市文化振興財団2015）。

A層（遺物Ⅳ-20図）

1～4は陶器である。1は大堀・相馬系の筒形碗で、TJ-1に分類される。外面下半には器壁にヘラで刷毛目を横位に一周施し、刷毛目周辺の3箇所に貝形等の粘土貼付を行う。畳付には刻印が押され、左側が欠けているが「相馬」であろう。内面と外面畳半には灰釉、外面下半と高台内には褐釉を施すが、畳付は露胎、見込に金で馬を描く。2は肥前系の水注で、TB-27に分類される。ロクロ成形後に、底部は削って調整され、中心が僅かに凹む。注口は貼り付けであろう。鉄釉は肩以上に厚めに掛けられ、底部と脇は露胎である。3は生産地不明の土瓶で、TZ-34に分類される。ロクロ成形、胎土は黄白色を呈す。鉄炮口で、漉し穴は3つある。内面には褐釉を薄く掛け、その上に外面に掛けた鉄釉が僅かに垂れている。外面は鉄釉を施した後、耳や把手の無い範囲に大きく2箇所に褐釉を掛け、底部と周辺は露胎、口唇は釉を拭いている。鉄釉と褐釉の混ざった部分は青白くにじんで見える。底部には煤が付着する。4は3の蓋である。外面は3と同様、鉄釉を全体に施した後、褐釉を2箇所に掛ける。内面は露胎である。

5は土器である。ロクロ成形で筒形を呈する塩壺で、刻印は認められず、DZ-51-wに分類される。底部糸切りは左回転である。

遺構間接合（遺物Ⅳ-20～24図）

1～8は磁器で、5の白磁以外、全て染付である。生

産地は、1、2が瀬戸・美濃系、3が景德鎮窯系、4～8は肥前系である。1はSK19とSU82の出土資料が接合したものである。高台から直線的に開く薄手の碗で、JC-1-fに分類される。2はSK59、SK60とA層の出土資料が接合した皿である。蛇ノ目凹形高台で、JC-2-aに分類される。口鏤が施され、見込みには木型打込によって松竹梅文と圏線を陰刻し、呉須を塗っている。3はSU149とB層の出土資料が接合しているものである。糸切細工の貼付高台の変形皿で、JA-1-2に分類される。型押成形によって口縁は輪花、畳付は無釉、見込みに人物・風景を描く。一部器面がややざらつくが、被熱の影響と考えられる。いわゆる古染付である。4はSK19、SK60、SK97、SK82の出土資料が接合したものである。ロクロ成形後型打で六角形にした皿で、JB-2-cに分類される。高台内に「乾」字銘が記される。焼継ぎされ、高台内に赤色で「と」と記される。

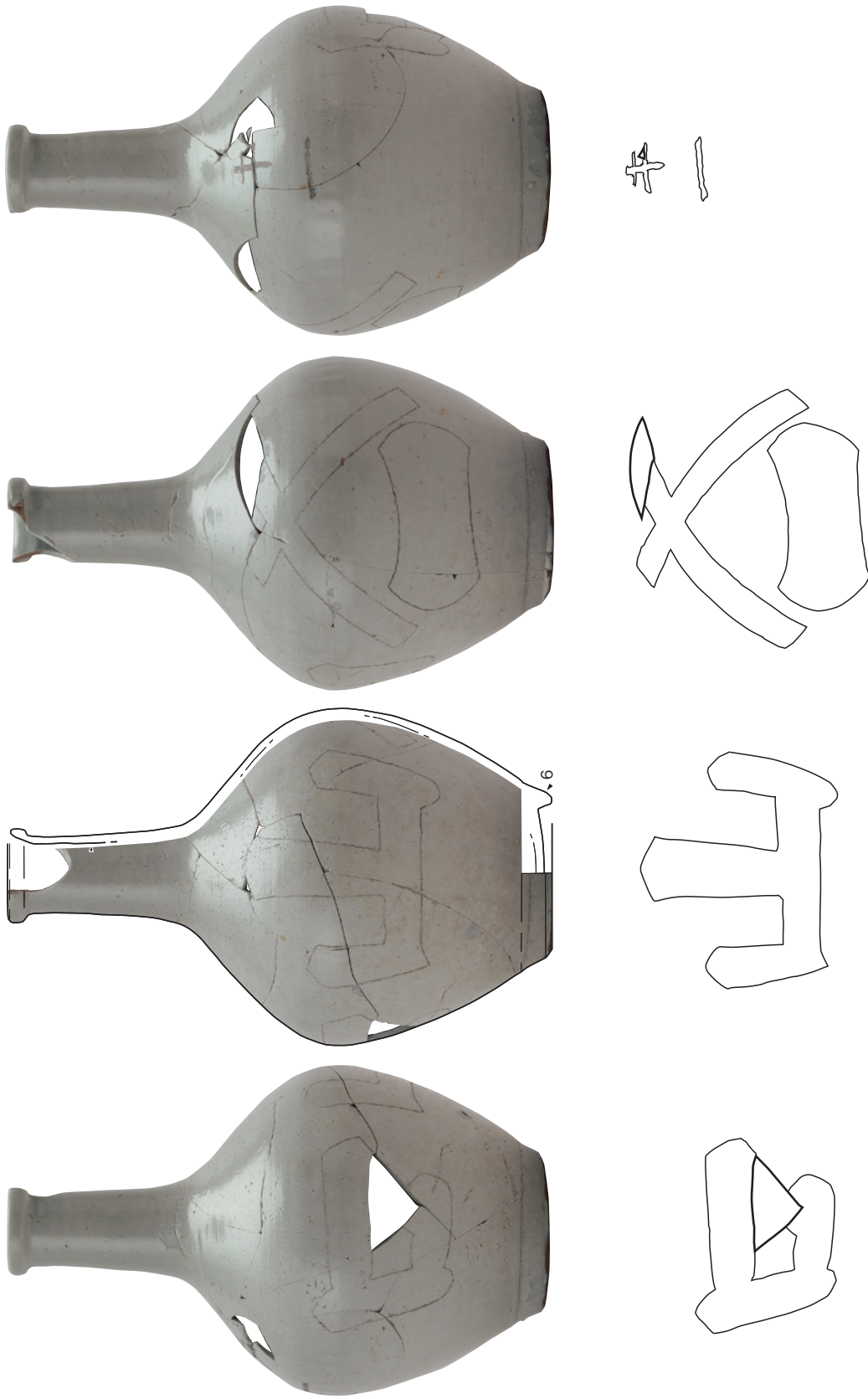
5はSK60とSK82が接合した資料である。JB-5-fに分類される。ロクロ成形の後型打によって成形されている。口縁は花卉状に成形され、口鏤が施される。6はSK19、SK59、SK60、SU82の出土資料が接合したものである。蛇ノ目凹形高台の鉢で、JB-5-dに分類される。見込みや高台にわずかに釉飛びが認められる。焼継ぎあり。高台内に角枠内「乾」字銘が記され、露胎部分に墨書3文字が認められ、「附」の他は判読不明である。7、8はA層とSK60の出土遺物である。7は鉢でJB-5に分類され、8はその蓋である。ロクロ成形で、7は口縁が大きく開き、高台も台形で、底部でくびれる器形を呈す。外面には欧州人風の人物と風景を描き、その上下は雷文によって区画される。

9～22は陶器である。9はSU149と遺構外の出土資料が接合した。瀬戸・美濃系の碗で、内面から口縁部に灰釉、体部には鉄釉を掛け分け、長石釉を散らしており、TC-1-acに分類される。体部に凹みあり、畳付に刻印が押される。10はSK59とB層の出土資料が接合したものである。生産地不明の皿で、TZ-2に分類される。やや粗めの褐色の胎土に黒色と白色の粒子を含む。ロクロ成形で、口縁は波状を呈し、底部を浅く削って碁笥底状になっている。青灰色の釉薬を内面と口縁部にのみ掛け、外面の体部以下、底部は露胎である。口縁部の釉が薄くなった部分や外面の釉際は褐色を呈す。施釉された箇所には釉トビや小さな気泡が散見される。器面に見える黒色斑点は、胎土に含まれる鉄分である。11はSK19とSK59の出土資料が接合したものである。瀬戸・美濃系の皿で、幅広の高台を有し、黒色と青灰色の絵の具で羽子板と羽を描く、いわゆる石皿で、TC-2-fに分類される。

見込みにはトチ痕が6箇所認められる。12はSU149と遺構外出土の資料が接合したものである。肥前系の平鉢で、内面に刷毛目文様を描き、見込みを蛇ノ目釉剥される。TB-2-aに分類される。釉剥ぎ部分には赤褐色に塗られ、目痕が4箇所認められる。13はSK59、SK60、A層、遺構外の出土資料が接合したものである。肥前系の鉢で、TB-5に分類される。ロクロ成形で、口縁が内弯する器形である。淡い青緑色の釉を施し、底部は露胎である。露胎部の胎土は褐色、黒色の小さい斑点が認められる。14はSK59、SK60、A層、遺構外の出土資料が接合した。京都・信楽系の爛徳利で、TD-4に分類される。底部際が面取りされ、底部は露胎である。褐色の絵の具で文様を描き、白泥を塗り、再び濃い褐色の絵の具で描き、一部に緑釉を掛け、その他は透明釉を施す。15はSU149と遺構外の出土資料が接合したものである。志戸呂系の瓶でTF-10に分類される。内外面は褐色で白色粒子と小石が僅かに認められ、断面は灰色を呈す。ロクロ成形で、底部中央が凹み、底部際が面取りされる。頸部には厚めに鉄釉が施され、肩から胴部にも一部鉄釉が化粧掛けされる。側面2箇所と底部に墨書が認められる。側面は「伊…庄…(欠損)」、その反対側に「(欠損)…けのはた茅町」と記され、池之端茅町だろうか。底部は中心に、丸にマークが記され、その周囲に「いせや庄……(兵カ、欠損)」と記される。16はSK19、SK59、A層の出土遺物が接合したものである。肥前系の瓶で、TB-10に分類される。ロクロ成形で、外面には透明釉を施し、内面と畳付は露胎である。釉下に黒みがかかった呉須で圏線や植物を描くが、一部青みを帯びて見える。側面に釘書が施される。違い山形に「上」と「太」で、どちらも記号・文字の輪郭を線刻している。17、18は瀬戸・美濃系の壺・甕である。17はSK59、SK60、SU82、B層の出土資料が接合したものである。壺でTC-15に分類される。ロクロ成形、内面は鉄釉、外面は緑釉が施され、底部露胎である。被熱によって外面の釉薬は白みを帯び、細かいヒビが入っている。18はSU149と遺構外の出土資料が接合した。高台のないベタ底の甕で、TC-15-eに分類される。ロクロ成形、寸胴の器形で、高台際を面取りし、口縁部に耳を2箇所に貼り付ける。内外面に褐釉を施し、口唇の釉を拭き取り、底部は露胎である。19、20は瀬戸・美濃系の糸目土瓶でTC-34に分類される。19はSK59、SK60とA層、20はSK59とSK60の出土資料がそれぞれ接合した。19はロクロ成形で、鉄炮口、漉し穴は5つである。内外面に鉄釉を施し、口唇と底部は無釉である。底部には煤が付着する。19は20の蓋で、外面に鉄釉を施し、内面は露胎である。19の底部と20

の内面には、角枠内に「ダチ」と山に「力」の刻印が押され、駄知で生産されたと考えられる。21はSK19と遺構外の出土資料が接合したものである。生産地不明の鉄釉土瓶でTZ-34eに分類される。ロクロ成形、鉄炮口、漉し穴は3つである。外面に鉄釉、内面下半に褐釉を施し、口縁部と底部は露胎である。底部には煤が付着する。22はSK59、SK60、A層の出土資料が接合したものである。生産地不明の蒸し器で、TZ-53に分類される。ロクロ成形、胎土は灰色で細かい白色粒子を僅かに含む。底部は中心ほど薄くなり、焼成前穿孔が複数認められる。内外面に鉄釉を施す。

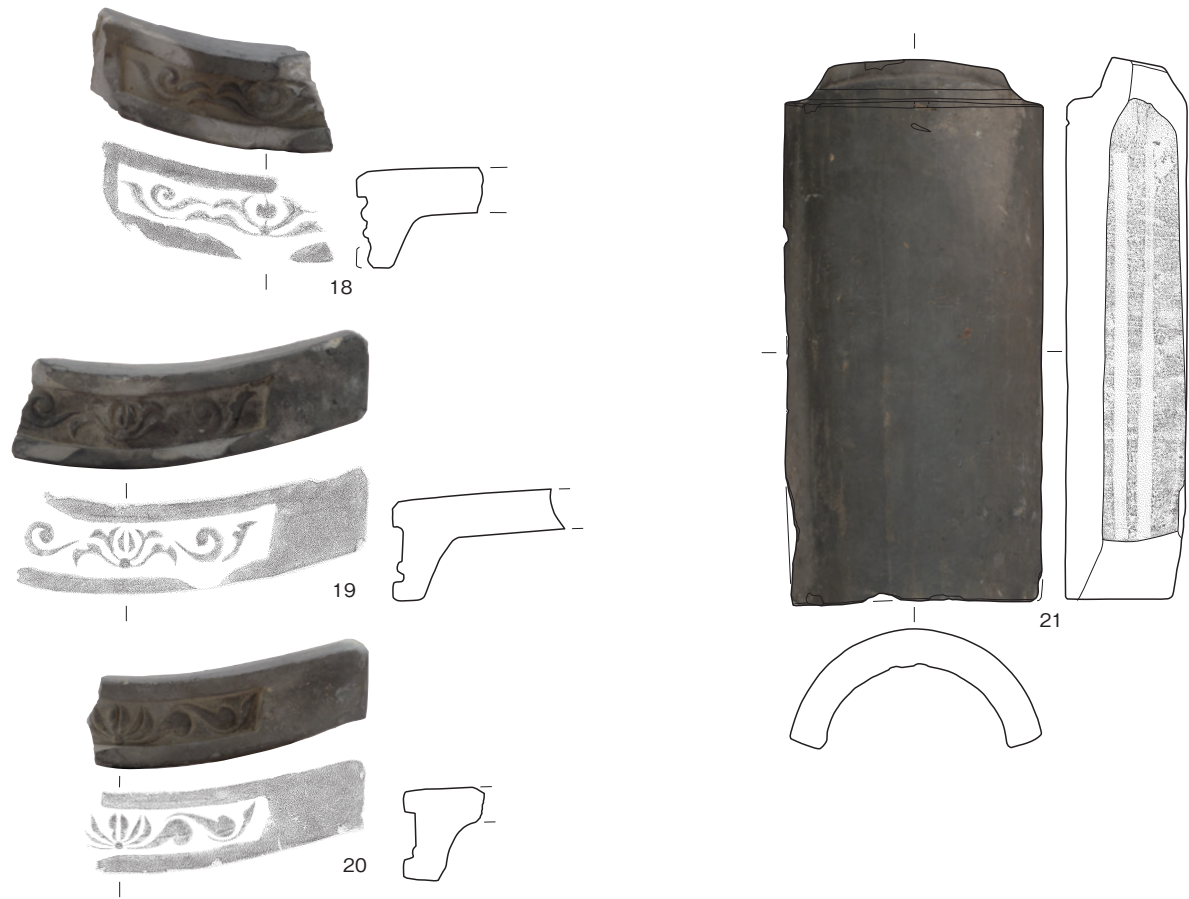
23、24は土器である。23はSK19、SK59とA層、24はSK19とSK59の出土資料がそれぞれ接合したものである。どちらも硬質瓦質の火鉢で、23は丸火鉢でDZ-31-d、24は角火鉢でDZ-31-gに分類される。23は内面がナデ調整され、口縁部外面にミガキ調整、体部外面には回転工具によって横位に6条の飛びカンナ状の文様が施される。底部には削り出しの足が2箇所認められる。24は箱形を呈し、辺の内面につなぎ目に沿ってなでた痕跡が認められ、板作り成形である。口縁と体部の外面にミガキ調整、体部外面には回転工具によって縦方向に飛びカンナ状の文様を全体的に施す。底部には貼り付けの足が2箇所認められる。23、24は共に口唇に敲打痕が見られる。



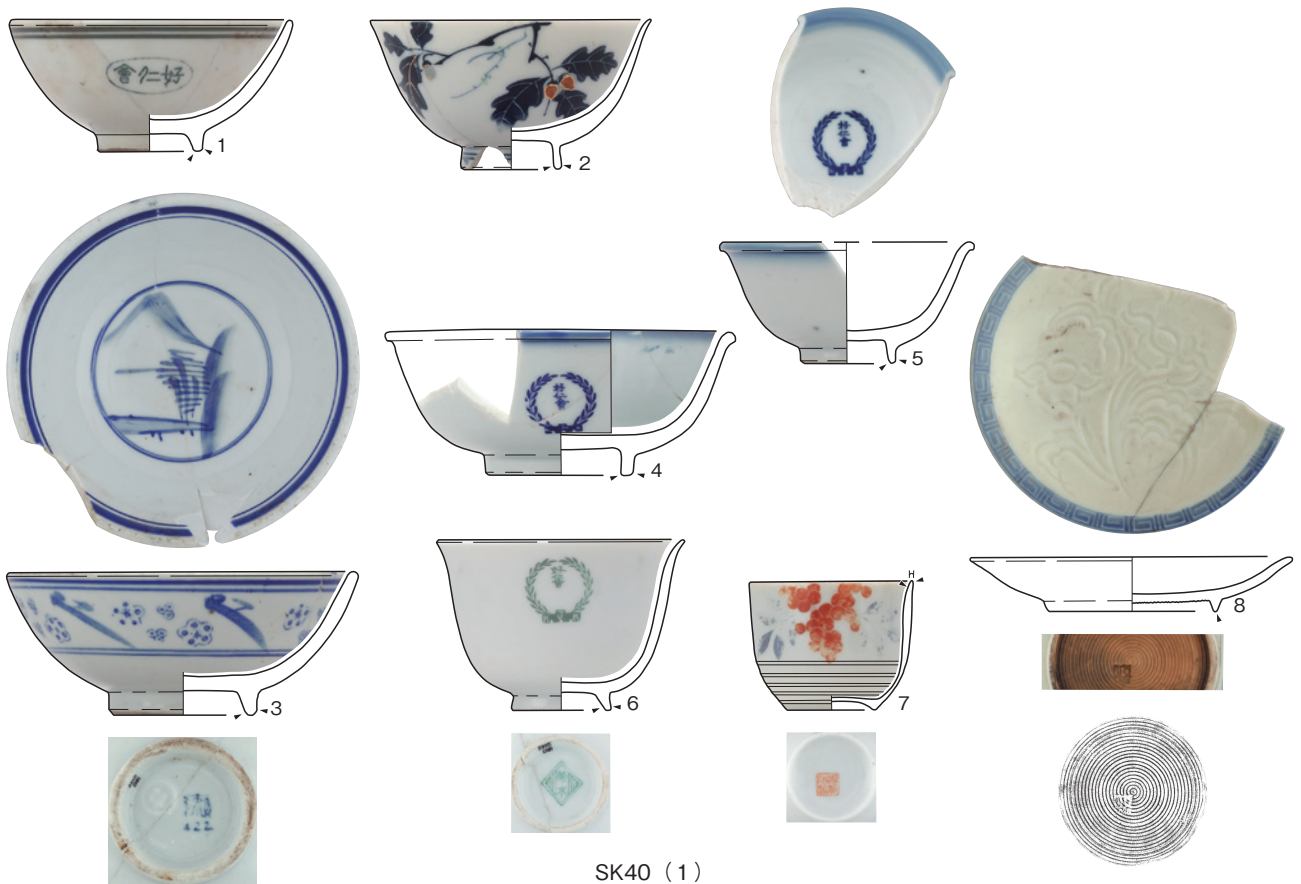
IV-2 図 SK19 (2) 出土遺物



IV-3 図 SK19 (3) 出土遺物



SK19 (4)

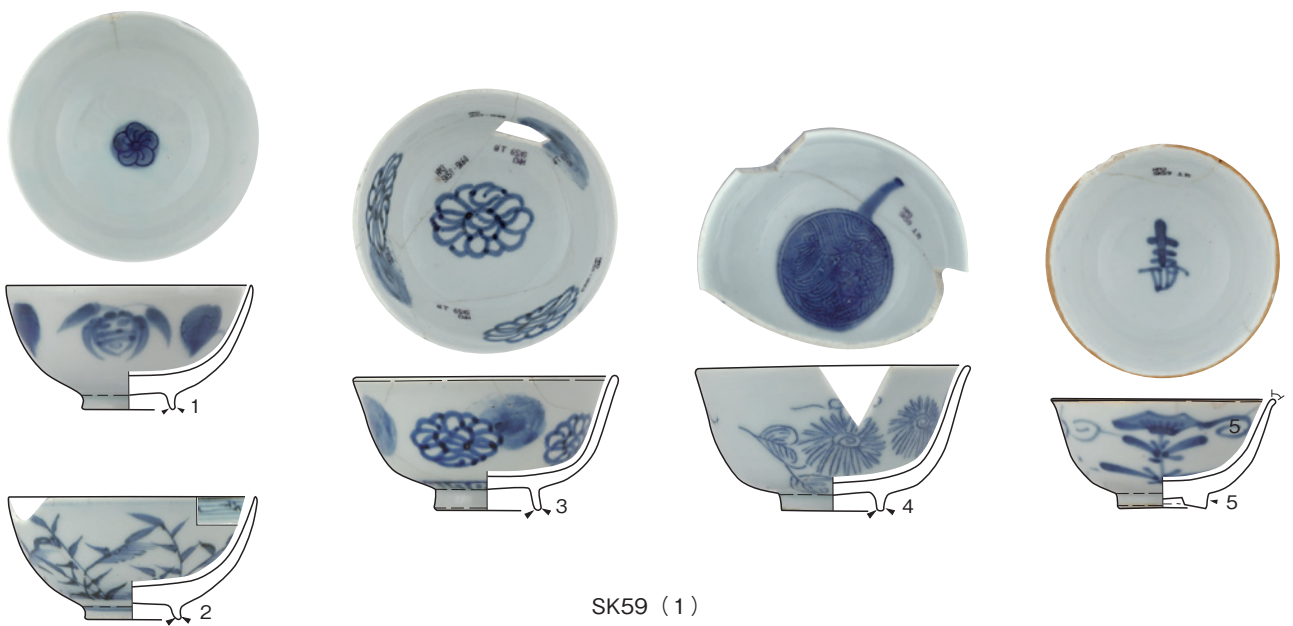


SK40 (1)

IV-4 図 SK19 (4)、SK40 (1) 出土遺物



IV-5 図 SK40 (2) 出土遺物



IV-6 図 SK40 (3)、SK59 (1) 出土遺物

II 看護職員等宿舍5号棟地点



IV-7 図 SK59 (2) 出土遺物



IV-8 図 SK59 (3) 出土遺物



IV-9 図 SK59 (4) 出土遺物



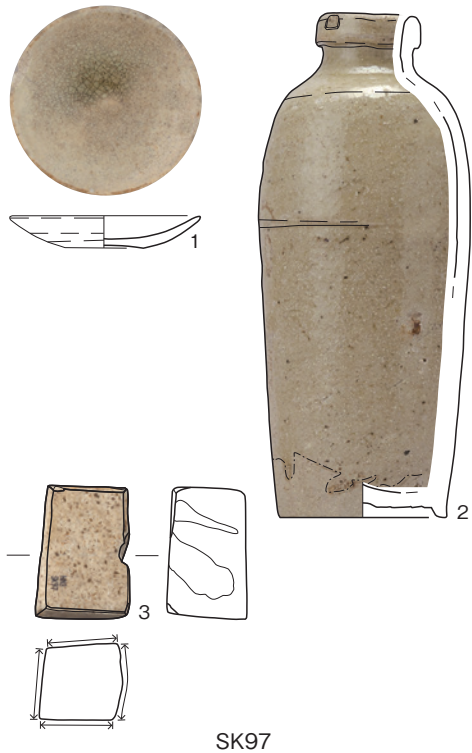
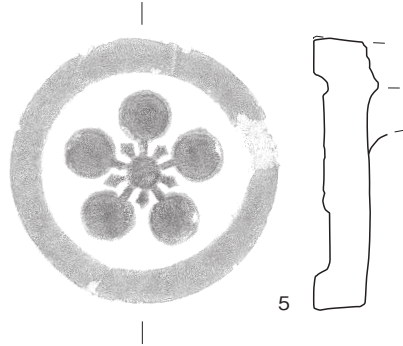
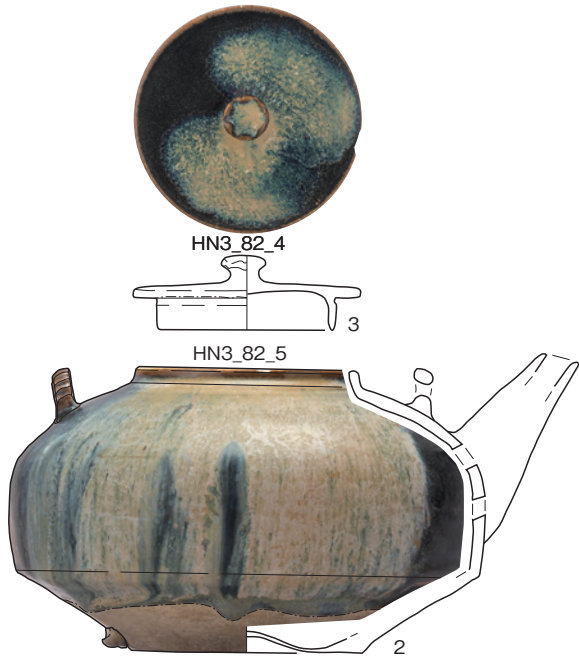
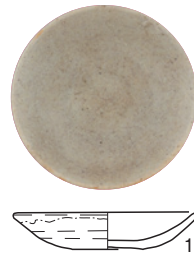
IV-10 図 SK59 (5) 出土遺物



IV-11 図 SK59 (6) 出土遺物



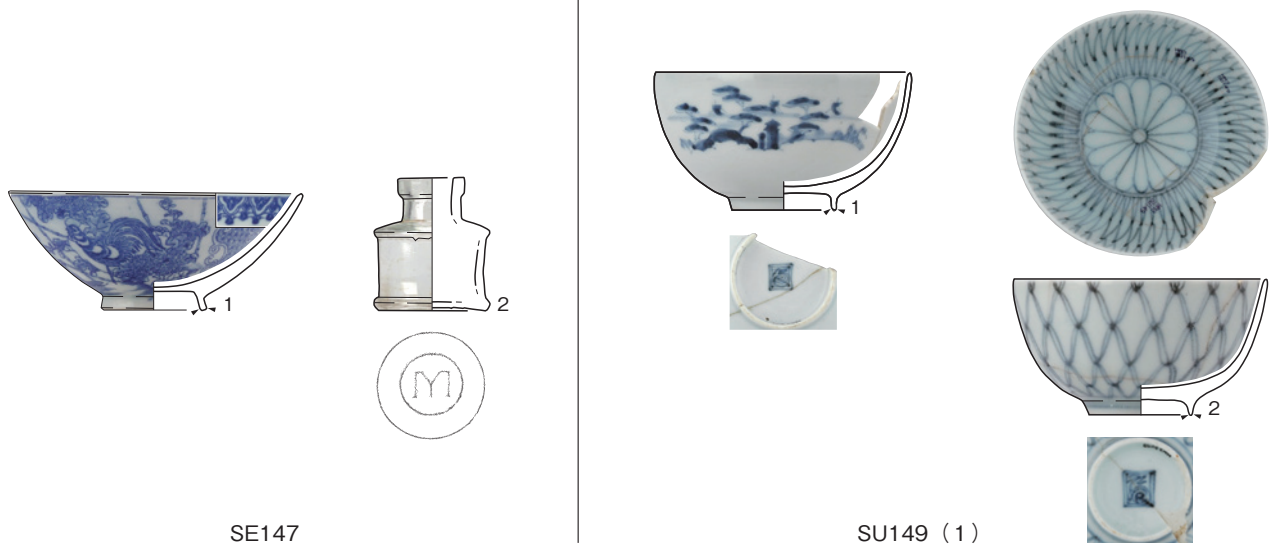
IV-12 図 SK60 出土遺物



IV-13 図 SK81、SU82、SK97、SK123 (1) 出土遺物



SK123 (2)



SE147

SU149 (1)

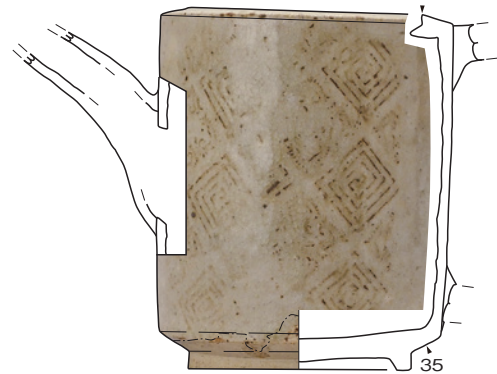
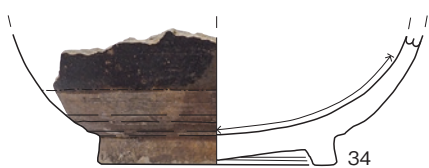
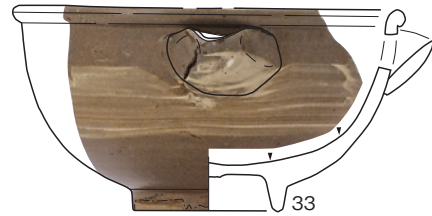
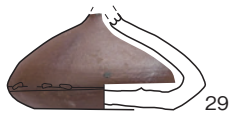
IV-14 図 SK123 (2)、SE147、SU149 (1) 出土遺物



IV-15 図 SU149 (2) 出土遺物



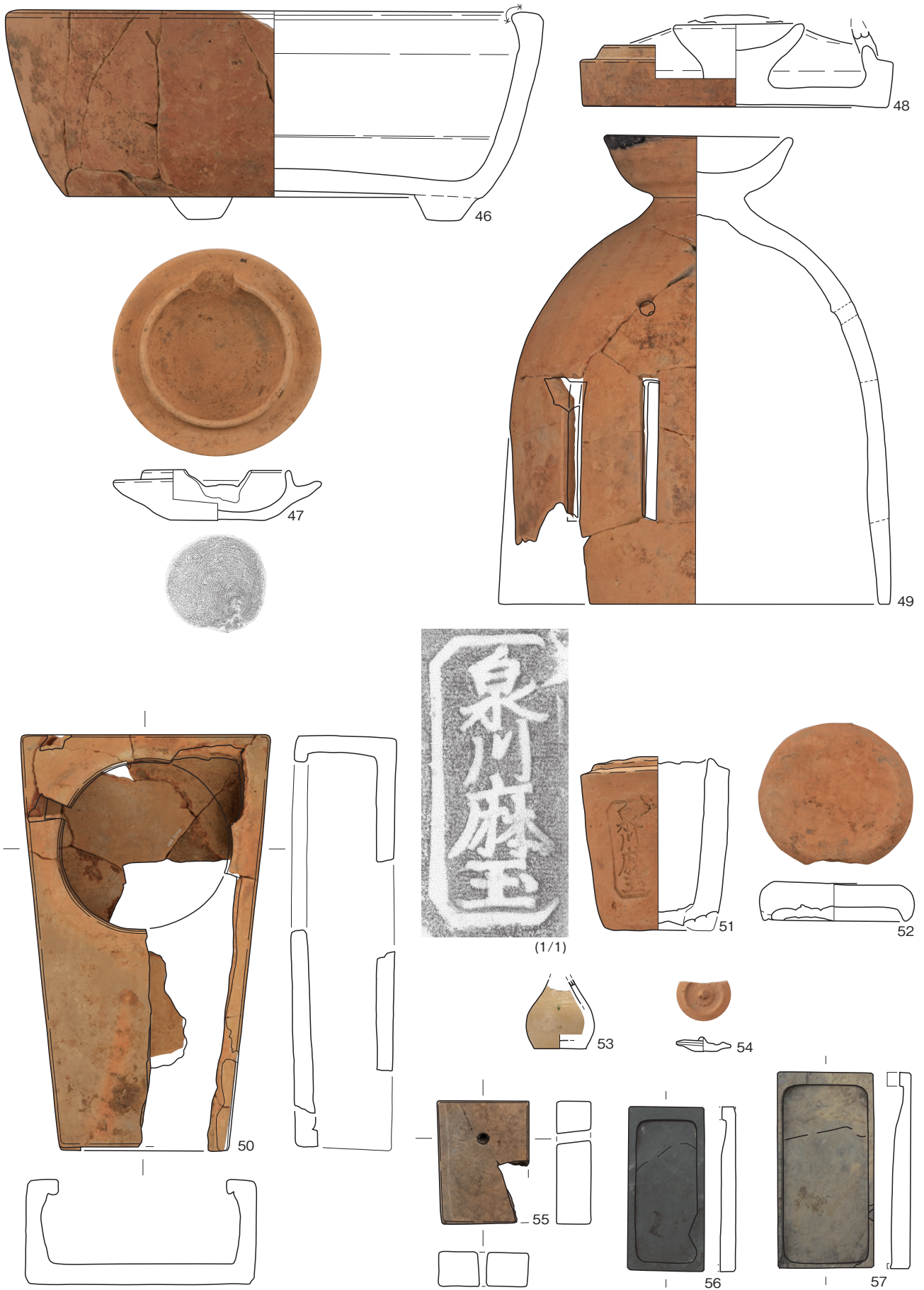
IV-16 図 SU149 (3) 出土遺物



IV-17 図 SU149 (4) 出土遺物



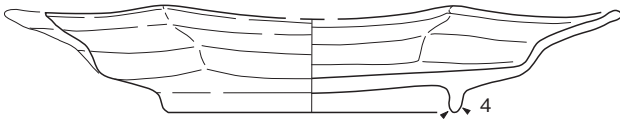
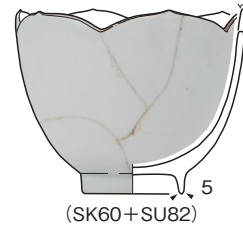
IV-18 図 SU149 (5) 出土遺物



IV-19 図 SU149 (6) 出土遺物



IV-20 図 SD206、A層、遺構間接合 (1) 出土遺物

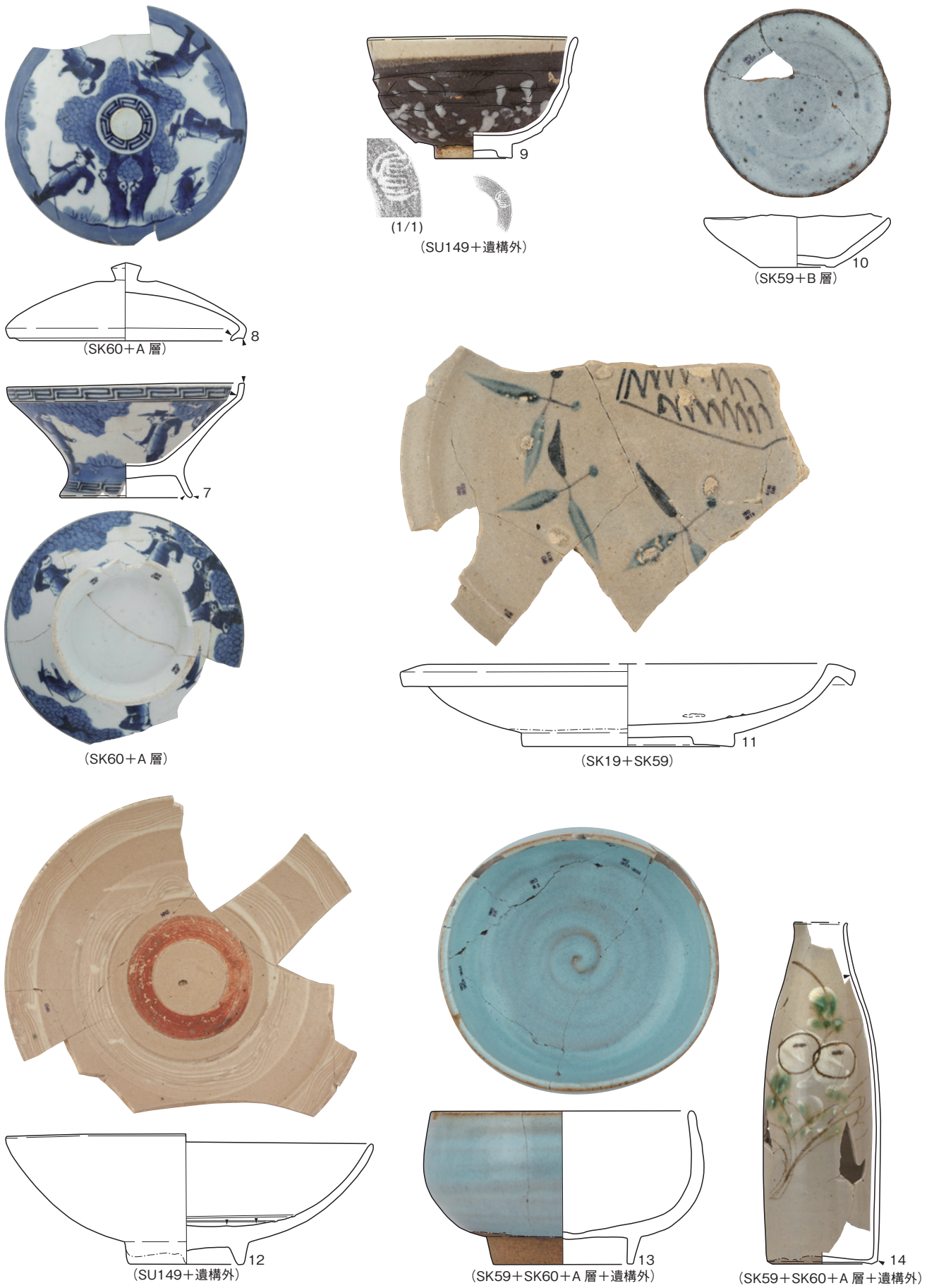


(SK19+SK60+SU82+SK97)



(SK19+SK59+SK60+SU82)

IV-21 図 遺構間接合(2)出土遺物



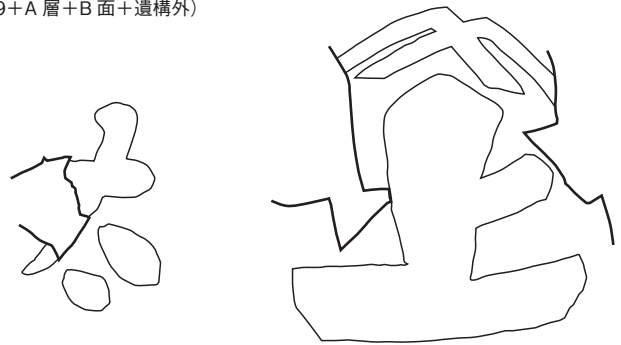
IV-22 図 遺構間接合 (3) 出土遺物



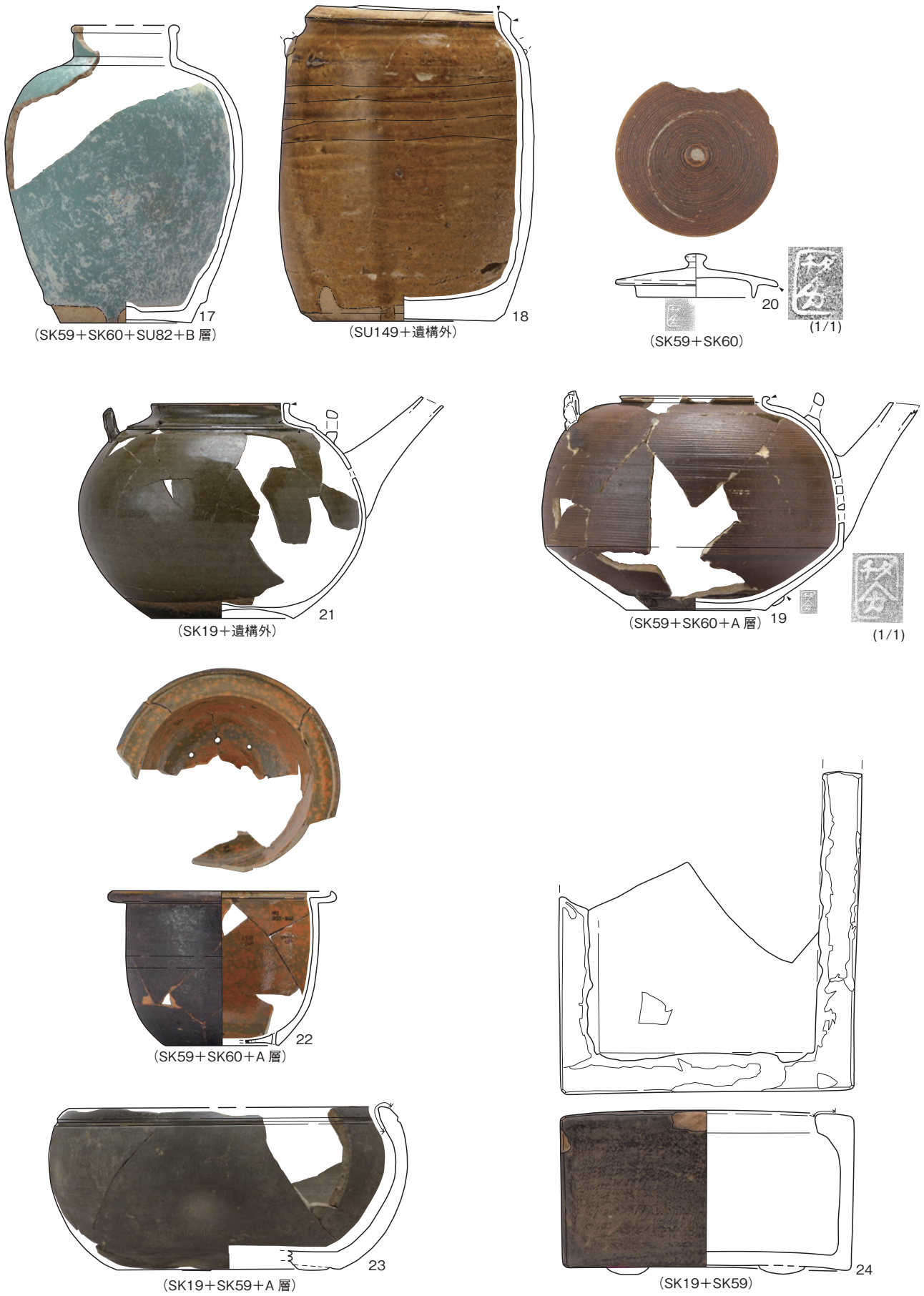
(SU149+遺構外)



(SK19+SK59+A層+B面+遺構外)



IV-23 図 遺構間接合 (4) 出土遺物



IV-24 図 遺構間接合 (5) 出土遺物

IV-1 表 陶磁器・土器組成表 (6)

段階	胎質・産地		DZ (生産地不明)		44 (ひょうそく)		45		46		47 (ほうろく)		48 (七輪)		49		51 (塩釜)		52 (燗台)		54	63	OO (窯)	
	器種	小分類	g	他	小計	a	b	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o
VIIcd	SK59				1				0															
VII	SU149				0	3			0													5		
合計					0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0

段階	胎質・産地		DZ (生産地不明)		51 (塩釜)		52 (燗台)		54	63	OO (窯)													
	器種	小分類	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	aa	ab	ac	ad	ae	af	ag	ah	ai	他	小計
VIIcd	SK59									10														10
VII	SU149																							5
合計					0	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15

段階	胎質・産地		DZ (生産地不明)		OO (窯)		DZ 合計		他		土器 合計		備考	
	器種	小分類	c	d	e	f	g	j	k	l	o	他	小計	合計
VIIcd	SK59		1			3						4	28	220
VII	SU149											1	54	163
合計			0	1	0	0	3	0	0	0	0	5	82	383

第V章 C面（古墳時代）の遺構と遺物

第1節 遺構

今回の調査では古墳時代に属する遺構として、竪穴建物が16基、土坑が3基、ピットが67基、性格不明遺構が1基、炉址が1基検出されている。

竪穴建物の帰属年代は、不確定なものを含めると弥生終末期～古墳時代前期に属する竪穴建物が1基、前期に属する竪穴建物が5基、前期～中期に属する竪穴建物が1基、中期に属する竪穴建物が9基、中期末～後期初頭に属する竪穴建物が1基である。

また当地点で検出されたSI237 (SI08)、SI242 (SI07)は、看護職員等宿舎3号棟地点で検出された竪穴建物と同一であり、看護職員等宿舎3号棟地点を含めて集落を形成していたと考えられる。

その中で確実に前期に属する考えられ、遺存度の高い竪穴建物であるSI242および、看護師当宿舎3号棟地点SI01、SI06の遺構主軸が56～64°西に振れているのに対し、確実に中期に属すると考えられる竪穴建物のSI201、SI204、SI212は、25～31°西に振れていることから、時代が下るにしたがい、より東側へ軸が変化している傾向がみとめられる。

以下各遺構について詳述する。なお出土遺物点数は、小片を除いた光波測距機による測量取り上げ点数である。

SI201（遺構V-1～6図、遺物V-43～47図）

調査区中央部C2、3、D2、3グリッドで検出されている。南東・北西部が近世遺構により壊される。西側に隣接するSI214より新しい。

東西5.5m、南北6.2mの方形を呈し、遺構の主軸は西へ25°振れている。

検出面から床面までの最深部は0.71mで、掘方の最深部は床面から0.18mである。床面は遺構全体に硬化がみとめられ、掘方底面は粗いが平坦に掘られている。周溝は一部途絶するが、各壁で検出されている。壁面は垂直に近く立ち上がっている。

ピットは、4基検出され、支柱穴と考えられる。床面からの最深深度は0.75mでP1、P2では中央部に柱痕が検出されており、P2では径13cmを測る。

竪穴建物の東西中央部の北西側と南北中央部の西側に炉が検出されている。炉2上部には、わずかに硬化がみられ、覆土にローム粒を含んでいることから、竪穴建物の

の廃絶時には機能を停止していたと考えられる。炉1は概ね円形を呈しているが、炉2は歪な隅丸三角形を呈し、掘方底部も凹凸が著しい。

遺構覆土は、褐色土～暗褐色土を主体とし、中央部が窪むレンズ状堆積を呈する。覆土中からは土器片が1,192点出土している。各層より出土し大きな偏りはみとめられないが、大形の個体が床面に近いレベルで検出されている。ものと推測される。

出土遺物から、廃絶時期は古墳時代中期と考えられる。

SI202、SI203、SI216（遺構V-7～9図、遺物V-48図）

調査区北端のC1、D1グリッドで検出されている。SI216は、竪穴建物の角部分が検出されているにすぎない。SI202およびSI203は東側が中世の遺構攪乱される。3遺構の切り合いはSI216が一番新しく、SI202はSI203より古い。

SI202

上述SI203により北側が壊されている。残存部分からは隅丸方形を呈していたと考えられ、一辺約3mと推測される。遺構の主軸は西へ44°に振れている。

上部は削平されていると考えられ、確認面から床面までは約7cmである。床面の硬化は全面に認められるが、ピットは検出されていない。

炉は、床面検出時には確認できず、掘方底面で検出されている。東西方向にやや長い歪な楕円形を呈しており、焼土の検出量は少ないが、底面には被熱によるロームの硬化が認められる。SI202とは別遺構の可能性も考えられる。

掘方底面が、ローム土を主体とした埋土で上部を水平に設えられている。上記、炉の検出状況を勘案すると、当該竪穴建物は、作り替えの可能性が考えられる。また床面では検出されなかった周溝が、掘方では南西壁際に検出され、南西壁から壁と平行に約0.3m付近に、5～6cm高くなっており、上述ローム埋土により段差を解消している事からも、作り替えが首肯される。

出土遺物から、廃絶時期は古墳時代中期以前の可能性が考えられる。

SI203

規模は、東西5.0m以上、南北2.1m以上で遺構の主軸は西へ3°振れている。西側は大きく攪乱を受け、東側の残存部では床面に顕著な硬化はみとめられない。支柱穴と思われるP1・P2から推測すると、竪穴建物の

一辺は5.5m程度と考えられ、北壁面での観察では床面までの最深部は0.62mである。掘方底面ではSP222、SP223、SP224、SP225、SP231、SP232が検出されている。

SI203ではピットが3基検出されている。P2の床面からの最深深度は0.54mである。P3では柱痕が確認されており、8cmの径が測られる。

炉は、調査区北端で検出されている。残存範囲から円形を呈していると考えられる。

覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積土で、掘方はロームを主体とした埋土である。覆土中から検出された土器片は44点である。

出土遺物から、廃絶期は古墳時代中期末～後期初頭と考えられる。

SI216

調査区北端のD1グリッドで検出される。SI203より新しい。南東隅のみが検出されており、遺構の規模は不明である。

北壁面での観察では床面までの最深部は0.3mである。遺物は出土していないが、SI203との新旧関係から、廃絶時期は古墳時代中期以降と考えられる。

SI204（遺構V-10～12図、遺物V-49図）

調査区東側のE1、2、F1、2で検出されている。北側のSI205と西側のSI236より新しい。

規模は、北西南東が3.9m、北東南西が3.3mで、やや北西南東方向に長い、やや不整形な隅丸長方形を呈す。遺構の主軸は西に31°振れている。

確認面から床面までの最深部は0.32mで、壁面は垂直に近く立ち上がる。床面は炉が位置する北東側の硬化が顕著である。床面ではピットが5基検出されているが、明確な並びを有していない。位置・規模・深度からP1を支柱穴の可能性が考えられる。

炉は、北西部に検出される。竪穴建物と平行してやや長い楕円形を呈す。この炉の北西側に近接して炉状遺構（SF220）が検出されているが、SI205に伴う可能性が高い。

掘方は、南西壁から0.3m内側に、平行した約5cmの段差を有し、東側がやや低くなっている。北西角付近には周溝が検出されている。掘方の埋土は、版築状を呈し、上面で掘方の段差を解消していることから、作り替え、拡張の可能性が考えられる。掘方底面からは3基のピットが検出されている。規模・深度から、遺構の中心軸に位置するP7を支柱穴とする一本柱の可能性が考えられる。

土器は、55点出土している。

出土遺物から、廃絶時期は古墳時代中期と考えられる。

SI205（遺構V-13～15図、遺物V-50図）

調査区東側のE1、2で検出される。西側は中世の遺構により攪乱され、北側は調査区外となるため遺存度は高くはないが、隅丸方形を呈すると考えられる。北東南西の規模は4.7mで、遺構の主軸は西に48°振れている。SI204より古くSI236より新しい。

確認面から床面までの最深部は0.27mで、南東壁付近に顕著な硬化が認められる。周溝は残存している壁に沿って検出されている。

床面でピットは4基検出されているが、規模、位置などから支柱穴は確定できない。

炉の平面形は、やや歪な隅丸方形を呈している。

覆土は、暗褐色土を主体とし、土器が37点出土している。小破片が多いが弥生時代後期の土器が出土している。

廃絶年代は古墳時代前期～中期と考えられる。

SI208（遺構V-16図、遺物V-51図）

調査区東端のF1、2グリッドで検出される。西側のSI204に切られ、北側の壁も明確ではないため、遺構全体の規模は不明である。床面の硬化は顕著ではない。

床面までの最深深度は0.18mで、掘方の最深深度は0.11mである。

床面から検出されたSP234が当該遺構にともなう可能性が考えられる。

覆土は暗茶褐色土～暗褐色土で1層と2層の間に硬化面がみとめられる。土器が21点出土している。

出土遺物から、廃絶時期は古墳時代中期の可能性が考えられる。

SI212（遺構V-17～23、遺物V-52、53図）

調査区東端のE2、3、F2～4で検出される。SI287、SI296より新しい。

規模は、北西南北方向で7.1mを測る。壁はやや開きながら立ち上がる。遺構の主軸は西に27°振れている。

床面までの最深深度は、0.71mで、掘方の最深部は床面から0.17mである。硬化は遺構の中央部付近に広く拡がっている。

ピットは、床面で5基検出された。P1、P2、P5が支柱穴と考えられる。床面からの最深部はP5で0.80mを測る。P1では柱痕が確認できる。

周溝は、各壁下で認められ、所々に小ピットが検出されている。

炉は、推定される東西の中心から、やや西寄りに検出され、北西南東方向にやや長い楕円形を呈している。

遺構の南西隅に貯蔵穴が検出されている。規模は南北1.1m、東西0.7mで最深深度は床面から0.67mで、底面は平坦に成形される。

覆土は、黒褐色～褐色土を主体とし、レンズ状堆積を呈する。土器は、788点と多量に出土し、特に床面付近では大形の個体が出土している。

掘方では、間仕切りが7条検出されている。間仕切りは壁に対し平行で、断面形はU字状を呈し、間仕切り1の西端、間仕切り4の南端にはピットが検出されていることから、柱穴を伴っていたと考えられる。なお調査時点でSP260としたピットは、覆土の類似からSI212の掘方と判断した。

出土遺物から、廃絶時期は古墳時代中期と考えられる。

SI214 (V -22、23 図)

調査区中央のC2グリッドで検出される。東側を大きく攪乱され南西壁付近がわずかに遺存しているのみである。残存部から北西南東の規模は4.1mである。東側に位置するSI201より古い。

確認面から床までは最深部で9cmと薄い。また床面から掘方底面までも9cmと浅い。遺構の主軸は西に30°振れている。

床面は、残存範囲内の広範囲に認められ、周溝が検出され、壁面はやや緩く立ち上がっている。炉、ピットは検出されていない。

覆土は、暗褐色土を主体とし、掘方はロームを主体とする埋土である。

土器が5点出土している。廃絶時期は古墳時代中期の可能性が考えられる。

SI236 (遺構V -24、25 図、遺物V -54 図)

調査区東側のE2グリッドで検出される。北西側を中世の溝に攪乱され、東側はSI205に切られているため、南東壁、南西隅が遺存しているのみで、全体の規模は不明である。SI204、SI205より古い。

床面までの最深部は、0.11mと浅く、床面から掘方底面までの最深部は約9cmである。南壁の残存部から、遺構の主軸は36°振れていると考えられる。

床面の硬化は、遺存部全体でみとめられ、柱穴は検出されていない。南東壁付近で炭化材が床面より約10cm高い位置で検出され、焼土が床面で検出されている。

炉は、西側が攪乱を受けるが、歪な円形を呈していると考えられ、断面形状は浅い皿状を呈している。

覆土は、暗褐色土を主体とし、全体的に焼土粒の混入がみられる。77点の土器片が出土し、床面付近で大形の個体がまとまって検出されている。

出土遺物から、廃絶時期は古墳時代前期と考えられる。

SI237 (SI08) (遺構V -26～28 図、遺物V -55 図)

調査区西端のA2、B1、2グリッドで検出されている。看護職員等宿舎3号棟地点で検出されたSI08と同一遺構である。遺構の規模は南西北東方向に2.9m、北西南東方向で2.3mで、南西北東方向にやや長い隅丸長方形を呈している。遺構の主軸は西へ25°振れている。

床面までの最深部は0.45mで、床面から掘方の最深部は0.18mである。

床面に顕著な硬化部分はみられない。掘方底面は凹凸が多く、P1が検出されている。壁はやや開きながら立ち上がる。

床面で柱穴は、検出されていない。

炉が中央から北壁よりに検出されている。平面形状は歪な不整形を呈し、断面形状は浅い皿状である。

覆土は、暗褐色～暗茶褐色土を主体とし、129点の土器が出土した。大形の個体が、床面直上の北西壁に平行に並んで検出されている。

出土遺物から、廃絶時期は古墳時代後期と考えられる。

SI242 (SI07) (遺構V -29～32 図、遺物V -56 図)

調査区西端のA2、3、B2、3グリッドで検出されている。看護職員等宿舎3号棟地点で検出されたSI07と同一遺構である。

遺構は所々、攪乱されているが四方の壁は遺存している。遺構の規模は、南西北東方向に6.2m、北西南東方向で5.7mで、南西北東方向にやや長い隅丸長方形を呈している。SI237 (SI08)、SI259より古い。遺構の主軸は西へ51°振れている。

床面までの最深部は0.25mで、床面から掘方底面までの最深部は0.15mである。遺存部分は、広範囲で床面の硬化がみとめられる。

ピットは、床面で5基検出されており、P1、P2、P5が主柱穴と考えられるが、竪穴建物に対して北東に寄っている。ピットの最深部はP2で0.78mである。またほぼ中央部で検出された炉2の同一軸線上に位置するP3も、床面からの最深部が0.35mと一定度の深さを有していることから、主柱穴に準じて使用された可能性も考えられる。また掘方底面は南西側が高くなっており、拡幅、建替などの可能性が考えられる。

炉は、3基検出されている。炉1は中央部に位置し、

3基の中では最大規模で東西0.78m、南北0.54mで断面形は浅い皿状を呈す。各炉の上面には硬化面は認められず、廃絶時には3基とも使用していた可能性が考えられ、柱穴の位置、建替と関連していると考えられる。

遺構の主軸に平行して竪穴建物の北東側に、貯蔵穴が1基検出されている。南西北東方向にやや長い隅丸方形を呈し、坑底は平坦で壁は垂直に近く立ち上がる。

覆土は、黒褐色土を主体とし、238点の土器が出土している。炉1北側の床面直上に、大形の個体片(6)が出土している。

出土遺物から、廃絶時期は古墳時代前期と考えられる。

SI259（遺構V-33～35図、遺物V-57図）

調査区の西端のA3、B3、4で検出される。西側が攪乱され、南側をSI283に切られるため、東西方向の規模は不明であるが、南北方向の規模は4.5mで、隅丸方形を呈していると推測される。遺構の主軸は西へ28°振れている。

床面までの最深部は0.16mで、床面から掘方底面までの最深部は0.19mである。南東壁、北東壁下には周溝が検出される。

北東壁は、内側0.15mに段差を有し、掘方内の埋土が版築状を呈していることから、拡幅などの可能性が考えられる。

ピットは、床面ではP1、P5が検出されているが、主柱穴とは考えられない。床面では確認できなかったが、掘方内で検出されたP2、P3、P4、P6が主柱穴と考えられる。

中央部北東よりに床面から焼土が検出されているが、周囲を含め硬化しており、炉とは考えられない。

覆土は、暗茶褐色土を主体とし、土器が60点出土している。

出土遺物から、廃絶時期は弥生終末期～古墳時代前期と考えられる。

SI283（遺構V-36、37図、遺物V-59図）

調査区南端のA3、4、B3、4グリッドで検出されている。南側は調査区外へ続いていると考えられ、北西壁、南東壁の一部が検出されているのみで、遺構の規模は不明である。SI259より新しく、SX270より古い。遺構の主軸は西へ64°振れている。

北西壁下では周溝が検出され、床面でピットが2基検出されている。P1は攪乱され規模は不明であるが、P2は床面からの深度が0.69mと深くなっていることから主柱穴と考えられる。

炉は、調査区南端で一部が検出されたため、調査区の拡張を行った。東西0.6m、南北0.72m以上の規模で断面形状は浅い皿状を呈す。

覆土は暗褐色土を主体とし、土器が27点と石製管玉が1点出土している。掘方内でP3、P4が検出されている。

出土した土器から、廃絶年代は古墳時代前期と考えられる。

SI287（遺構V-38図、遺物V-61図）

調査区西側のE3、4、F4グリッドで検出されている。SI212に切られ、北西側が近世の遺構に攪乱されるため、南西隅の一部が遺存していたのみである。隅丸方形を呈していると推測される。SI212より古く、SI296より新しい。遺構の主軸は西に32°振れている。

遺存部分ではピットは検出されておらず、床面の硬化も顕著ではない。壁下では周溝が検出されている。

覆土は、暗褐色～暗茶褐色土を主体とし、土器が20点出土している。

出土遺物から、廃絶時期は古墳時代前期と考えられる。

SK285（遺構V-39図、遺物V-59図）

調査区南端のB4グリッドで検出された。遺構の規模は南西北東方向に0.79m、北西南東方向で0.62mで、南西北東方向にやや長い楕円形を呈している。遺構主軸は42°西に振れている。SX270より古い。

壁面は、垂直に近く立ち上がり、底面は細かい凹凸が顕著で粗い。

覆土の2層にはローム土が含まれており、人為的堆積も考えられる。

底面に近い3層から土器が6点出土している。

出土遺物から、廃絶時期は古墳時代中期と考えられる。

SP229（遺構V-40図）

調査区中央部C3グリッドで検出されている。規模は北西南東方向で0.44m、南西北東方向で0.41mで歪な円形を呈し、最深深度は0.36mである。廃絶時期は不明である。

SP268（遺構V-40図）

調査区西側のB3グリッドで検出される。規模は南北方向で0.64m、東西方向で0.64mでほぼ円形を呈し、中央部にコンクリート基礎に攪乱を受けているため、深度は定かではない。廃絶時期は不明である。

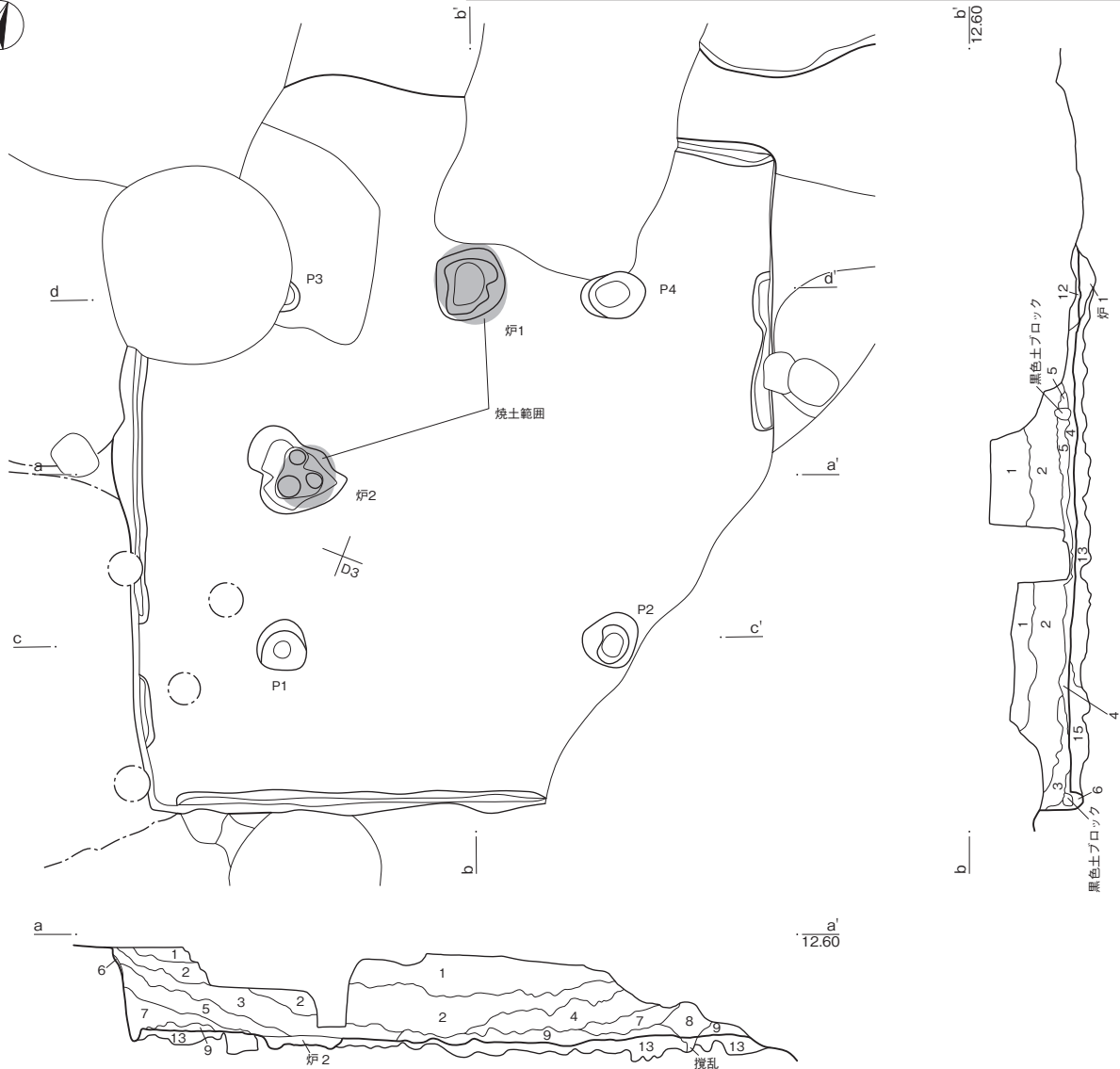
SX270（遺構V-41、42図、遺物V-58図）

調査区南端のB4、C3、4グリッドで検出されている。遺構規模は、東西方向で5.6m以上、南北3.4m以上で南側は調査区外となっている。平面形状は不定形で、東西の断面形状は浅い皿状を呈し、南北方向は南側へ傾斜がみとめられる。床面は確認できなかった。

覆土は、暗褐色土を主体とし、最下層は自然の営為によるローム土の混入が多く認められる。

覆土中からは土器が120点出土した。

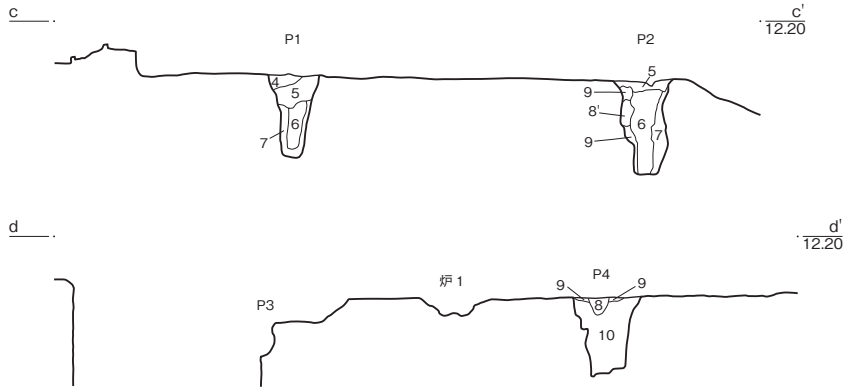
出土遺物から、廃絶時期は古墳時代中期と考えられる。



- | | | | |
|--------|-------------------------------|---------|-------------------------------|
| 1 暗褐色土 | しまりややあり、ローム粒少含、小円礫・焼土粒微含 | 9 暗褐色土 | 粘性やや強、ローム粒少含 |
| 2 褐色土 | 粘性・しまりややあり、ローム粒含、ロームB少含、焼土粒微含 | 10 褐色土 | 粘性・しまりややあり、ローム粒・焼土粒含 |
| 3 暗褐色土 | 粘性・しまりややあり、ローム粒含、ロームB微含 | 11 橙褐色土 | 粘性・しまりなし、純焼土層 |
| 4 黄褐色土 | 粘性・しまりややあり、ローム粒極多含、ロームB多含 | 12 黄褐色土 | 粘性弱、しまりやや弱、火熱受けたローム |
| 5 褐色土 | しまりややあり、ローム粒多含、ローム小B含 | 13 黄褐色土 | 粘性ややあり、しまり強、ほぼロームで構成される、焼土粒微含 |
| 6 褐色土 | 粘性・しまりややあり、ローム粒子多含、壁の崩落 | | |
| 7 褐色土 | しまりややあり、ローム粒含 | | |
| 8 褐色土 | しまりややあり、ローム粒・B少含 | | |

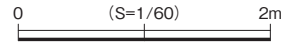
平面図・断面図(1)
V-1図 SI201(1)

II 看護職員等宿舎5号棟地点

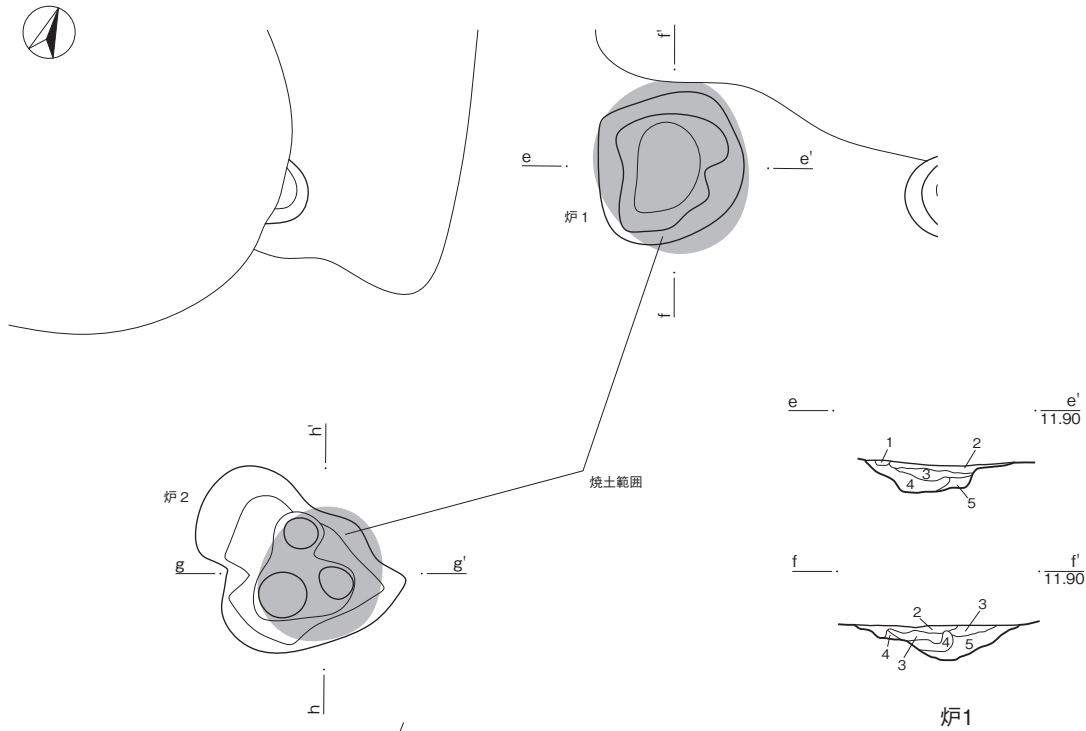


- P1
- 1 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含
 - 2 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒極多含
 - 3 褐色土 粘性ややあり、しまりやや弱、ロームで構成される
 - 4 黄褐色土 しまりややあり、ロームで構成される
- P2
- 5 褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒含、焼土粒少含
 - 6 茶褐色土 粘性ややあり、しまりやや弱、ローム粒多含
 - 7 黄褐色土 粘性ややあり、ほぼロームで構成される
 - 8 黄褐色土 粘性・しまりややあり、ほぼロームで構成される

- P4
- 8 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒多含、焼土粒少含、柱痕
 - 9 茶褐色土 粘性ややあり、ローム粒極多含
 - 10 黄褐色土 粘性・しまりややあり、ほぼロームで構成される

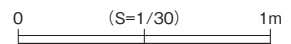


平面図・断面図(2)

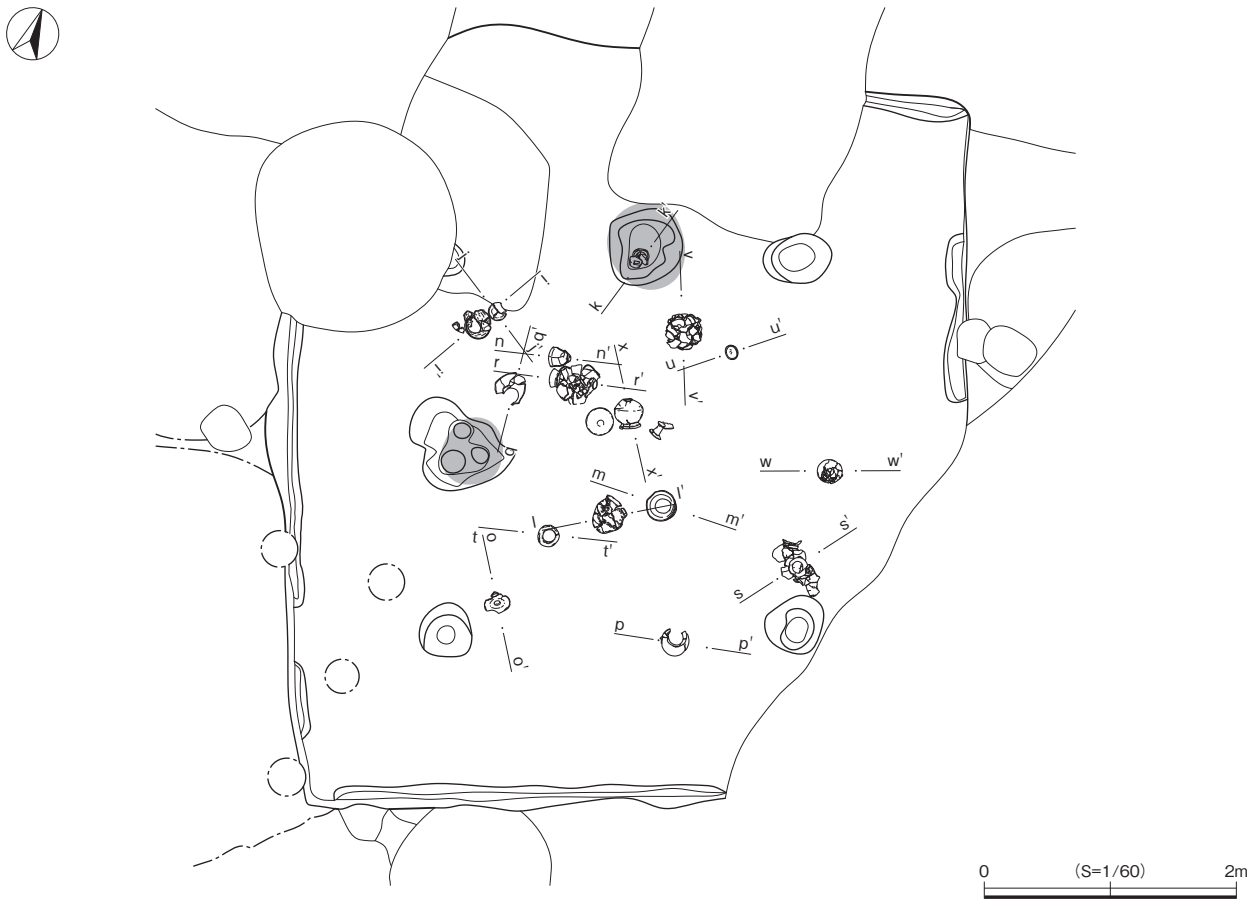


- 炉1
- 1 黒褐色土 粘性・しまりややあり、焼土粒含、ローム粒少含
 - 2 茶褐色土 粘性やや弱、しまりややあり、焼土粒・ローム粒多含
 - 3 赤褐色土 純焼土層
 - 4 黄褐色土 粘性なし、しまり弱、焼成を受けたローム粒・ロームB
 - 5 茶褐色土 粘性・しまり弱、ローム粒含

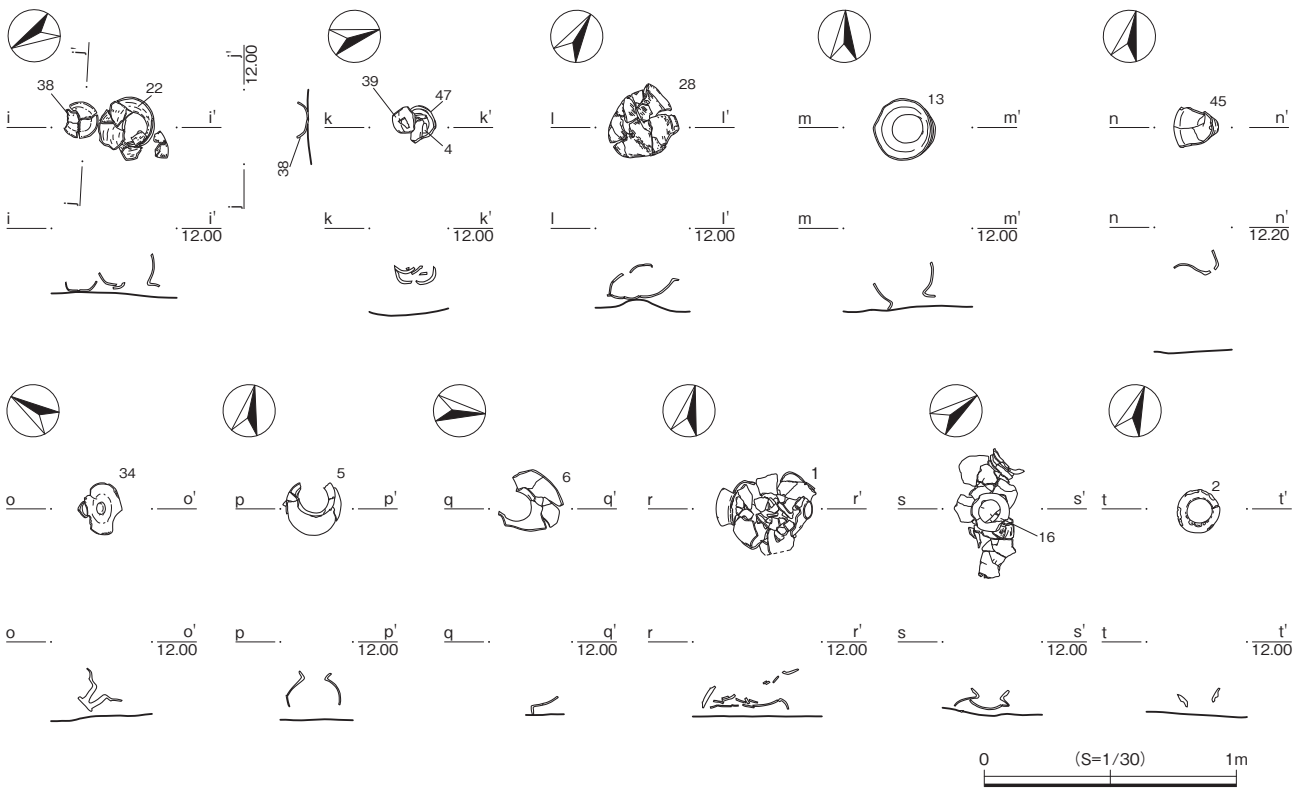
- 炉2
- 1 褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・焼土粒含
 - 2 橙褐色土 粘性・しまりなし、純焼土層
 - 3 黄褐色土 粘性弱、しまりやや弱、火熱受けたローム



炉
V-2図 S1201(2)



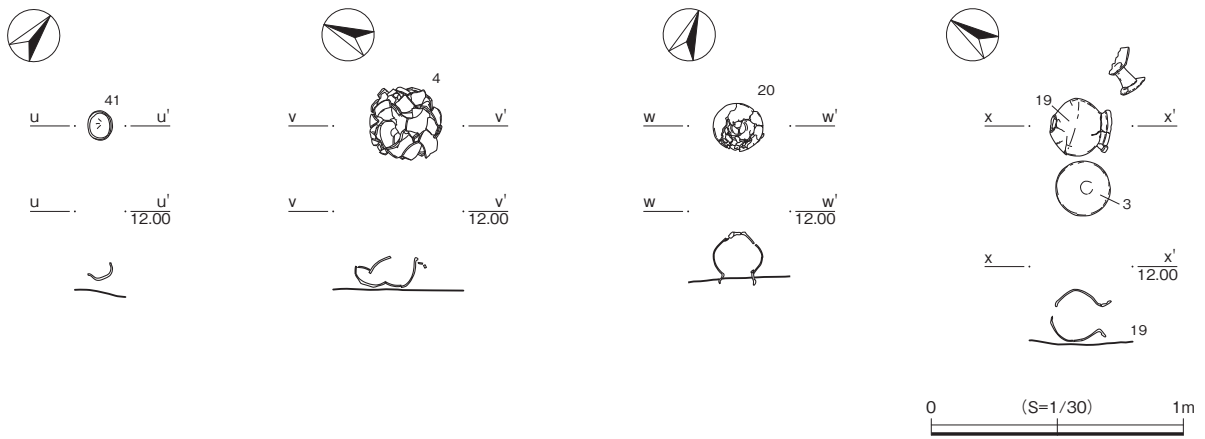
遺物出土状況(1)



出土遺物微細図(1)

V-3図 S1201(3)

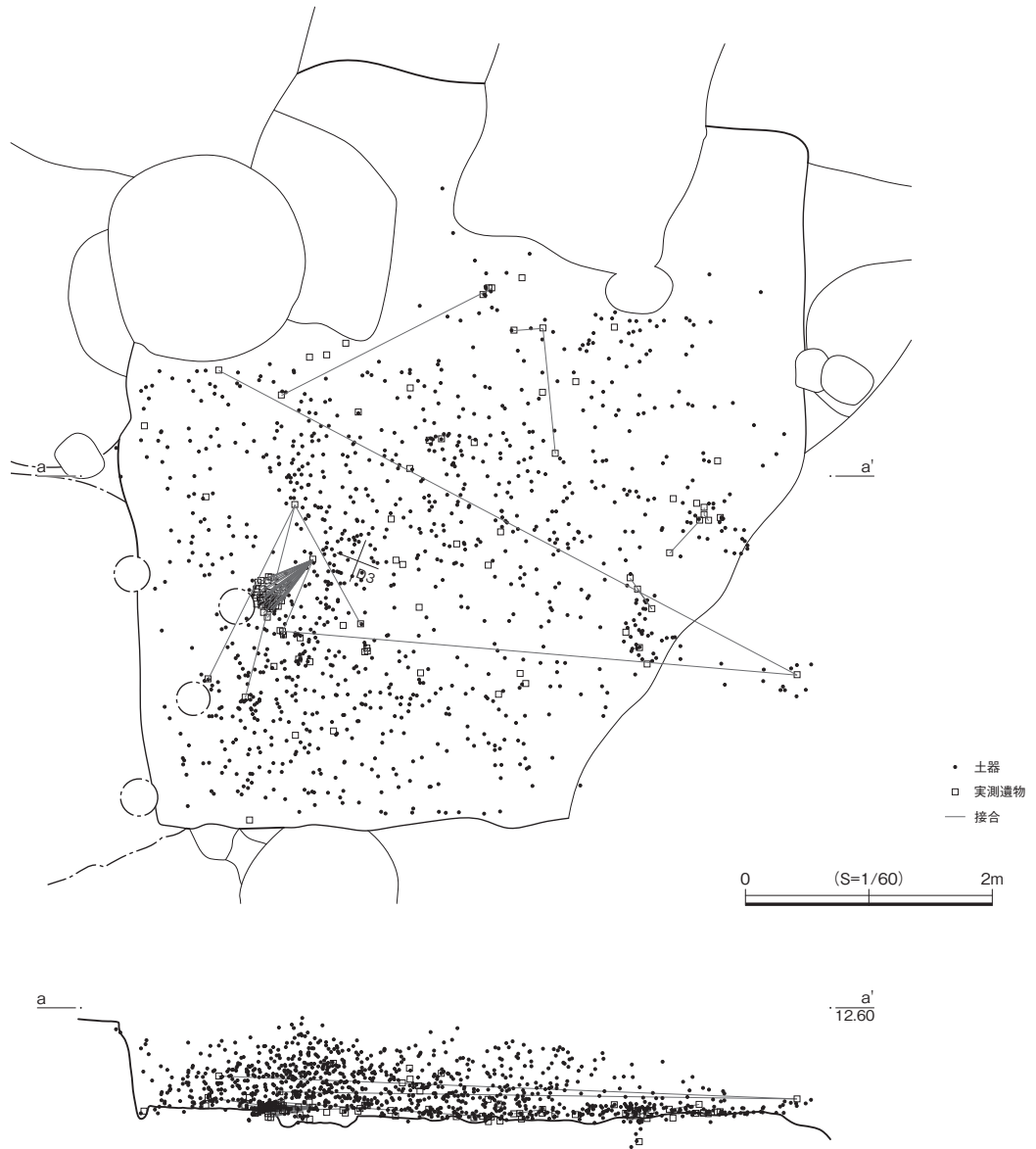
II 看護職員等宿舎5号棟地点



出土遺物微細図(2)

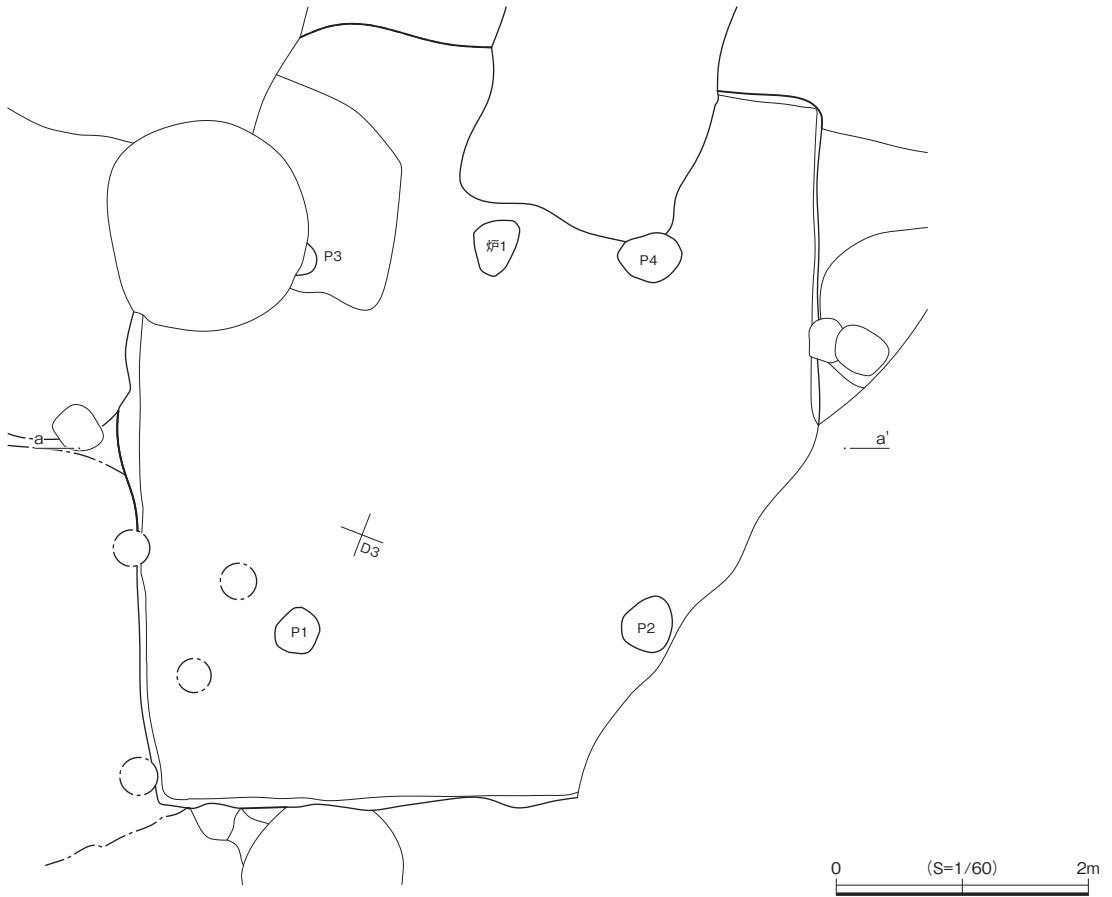


遺物出土状況(2)
V-4図 SI201(4)

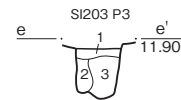
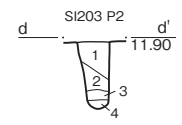
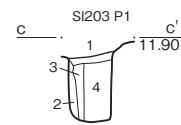
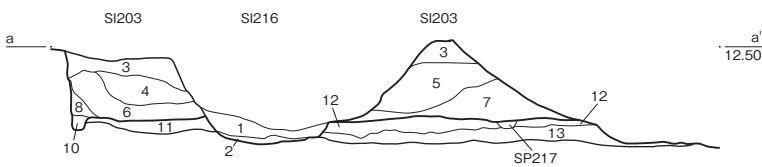
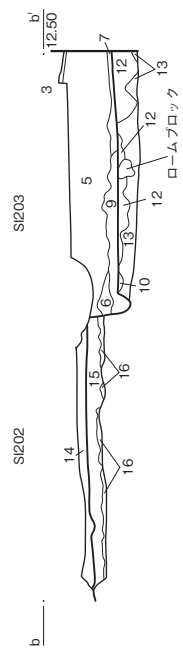
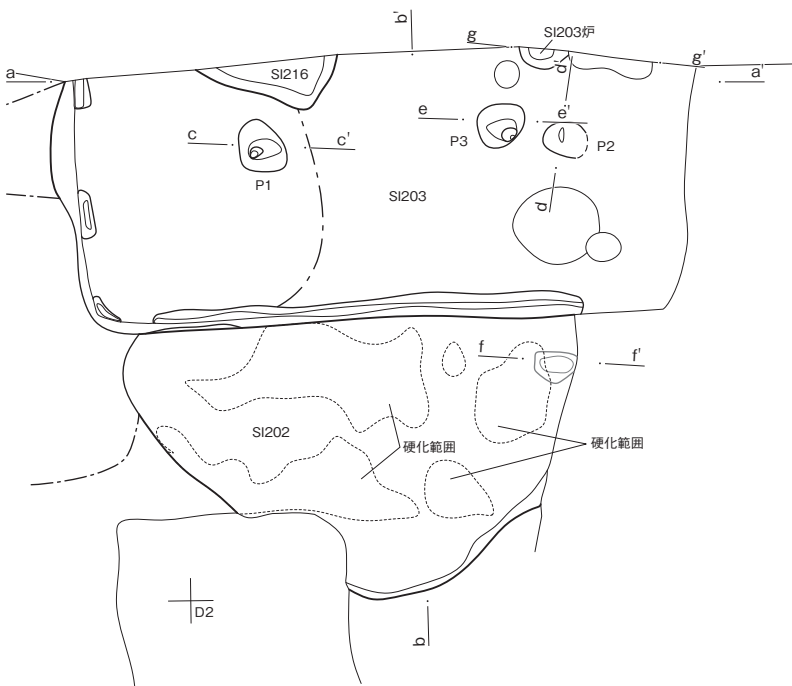
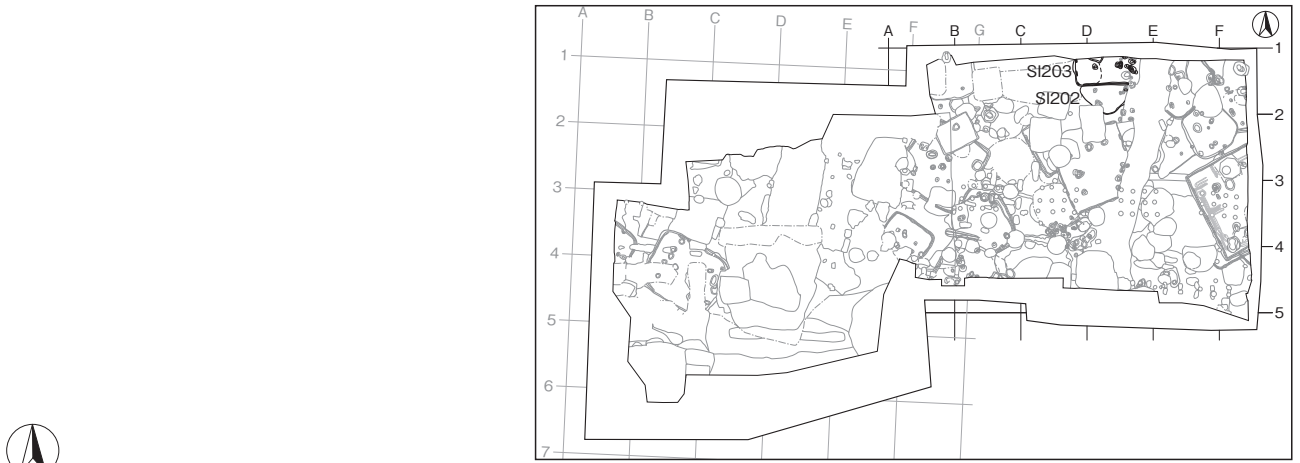


遺物出土状況(3)
V-5図 SI201(5)

II 看護職員等宿舍5号棟地点

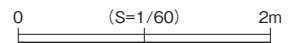


掘方
V-6図 S1201(6)



- SI216
- 1 黒褐色土 しまりややあり、黄褐色粘土粒多含、黄褐色粘土B少含
 - 2 暗褐色土 しまり強、ローム粒・黄褐色粘土粒多含
- SI203
- 3 暗褐色土 しまりややあり、ローム粒・焼土粒微含
 - 4 暗茶褐色土 粘性ややあり、ローム粒少含、ロームB・炭化物微含
 - 5 暗褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒微含
 - 6 暗茶褐色土 粘性ややあり、焼土粒含、ローム粒微含
 - 7 暗茶褐色土 しまりややあり、ローム粒含、焼土粒微含
 - 8 茶褐色土 しまりややあり、ロームB含
 - 9 茶褐色土 ローム粒多含、ローム・小B・焼土粒微含

- 10 茶褐色土 しまりややあり、ローム粒多含、ロームB少含
 - 11 褐色土 しまりややあり、ローム粒極多含
 - 12 褐色土 ローム粒子極多量、ロームB多含
 - 13 黄褐色土 ロームで構成される
- SI202
- 14 暗茶褐色土 粘性ややあり、ローム粒少含
 - 15 茶褐色土 粘性ややあり、しまり強、ローム粒含、貼床か？
 - 16 黄褐色土 粘性ややあり、ほぼロームで構成される



平面図・断面図(1)

V-7図 SI202、SI203、SI216(1)

II 看護職員等宿舎5号棟地点

SI203 P1

- 1 暗赤褐色土 粘性やや弱、しまり弱、ローム粒・炭化物含
- 2 黄褐色土 粘性・しまり弱、ロームB含
- 3 暗茶褐色土 粘性やや強、しまり弱、ローム粒含
- 4 明褐色土 粘性やや弱、しまり弱、ローム粒少含

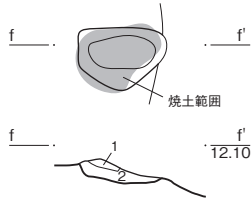
SI203 P2

- 1 暗褐色土 粘性ややあり、しまり弱、ローム小粒含
- 2 黄褐色土 粘性ややあり、しまり弱、ローム中粒含
- 3 黒褐色土 粘性強、しまり弱、ローム小粒含
- 4 黄褐色土 粘性やや強、しまり弱

SI203 P3

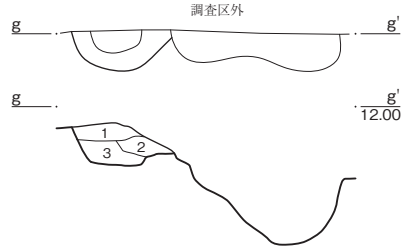
- 1 暗茶褐色土 しまりややあり、ローム粒少含、焼土粒微含
- 2 茶褐色土 しまりややあり、ローム粒多含
- 3 黄褐色土 ロームで構成される

平面図・断面図(2)



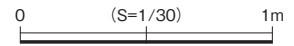
- 1 黒褐色土 粘性・しまり弱、焼土B多含
- 2 黄褐色土 粘性弱、しまりやや弱、被熱したロームB多含

SI202 炉

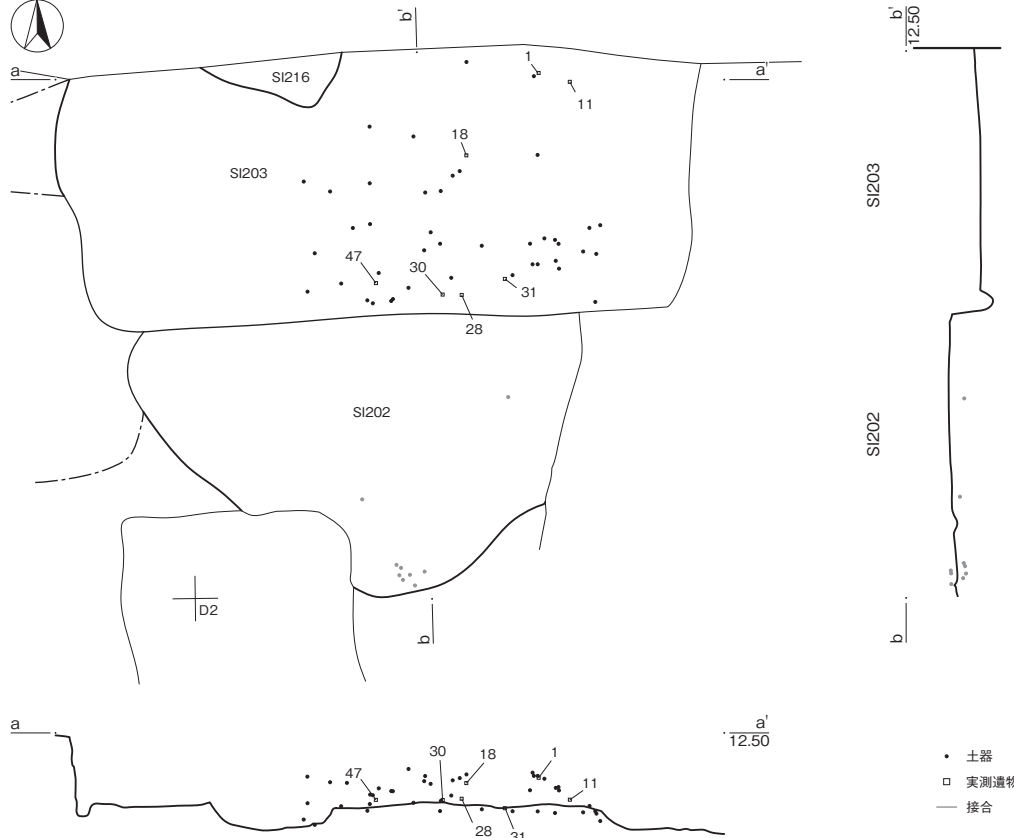


- 1 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・焼土粒少含
- 2 橙褐色土 粘性・しまりやや弱、被熱したロームB・焼土B含
- 3 赤褐色土 粘性・しまりなし、純焼土層

SI203 炉



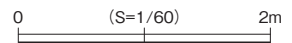
炉



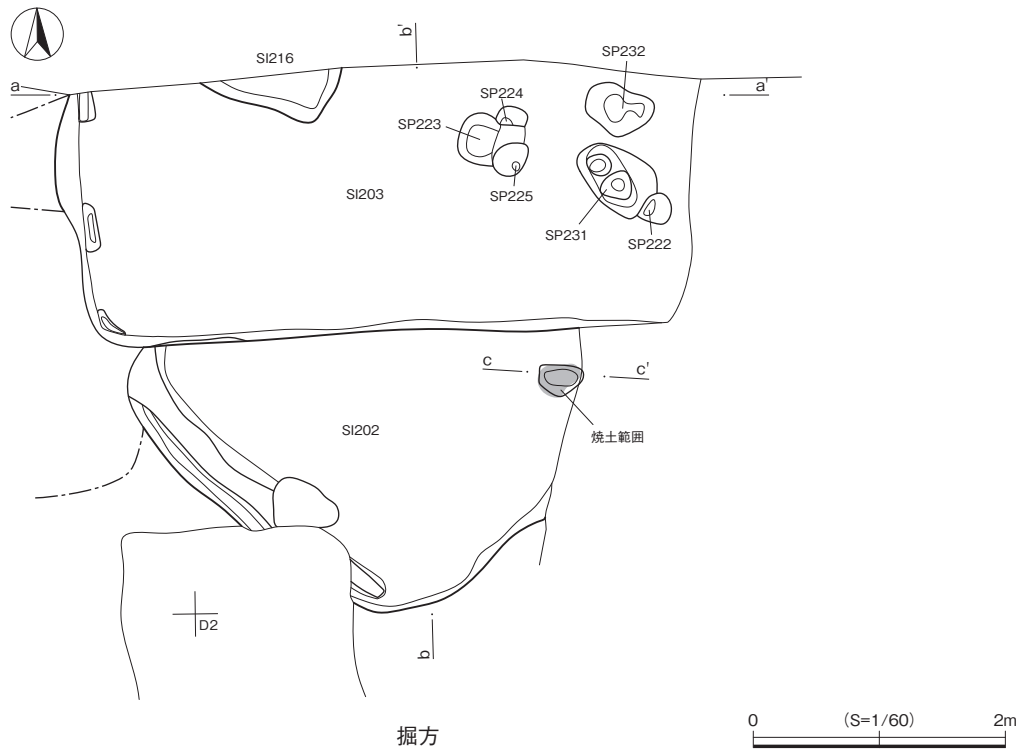
SI203遺物出土状況

遺物出土状況

V-8図 SI202、SI203、SI216(2)

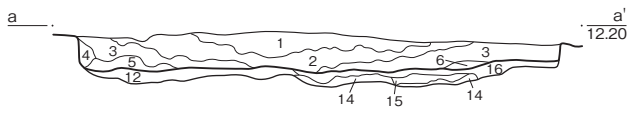
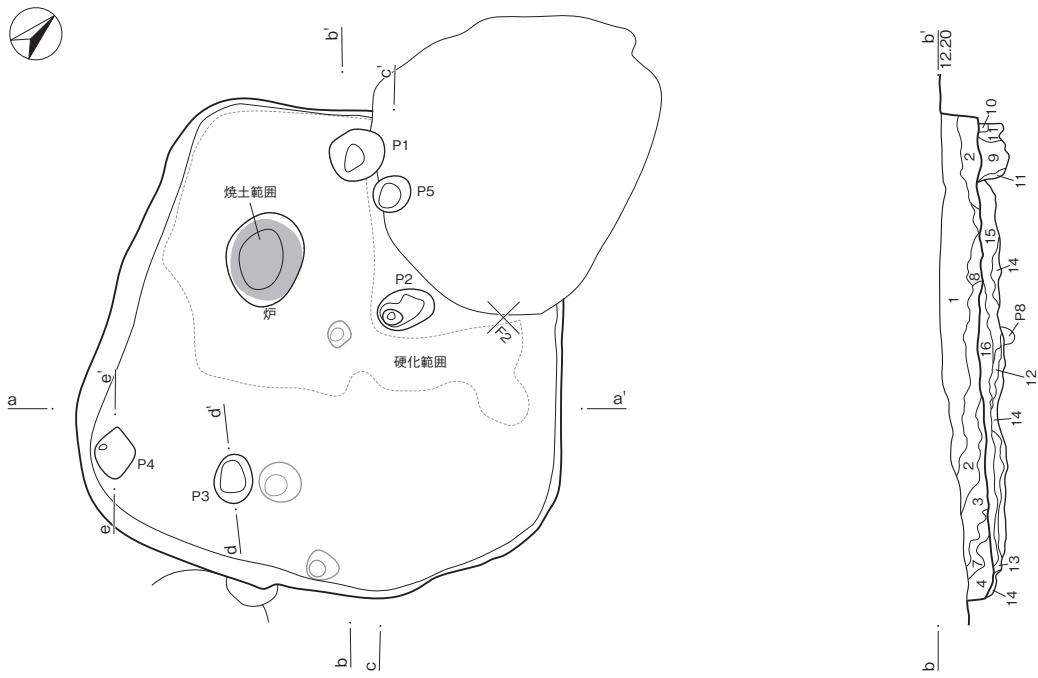


- 土器
- 実測遺物
- 接合

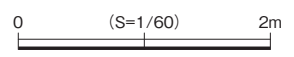


V-9図 SI202、SI203、SI216(3)

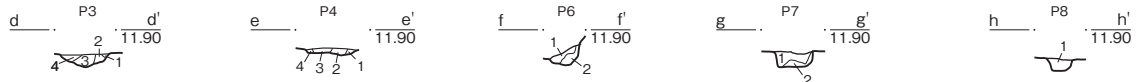
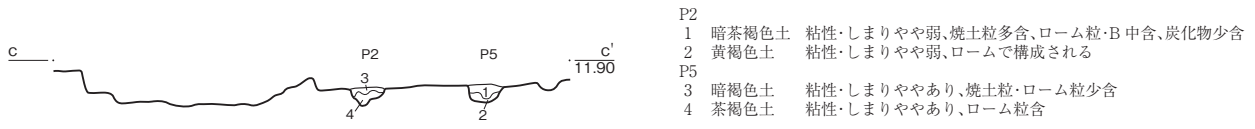
II 看護職員等宿舎5号棟地点



- 1 暗褐色土 ローム粒・カーボン粒子微含
- 2 暗茶褐色土 ローム粒少含、カーボン粒・焼土粒微含
- 3 暗茶褐色土 2層よりやや明、ローム粒少含
- 4 茶褐色土 しまりやや強い、ローム粒含、ロームB少含
- 5 暗褐色土 粘性やや強い、ローム粒・橙色スコリア少含
- 6 暗茶褐色土 粘性・しまりやや強、ローム粒微含、貼床か？
- 7 茶褐色土 ローム粒少含、赤色スコリア微含
- 8 暗茶褐色土 ローム粒・焼土粒少含、炭化物微含
- 9 茶褐色土 P1、粘性・しまりややあり、ローム粒・B少含、炭化物微含
- 10 褐色土 P1、粘性・しまりややあり、ローム粒・B少含
- 11 褐色土 P1、ローム粒極多含
- 12 褐色土 しまり強い、ローム粒子多含
- 13 暗茶褐色土 しまり強い、ローム粒子少含、炭化物微含
- 14 黄褐色土 しまりやや強、ほぼロームで構成される
- 15 茶褐色土 しまり強、ローム粒含、ロームB・焼土粒少含
- 16 暗茶褐色土 しまり強、ローム粒少含

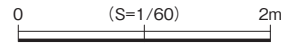


平面図・断面図(1)
V-10図 SI204(1)

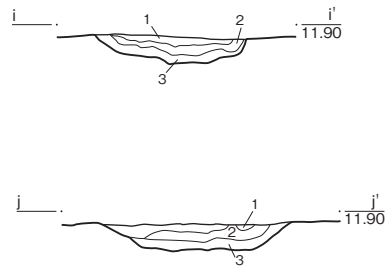
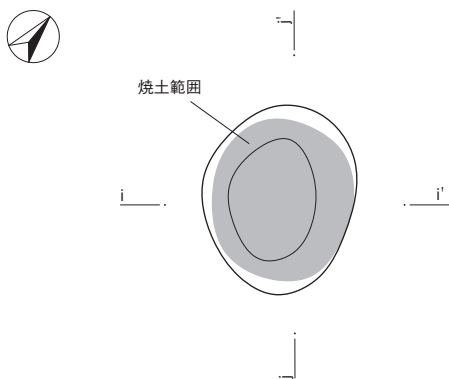


- P3
- 1 暗褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含
 - 2 茶褐色土 ほぼロームで構成される
 - 3 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・B 含
 - 4 暗褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含
- P4
- 1 褐色 粘性・しまりややあり、ほぼロームで構成される
 - 2 茶褐色 ローム粒多含
 - 3 暗褐色 粘性ややあり、ローム粒少含、焼土粒微含
 - 4 茶褐色 粘性・しまりややあり、ローム粒少含

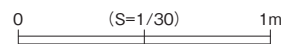
- P6
- 1 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含
 - 2 黄茶褐色土 粘性・しまりややあり、ロームで構成される
- P7
- 1 茶褐色 しまりややあり、ローム粒含、焼土粒微含
 - 2 黄褐色土 ロームで構成される
- P8
- 1 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒含



平面図・断面図(2)

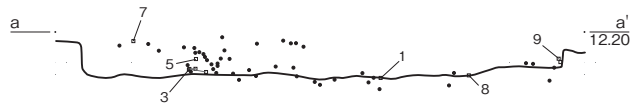
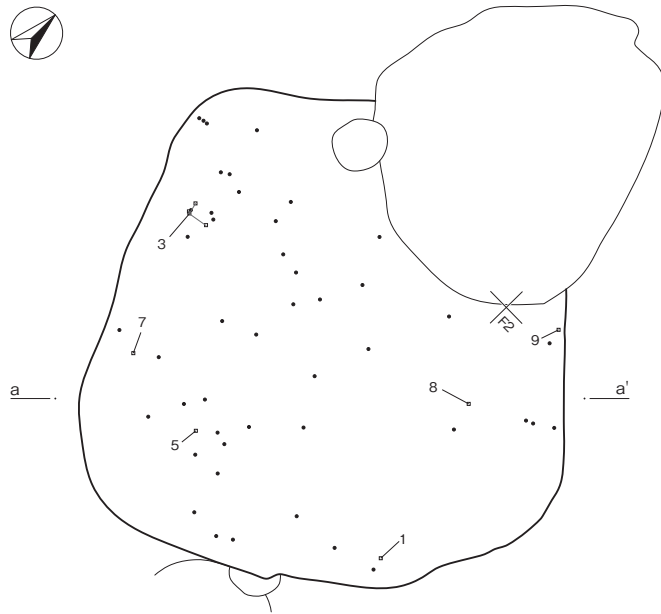


- 1 暗褐色土 しまりややあり、焼土粒含、ローム粒少含
- 2 橙褐色土 しまりややあり、焼土粒極多含、焼土B・ローム粒少含
- 3 暗褐色土 しまりややあり、ローム粒多含、焼土粒少含

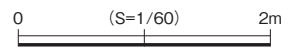
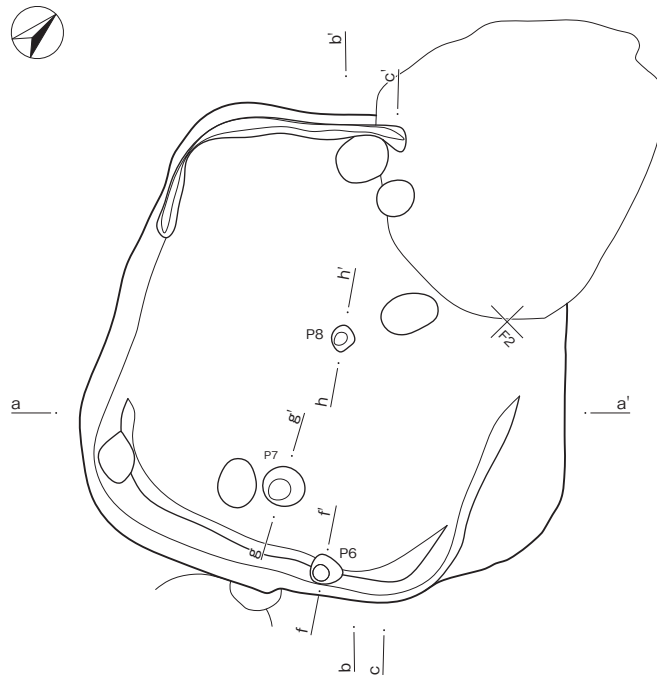


炉
V-11図 SI204(2)

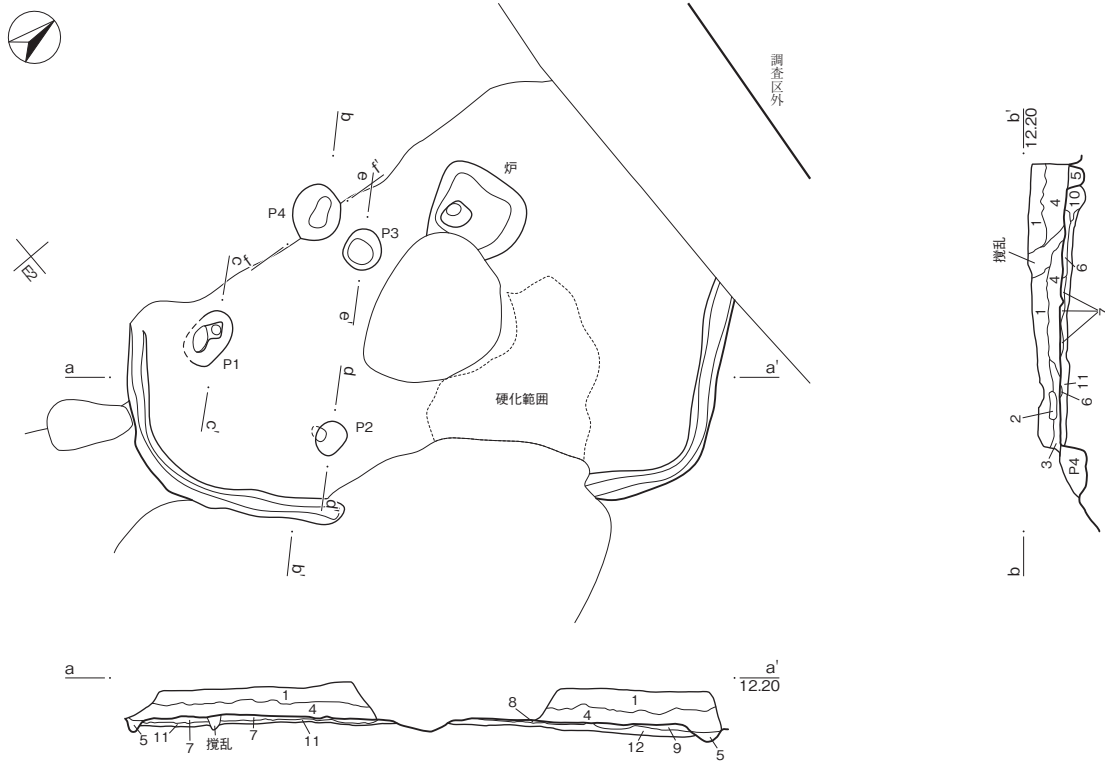
II 看護職員等宿舎5号棟地点



遺物出土状況



堀方
V-12図 SI204(3)

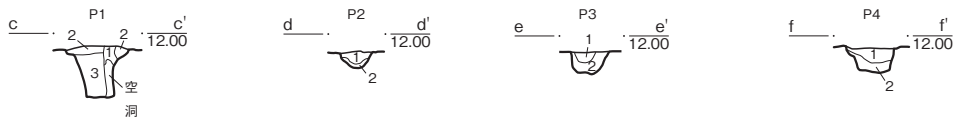


- | | | |
|----|-------|---------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | ローム粒多含、2に比べしまりが弱く、やや暗い |
| 2 | 暗茶褐色土 | しまりやや強、焼土粒含 |
| 3 | 褐色土 | しまり強、ロームB、ローム粒多含、 |
| 4 | 暗褐色土 | ローム粒多含、ロームB少含 |
| 5 | 暗茶褐色土 | ローム粒少含、壁溝 |
| 6 | 暗褐色土 | しまり強、硬化面、ローム粒微含 |
| 7 | 暗褐色土 | しまり強、やや明るい、ローム粒・ロームB多含 |
| 8 | 暗褐色土 | しまり極強、硬化面、ローム粒多含、焼土粒微含 |
| 9 | 暗褐色土 | しまり極強、やや明るい、ローム粒多含、ロームB少含 |
| 10 | 暗茶褐色土 | しまりやや弱、ローム粒多含 |
| 11 | 黄褐色土 | しまり強、ローム主体、暗褐色土含 |
| 12 | 暗褐色土 | 焼土粒・ローム粒・ロームB含 |

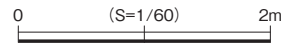
0 (S=1/60) 2m

平面図・断面図(1)
V-13図 SI205(1)

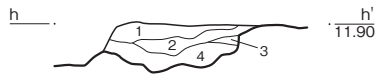
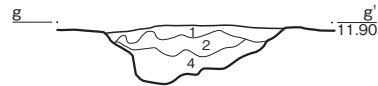
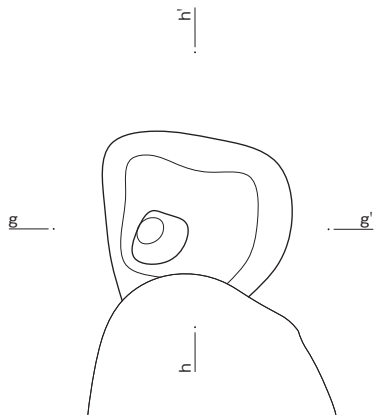
II 看護職員等宿舍5号棟地点



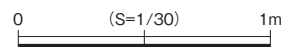
- P1
 1 茶褐色土 粘性ややあり、しまりややあり、ローム粒多含
 2 褐色土 粘性ややあり、ローム主体
 3 黄褐色土 粘性ややあり、ローム主体
- P2
 1 暗褐色土 しまりややあり、ローム粒少含
 2 黄褐色土 しまりややあり、ローム主体
- P3
 1 暗褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含
 2 褐色土 しまりややあり、ローム粒多含
- P4
 1 暗褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含、焼土粒微含
 2 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒多含



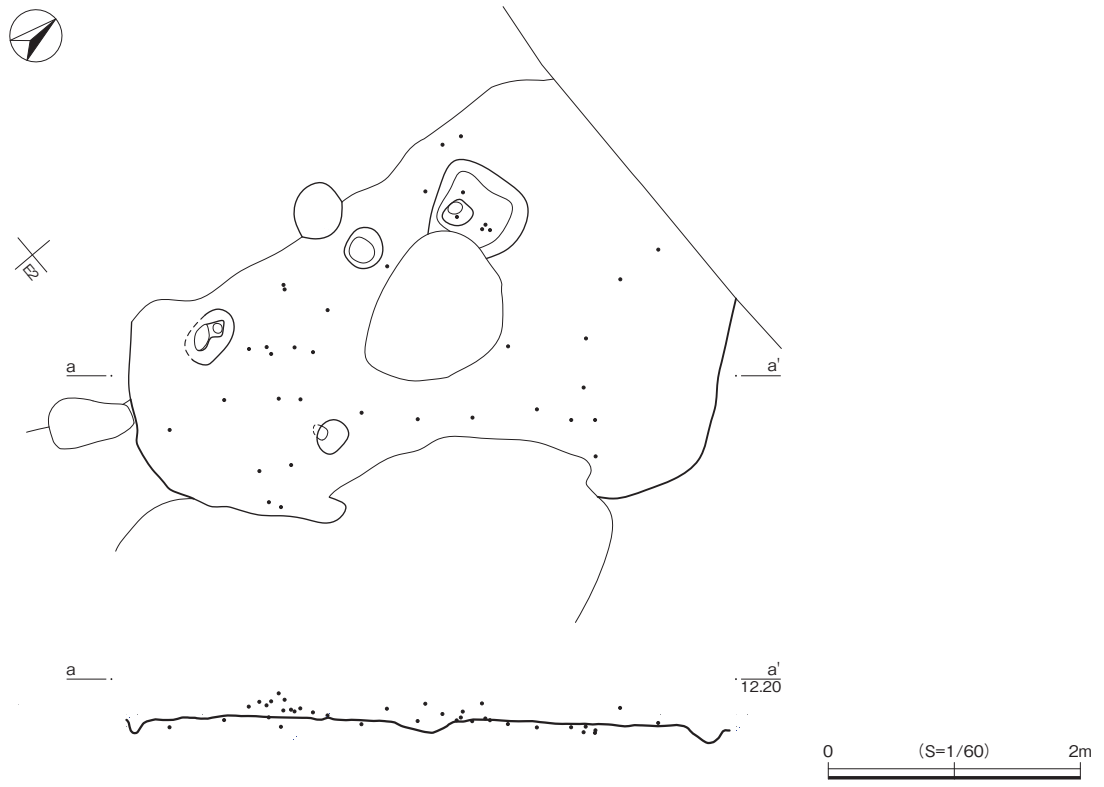
平面図・断面図(2)



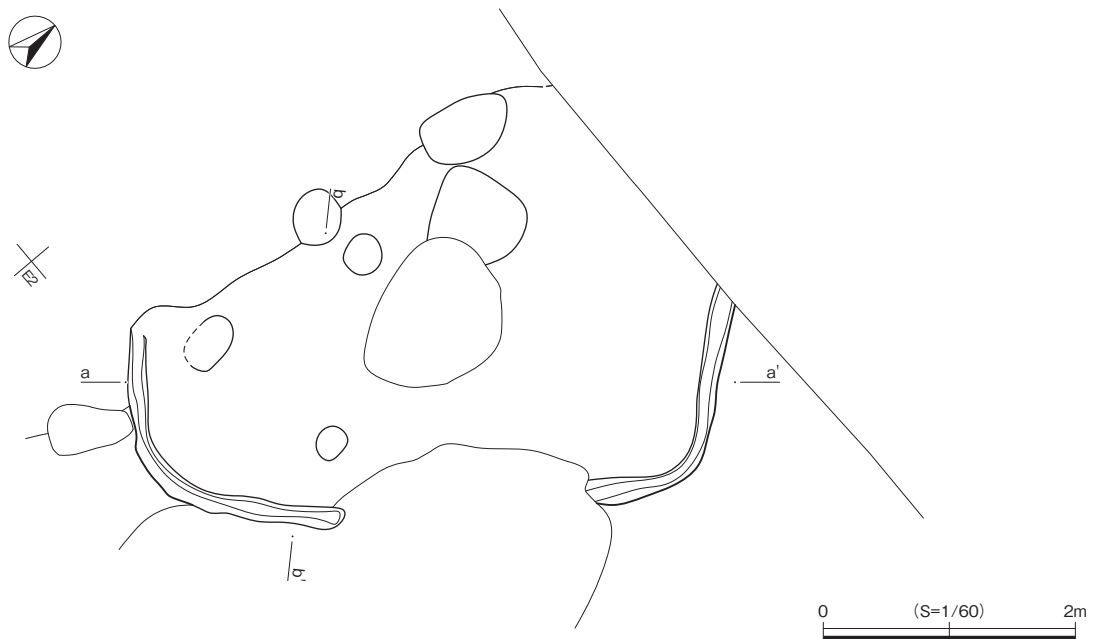
- 1 暗褐色土 粘性・しまりややあり、焼土粒多含、ローム粒少含
 2 赤褐色土 純焼土層
 3 暗茶褐色土 粘性・しまり弱、焼土粒含
 4 黄褐色土 粘性なし、しまり弱、ローム主体、焼土粒微含



炉
 V-14図 SI205(2)

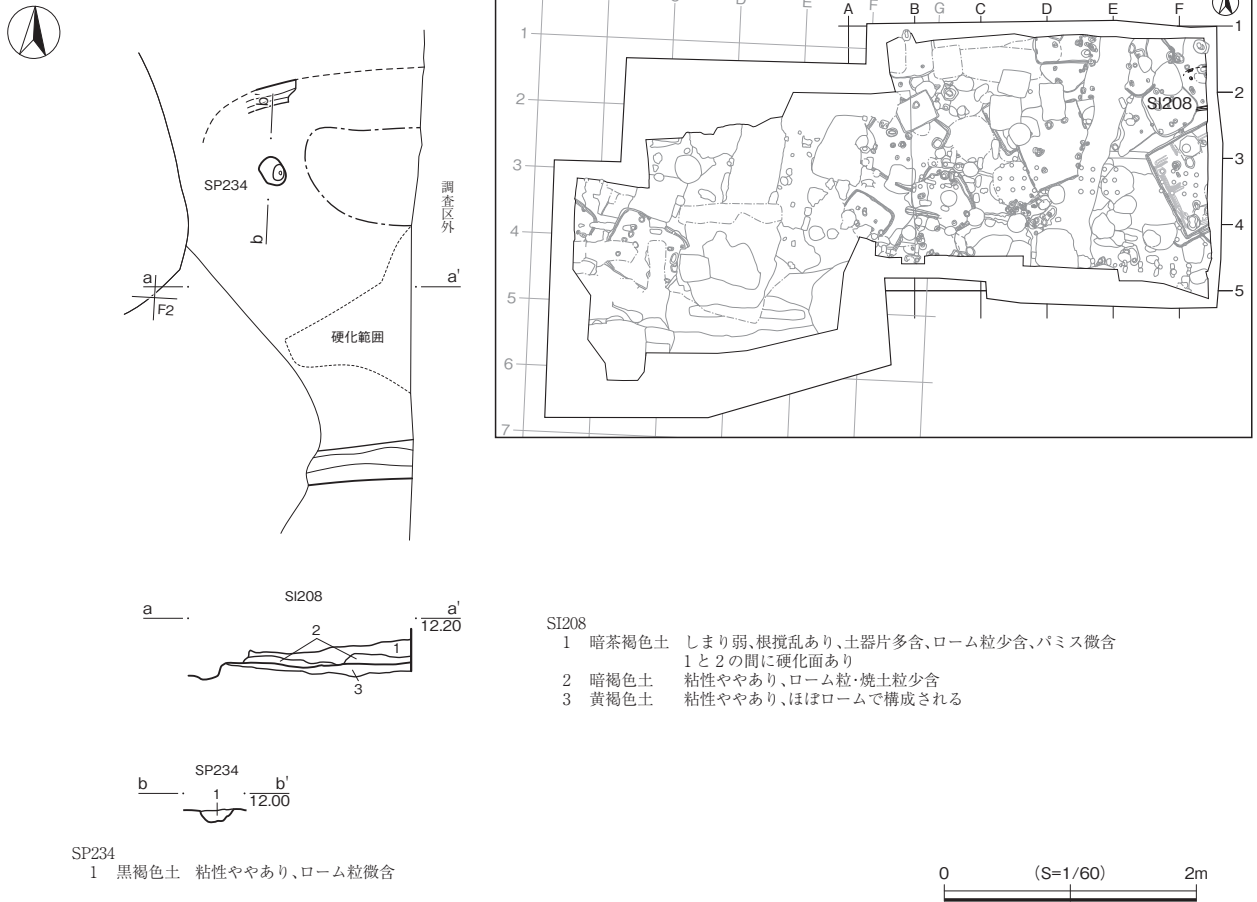


遺物出土状況

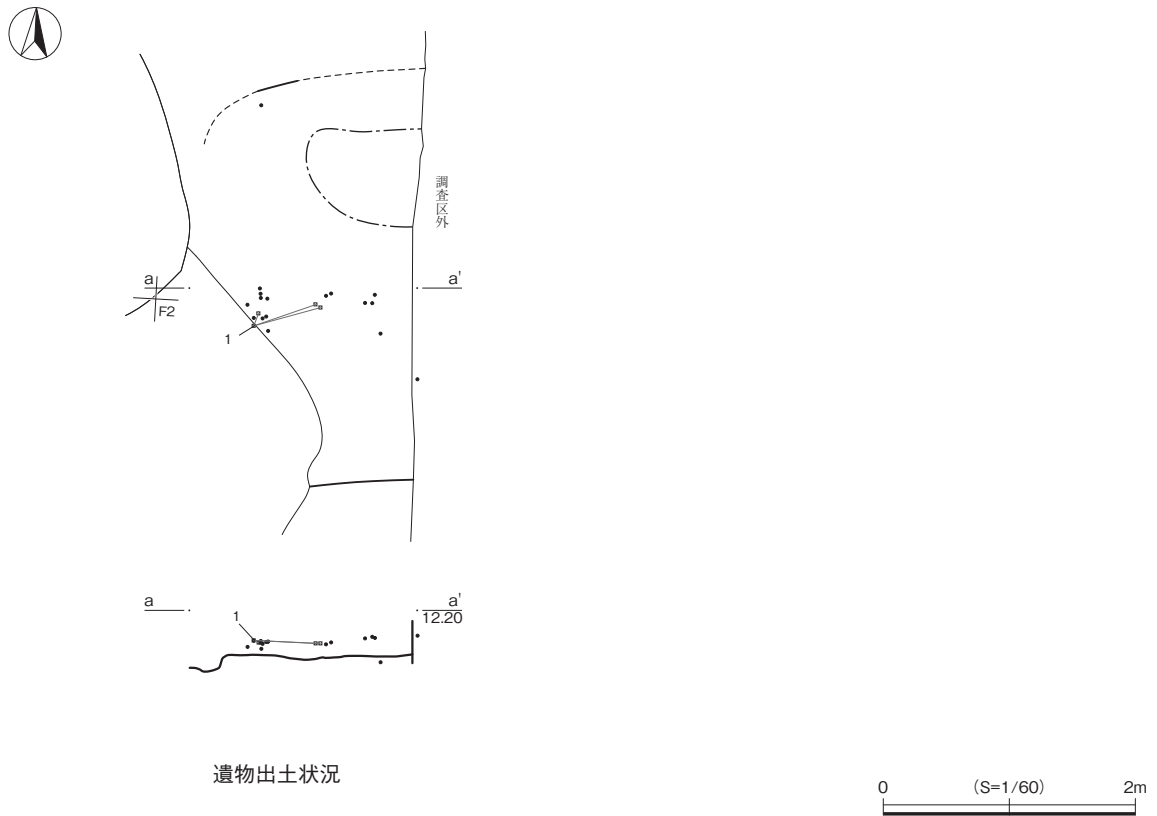


掘方
V-15図 SI205(3)

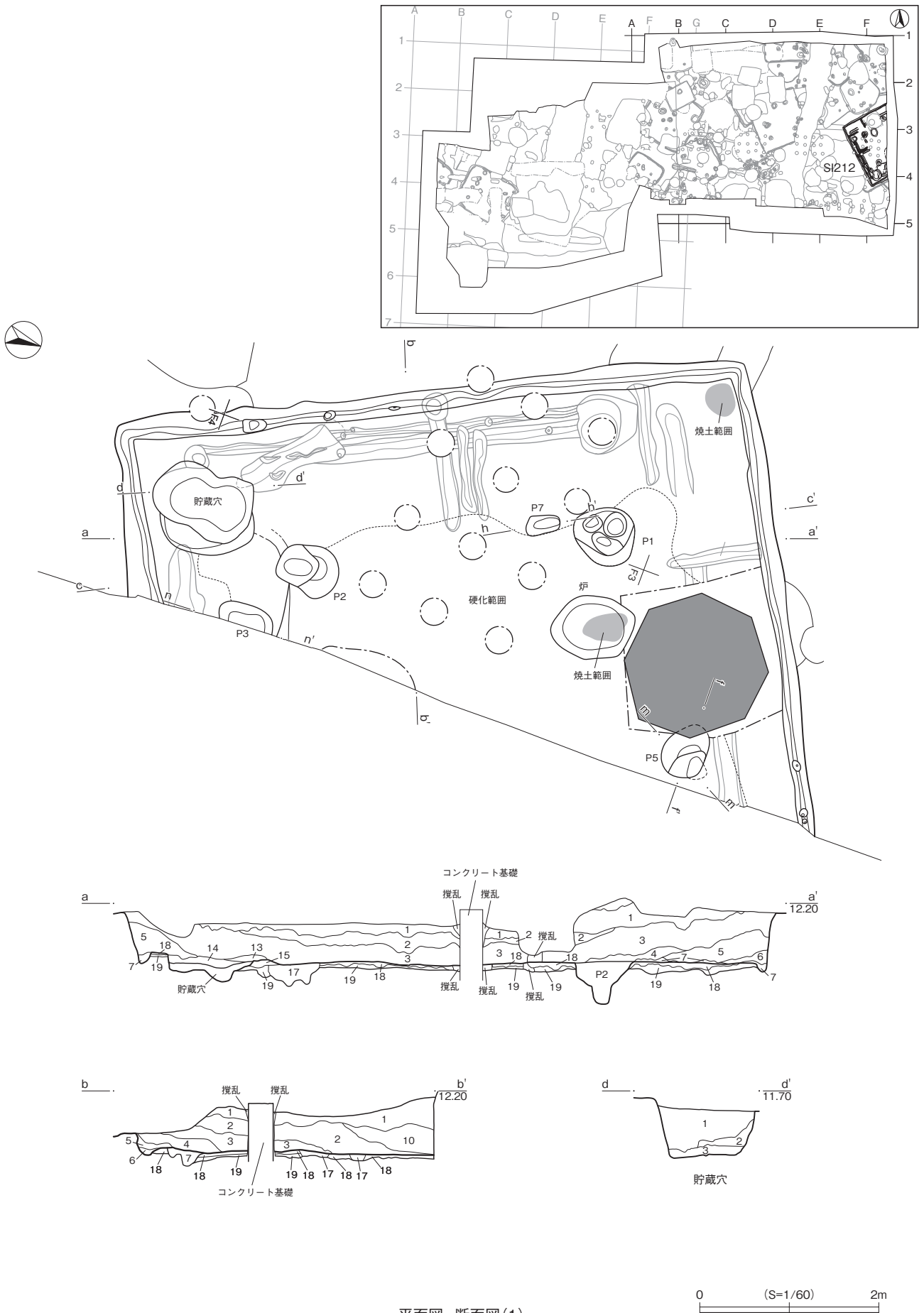
II 看護職員等宿舎5号棟地点



平面図・断面図



V-16図 SI208



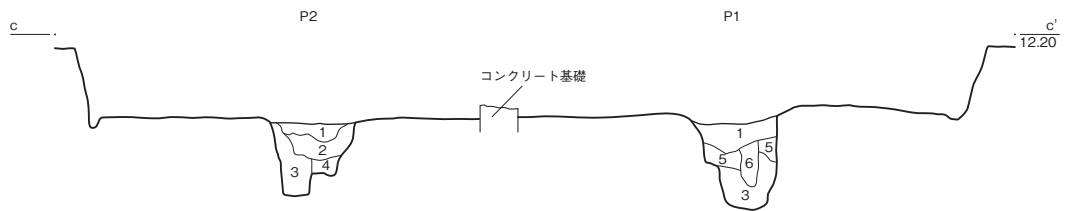
平面図・断面図(1)
V-17図 SI212(1)

II 看護職員等宿舎5号棟地点

- 1 黒褐色土 しまりややあり、ローム粒微含
- 2 暗褐色土 ローム粒少含、焼土粒微含
- 3 褐色土 ローム粒含、焼土粒・遺物微含
- 4 褐色土 しまりややあり、ローム粒少含、焼土粒・炭化物微含
- 5 暗褐色土 粘性やや強、ローム粒少含、ロームB微含
- 6 褐色土 しまりややあり、ローム粒多含、ロームB少含、焼土粒微含
- 7 褐色土 ローム粒多含
- 8 褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒含、貯蔵穴
- 9 暗褐色土 ローム粒含、焼土粒・炭化物微含
- 10 茶褐色土 ローム粒多含、ロームB少含
- 11 褐色土 粘性ややあり、しまりやや強、炭化物微含
- 12 黄褐色土 粘性ややあり、しまりやや強、ほぼロームで構成される
- 13 褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒極多含
- 14 暗褐色土 粘性ややあり、ローム粒少含
- 15 褐色土 粘性ややあり、しまり強、旧床面
- 16 褐色土 ローム粒・焼土粒少含
- 17 暗褐色土 ローム粒多含、ロームブロック少含
- 18 褐色土 しまり強、ローム粒・小B多含
- 19 黄褐色土 ロームで構成される

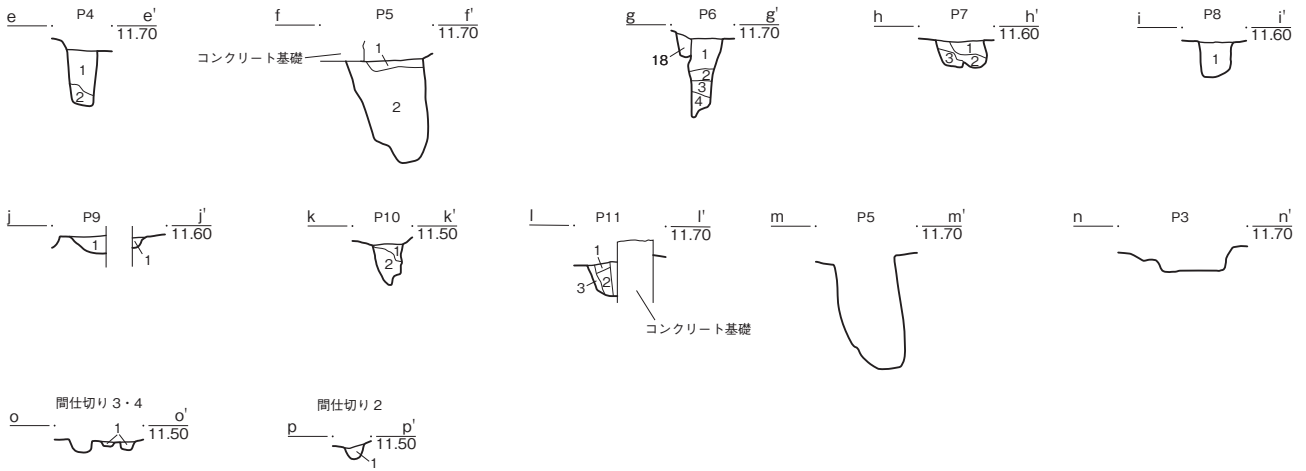
貯蔵穴

- 1 暗褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含
- 2 暗褐色土 2層より明、粘性・しまりややあり、ローム粒少含
- 3 暗灰褐色土 しまりやや強、ローム粒少含



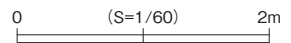
- P1-2
- 1 暗褐色土 ローム粒含、焼土粒・炭化物微含
 - 2 茶褐色土 ローム粒多含、ロームB少含
 - 3 褐色土 粘性ややあり、しまりやや強、炭化物微含
 - 4 黄褐色土 粘性ややあり、しまりやや強、ほぼロームで構成される

- 5 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒含
- 6 明茶褐色土 粘性・しまりやや弱、ローム粒含、柱痕

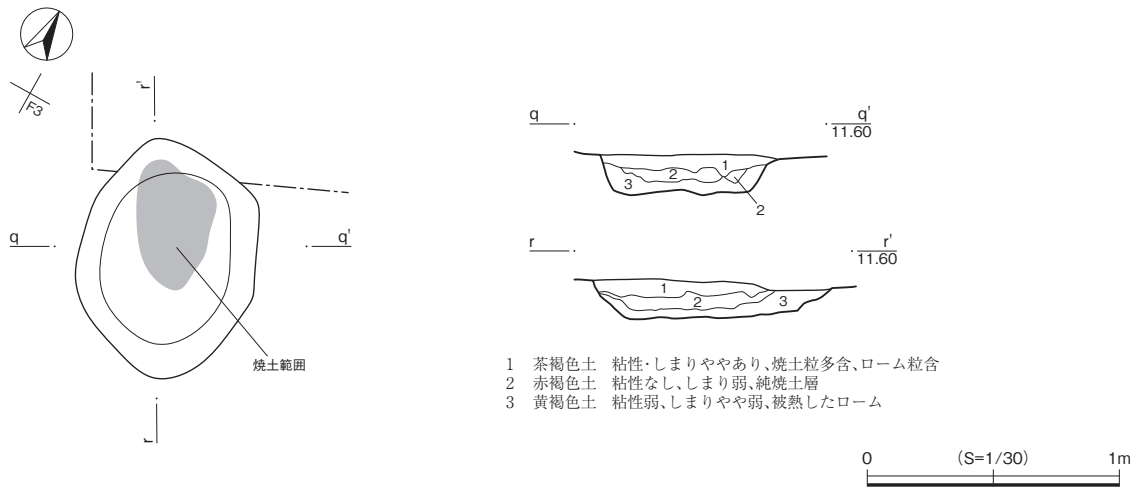


- P4
- 1 暗褐色土 ローム粒含
 - 2 暗褐色土 粘性やや弱、しまり弱、ローム粒多含
- P5
- 1 暗褐色土 粘性ややあり、しまりやや弱、ローム粒少含
 - 2 暗褐色土 粘性・しまりなし、ロームB含
- P6
- 1 暗褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・小B含
 - 2 暗褐色土 ローム粒多含
 - 3 暗茶褐色土 しまりやや強、ローム粒含
 - 4 茶褐色土 粘性・しまり強、ローム粒・B多含
- P7
- 1 黒褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・焼土粒少含
 - 2 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒含
 - 3 黒褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含

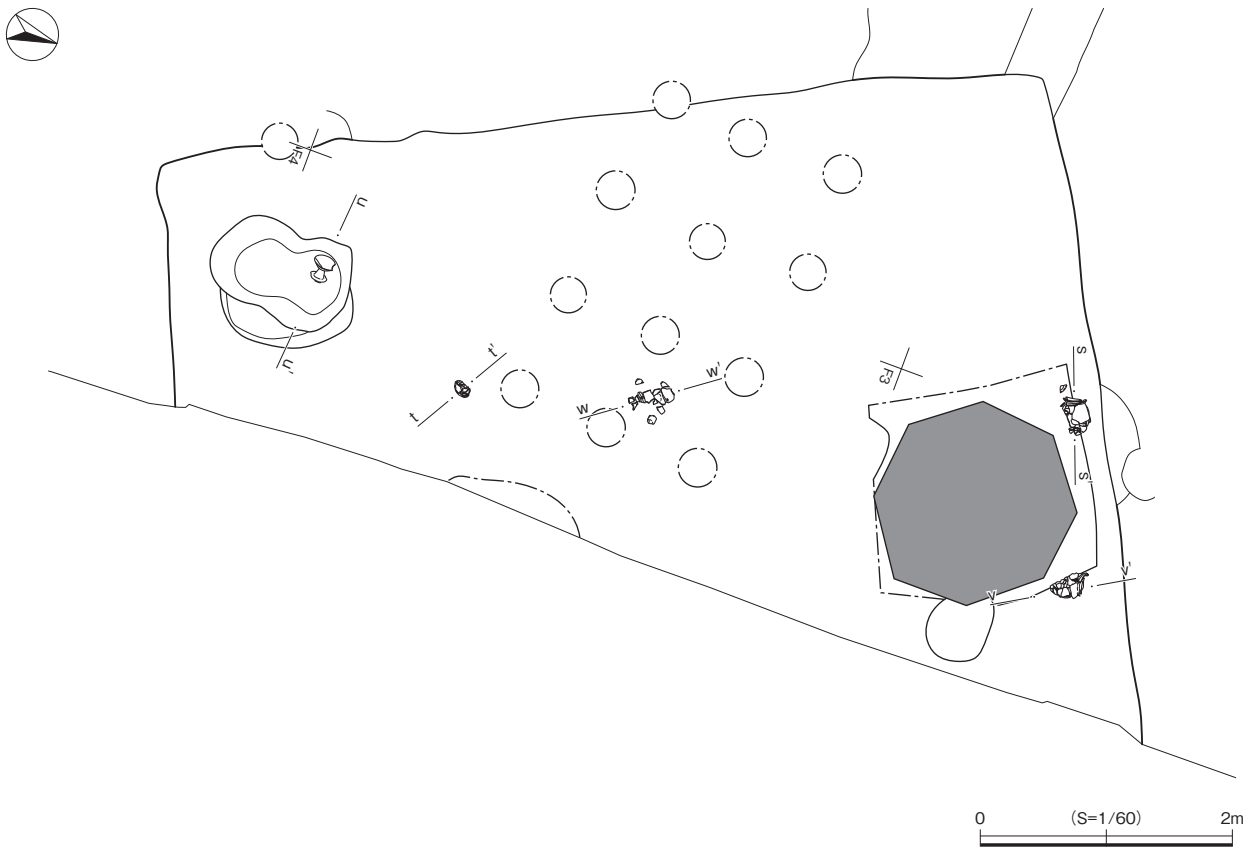
- P8
- 1 褐色土 しまりややあり、ほぼロームで構成される
- P9
- 1 褐色土 しまりやや強、ローム粒・B含
- P10
- 1 褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒・B多含
 - 2 茶褐色土 粘性・しまりやや弱、ローム粒少含
- P11
- 1 茶褐色土 しまりやや強、ローム粒少含
 - 2 褐色土 しまり強、ローム粒・Bでほぼ構成される
 - 3 黄褐色土 しまり強、ローム粒で構成される
- 間仕切り2
- 1 褐色土 粘性・しまりややあり、ほぼロームで構成される
- 間仕切り3・4
- 1 褐色土 粘性・しまりややあり、ほぼロームで構成される



平面図・断面図(2)
V-18図 SI212(2)

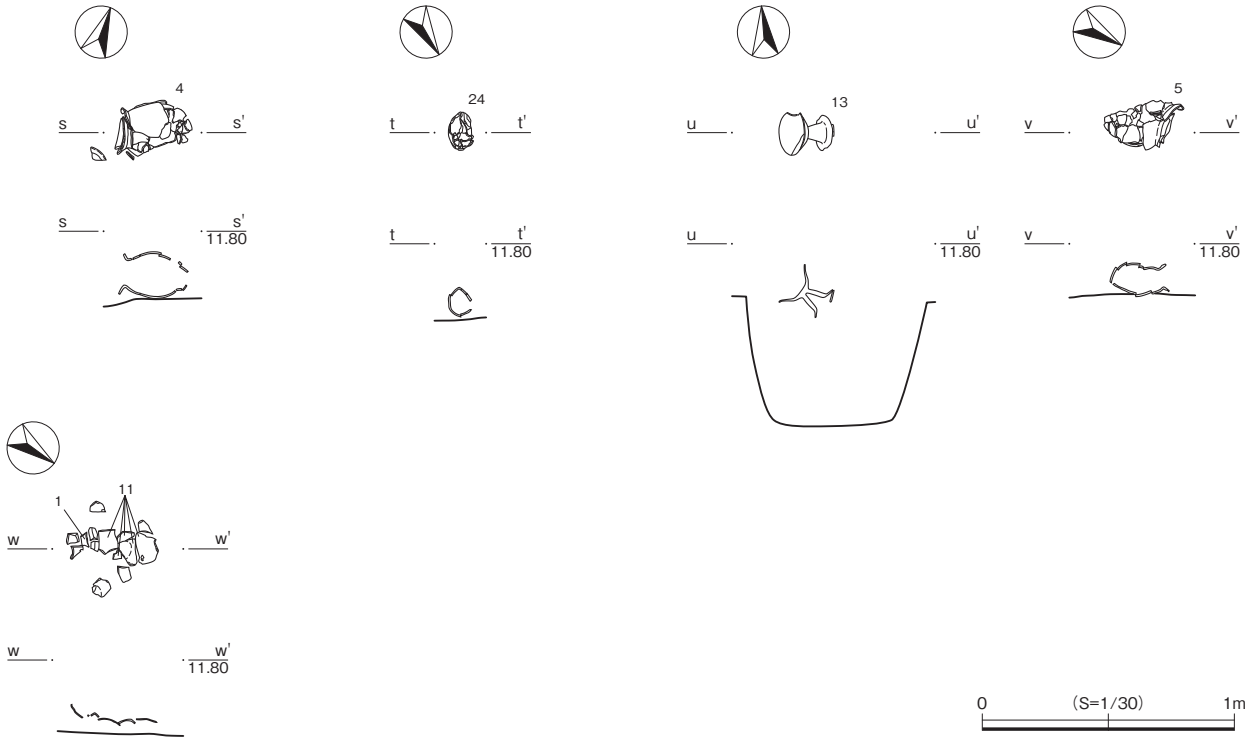


炉

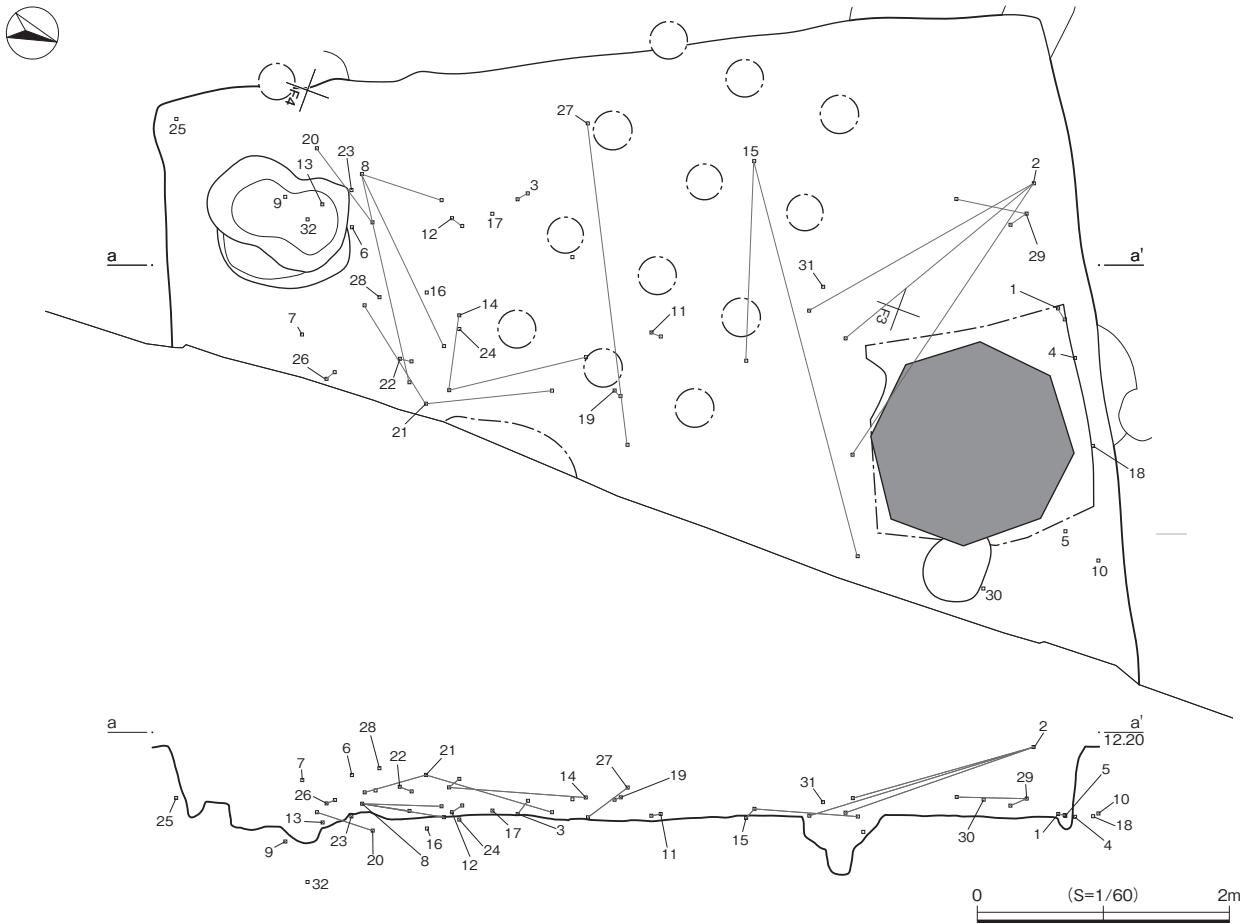


遺物出土状況(1)
 V-19図 SI212(3)

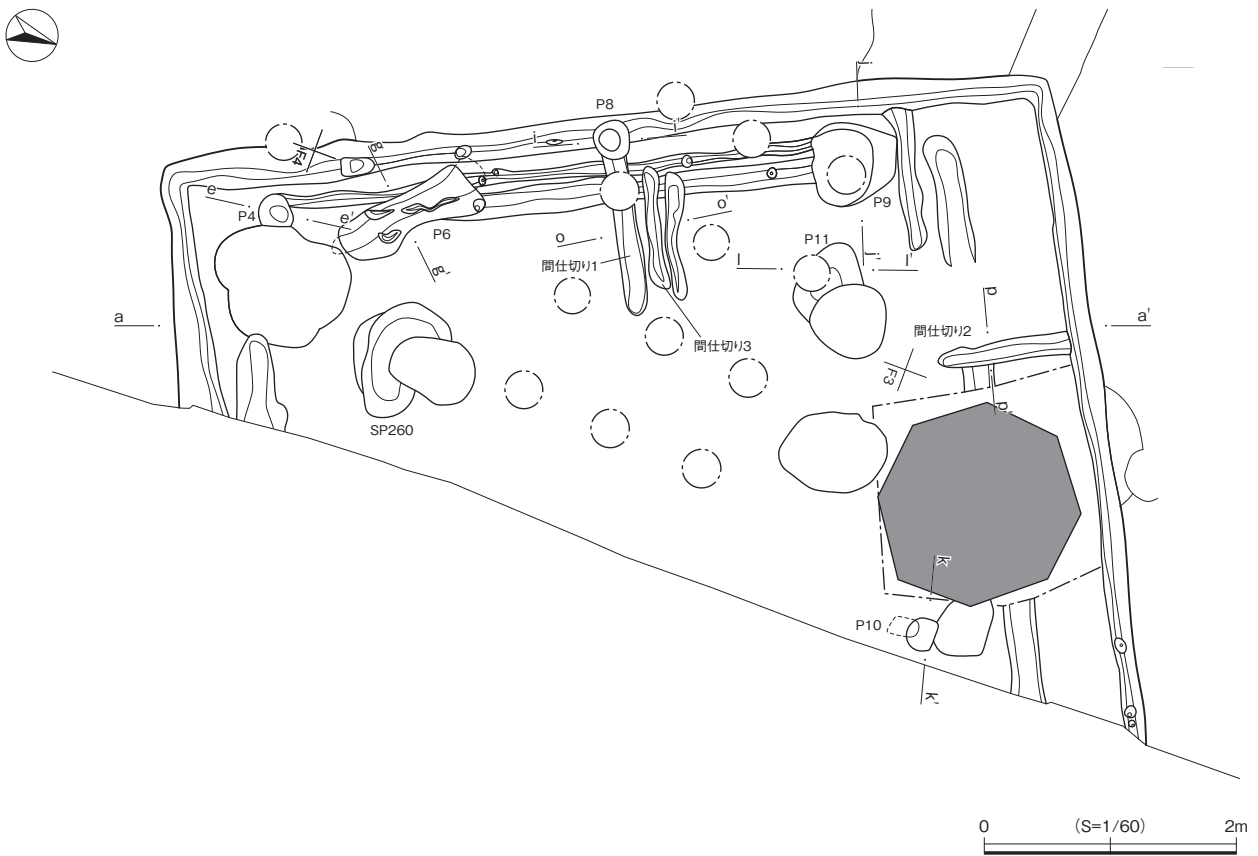
II 看護職員等宿舎5号棟地点



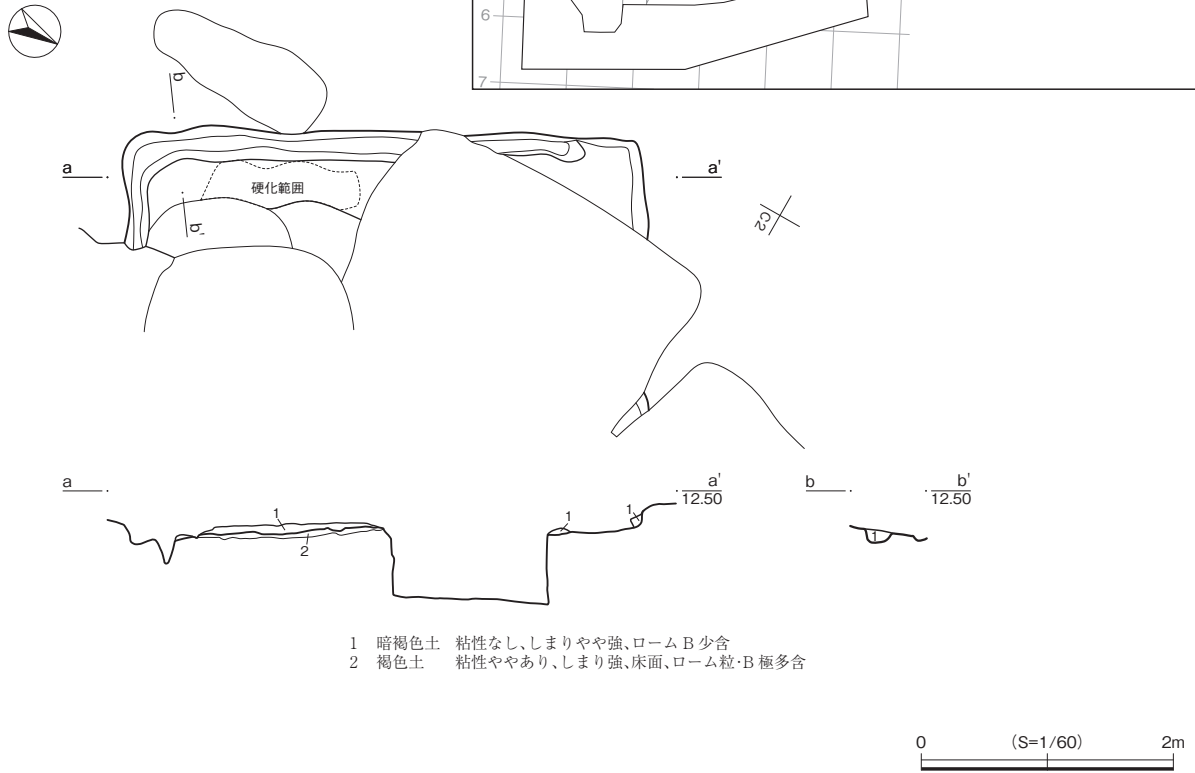
出土遺物微細図(1)



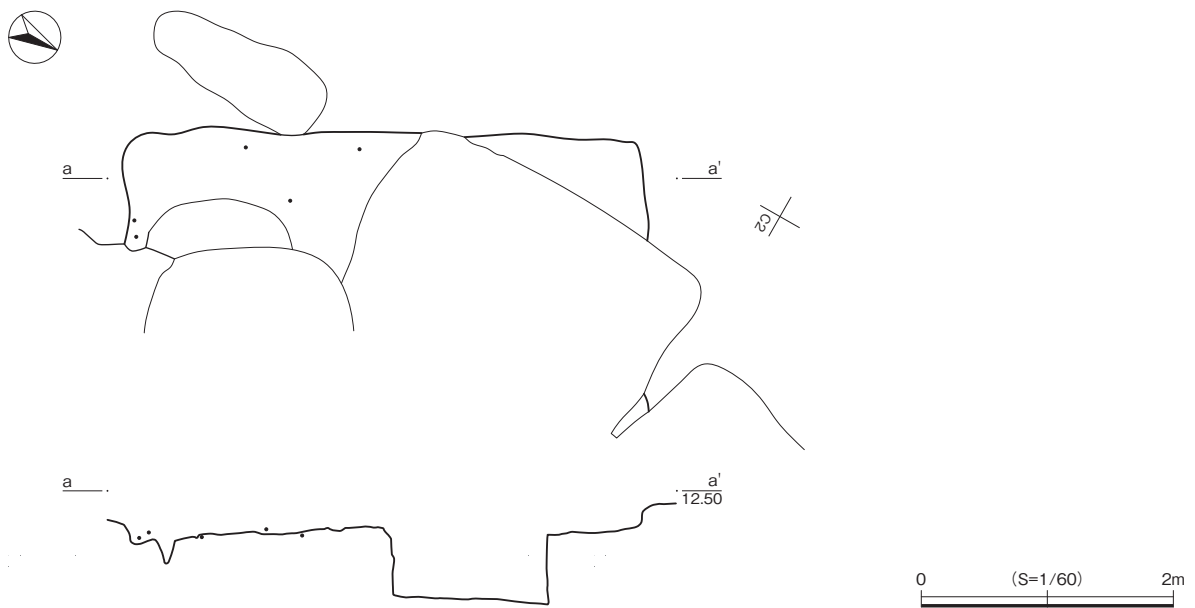
遺物出土状況(2)
V-20図 SI212(4)



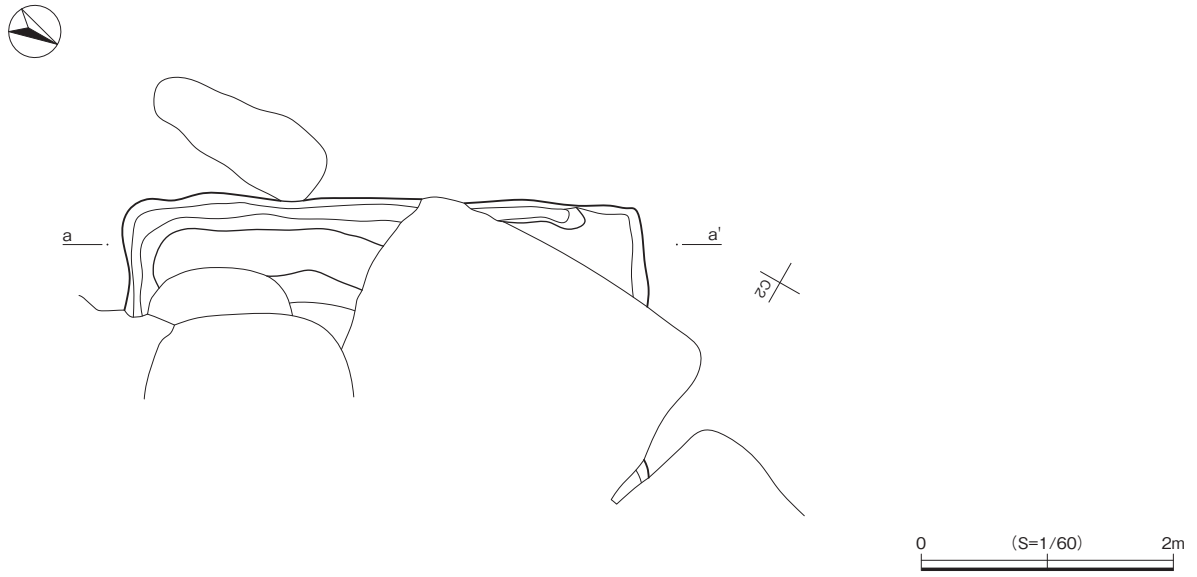
II 看護職員等宿舎5号棟地点



平面図・断面図

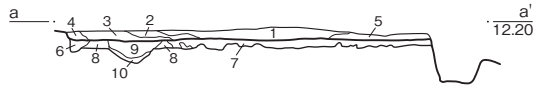
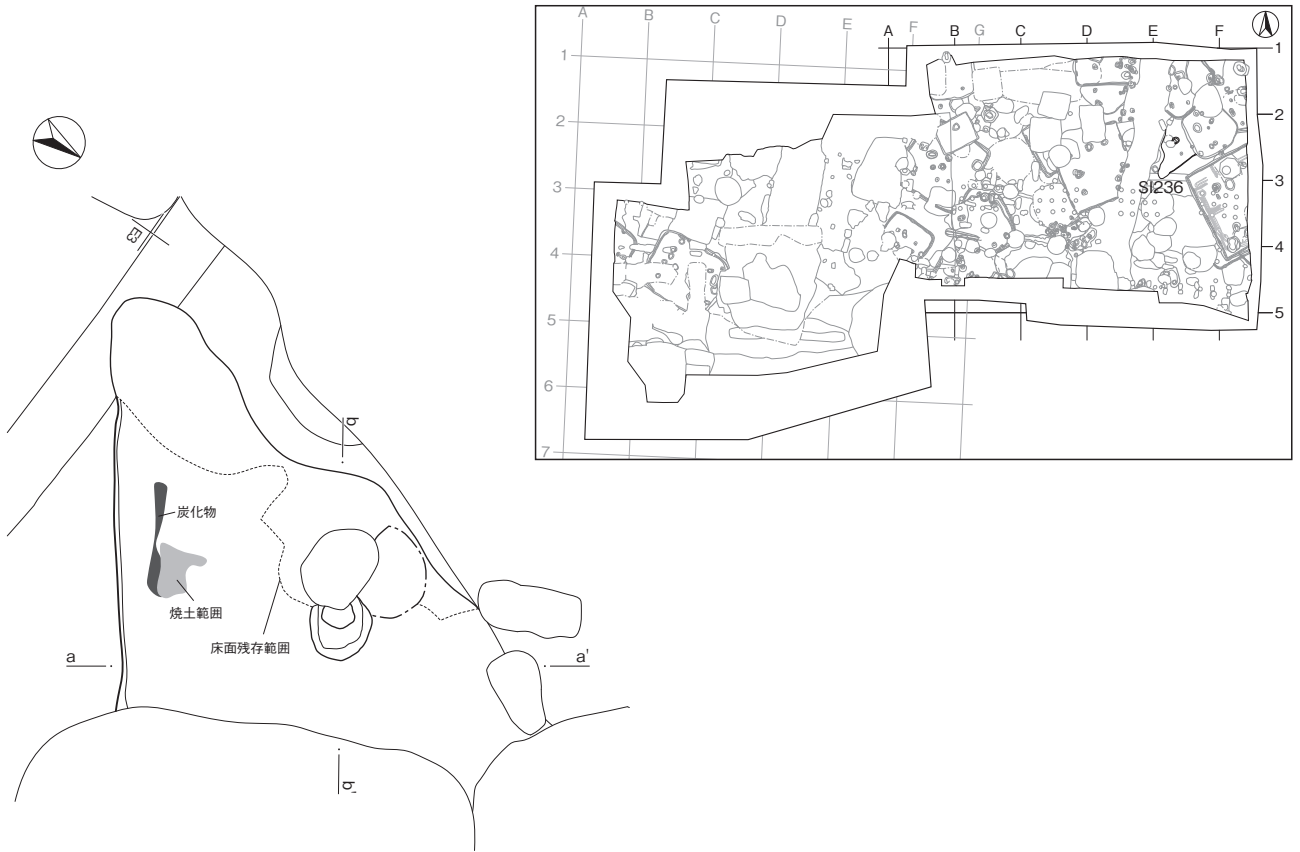


遺物出土状況
 V-22図 SI214(1)

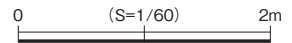


掘方
V-23図 SI214(2)

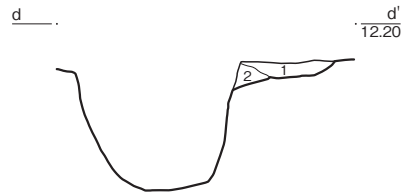
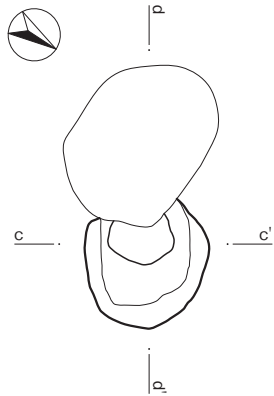
II 看護職員等宿舎5号棟地点



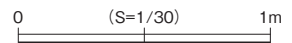
- 1 暗褐色土 焼土粒微含、ローム粒含
- 2 暗褐色土 ロームB多含
- 3 暗褐色土 粘性・しまり極強、焼土粒少含、ロームB微含
- 4 暗茶褐色土 混入物なし
- 5 暗褐色土 ローム粒多含、ロームブロック少含、焼土粒微含
- 6 暗黄茶褐色土 ローム含、しまり弱、粘性ややあり、周溝
- 7 黒褐色土 粘性ややあり、しまり強、焼土粒微含、ローム粒・ロームB多含
- 8 暗茶褐色土 粘性ややあり、しまりやや強、黒褐色土・ロームB含
- 9 暗褐色土 粘性ややあり、しまり強、焼土粒微含、ローム粒・ロームB多含
- 10 暗黄褐色土 粘性弱、しまり強、ローム主体、暗褐色土、黒褐色土少含



平面図・断面図

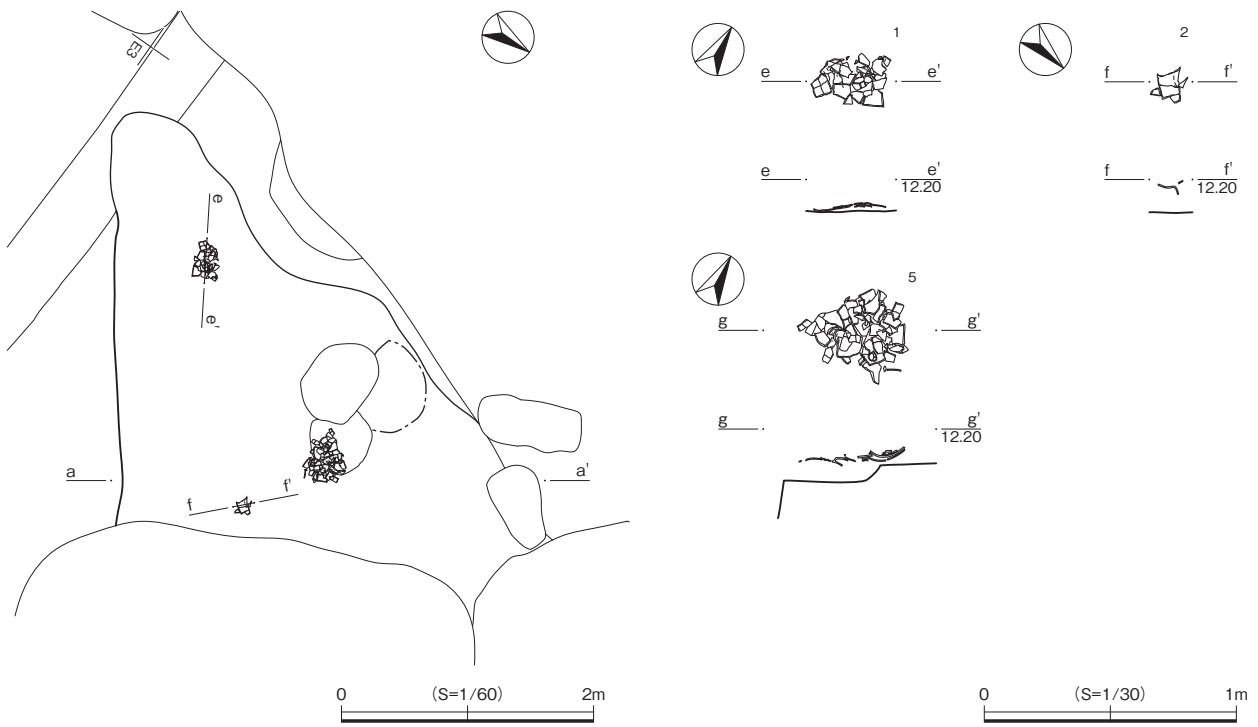


- 1 暗褐色土 焼土粒・ロームB含
- 2 赤褐色土 粘性弱、焼土粒主体、黒褐色土微含

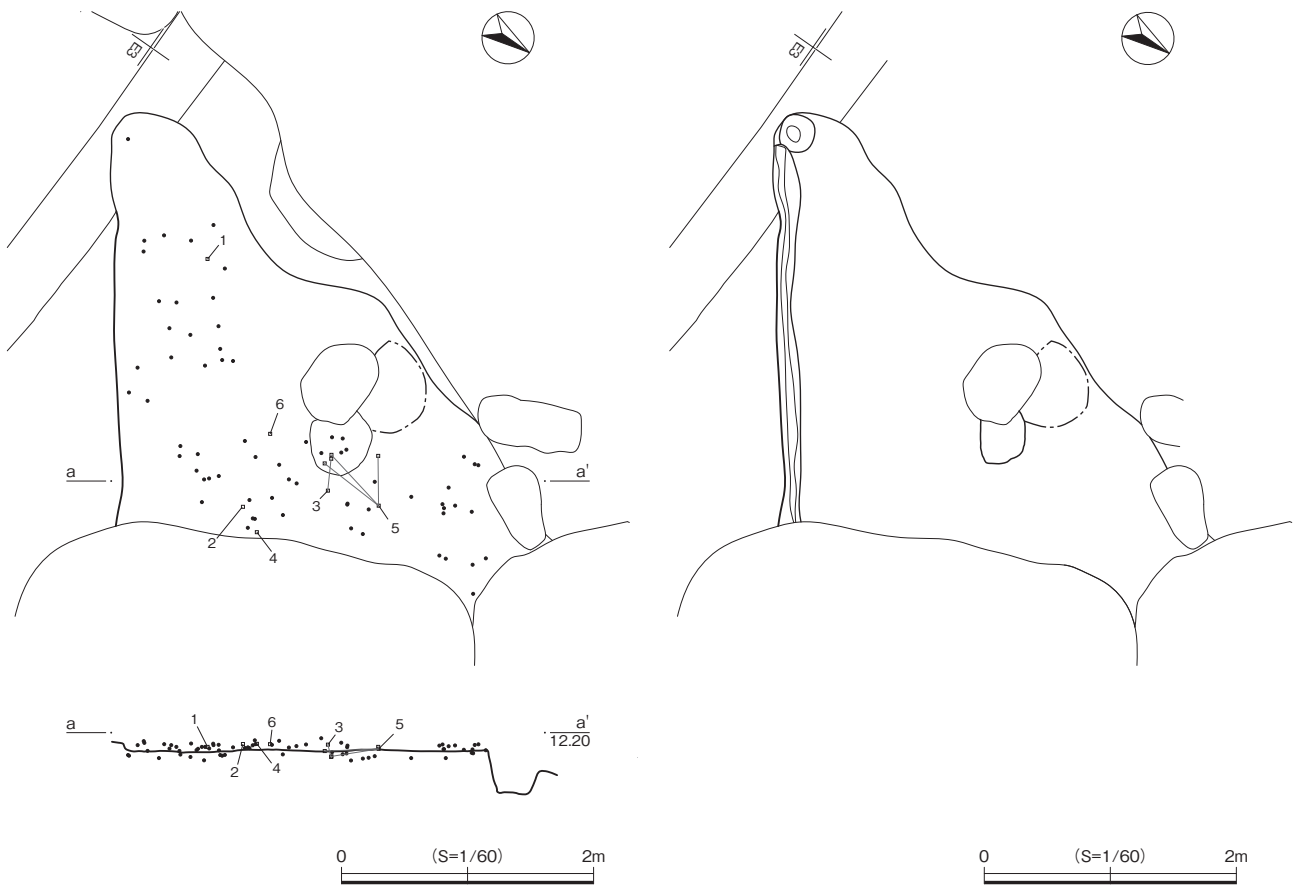


炉

V-24図 SI236(1)



遺物出土状況(1)、遺物微細図

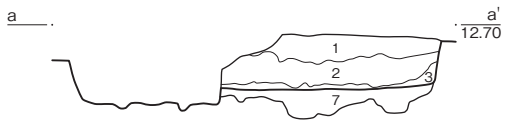
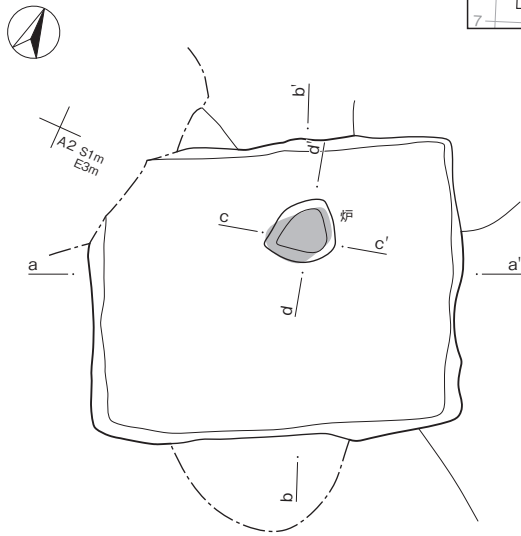
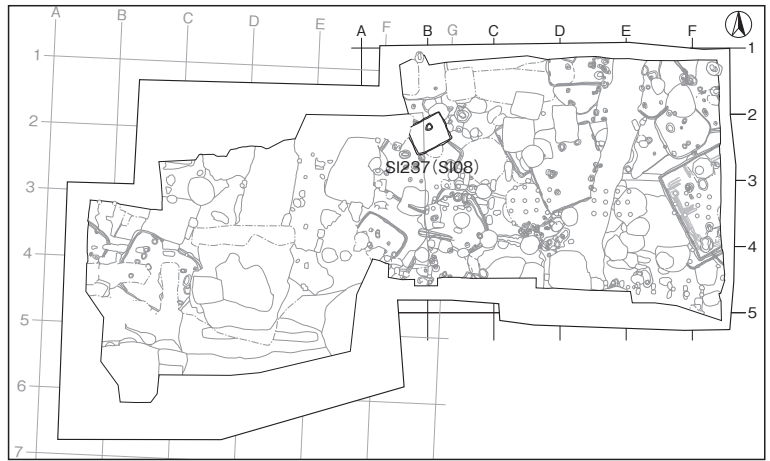


遺物出土状況(2)

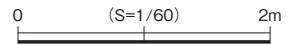
掘方

V-25図 SI236(2)

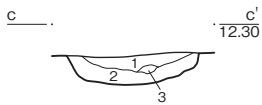
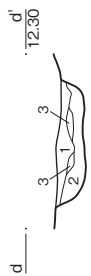
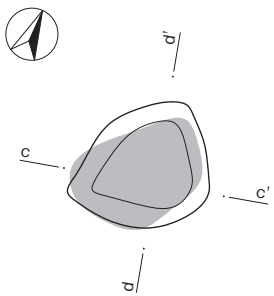
II 看護職員等宿舎5号棟地点



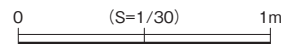
- | | |
|---------|--------------------------|
| 1 暗褐色土 | 粘性ややあり、ローム粒少含、小礫微含 |
| 2 暗茶褐色土 | 粘性ややあり、ローム粒含、焼土粒微含 |
| 3 茶褐色土 | ローム粒多含 |
| 4 茶褐色土 | 粘性ややあり、しまり強、ローム粒含 |
| 5 暗褐色土 | しまりややあり、焼土粒・ローム粒少含 |
| 6 黒褐色土 | 粘性・しまりややあり、ローム粒・B含 |
| 7 暗褐色土 | 粘性ややあり、しまり強、ローム粒・B極多含、床面 |



平面図・断面図

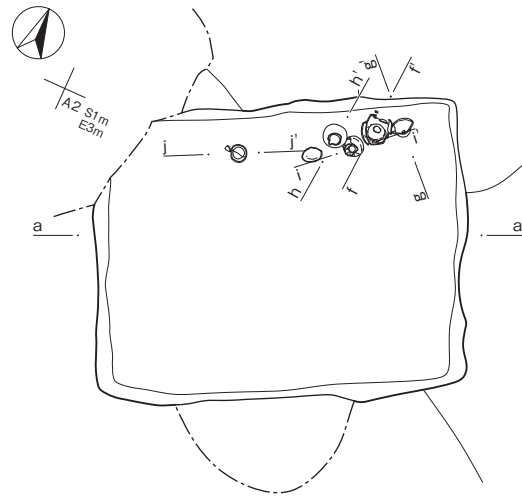


- | | |
|---------|--------------------------------|
| 1 暗茶褐色土 | 粘性やや弱、しまりややあり、焼土粒含、ローム粒少含 |
| 2 黄褐色土 | 粘性・しまりややあり、ほぼロームとロームBで構成、焼土粒微含 |
| 3 橙褐色土 | 粘性・しまりなし、純焼土層 |



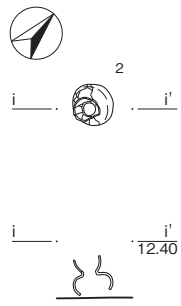
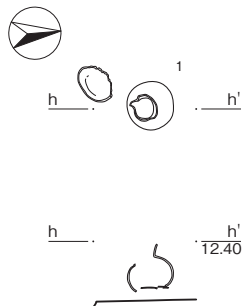
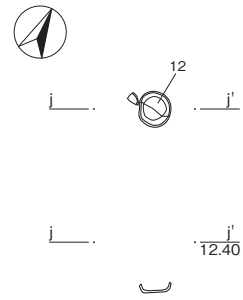
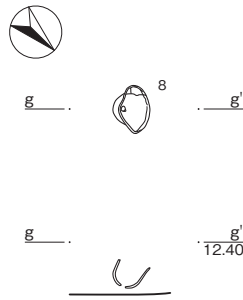
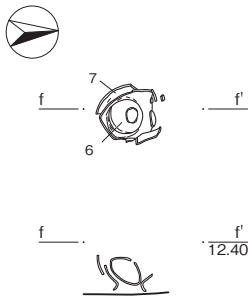
炉

V-26図 SI237(SI08) (1)



0 (S=1/60) 2m

遺物出土状況(1)

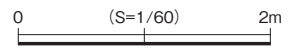
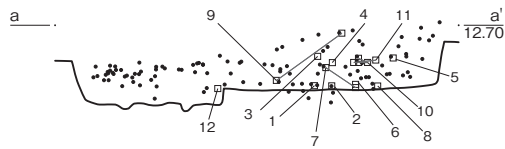
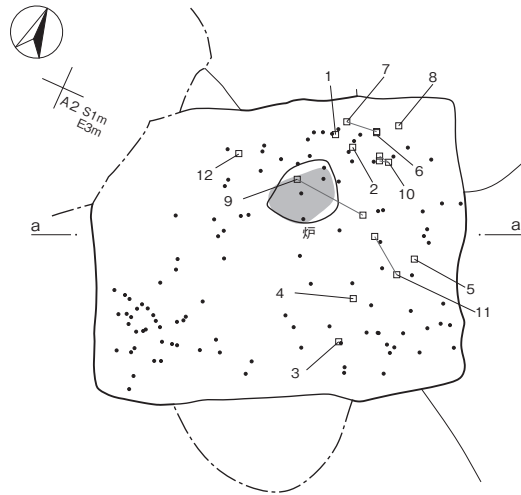


0 (S=1/30) 1m

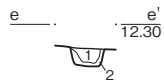
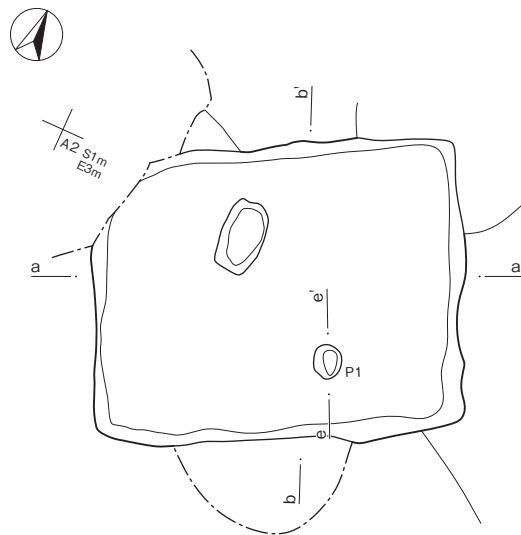
出土遺物微細図

V-27図 SI237(SI08) (2)

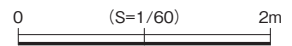
II 看護職員等宿舎5号棟地点



遺物出土状況(2)

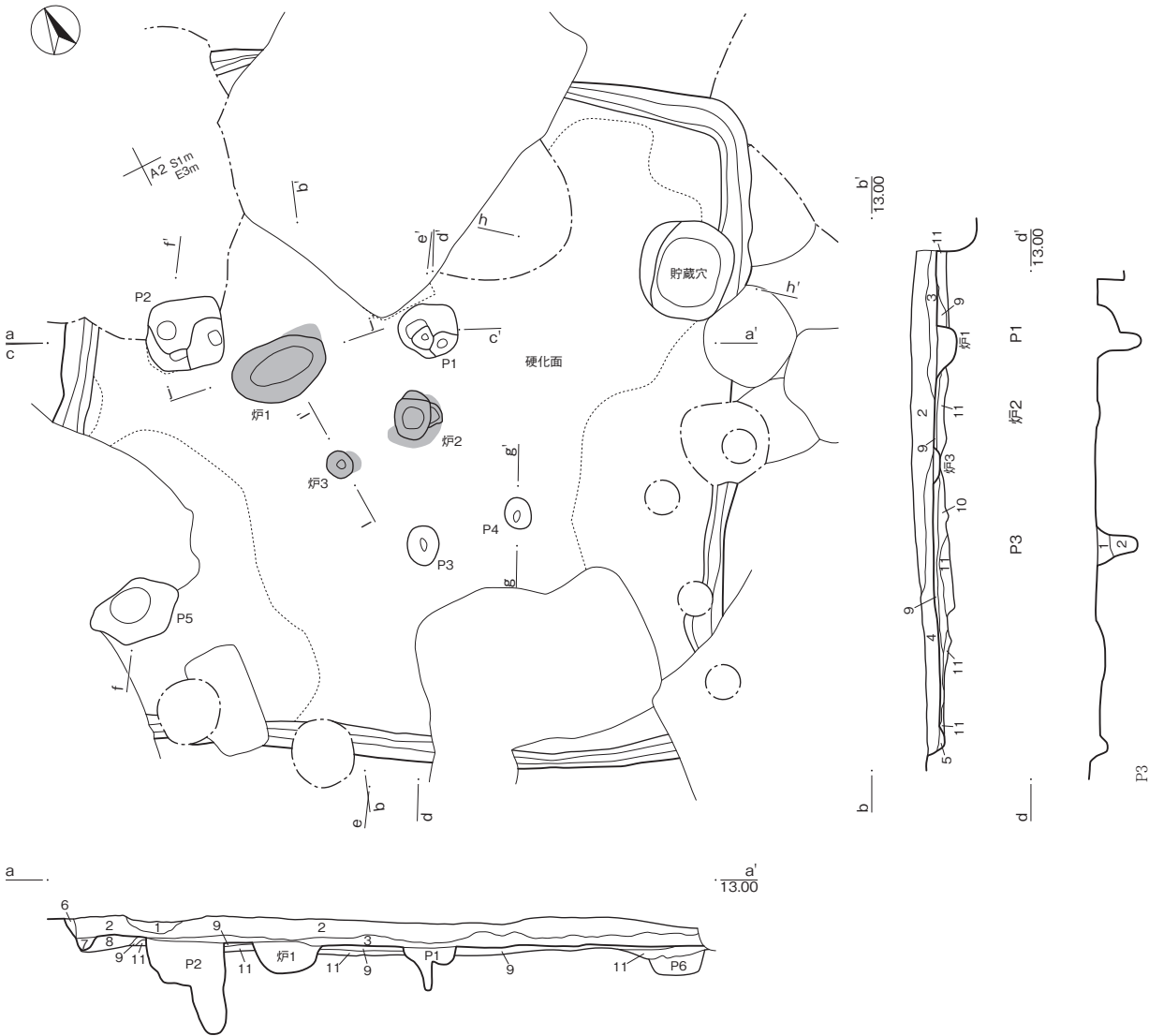


- 1 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒含
- 2 褐色土 粘性・しまりややあり、ほぼロームで構成される



掘方

V-28図 SI237(SI08) (3)

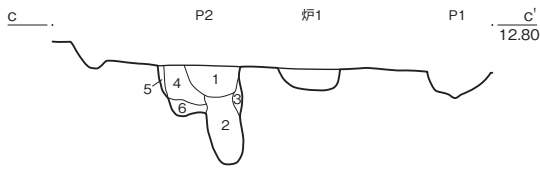


- | | |
|-----------------------------|-----------------------------------|
| 1 灰褐色土 根穴 | 7 黒色土 黒色土多含、炭化物・焼土微含 |
| 2 黒褐色土 ローム粒少含、スコリア粒・炭化物微含 | 8 黒褐色土 ローム粒少含、焼土微含、根拠乱入っていると考えられる |
| 3 黒褐色土 ローム粒少含 | 9 茶褐色土 ローム粒少含、焼土微含、しまり強、床面 |
| 4 黒褐色土 ローム粒・炭化物少含、ロームB・焼土微含 | 10 暗褐色土 ローム粒やや多含、焼土微含 |
| 5 茶褐色土 ローム粒少含 | 11 明褐色土 ローム粒多含、焼土微含 |
| 6 暗褐色土 黒色土主体 | |

0 (S=1/60) 2m

平面図・断面図(1)
V-29図 SI242(SI07) (1)

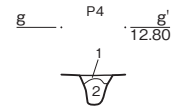
II 看護職員等宿舎5号棟地点



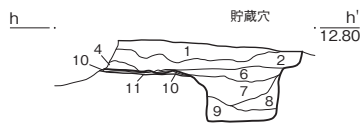
- P2
- 1 黒褐色土 ローム粒・炭化物・焼土微含
 - 2 茶褐色土 ローム粒多含
 - 3 明褐色土 ローム土主体
 - 4 暗褐色土 ローム粒少含、炭化物・焼土微含
 - 5 茶褐色土 ローム粒多含
 - 6 明褐色土 ローム粒多含、ローム粗粒少含



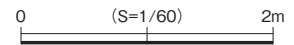
- 炉2
- 1 黒色土 焼土少含
 - 2 赤色土 焼土主体、ブロック状に堆積
 - 3 茶褐色土 ローム粒多含、焼土やや多含
 - 4 黒赤色土 焼土主体
- P1
- 1 暗褐色土 ローム粒少含
 - 2 茶褐色土 ローム粒やや多含



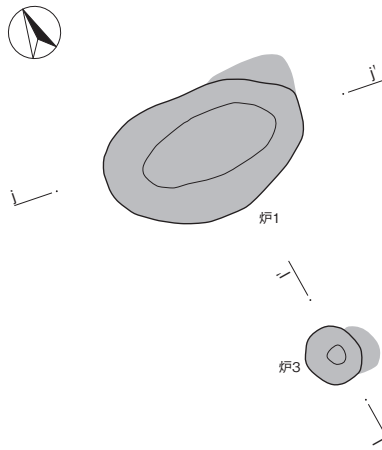
- P4
- 1 暗褐色土 ローム粒やや多含
 - 2 茶褐色土 ローム粒多含、1層より粘性あり、しまり強



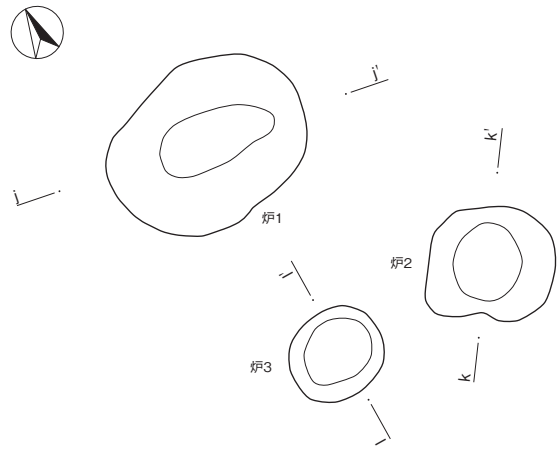
- 1 暗褐色土 しまりややあり、ローム粒少含、小円礫・炭化物微含
- 2 暗茶褐色土 粘性やや強、ローム粒微含
- 3 暗褐色土 1層よりやや暗、ローム粒子微含
- 4 茶褐色土 しまりややあり、ローム粒多含、ロームB・焼土粒・炭化物微含
- 5 暗褐色土 粘性やや強、しまりややあり、ローム粒微含
- 6 暗茶褐色土 しまりややあり、ローム粒・焼土粒微含
- 7 暗褐色土 しまりややあり、ローム粒微含
- 8 褐色土 しまりややあり、ローム粒極多含
- 9 茶褐色土 ローム粒含
- 10 暗褐色土 しまりややあり
- 11 茶褐色土 しまりあり、ソフトローム・ハードローム含
- 12 黄褐色土 ハードローム貫入



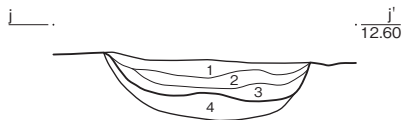
平面図・断面図(2)



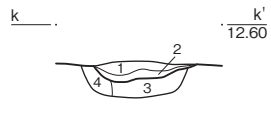
火床面



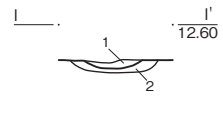
掘方



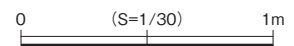
- 炉1
- 1 赤褐色土 黒色土・焼土含、炭化物少含
 - 2 赤褐色土 焼土多含、ローム粒含
 - 3 茶褐色土 ローム粒・焼土含
 - 4 明褐色土 ローム粒主体



- 炉2
- 1 黒色土 焼土少含
 - 2 赤色土 焼土主体、ブロック状に堆積
 - 3 茶褐色土 ローム粒多含、焼土やや多含
 - 4 黒赤色土 焼土主体

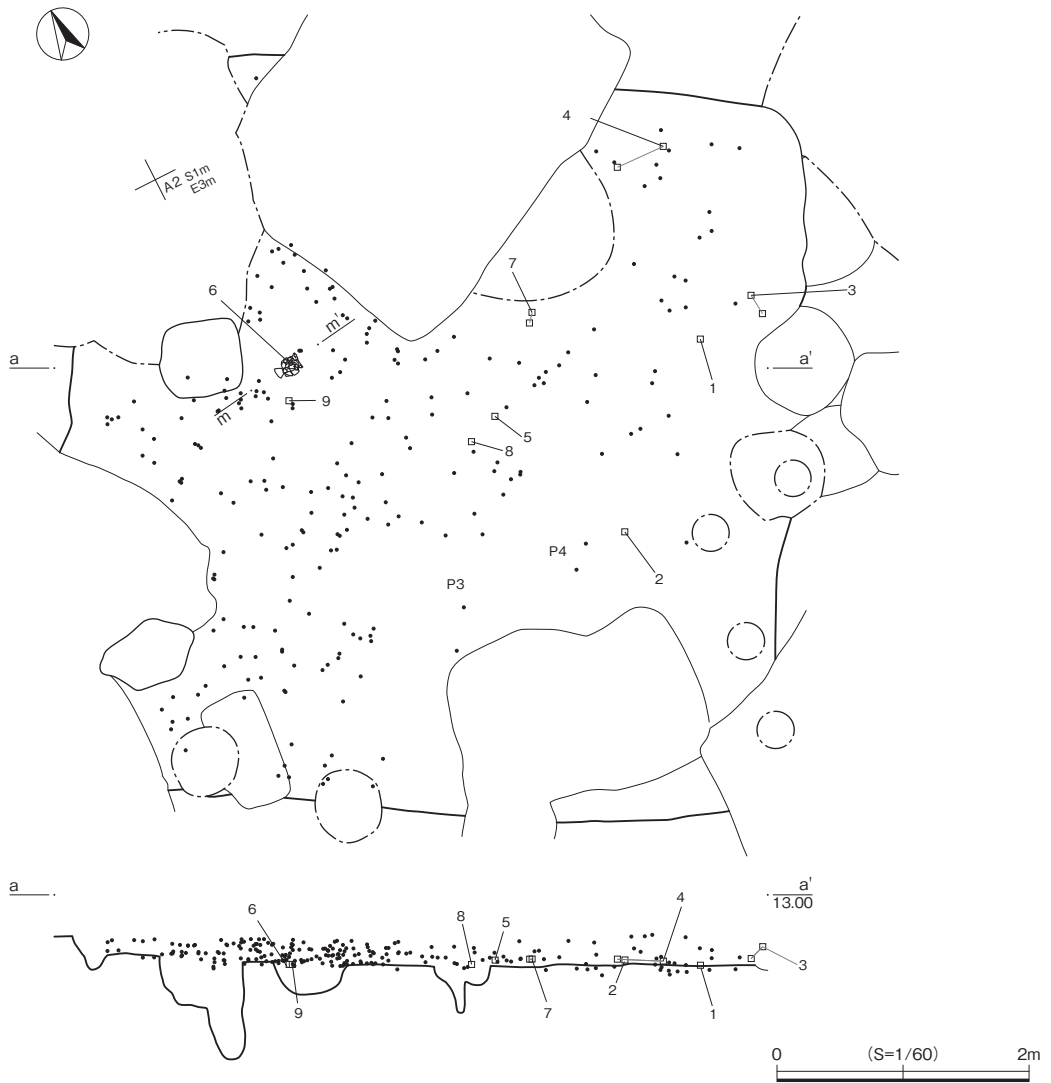


- 炉3
- 1 赤色土 焼土多含
 - 2 茶褐色土 ローム粒多含・焼土少含

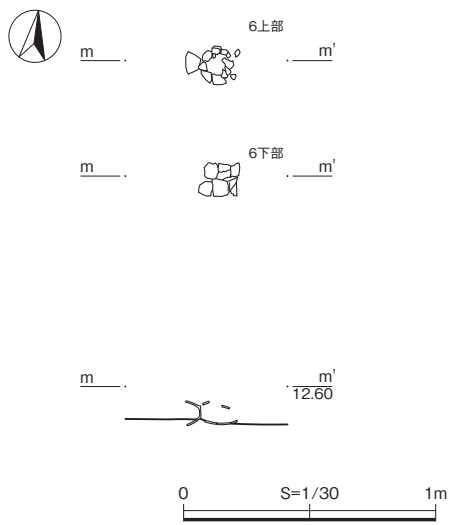


炉

V-30図 SI242(SI07) (2)



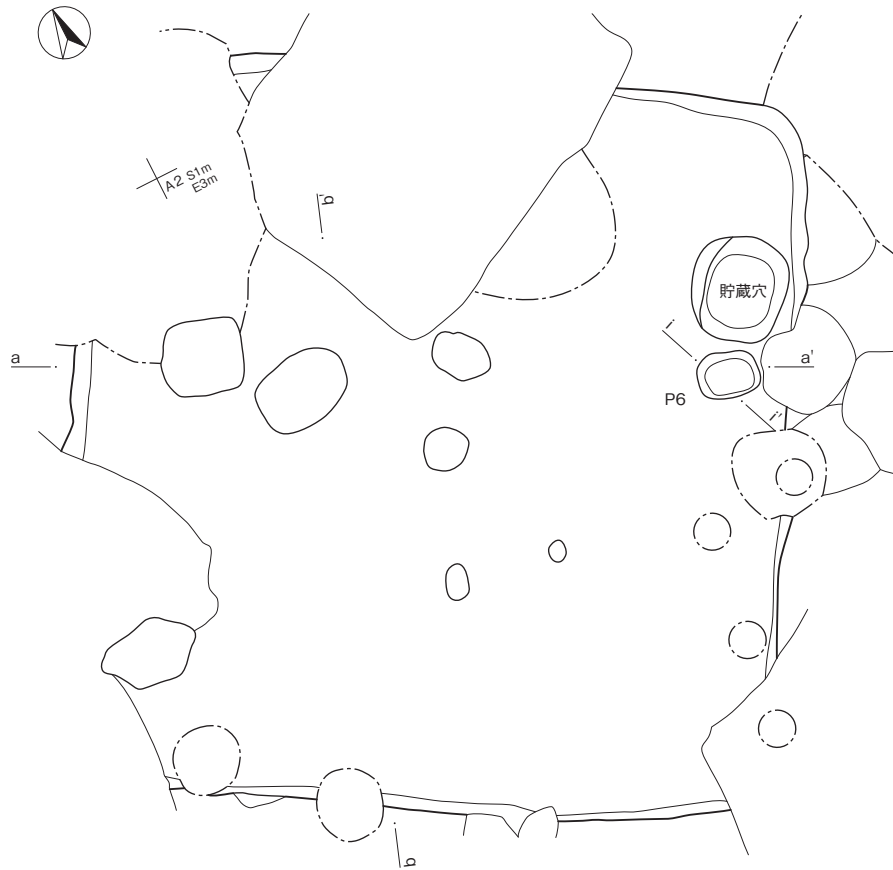
遺物出土状況



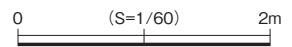
出土遺物微細図

V-31図 SI242(SI07) (3)

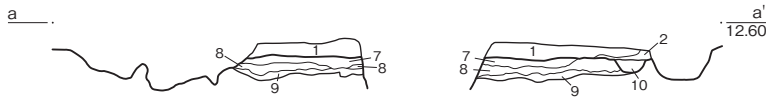
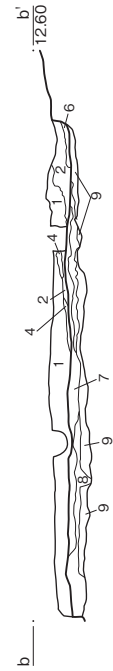
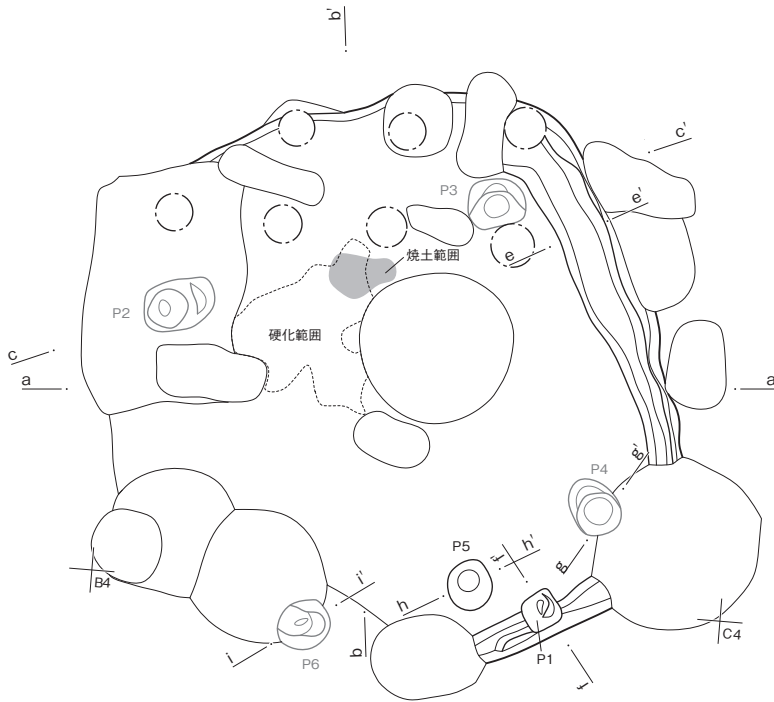
II 看護職員等宿舎5号棟地点



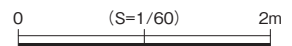
1 褐色土 ローム粒多含、ローム小B含



掘方
V-32図 SI242(SI07) (4)

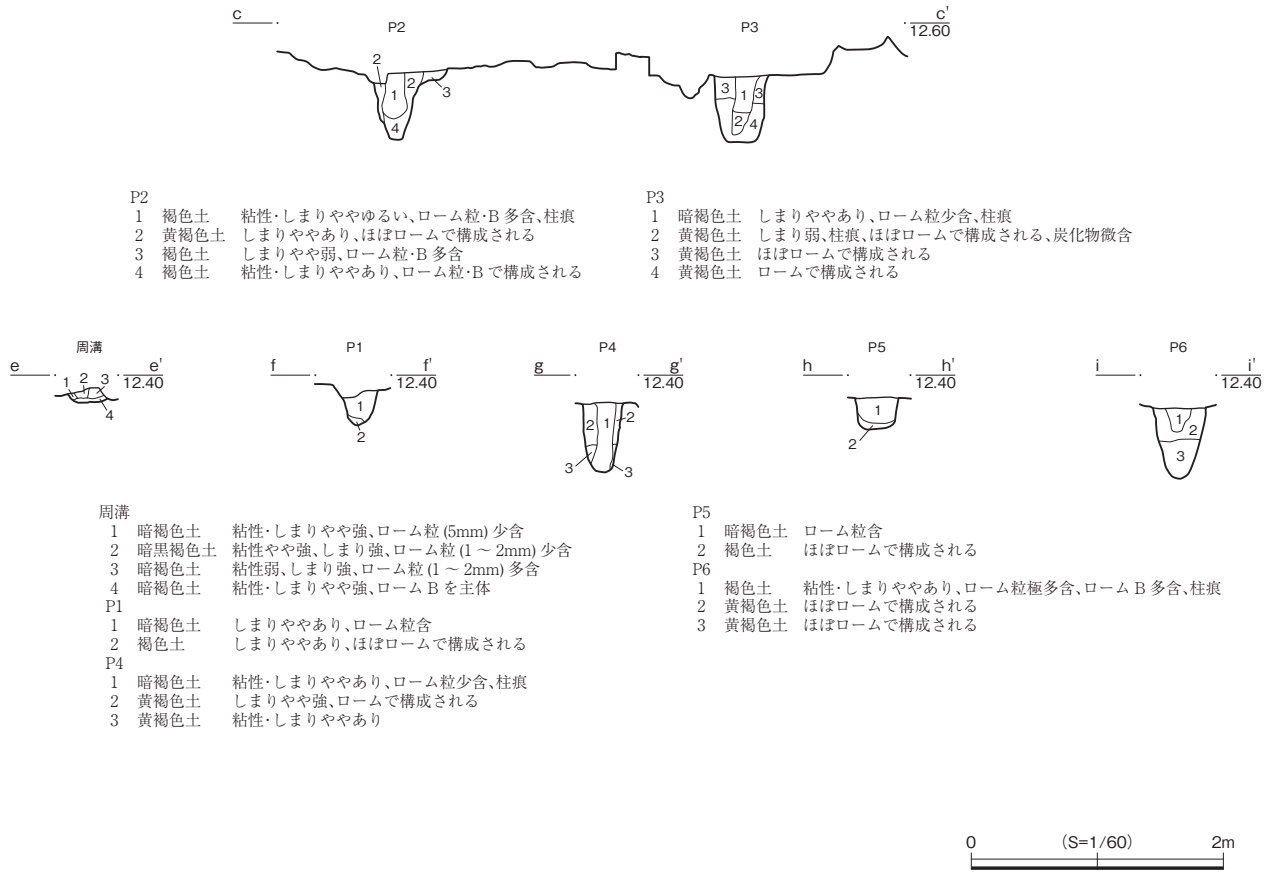


- | | | |
|----|-------|------------------------|
| 1 | 暗茶褐色土 | ローム粒・小B 少含、焼土粒微含 |
| 2 | 茶褐色土 | ローム粒中含 |
| 3 | 暗褐色土 | しまりやや強、ローム粒・B 少含、炭化物微含 |
| 4 | 褐色土 | しまりやや強、ローム粒・B 含 |
| 5 | 暗褐色土 | ローム粒含 |
| 6 | 褐色土 | しまりややあり、ローム粒多含 |
| 7 | 暗茶褐色土 | しまり強、ローム粒多含、黒色土粒少含、床面 |
| 8 | 黒褐色土 | ローム粒含 |
| 9 | 黄褐色土 | ほぼロームで構成される |
| 10 | 茶褐色土 | しまりややあり、周溝 |

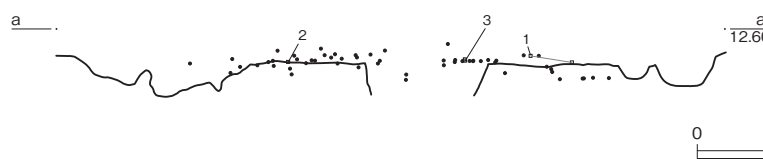
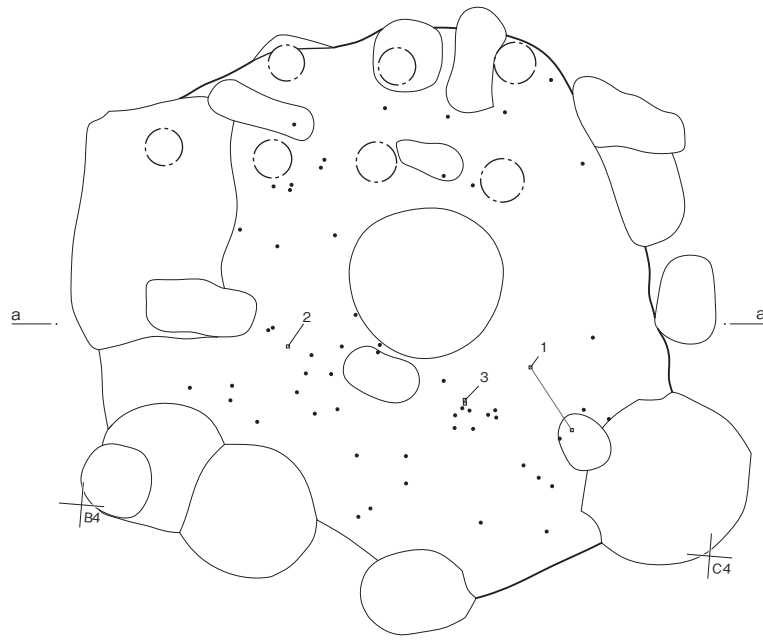


平面図・断面図(1)
V-33図 S1259(1)

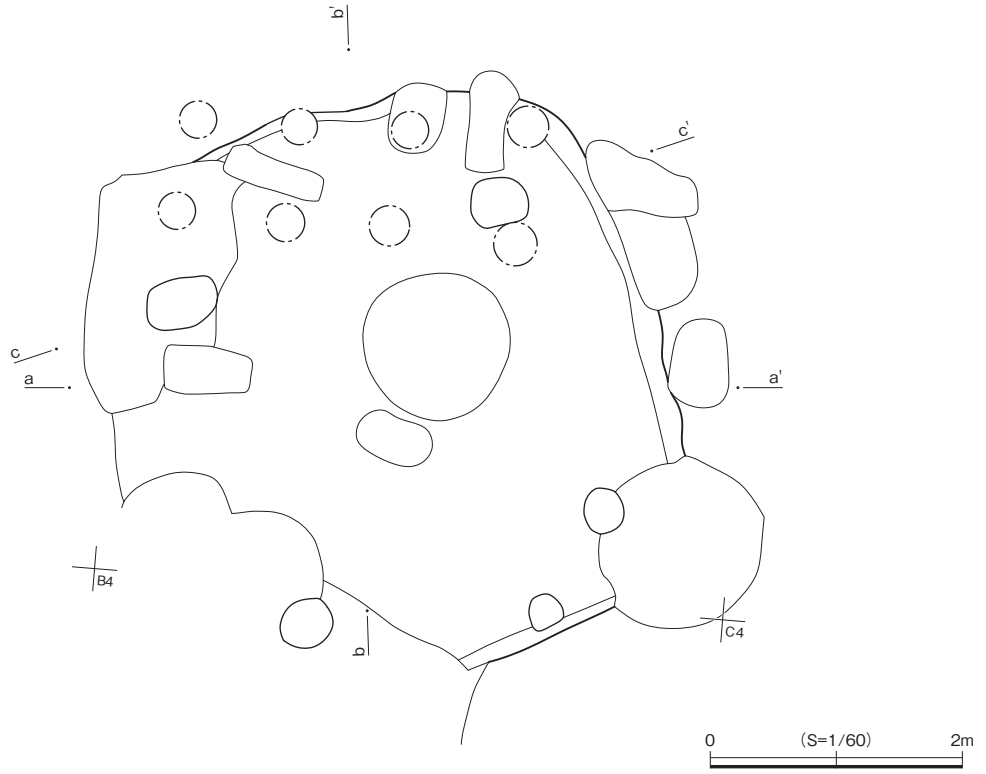
II 看護職員等宿舍5号棟地点



平面図・断面図(2)

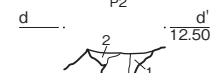
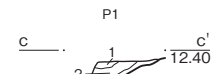
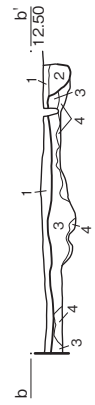
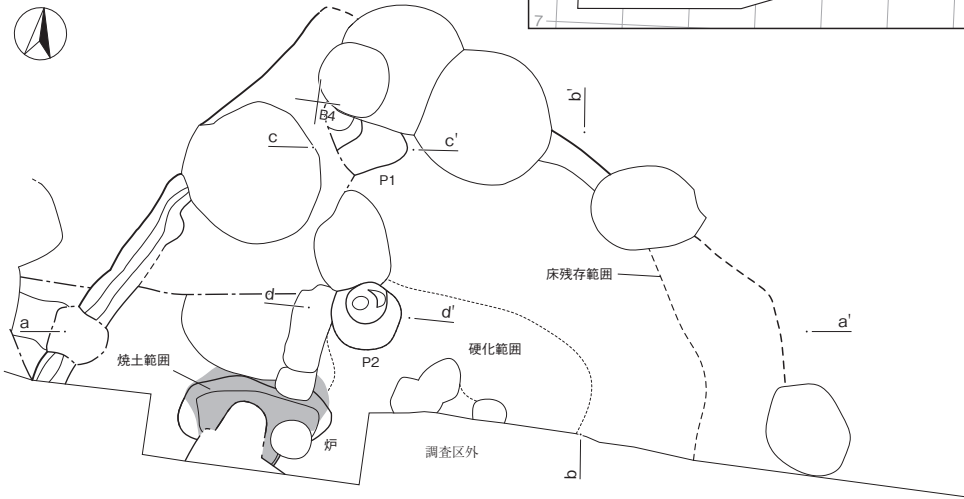
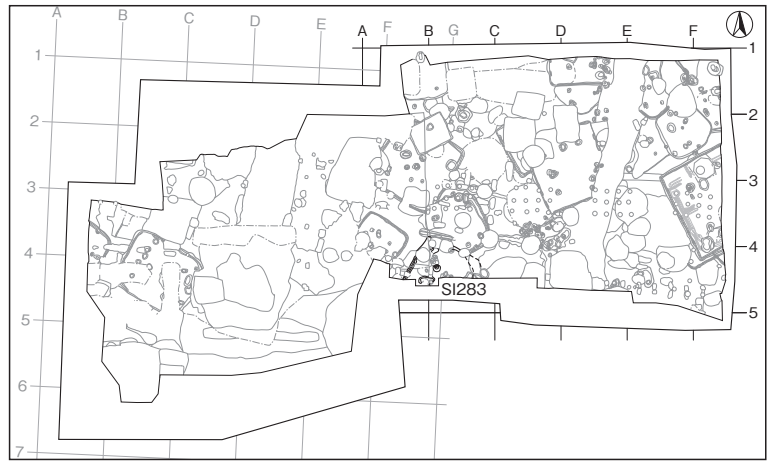


遺物出土状況
V-34図 SI259(2)



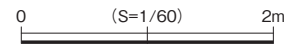
掘方
V-35図 SI259(3)

II 看護職員等宿舎5号棟地点

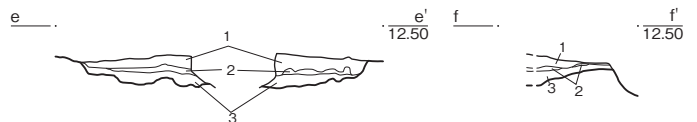
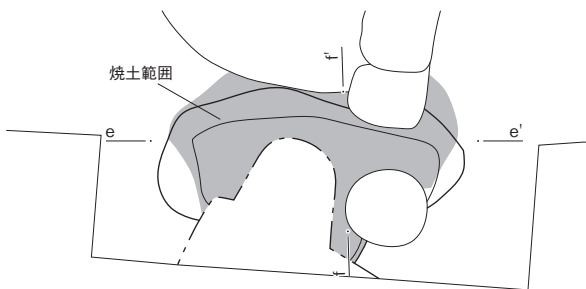


- SI283
- 1 暗褐色土 粘性ややあり、ローム粒含
 - 2 茶褐色土 ローム粒含
 - 3 黄褐色土 ほぼロームで構成される
 - 4 茶褐色土 しまりやや強、ローム粒多含、ロームB少含

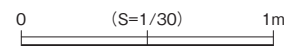
- P1
- 1 褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒含
 - 2 暗褐色土 ローム粒微含
 - 3 茶褐色土 ローム粒含
- P2
- 1 茶褐色土 しまり強、ローム粒微含
 - 2 褐色土 しまりややあり、ローム貫入あり、ローム粒含
 - 3 暗褐色土 ローム貫入あり



平面図・断面図

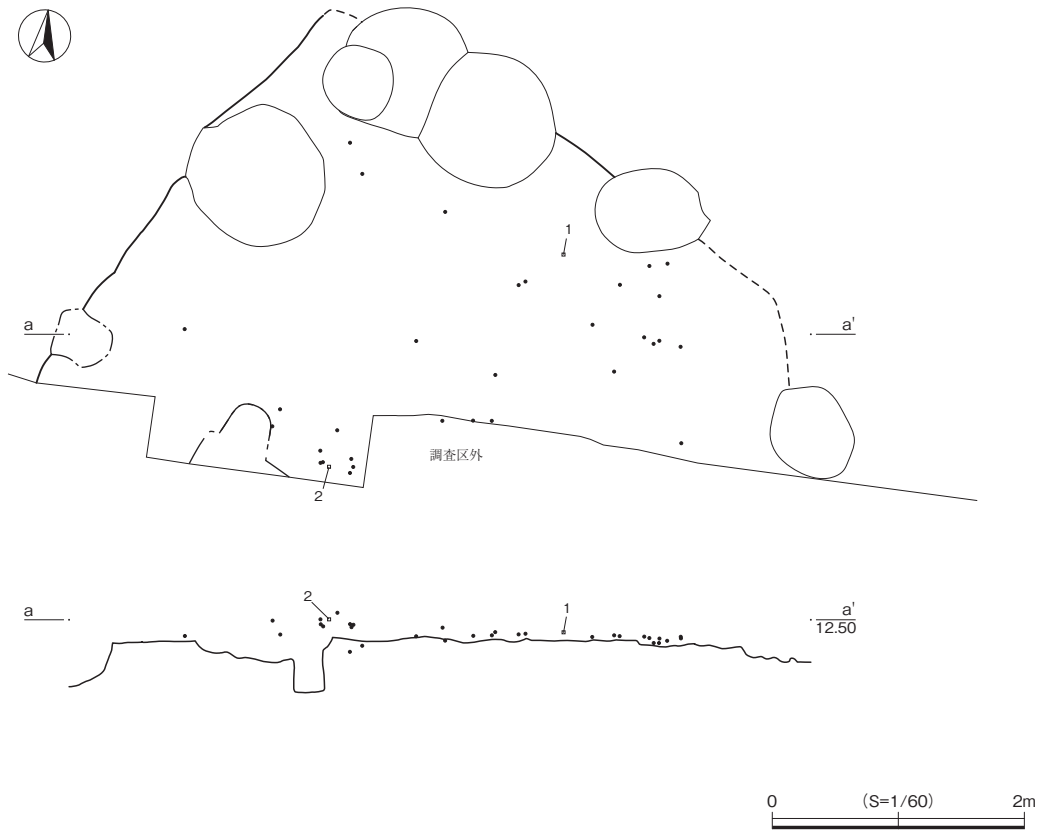


- 1 黒褐色土 粘性・しまりややあり、焼土粒含、ローム粒微含
- 2 橙褐色土 粘性・しまりなし、純焼土層
- 3 黄褐色土 粘性・しまり弱、被熱したローム
- 4 暗褐色土 粘性ややあり、ローム粒・焼土粒少含

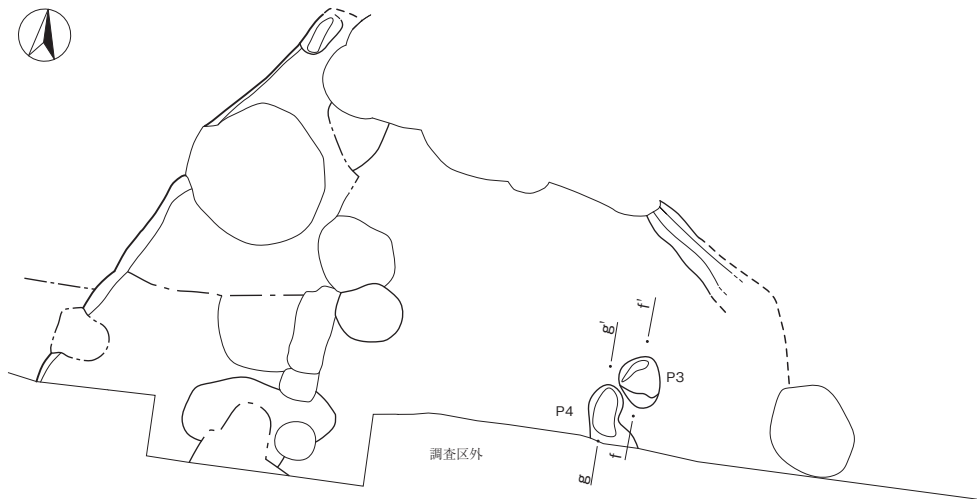


炉

V-36図 SI283(1)



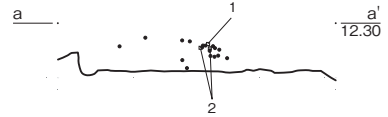
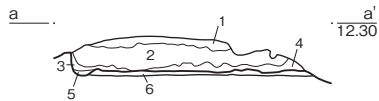
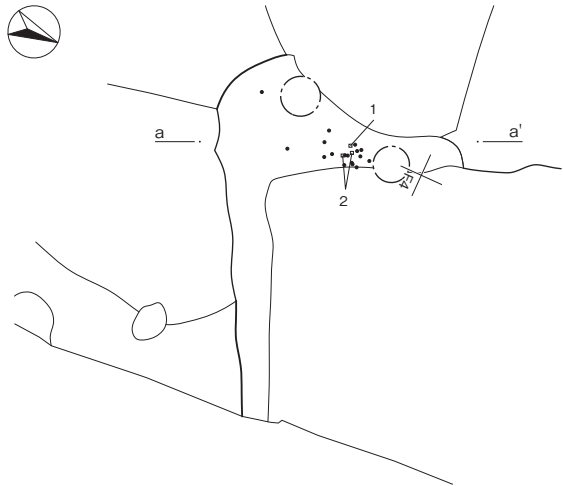
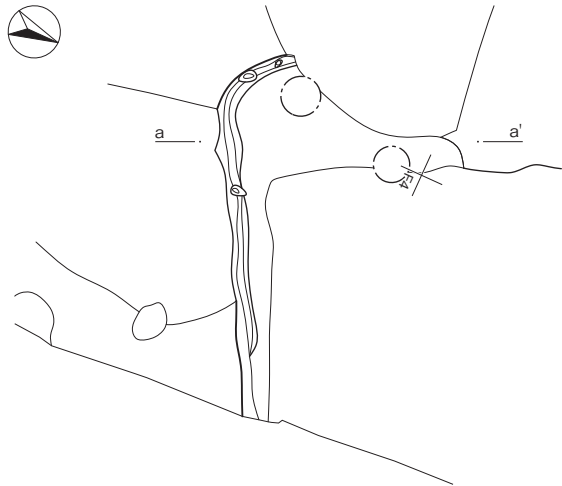
遺物出土状況



- | | |
|----|--------------------------|
| P3 | |
| 1 | 暗褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒含 |
| 2 | 褐色土 粘性やや強、しまりややあり、ローム粒少含 |
| 3 | 黄褐色土 しまりややあり、ほぼロームで構成される |
| P4 | |
| 1 | 暗茶褐色土 ローム粒・B含 |
| 2 | 褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含 |

掘方
V-37図 SI283(2)

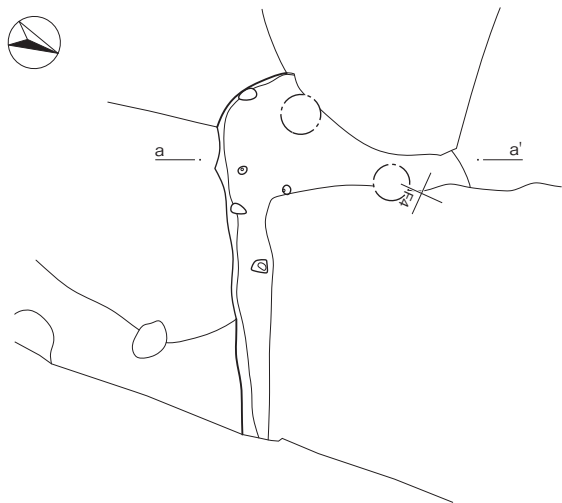
II 看護職員等宿舎5号棟地点



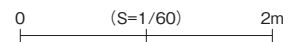
- 1 暗褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒微含
- 2 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒少含、炭化物微含
- 3 褐色土 しまりややあり、ローム粒多含
- 4 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒含、焼土粒・炭化物微含
- 5 黄褐色土 ローム粒・B多含
- 6 褐色土 しまりやや強、ローム粒・B極多含、貼床

平面図・断面図

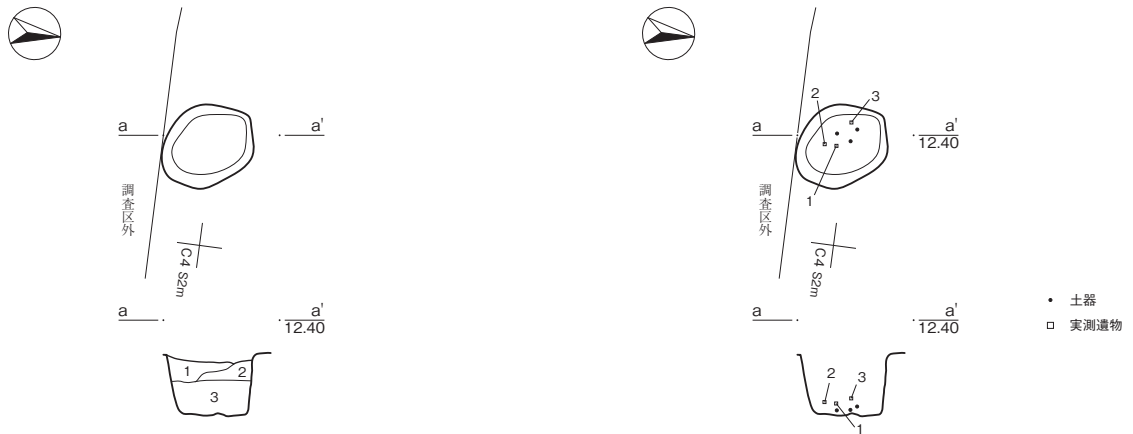
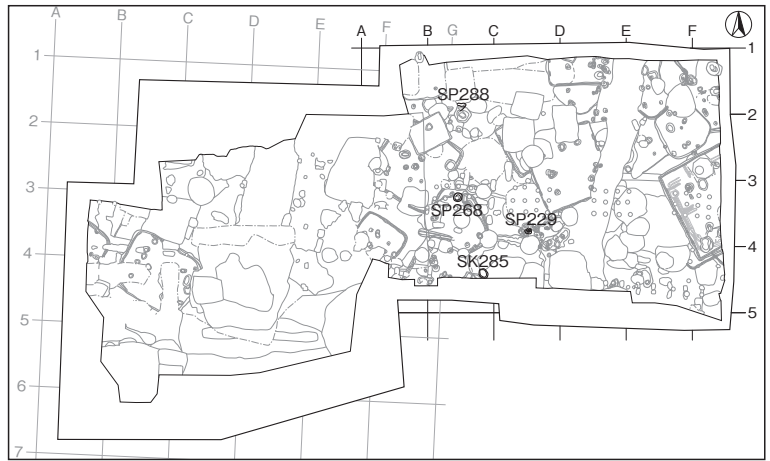
遺物出土状況



掘方



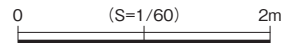
V-38図 SI287



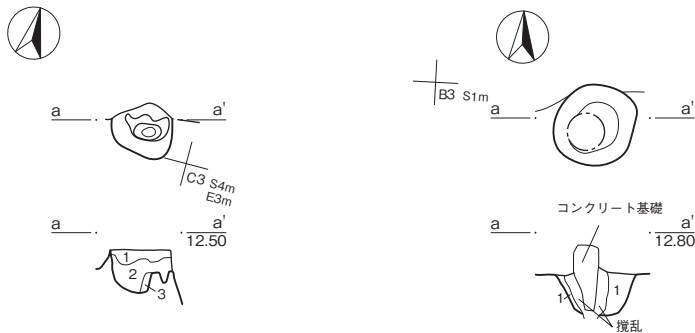
- 1 暗褐色土 粘性やや強、しまり強、ローム粒少含
- 2 暗黄褐色土 粘性やや弱、しまり弱、ロームが全体に混じる
- 3 明褐色土 粘性強、しまりやや弱、ローム粒含

平面図・断面図

遺物出土状況



V-39図 SK285

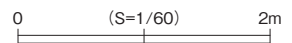


- SP229
- 1 暗褐色土 粘性ややあり、ローム粒含
- 2 茶褐色土 粘性：しまりややあり、ローム粒多含
- 3 黄褐色土 粘性：しまりややあり、ローム粒極多含

SP229

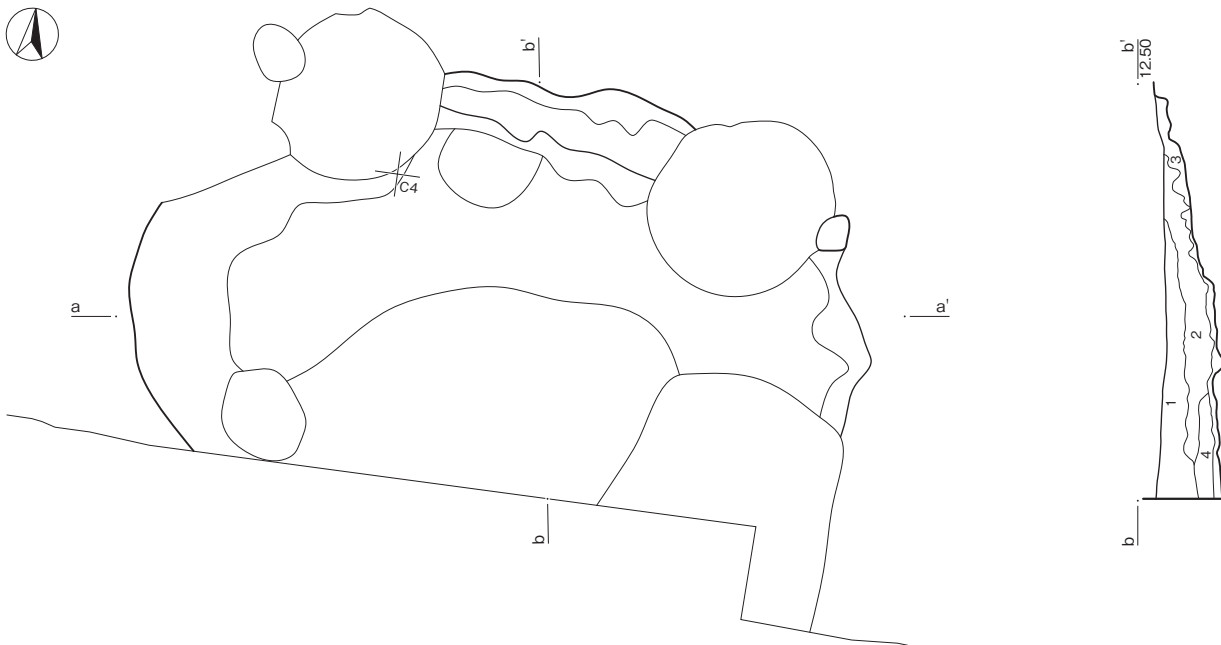
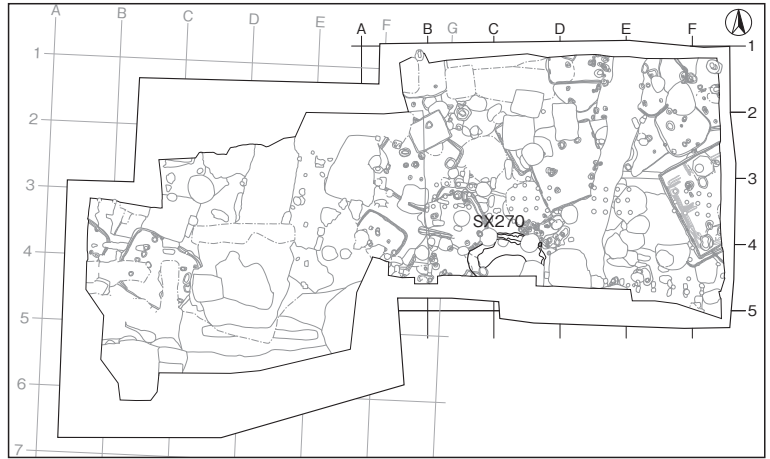
- SP268
- 1 暗褐色土 粘性ややあり、しまりやや強、ローム粒少含

SP268

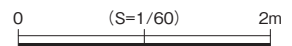


V-40図 SP229、SP268

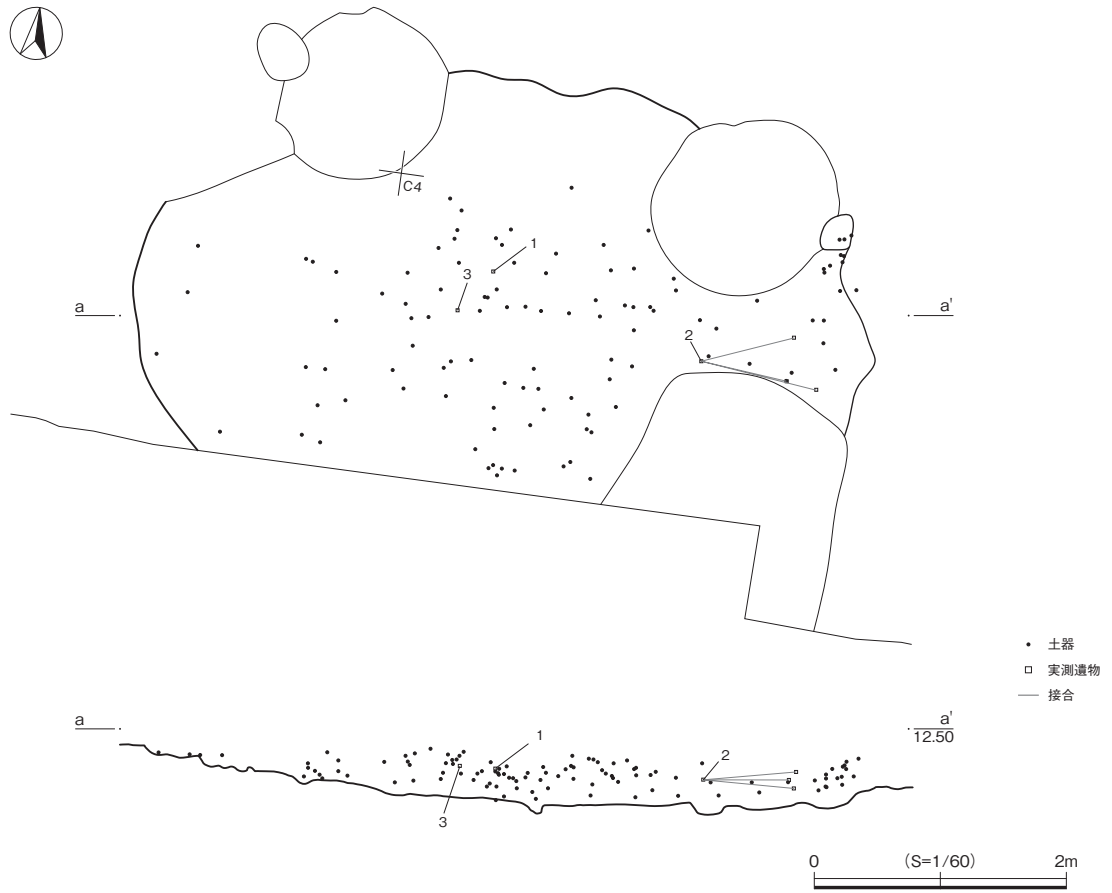
II 看護職員等宿舎5号棟地点



- | | | |
|---|-------|------------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | しまりややあり、ローム粒少含、焼土粒・炭化物・小円礫微含 |
| 2 | 暗褐色土 | しまりややあり、ローム粒含、炭化物微含 |
| 3 | 褐色土 | ローム粒多含、ロームB少含 |
| 4 | 暗茶褐色土 | ローム粒含 |
| 5 | 褐色土 | しまりやや強、ローム粒・B極多含 |



平面図・断面図
V-41図 SX270(1)



遺物出土状況
V-42図 SX270(2)

第2節 遺物

SI201（遺構V-1～6図、遺物V-43～47図）

SI201から出土した遺物のうち、本遺構の廃絶時期を示す土器を中心に55点を報告する。

出土した壺類のうち全形を把握できる例は1個体のみであった。1は直線的に外傾する口縁部をもつ短頸壺で、外面は板状工具によるものとみられるナデによって仕上げられる。頸部から上位では器壁が最大で1cm程度と厚手であるのに対して、体部ではやや薄くなる。胎土が暗赤褐色で、ほかの器種とは異なる色調である。2はやや幅の広い折り返し状の口縁部をもつ。内外面はナデによって整えられ、内面にはハケメがわずかに残る。

甕は報告資料の約半数を占める。いずれも体部最大径が口縁部径を凌駕し、底部まで残るものはすべて平底である。SI201から出土した甕はすべて「く」字状に屈曲する頸部をもつが、口縁部の形状に認められた特徴によって大きく4つの類型に分けた。以下ではその分類に沿って説明をおこなう。

3～9は短く直線的な口縁部をもつ例である。口縁部がやや外反する8・9のような例もあり、さらに口縁端部に面取りを施すものとそうではないものが存在する。内外面ともにケズリを施す。ケズリの方向は外面では横方向を基本とし、肩部や最大径付近で明瞭に観察できる。5や9は、外面に斜方向のケズリが施される例である。内面はいずれの個体も斜方向のケズリが施される。体部最大径は体部中位かやや上位にあり、球形に近い形状である。3は底部付近を縦方向のミガキによって仕上げる突出しない平底であるのに対して、4の底部はやや突出する。4は肩部の内面付近に、幅広いミガキ状の調整が施される。

10～13は、外方にのびる口縁部が途中で外側へやや屈曲し、口縁部が引き伸ばされた形状となる。11は、他の例と比べて肥厚した口縁部もち、体部外面の上半にハケメが残る。10・11は器高が26～28cm程度であり、本地点から出土した甕のなかでは大型である。最大径は体部の中位にあり、突出した底部をもつ。12は、口縁部の下端にわずかに段が残る例である。折り返した口縁部をナデによって整えたと考えられ、後述する口縁部を折り返す類型ともとらえられる。内外面にケズリが施される。

14～18は外反する口縁部をもつ甕である。16～18のように明瞭に外反する例に対して、14や15は外反の程度が弱い。ケズリによる調整が主体的であるが、外面の調整は不明瞭な例が大半である。18は強く外反

するやや器壁の厚い口縁部をもち、頸部の内面には連続的な幅の狭いケズリが横方向に施される。

19～21の甕は、外側に折り返された口縁部をもつ。底部まで残存する19・20は器高が22cm程度であり、他の甕に比べ小ぶりである。19は口縁部が短く、体部中央よりやや下側にある最大径の位置で屈曲した形状の体部をもつ。体部と底部は意図的に打ち欠かれた可能性がある。20は少し内彎しながら上方にのびる口縁部をもち、最大径は体部中央よりやや上位にある。頸部外面には指頭によるとみられる縦方向の強いナデが認められ、肩部付近にはミガキが施される。体部下半の内面はハケメが残る。22は、外方にのびるやや直線的な口縁部の下端に、わずかに段が残る。折り返された口縁部をもつ一群の特徴を痕跡的に残している。内外面にケズリが施される。以上の4つの類型以外に、端部が外反した短い口縁部をもつ器壁の厚い甕（23）などがある。

24～27は甕の体部や底部である。24は短く直線的な口縁部をもつとみられ、体部はやや長胴気味をである。24と25は調整や胎土の特徴が似ており、24の底部は25のような平底になると考えられる。26は、ケズリで整えられた丸底の甕の底部である。27は内面にハケメが施された平底の甕の底部である。

28はやや長胴気味な甕形の甕で、最大径は体部上半にある。焼成前に施された直径4cm程度の穿孔を底部もつ、筒抜け状の甕である。わずかにケズリが確認できるが器面の摩滅が著しい。

器形の全体がわかる高坏は29のみであった。29は円錐状の脚柱部をもつ高坏である。脚柱部から裾部にかけて強く屈曲し、裾部は水平方向にのびる。脚部と裾部の屈曲部の境界は不明瞭である。器面の摩滅が著しく調整は観察できなかつた。坏部は明瞭な稜線をもち、口縁部が直線状に大きく広がる。

30～32は同様な形状の坏部をもつ高坏である。30は内外面ともハケメによって仕上げられる。31は坏部の内外面と脚柱部に縦方向のミガキが施され、脚柱部内面は横方向のケズリで整えられている。32は器面の摩滅が著しく、調整等は確認できなかつた。33は、裾部へ向かって円錐状に開く脚部をもつ高坏であるが、脚部の上側は中実である。器面が摩滅しているため、脚柱部外面に施される縦方向のミガキは不明瞭である。脚柱部内面にはシボリが認められた。

34の高坏の裾部は屈曲し、屈曲部に鋭い段をもつ。外面に、幅1mm程度の細い縦方向のミガキが施される。脚柱部はやや厚手ながら中空で、内面にはハケメが観察できる。坏部の形態は不明である。35は坏部と裾部の

端部が失われているが、円錐状の脚部をもつ高坏である。内面に顕著なシボリが認められた。

36・37は赤彩された高坏脚部である。36は円筒形の脚柱部をもち、坏底部が直径約12cmでやや大型である。坏底部、脚柱部、裾部には全体的に縦方向のミガキが施され、坏部と脚部の接合部には連続的な横方向のミガキが認められる。脚柱部の内面にはシボリが残る。37は円筒形に近い円錐状の脚部であり、脚部から裾部へやや明瞭な屈曲部をもって接続する。裾端部が外上方につまみ出される。外面に幅1mm程度の細い縦方向のミガキが丁寧に施される。37は古墳時代前期の土器であり、竪穴建物の覆土上層から出土した。

38～44は小型の精製品である。坏および埴は全形がわかる5個体を図化した。38の口縁部は内彎しつつも垂直気味に立ち上がり、屈曲部には粘土を接合した際の痕跡が沈線状の段として残る。その下部には直径約1cmの突起が一つ貼り付けられている。底部付近の外面には底部に向かって明瞭なケズリが施され、平底の底部はやや突出する。

39は、器壁が底部付近で1cm程度と厚く、口縁部は明瞭な稜をもって垂直に立ち上がる。体部外面の下半は小さな単位のケズリで整えられ、内面には縦や斜方向のミガキが施される。器面の摩耗によって不明瞭であるが、内外面は赤彩されていたとみられる。40は直径が10cmを下回る小型品である。口縁端部に内傾する面をもち、口縁部から底部にかけて緩やかに屈曲する。体部下半から底部にケズリが認められる。

41の埴は口縁端部がわずかに外折する。外面は下半部を中心に底部に向かってケズリが施され、底部付近で顕著である。内面に幅1mm未満の細いミガキが放射状に認められ、内外面は赤彩される。底面はわずかに上げ底になる。42は口縁端部が外折した埴で赤彩品である。やや深い体部と底径が約6cmの平底をもつ。底部は横方向のケズリで整えられ、体部外面は縦方向のミガキによって仕上げられる。口縁部内面および体部内面は縦方向のミガキが施される。

43は直線的に外方にのびた口縁部と丸い体部をもつ、いわゆる小形丸底鉢である。口縁部の外面には横方向のミガキが観察できる。頸部の外面にハケメが残り、肩部にはケズリが認められる。44は、外上方へ開く口縁部が明瞭に屈曲する小形壺とみられる。口縁部の屈曲部付近外面に、ケズリ状の調整が連続的に認められる。器壁の内外面に赤彩が施される。

45～50は粗製の鉢類である。45は、折り返された口縁部をもつ逆円錐形の鉢である。底部は焼成前に穿孔

されている。古墳時代前期の土器であり、SI201の覆土上層から出土した。46は、最大径を口縁部にもつ鉢である。口縁部は短く外折し、内面の屈曲は明瞭である。底面は中央が凹み、底部の縁から幅2cm程度の円環状の粘土の単位が観察できる。47は、最大径を体部中位にもつ鉢である。口縁端部の内面は、強い横方向のナデによって幅2cmほどの面がつくられる。体部下半は粗い横方向のケズリが施される。

48は口縁部から底部へ向かって緩やかに屈曲する鉢である。体部下半の外面に不整円形のケズリ状の調整が認められる。49は口縁端部が外折する鉢である。精製品に比べて大型で、体部の内外面がケズリで整えられる。50は口縁部が上方にのびる粗製の鉢である。

51は、口径2cmほどの手捏ね土器である。口縁部は波打つように仕上げられ、内面にユビオサエが明瞭に観察できる。52～54いわゆる「烏帽子形」の土製支脚は3点が近接して出土した。高さが13～14cm前後であり、いずれも底面近くでは断面が不整円形であるが、先端部にかけて隅丸方形に近づく特徴をもつ。両側面の中央よりやや下に、直径約2cmのくぼみがある。支脚を持つ際に、このくぼみに指をかけて使用した可能性がある。25の土鉢は、器面全体が平滑に仕上げられ、一方の側がやや平坦になる。

SI203（遺構V-7～9図、遺物V-48図）

SI203から出土した土器のうち、本遺構の廃絶時期を示す5点を図化した。

1は小形の直口壺である。直線的に上方へのびる頸部と、端部に向かって緩やかに外方へ開く口縁部をもつ。体部はやや扁平な球形であり、器壁が8mm以上と厚い。体部内面は粘土の接合痕が明瞭で、体部下半の外面に小さい単位のケズリが連続的に認められる。2～4はそれぞれ異なる特徴をもった坏である。碗形の2は、口縁部が緩やかに直立して、平底をもつ。口縁部は横方向のナデによって仕上げられ、それより下位の外面には小さな単位の横や斜め方向のケズリが明瞭に認められる。体部内面には、幅が2mm程度のミガキが暗文状に施される。やや半球形の3は、緩やかに屈曲する体部から立ち上がる口縁部をもつ。口縁部の内外面が赤彩される。体部外面には、斜方向のユビオサエが痕跡的に認められる。4は摩滅が激しく調整がほとんど確認できないが、体部下位にユビオサエがめぐる。5は口縁部が逆「ハ」字状に開き、最大径を体部中央付近にもつやや球形の甕である。底部は突出する。頸部下から体部上半にかけて外面に斜方向のケズリが施され、最大径付近より下位では

横方向になる。口縁部の内面は赤彩の痕跡が認められ、底部の内面にはススが付着する。

SI204 (遺構 V -10 ~ 12 図、遺物 V -49 図)

SI204 から出土した土器のうち、器形や器種の特徴がわかる 9 点を図示した。

1 ~ 3 は壺であり、1 と 3 は同一個体とみられる。1 は緩やかに開く直線的な口縁部をもち、口縁部から肩部にかけて横方向のミガキが施される。体部内面は横方向のナデの痕跡が顕著に残る。2 は広口壺の口縁部である。器壁の内外面に横方向や斜方向のミガキが痕跡的に認められるが、摩滅が著しく不明瞭である。3 の底部は、上側の外面が縦方向のミガキで仕上げられ、底部付近では横方向になる。部分的にハケメが観察できる箇所がある。内面は 1 と同様に横方向のナデの痕跡が顕著に残り、ユビオサエが横方向に並ぶ。

4 ~ 6 は甕の口縁部である。4 は口縁端部にキザミをもつ例であり、キザミは棒状工具を束ねた施文具による押捺とみられる。5 は小片であるが S 字甕の口縁部である。口縁部の側面に棒状工具による刺突が並び、頸部の内面に横方向の粗いハケメが施される。胎土に直径 1mm 以下の砂粒を多く含み、かつ色調は浅黄色である。本地点から出土したほかの土器とは、一見して胎土が異なる。6 の口縁部は、上方へやや内彎しながら立ち上がる。外面には縦方向のハケメが施されるが、口縁部ではナデによってハケメが痕跡的である。

7 は底径が 3cm 未満と小さく、ミニチュア土器とみられる。赤彩品である。外面にはミガキのほか、底部の側面にユビオサエが認められる。以上の 1 ~ 7 は、弥生時代後期終末期 ~ 古墳出現期に属する土器である。

8 は、「く」の字に屈曲する頸部からのびる口縁部が外反する甕である。ハケメが残る箇所もあるが部分的である。9 は、脚部が裾部に向かって円錐状に広がる高坏である。脚柱部と裾部の接合部は明瞭に屈曲し内面に稜を有する。

SI205 (遺構 V -13 ~ 15 図、遺物 V -50 図)

SI205 から出土した土器のうち、器形や器種の特徴がわかる 3 点を図示した。

1 ~ 3 は、口縁端部にキザミをもつ台付甕の口縁部である。いずれも口縁端部に木口状工具による押捺が認められ、1 はやや強い押捺が施される例である。これらの土器は弥生時代後期後半 ~ 古墳出現期の土器である。

SI208 (遺構 V -22、23 図、遺物 V -51 図)

SI208 から出土した土器のうち、器形や器種の特徴がわかる 1 点を図示した。1 は平底の甕の底部である。外面は底部に向かって縦方向や斜方向ケズリが施される。内面にはケズリとみられる弱い調整が認められる。

SI212 (遺構 V -17 ~ 23、遺物 V -52、53 図)

SI212 から出土した遺物のうち、本遺構の廃絶時期を示す土器を中心に 32 点を報告する。

1 は口縁部が二重口縁になる広口壺である。頸部から外上方へ短く伸びた口縁部は明瞭な段をもって外側に屈曲し、端部は面取りされる。頸部以下の外面は縦方向のミガキが丁寧に施される。頸部の内面にミガキが認められるが不明瞭である。2 の壺の底部はやや突出した形状である。外面はハケメの上にミガキが施され、内面は底部に向かってケズリで整えられる。

3 ~ 11 は、外面がおもにケズリで整えられた甕である。3 は短く広がる口縁部をもち、器高約 24cm でほかの例に比べて小型である。外面は斜め方向のケズリが施され、粘土の接合部で特に顕著である。内面は頸部の下にユビオサエが認められ、底部に横方向のケズリが施される。底部外面は底面の中央が凹み、その外周はケズリで整えられる。

4 は、口縁部が逆「ハ」字状に外反しながら広がる甕である。体部は大きく張り出すが、下半部で屈曲して底部に向かってすぼまる。外面に認められるケズリは、肩部付近では斜方向で連続的であり、最大径付近では横や斜方向で幅が広い。内面は横方向や斜方向のケズリが散在的に観察できる。

5 は口縁部が折り返される例であり、完形品ではないがやや長胴形の甕である。頸部下側の外面にはハケメが痕跡的に認められる。体部下半の外面では、底部へ向かって器壁がやや屈曲する箇所付近に横方向のケズリが連続的に施される。内面は横方向や斜方向のケズリの外に、工具の端部が当たったと考えられる線状痕が複数箇所観察できる。

6 は逆「ハ」字状に外反しながら広がる口縁部であるが、頸部下側の外面および口縁部の内面にハケメが痕跡的に認められる例である。7 は外上方へ短くのびる口縁部である。頸部内面に連続的な幅広いミガキ状の調整が施される。8 は口縁部が逆「ハ」字状に広がる甕であるが、4 や 6 は口縁部の器壁が頸部から均一であるのに対し、8 は頸部が分厚く、端部に向かって収束する。頸部下側の外面は斜方向のケズリが施され、内面は横や斜方向のケズリで整えられる。

9 ~ 11 の底部はいずれも平底であるが、9 のように

やや小さく突出するものとそうではないものがある。9は球胴形の体部である。11は底面が7cmであり、9や10に比べやや大きい。いずれもケズリが内外面に施され、9を見るかぎり最大径付近の外表面は横方向になる。底部付近の外表面は底部に向かって斜方向のケズリが施される。

12は、直線的な体部から底部へ丸く収束する、いわゆる砲弾形の甑である。口縁部は欠損しているが、内彎気味に短く上方にのびる形状と考えられる。筒抜け状の底部は、端部の内面に内傾する平坦面がつくられている。外表面は口縁部に向かって縦方向や斜方向のケズリが体部全体に認められ、口縁部と体部の境付近では製作者の爪痕が連続的に並ぶ。内面も同様に、頸部より下で口縁部に向かう斜方向のケズリが認められた。

高坏は、8個体を図示した（13～20）。完形品の13は、口縁部が直線的に開く坏部をもつ。坏底部の屈曲は外表面では不明瞭で、境界に沈線が1条めぐり、脚部は脚柱部の中央がやや膨らむ円錐形であり、緩やかに屈曲して「ハ」字状に開く裾部へ続く。内表面は脚部と裾部の境界が明瞭である。全体的に器壁の磨滅が著しく調整などの痕跡は不鮮明であるが、脚部内表面には横方向のケズリが数段にわたって確認できる。

14は、口縁部が直線的にのびる高坏の坏部である。内外表面ともに丁寧な縦方向なミガキが施される赤彩品である。坏底部は明瞭に屈曲して、境界部に稜を有する。15は、円錐状の脚柱部をもつ高坏である。裾部は脚柱部から屈曲して開く。脚柱部の外表面は磨滅により調整が観察できないが、内表面には輪積み痕と不明瞭なハケメが残る。

16は、裾部に向かって広がる円筒形の脚柱部をもつ脚部であり、「ハ」字状に低く広がる裾部へ明瞭に屈曲して接続する。坏底部の屈曲が明瞭である。脚柱部は縦方向のミガキが隙間なく施され、坏部と裾部には縦方向のミガキが等間隔に並ぶように認められた。脚部内表面には上側のシボリに加えて、裾部と脚部を接合する際に撫でつけられたとみられる粘土の痕跡が幅1cm程度の帯状に残る。器壁の外表面全体と坏部の内表面は赤彩される。17も裾部に向かってやや広がる円筒形の脚柱部をもつ高坏であるが、ほかの例に比べ脚柱部が短い。坏部は底部の外表面のみ残存しており、明瞭な屈曲部をもつ。脚柱部上側の外表面には横方向の幅広いミガキ状の調整が残り、それより下側では縦方向になる。内表面は強いナデの痕跡が残されている。

18・19は、裾部に向かって広がる円筒形の脚柱部をもつ高坏の脚部と考えられる。18は脚柱部から裾部へ

明瞭な屈曲部をもって接続する。裾端部がわずかに上方へつまみ出される。外表面に、幅1mm程度の細い縦方向のミガキが丁寧に施される。19は器壁がやや厚く、脚柱部から水平気味にのびた裾部は端部がやや上を向く。裾部の外表面には細いミガキが痕跡的に観察できる。

20は、椀形の坏部と大きく「ハ」字状に開く脚部をもつ小型高坏である。坏部の内外表面と脚部の外表面に縦方向のミガキが施され、口縁部の外表面には横方向のミガキが認められる。坏部と脚部の接合部付近には横方向の幅広いミガキ状の調整が観察でき、ハケメがわずかに残る。また、脚部内表面に細かな横方向のハケメが施される。

21と22は小型器台である。21は皿状の小さな受け部と「ハ」字状に開く脚部をもつ。受け部の内外表面と脚部の外表面には幅1～2mmの細い縦方向のミガキが放射状に観察できる。受け部と脚部の接合部外表面にはハケメが残り、脚部の内表面にも横方向や斜方向にハケメが施される。接合部の貫通孔の箇所を除いて、ほぼ全面が赤彩される。22も同様に、皿状の小さな受け部と「ハ」字状に開く脚部をもつとみられる。受け部の内表面と脚部の上側に縦方向のミガキが施される。脚部の下側の外表面にはハケメが残り、内表面には横方向のケズリが施される。

23～27は、小型の壺である。23は、口縁部が内側に屈曲して二重口縁気味となり、中央が張った扁球状の体部をもつ。口縁部や体部の形状は古墳時代中期の須恵器の甗に似た特徴をもつが、体部の穿孔は、認められない。外表面は細かい横方向のケズリが施され、底部を作り出す際の横方向のケズリが底部外表面に認められる。底面にも明瞭なケズリが施され、やや上げ底状になる。内表面は、幅1～2cm弱の狭い粘土帯を重ねた痕跡が顕著に確認でき、底部は横方向のハケメがめぐり、口縁部から体部最大径付近の外表面と口縁部の内表面には赤彩の痕跡が残る。24は口縁部を欠くが、形状や成形、調整の特徴において23と共通点が多い。器面の磨滅によって、調整などの痕跡がやや不明瞭であったが、23と同様に外表面は細かい横方向のケズリが施される。底部内表面に、板状工具の端部の痕跡と考えられる線状痕が複数認められた。

25と29は、23・24に比べてさらに小型の壺であり、赤彩が顕著である。25は扁球状の体部に、中央がわずかに凹む平底の底部をもつ。体部下半は外表面に横方向のミガキが施され、内表面にナデによる起伏が認められる。29は、緩やかに内彎しながら立ち上がる口縁部をもち、扁球状の体部や平底は25と同様である。口縁部から肩部にかけては横方向のナデによって丁寧に仕上げられており、体部最大径付近より下方は、細かな単位の横方向

のケズリが観察できる。赤彩は、外面では底部には認められず、内面は口縁部から頸部にかけて施される。26は球形の体部をもつ小型の壺であり、口縁部は頸部から外上方へのびる。器面の摩滅が著しく、最大径付近のユビオサエとその下側のケズリ以外の調整は不明瞭であった。

27は、口縁部が受口状の鉢もしくは小型甕である。口縁部は弱くつまみ出される。頸部以下の外面に縦方向の粗いハケメが施され、肩部に細い沈線が3条めぐる。28は半球形の鉢である。口縁端部は内傾して平坦面が作られる。外面は口縁部を除いて横や斜方向のケズリが施され、内面では下半部に同様なケズリが認められる。30は、外上方に直線的にのびる口縁部と、扁平な球形の体部をもついわゆる小形丸底鉢である。口縁部や体部の最大径付近の外面、あるいは内面に不整円形のケズリ状の調整が認められる。

31は不明土製品である。指頭による痕跡とみられる平坦面が全体的に観察できる。4方向がつまんだようにわずかにのぼされ、図の右側は二又状につままれた痕跡が認められる。中央には細い穿孔が施される。32は、中心に細い穿孔がある土製の玉である。

以上のSI212から出土した土器のうち、14・16・20・21・22・26・27・29は古墳時代前期の土器であり、竪穴建物の覆土上層から出土した。

SI236 (遺構V-24、25図、遺物V-54図)

SI236から出土した土器のうち、本遺構の廃絶時期を示す6点を報告する。

1～4はいずれも、外面にハケメが施された甕である。1～3の甕は頸部内面に明瞭な稜をもち、口縁部が「く」字状に屈曲する。1の口縁部は短く直線的にのび、体部は最大径が中央にあり球胴気味になる。口縁端部の上面はやや平坦である。外面はハケメが全体に施され、口縁部で横方向、頸部では縦方向の短いハケメが認められる。体部は、最大径付近より上側は斜方向、下側ではおもに横方向のハケメが施される。内面も口縁部は横方向や縦方向のハケメが施されるが、頸部下側は横方向のミガキ、体部上半は縦方向のミガキによって仕上げられている。内面の最大径付近より下部には、板状工具の端部の痕跡とみられる複数の線状痕が観察できる。最大径付近では器壁が4mm程度であり、他の甕に比べて薄い。

2の口縁部は、先端に向かって緩やかに外反し、端部に平坦面をもつ。体部はやや扁平な球形と考えられる。調整は基本的に1と同様であるが、外面には部位ごとに異なる方向のハケメが施され、内面は頸部の下側から

肩部にかけて横方向のミガキが痕跡的に認められた。体部の下側には、工具の端部とみられる線状痕のほか部分的にハケメが残存する。

3は、他の例に比べ口縁部がやや長く、体部中央より上位に最大径をもつ体部が楕円形の甕である。口縁部は先端に向かってわずかに外反し、端部はやや平坦に仕上げられている。口縁部と体部下半の外面は摩滅によって不明瞭であるが、外面全体にハケメが施され、頸部は縦方向、体部ではおもに横方向のハケメが施される。内面は頸部とその下側で横方向のミガキが認められ、体部は長い単位の縦方向のミガキによって仕上げられている。4の台付甕脚台は、やや内彎気味にのびる脚部をもつ。

5は、外上方に大きく開く直線的な坏部をもち、高さが約6cmの「ハ」字状に開く低い脚部の高坏である。口縁部は先端にかけてわずかに内彎し、端部は1の甕と同様に、平坦に仕上げられている。坏部の外面には短い単位のミガキが縦方向に施され、坏部と脚部の接合部には短く幅の狭い縦方向のハケメが認められる。脚部外面は縦方向のミガキが放射状に観察できる。坏部内面には外面と同様な短い単位のミガキが施され、脚部内面には横方向のハケメが認められる。6は、高坏および器台の脚部である。低く「ハ」字状に開いて、先端ではわずかに内彎する。表面はやや摩滅しているが、外面は縦方向、内面では横方向のハケメが観察できる。

SI237 (遺構V-26～28図、遺物V-55図)

SI237から出土した土器のうち、器形や器種の特徴がわかる12点を図示した。

1～6は壺である。1は、直線的な口縁部が外上方にのびる短頸壺である。口縁部外面は器面が剥離している。器面の摩滅が著しく、体部下半と底面に施されたケズリを除いて調整が不明瞭である。2は、内彎しながら上方へのびる口縁部をもち、体部が扁球形の壺である。器面の摩滅が著しく調整が不明瞭であるが、外面は全体的に、内面は口縁部から頸部にかけて赤彩される。3の広口壺は折り返された口縁部をもつ。口縁部の肥厚部の外面に横方向のハケメが施され、赤彩される。肥厚部以下の口縁部から頸部は縦方向のハケメの上に縦方向のミガキが施される。内面は縦方向のミガキが施されるが、部分的にハケメが残る。

4・5は壺の底部とみられる。4はわずかに上げ底状を呈し、底面付近の外面はケズリで整えられる。外面に縦方向の丁寧なミガキが施される。5は、底面付近の外面がケズリで整えられる。6は扁球形の体部をもつ壺である。器面の摩滅が著しく不明瞭であるが、底部付近を

ケズリで整え、丸底に仕上げている。

7は、「く」字状に屈曲した頸部から直線的な口縁部がのびる甕である。外面は、頸部や肩部、最大径付近を中心に斜方向のケズリが施される。内面は粘土の接合痕が明瞭でその付近に斜方向のケズリやユビオサエが認められる。部分的に幅5mm程度のミガキ状の調整が施される箇所がある。

8は底部が穿孔された鉢である。口縁部がわずかに内側へ屈折する。穿孔は焼成前に施され、端部の内面には内傾した平坦部がつくられる。口縁部や底部付近に不整形のケズリ状の調整が認められる。

9は、椀形の坏部と「ハ」字状に開く脚部をもつ小型高坏である。坏部の内外面と脚部外面は丁寧な縦方向のミガキによって仕上げられる。坏部と脚部の接合部に横方向のミガキが施される。脚部内面は横方向のハケメがめぐる。外面全体および坏部内面が赤彩される。10は直立してのびる口縁部をもつ、精製品の鉢とみられる。外面は体部最大径付近にケズリが施され、赤彩される。口縁部内面は縦方向の丁寧なミガキによって仕上げられる。11は緩やかに内彎しながらのびる口縁部である。丸い体部をもつ小形丸底鉢とみられる。内外面に丁寧な縦方向のミガキが施され、口縁部外面のみ横方向のミガキがめぐる。

12の坏は完形で出土した。横方向の強いナデにより口縁部が内傾気味にわずかに屈曲する。体部下半は横や斜方向のケズリが施される。

SI242（遺構V-29～32図、遺物V-56図）

SI242から出土した土器のうち、器形や器種の特徴がわかる9点を図示した。

1は、緩やかに開きながら上方へのびる頸部をもつ壺であり、体部は球形になるとみられる。頸部の外面付近にはハケメが残り、肩部には縦方向のミガキが施される。頸部内面はハケメの上に縦方向のミガキが施され、屈曲部は横方向の連続的なミガキが認められる。外面および内面の頸部より上側は赤彩される。

2・3は、「く」字状の口縁部をもつハケメが施された甕である。外面は全体的にハケメが認められるが、口縁部ではハケメが観察できない範囲がある。横方向のナデによるものとみられる。2・3いずれも器壁が摩滅していたが、2の内面には口縁部の先端付近と頸部にめぐるハケメが観察できる。

4・5は台付甕の脚台である。ともに外面にハケメが施されるが、5の内面には、沈線状の細い直線が放射状に認められる。また5は、脚台部と体部を接合する際

に撫でつけられたとみられる帯状の粘土の痕跡が接合部に残る。

6は体部が球形を呈する小型の台付甕である。頸部や体部上半、脚台部などの外面に明瞭なハケメが施される。口縁部はナデにより仕上げられ、体部内面もナデによる痕跡が明瞭である。

7・8は、緩やかに内彎する口縁部と扁球形の体部をもち、形状が小形丸底鉢に類似するが、口径が約16cmに復元できるやや大型の鉢である。口縁部の外面に丁寧な縦方向のミガキが施され、頸部の外面に縦方向の短いハケメが残る。7は肩部外面に横方向のケズリが施され、肩部に弱い稜が認められる。それ以下は縦方向のミガキによって仕上げられている。内面は調整が不明瞭であるが、口縁部に施された縦方向のミガキや、頸部に横方向にめぐるケズリ状の調整が頸部付近に認められる。8の体部外面は全体的に横方向のケズリによって整えられているとみられ、内面は頸部の横方向のケズリ状の調整を除いて不明瞭である。

9は、甕形とみられるミニチュア土器である。器壁が薄く、器面の摩滅が顕著である。外面にはハケメの上に細いミガキが施される。

SI259（遺構V-33～35図、遺物V-57図）

SI259から出土した土器のうち、器形や器種の特徴がわかる3点を図示した。

1は、やや直線的な口縁部をもつ壺である。頸部から口縁部に及ぶ長いミガキが外面に施される。内面も同様に頸部から口縁部に縦方向のミガキが認められ、口縁部は横方向のナデによって仕上げられる。2は、壺の底部である。ヘラ状の工具によるものとみられるナデの痕跡が内外面や底面に認められる。

3は、「く」字状に屈曲する口縁部の端部にキザミが施される甕である。キザミは木口状の工具によって施されている。頸部外面には縦方向のハケメが器面に沿って施され、体部外面や口縁部内面のハケメは横方向である。

SX270（遺構V-41、42図、遺物V-58図）

SX270から出土した土器のうち、器形や器種の特徴がわかる3点を図示した。

1の甕の口縁部は、強いナデによって口縁端部が上方へつまみ出された形状を呈する。内面に板状工具によるナデの痕跡が認められる。2は、円錐形の脚柱部をもつ高坏であり、明瞭に屈曲する坏底部と「ハ」字状に低く広がる裾部をもつ。外面は縦方向のミガキが隙間なく施され、坏部の内面も同様にミガキで仕上げられる。脚部

内面にはシボリ痕やユビオサエが残るほか、裾部と脚柱部の接合痕が観察できる。器壁の外表面全体と坏部の内面は赤彩される。3は直線的な短い口縁部と半球状の体部をもつ小形丸底鉢である。口縁部や体部の内外面に幅1mm未満の筋状のミガキが施される。器種の内外面が赤彩されている。

SI283 (遺構V -36、37 図、遺物V -59 図)

SI283 から出土した遺物のうち、器形や器種の特徴がわかる2点の土器と石製菅玉1点を図示した。

1は粗製の鉢である。口縁部はいびつであり、内外面にはユビオサエが顕著に認められる。2は、「ハ」字状に開く高坏の裾部であり、円錐形の脚柱部に接続するとみられる。器面の摩滅が著しいが、外面に縦方向のミガキが施される。3は緑色凝灰岩製の管玉である。穿孔の断面形は稜の鈍い多角形を呈し、両側から穿孔されたとみられる。孔の一方が摩耗するようすが両側で観察でき、使用痕の可能性はある。

SK285 (遺構V -39 図、遺物V -60 図)

SK285 から出土した土器のうち、器形や器種の特徴がわかる3点を図示した。

1は、坏部が直線的に開く高坏の口縁部である。幅1mm未満の線状の縦方向のミガキが内外面に認められる。全体が赤彩される。2は、口縁端部が外方へつまみ出されたような形状の埴である。器面の摩滅によって不明瞭であるが、体部に細かい縦方向のミガキが施され、体部下半には不整形のケズリ状の痕跡が認められる。全体が赤彩される。3はわずかに内彎する口縁部と扁球形の体部をもつ小形丸底鉢である。器壁が厚く、口縁部の内外面にハケメが施される。

SI287 (遺構V -38 図、遺物V -61 図)

SI287 から出土した土器のうち、器形や器種の特徴がわかる2点を図示した。

1は、折り返された口縁部をもつ広口壺である。残存する下端部が頸部の屈曲部にあたるとみられる。口縁部の肥厚部の外面に横方向のミガキが施される。内面は横方向のハケメの上から横方向のミガキが施される。2は、椀形の坏部と「ハ」字状に開く低い脚部をもつ小型高坏である。坏部の内外面および脚部の外面に丁寧なミガキが施され、赤彩されている。脚部の内面にも部分的に赤色顔料が付着した箇所が認められる。坏部と脚部の接合部や脚部内面はハケメで整えられる。

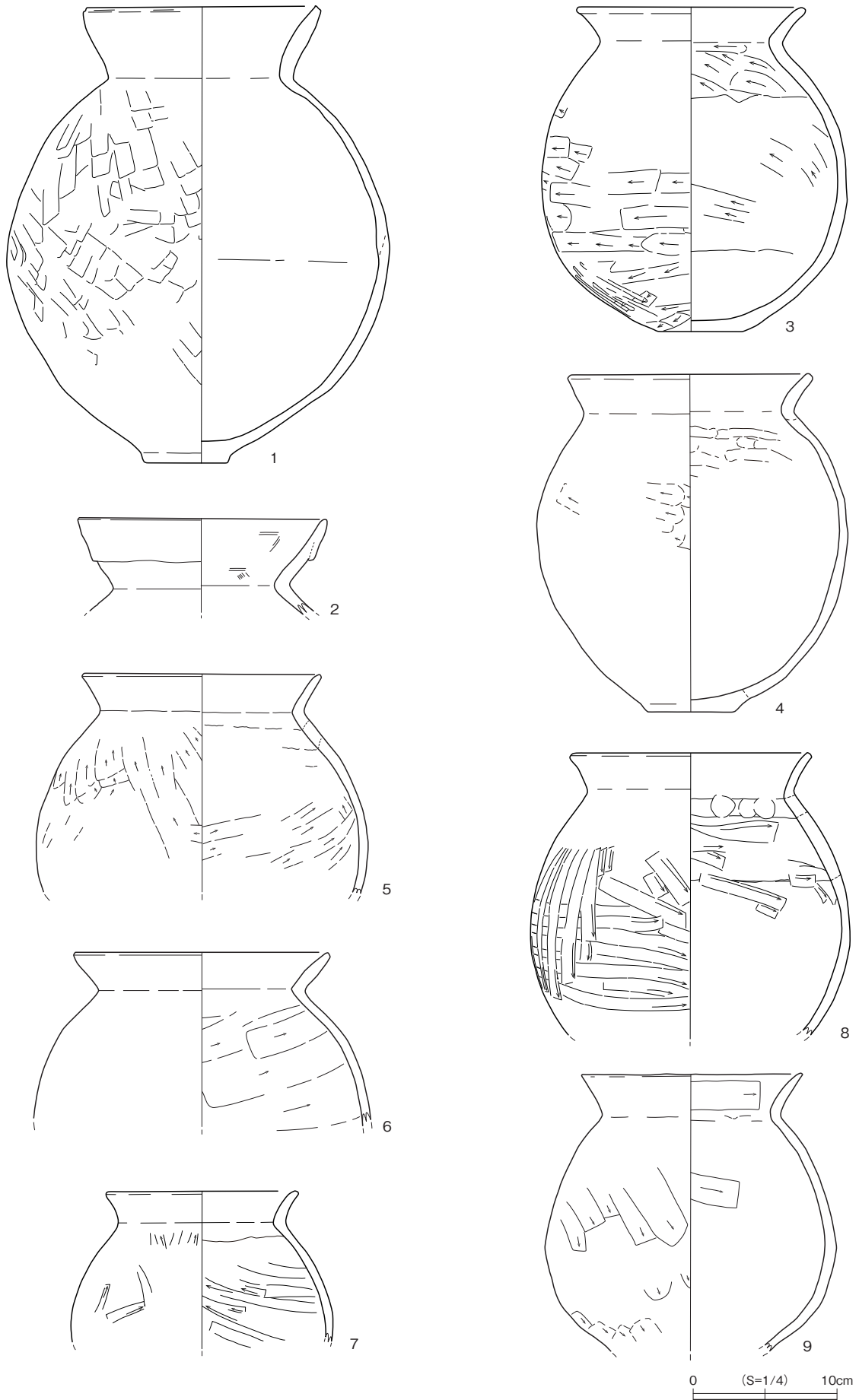
遺構外 (遺物V -62 図)

1は、「く」字状に屈曲する甕の口縁部である。頸部の屈曲は明瞭で、口縁端部がつまみ出されたように外側を向く。頸部外面やその下側、あるいは口縁部の内面にハケメが施されるが不明瞭である。肩部の外面に横方向のケズリが施され、内面には板状工具によるとみられるナデが顕著に認められる。

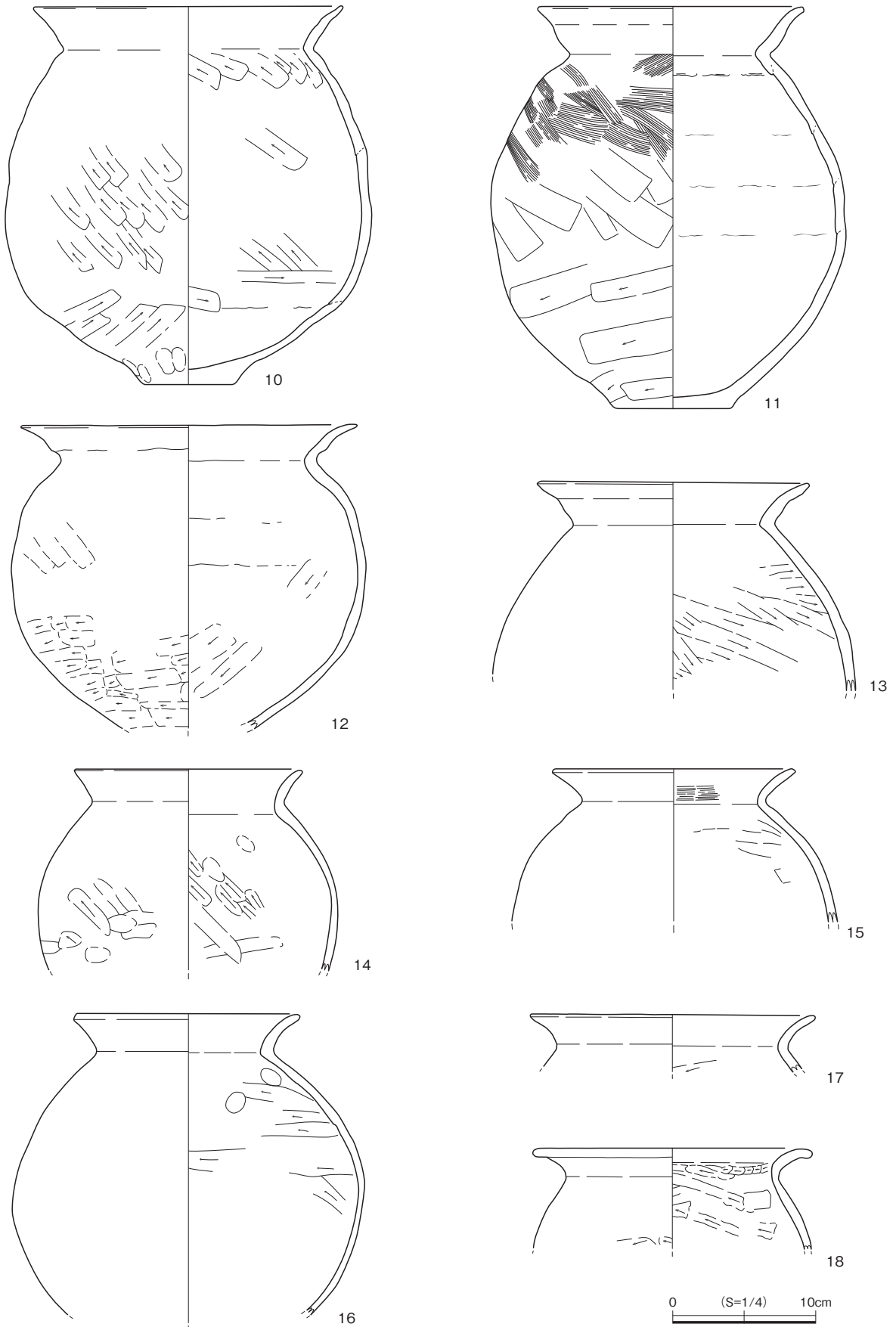
2は、外上方へ直線的に大きく開く坏部と円錐形の脚柱部をもつ高坏である。裾部は脚柱部から明瞭な屈曲部を経て「ハ」字状に開く。坏部外面はとくに器面の摩滅が著しいが、外面全体と坏部の内面は赤彩されていたとみられる。外面に縦方向のミガキが施され、坏部と脚部の接合部では横方向のミガキが認められる。坏部内面も同様に縦方向のミガキが施される。脚柱部の内面は、下側に連続的なユビオサエが認められる。

3は、下部が広がる円筒形の脚柱部をもつ高坏の脚部である。裾部は脚柱部から明瞭な屈曲部を経て「ハ」字状に開く。脚柱部の外面は指頭によるナデとみられるやや幅の広い縦方向の調整が認められる。内面は、横方向のケズリが器壁に沿って施される。

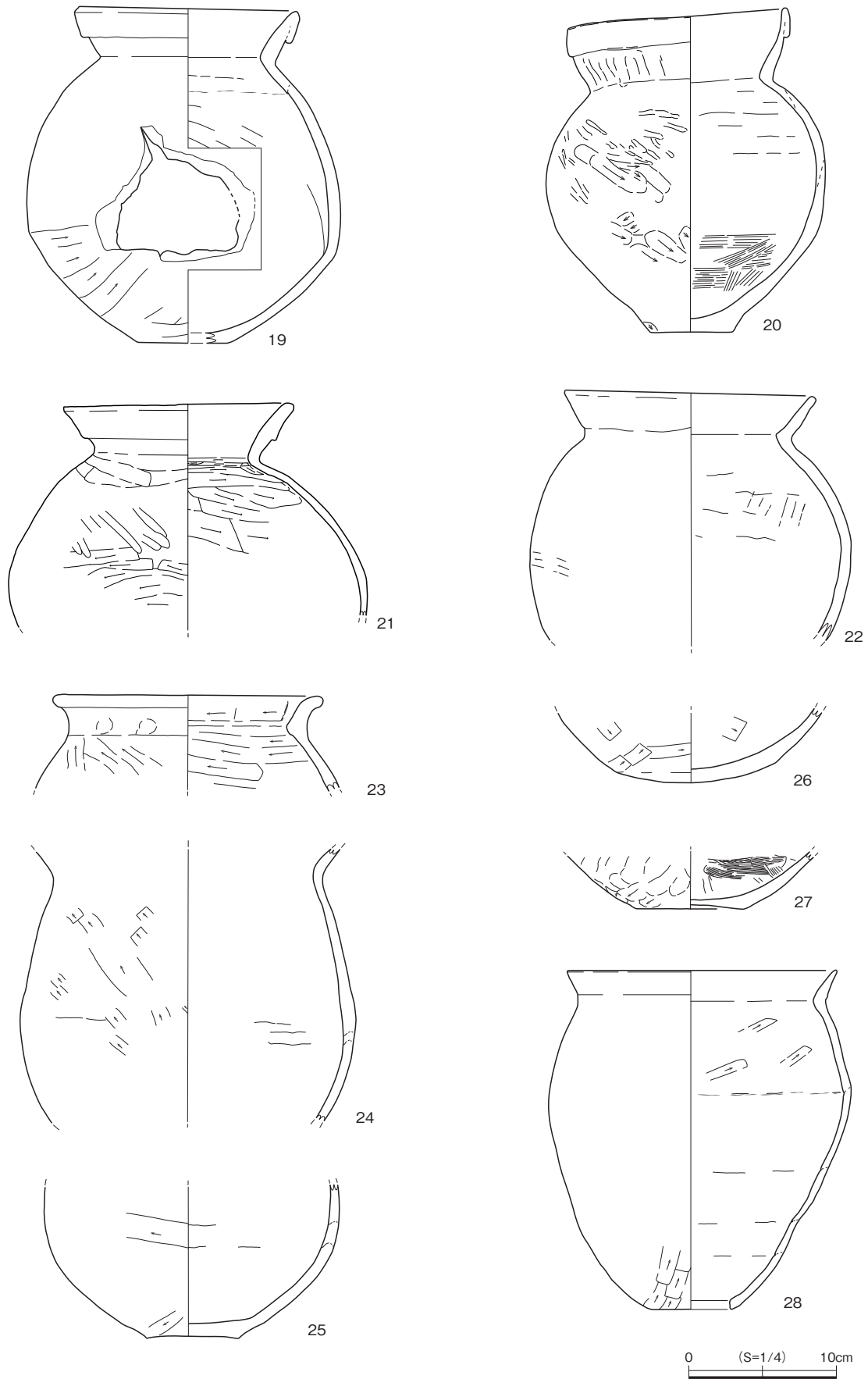
4は、皿状の小さな受け部と「ハ」字状に開く脚部をもつ小型器台である。脚部の外面に細い縦方向のミガキが施される。それ以外の箇所は器面の摩滅によって調整が不明瞭である。受け部と脚部の接合部の外面に、接合時の痕跡とみられる製作者の爪痕が認められた。接合部の貫通孔および脚部の内面を除いて、器面が赤彩される。



V-43 図 S1201 出土遺物 (1)

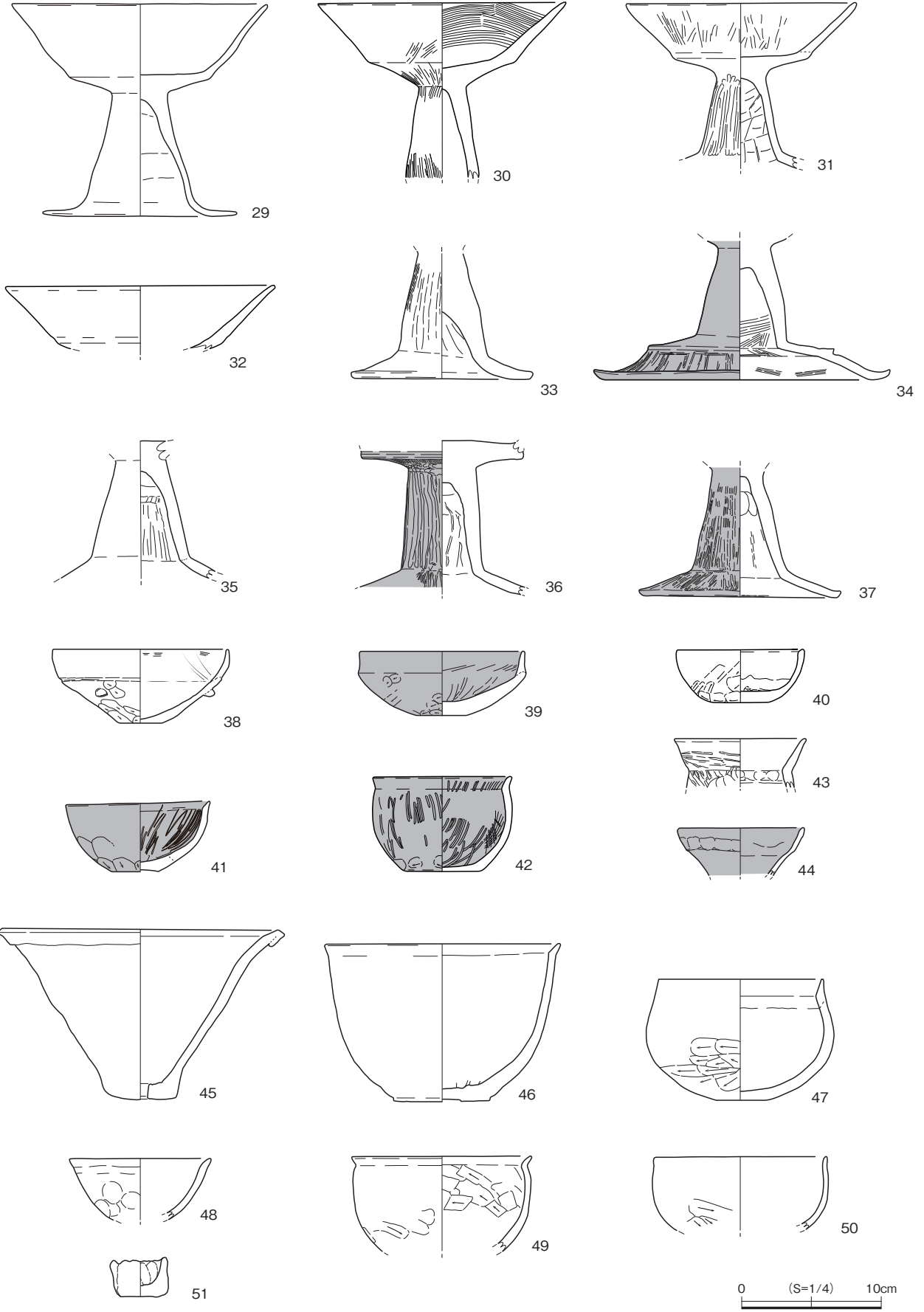


V-44 図 S1201 出土遺物 (2)

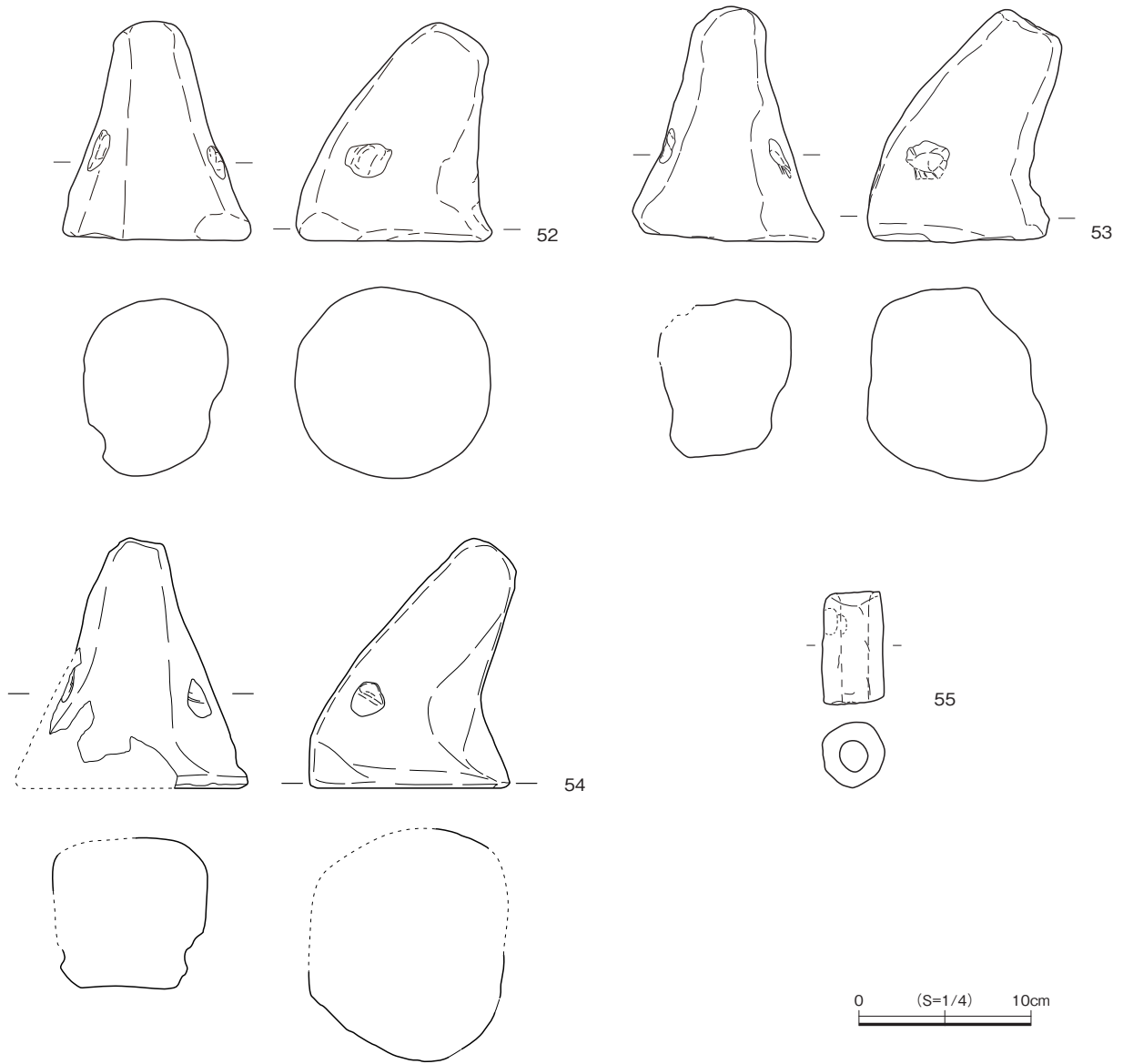


V-45 図 S1201 出土遺物 (3)

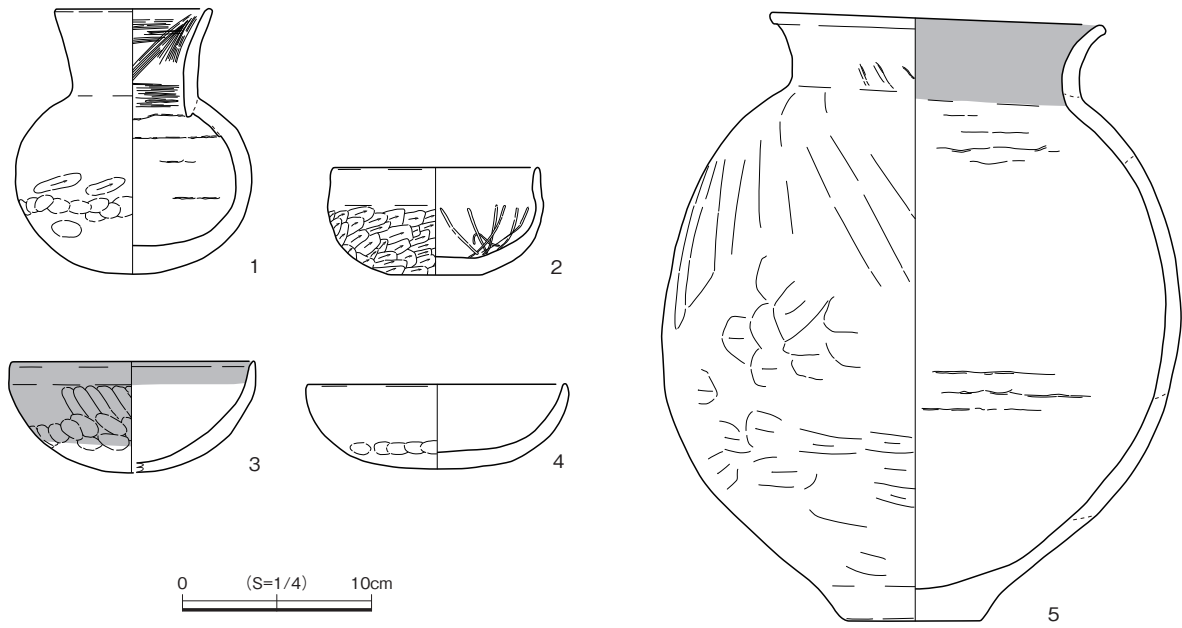
II 看護職員等宿舍5号棟地点



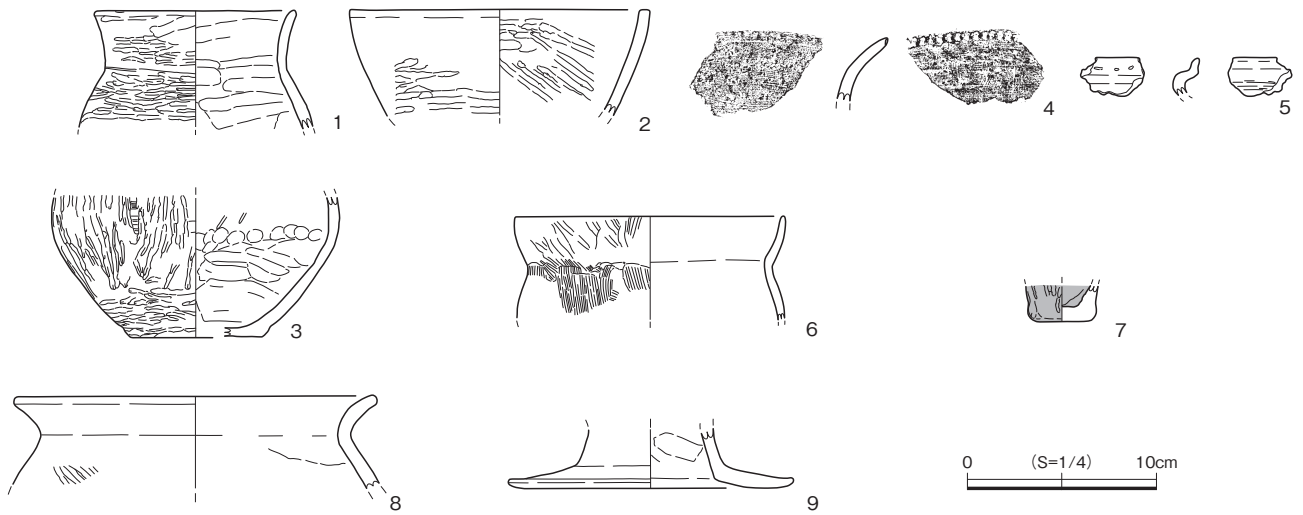
V-46 図 SI201 出土遺物 (4)



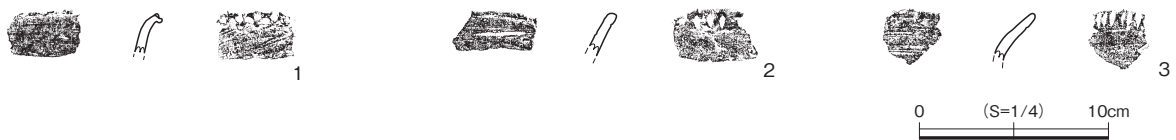
V-47 図 S1201 出土遺物 (5)



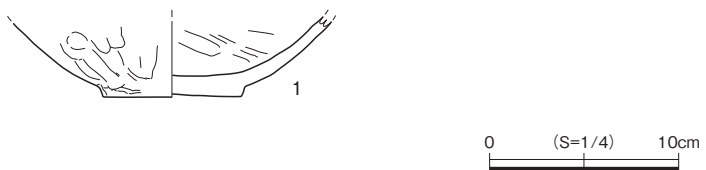
V-48 図 SI203 出土遺物



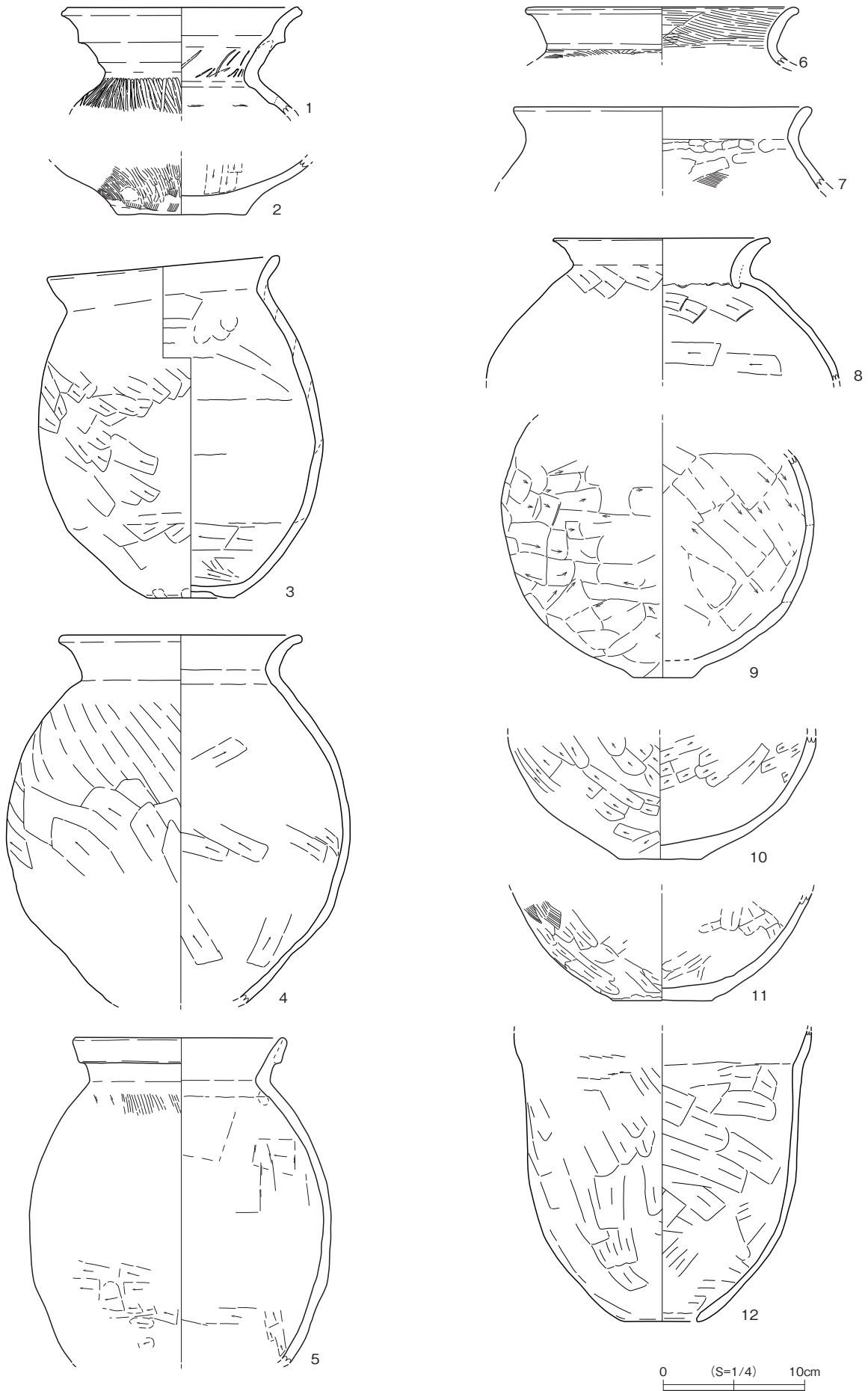
V-49 図 SI204 出土遺物



V-50 図 SI205 出土遺物

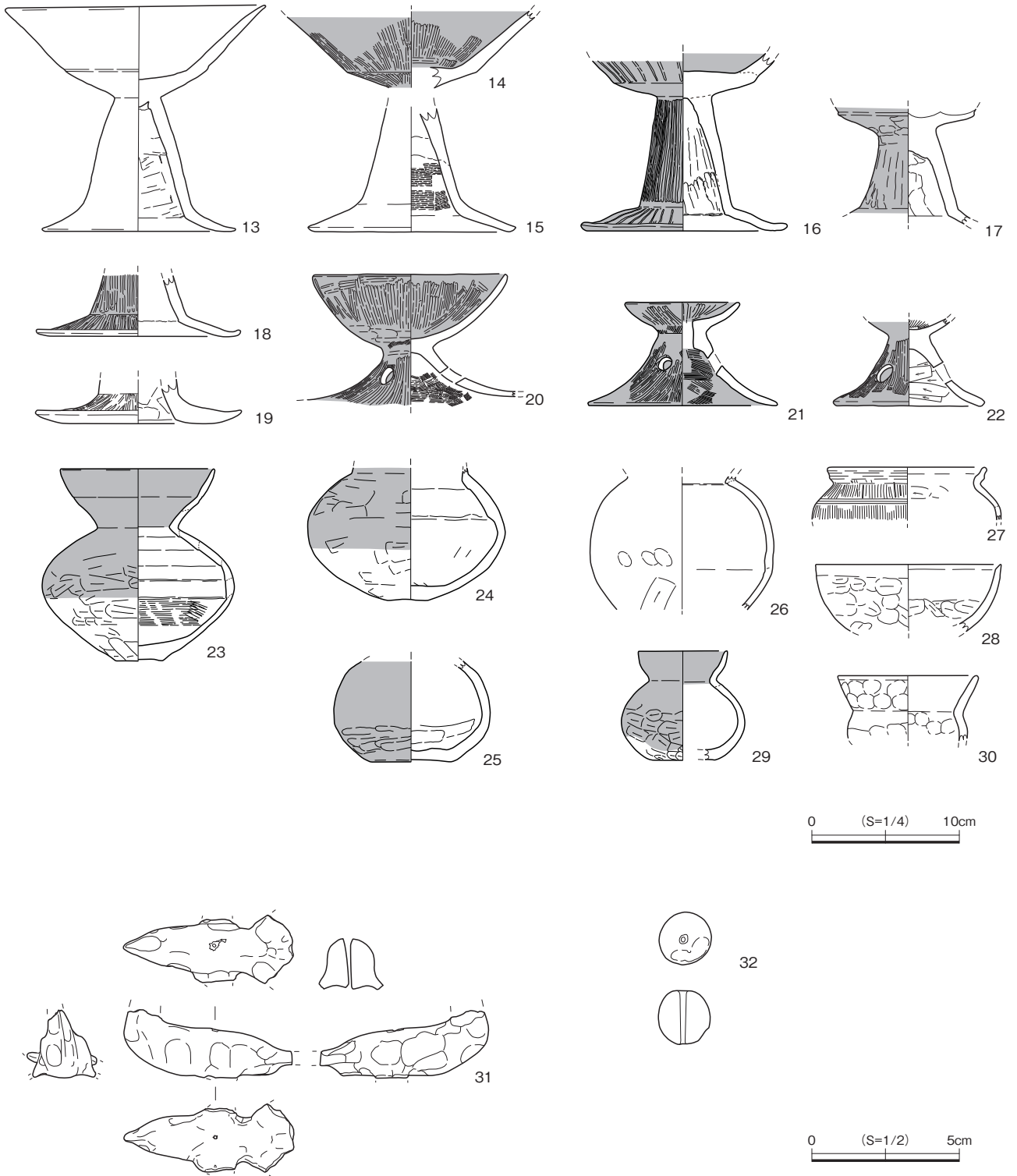


V-51 図 SI208 出土遺物

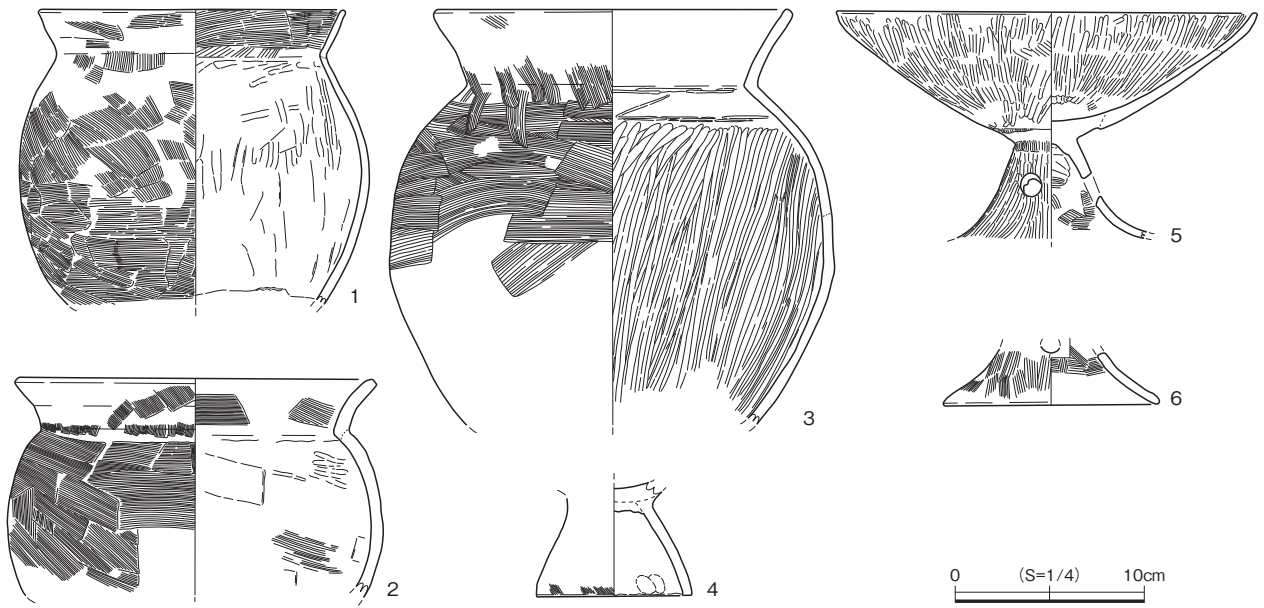


V-52 図 SI212 出土遺物 (1)

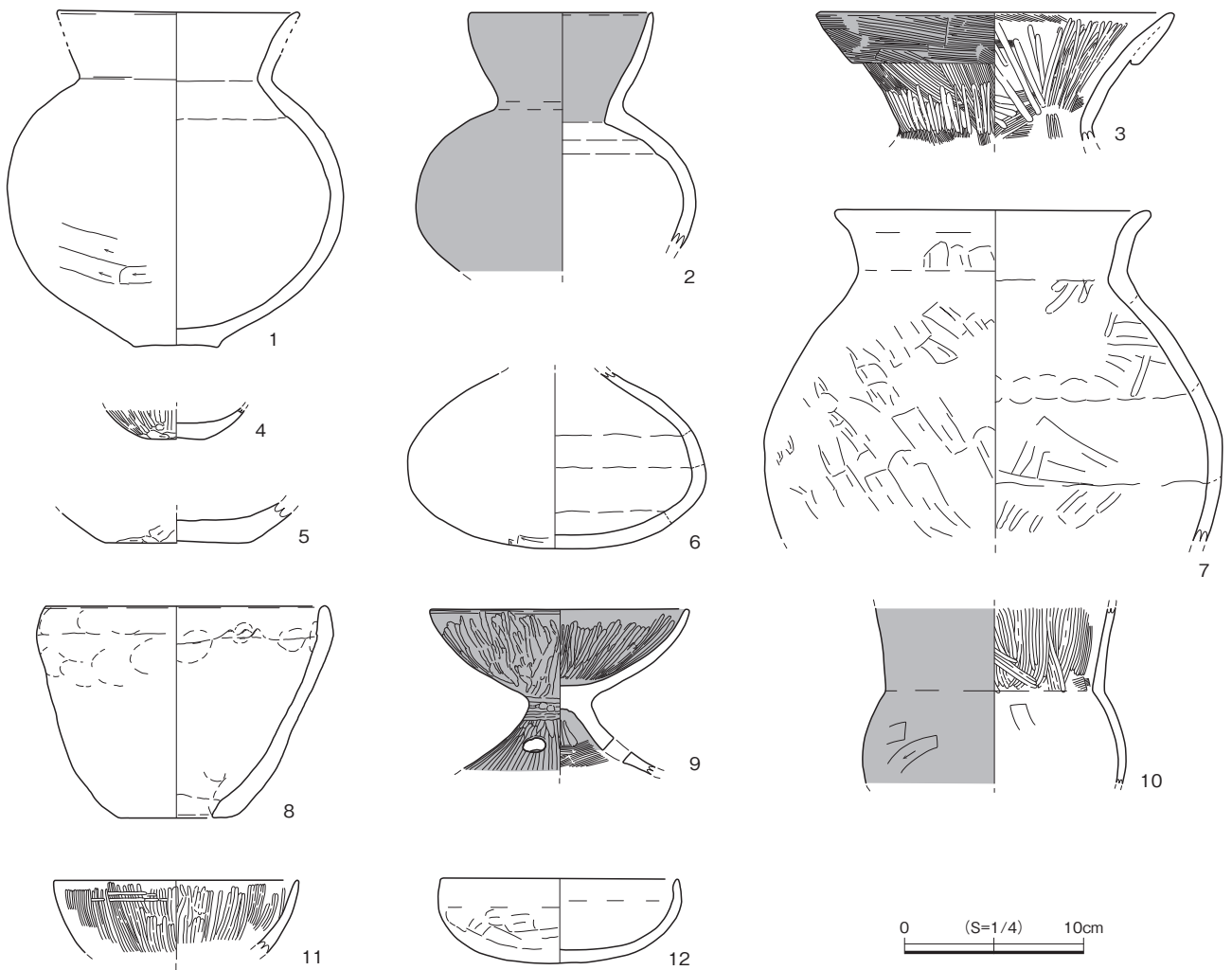
II 看護職員等宿舎5号棟地点



V-53 図 SI212 出土遺物 (1)

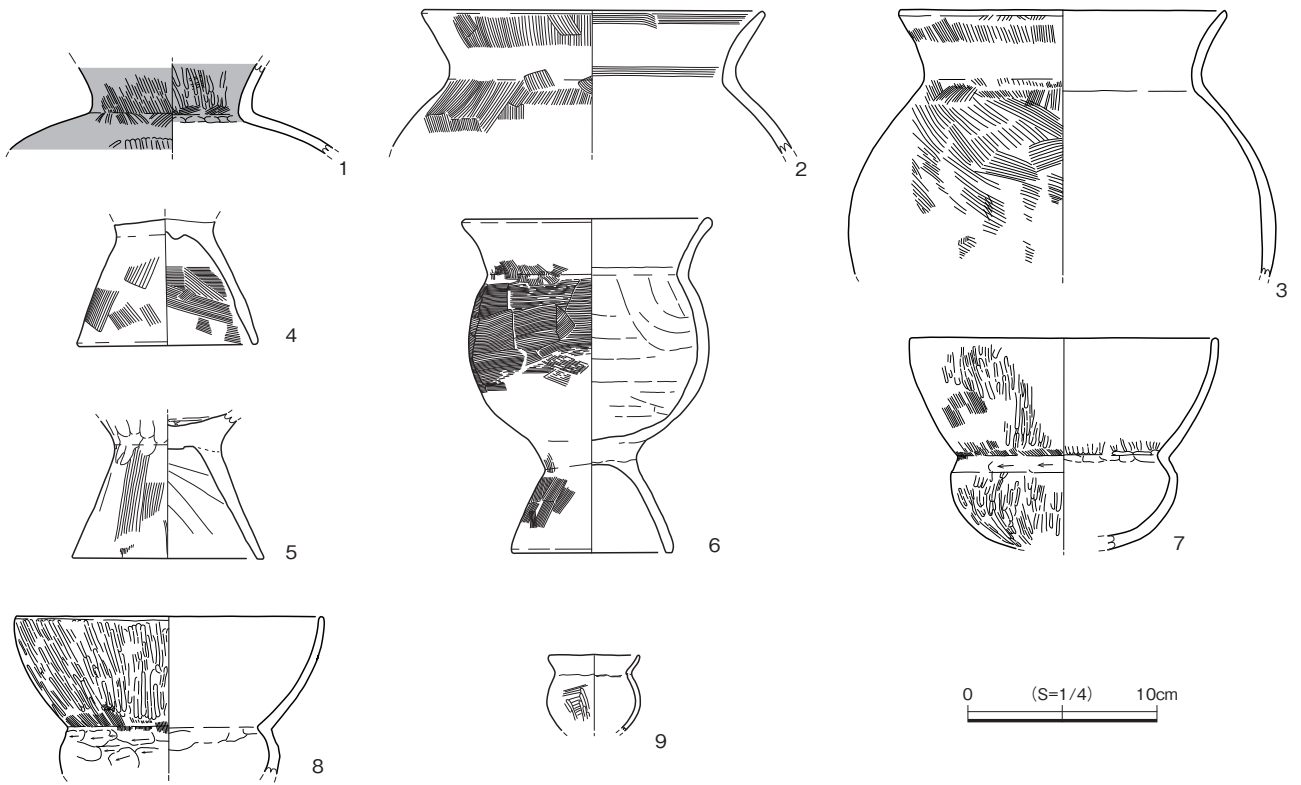


V-54 図 SI236 出土遺物

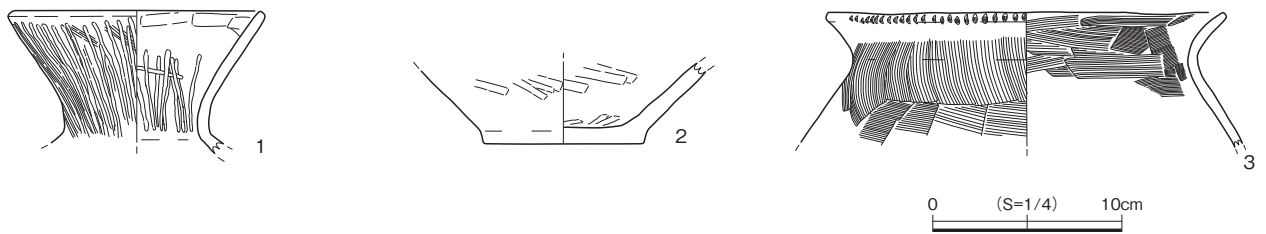


V-55 図 SI237 (SI08) 出土遺物

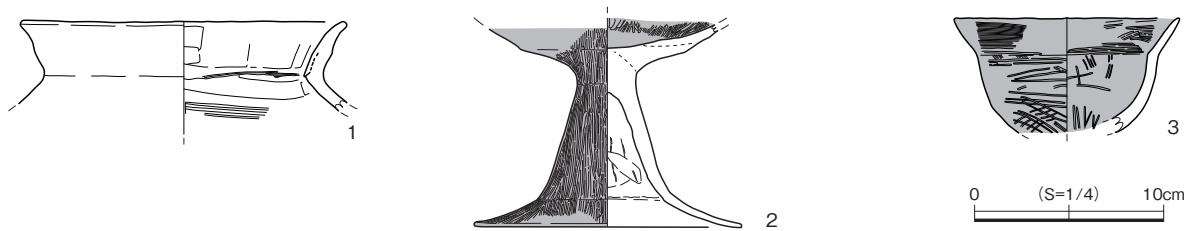
II 看護職員等宿舎5号棟地点



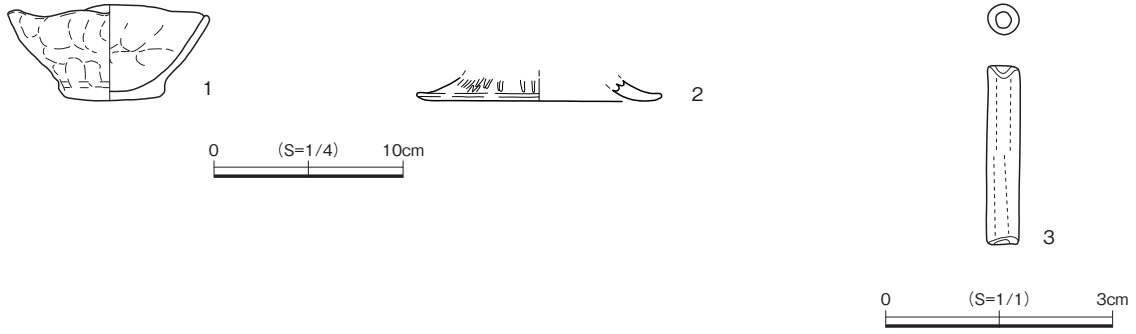
V-56 図 SI242 (SI07) 出土遺物



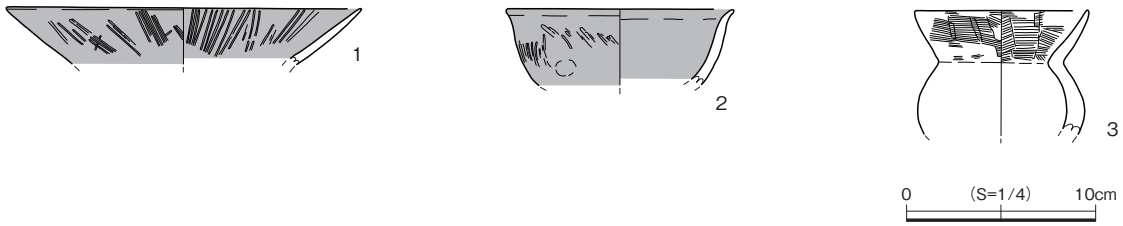
V-57 図 SI259 出土遺物



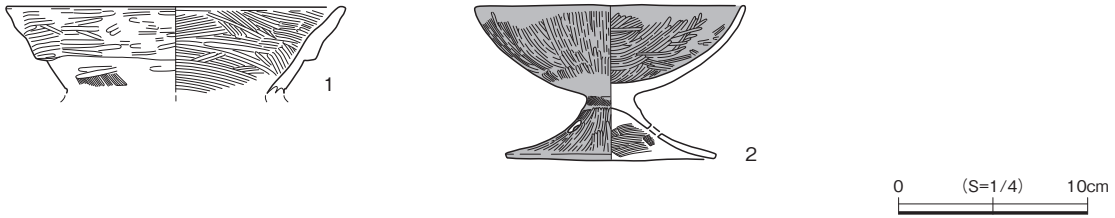
V-58 図 SX270 出土遺物



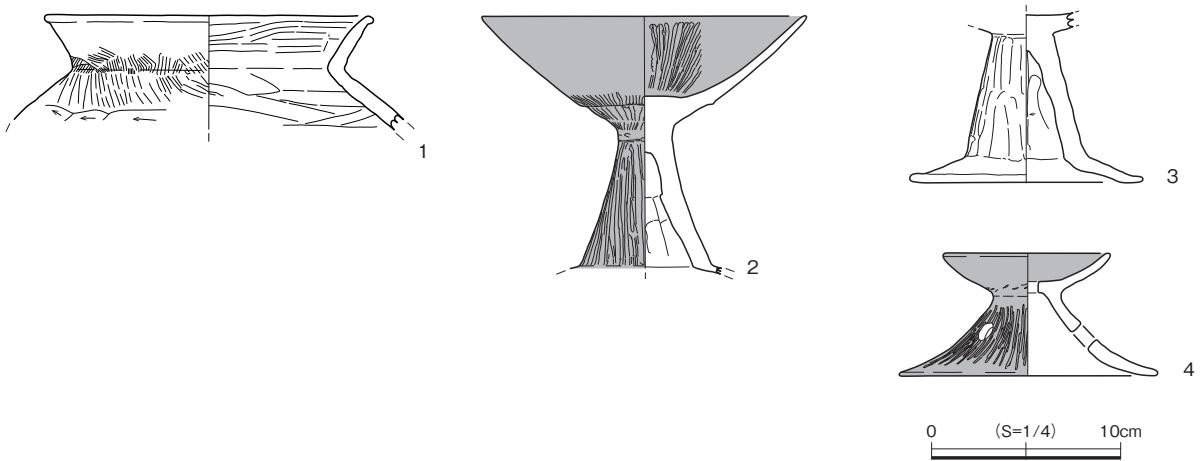
V-59 図 SI283 出土遺物



V-60 図 SK285 出土遺物



V-61 図 SI287 出土遺物



V-62 図 遺構外

V-1表 出土遺物観察表(1)

図版番号	器種	部位	法量(cm) 口径 底径 高さ	調整・文様	胎土	焼成	色調	出土 遺構 層位	備考・残存
V-43 図1	短頸壺	口縁～底部	16.5 5.7 31.9	外：体部に板状工具によるナデ 内：ナデ	密、直径0.5mm以下の白・黒色の砂粒やシャモットを含む	普通	赤褐	SI201	内面に輪積み痕 70%残存
V-43 図2	広口壺	口縁～頸部	17.3 — [6.6]	外：ナデ 内：頸部に横方向のハケメ	密、直径1.2mmの白色の砂粒を多量に含む	良い	褐	SI201	口縁部内面にスス 10%残存
V-43 図3	甕	口縁～底部	15.9 6.0 22.5	外：体部に横方向のケズリ、縦方向のミガキ 内：体部に横方向のケズリ	密、直径0.5mm以下の白・黒色の砂粒や雲母を含む	良い	橙	SI201	内面にススと輪積み痕 95%残存
V-43 図4	甕	口縁～底部	17.0 (6.0) 23.5	外：体部にケズリ 内：体部上半に横方向の太いミガキ、わずかにハケメ	密、直径1mm以下の白や赤褐色の礫を中量、直径5mmの礫をごく少量含む	普通	褐	SI201	外面全面にススが附着 90%残存
V-43 図5	甕	口縁～体部上半	16.4 — [5.2]	外：体部に縦方向のケズリ 内：体部に横方向のケズリ	密、直径1mm程度の白色の砂粒を多量に含む	普通	橙褐	SI201	内面に接合痕 40%残存
V-43 図6	甕	口縁～体部上半	(17.5) — [14.7]	外：口縁～頸部にナデ 内：体部に横方向のケズリ	密、直径0.1mm以下の白粒砂粒をわずかに含む	普通	にぶい黄褐	SI201	外面にスス 20%残存
V-43 図7	甕	口縁～体部上半	(13.0) — [10.5]	外：体部に縦方向のケズリ 内：体部に横方向のケズリ	密、直径3mm以下の砂礫を少量含む	普通	赤褐	SI201	体部外面に黒斑 10%残存
V-43 図8	甕	口縁～体部下半	16.2 — [19.7]	外：体部にケズリ 内：頸部に指頭跡、体部上半に横方向のケズリ	密、直径1mm以下の礫、黒色の砂粒を中量、直径2～3mmの小礫をわずかに含む	普通	橙	SI201	内面に輪積み痕 60%残存
V-43 図9	甕	口縁～体部下半	(15.6) — [19.3]	外：体部に縦方向のケズリ 内：頸部・体部上半に横方向のケズリ	密、直径1～2mm程度の砂礫を多量に含む	普通	外：黒褐 内：暗赤褐	SI201	内面に輪積み痕 50%残存
V-44 図10	甕	口縁～底部	21.6 6.4 26.5	外：体部に横方向ケズリ、底部付近に指頭跡 内：体部に横方向のケズリ	密、直径5mm程度の礫を含む	良い	赤褐	SI201	外面に黒斑 内面にスス 70%残存
V-44 図11	甕	口縁～底部	(18.4) 7.8 28.3	外：体部に横方向のハケメ 内：ナデ	密、直径5mm程度の礫を少量含む	良い	明黄褐、黄褐	SI201	外面にスス 70%残存
V-44 図12	壺	口縁～体部下半	(23.6) — [21.3]	外：体部にケズリ 内：体部下半に縦方向のケズリ	密、直径1mm以下の砂礫を少量含む	悪い	褐	SI201	25%残存
V-44 図13	甕	口縁～体部上半	18.6 — [19.4]	外：口縁部にナデ 内：体部に横方向のケズリ	密、直径1mm以下の白色の砂粒を少量含む	普通	明橙褐	SI201	50%残存
V-44 図14	甕	口縁～体部上半	(16.0) — [13.9]	外：口縁～体部上半にケズリ 内：口縁部にナデ、体部にケズリ	密、直径1mm程度の白色の砂粒を含む	良い	外：黒褐 内：明赤褐	SI201	20%残存
V-44 図15	甕	口縁～体部上半	(17.0) — [10.7]	外：ナデ 内：頸部に横方向のハケメ、体部に横方向の板ナデ	密、直径2～7mm程度の灰・黒色礫を少量含む	普通	外：明黄褐、 橙 内：橙	SI201	内面に輪積み痕 20%残存
V-44 図16	甕	口縁～体部下半	(15.5) — [21.1]	外：口縁～体部下半に横方向のナデ 内：頸部に横方向のナデ、体部に横方向のケズリ	密、直径0.5mm以下の白色の砂粒を含む	普通	外：にぶい 黄褐 内：暗い赤 褐	SI201	30%残存
V-44 図17	甕	口縁～肩部	(20.0) — [4.0]	外：ナデ 内：肩部に斜方向のケズリ	密、直径0.5～1mmの白・褐色などの砂粒を中量、直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	普通	橙	SI201	20%残存
V-44 図18	甕	口縁～肩部	(19.6) — [7.0]	外：肩部に斜方向のケズリ 内：頸部・体部にケズリ	密、直径0.5～1mmの白・褐色などの砂粒を中量、直径1～2mmのシャモットを少量含む	良い	にぶい橙	SI201	20%残存
V-45 図19	甕	口縁～底部	14.8 6.1 22.8	外：頸～体部上半にナデ、体部下半に横方向のケズリ 内：口縁～頸部にナデ、頸～体部にケズリ	密、直径0.5～2mm程度の白色の砂粒を含む	普通	淡褐	SI201	焼成後穿孔 外面に黒斑 90%残存
V-45 図20	甕	口縁～底部	15.1 5.6 22.0	外：口縁部に横方向のナデ、体部にミガキ 内：体部下半にハケメ	密、白・黒色の砂粒を多量に含む	良い	外：淡赤橙、 にぶい黄橙 内：にぶい 橙	SI201	外面にスス、底部内外面に黒斑 80%残存
V-45 図21	甕	口縁～体部上半	15.6 — [14.4]	外：体部上半に縦方向のミガキ、横方向のケズリ 内：体部上半に横方向のケズリ	密、直径0.5mm以下の白色の砂粒や雲母を含む	普通	明赤褐	SI201	内面の剥落顕著 30%残存
V-45 図22	甕	口縁～体部上半	17.0 — [16.9]	外：体部に横方向のケズリ 内：口縁～頸部に横方向のナデ、体部に縦方向のケズリ	密、直径0.5mm程度の白色の砂粒を含む	良い	にぶい黄橙	SI201	内面に輪積み痕 40%残存
V-45 図23	甕	口縁～肩部	(18.3) — [6.4]	外：頸部にユビオサエ、肩部に斜方向のケズリ 内：口縁部・体部に横方向のケズリ	密、直径0.5～1mmの白・褐色などの砂粒や直径1～2mmのシャモットを中量含む	普通	にぶい黄橙	SI201	20%残存
V-45 図24	甕	頸部～体部下半	— (18.3)	外：頸～体部に縦方向のケズリ 内：横方向のナデ	密、直径1mm以下の砂礫を少量含む	普通	赤褐	SI201	体部外面に黒斑 20%残存
V-45 図25	甕	体部下半～底部	— 6.2 [12.4]	外：体～底部に縦方向のケズリ 内：横方向のナデ	密、直径1mm以下の砂礫を少量含む	普通	赤褐	SI201	体部外面に黒斑 20%残存
V-45 図26	甕	底部	— 10.6 [4.8]	外：底部にケズリ 内：底部にケズリ	密、直径1mm程度の白色の砂粒を多量に含む	やや悪い	外：明赤褐 内：黒褐	SI201	10%残存

V-1表 出土遺物観察表 (2)

図版番号	器種	部位	法量 (cm) 口径 底径 高さ	調整・文様	胎土	焼成	色調	出土遺構層位	備考・残存
V-45 図 27	甕	底部	— 7.6 [3.9]	外：斜方向のケズリ、底面にケズリ 内：ハケメ	密、直径0.5～2mmの白・褐色などの砂粒を中量、直径1～2mmのシャモットを少量含む	良い	にぶい橙	SI201	70%残存
V-45 図 28	甌	口縁～底部	19.6 5.2 23.0	外：底部付近に縦方向のケズリ 内：体部上半にケズリ	やや粗、直径1mm以下の砂粒を多量に含む	良い	明赤褐、赤灰	SI201	内面に黒斑 80%残存
V-46 図 29	高坏	口縁～脚部	(18.4) (13.9) 15.2	内外：器面の摩滅が顕著で観察できない	密、砂粒をほとんど含まない	悪い	外：にぶい黄橙 内：橙	SI201	摩滅顕著 40%残存
V-46 図 30	高坏	口縁～脚部	(17.8) — [12.5]	外：接合部～脚部に縦方向のハケメ 内：坏部に横方向のハケメ	密、直径1mm以下の礫を含む	良い	にぶい褐	SI201	20%残存
V-46 図 31	高坏	口縁～脚部	(16.6) — [11.8]	外：坏部・脚部に縦方向のミガキ 内：坏部に縦方向のミガキ、脚部に横方向のケズリ	密、直径0.5mm以下の白・黒色などの砂粒を中量、直径2～3mmの礫、雲母、シャモットを少量含む	普通	橙	SI201	30%残存
V-46 図 32	高坏	口縁～脚部	(19.2) — [4.5]	外：坏部に指頭跡 内：坏部に縦方向のケズリ	密、直径1mm以下の礫を多量、直径1～2.5mmの礫を少量含む	やや悪い	にぶい褐	SI201	10%残存
V-46 図 33	高坏	脚部	— 13.0 [9.3]	外：脚部に縦方向のミガキ 内：脚部に縦方向のナデ	密、直径1～2mmのシャモットを少量含む	良い	橙	SI201	50%残存
V-46 図 34	高坏	脚部	— 21.1 [10.2]	外：ナデ、脚裾部に縦方向のミガキ 内：横方向のハケメ	密、直径1mm以下の石英・長石・雲母を含む	良い	外：赤褐 内：褐	SI201	外面に赤彩 内面に黒斑 50%残存
V-46 図 35	高坏	接合部～脚裾部	— — (9.8)	外：横方向のナデ 内：横方向に連続する板状工具痕	細密、直径0.5～1mmの白・褐色などの砂粒や直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	良い	橙	SI201	60%残存
V-46 図 36	高坏	坏底～脚裾部	— — (11.0)	外：幅1～1.5mmの縦方向のミガキ 内：脚柱部上方にユビオサエ、シボリ	細密、直径0.5～1mmの白・褐色などの砂粒を中量、直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	良い	赤彩部：赤褐 内：にぶい褐	SI201	内外面に赤彩 60%残存
V-46 図 37	高坏	脚部	— 14.5 [9.2]	外：縦方向のミガキ 内：脚柱部上方にユビオサエ、板状工具による横方向のナデ、シボリ	密、直径1mm以下の砂礫、雲母を含む	良い	外：赤褐 内：明赤褐	SI201	外面に赤彩 20%残存
V-46 図 38	坏	口縁～底部	12.4 3.0 5.3	外：口縁部にナデ、体部にケズリ 内：口縁～屈曲部にナデ	密、直径0.1mm程度の白色の砂粒を少量含む	良い	明褐	SI201	内外面に黒斑 80%残存
V-46 図 39	坏	口縁～底部	(11.6) 5.6 4.6	外：体部下半にケズリ 内：体部下半にミガキ	密、直径1mm以下の石英・長石を含む	普通	外：橙 内：黒褐	SI201	内外面に赤彩 50%残存
V-46 図 40	埴・坏	口縁～底部	(9.1) 3.9 3.8	外：体部～底部にケズリ 内：底部に横方向のケズリ	密、直径1mm以下の砂礫を多量に含む	普通	橙	SI201	50%残存
V-46 図 41	埴・坏	口縁～底部	10.3 3.4 5.0	外：体部下半に縦方向のケズリ 内：体部に縦方向、底部付近に放射状のミガキ	密、直径0.5～1mmの白色の砂粒を含む	普通	明赤褐	SI201	内外面に赤彩 100%残存
V-46 図 42	埴・坏	口縁～底部	(12.0) (5.6) 6.8	外：体部に縦方向のミガキ、底部に横方向のケズリ 内：口縁部～底部に縦方向のミガキ	密、直径1mm以下の白・黒色砂粒を含む	普通	褐	SI201	内外面に赤彩 底部外面に黒斑 30%残存
V-46 図 43	小形丸底鉢	口縁～頸部	(9.4) — [3.5]	外：口縁部に横方向、頸部に縦方向のミガキ、肩部に斜方向のケズリ 内：頸部にユビオサエ	細密、直径0.5～1mmの白・褐色などの砂粒や直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	良い	外：にぶい赤褐 内：明赤褐	SI201	12.5%残存
V-46 図 44	小形壺	口縁～頸部	(8.8) — [3.5]	外：口縁部に横方向のケズリ 内：ナデ	密、直径0.5～1mmの白・褐色の砂粒を中量、直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	普通	明赤褐	SI201	内外面赤彩 12.5%残存
V-46 図 45	甌形土器	口縁～底部	(20.5) 5.3 12.2	外：口縁部にナデ 内：口縁部・体部にナデ	密、直径0.5～1mmの白色の砂粒を含む	良い	橙	SI201	内外面に黒斑 底部焼成前穿孔 50%残存
V-46 図 46	小形甕	口縁～底部	(16.8) 6.8 11.2	外：摩滅のため不明 内：口縁部～体部に板状工具によるナデ、底部にユビナデ	密、直径1mm程度のシャモットや直径1mm以下の白色の砂粒を少量含む	普通	外：褐、黒褐 内：明褐、灰褐	SI201	底部外面にスス 60%残存
V-46 図 47	鉢	口縁～底部	6.0 3.6 8.7	外：体部に横方向のケズリ 内：ナデ	密、直径0.5～1mmの白色の砂粒を含む	普通	明赤褐	SI201	底部内外面に黒斑 70%残存
V-46 図 48	鉢	口縁～体部下半部	(10.2) — [4.4]	外：下半部に斜方向のケズリ 内：ナデ	細密、直径0.5～1mmの白・褐色などの砂粒や直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	良い	にぶい褐	SI201	20%残存
V-46 図 49	鉢	口縁～体部下半部	(13.0) — [6.8]	外：下半部に斜方向のケズリ 内：上半部に斜方向のケズリ	密、直径0.5～3mmの白・褐色の砂粒を中量、直径1～2mmのシャモットを少量含む	普通	にぶい黄橙	SI201	20%残存
V-46 図 50	鉢	口縁～体部下半部	(12.4) — [3.7]	外：下半部に斜方向のケズリ 内：ナデ	密、直径0.5～1mmの白・褐色などの砂粒を中量、直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	普通	外：にぶい褐 内：にぶい黄褐	SI201	12.5%残存

V-1表 出土遺物観察表(3)

図版番号	器種	部位	法量(cm) 口径 底径 高さ	調整・文様	胎土	焼成	色調	出土遺構層位	備考・残存
V-47 図51	手捏ね土器	口縁～底部	3.7 2.7 2.8	外：ナデ 内：連続するユビオサエ	密、直径0.5mm程度の白色の砂粒をわずかに含む	普通	黒褐	SI201	完形
V-47 図52	土製支脚	完形	11.4 (長) 11.0 (幅) 12.7	全体に粗いナデ 両側面に指による凹み	やや粗、直径1～3mmの白・赤・黒色の礫を少量含む	普通	橙 被熱箇所： 橙	SI201	被熱により一部変色 完形
V-47 図53	土製支脚	ほぼ完形	10.5 (長) 11.1 (幅) 13.6	全体に粗いナデ 両側面に指による凹み	粗、直径1～3mmの白・赤・黒色の礫を少量含む	普通	明黄褐 被熱箇所： 橙	SI201	被熱により一部変色 80%残存
V-47 図54	土製支脚	ほぼ完形	11.7 (長) 13.5 (幅) 14.5	全体に粗いナデ 両側面に指による凹み	粗、直径1mm程度の礫を少量含む	良い	黄橙 被熱箇所： 明赤褐	SI201	被熱により一部変色 90%残存
V-47 図55	筒形土製品	完形	6.6 (長) 3.9 (幅) 3.7 (厚)	外：ナデ 内：—	密、直径1～2mmの砂粒を含む	普通	橙	SI201	完形
V-48 図1	小形直口壺	口縁～底部	8.4 1.8 14.0	外：体部下半にケズリ・ユビオサエ 内：口縁～頸部にハケメ	密、直径1～2mm程度の砂礫を多量に含む	良い	外：褐 内：赤褐	SI203	80%残存
V-48 図2	坏	口縁～底部	(11.0) 4.8 5.7	外：体部下半に横方向のケズリ 内：体部下半に縦方向のミガキ	密、砂粒をほとんど含まない	良い	褐、赤褐	SI203	底部内面に「×」状の線刻 25%残存
V-48 図3	坏	口縁～体部	13.0 — [5.9]	外：体部にユビオサエ 内：ナデ	密、直径2～10mmのシャモットを多量に含む	良い	赤褐	SI203	口縁部内外面に赤彩 25%残存
V-48 図4	坏	口縁～底部	(14.0) — 4.5	外：ユビオサエ 内：ナデ	密、直径2mm程度の砂礫を少量含む、石英・長石・赤色粒を含む	やや悪い	赤褐	SI203	摩滅顕著 20%残存
V-48 図5	甕	口縁～底部	17.8 7.0 32.3	外：体部上半に縦方向のケズリ、 体部下半に横方向のケズリ 内：ナデ	粗、直径1～3mm 石英・長石を多量、直径5mm程度の礫を少量含む	やや悪い	外：明黄褐、 内：にぶい 黄褐、明赤 褐	SI203	口縁部内面に赤彩 内面にスス 完形
V-49 図1	短頸壺	口縁～肩部	10.5 — [5.2]	外：幅1～1.5mmの横方向のミガキ 内：横方向のナデ	細密、直径0.5～1mmの白・褐色などの砂粒やシャモットを少量含む	良い	橙	SI204	50%残存
V-49 図2	広口壺	口縁部	(12.4) — [3.7]	外：下部に横方向のミガキ 内：縦や斜方向のミガキ	密、直径0.5～1mmの灰色の砂粒を中量、直径1～2mmのシャモットを少量含む	普通	にぶい黄橙	SI204	12.5%残存
V-49 図3	壺	体部下半～底部	— (7.0) (7.4)	外：体部下半部に縦方向、底部に 横方向のミガキ 内：輪積み痕部分にユビオサエ、 体部下半部にナデ	密、直径0.5～2mmの白・褐色などの砂粒や直径1～5mmのシャモットを少量含む	良い	橙	SI204	25%残存
V-49 図4	甕	口縁～頸部	— — [3.3]	外：頸部に縦方向のハケ 内：頸部に横方向のハケ	密、直径0.5～1mmの灰色の砂粒を中量、直径1～2mmのシャモットを少量含む	良い	橙	SI204	5%未満
V-49 図5	甕	口縁部	— — [2.0]	外：口縁部側面に刺突が並ぶ、ナ デ 内：頸部に横方向のハケ	密、直径1mm未満の白・褐色などの砂粒や雲母を少量含む	良い	浅黄	SI204	5%未満
V-49 図6	甕	口縁～肩部	(14.2) — [5.5]	外：頸部～肩部に縦方向のハケ 内：ナデ	密、直径0.5～1mmの白・褐色の砂粒を中量、直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	良い	橙	SI204	10%残存
V-49 図7	ミニチュア土器 あるいは壺	底部	— 2.6 1.9	外：縦方向のミガキ 内：底面付近にユビオサエ	密、直径0.5～1mmの白・褐色の砂粒を中量、直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	良い	赤褐	SI204	内外面に赤彩 80%残存
V-49 図8	甕	口縁～肩部	(18.9) — [4.9]	外：肩部に斜方向のハケ 内：ナデ	密、直径0.5～1mmの白・褐色の砂粒を中量、直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	良い	にぶい黄橙	SI204	12.5%残存
V-49 図9	高坏	脚柱部～脚端部	— 15.2 [3.1]	外：横方向のナデ 内：脚柱部に横方向のケズリ	細密、直径0.5～1mmのシャモットや直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	普通	橙	SI204	40%残存
V-50 図1	甕	口縁部	— — [2.1]	外：ナデ 内：ナデ	密、直径0.5～1mmのシャモットや直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	普通	灰黄褐	SI205	5%未満
V-50 図2	甕	口縁	— — [2.2]	外：ナデ 内：ナデ	密、直径0.5～1mmのシャモットや直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	普通	外：にぶい 黄橙 内：にぶい 黄褐	SI205	5%未満
V-50 図3	甕	口縁	— — [2.4]	外：ナデ 内：ナデ	密、直径0.5～1mmのシャモットや直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	普通	にぶい黄褐	SI205	5%未満
V-51 図1	甕	底部	— (7.3) [4.2]	外：縦方向のケズリ 内：斜方向のケズリ	密、直径0.5～3mmの白・褐色などの砂粒を中量、直径1～2mmのシャモットを少量含む	良い	明赤褐	SI208	40%残存
V-52 図1	二重口縁壺	口縁～体部上半	(8.4) — [7.3]	外：口縁部に横方向のミガキ、体 部上半に縦方向のミガキ 内：口縁部に縦方向のミガキ	密、直径1mmの白色の砂粒を少量含む	普通	橙	SI212	内面に輪積み痕 外面に赤彩 20%残存

V-1表 出土遺物観察表（4）

図版番号	器種	部位	法量 (cm) 口径 底径 高さ	調整・文様	胎土	焼成	色調	出土遺構層位	備考・残存
V-52 図2	壺	底部	— 4.2 〔3.9〕	外：底部に縦方向のミガキ、縦方向のハケメ 内：底部に縦方向のケズリ	密、直径1～2mm程度の砂礫を含む	やや悪い	外：明褐 内：明黄褐	SI212	10%残存
V-52 図3	甕	口縁～底部	(16.4) — 6.1 24.2	外：体部にケズリ 内：体部にナデ、ケズリ	密、直径2mm以下の白・黒色などの砂粒を中量、シャモットをわずかに含む	普通	黒褐	SI212	90%残存
V-52 図4	甕	口縁～体部下半	16.8 — 〔26.0〕	外：口縁～体部下半に体部にケズリ 内：口縁～体部下半に体部にケズリ	密、砂粒をほとんど含まない	普通	赤褐	SI212	50%残存
V-52 図5	甕	口縁～体部下半	15.2 — 〔23.0〕	外：頸～体部に縦方向のハケメ、体部に横方向のケズリ 内：体部にケズリ	密、直径1mm以下の砂粒を含む	良い	外：にぶい黄橙 内：明褐	SI212	30%残存
V-52 図6	甕	口縁～頸部	(19.4) — 〔4.1〕	外：頸部に斜方向のハケ 内：口縁部に横方向のハケ	密、直径0.5～1mmの白・褐色などの砂粒を中量、直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	良い	にぶい褐	SI212	12.5%残存
V-52 図7	甕	口縁～肩部	(21.0) — 〔5.8〕	外：ナデ 内：頸部に横方向、体部に斜方向のケズリ、体部にわずかにハケが残る	密、直径0.5～1mmの白・褐色などの砂粒を中量、直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	良い	橙	SI212	12.5%残存
V-52 図8	甕	口縁～体部上半	15.2 — 〔10.0〕	外：体部上半に横方向のケズリ 内：体部上半に横方向のケズリ	密、直径1mm以下の砂粒を多量に含む	良い	橙	SI212	20%残存
V-52 図9	甕	体部下半～底部	— 4.2 〔18.0〕	外：体部下半～底部に横方向のケズリ 内：体部下半に縦方向のケズリ	密、直径1mm程度の砂粒を少量含む	普通	外：明黄褐 内：明赤褐	SI212	40%残存
V-52 図10	甕	体部下半～底部	— 5.8 〔8.6〕	外：体部下半～底部に縦方向のケズリ 内：体部下半に縦方向のケズリ	密、直径1～1.5mm程度の砂粒を少量含む	普通	明褐、黒褐	SI212	10%残存
V-52 図11	甕	体部下半～底部	— (7.0) 〔7.6〕	外：体部下半～底部に斜方向のケズリ、上側にわずかにハケが残る 内：斜方向のナデ	密、直径0.5～2mmの白・褐色などの砂粒を中量、直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	良い	にぶい黄褐	SI212	40%残存
V-52 図12	甕	体部～底部	— 4.7 〔20.4〕	外：体部～底部に縦方向のケズリ 内：体部～底部に横方向のケズリ	密、直径1mm以下の白・黒色などの砂粒を多量、シャモットをわずかに含む	良い	橙、明褐	SI212	40%残存
V-53 図13	高坏	口縁～脚部	17.7 13.2 15.3	外：口縁に横方向のナデ 内：脚部に横方向のケズリ	密、直径0.5～1mm程度の白色の砂粒を含む	やや悪い	明赤褐	SI212	坏部内面の剥落顕著 90%残存
V-53 図14	高坏	体部	— 〔5.2〕	外：坏部に縦方向のミガキ 内：坏部に縦方向のミガキ	密、直径1mm以下の白色の砂粒を少量、直径1mm以下の黒色の砂粒を多量に含む	良い	赤褐	SI212	内外面に赤彩 10%残存
V-53 図15	高坏	脚部	— (7.1) 〔8.4〕	外：横方向のナデ 内：脚部に横方向のハケメ	密、直径1mm程度の赤褐色の砂粒を少量含む	普通	明赤褐	SI212	内面に輪積み痕 10%残存
V-53 図16	高坏	体部～底部	— 14.0 〔12.0〕	外：坏部から脚部に縦方向のミガキ 内：脚端部に横方向のナデ	密、直径1mm以下の石英や直径5mm以下の砂礫を少量含む	良い	黄褐	SI212	内外面に赤彩 脚裾部内面に黒斑 40%残存
V-53 図17	高坏	坏底～脚裾部	— 〔11.0〕	外：坏底部に横方向、脚柱部に縦方向のミガキ、いずれも不明瞭 内：脚柱部に横方向のケズリ	密、直径0.5～1mmの白・褐色などの砂粒を中量、直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	良い	赤彩部：赤褐 内：にぶい褐	SI212	60%残存
V-53 図18	高坏	脚柱～脚端部	— (13.8) 〔4.1〕	外：脚柱部～脚端部に幅1mm程度の縦方向のミガキ 内：脚柱部はシボリにより器面が荒れる	密、直径0.5～1mmの白・褐色などの砂粒を中量、直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	良い	赤彩部：赤褐 内：にぶい褐	SI212	外面に赤彩 20%残存
V-53 図19	高坏	脚柱～脚端部	— (14.0) 〔3.0〕	外：脚裾部に縦方向のミガキ 内：脚柱部に横方向のケズリ	細密、直径0.5～1mmの白・灰色の砂粒や直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	普通	橙	SI212	20%残存
V-53 図20	小形高坏	口縁～脚部	(11.9) — 〔8.7〕	外：坏部・脚部に縦方向のミガキ、接合部に縦方向のハケメ 内：坏部に縦方向のミガキ、脚部に横方向のハケメ	密、直径1mm程度の白色の砂粒を含む	良い	橙	SI212	内外面に赤彩 40%残存
V-53 図21	小型器台	口縁～脚部	7.8 (12.7) 7.0	外：縦方向のミガキ 内：坏部に縦方向のミガキ、脚部に横方向のハケメ	密、直径1～2mm程度のシャモットをわずかに含む、直径0.5mm以下の白・灰・黒色の砂粒を含む	良い	赤褐、明褐	SI212	内外面に赤彩 60%残存
V-53 図22	小型器台	体部下半～脚部	— 10.2 〔5.9〕	外：脚部に縦方向のミガキ、縦方向のハケメ 内：坏部に縦方向のミガキ、脚部に横方向のケズリ	密、直径1～2mmの砂粒を少量含む	良い	外：明赤褐 内：橙	SI212	外面に赤彩 外面に黒斑 30%残存
V-53 図23	小形壺	口縁～底部	(10.5) 3.3 13.0	外：体部に横方向のケズリ 内：体部に横方向のハケメ	密、直径2mm以下の白・黒色などの砂粒を含む、黒色の雲母片をわずかに含む	良い	明赤褐	SI212	内外面に赤彩 内面の剥落顕著 50%残存
V-53 図24	小形壺	体部～底部	— 2.8 〔9.0〕	外：体部～底部に横方向のケズリ 内：ナデ	密、直径1mm程度の白・灰色の砂粒をわずかに含む	良い	明赤褐、黒褐	SI212	外面に赤彩 70%残存
V-53 図25	小形壺	体部～底部	— 5.4 〔6.8〕	外：体部～底部に横方向のミガキ 内：体部～底部に横方向のケズリ	密、砂粒をほとんど含まない	普通	明褐	SI212	外面に赤彩 40%残存

V-1表 出土遺物観察表(5)

図版番号	器種	部位	法量(cm) 口径 底径 高さ	調整・文様	胎土	焼成	色調	出土遺構層位	備考・残存
V-53 図26	小形壺	体部	— — [9.0]	外：体部に指頭跡、縦方向のケズリ 内：ナデ	密、直径1mm以下の白色の砂粒を少量含む	普通	明赤褐	SI212	外面に黒斑 20%残存
V-53 図27	小形甕	口縁部	(10.8) — [3.6]	外：縦方向のハケメ、肩部に沈線状のハケメ 内：頸部付近に斜方向のケズリや強いナデ	密、直径1～2mmの赤褐・灰・褐色の砂粒を中量含む	やや悪い	橙	SI212	10%残存
V-53 図28	鉢	口縁～体部下半	(12.6) — [4.5]	外：口縁部下～体部下半に横方向のケズリ 内：体部下半に横や斜方向のケズリ	密、直径0.5～1mmの白・褐色などの砂粒を中量、直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	良い	橙	SI212	20%残存
V-53 図29	小形壺	口縁～底部	(6.1) 4.2 [7.4]	外：体部に横方向のケズリ 内：口縁部に横方向のナデ	密、直径1～2mmのシャモットをわずかに含む、直径0.5mm以下の白・黒色などの砂粒を含む	良い	明赤褐	SI212	50%残存
V-53 図30	小形丸底鉢	口縁～肩部	(9.6) — [4.0]	外：口縁部にユビオサエ、肩部に横方向のケズリ 内：頸部以下に横方向のケズリ	密、直径0.5～1mmの白・黒色などの砂粒を中量、直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	良い	明赤褐	SI212	20%残存
V-53 図31	不明土製品	ほぼ完形	(5.8) 長 (2.3) 幅 [2.4]	ユビオサエ	密、直径0.5～1mmの白・灰の砂粒や直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	良い	にぶい褐	SI212	ほぼ完形
V-53 図32	土玉	完形	1.8 (直径) — 1.8	ケズリ状の強いナデ	密、直径0.5～1mmの白・褐色などの砂粒や直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	良い	明赤褐	SI212	完形
V-54 図1	甕	口縁～体部下半	16.3 — [15.7]	外：口縁～体部下半にハケメ 内：口縁部に横方向のハケメ、体部に縦方向のミガキ	密、直径1～2mmの石英・長石を少量含む	良い	にぶい黄橙、明黄褐	SI236	外面にスス 70%残存
V-54 図2	甕	口縁～体部上半	(18.7) — [11.5]	外：口縁部～体部上半に横方向のハケメ 内：口縁部に横方向のハケメ	密、直径1～2mmの白・黒色の砂粒を少量含む	普通	明赤褐	SI236	内面に輪積み痕 10%残存
V-54 図3	甕	口縁～体部下半	(19.0) — [22.0]	外：頸部に縦方向のハケメ、体部上半に横方向のハケメ 内：体部に縦方向のミガキ	密、直径1mm程度の白色の砂粒を少量含む	良い	明赤褐	SI236	20%残存
V-54 図4	台付甕	脚台部	— (11.2) (3.1)	外：脚端部に縦方向のハケメ 内：ナデ	密、直径0.5mm以下の白色の砂粒を多量に含む	良い	外：にぶい黄褐 内：にぶい褐	SI236	10%残存
V-54 図5	高坏	口縁～脚部	(22.3) — [12.0]	外：坏部・脚部に縦方向のミガキ、接合部に縦方向のハケメ 内：坏部に縦方向のミガキ、脚部に横方向のハケメ	密、直径1～2mmの石英・長石を少量含む	普通	外：橙 内：にぶい橙、にぶい黄橙	SI236	摩滅顕著 30%残存
V-54 図6	高坏 あるいは 器台	脚部	— (8.2) (6.0)	外：脚部に縦方向のハケメ 内：脚部に横方向のハケメ	密、直径0.5mm以下の白色の砂粒を多量、直径1mm程度の砂粒を少量含む	良い	外：にぶい赤褐 内：褐	SI236	5%残存
V-55 図1	短頸壺	口縁～底部	(13.6) 4.7 [18.7]	外：体部下半に横方向のケズリ 内：ナデ	密、直径1mm以下の白色の砂粒をわずかに含む	普通	赤褐	SI237	外面に黒斑 摩滅顕著 80%残存
V-55 図2	直口壺	口縁～体部下半	(5.1) — [14.5]	外：ナデ 内：ナデ	密、直径1mm程度の砂粒をわずかに含む	良い	にぶい黄橙	SI237	内外面に赤彩 外面に黒斑 80%残存
V-55 図3	広口壺	口縁～頸部	(9.5) — [7.3]	外：口縁～頸部にハケメ、頸部に縦方向のミガキ 内：口縁～頸部にハケメ、縦方向のミガキ	密、直径1mm以下の白・黒色の砂粒を少量含む	良い	外：橙 内：明黄	SI237	口縁部外面に赤彩 5%残存
V-55 図4	壺	底部	— 3.1 (1.7)	外：底部上側に縦方向のミガキ、底部底面付近に横方向のケズリ 内：ナデ	密、直径0.5～1mmの白・褐色などの砂粒を中量、直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	良い	橙	SI237	80%残存
V-55 図5	壺	底部	— (8.0) (1.7)	外：底部底面付近に横や斜方向のケズリ 内：器面の剥離が顕著で観察できない	密、直径0.5～1mmのシャモットや直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	普通	橙	SI237	60%残存
V-55 図6	壺	体部～底部	— — [10.0]	外：ケズリ 内：ナデ	密、直径1mm以下の白色の砂粒を含む	普通	明赤褐	SI237	外面にスス 内面に輪積み痕 60%残存
V-55 図7	甕	口縁～体部上半	(17.2) — [18.4]	外：口縁～体部上半に縦方向のケズリ 内：体部に縦方向のミガキ、横方向のケズリ	密、直径0.5～1mmの白・黒色の砂粒を多量に含む	やや悪い	明赤褐	SI237	50%残存
V-55 図8	甕	口縁～底部	18.0 6.0 12.8	外：体部上半にユビオサエ 内：体部上半・底部にユビオサエ	密、直径1mm以下の白・褐・灰色の砂粒やシャモットを含む	悪い	明赤褐	SI237	80%残存
V-55 図9	小形高坏	口縁～脚裾部	(14.3) — (9.2)	外：口縁～脚裾部に幅1mm程度の縦方向のミガキ 内：坏部に幅1mm程度の縦方向のミガキ、脚部上側にユビオサエ、脚裾部に横方向のハケ	密、直径0.5～1mmの白・灰・黒色の砂粒を中量、直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	良い	赤彩部：赤褐 内：にぶい褐	SI237	内外面に赤彩 20%残存
V-55 図10	甕	頸～体部上半	— — [9.8]	外：体部上半に横方向のケズリ 内：頸部に縦方向のミガキ	密、直径1mm以下の黒色の砂粒を少量、直径2～3mmの礫をわずかに含む	良い	外：明褐、赤褐 内：明褐	SI237	外面に赤彩 10%残存

V-1表 出土遺物観察表(6)

図版番号	器種	部位	法量(cm) 口径 底径 高さ	調整・文様	胎土	焼成	色調	出土遺構層位	備考・残存
V-55 図11	小型丸底鉢	口縁部	(13.4) — [4.0]	外：口縁～体部上半に縦方向のミガキ 内：口縁～体部上半に縦方向のミガキ	密、直径1mm以下のシャモットを含む	良い	明褐	SI237	内外面に黒斑 10%未満
V-55 図12	坏	完形	13.0 5.6 4.7	外：体～底部に横方向のケズリ 内：ナデ	密、直径0.5～1mmの白・灰色の砂粒・直径1～2mmのシャモットを少量含む	普通	明赤褐	SI237	完形
V-56 図1	壺	頸部	— — [4.7]	外：頸部に縦方向のハケ、肩部に縦方向のミガキ 内：頸部に縦方向、頸部屈曲部に横方向のミガキ	密、直径0.5～2mmの白・黒色などの砂粒や直径1～2mmのシャモットを少量含む	良い	赤彩部：明赤褐 内：橙	SI242	内外面に赤彩 40%残存
V-56 図2	甕	口縁～体部上半	(18.2) — [7.3]	外：口縁部・体部上半に縦方向のハケメ 内：口縁～頸部に横方向のハケメ	密、直径2mm以下の白・灰・黒色の砂礫や直径1mm以下のシャモットを含む	普通	橙	SI242	10%残存
V-56 図3	甕	口縁～体部最大径付近	(17.2) — [14.0]	外：口縁部上側および頸部下～体部に縦や斜方向のハケメ 内：ナデ	密、直径0.5～2mmの白・灰の砂粒を中量、直径1～2mmのシャモットを少量含む	やや悪い	橙	SI242	20%残存
V-56 図4	台付甕	脚台部	— 9.6 [6.7]	外：脚部に縦方向のハケメ 内：脚部に横方向のハケメ	密、直径3mmの程度の礫や直径1mm以下の白・灰・黒色の砂粒を含む	悪い	橙	SI242	90%残存
V-56 図5	台付甕	脚台接合部～脚端部	— (10.0) [7.7]	外：脚台接合部にユビオサエ、脚部に縦方向のハケメ 内：底面にミガキ、脚台部に放射状の線状痕	密、直径0.5～1mmの白・灰色の砂粒・直径1～2mmのシャモットを少量含む	普通	外面：にぶい黄褐 内面：明赤褐	SI242	40%残存
V-56 図6	小形台付甕	ほぼ完形	12.8 8.4 17.7	外：頸～体部下～脚台接合部～脚部に縦方向のハケメ 内：ナデ	密、直径0.5～1mmの白・黒色などの砂粒・直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	普通	橙	SI242	ほぼ完形
V-56 図7	鉢	口縁～体部下	(16.3) — [11.3]	外：口縁部に縦方向のミガキ、頸部に縦方向のハケメ、体部に横方向のケズリ 内：頸部屈曲部に横方向の強いナデ	密、直径0.5～2mmの白・灰の砂粒や直径1～2mmのシャモットを少量含む	普通	橙	SI242	20%残存
V-56 図8	鉢	口縁～体部最大径付近	(16.2) — [8.2]	外：口縁部・体部最大径付近以下に縦方向のミガキ、頸部に縦方向のハケメ、頸部下に横方向のケズリ 内：頸部屈曲部に横方向の強いナデ	密、直径0.5～1mmの白・灰の砂粒や直径1mm前後のシャモットを少量含む	良い	橙	SI242	20%残存
V-56 図9	ミニチュア土器	口縁～体部下	(4.9) — [4.0]	外：体部に横・斜方向のハケメ、縦方向のミガキ 内：剥離のため不明	密、直径0.5～1mmの白・灰色の砂粒・直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	やや悪い	明褐	SI242	内面剥離顕著 40%残存
V-57 図1	広口壺	口縁～頸部	(13.0) — [7.5]	外：口縁～頸部に縦方向のミガキ 内：頸部に縦方向のミガキ	密、砂粒をほとんど含まない	良い	褐	SI259	80%残存
V-57 図2	壺	底部	— 8.4 [4.2]	外：底部に横方向のヘラ状工具によるナデ 内：底部に横方向のヘラ状工具によるナデ	密、直径1mm程度の砂粒を少量含む	良い	外：赤褐 内：明赤褐	SI259	外面に黒斑 80%残存
V-57 図3	甕	口縁～体部上半	(21.0) — [7.0]	外：口縁部にキザミ、頸～体部上半にハケメ 内：口縁～頸部に横方向のハケメ	密、直径1mm程度の砂粒をわずかに含む	普通	橙	SI259	外面にスス 50%未満
V-58 図1	甕	口縁～肩部	(17.3) — [5.0]	外：ナデ 内：口縁部に横方向の強いナデ、頸部屈曲部と肩部の一部にハケ	密、直径0.5～1mmの白・褐色などの砂粒を中量、直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	良い	にぶい黄橙	SX270	20%残存
V-58 図2	高坏	体部下～脚部	— 14.2 [11.1]	外：坏部～脚部に縦方向のミガキ 内：坏部に縦方向のミガキ	密、直径3～5mmのシャモットや直径1mm程度の白色の砂粒、雲母片を少量含む	良い	明赤褐	SX270	内外面に赤彩 内面に輪積み痕 40%残存
V-58 図3	小型丸底鉢	口縁～体部下	(11.9) — [6.0]	外：口縁部～体部上半に横方向、体部下に横や斜方向のミガキ 内：口縁部に横方向、体部下に縦方向のミガキ	密、直径0.5～1mmの白・褐色などの砂粒を中量、直径0.5mm以下の光沢をもつ砂粒を少量含む	良い	明赤褐	SX270	内外面に赤彩 12.5%残存
V-59 図1	鉢	口縁～底部	(10.7) (5.4) [5.1]	外：全体にユビオサエ 内：全体にユビオサエ	密、直径1～3mmの礫を含む	普通	明黄褐	SI283	90%残存
V-59 図2	高坏	脚裾～脚端部	— (13.0) [1.2]	外：脚裾部に幅1mm程度の縦方向のミガキ 内：ナデ	密、直径0.5～1mmの白・灰の砂粒や直径1～2mmのシャモットを少量含む	普通	橙	SI283	12.5%残存
V-59 図3	石製管玉	完形	0.4(直径) 2.4(長)	両側穿孔、穿孔は多角形状、局所的に摩耗する箇所が両端部にあり	—	—	10Y6/2オリーブ灰	SI283	完形
V-60 図1	高坏	口縁部	(18.8) — [2.9]	外：幅1mm程度の縦方向のミガキ 内：幅1mm程度の縦方向のミガキ	密、直径0.5～1mmの白・褐色などの砂粒を中量、直径1mm程度のシャモットを少量含む	良い	明赤褐	SK285	内外面に赤彩 12.5%残存
V-60 図2	鉢	口縁～体部下	(6.0) — [4.0]	外：最大径付近に幅の狭い縦方向のミガキ 内：ナデ	細密、直径0.5mm未満のシャモットを少量含む	普通	明赤褐	SK285	内外面に赤彩 20%残存

V-1表 出土遺物観察表(7)

図版 番号	器種	部位	法量(cm) 口径 底径 高さ	調整・文様	胎土	焼成	色調	出土 遺構 層位	備考・残存
V-60 図 3	小形丸底 鉢	口縁～体 部最大径 付近	(9.2) — [6.6]	外：口縁部に横方向のハケ、体部 に強いナデ 内：口縁部に横方向のハケ	細密、直径0.5～1mm の白・灰の砂粒や直径 1mm程度のシャモット を少量含む	普通	にぶい黄橙	SK285	20%残存
V-61 図 1	壺	口縁部	(18.0) — [4.5]	外：口縁部に横方向のミガキ 内：口縁～頸部に横方向のミガキ	密、直径1～2mm程度 のシャモットや1mm以下 の砂粒を少量含む	普通	橙	SI287	10%未満
V-61 図 2	小形高坏	口縁～脚 部	(7.0) 5.7 [8.2]	外：坏部・脚部に縦方向のミガキ、 接合部に縦方向のハケメ 内：坏部に横方向のミガキ、脚部 に横方向のハケメ	密、直径1mm以下の白・ 黒色粒を少量含む	良い	赤褐	SI287	内外面に赤彩 70%残存
V-62 図 1	甕	口縁～肩 部	(17.4) — [6.0]	外：頸部に縦方向のハケ、肩部に 横方向のケズリ 内：口縁部に横方向のハケ、体部 に横方向の強いナデ	密、直径0.5～1mmの白・ 褐色などの砂粒を中量、 直径0.5mm以下の光沢 をもつ砂粒を少量含む	良い	にぶい黄橙	遺構外	20%残存
V-62 図 2	高坏	口縁～脚 裾部	(17.2) — [13.3]	外：坏底～脚裾部に幅の狭い縦方 向のミガキ 内：口縁部に幅の狭い縦方向のミ ガキ、脚柱部にシボリ痕	細密、直径0.5～1mmの白・ 灰の砂粒や直径 1mm程度のシャモット を少量含む	良い	赤彩部：赤 褐 内：にぶい 褐	遺構外	内外面に赤彩 20%残存
V-62 図 3	高坏	接合部～ 脚端部	— 12.3 [9.0]	外：脚柱部に幅7～8mmの縦方向 のケズリ 内：横方向のケズリ	密、直径0.5～1mmの白・ 褐色などの砂粒を中量、 直径0.5mm以下の光沢 をもつ砂粒を少量含む	良い	にぶい橙	遺構外	20%残存
V-62 図 4	小型器台	口縁～脚 部	(8.8) (13.8) 6.5	外：脚部に縦方向のミガキ 内：脚部に横方向のナデ	密、直径1mm程度の砂 粒をわずかに含む	良い	明黄褐	遺構外	内外面に赤彩 外面に爪痕 25%残存

第VI章 D面（縄文時代）の遺構と遺物

第1節 遺構

本調査では、縄文時代に属する竪穴建物が2基、土坑が3基、炉穴が9基検出されている。

これまでの本郷構内の調査で、縄文時代に属する竪穴建物は本地点の北側にある医学部附属看護師宿舎ゴミ置き場地点を除いて検出されていない。検出された竪穴建物はそれぞれ早期後半以降・前期に比定され、これまで当該期の遺物の出土は一定度みられたが、近世以降の活発な営為により破壊され、遺構の遺存はみられなかった。

炉穴は単体での作り替えは多くは認められないが、複数が近接して検出される傾向が看取され、使用者が同一である可能性が考えられる。炉穴9基の内、3基で、わずかに貝殻条痕文系の土器が検出されたのみであるが、炉穴は早期後半に属すると考えられる。

当地点のほとんどの縄文時代の遺構は、ローム層で確認されている。しかし北東部には、縄文時代の遺構上部に古墳時代の遺物を含む暗褐色土の自然堆積層が認められ、本来は当地点にプライマリーなC層が堆積していたと考えられるため、D面の遺構とした。

以下各遺構について詳述する。

竪穴建物

SI251（VI-1図、遺物VI-11図）

調査区北端のE1、F1グリッドで検出される。古墳時代の竪穴建物、SI205の下位に検出されている。北側は調査区外へと続いており、規模は不明である。SK265より新しい。

床面までの最深深度は0.10mと薄く、東側へ降る緩斜面状で検出され、東壁は検出できていないが、削平によるものか、本来の形状なのかは判断できていない。

貼床は検出されず、素掘りで平坦に整形されている。柱穴も検出されなかった。

炉が遺構の東側に検出されている。炉の規模は北東・南北方向に0.71m、北西・南東方向に0.50mと、北西南東に長い楕円形を呈している。

覆土は暗茶褐～褐色土でローム土を含んでいる。遺物が6点出土し、そのうち2点は石器で石皿と磨石が出土している。土器片は小破片がほとんどであるが、廃絶年代は、縄文時代早期後半以降に属すると考えられる。

SI261（VI-2、3図、遺物VI-11、12図）

調査区の北西端のA1、B1で検出されている。遺構の北側は調査区外で、西側は攪乱されるが、東西の規模は約3.5mと推測され、遺構の主軸は西に10°振れている。

床面までの最深深度は0.41mで、床面から掘方底面までの深度は最深部で0.12mである。床面には顕著な効果範囲は確認されず、柱穴も検出されなかった。掘方では南壁下に周溝が検出され、周溝内にピット並んでいた。P1では柱痕が確認されている。

炉が北端に検出されたため、拡張を行った。炉の規模は南北が0.93m、東西が0.69mで南北に長い楕円形を呈している。

覆土は暗褐色土を主体とし、ローム粒を多く含んでいる。掘方の埋土はロームを主体とし、しまっている。

覆土からは遺物が111点出土し、内1点が打製石斧(23)である。

出土遺物から、廃絶年代は縄文時代前期中葉と考えられる。

炉穴

SF207（VI-4図、遺物VI-11図）

調査区南側のE4グリッドで検出される。北側、西側を後代の遺構に壊され正確な形状は不明である。残存部の最大規模は北西・南西方向で1.6mである。断面形状は浅い皿状を呈している。確認面から底部への最深深度は0.40mである。

焼土範囲は2箇所検出されている。堆積状況からは2つの火床部の新旧は判断できない。

土器が1点出土しており、廃絶年代は縄文時代早期後半と考えられる。

SF211（VI-5図）

調査区南側のD4グリッドで検出される。南側が近世の遺構に破壊され、遺構全体の規模は不明であるが、残存部分からは南北方向に長い楕円形を呈していたと推測される。確認面から最深部までは9cmと浅い。火床部が1箇所検出されている。

遺物は出土していない。

SF213（VI-6図）

調査区南側のC3、D3グリッドで検出される。近接してSF215、SF280が検出されている。SF215より新しい。遺構の南側、東側が近世の遺構に壊され、部分的な検出

ではあるが、北東・南西に長い軸を有する隅丸方形と考えられる。火床部は1箇所検出されている。

遺物は出土していない。

SF215 (VI-6 図)

調査区南側のC3グリッドで検出される。上記SF215の北側に位置する。SF213より古い。北東側を大きく攪乱され遺存度は低い。SF215に類似した主軸を有すると考えられる。火床部は1箇所検出された。

遺物は出土していない。

SF280 (VI-6 図)

調査区南側のC3、C4、D3グリッドで検出される。SF213の南側に検出されている。規模は北東南西が2.5m、1.3mで遺構の主軸は東へ50°振れており、隣接するSF213、SF215に類似した主軸を有する。

底面は凹凸が顕著で、火床部は3箇所検出されている。堆積状況からは、炉3→炉2→炉1の使用順序が推測される。

遺物は出土していない。

SF299 (VI-6 図)

調査区南側のC4グリッドで検出される。SF280の南側に検出されている。遺構の上端は北東部のみ遺存しており、北東南西が0.79mで、遺構の主軸は不明である。

上部も削平を受け、火床部は焼けたロームとして検出されたのみである。

遺物は出土していない。

SF277 (VI-7 図)

調査区東端のF1グリッドで検出される。調査区外へ広がっていたため、拡張を行った。

遺構の規模は北西・南東が1.18m、0.97mで北西・南東方向に長軸を有している。遺構の主軸は西に67°振れている。断面形状は浅いU字状と呈し、南東側が一段高くなっている。確認面からの坑底までの最深深度は0.48mである。火床部は1箇所検出された。

撚糸文土器、貝殻条痕文系土器の小破片が2点出土した。

SF282 (VI-7 図)

調査区東端のF1グリッドで検出される。東側が調査区外へ広がっていると考えられ、遺構の規模は不明である。確認面からの坑底までの最深深度は0.66mと深い。火床部は2箇所検出されているが、堆積状況からは切り

合いは確認できなかった。

SF290 (VI-7 図)

調査区南側のF1グリッドで検出される。平面形は径0.35mのほぼ円形で、断面形は浅い皿状を呈す。火床部が1箇所検出されているが、焼土の溜まりも少なく、上部が削平されている可能性も考えられる。

遺物は出土していない。

土坑

SK281 (VI-8 図)

調査区西側のB1、2グリッドで検出された。遺構の規模は北西南東方向が1.34m、南西北東方向が1.19mと北西南東方向にやや長い不整形である。遺構の主軸は西に50°振れている。壁面、坑底とも凹凸が顕著で、確認面からの最深深度は0.70mである。

覆土は暗褐色土を主体とし、土器が2点出土している。いずれも細片のため帰属時期は不明である。

覆土上部に焼土を多く含むが、当遺構に伴うとは考えられない。性格は不明である。

SK289 (SK171) (VI-9 図)

調査区西側のA3、B3グリッドで検出された。看護職員等宿舎3号棟地点SK171と同一遺構である。

遺構の規模は東西2.85m、南北0.55mの溝状を呈し、南北の断面形は深いU字状を呈し、底部は平坦で杭跡は検出されていない。遺構の主軸は西へ77°振れている。

確認面からの最深深度は1.20mで、長軸方向の底部は長軸方向にオーバーハングが認められる。

覆土は褐色土を主体とし、遺物は出土していない。

遺構の性格は落とし穴と考えられる。形態的にはA型に属し、多摩ニュータウン遺跡群の出土例からは、早期前半から中期後半までの遺物の出土が見られ、長い時期の構築され続けた型式と考えられており(金持2002)、当地点でも帰属年代は判断できない。

SK300 (VI-10 図)

調査区西側のB2、3グリッドで検出されている。平面形状は円が東西方向に2つ連なり、眼鏡状を呈している。東西、北方向とも攪乱を受け正確な規模は不明であるが、遺構の主軸は西に71°振れていると考えられる。

覆土はローム粒が多量に含まれ褐色を呈す。遺物は出土していない。

遺構の性格、帰属時期ともに不明である。

第2節 遺物

今回の調査では、遺物整理用コンテナ約10箱の縄文土器が出土している。その多くは古墳時代以降の遺構から出土であり、遺構ともなつて出土した遺物は少なく、今回図示したものの中では、SF207、SI251、SI261である。

遺構外出土の遺物として図示したものは、古墳時代の遺構から出土した遺物を中心に掲載した。これらの遺構の覆土は自然堆積であり、客土の可能性が低いと思われ、当該地点の縄文時代の様相をあらわしている、蓋然性が高いと考えられる。

以下各遺物について詳述する。

SF207（VI-4図、遺物VI-11図）

1はファイアーピットから出土した、深鉢胴下部片で、外面は明赤褐色、内面は黒色である。焼成は不良で脆く、繊維を少量含んでいる。内外面とも貝殻条痕文が縦位に施文される。早期後半に帰属すると思われる。

SI251（VI-1図、遺物VI-11図）

土器は4点、石器が2点出土している。土器はいずれも小破片で、文様がわかる1点を図示した。1は外面には横位の貝殻条痕文が施文された深鉢胴部片である。内面は剥離が著しく、擦痕、条痕文が判別できない。繊維が多く含まれている。2は炉上部より出土した、多孔質安山岩製の石皿である。1/2以上が欠損していると推定され、非常に使い込まれており、使用面が大きく凹んでいる。3は磨石である。被熱し剥離・破碎が著しい。1の石皿とセットである可能性が高い。石質は判別できなかった。

SI261（VI-2、3図、遺物VI-11、12図）

竪穴建物から土器110点、打製石斧1点が出土している。中心となるのは縄文前期に属する土器で、床面に近い部分からは黒浜式が出土し、上部からは諸磯式が出土する。1～13、22は繊維を含んでおり黒浜式に属する。1～7は深鉢口縁部片で、7は波状を呈する。1～3は斜縄文単節LRは、4、5は単節RLの縄文が施され、1には2箇所、焼成後穿孔が認められる。4、7、8の縄文は単節LRである。9、10は羽状縄文、上帯単節RL、下帯単節LRで、9の粒径は大きい。11は組紐RRLを地紋とし、櫛状工具によるコンパス文が描かれる。12の縄文は前々段・直前段合撚R|L（R・L）・R（R・L）⁽¹⁾と思われる。13はわずかに繊維を含み、半截竹管による肋骨文と地紋の縄文がわずかにみとめられる。

14～21は繊維を含んでいない。14～17は半截竹管による平行沈線が施される、諸磯a～b式土器である。14、15はキャリパー状を呈する深鉢の口縁部で、平行沈線以外に地紋に縄文が施文されている。18は半截竹管による平行沈線間に、連続爪形文が施される。胎土には白色砂粒が含まれている。諸磯b式に属すると考えられる。19、20は半截竹管による平行沈線、および有節の平行沈線が施文される。また横位に鋭角な刺突が施される。20では有節平行沈線文がコンパス文状となっている。19、20は浮島式と考えられる。21は撚糸文L。22はわずかに外反する底部片で、外面色は赤褐色を呈する。小粒径の無節Lの縄文が施される。内面色は黒色で焼成は不良で脆い。23はホルンフェルス製の局部磨製石斧である。扁平な楕円盤の下端部から打撃により素材を薄くして刃部を作出している。刃部作出後には基部両側縁に深い剥離を加え、基板上端部を除き調整加工を施して撥形に仕上げている。刃部両面に研磨痕が認められることから局部磨製石斧とした。

遺構外（遺物VI-13図）

1～11は繊維を含んだ土器片である。1は早期後半貝殻条痕文系土器である。内外面ともオリーブ黒色を呈し焼成は不良で脆い。2～5は縄文を有する深鉢胴部片で、黒浜式に属すると考えられる。2は羽状縄文で上帯単節LR、下帯単節RL、3、4は単節LRが施され、4にはわずかにコンパス文がうかがえる。5には単節RLを地紋とし、集合沈線文が水平、垂直に施文される。6は口縁部片で、上部に太い棒状工具の押しつけによる連続した押圧と、垂下する平行沈線を有するが、口唇部下の屈曲部分以下は無文様帯と考えられる。胎土には繊維を中量含む。早期中葉か。7、8は同一個体片で、わずかに半截竹管のC字状の突き刺し痕がみられ、沈線はやや鋭角に施されている。型式は判別できなかった。9は浅鉢口縁～胴部片で口縁部下および体部に隆起帯を有している。10は深鉢口縁部で、口縁部の肥厚と体部にわずかに隆起帯が認められる。内外面色とも灰黄褐色を呈し、脆い。11は薄手の深鉢口縁部である。焼成は不良で脆い。文様は見られない。繊維が多量に含まれている。型式は判断できなかった。12～15は半截竹管による平行沈線、または爪形文を伴う土器片である。諸磯式に属すると考えられる。16は4条の櫛菌状工具による波形の条線が施文が施される。内外面色ともに暗赤褐色で、焼成は良好である。縦位の条線は連続して器面を抉るように深くなっている。千葉県四街道市木戸崎遺跡（7・8号住居跡 22）に類似した土器が出土している。

17は先端を鋭利にした半截竹管による三角形の連続した刺突で縦位の区画を形成し、浅い沈線が縦横に交差しV字状を呈し充填している。浮島式に属するか。18は縄文単節LRが施文され、沈線で平行沈線で縦位・斜位に区画される。19は細い隆起帯による横位の区画下にわずかに縄文が認められる。18、19ともに中期に属すると思われる。20は深鉢胴部で平行沈線間に爪形文および木の葉状の沈線が認められる。安行3c式と思われる。21はSI212から出土した、黒曜石製の石鏃である。脚部やや欠損しているが、ほぼ完形品と思われる。両側縁はやや波状となるものの、基部から先端部まではほぼ直線を呈する。長さ20.3mm、幅14.8mmで長幅比が約1.6と縦長の形態を示し、基部の抉りは浅く弧字状を成す。22はC層中から出土したチャート製の石匙である。自然面を打面とした大型の縦長剥片を素材として、両側縁を切断(折とり)することにより全体の形状をほぼ確定した後、つまみ部を調整加工により作出している。下端の刃部縁辺には使用痕と思われる微細な剥離痕が認められる。

今回の調査では、竪穴建物、炉穴、陥穴が検出されている。

その中でSI251は、竪穴状遺構とも判断できる竪穴建物である。出土遺物が土器が4点、石器が2点と少なく、土器はいずれも小破片で、文様からは茅山式以降としか判別できない。遺構の平面形は不整形を含め、明確にはわかっていないが、炉を有すること、柱穴が検出されていないことから、早期住居の研究(齊藤1991)に照らし合わせると、早期後葉から末葉に多い形態に属すると考えられる。

このSI251に近接して、同じく東側に降る緩斜面に炉穴が3基検出された。炉穴は調査区北東部に3遺構、南側2箇所にも6遺構検出されている。これらは形状、深度などから3群に分かれると考えられ、北東側の炉穴群(SF277、SF282、SF290)の形状は円形を基本とし、南側の2群は長楕円形を基本としている可能性が高く、北側の1群とは時期差を有している可能性が考えられる。

これら3群とも、検出された範囲の中では煙道、または天井部の崩落の痕跡は認められなかった。

北側の1群ではSF277、SF282で土器が検出されているが、いずれも小片で貝殻条痕文系土器以上のことは判断できない。また南側の炉穴からは遺物は出土していないため、炉穴の厳密な帰属年代は不明であるが、北側の炉穴は円形を呈することから、足場を持たないと考えられ、打越遺跡での検出例に類似することから、前期にいたっ

て定着する屋内炉に先行する、炉穴終末期に属する可能性が考えられる(和田2010)。

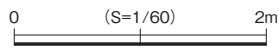
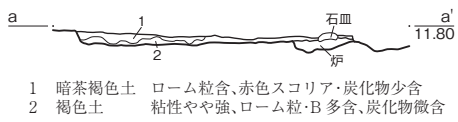
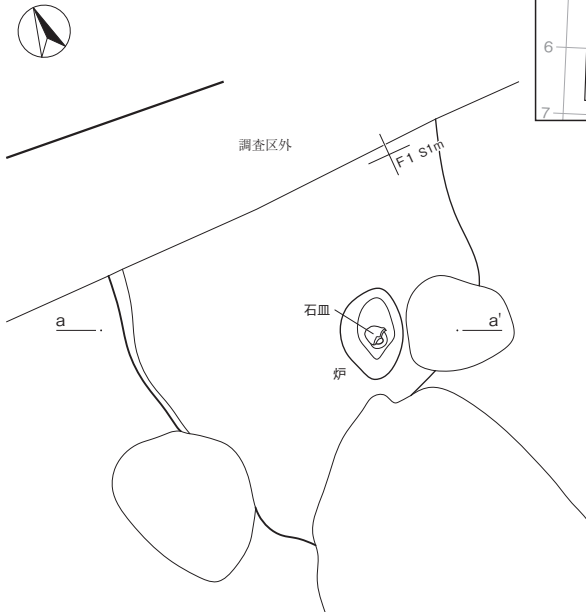
また当地点の北北西90mに位置する、看護職員等宿舎1号棟地点の調査では、炉穴(SF555)が検出されている。作り替えの重複が著しく、遺構の形状はアメーバ状を呈し、茅山上層式以降打越式以前の土器が、いわゆる「飛ノ台パターン」(松橋1978)に類似する状況で出土した。検出地点は当地点北東部分より、0.8m程高い平坦地に位置する(東京大学埋蔵文化財調査室2021c)。この炉穴以外には、看護職員等宿舎1号棟地点では顕著な生活の痕跡が見つかっておらず、構築・使用した集団については不明だが、本地点で検出された竪穴建物と関連する可能性が考えられる。

集落と炉穴との位置関係については、前掲齊藤論文の中でも取り上げられ、常陸伏見遺跡(茨城県)、塩見台遺跡(神奈川県)、神谷原遺跡(東京都)、大塚遺跡(東京)などで、竪穴建物からやや離れて炉穴が構築される例が見られる。これらは集団の「移動」「回帰」の連続性・非連続性に依存すると思われるが、機能面での理解も必要と思われる。一部、南九州地方の炉穴での動物脂肪酸の検出により、燻製施設説が有力となっているほかは、調理一般、煮沸を主目的とした遺構との見解が存在する(小林1999、安藤2010)。また集石遺構や陥し遺構を含め、早期後半の集団動態の考察も進められている(金持2002、2012、及川2003など)。

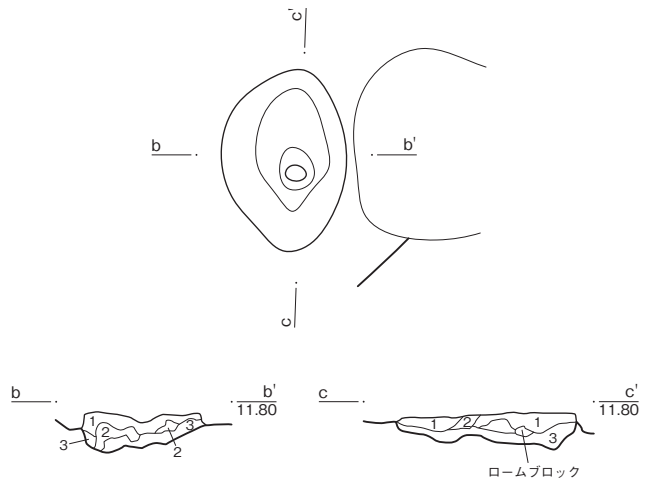
当地点を含む本郷構内キャンパスでは、当該期の遺構・遺物は僅少であると言わざるを得ないが、当該期の営為の解明について、未整理の資料を含め注視したい。

【註】

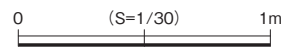
- (1)「縄文の施文原体と文様」 小林達雄編 2008『総覧縄文土器』の表記に準じた。



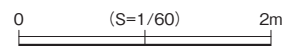
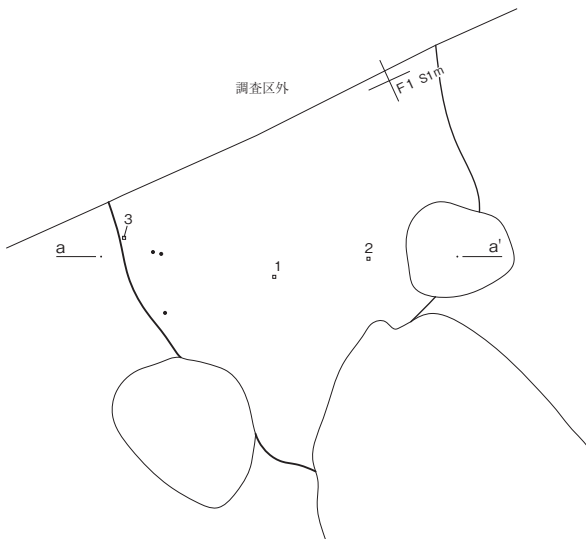
平面図・断面図



- 炉
- 1 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、焼土粒含、ローム粒微含
 - 2 橙褐色土 粘性・しまりなし、純焼土層
 - 3 黄褐色土 粘性・しまりなし、被熱したローム層



炉

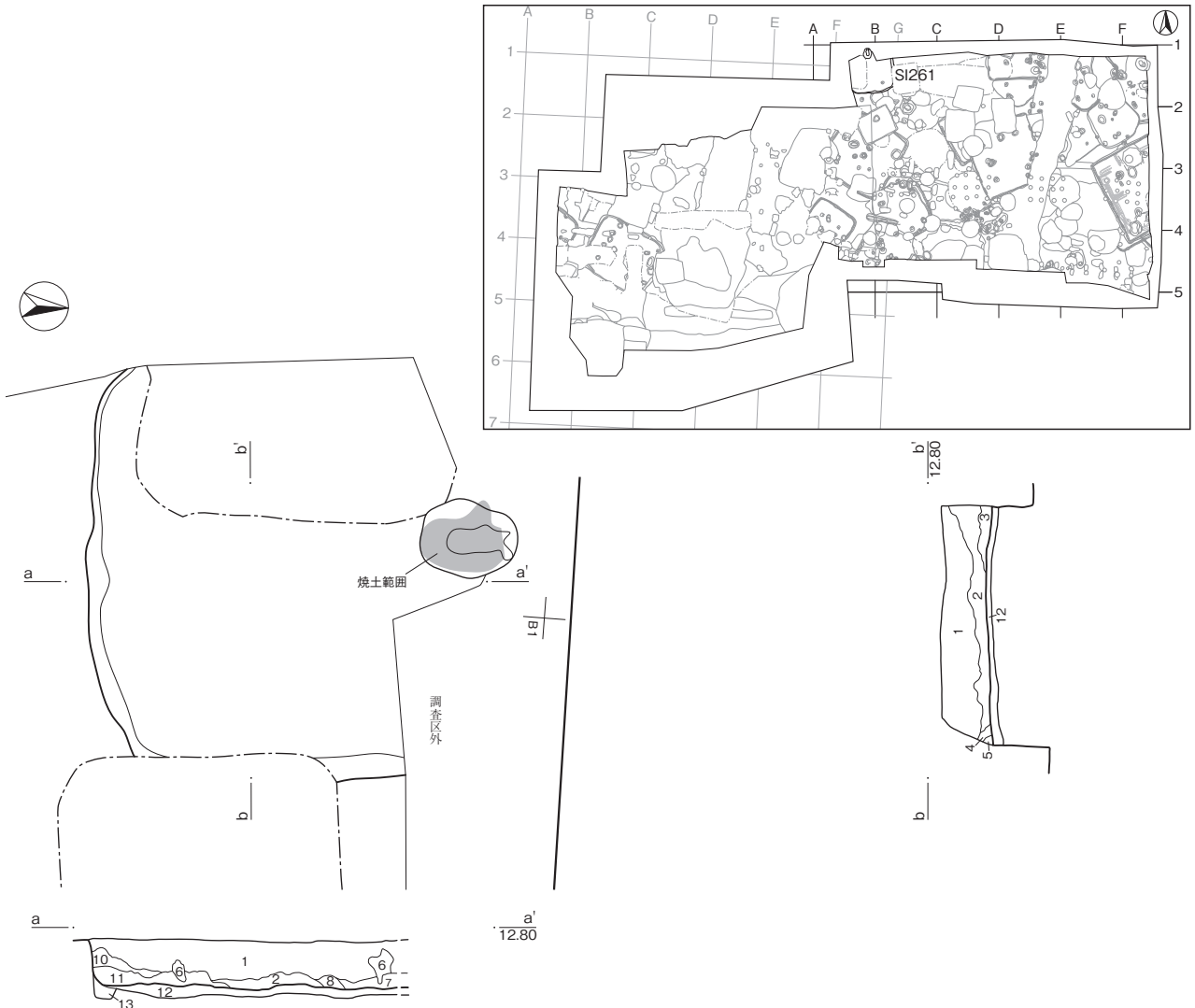


遺物出土状況

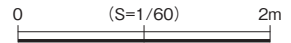
- 土器
- 実測遺物
- 接合

VI-1図 SI251

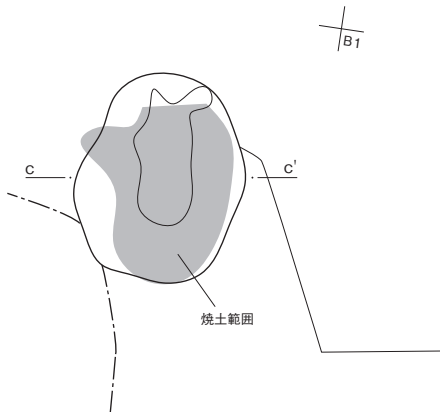
II 看護職員等宿舎5号棟地点



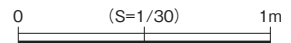
- 1 暗褐色土 粘性やや弱、しまり強、3mm程度のローム粒多含、3mm程度の赤色スコリア・黒色スコリアやや多含
- 2 暗茶褐色土 粘性ややあり、しまり強、3mm程度のローム粒多含、3mm程度の赤色スコリア・黒色スコリア少含
- 3 黄褐色土 粘性ややあり、しまり強、ローム中心に構成される、黒褐色土・褐色土含
- 4 暗黄褐色土 粘性・しまり弱、ロームでほぼ完全に構成される、黒褐色土微含
- 5 暗褐色土 粘性ややあり、しまり強、ローム多含
- 6 攪乱
- 7 暗茶褐色土 しまり強、3mm程度のローム粒・ローム含、3mm程度の赤色・黒色スコリア少含
- 8 暗茶褐色土 しまり強、3mm程度のローム粒少含、ローム含
- 9 暗黄褐色土 しまり強、ロームを中心に構成され、暗褐色土・明褐色土含
- 10 暗茶褐色土 しまりやや強、3mm程度のローム粒少含、赤色・黒色スコリア少含
- 11 茶褐色土 粘性ややあり、しまり強、3mm程度のローム粒多含、4cm大のロームB少含、3mm程度の赤色スコリア・黒色スコリア微含
- 12 茶褐色土 しまりやや強、ローム粒・B多含、貼床
- 13 明茶褐色土 しまりやや強、赤色スコリア微含



平面図・断面図



- 1 暗褐色土 しまり強、赤色スコリア・黒色スコリア少含、5mm以下の焼土粒・1cm程度の焼土B含、1cm程度のロームB少含、5mm以下のローム粒多含
- 2 暗茶褐色土 粘性弱、しまり強、5cm程度のロームB、5mm以下のローム粒多含、3mm以下の焼土粒微含、赤色スコリア・黒色スコリア多含
- 3 暗黄褐色土 粘性弱、しまり強、ほぼロームで構成される、黒褐色土少含、黒色スコリア・赤色スコリア多含

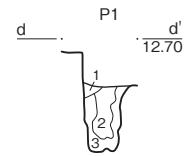


炉

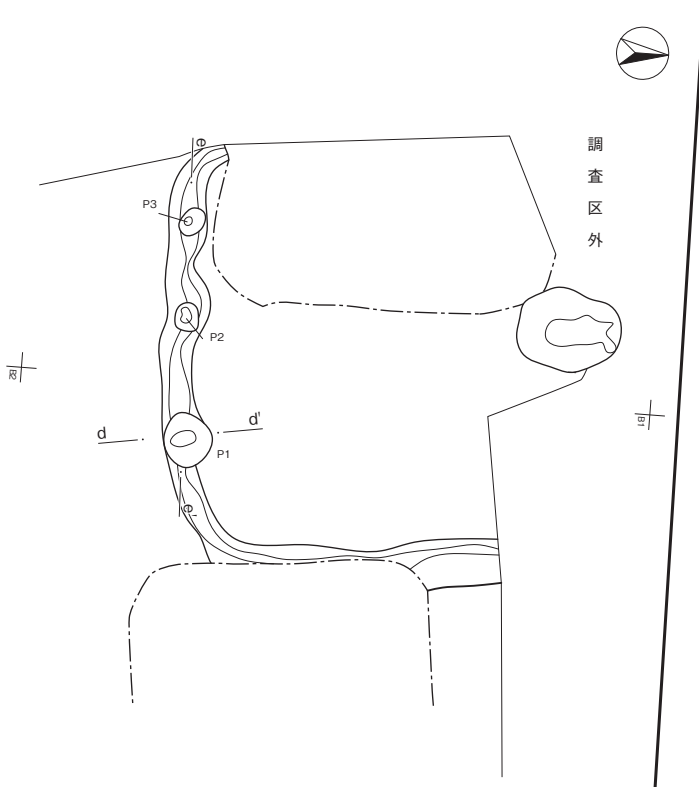
VI-2図 SI261(1)



遺物出土状況



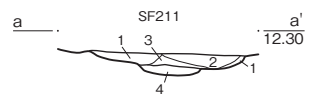
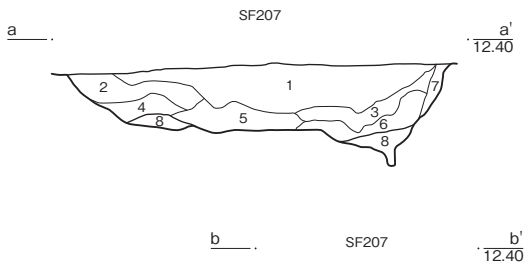
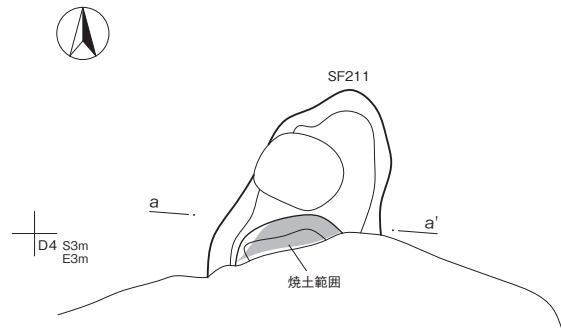
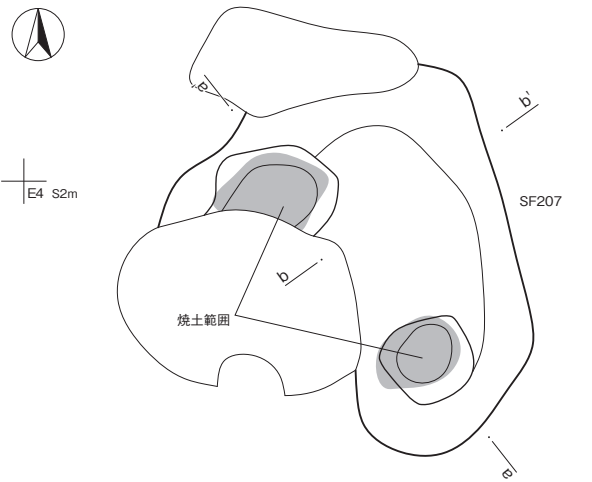
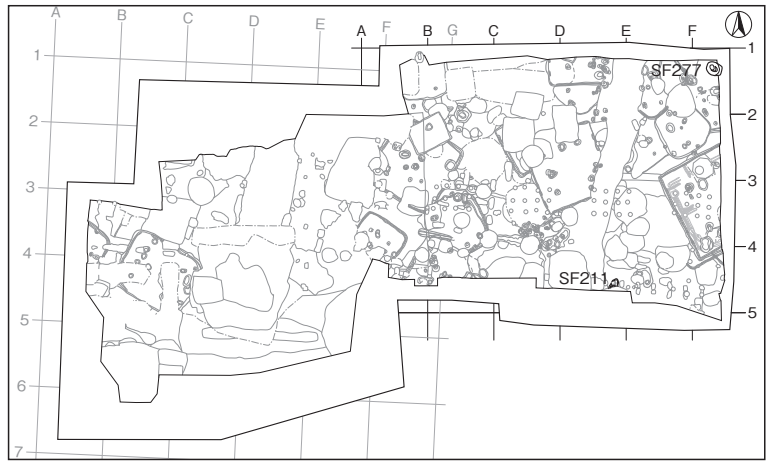
- P1
- 1 暗褐色土 粘性・しまりあり、ローム粒子少量、黒色スコア微量混入
 - 2 茶褐色土 粘性あり、しまりあり、ローム粒子中量混入、柱痕か？
 - 3 褐色土 粘性あり、しまりあり、ほぼロームで構成、赤色スコリア多く含む



堀方

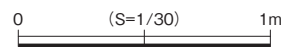
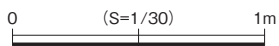
VI-3図 SI261(2)

II 看護職員等宿舎5号棟地点



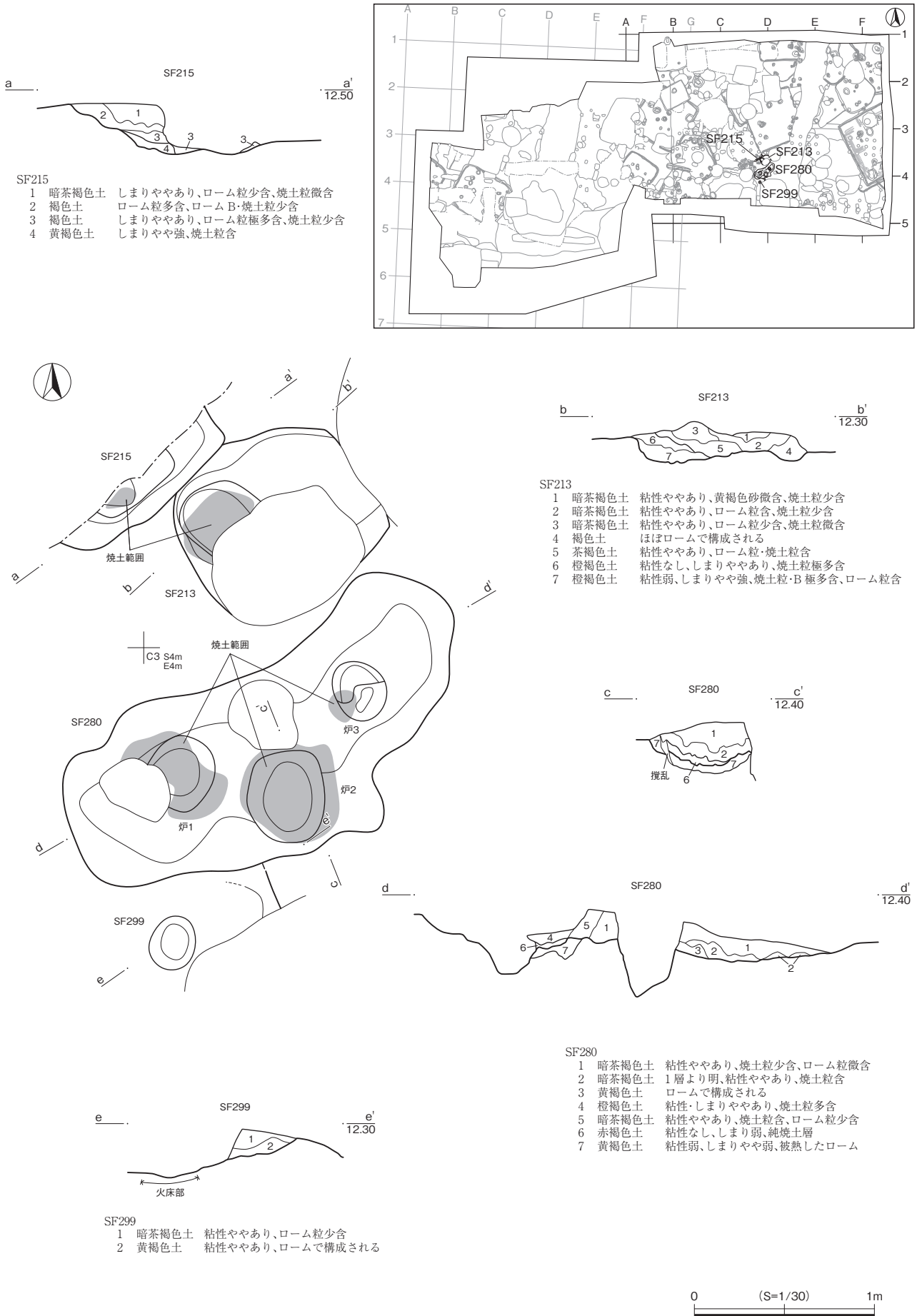
- SF211
- 1 茶褐色土 粘性・しまりややあり、ローム粒多含、ロームB含、焼土粒微含
 - 2 暗茶褐色土 しまりややあり、ローム粒・焼土粒微含
 - 3 暗茶褐色土 粘性・しまりややあり、焼土粒含、ローム粒微含
 - 4 橙褐色土 粘性なし、しまりややあり、焼土粒・B多含

- SF207
- 1 暗茶褐色土 焼土粒・ローム粒少含、小礫微含
 - 2 茶褐色土 ローム粒含、焼土粒少含
 - 3 暗茶褐色土 焼土粒少含
 - 4 明茶褐色土 粘性ややあり、ローム粒多含、焼土粒含
 - 5 褐色土 粘性ややあり、しまりやや強、焼土粒含、カーボン粒微含
 - 6 橙褐色土 粘性ややあり、焼土粒・ローム粒含
 - 7 褐色土 ローム粒微含
 - 8 混焼土層 粘性なし、ほぼ焼土で構成



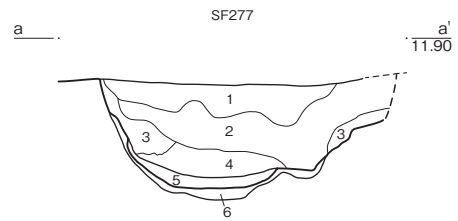
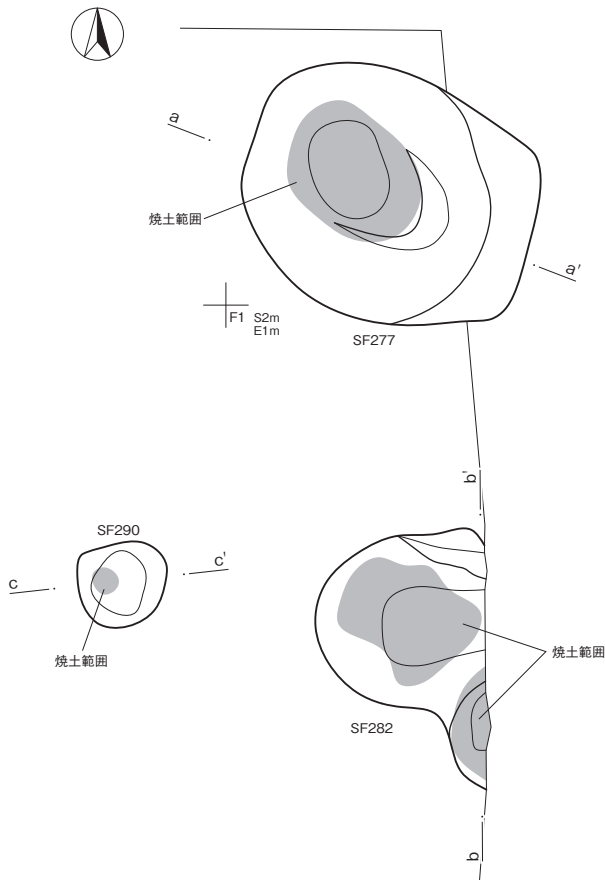
VI-4図 SF207

VI-5図 SF211

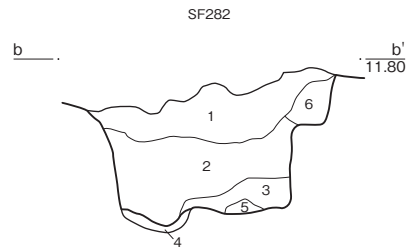


VI-6図 SF213、SF215、SF280、SF299

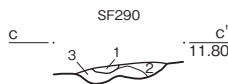
II 看護職員等宿舎5号棟地点



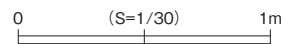
- SF277
- | | | |
|---|-------|-------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 粘性・しまりややあり、焼土粒少含、ローム粒微含 |
| 2 | 暗茶褐色土 | 粘性ややあり、焼土粒・ローム粒少含 |
| 3 | 茶褐色土 | 粘性ややあり、焼土粒含 |
| 4 | 赤褐色土 | 粘性・しまりややあり、焼土粒極多含、焼土B含 |
| 5 | 赤褐色土 | 粘性・しまりなし、純焼土層 |
| 6 | 黄褐色土 | 粘性・しまりなし、被熱したローム |



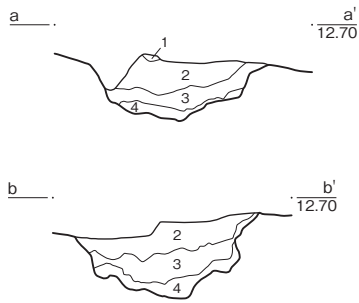
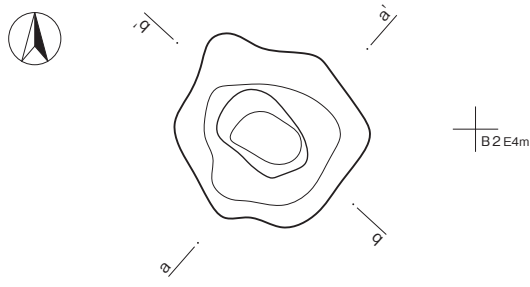
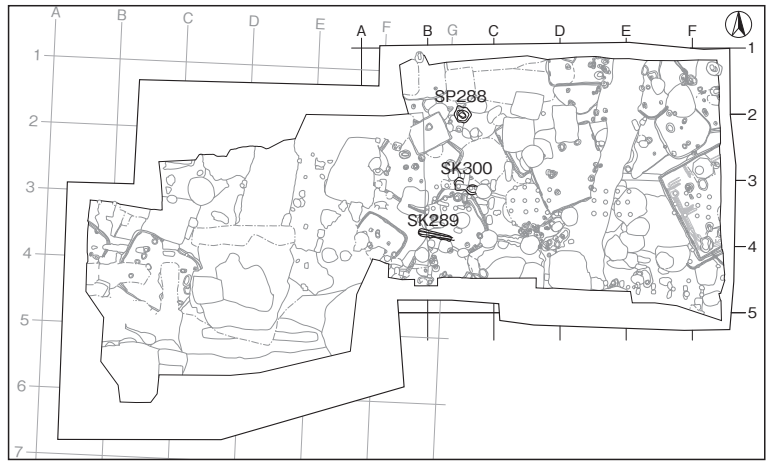
- SF282
- | | | |
|---|------|----------------------------|
| 1 | 茶褐色土 | 粘性・しまりややあり、焼土粒含、焼土小B微含 |
| 2 | 暗褐色土 | 粘性・しまりややあり、ローム粒少含、焼土粒・小B微含 |
| 3 | 褐色土 | 粘性・しまりややあり、ローム粒多含、焼土粒少含 |
| 4 | 橙褐色土 | 粘性・しまりなし、純焼土層 |
| 5 | 黄褐色土 | 粘性・しまり弱、ほぼ被熱を受けたロームBで構成 |
| 6 | 茶褐色土 | 粘性やや弱、しまりややあり、ローム粒少含、焼土粒微含 |



- SF290
- | | | |
|---|------|------------------------|
| 1 | 橙褐色土 | 粘性・しまり弱、焼土粒多含、被熱したローム層 |
| 2 | 茶褐色土 | 粘性・しまりややあり、ローム粒多含、焼土粒含 |
| 3 | 黄褐色土 | 粘性・しまりややあり、被熱したローム |

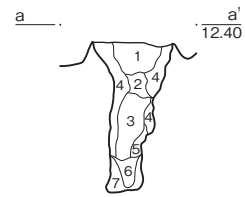
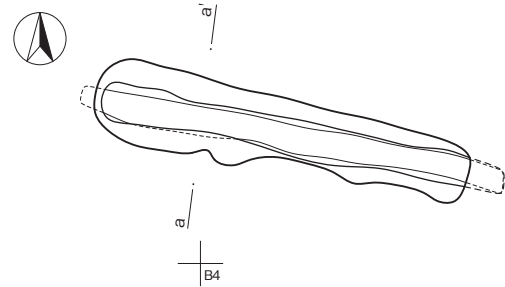


VI-7図 SF277、SF282、SF290



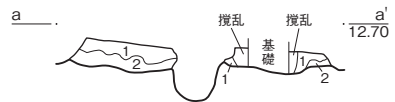
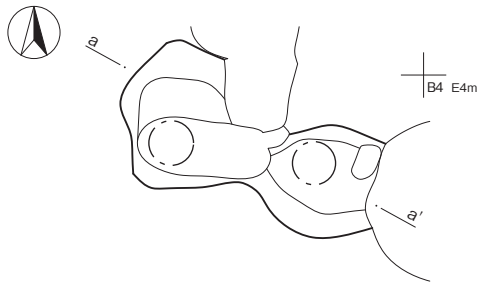
- SK281
- | | | |
|---|-------|-------------------|
| 1 | 暗茶褐色土 | 粘性・しまりややあり、焼土粒多含 |
| 2 | 茶褐色土 | 粘性ややあり、ローム粒含 |
| 3 | 暗茶褐色土 | ローム粒少含、赤色パミス微含 |
| 4 | 褐色土 | ローム粒・B多含、黒色スコリア微含 |

VI-8図 SK281

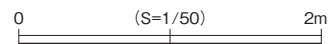


- SK289(SK171)
- | | | |
|---|-------|------------------------------|
| 1 | 明茶褐色土 | しまりやや強、ローム粒少含、赤色スコリア微含 |
| 2 | 茶褐色土 | ローム粒少含、黒色スコリア微含 |
| 3 | 茶褐色土 | しまりややあり、ローム粒少含 |
| 4 | 褐色土 | 粘性・しまりややあり、ローム粒・小B含、赤色スコリア少含 |
| 5 | 茶褐色土 | 粘性・しまりややあり、ローム粒少含 |
| 6 | 暗茶褐色土 | ローム粒微含 |
| 7 | 茶褐色土 | 粘性・しまりややあり、ローム粒・小B少含 |

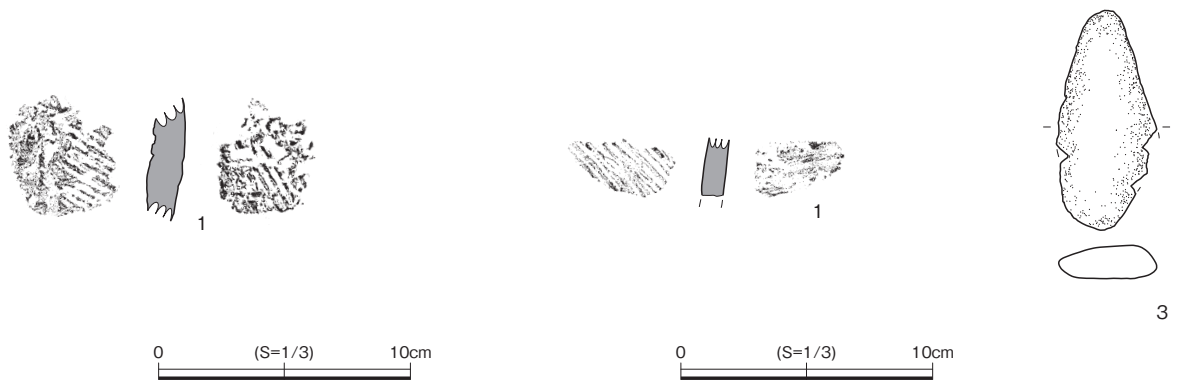
VI-9図 SK289(SK171)



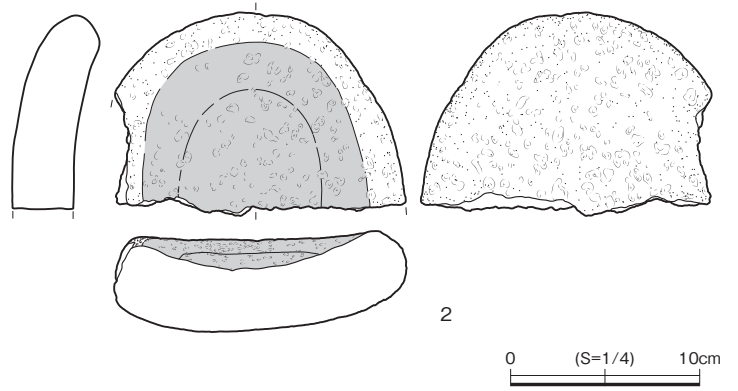
- SK300
- | | | |
|---|-------|---------------|
| 1 | 暗茶褐色土 | 粘性ややあり、ローム粒多含 |
| 2 | 黄褐色土 | ほぼロームで構成される |



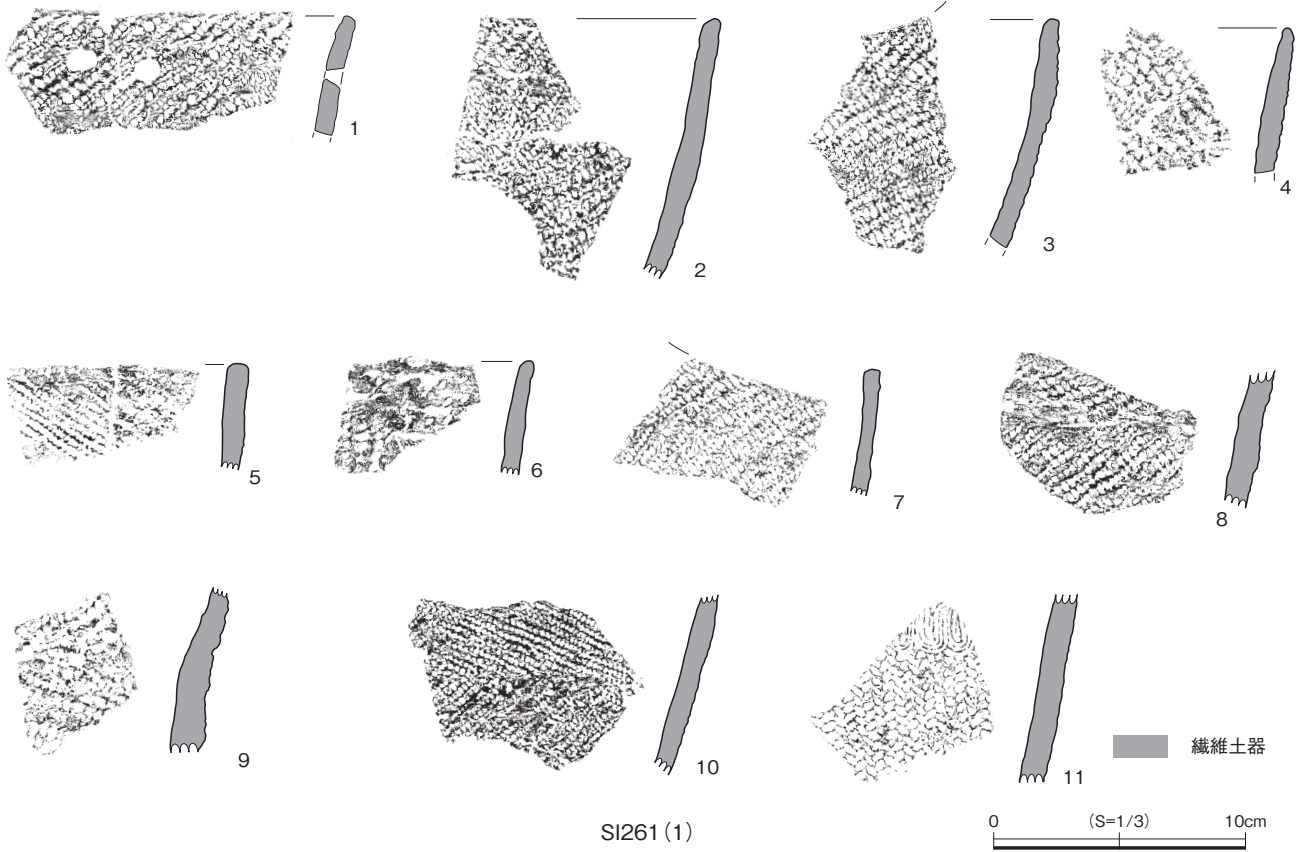
VI-10図 SK300



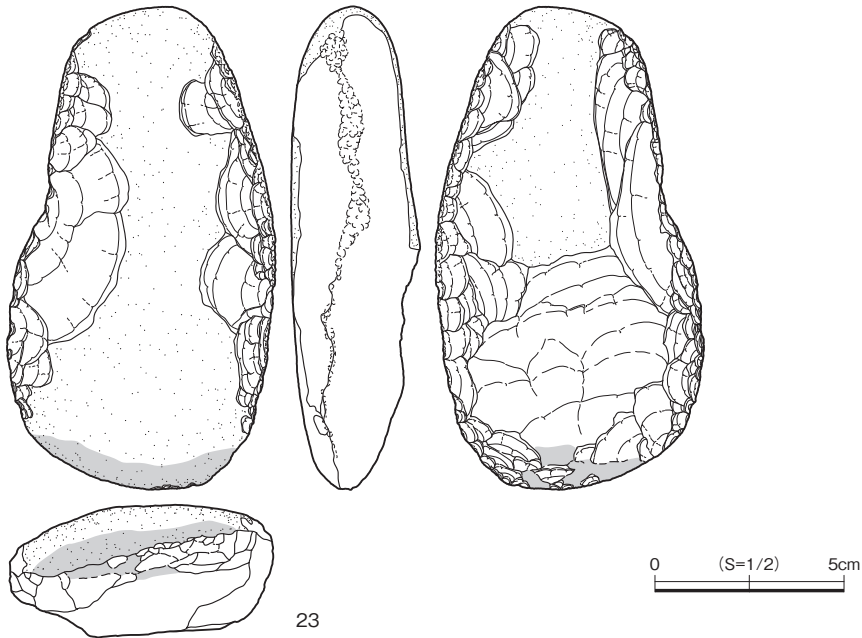
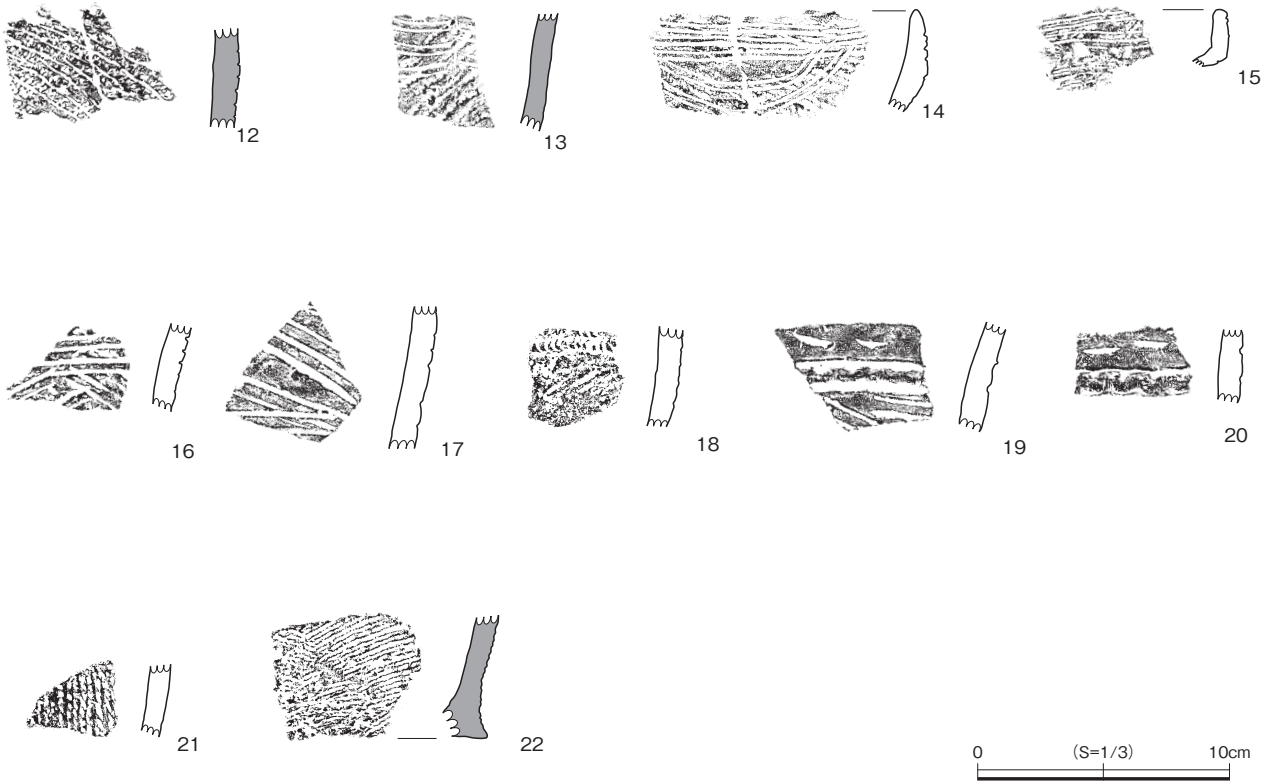
SF207



SI251



VI-11図 SF207、SI251、SI261(1)出土遺物

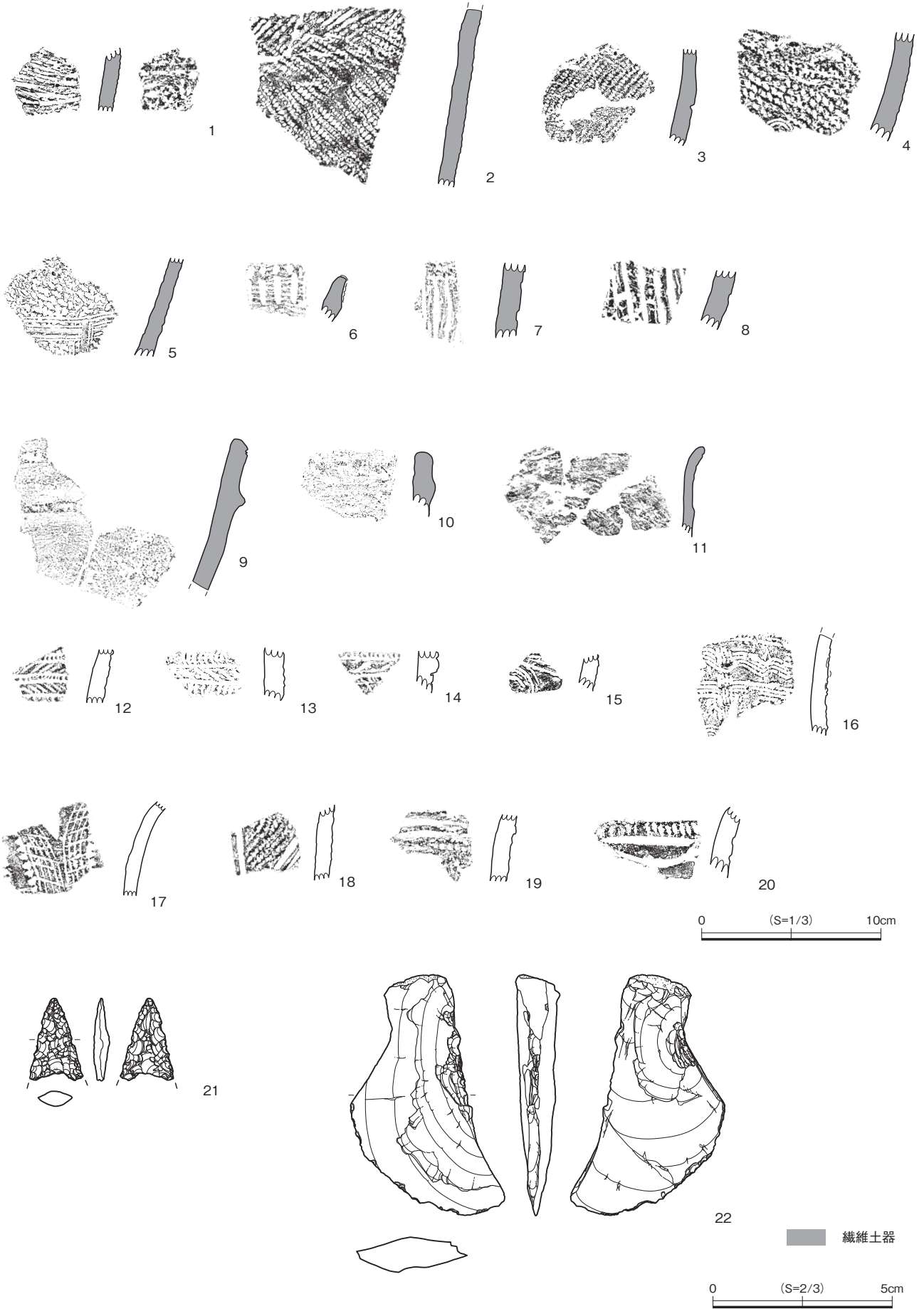


■ 織維土器

SI261(2)

VI-12図 SI261(2)出土遺物

II 看護職員等宿舍5号棟地点



VI-13図 遺構外出土遺物

第Ⅶ章 旧石器時代の遺構と遺物

(1) 調査の概要

古墳時代の遺構調査中に、遺構覆土より旧石器時代の所産と考えられる黒曜石製ナイフ形石器（Ⅶ-7図20）が出土した。このため調査範囲内には、旧石器時代の遺構・遺物が存在する可能性が高いと推定され、縄文時代の調査終了後、旧石器の試掘坑を設定して調査をおこなった（Ⅶ-1図）。

その結果、Ⅲ層からⅨ層にかけて全111点の石器・礫が出土した。今回の調査で出土した石器群は出土位置や出土層位から鑑み、3つの文化層に分かれると推察される。以下、文化層ごとに調査成果の記述をおこなう。

(2) 第1文化層（Ⅶ-2図）

第1文化層とした石器群は、調査範囲の南東側E3・E4、F4グリッドから出土した。散漫な小規模のブロック（第1ブロック）を形成し、長径8.4m、短径5.9mの楕円形範囲に分布する。出土層位は立川ローム層Ⅲ層下部からⅣ層下部におよび、約56cmの高低差がある。出土した石器・礫は彫器1点、二次加工のある剥片2点、微細剥離痕がある剥片1点、剥片5点、碎片4点、礫1点の合計14点である。石器使用石材は黒曜石、チャートであり、黒曜石は14点中13点を占める。このうち4点の石器を図示した（Ⅶ-6図）。

1は黒曜石製の彫器である。寸詰まりの剥片を素材とし、打面部を下にして、端部側の表面から裏面に向かって彫刻刀面を作出している。左側縁上部の加工痕は素材端部が尖頭状になるよう急斜度調整を施し、彫刻刀面を作出するための加工と思われる。左側縁下部にはノッチ状の急斜度調整を施しており、両方の機能を有した可能性がある。2は黒曜石製の二次加工のある剥片である。自然面を打面としており、左側縁の破損は不純物の影響もあり剥片剥離の際、同時割れをおこしたものと思われる。端部表面に裏面からの細かい加工が施されている。3は黒曜石製の二次加工のある剥片である。表面に自然面を有する縦長剥片を素材とし、左側縁の表裏両面と表面右側縁下部に微細な加工を連続して施している。4は黒曜石製の横長剥片である。端部及び右側縁下部に微細な剥離痕が認められる。

(3) 第2文化層（Ⅶ-3図）

第2文化層とした石器群は、調査範囲の北東側D1・

D2グリッドから出土した。散漫な小規模のブロック（第2ブロック）と礫群（第1号礫群）を形成し、長径5.7m、短径3.4mの長楕円形範囲に重複して分布する。出土層位は立川ローム層Ⅵ層下部からⅦ層下部におよび、約22cmの高低差がある。第2ブロック出土の石器は楔形石器1点、石核1点の合計2点である。石器使用石材はガラス質黒色安山岩1点、ホルンフェルス1点である。

第1号礫群では13点の礫が検出された。破損礫が多きものの、ブロック内で良く接合している。構成礫は拳大の礫が多く、被熱して赤化したものが多く認められる。第2ブロックから出土した2点の石器を図示した（Ⅶ-6図）。

5はガラス質安山岩製の楔型石器である。打面部及び末端部の表裏両面に両極打撃状の剥離痕が認められる。6はホルンフェルス製の石核である。特に打面を固定せず、打面転移を繰り返しながら剥片剥離をおこなっている。使用限界を迎えたため廃棄されたものと思われる。

(4) 第3文化層（Ⅶ-5図）

第3文化層とした石器群は、調査範囲の中央から南側B2・3、C2～4、D3・4グリッドと広範囲で出土した。散漫な出土状況を示し、第2文化層と同様に石器と礫が重複して出土している。石器及び礫は長径13.9m、短径10.3mの楕円形範囲に分布してブロック（第3ブロック）と礫群（第2号礫群）を形成する。出土層位は立川ローム層Ⅴ層中部からⅨ層中部と幅広いが、出土位置のピークはⅦ層下部からⅨ層上部となるため、Ⅶ層とⅨ層の境界付近が本来の出土位置になると推定される。第3ブロック出土の石器はナイフ形石器1点、挟入状石器1点、石核6点、二次加工のある剥片3点、剥片16点、碎片2点の合計29点である。使用石器石材は黒曜石1点、チャート18点、珪質頁岩5点、流紋岩1点、ガラス質黒色安山岩3点、ホルンフェルス1点である。第2号礫群では51点の礫が検出された。拳大以上の礫が大半を占め、被熱して赤化したものも多い。またタール状の付着が認められる礫も僅かながら認められる。第3ブロックから出土した12点の石器を図示した（Ⅶ-6～7図）。

7はチャート製のナイフ形石器である。先端部側を欠損している。横長剥片を素材とし、左側縁部は裏面からの急斜度調整が施され、右側縁部は表裏両面に細かい加工痕が認められる。横長剥片を素材に使用することや右側縁部の表裏両面調整が施されているなど尖頭器の可能

性も考えられるが、出土層位からナイフ形石器とした。8は珪質頁岩製の挟入状石器である。厚手の剥片を素材とし、右側縁下部表面に裏面から急斜度調整加工が施され、いわゆるノッチ状に仕上げている。9はチャート製の二次加工のある剥片である。横長剥片を素材とし、打面部表面に裏面からの加工痕、左側縁下部裏面に表面からの加工痕、右側縁部に表裏両面からの加工痕がそれぞれ認められる。10はチャート製の二次加工のある剥離である。厚手の剥片を素材とし、右側縁部に裏面からの加工痕が認められる。11は流紋岩製の二次加工のある剥片である。右側縁下部の表裏両面に加工痕が認められる。表面が自然面に覆われており、石器製作の早い段階で剥離された剥片を素材としていると推測される。12はホルンフェルス製の剥片である。打面の様子から、調整加工を施した後に剥片剥離がおこなわれたと推測される。13はガラス質黒色安山岩製の剥片である。右側縁部を欠損しており、剥離時の同時割れの可能性が高い。左側縁部は自然面に覆われている。14はチャート製の石核である。特に打面を固定せず、打面転移を繰り返しながら短い剥片を剥離したと思われる。石質はあまり良くないものの、打面に調整加工を施した後に剥片剥離をおこなっているため、多くの剥片が生産されたと推測される。15はチャート製の石核である。特に打面を固定せず、打面転移を繰り返しながら剥片剥離をおこなっている。石質が良くないため、捩理割れが認められることから、生産された剥片も寸詰まりの小型剥片になると推定される。16は珪質頁岩製の石核である。厚手の剥片を素材とし、打面転移を繰り返しながら調整を加えずそのまま剥片剥離をおこなっている。石核の上面と裏面は自然面に覆われている。17はチャート製の石核である。特に打面を固定せず、打面転移を繰り返しながら剥片を剥離したと思われる。石質はあまり良くないものの、打面に調整加工を施した後に剥片剥離をおこなっているため、多くの剥片が生産されたと推測される。最終の剥片剥離で打撃を加えた際に破損して二つに割れた可能性が考えられる。18は珪質頁岩製の石核である。剥片を素材としており、打面に調整加工を施した後に剥片剥離をおこなったと思われる。表面の剥離痕は下面と連続しており、生産された剥片はウートラパッセ状の端部となった可能性がある。裏面にも連続した加工痕があり、こちらも剥片剥離の準備段階の調整加工かもしれない。

(5) その他の石器 (Ⅶ-4 図)

ブロック外や他時代遺構覆土中から出土した石器について報告する (Ⅶ-7 図)。

19は黒曜石製の角錐状石器である。第2ブロック東側のE2グリッドから出土し、出土層位がⅢ層付近であることを考慮すると原位置を留めていないと推定される。縦長剥片を素材とし、打面側を基部としている。打面は裏面からの調整加工により除去されている。全面的に裏面から急斜度の調整加工が施され、左右両側縁部には連続した細かい整形剥離をおこなっている。20は黒曜石製のナイフ形石器である。古墳時代の住居跡の覆土から出土した。素材となる横長剥片を横位に使い、打面部と端部から左側縁にかけて裏面より急斜度調整を施して刃部を切り出し形に仕上げている。先端部には微細な加工が認められ、稜上調整痕の可能性も考えられる。

(6) まとめ

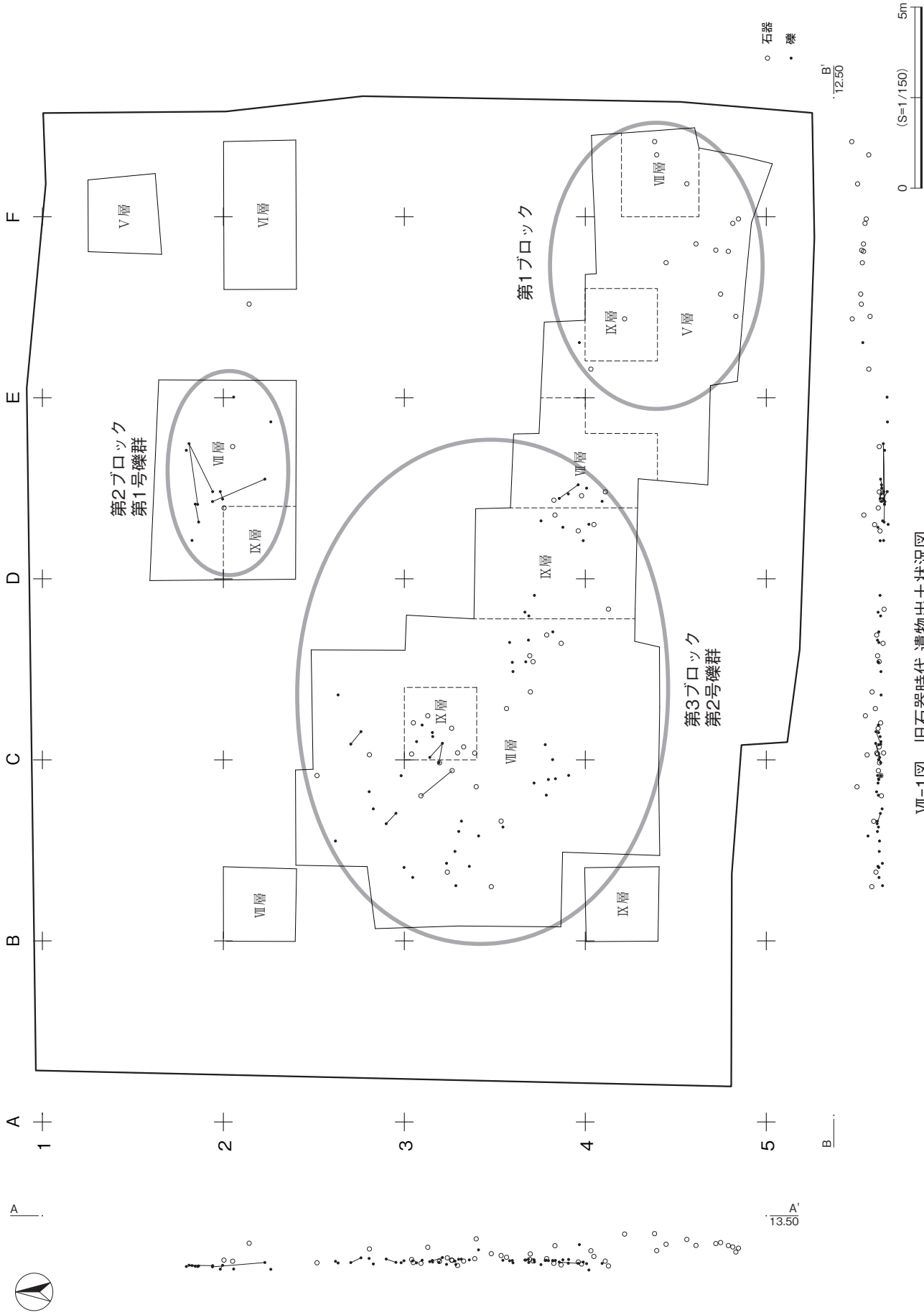
今回の調査では、立川ローム層Ⅲ層下部からⅣ層下部で第1文化層、立川ローム層Ⅵ層下部からⅦ層下部で第2文化層、立川ローム層Ⅶ層下部からⅨ層上部で第3文化層が検出された。

第1文化層は層位的に武蔵野Ⅳ期 (諏訪間・野口・島立 2010)、相模野段階Ⅵ (諏訪間 2019) に比定される。ブロック内の石器に彫器が含まれていることから「砂川期」に比定したが、ブロック外から出土した角錐状石器 (Ⅷ-7 図 19) や竪穴建物の覆土から出土したナイフ形石器の形態を考慮するともう一段階古い石器群の可能性も否定できない。

第2文化層は層位的に武蔵野Ⅱ期、相模野段階Ⅲに比定される。出土点数が少ないが、出土層位がある程度均一であること、当該期の石器群は黒色頁岩・黒色安山岩・珪質頁岩などと結びつきが強いとされている (諏訪間・野口・島立 2010) ことから上記時期の石器群とした。

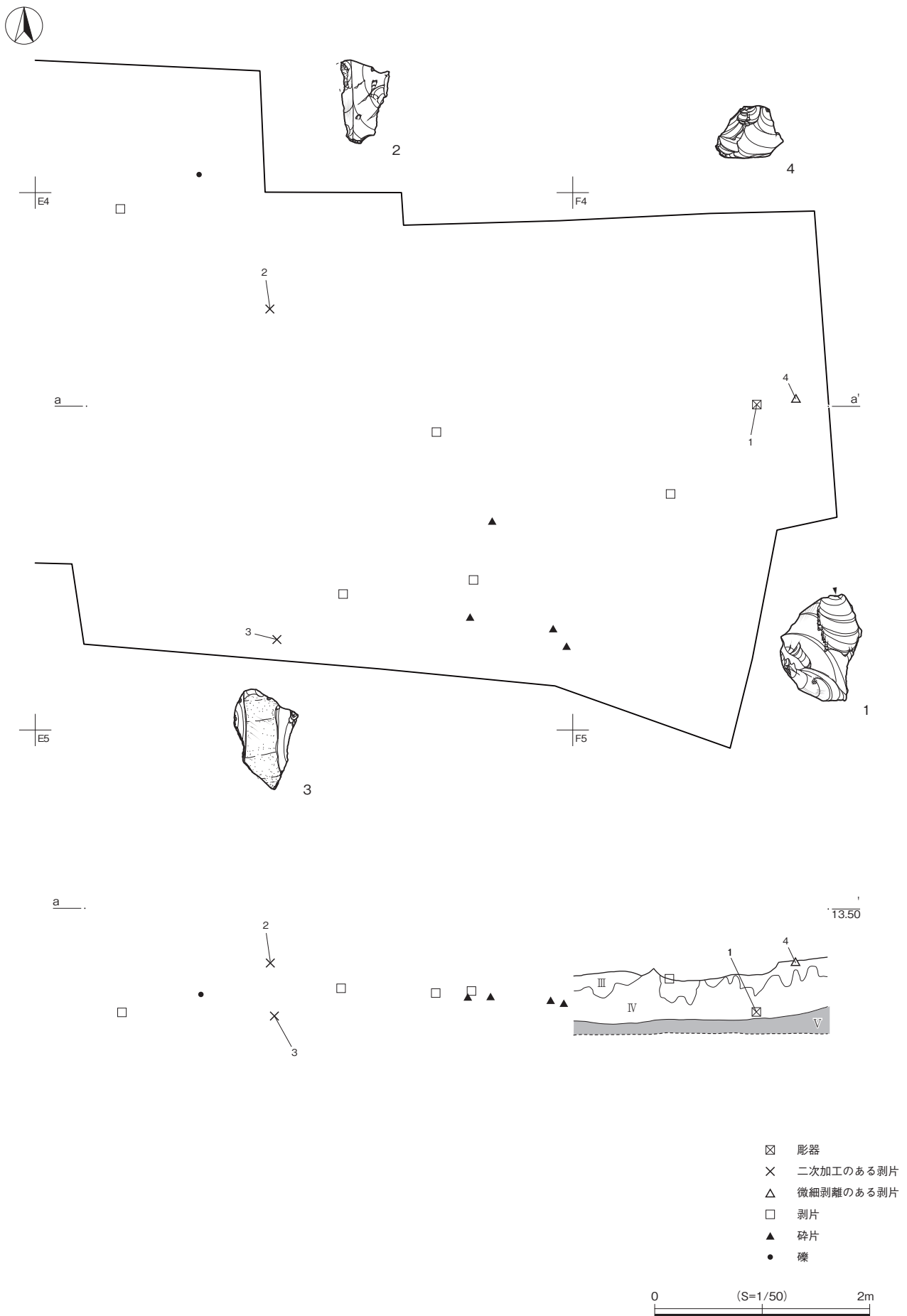
第3文化層は層位的に武蔵野Ⅰ期後半、相模野段階Ⅲに比定される。第2文化層よりは出土層位のピークがやや下になること、ブロック内から二側縁加工ナイフ形石器が出土していることから上記時期の石器群とした。

いずれも小規模な石器群ではあるが、限られた調査範囲内、また近世・古墳・縄文時代と重複する遺跡で3時期の石器群が検出されたことは武蔵野台地東端部おける旧石器時代の様相を知るうえでも大きな成果と思われる。

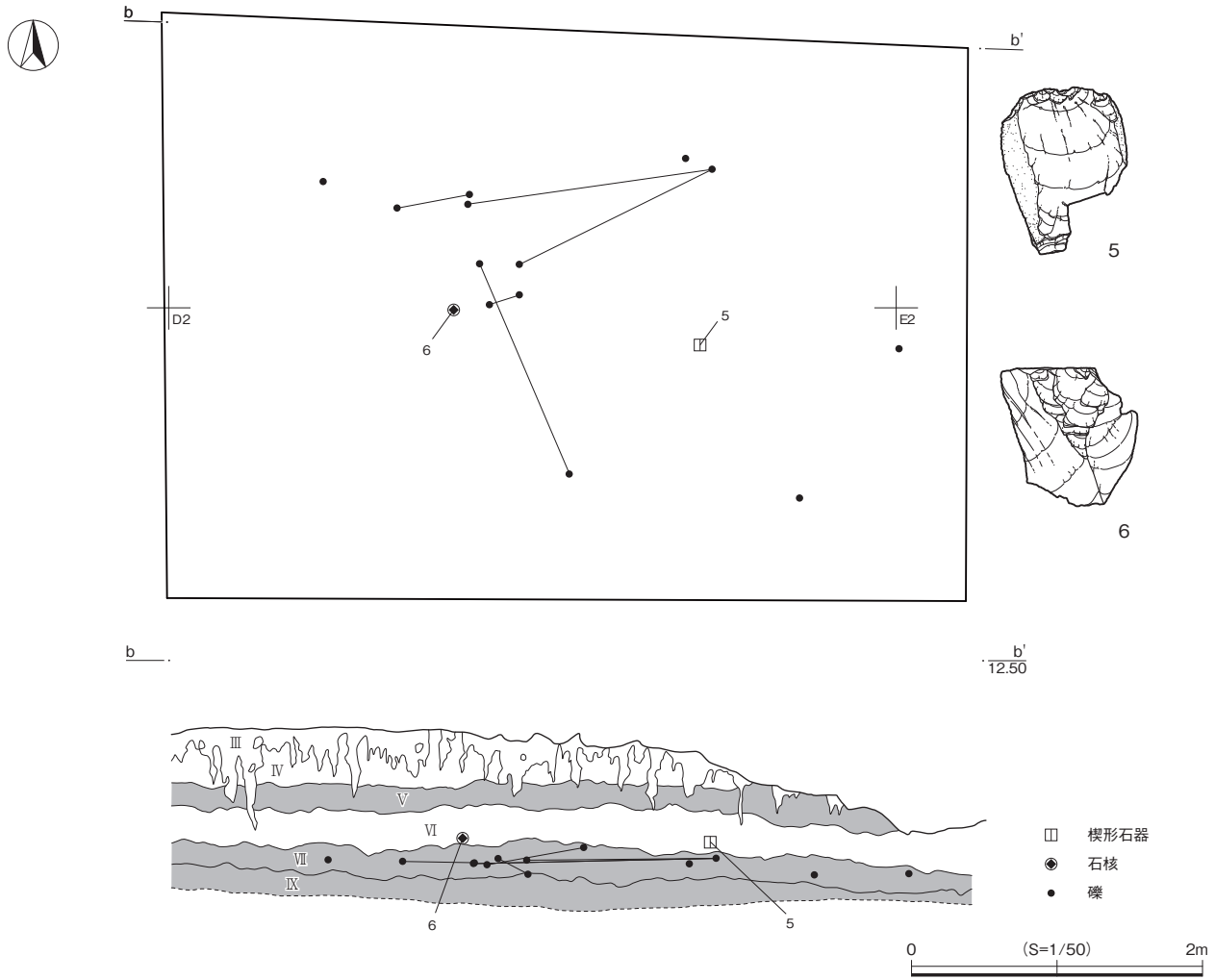


Ⅶ-1図 旧石器時代 遺物出土状況図

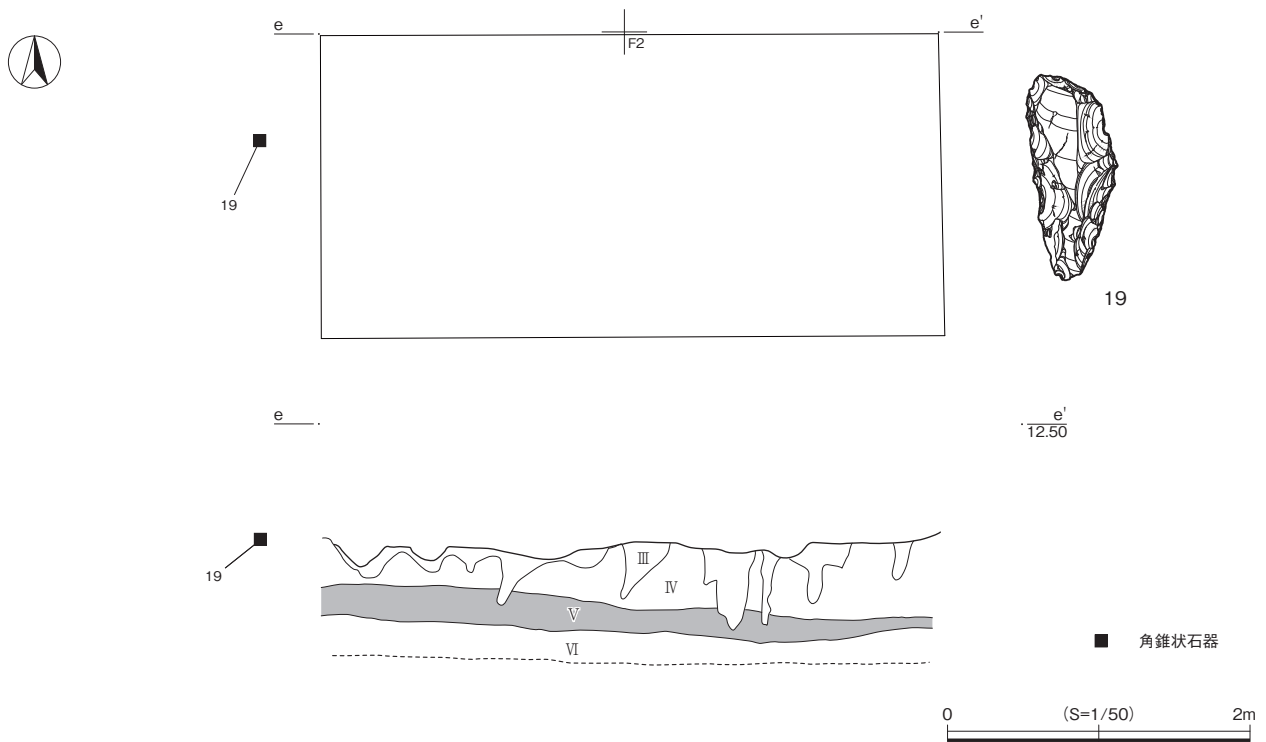
II 看護職員等宿舎5号棟地点



Ⅶ-2図 第1ブロック出土状況

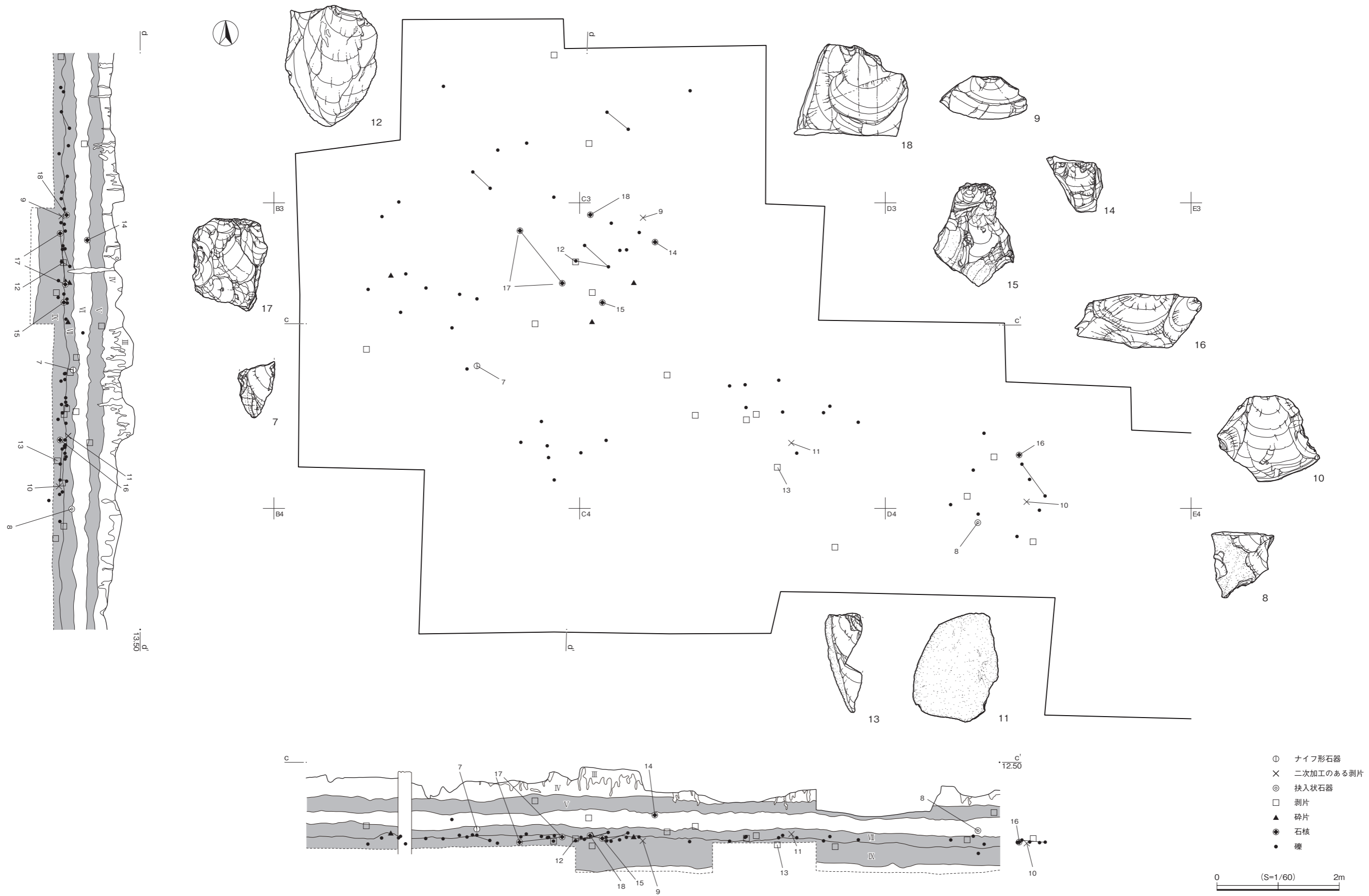


Ⅶ-3図 第2ブロック・第1号礫群出土状況

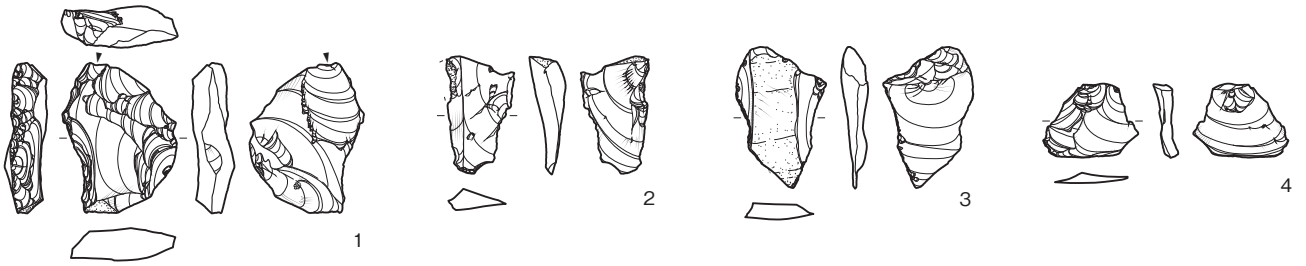


Ⅶ-4図 ブロック外出土状況

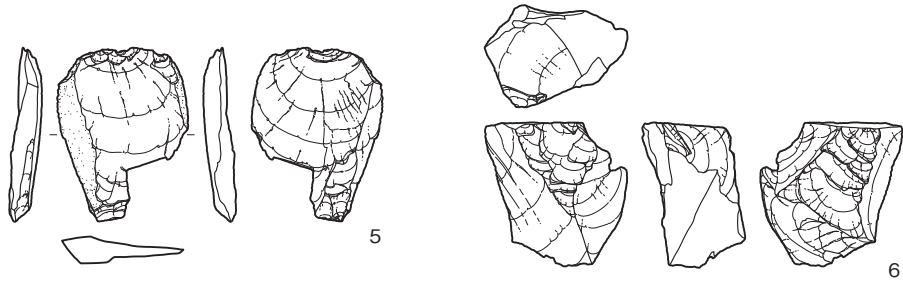
II 看護職員等宿舍5号棟地点



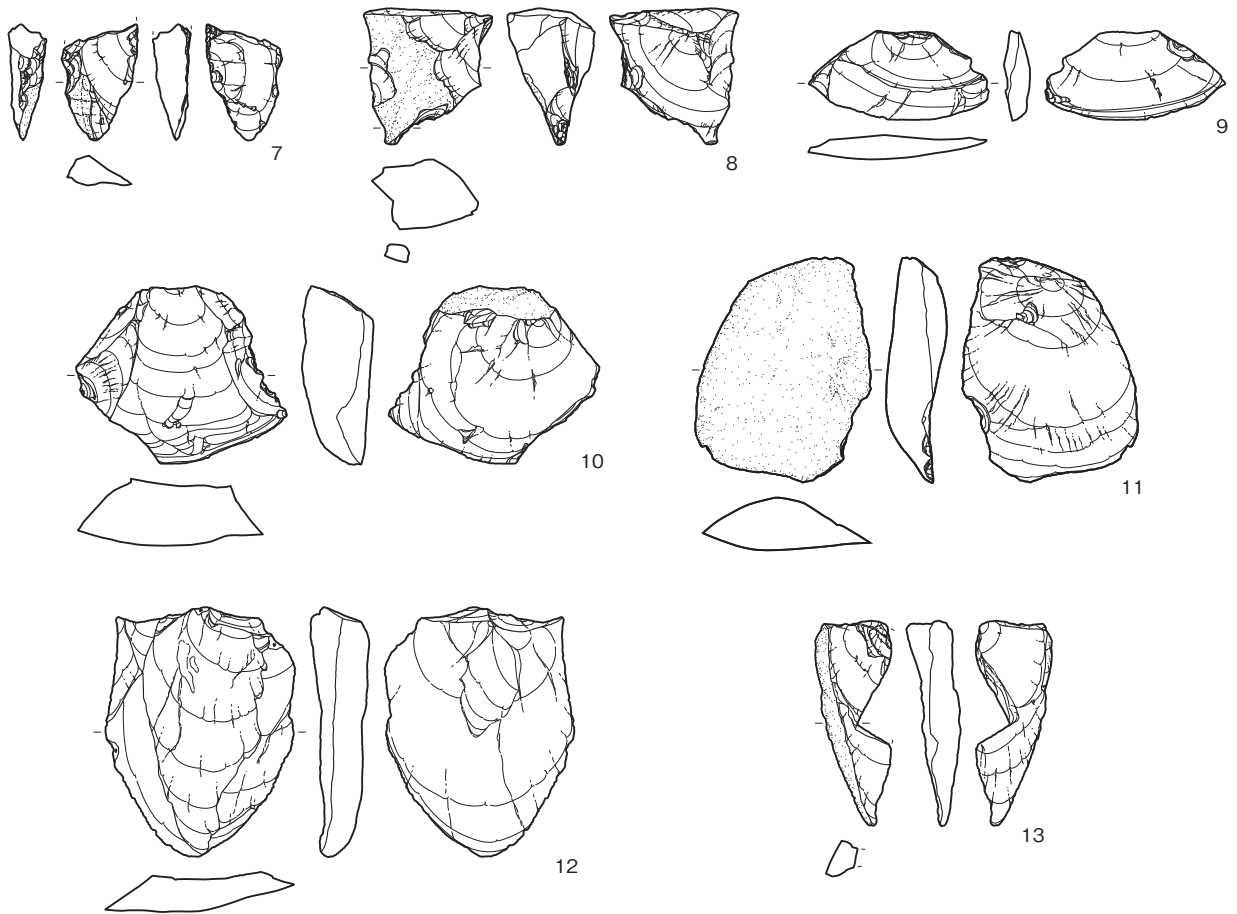
VII-5図 第3ブロック・第2号礫群出土状況



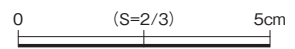
第1ブロック出土石器



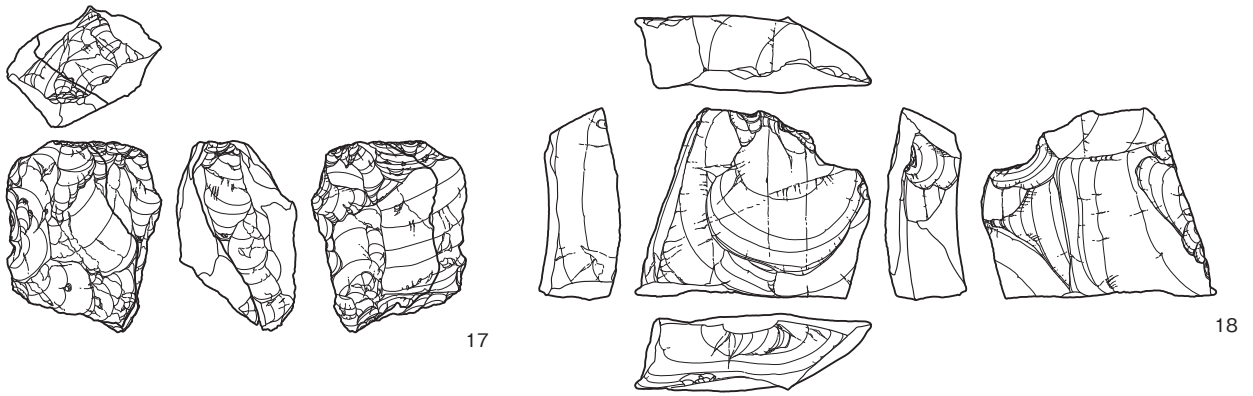
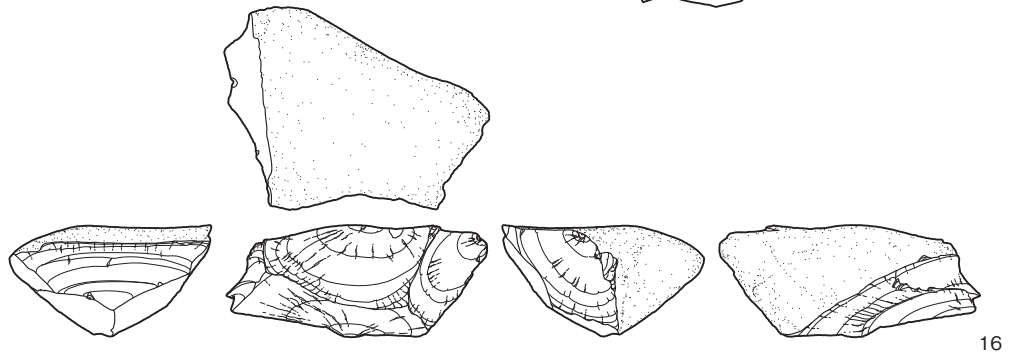
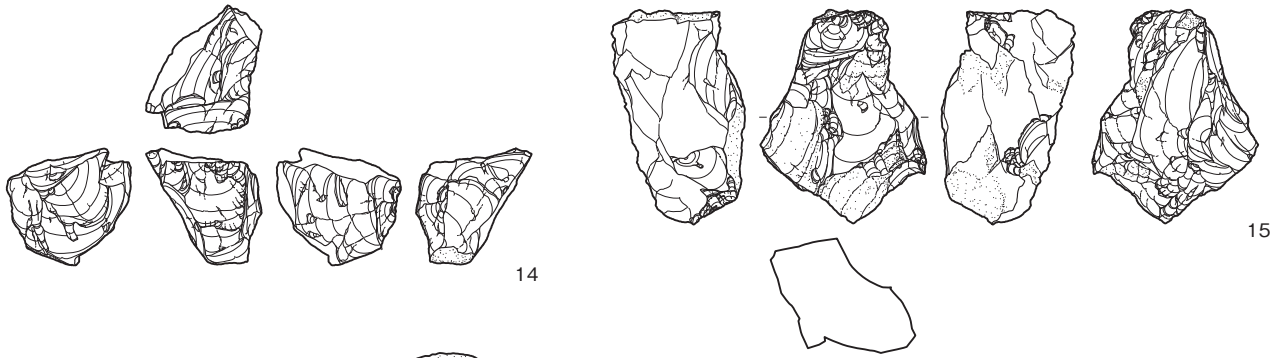
第2ブロック・第1号礫群出土石器



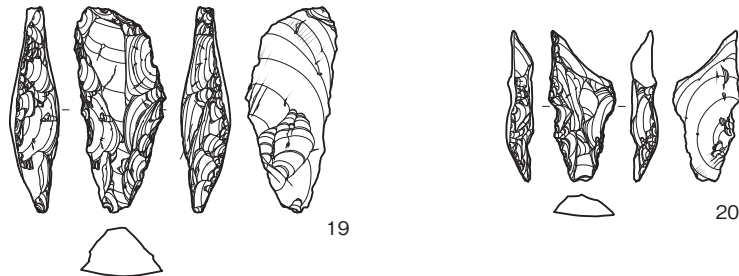
第3ブロック・第2号礫群出土石器 (1)



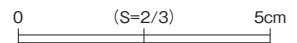
Ⅶ-6図 出土石器 (1)



第3ブロック・第2号礫群出土石器 (2)



その他の石器



VII-7図 出土石器 (2)

Ⅶ-1 表 石器観察表

取上げNo	器種	石質	状態	ブロック	重さ(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	接合	挿入番号	X座標	Y座標	Z座標
No.1001	角錐状石器	黒曜石		ブロック外	5.3	41.1	17.1	9.7		19	-32335.470	-5681.420	11.748
No.1003	剥片	チャート		1	8.5	35.2	26.2	9.7			-32344.911	-5683.216	11.539
No.1004	剥片	黒曜石	長欠	1	0.1以下	17.6	5.6	1.7			-32347.562	-5678.099	11.851
No.1005	微細剥離のある剥片	黒曜石		1	0.5	14.7	19.1	3.4		4	-32346.672	-5676.933	12.012
No.1006	剥片	珪質頁岩		3	5.3	25.1	26.3	7.7			-32343.920	-5687.246	11.677
No.1007	石核	チャート		3	11.1	29.2	24.4	24.7		14	-32340.406	-5692.789	11.635
No.1009	砕片	チャート		3	0.8	13.4	15.3	1.6			-32341.704	-5693.820	11.32
No.1011	石核	珪質頁岩		3	30.7	36.9	43.4	13.9		18	-32339.959	-5693.845	11.297
No.1013	剥片	珪質頁岩	幅欠	3	4.1	26.9	25.7	8.9			-32344.563	-5687.684	11.23
No.1017	砕片	チャート	長欠	3	0.1以下	7.1	8.3	1.1			-32341.064	-5693.135	11.283
No.1018	石核	チャート		3	29.4	44.2	34.4	25.1		15	-32341.396	-5693.650	11.253
No.1019	彫器	黒曜石		1	4.5	30.2	24.6	7.1		1	-32346.731	-5677.298	11.542
No.1021	石核	ホルンフェルス		2	13.3	32.4	26.8	18.1		6	-32334.775	-5687.050	11.279
No.1022	石核	チャート		3	27.3	37.6	29.2	18.9	No.1022+No.1086	17	-32340.218	-5694.999	11.192
No.1023	剥片	チャート	長欠	3	2.2	32.5	10.9	7.1			-32341.744	-5694.750	11.868
No.1026	二次加工のある剥片	チャート		3	3.2	17.8	36.1	4.7		9	-32340.007	-5692.985	11.214
No.1030	抉入状石器	珪質頁岩		3	9.5	27.4	27.8	16.6		8	-32344.996	-5687.510	11.381
No.1032	二次加工のある剥片	黒曜石	幅欠	1	1.0	23.4	13.9	7.3		2	-32345.842	-5681.827	11.999
No.1035	楔形石器	ガラス質黒色安山岩		2	4.2	34.1	26.1	5.3		5	-32335.015	-5685.356	11.251
No.1045	剥片	チャート	長幅欠	3	2.5	16.8	22.9	5.3			-32345.309	-5686.606	11.252
No.1046	二次加工のある剥片	チャート		3	21.4	36.7	43.4	12.7		10	-32344.654	-5686.712	11.173
No.1047	石核	珪質頁岩		3	42.4	21.3	54.1	40.6		16	-32343.889	-5686.835	11.191
No.1056	剥片	チャート		3	0.8	16.2	19.6	3.0			-32340.945	-5697.107	11.343
No.1067	剥片	ガラス質黒色安山岩		3	14.9	27.9	44.4	13.9			-32337.345	-5694.440	11.207
No.1068	剥片	チャート	長欠	3	4.0	29.2	19.4	7.9			-32338.793	-5693.868	11.588
No.1069	剥片	チャート		3	5.5	31.7	16.8	14.3			-32341.229	-5693.815	11.131
No.1078	剥片	チャート		3	5.7	32.4	24.6	8.4			-32342.161	-5697.509	11.458
No.1086	石核	チャート		3	接合	接合	接合	接合	No.1022+No.1086	17	-32341.078	-5694.305	11.276
No.1088	剥片	ホルンフェルス		3	18.6	49.6	37.9	12.1		12	-32340.729	-5694.087	11.246
No.1090	二次加工のある剥片	黒曜石		1	1.9	28.6	18.1	4.9		3	-32348.917	-5681.761	11.505
No.1091	剥片	黒曜石	長欠	1	1.8	34.8	11.7	5.1			-32348.495	-5681.144	11.764
No.1092	砕片	黒曜石		1	0.1以下	5.9	6.2	2.0			-32348.709	-5679.963	11.683
No.1093	剥片	黒曜石	長欠	1	0.1以下	9.4	6.6	2.2			-32348.363	-5679.932	11.737
No.1094	砕片	黒曜石	長欠	1	0.1	13.4	15.3	1.6			-32347.815	-5679.759	11.687
No.1095	剥片	黒曜石	幅欠	1	2.6	28.2	14.7	7.5			-32346.988	-5680.277	11.719
No.1096	砕片	黒曜石		1	0.1以下	8.8	12.8	1.7			-32348.988	-5679.067	11.611
No.1097	砕片	黒曜石	長幅欠	1	0.1以下	5.7	10.0	0.8			-32348.831	-5679.190	11.645
No.1098	ナイフ形石器	チャート	長欠	3	1.9	22.3	16	7.3		7	-32342.431	-5695.701	11.406
No.1099	剥片	チャート	長欠	3	4.3	15.6	30	11.7			-32342.582	-5692.590	11.359
No.1100	剥片	チャート	幅欠	3	0.5	11.9	10.2	4.6			-32343.239	-5692.130	11.451
No.1102	剥片	黒曜石		3	0.4	12.7	12.2	3.2			-32343.313	-5691.295	11.256
No.1103	剥片	チャート	幅欠	3	11.8	34.5	28.9	16.1			-32343.223	-5691.132	11.298
No.1104	剥片	ガラス質黒色安山岩	幅欠	3	4.2	40.4	17.2	9.1		13	-32344.090	-5690.789	11.148
No.1105	剥片	ガラス質黒色安山岩	幅欠	3	2.6	26.9	19.1	7.4			-32345.397	-5689.846	11.118
No.1110	二次加工のある剥片	流紋岩		3	11.5	45.3	34.5	11.3		11	-32343.691	-5690.559	11.323

取上げNo	器種	石質	状態	ブロック	重さ(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	接合	挿入番号	備考
SI212 No.69	ナイフ形石器	黒曜石		ブロック外	1.5	30.5	13.4	5.5		20	SI212 覆土中出土

II 看護職員等宿舎5号棟地点

VII-2表 礫観察表

取上げNo.	ブロック	重さ (g)	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	被熱	タール	接合	X座標	Y座標	Z座標
No1002	1	655.0	106.9	75.6	65.1	○			-32344.592	-5682.484	11.707
No1008	3	18.7	55.5	29.5	13.5	○		1008+1070+1089	-32340.809	-5693.551	11.351
No1012	3	19.1	33.8	32.5	16.7	○			-32344.137	-5687.584	11.289
No1014	3	341.0	121.3	44.1	42.9				-32344.701	-5687.954	11.227
No1015	3	78.8	53.3	36.0	22.3				-32340.249	-5693.046	11.277
No1016	3	407.0	110.1	71.8	48.1	○			-32340.532	-5693.253	11.271
No1020	3	276.0	104.4	57.7	36.9	○			-32343.533	-5687.407	11.158
No1024	3	96.3	61.4	45.7	26.7				-32341.334	-5695.700	11.307
No1025	3	305.0	84.7	45.3	44.5				-32341.260	-5695.985	11.303
No1029	3	3.5	30.7	14.2	8.0				-32344.857	-5687.504	11.007
No1033	2	51.3	57.5	41.5	15.4	○		1033+1037+1042	-32333.808	-5685.275	11.14
No1034	2	103.1	67.5	51.0	26.0	○			-32333.734	-5685.457	11.104
No1036	2	16.7	34.0	25.8	15.2			1036+1039	-32335.904	-5686.256	11.215
No1037	2	19.5	33.6	37.8	17.6	○		1033+1037+1042	-32334.462	-5686.600	11.128
No1038	2	23.3	50.3	24.5	18.2			1038+1040	-32334.672	-5686.599	11.031
No1039	2	45.6	52.8	37.1	29.4			1036+1039	-32334.457	-5686.874	11.096
No1040	2	6.7	53.8	16.0	6.7			1038+1040	-32334.738	-5686.805	11.138
No1041	2	111.7	77.7	46.2	26.9	○		1041+1043	-32333.982	-5686.943	11.11
No1042	2	104.3	77.5	53.5	22.6	○		1033+1037+1042	-32334.048	-5686.952	11.105
No1043	2	3.1	29.9	12.8	7.9	○		1041+1043	-32334.075	-5687.440	11.119
No1044	2	128.0	63.9	46.8	33.4	○			-32333.891	-5687.948	11.13
No1048	3	50.1	81.5	29.8	14.7			1048+1050	-32344.038	-5686.788	11.226
No1049	3	203.7	104.6	39.2	35.2				-32344.288	-5686.662	11.193
No1050	3	76.3	82.6	32.3	16.6			1048+1050	-32344.559	-5686.409	11.191
No1051	3	179.4	106.4	43.9	34.6	○			-32344.793	-5686.503	11.183
No1052	3	237.0	96.6	51.7	39.5	○			-32345.221	-5686.867	11.188
No1053	3	152.2	81.8	51.4	36.3	○			-32341.553	-5696.949	11.287
No1054	3	238.0	99.8	48.0	44.9	○			-32341.157	-5696.535	11.252
No1055	3	119.7	80.8	44.5	30.2	○			-32340.925	-5696.865	11.164
No1057	2	289.0	86.5	53.4	40.9				-32335.042	-5683.990	11.035
No1058	2	21.3	49.2	19.9	13.0				-32336.069	-5684.674	11.026
No1059	3	225.0	80.5	48.7	47.4				-32339.670	-5694.444	11.208
No1060	3	56.4	44.4	38.9	30.0			1060+1061	-32339.525	-5695.485	11.219
No1061	3	43.8	50.1	41.8	26.6			1060+1061	-32339.257	-5695.769	11.31
No1062	3	83.7	62.2	38.0	30.7				-32338.901	-5695.361	11.174
No1064	3	15.2	31.8	27.0	25.1	○			-32338.786	-5694.888	11.326
No1066	3	483.0	119.0	66.5	56.6				-32337.856	-5696.248	11.246
No1070	3	56.4	59.1	47.3	16.7	○	○	1008+1070+1089	-32340.460	-5693.939	11.238
No1071	3	184.5	85.0	57.4	38.1	○			-32340.540	-5693.364	11.229
No1072	3	161.2	62.7	59.0	40.4	○			-32340.096	-5693.504	11.206
No1074	3	208.3	101.9	37.0	36.1	○			-32338.279	-5693.573	11.212
No1075	3	23.2	42.5	24.8	20.1	○			-32338.559	-5693.227	11.343
No1077	3	80.5	62.0	51.8	16.1	○			-32337.928	-5692.215	11.201
No1082	3	179.3	99.5	49.1	27.3				-32339.749	-5696.978	11.262
No1083	3	306.0	85.8	67.7	55.8				-32339.988	-5697.255	11.259
No1084	3	231.0	97.2	53.6	36.4	○			-32341.180	-5697.481	11.116
No1085	3	4.7	35.9	20.6	6.3	○			-32341.808	-5696.109	11.563
No1089	3	179.5	87.6	64.5	31.9	○	○	1008+1070+1089	-32340.714	-5694.084	11.215
No1101	3	1.7	12.9	10.5	9.2				-32342.759	-5691.569	11.206
No1106	3	226.0	87.3	54.6	51.8	○			-32343.352	-5689.464	11.23
No1107	3	6.1	35.0	19.0	12.8	○			-32343.090	-5689.929	11.283
No1108	3	422.0	93.4	63.3	62.4	○			-32343.197	-5690.032	11.214
No1109	3	225.0	76.6	51.6	49.6				-32343.859	-5690.471	11.264
No1111	3	62.8	86.9	29.7	19.9	○			-32343.186	-5690.702	11.301
No1112	3	115.0	94.3	33.4	27.1				-32342.666	-5690.765	11.263
No1113	3	128.9	76.9	51.7	24.9	○			-32342.740	-5691.315	11.27
No1114	3	142.4	66.6	51.1	31.5				-32343.112	-5691.299	11.283
No1115	3	167.5	93.6	36.6	31.4	○	○		-32343.650	-5693.589	11.271
No1116	3	477.8	142.0	74.2	38.2				-32343.854	-5694.000	11.27
No1117	3	94.8	81.7	34.4	31.0	○	○		-32344.297	-5694.437	11.298
No1118	3	222.0	134.3	55.1	22.3	○			-32343.931	-5694.530	11.271
No1119	3	191.8	108.6	39.9	28.6	○			-32343.738	-5694.551	11.266
No1120	3	126.1	62.4	49.3	33.9	○			-32343.340	-5694.647	11.286
No1121	3	232.2	89.1	46.8	39.1	○			-32343.681	-5694.983	11.278
No1122	3	127.7	94.1	42.4	23.5	○			-32342.481	-5695.863	11.276

第Ⅷ章 小結

本地点から出土した遺構、遺物は、旧石器時代、縄文時代、古墳時代、中世、江戸時代、近代と重層的に確認され、長期間にわたり人間の活動が営まれた地域と言える。

旧石器時代は、三時期にわたる文化層（3つのブロックと2つの礫群、武蔵野標準層位Ⅲ～Ⅸ層）が確認された。各文化層を構成するブロックの規模は小さく、本郷台地東縁の15薬学部南館地点を谷頭とする東行する支谷に展開する小規模な活動跡である。この小支谷には、28薬学部資料館地点および23医学部附属病院入院棟A地点からⅢ～Ⅳ層の礫群と石器が出土しており、本地点と類似した様相が看取される。

縄文時代は、竪穴建物2基、炉穴、陥穴が確認された。縄文期の竪穴建物は、早期末あるいは前期に、炉穴は早期末に比定されるものであった。東京大学本郷構内遺跡では、これまで25医学部附属看護師宿舎ゴミ置き場地点と本地点しか確認されていない。また、当該地点周囲から多く出土している遺物は、23医学部附属病院入院棟A地点、28薬学部資料館地点など後期から晩期にかけての土器である。早期～前期の資料は、西隣する19看護職員等宿舎1号棟地点（炉穴）の他、3御殿下記念館地点（陥穴）、24医学部教育研究棟地点（陥穴）、72理学部1号館前地点（炉穴）、125クリニカルリサーチセンター（陥穴）、など僅かで、縄文時代を通して濃密な痕跡が確認できない。本地点は本郷台地東縁の不忍池に落ちる崖線と上記支谷との台地先端部にあたり、縄文期の復元はこうした微地形との関連性をも含めて考えたい。

古墳時代の遺構・遺物は、前期から後期にわたって確認されているが、本地点からはSI201、SI212など中期後半を中心とする16基の竪穴建物と良好な遺物の出土が特筆される。昭和50年の指定名称弥生二丁目遺跡発掘以降、学内発掘調査とその集積によって、弥生時代後期～古墳時代後期にいたる集落と墓域との領域や変遷プロセスが徐々にではあるが明らかになってきている。本地点の成果を踏まえて、新たに当該地周辺の弥生時代後期と古墳時代前期、古墳時代前期と中期の継続性と断絶性についての検討の必要性が指摘できたことは、今後に向けての成果とも言える。

中世は、調査区を南北に貫く溝が確認されている。東大構内で中世に比定される遺構は少なく、23医学部附属病院入院棟A地点では井戸や道、113同入院棟Ⅱ期

で井戸が確認されているにすぎない。また、複数の地点から板碑片が出土することなど、台地東縁部にその痕跡が散見されるものの、まだ歴史像を語る段階にはない。

近世は、元和2～3（1616～17）年に加賀藩下屋敷として拝領以後、寛永16（1639）年富山藩立藩に際し、調査区が富山藩邸として利用、幕末まで経営されることが判っている。本文でも触れているように、建築遺構、井戸、廃棄土坑など直接人間の生活に伴う遺構は少なかつた一方で、植栽痕、苑道など庭園に関連する遺構が多く確認された。これらは絵図面や史料との照射によって富山藩邸の庭園に関わるものと特定され、庭園の景観の一端が復元されたことは成果としてあげられる。また、幕末期の藩邸引き払い、所持品廃棄に関わる廃棄資料の可能性の呈示はできたものの、今後、詳細に詰めていく必要があるだろう。

近代は、明治期に石畳を有する庭として利用される一方、近接する医学部や病院における動物実験に関わる動物遺体が多量に出土、特に明治初期のアナウサギの飼育統制と動物実験の可能性についての指摘は重要で、動物骨の全容を踏まえた上で、明らかにしていきたい。

Ⅲ 看護職員等宿舍 3 号棟地点 (2)

第V章 古墳時代の遺構と遺物

第1節 遺構

今回の調査では、当該期の遺構として竪穴建物が7基検出されている。そのうち東端で検出されたSI07(SI242)とSI08(SI237)は、看護職員等宿舎棟5号棟地点で同一の遺構が検出されており、II 第V章に掲載している。以下各竪穴建物について詳述する。

SI01 (遺構V-1～3図、遺物V-11図)

調査区西側のB3・B4・C3・C4グリッドで検出される。確認面はローム面である。遺構の規模は南北4.9m、東西6.1mである。床面までの最深部は0.66mで、遺構の主軸は東に61°振れている。床面はローム土を使用し貼床であり、竪穴建物の北側に広く硬化がみとめられる。壁面の立ち上がりは、やや開きながら立ち上がる。

ピットは11基検出されており、P1、P2、P11が支柱穴と考えられ、P1の最深部は床面から0.78mである。他のピットや土坑はいずれも浅く、柱穴とは考えられない。

炉はわずかに楕円形を呈し、竪穴建物に対し平行な軸を有し、中央部からやや北西に検出された。中央部にレンズ状に9cmの焼土が堆積し、南西側に炉壁として甕片が使用されていた。

掘方底面は粗く、中央部には窪みが看取できる。

覆土は茶褐色土を主体とし、土器が1,135点出土しており、遺物から廃絶年代は古墳時代前期に属すると考えられる。

SI03 (遺構V-4図、遺物V-12図)

調査区西端のA3・B3グリッドで検出されている。中央部を近世遺構に攪乱され、南側がSI04に切られているため、東側の壁がわずかに遺存しているのみである。遺構の主軸は西に62°振れている

床面に顕著な硬化面はみとめられない。東側の掘方は北東・南西方向に浅い溝状を呈しているが、SI03に伴うかは判別できなかった。

土器片は24点出土している。廃絶年代は弥生時代終末期～古墳時代前期に属すると考えられる。

SI04 (遺構V-5図)

調査区西端のA3・A4グリッドで検出されている。検出された範囲は竪穴建物の北東部のみであり、西

側、南側へ続いていると考えられる。床面までは最深で0.50m、遺構の主軸は軸は西に52°振れている。

床面はローム土を主とした貼床で、全体に硬化がみとめられ、溝底幅6～10cmの周溝を有している。ピットは3基検出されており、深度、位置からP3が支柱穴の一部と思われる。掘方底面は粗く、細かい凹凸がみとめられる。

覆土は黒褐色土を主体とし、土器が17点出土した。出土遺物から廃絶年代は古墳時代前期に属すると考えられる。

SI05 (遺構V-6図、遺物V-13図)

調査区西端のA4グリッドで検出されている。北側・南側ともに攪乱を受け、遺構の規模は定かではない。床面までの最深部は0.9mで、ロームを主体に貼床が構築され、東壁はなだらかに立ち上がっている。

覆土は黒褐色土を主体としている。出土遺物から廃絶年代は弥生時代終末期～古墳時代前期に属すると考えられる。

SI06 (遺構V-7～9図、遺物V-14図)

調査区東側のE3・F3グリッドで検出されている。南側は大きく攪乱され、遺構全体のおよそ半分が遺存していると考えられる。北西南東方向の規模は3.8mで、床面までは最深で0.18mである。遺構の主軸は西に56°振れている。

床面はローム土を主体とした貼床で、全体的に硬化しており、中央やや北西側に炉が検出された。

炉は歪な円形を呈し、北西南東に連続して2基検出されている。炉1の上層は黒褐色土が堆積し、堅くしまっていることから、竪穴建物の廃絶時には、使用されていないと考えられ、炉2が最終的に使用されていたと考えられる。

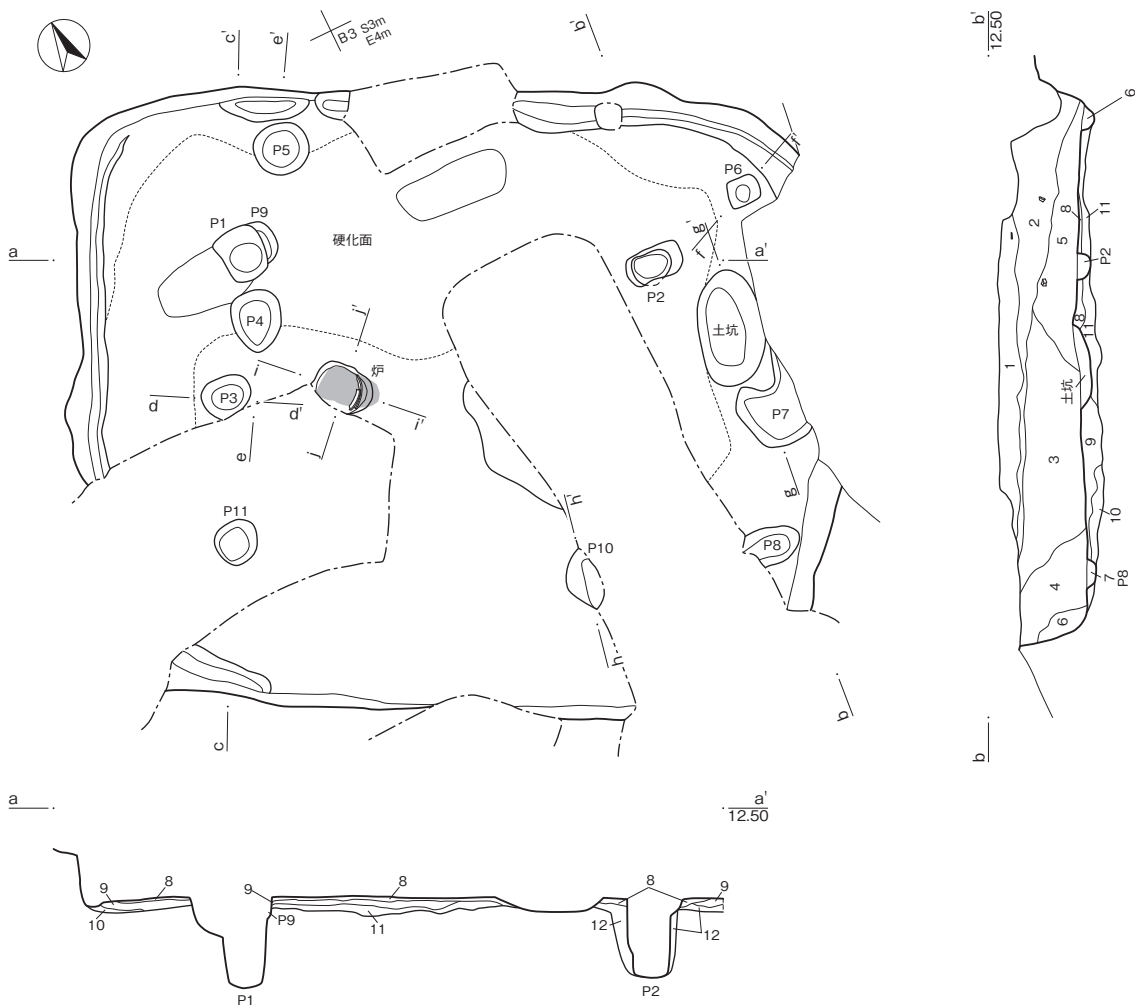
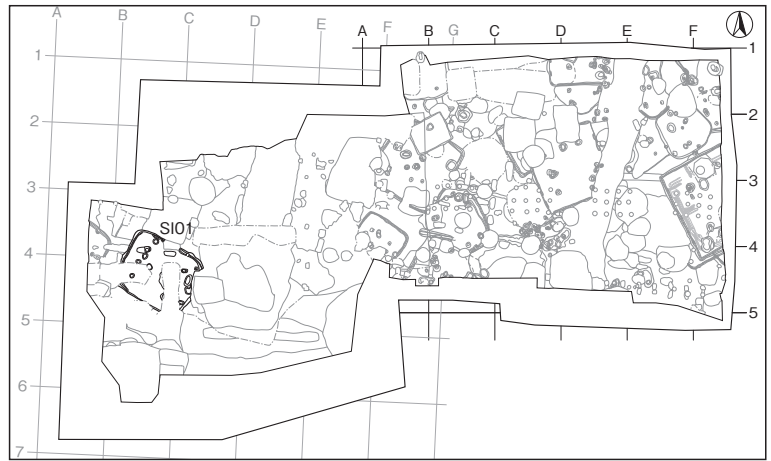
ピットは6基検出されており、位置・深度からP5・P6が支柱穴と思われ、最深深度は床面から0.55mである。

覆土は黒褐色土を主体とし、土器が67点出土した。遺物から廃絶年代は古墳時代前期に属すると考えられる。

SF172・SF173(遺構V-10図)

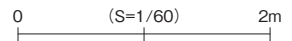
調査区東側E2・F2グリッドの、SI242(SI07)の下位で検出されている。SI242(SI07)に伴うかは判断できなかったため、別遺構とした。炉と考えられる。

規模は北東南西方向で0.69mで、連なって検出されている。焼土を含む層位は5cmと浅く、上部がSI242(SI07)に削平されている可能性が考えられる。遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。



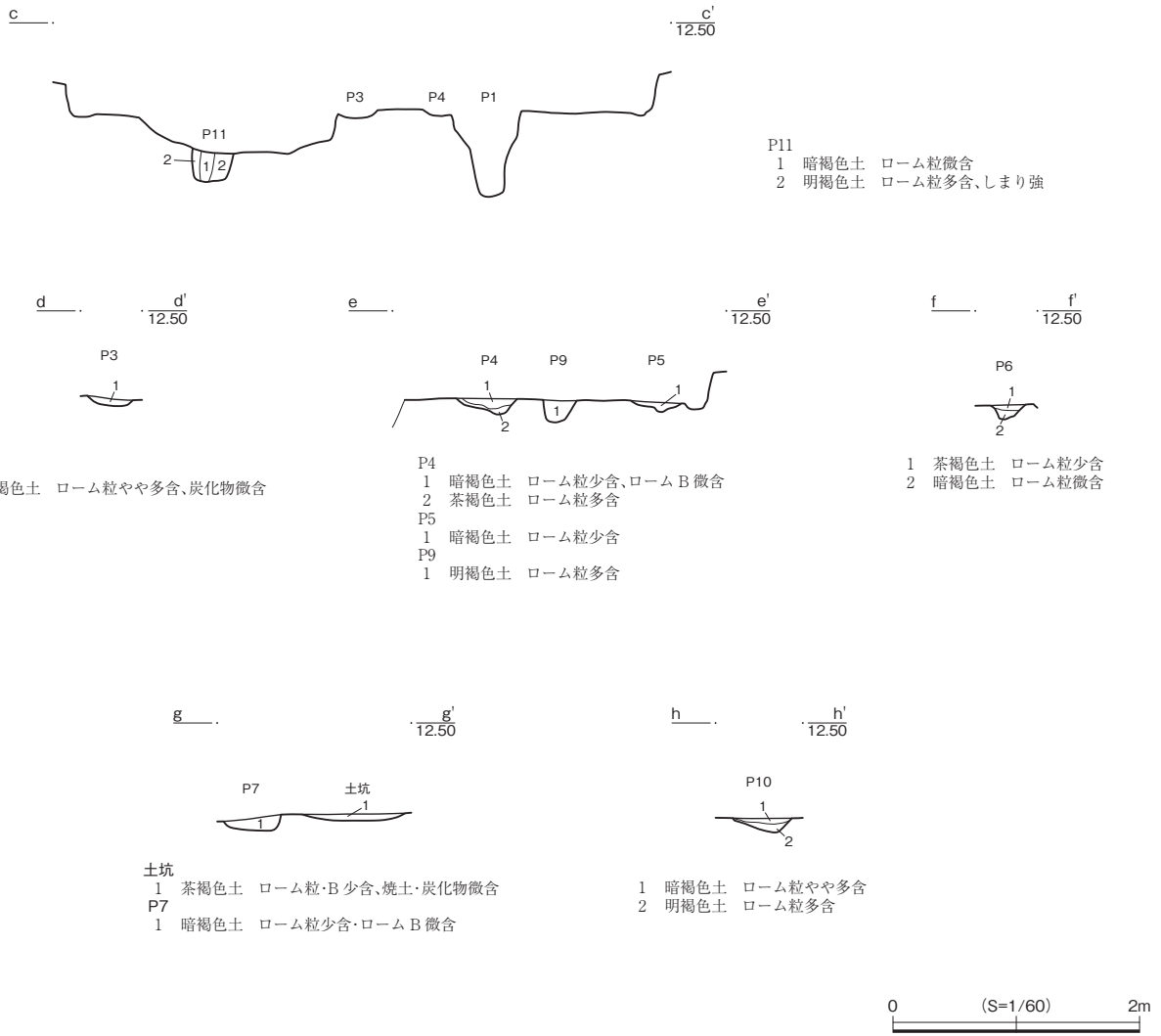
- 1 黒褐色土 黒色土主体、焼土・炭化物少含遺物はこの層より多く出土
- 2 黒褐色土 ローム粒・焼土・炭化物微含
- 3 茶褐色土 ローム粒・ローム粗粒・炭化物少含
- 4 茶褐色土 ローム粒少含
- 5 黒色土 炭化物・焼土少含、ローム粒微含
- 6 明褐色土 ローム粒多含
- 7 暗褐色土 ローム粒少含
- 8 明褐色土 しまり極強、ローム粗粒多含、ローム粒やや多含
- 9 茶褐色土 しまり強、ローム粒多含、ローム粗粒やや多含
- 10 明褐色土 ローム粒多含
- 11 茶褐色土 しまり強、ローム粒多含、焼土微含

平面図・断面図(1)

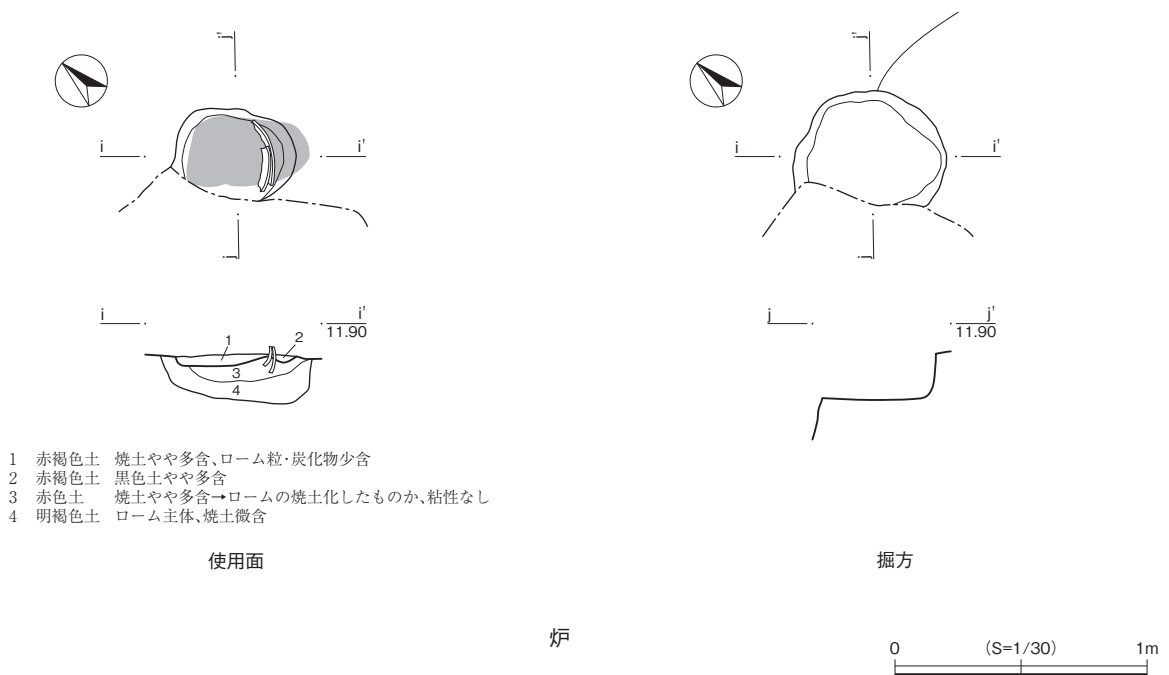


V-1図 SI01(1)

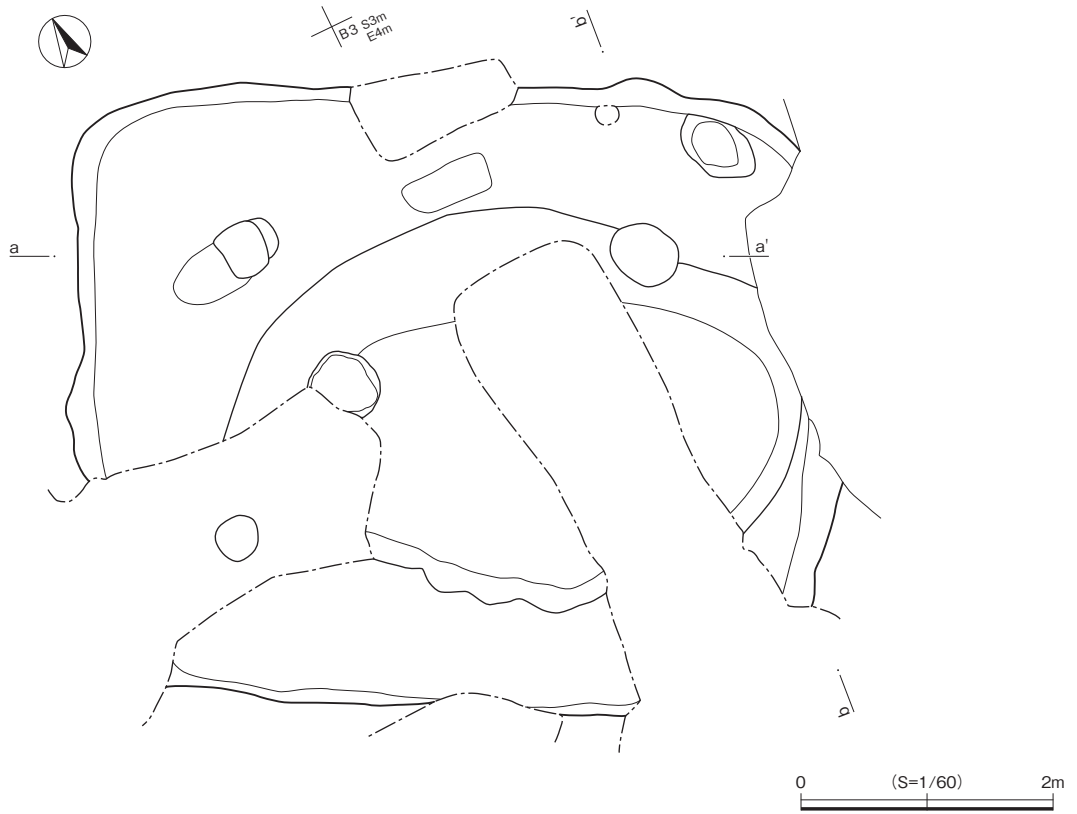
Ⅲ 看護職員等宿舎 3号棟地点 (2)



平面図・断面図(2)

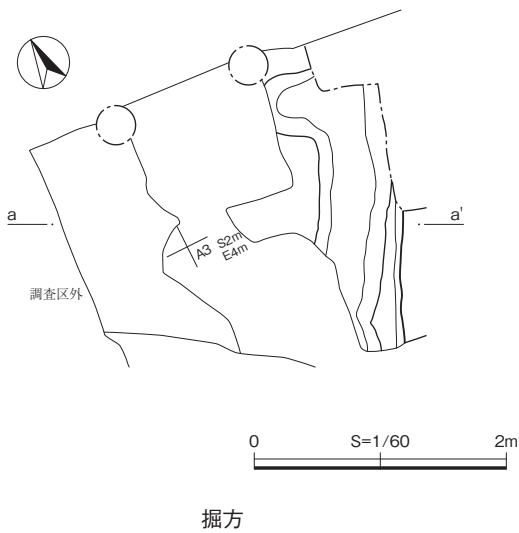
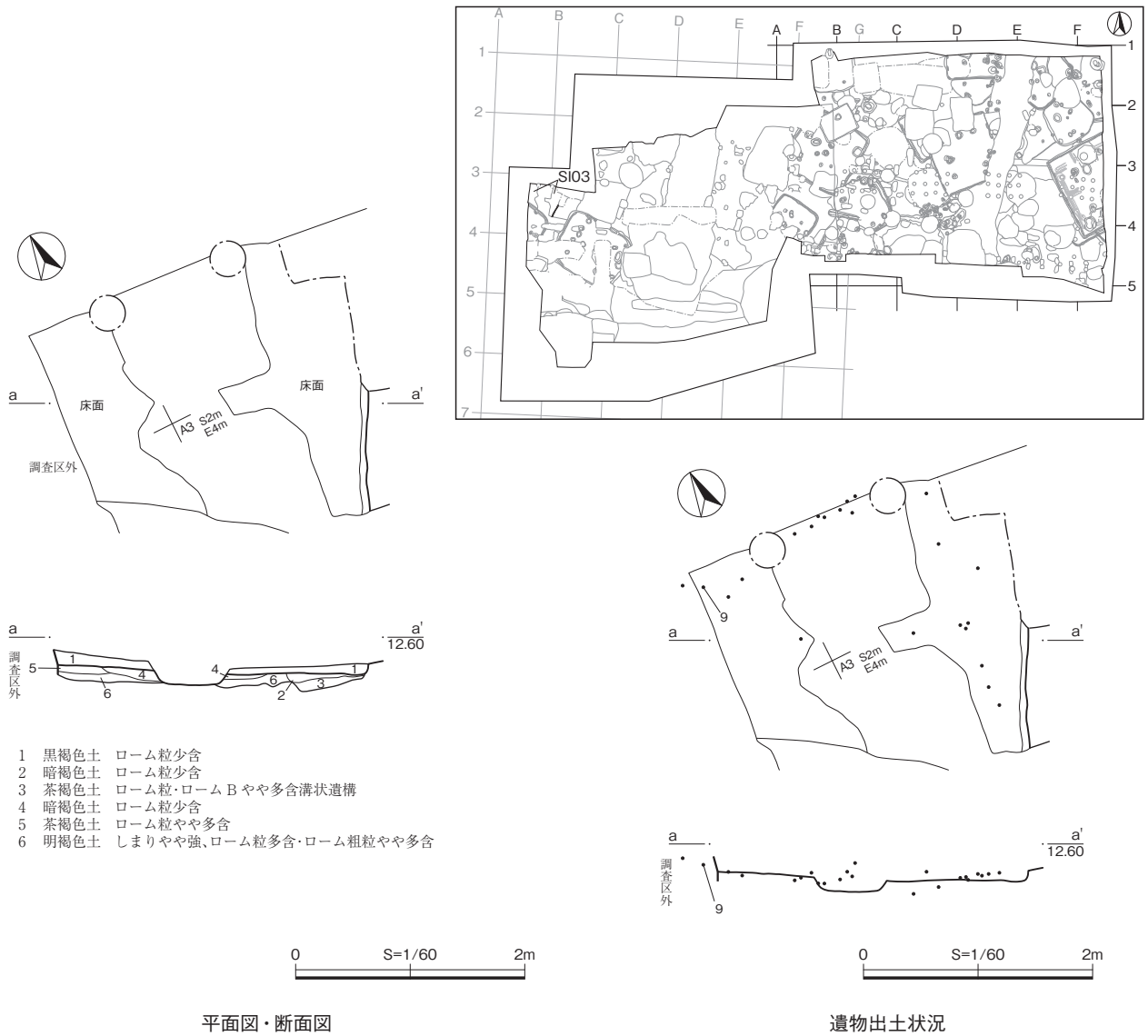


V-2図 SI01 (2)

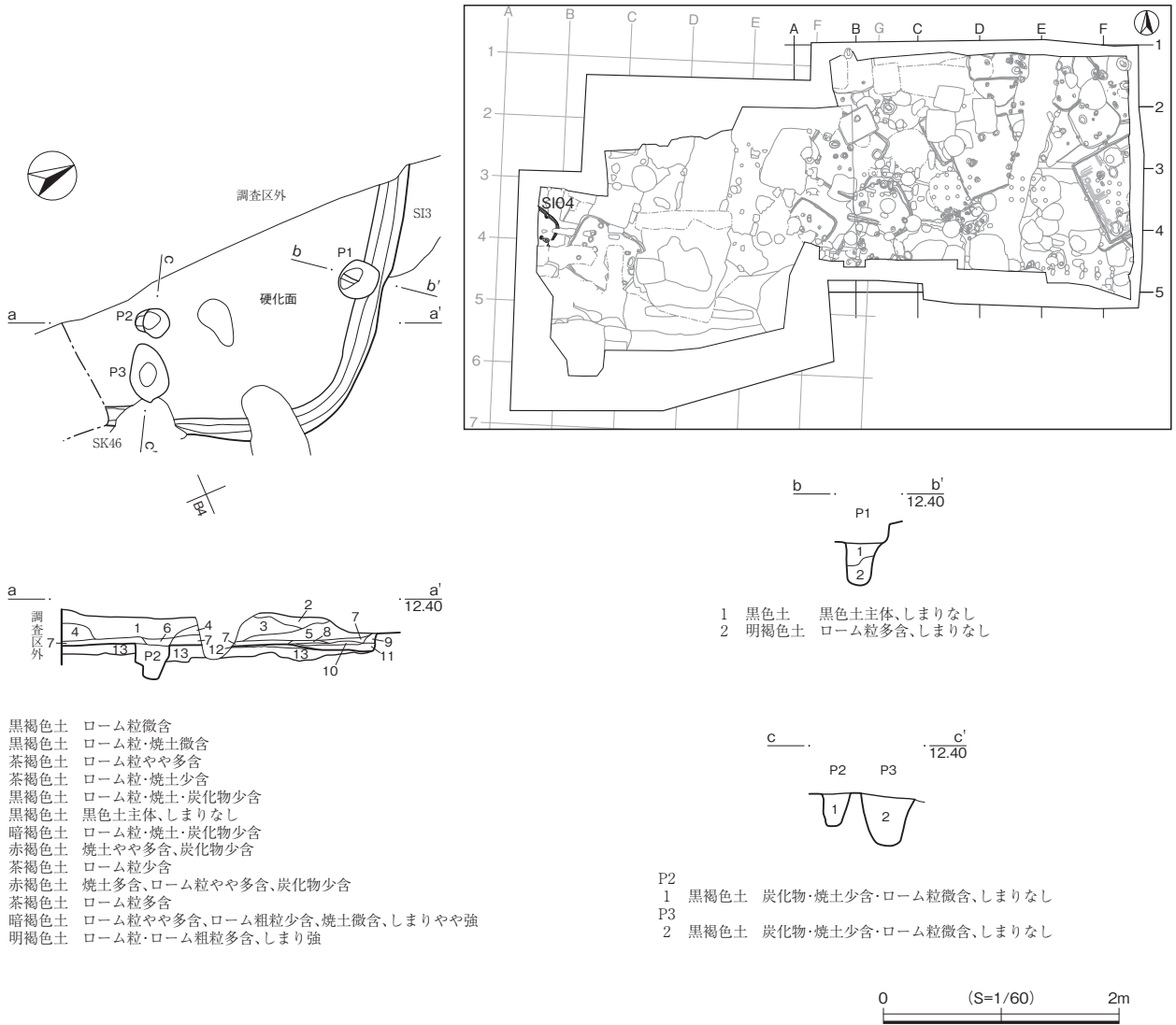


掘方
V-3図 SI01 (3)

Ⅲ 看護職員等宿舍3号棟地点(2)

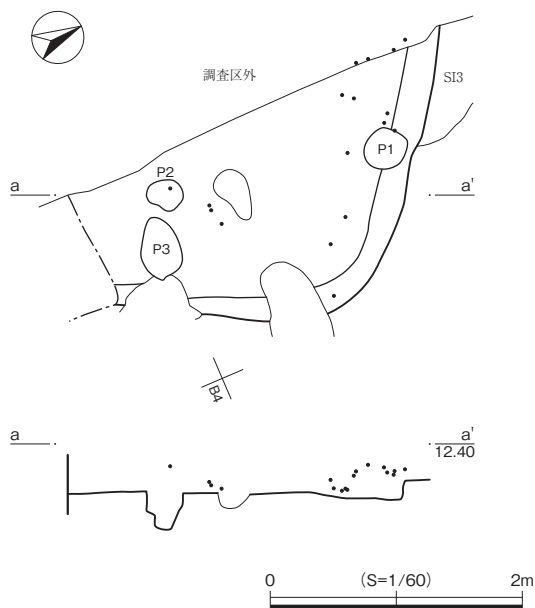


V-4図 SI03

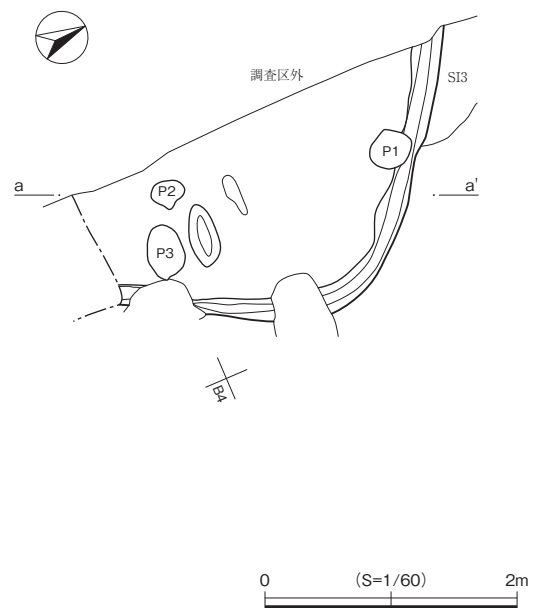


- 1 黒褐色土 ローム粒微含
- 2 黒褐色土 ローム粒・焼土微含
- 3 茶褐色土 ローム粒やや多含
- 4 茶褐色土 ローム粒・焼土少含
- 5 黒褐色土 ローム粒・焼土・炭化物少含
- 6 黒褐色土 黒色土主体、しまりなし
- 7 暗褐色土 ローム粒・焼土・炭化物少含
- 8 赤褐色土 焼土やや多含、炭化物少含
- 9 茶褐色土 ローム粒少含
- 10 赤褐色土 焼土多含、ローム粒やや多含、炭化物少含
- 11 茶褐色土 ローム粒多含
- 12 暗褐色土 ローム粒やや多含、ローム粗粒少含、焼土微含、しまりやや強
- 13 明褐色土 ローム粒・ローム粗粒多含、しまり強

平面図・断面図



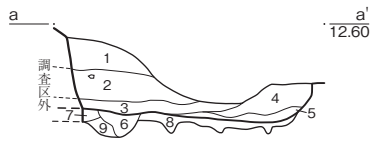
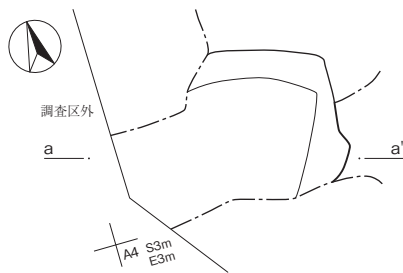
遺物出土状況



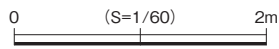
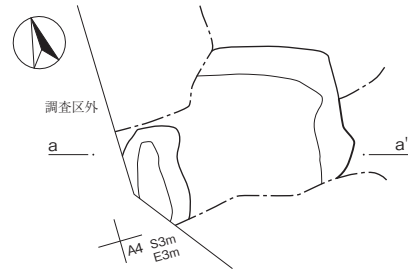
掘方

V-5図 SI04

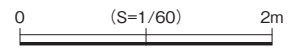
III 看護職員等宿舍3号棟地点(2)



- 1 黑色土 黑色土主体、焼土微含
- 2 黑色土 ローム粒・焼土微含
- 3 黑色土 黑色土主体
- 4 暗褐色土 黑色土含、ローム粒少含、焼土微含
- 5 茶褐色土 黑色土・ローム粒含
- 6 茶褐色土 ローム粒やや多含、黑色土含
- 7 黒褐色土 黑色土含、ローム粒少含、焼土・炭化物微含
- 8 明褐色土 ローム粒多含、黑色土含
- 9 茶褐色土 ローム粒やや多含

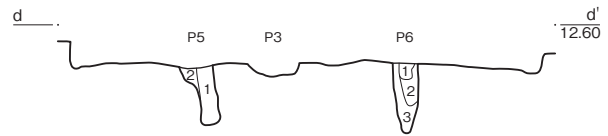
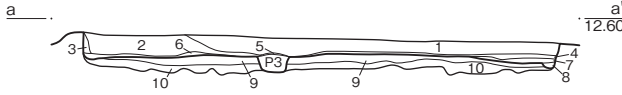
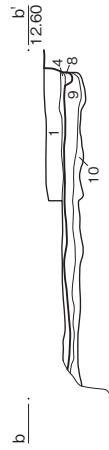
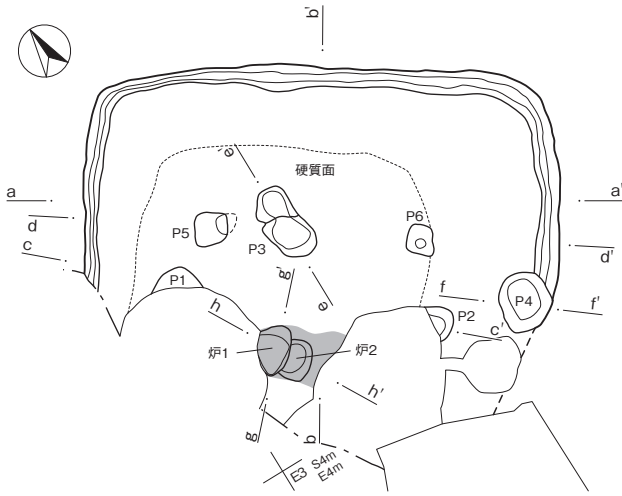


平面図・断面図



掘方

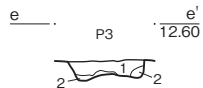
V-6図 SI05



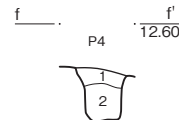
1 暗褐色土 ローム粒少含、焼土・炭化物微含

- 1 黒褐色土 焼土少含、ローム粒・スコリア粒・炭化物微含
- 2 黒褐色土 ローム粒・焼土少含、スコリア粒・炭化物微含
- 3 茶褐色土 ローム粒やや多含
- 4 暗褐色土 ローム粒少含
- 5 黒褐色土 ローム粒微含
- 6 茶褐色土 ローム粒多含、炭化物少含
- 7 暗褐色土 ローム粒少含
- 8 茶褐色土 ローム粒やや多含
- 9 茶褐色土 しまり強、硬質、ローム粒多含、斑状に黒色土含、部分的に硬質なロームBが入る
- 10 明褐色土 しまり強、硬質、ローム粒多含

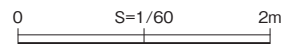
- P5
- 1 茶褐色土 ローム粒やや多含
- 2 明褐色土 ローム粒多含、しまり強
- P6
- 1 暗褐色土 ローム粒少含
- 2 茶褐色土 ローム粒多含
- 3 明褐色土 ローム粒多含、しまり強



- 1 暗褐色土 ローム粒少含
- 2 茶褐色土 ローム粒やや多含、ローム粗粒含



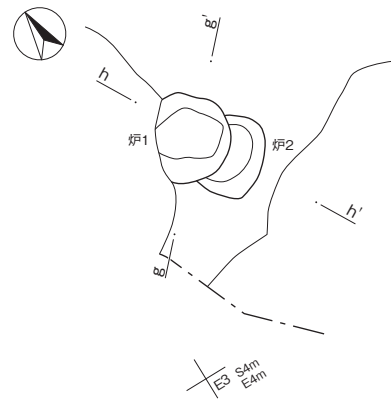
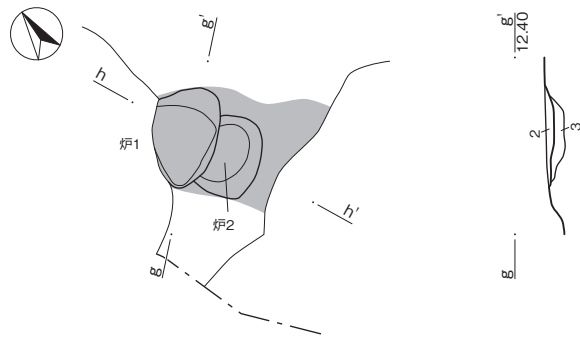
- 1 暗褐色土 ローム粒少含、焼土・炭化物微含
- 2 黒褐色土 ローム粒・焼土・炭化物微含



平面図・断面図

V-7図 SI06(1)

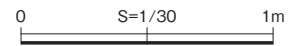
Ⅲ 看護職員等宿舎3号棟地点(2)



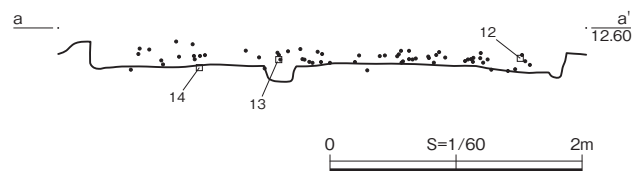
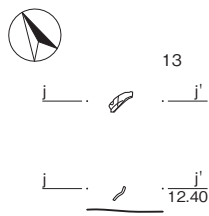
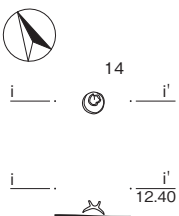
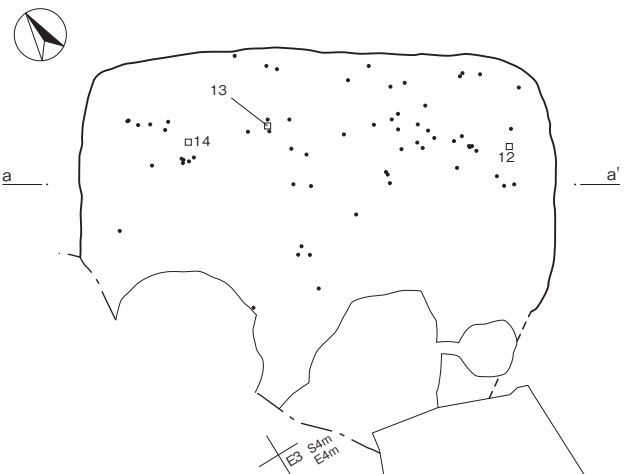
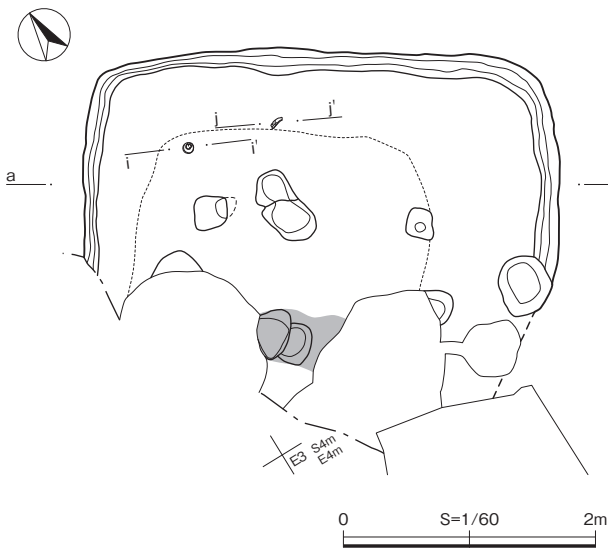
- h h'
- 12.40
- 1 赤色土 焼土多含、灰・炭化物少含、しまり強
 - 2 黒褐色土 焼土やや多含、しまり強
 - 3 赤色土 しまり強、焼土多含、黒色土・灰少含

使用面

掘方



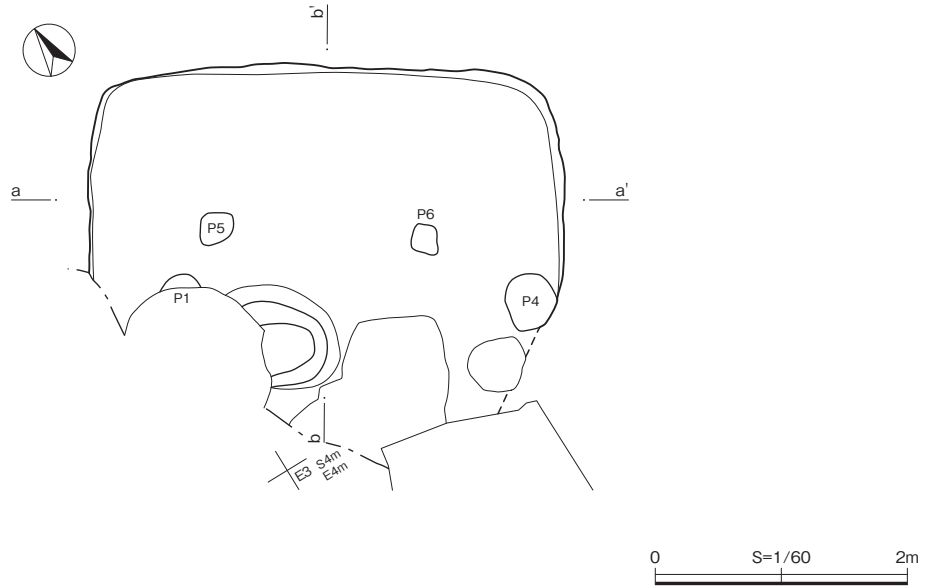
炉



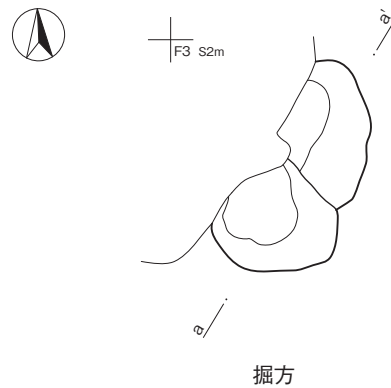
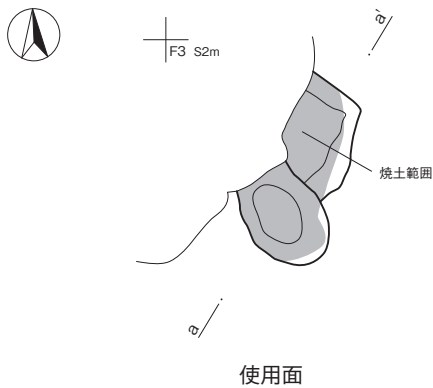
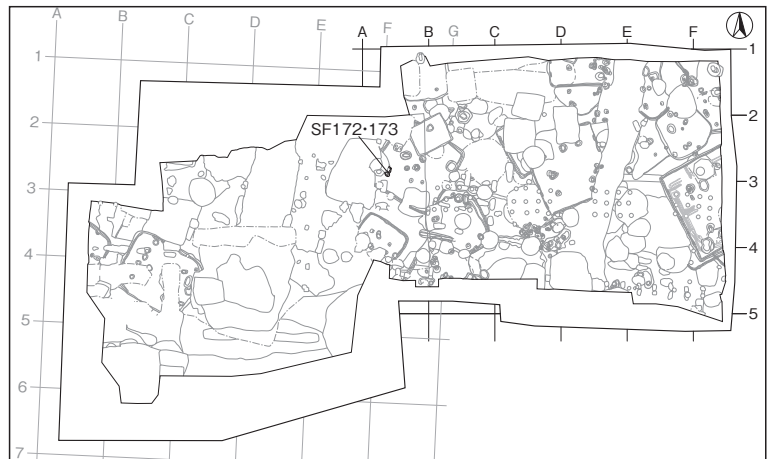
遺物微細図

遺物出土状況

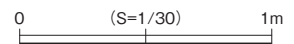
V-8図 SI06(2)



掘方
V-9図 SI06(3)



- SF172-173
- 1 黒褐色土 焼土やや多含・ローム粒少含
 - 2 赤褐色土 焼土やや多含・ローム粒少含
 - 3 茶褐色土 ローム粒多含・焼土微含
 - 4 茶褐色土 ローム粒多含、しまり強



V-10図 SF172・SF173

第2節 遺物

SI01 (遺構V -1 ~ 3 図、遺物V -11 図)

SI01 から出土した土器のうち、器種や器形がわかる8点を図示した。

1は、いわゆる複合口縁の壺の口縁部である。口縁帯に断面三角形の棒状貼付文が並び、口縁部上端面に網目状捺糸文が施される。内面は赤彩される。2は折り返された口縁部をもつ小型壺である。外面はハケメの上に縦方向のミガキが施され、部分的にハケメが残る。口縁部内面は、ハケメやケズリの上から斜方向のミガキが施される。体部にユビオサエが認められる。

3は、「く」字状に屈曲する口縁部をもつ甕である。外面は頸部より下にハケメが施され、頸部の内面には横方向のハケメがめぐる。4は、内外面ともハケメで調整された台付甕の脚台部である。

5は緩やかに内彎しながらのびる口縁部である。丸い体部をもつ小形丸底鉢とみられる。外面に丁寧な縦方向のミガキが施される。内面は、不明瞭であるが横方向のミガキが認められる。6は小形丸底鉢の体部であり全体が赤彩される。外面の調整は不明瞭であるが、横方向のミガキによって頸部に稜がつくり出される。下半部には不整円形のケズリ状の調整が認められる。

7・8は、粗いハケメによって外面が仕上げられた粗製の鉢である。7は部分的にケズリが認められた。8の底部はやや突出する。

SI03 (遺構V -4 図、遺物V -12 図)

SI03 から出土した土器のうち、器種や器形がわかる1点を図示した。1は台付甕の脚台部である。端部付近の内面にハケメが施され、端部は平坦面をもつ。

SI05 (遺構V -6 図、遺物V -13 図)

SI05 から出土した土器のうち、器種や器形がわかる2点を報告する。

1は壺または甕の底部である。器面の摩滅が著しく、底面付近にわずかに残るハケメのほか調整は認められない。2は小型器台の脚部とみられる。外面は縦方向のミガキが施され、内面に横方向のハケメがめぐる。

SI06 (遺構V -7 ~ 9 図、遺物V -14 図)

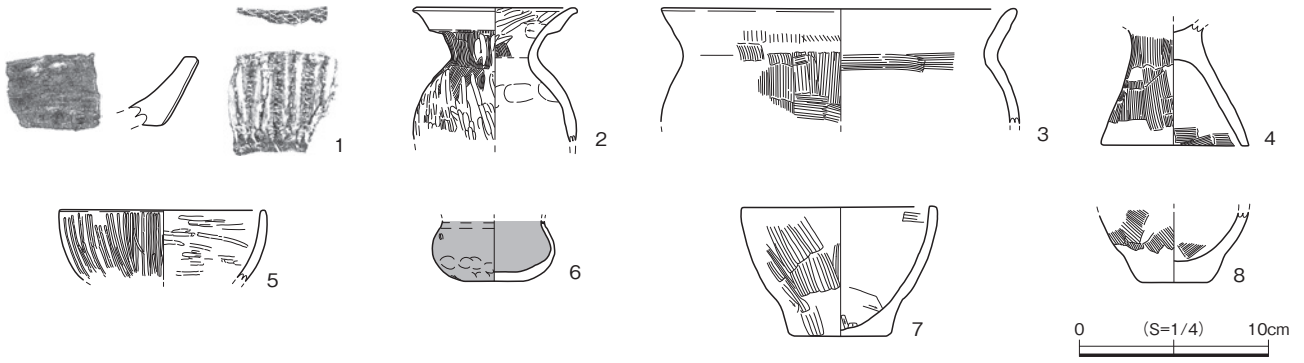
SI06 から出土した土器のうち、器種や器形がわかる3点を図示した。

1は壺または甕の底部である。器面の摩滅が著しく、調整は認められない。2は「く」字状に屈曲する口縁部

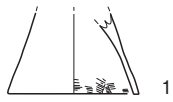
をもつ甕である。外面は頸部より下にハケメが施され、口縁部内面には横方向のハケメがめぐる。3は小さな椀形の受け部をもつ小型器台である。口縁端部はつまみ上げられたような形状を呈する。外面はハケメの上に縦方向のミガキが施される。受け部内面は放射状にミガキが施される。脚部の内面はユビオサエが認められる。外面および受け部内面が赤彩される。

遺構外

1は小型壺の体部である。外面は縦方向のミガキが施される。内面は底面付近に板状工具によるナデの痕跡が認められる。調整や胎土、色調などから SI01 出土の2と同一個体とみられる。



V-11 図 SI01 出土遺物



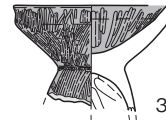
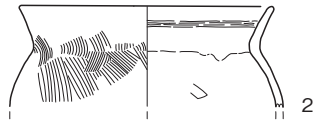
0 (S=1/4) 10cm

V-12 図 SI03 出土遺物



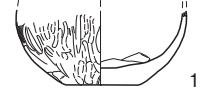
0 (S=1/4) 10cm

V-13 図 SI05 出土遺物



0 (S=1/4) 10cm

V-14 図 SI06 出土遺物



0 (S=1/4) 10cm

V-15 図 遺構外出土遺物

V-1表 出土遺物観察表(1)

図版 番号	器種	部位	法量(cm) 口径 底径 高さ	調整・文様	胎土	焼成	色調	出土 遺構 層位	備考・残存
V-11 図 1	壺	口縁部	— (3.7)	外：棒状貼付文 内：ナデ	密、直径0.5～2mmの 白・灰色の砂粒や直径1 ～2mmのシャモットを 少量含む	普通	赤彩部：赤 褐 内：にぶい 赤褐	SI01	内面に赤彩 10%未満
V-11 図 2	小形壺	口縁～体 部最大径	(8.4) — (7.1)	外：頸部に縦方向のハケメ、体部 に縦方向のミガキ 内：口縁部に横・斜方向のミガキ、 肩部にユビオサエ	密、直径0.5～1mmの 白・灰色の砂粒や直径1 ～2mmのシャモットを 少量含む	良い	明赤褐	SI01	40%残存
V-11 図 3	甕	口縁～肩 部	(18.9) — (6.0)	外：慶～体部に縦方向のハケメ 内：頸部に横方向のハケメ	密、直径0.5～1mmの 白・灰色の砂粒や直径1 ～2mmのシャモットを 少量含む	普通	赤褐	SI01	25%残存
V-11 図 4	台付甕	脚台部	— 7.8 (6.4)	外：脚部に縦方向のハケメ 内：脚端部付近に横方向のハケメ	密、直径0.5～1mmの 白・灰色の砂粒や直径1 ～2mmのシャモットを 少量含む	普通	にぶい褐	SI01	100%残存
V-11 図 5	小形丸底 鉢	口縁部	(10.9) — (3.2)	外：幅1mm程度の縦方向のミガキ 内：横方向のミガキ	密、直径0.5～1mmの 白・灰色の砂粒や直径1 ～2mmのシャモットを 少量含む	普通	明赤褐	SI01	25%残存
V-11 図 6	小形丸底 鉢	頸～底部	— (3.1) (3.2)	外：肩部に縦方向のミガキ、底部 付近にケズリ状のナデ 内：ナデ	密、直径0.5mm未満の 白・灰色の砂粒や直径 1mm未満のシャモット を少量含む	良い	明赤褐	SI01	内外面に赤彩 50%残存
V-11 図 7	小型鉢	口縁～底 部	10.2 4.9 6.9	外：縦方向のハケメ 内：口縁部に横方向のハケメ、底 部付近にケズリ	密、直径0.5～1mmの 白・黒色などの砂粒を少 量、直径1～2mmのシャ モットを中量含む	普通	にぶい褐	SI01	50%残存
V-11 図 8	鉢	体部下半 ～底部	— 3.6 (3.5)	外：縦・斜方向のハケメ 内：斜方向のハケメ	密、直径0.5～1mmの白・ 黒色などの砂粒や直径1 ～2mmのシャモットを 中量含む	普通	にぶい褐	SI01	50%残存
V-12 図 1	台付甕	脚台部	— 7.0 (4.2)	外：ナデ 内：脚端部付近に横方向のハケメ	密、直径0.5～1mmの 白・灰色の砂粒や直径 0.5mm以下の光沢をも つ砂粒を少量含む	普通	にぶい黄褐	SI03	25%残存
V-13 図 1	壺または 甕	底部	— 6.6 (1.5)	外：底部付近にハケメ 内：ナデ	密、直径0.5～1mmの白・ 褐色などの砂粒や直径 1mmの未満のシャモッ トを少量含む	良い	にぶい橙	SI05	80%残存
V-13 図 2	高坏また は器台	脚端部	— 9.0 (2.5)	外：縦方向のミガキ 内：横方向のハケメ	密、直径0.5～1mmの 白・灰色の砂粒や直径 0.5mm以下の光沢をも つ砂粒を少量含む	良い	外：にぶい 褐 内：にぶい 黄橙	SI05	25%残存
V-14 図 1	壺または 甕	底部	— 7.0 (1.5)	外：ナデ 内：ナデ	密、直径0.5～2mmの白・ 灰色の砂粒をやや多く、 直径0.5mm以下の光沢 をもつ砂粒を少量含む	普通	にぶい黄橙	SI06	80%残存
V-14 図 2	甕	口縁～肩 部	(16.8) — (5.1)	外：慶～体部に縦方向のハケメ 内：口縁部に横方向のハケメ	密、直径0.5～1mmの白・ 褐色などの砂粒や直径1 ～2mmのシャモットを 少量含む	普通	赤褐	SI06	25%残存
V-14 図 3	小型器台	口縁～脚 部	7.8 — (5.5)	外：口縁部に幅1mm程度の縦方向 のミガキ、受け部～脚部に縦方向 のハケメ 内：受け部に幅1～2mmの放射方 向のミガキ	密、直径0.5～4mmの白・ 褐色などの砂粒を少量、 直径2～4mmの礫をわ ずかに含む	普通	明赤褐	SI06	内外面に赤彩 75%残存
V-15 図 1	小形壺	体部下半 ～底部	— 3.8 (3.9)	外：体～底部に縦方向のミガキ 内：底部に板状工具によるナデ	密、直径0.5～1mmの 白・灰の砂粒や直径1～ 2mmのシャモットを少 量含む	良い	明赤褐	遺構外	50%残存

第VI章 縄文時代の遺構と遺物

第1節 遺構と遺物

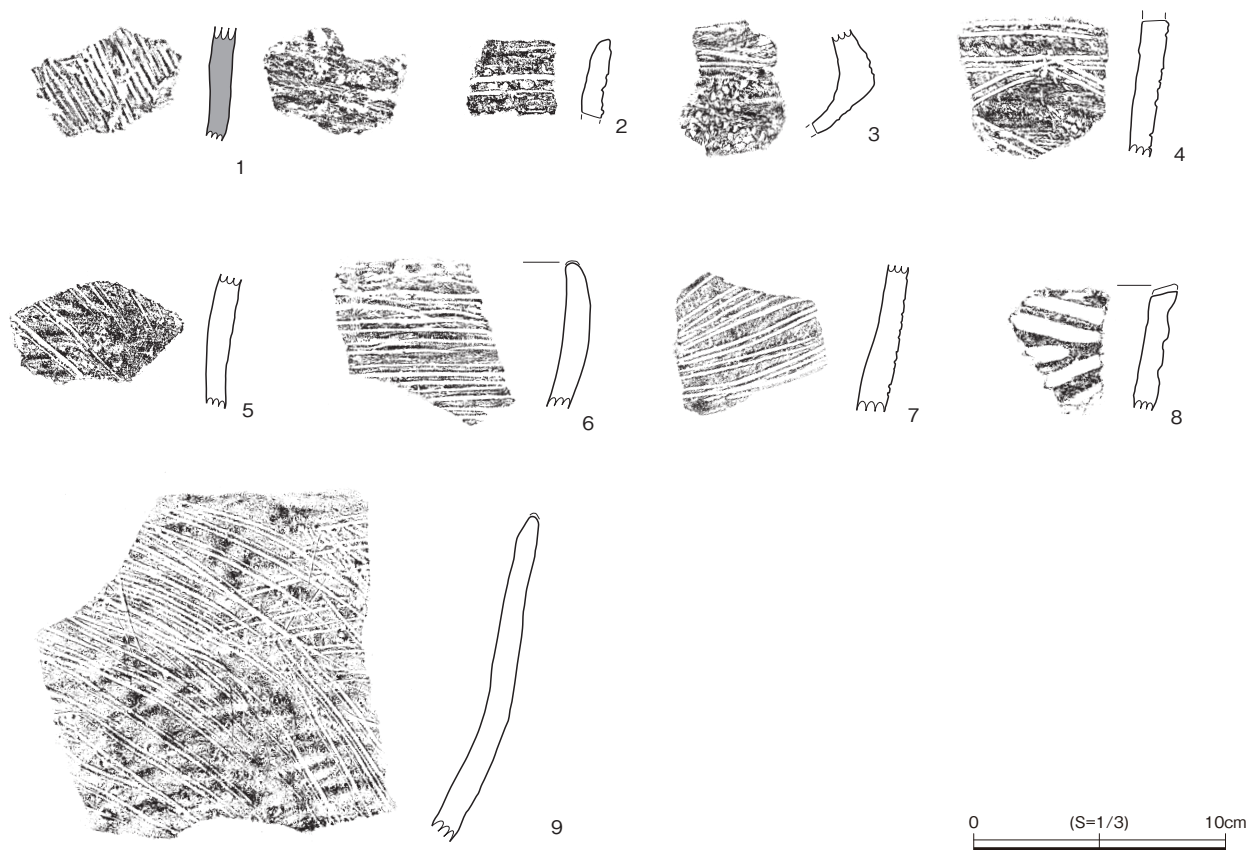
今回の調査で縄文時代に属する遺構は、調査区東端にSK171が1基検出されたのみである。SK171は、看護職員宿舎等5号地点の調査で検出されたSK289と同一遺構と判明したため、II-II～VI章で記述している。

その他に縄文時代の遺構にはともなわれないが、古墳時代竪穴建物や近世の遺構から、縄文時代に属する土器が検出されている。いずれも小片が主で判断が難しいが、当地点から出土した土器の全体の傾向は、前期中葉黒浜式～後半諸磯式が多い傾向が伺える。

以下各土器について詳述する。

1～8は古墳時代の竪穴建物から出土している。1は深鉢胴部片で、外面は鈍い黄橙色、内面は灰褐色を呈する。繊維を中量含み、外面には貝殻条痕文が縦位に施文される。内面は横位の擦痕がわずかにみとめられる。茅山式後半か。2～5は半截竹管による平行沈線が施文され、5以外はわずかに地紋に縄文が伺える。内外面ともに明褐色～にぶい黄橙色を呈し、胎土中に繊維は含まれ

ず焼成は良好で、硬質である。前期後半諸磯a～b式に属すると考えられる。6、7はやはり半截竹管による平行沈線が密に施文される。6はキャリパー状を呈する深鉢の口縁部で、間隔の狭い棒状工具の押しつけによる波状口縁を呈する。6、7ともに外面色はにぶい黄褐色から鈍い赤褐色を呈し、硬質で、内面は平滑にナデられる。諸磯式期後半に属すると考えられる。8は棒状工具による太い沈線文が施文される。残存部分から入組文、菱形文などが考えられる。胎土は硬質で灰褐色を呈する。晩期安行3d式に属すると考えられる。9は近世の遺構から出土した、深鉢口縁～胴部片でわずかに波状を呈する口縁部を持つ。口縁部下にわずかに括れを有する。半截竹管による平行沈線が斜位に施文され、一部は交差がみられる。やや砂質な胎土で赤色粒子を含む。焼成は良好で、海面骨針をわずかに含むが、繊維は含まない。縄文時代前期後半に属すると考えられる。



VI-1図 遺構外出土遺物

IV 研 究

本郷台地における古墳時代の集落変遷

山下 優介

はじめに

今回報告をおこなった看護職員等宿舎5号棟地点（以下、本報告5号棟地点）では、本郷台遺跡群において調査例が少ない、古墳時代中期の遺構・遺物が確認されたことが特筆できる。この成果によって、当遺跡群では古墳時代前期から後期にかけての痕跡が良好に残されていることが明らかになった。

長年にわたって調査が実施されてきた当遺跡群内には、学史的に著名な弥生町遺跡や加賀藩邸上屋敷などの武家屋敷跡があり、関連する遺構や遺物は研究者たちの関心を常に集めてきた。それらが注目されてきた一方で、古墳時代の様相については十分に知られておらず、検討も十分ではない。

本章では、本報告5号棟地点から出土した土器の年代的位置づけに関する考察を基礎として、既往の調査成果を整理することで本郷台遺跡群における古墳時代の集落変遷を論じてみたい。変遷を論じるにあたり、古墳時代とその前段階の弥生時代を対象とする。

第1節 各遺構の年代的位置づけ

まず、本報告5号棟地点で検出された古墳時代中期の竪穴建物出土遺物について考察する。検出された遺構のうち、出土遺物が豊富なSI201・SI212を対象として出土土器の概要をふりかえるとともに、土器の年代的な位置づけをおこなう。あわせて、II-第V章では十分に論じることができなかった特徴的な遺物について若干の検討をくわえる。

古墳時代中期の土器編年に関する研究史を繙くことはここでしないが、本郷台遺跡群が位置する東京都域の当該期の土器編年として知られている論考（比田井 1988、福田他 1999）の見解は現在も有効性が認められていると判断し、それらを参照しつつ各資料の所属時期を検討する。その際には、東京湾に面して隣接している千葉県域と神奈川県域の編年案（小沢 1999、長谷川 1998・1999）も参考とした。

また、2000年代までの議論をふまえた研究として、千葉県市原市草刈遺跡出土資料を中心とした土器編年（白井 2012）を参照した。草刈遺跡と本郷台遺跡群では

同じ東京湾沿岸地域でも同地域と扱うことはできないが、比較可能な資料が多いため大いに参考になると考えられる。

SI201からは数多くの資料が出土しているが、壺類が少ないのに比べて甕類が非常に目立つ。調整にハケメが認められる甕は、痕跡的にハケメを残す1点（V-44図11）を除き、残存状態が良好な個体がなく、基本的にケズリが施される甕が占める。ケズリに加えて、部分的にミガキが施される甕（V-44図3・4など）が確認できる。口縁部の形状や器壁の厚さといった属性からは壺類と甕類を判断する基準を設けることは難しく、煮沸痕跡などをふまえて甕類と判断した資料が多い。

SI201の所属時期を判断するうえで重要な資料の一つが、床面に近いレベルからほぼ完形で出土したV-45図28の甗である。28のような甗形的大型甗は古墳時代中期後半に採用される器種であり、カマドの導入と関係が深い資料である。しかし、SI201では後で述べる土製支脚とともに地床炉の使用が続けられていた。

複数の個体が良好な状況で出土した高坏や埴坏類も、所属時期を考えるうえで有効である。高坏は坏部が段をなして屈曲するもので占められるが、脚部の形状をみると、円錐形の脚注部から脚裾部が「ハ」字に開くもの（V-46図29・35など）が主体的で、柱状脚の高坏（V-46図30など）も少数認められる。また、V-46図34のような裾部が屈曲する「有段高坏」（山口 2000）が伴っている。

埴・坏類はすべてが平底を有するが、定形的な一群とみなせる資料は認められなかった。V-46図38や39はそれぞれ他の土器と折り重なって出土し（V-3図）、38が床面に近いレベルから、39は炉の上部で出土した。上方へのびる形状の口縁部をもつ38や39からは須恵器坏の影響が窺えるが、いわゆる「須恵器模倣坏」に比べ口縁部の高さが低く、それらと同列に扱うことはできないだろう。そのため、鬼高式の「須恵器模倣坏」が出現する時期まで年代的位置づけを下降させる必要はないと考えられる。類例を提示できない現状では、38や39を詳細な時期比定の根拠とすることは難しいが、坏類が一定量出土している点からも中期後半に位置付けることの妥当性は高いといえる。

またSI201からは、破片資料のV-46図43を除き、

小形丸底土器に類する器種が出土していない。V-46 図 44 は須恵器甕を模倣した赤彩品である。これらの要素も SI201 の所属時期を確かめるうえでの指標となりうる。

SI201 を特徴づける資料として土製支脚 (V-46 図 52~54) があげられる。土製支脚は、3 個体在使用時の配置を示すかのように集中して出土しており、良好な出土状況であった。このような土製支脚は関東地方では千葉県市原市草刈遺跡でまとまった出土例が知られ (財団法人千葉県教育振興財団 2010)、草刈遺跡では本報告地点と同様に 1 軒の竪穴建物から複数個体が出土した例が、複数軒で確認されている (1 図)。草刈遺跡では土製支脚が古墳時代前期から認められるが、中期以降も継続して採用され、カマドが導入される段階であっても遺構によっては土製支脚とともに地床炉を採用する例がある点が指摘されている (白井 2012)。

以上の資料に基づき、甕形の甕ならびに、定量的に壊・坏類が存在し、かつ「須恵器模倣坏」が不在であることなどから、SI201 は古墳時代中期後半のなかでも福田他 (1999) の IV 期に属するとして理解できる。

SI212 は、東側およそ半分が調査区外にあるため調査が限定的であったにもかかわらず、SI201 に次いで多くの遺物が出土した。ただし、残存状態が良好な土器の一部は、竪穴建物の覆土上層から出土した古墳時代前期に属するとみられる資料であり、それらを除くと甕が主体を占め、少量の高坏や小形の壺などが少量伴う。

甕類は、SI201 と同様な特徴を備えており、基本的にケズリが施される甕で占められる。SI201 にも存在したが、ケズリとともに、肩部から体部上半にかけて斜方向の強いナデ調整が施される甕 (V-52 図 4) が認められる。甕形で底部が筒抜け状になる甕 (V-52 図 12) が出土している点は、所属時期判別の指標となる。

高坏も SI201 と同様に、円錐形の脚柱部からは「ハ」字に開く脚裾部をもつもの (V-53 図 13・15 など) が主体的といえるが、坏部の屈曲が弱く、沈線で表現される程度になる例 (V-53 図 13) が認められる。

SI212 出土資料のなかで注目すべきは、須恵器の甕を模倣した小形壺 (V-53 図 23) であろう。23 は、土器を縦方向に半裁したような状態で 2 分の 1 程度が残存しているために確実な体部の穿孔は観察できなかったが、全体形から甕を模したとみて問題ないだろう。関東地方における須恵器の甕を模倣した土器については、モデルとなる須恵器を必ずしも正確に映していないことに留意しながらも TK216 型式を模倣したことが推測されており、須恵器と土師器の伴出例が関東地方で増加する前の

段階に出現することが指摘されている (長谷川 1991)。SI212 出土例についても、流入時期の差がある可能性を注意したうえで同様な資料であると理解したい。

以上の資料に基づけば、甕形の甕や須恵器甕模倣土器が存在することなどから、SI212 は SI201 と同様に古墳時代中期後半のなかでも福田他 (1999) の IV 期に属すると理解できる。

SI201・SI212 出土遺物の検討を通じて、両者が古墳時代中期後半のなかでも後半にあたる時期に属することを明らかにした。本報告 5 号棟地点には、当該期に竪穴建物群が形成されたと考えられる。

このような古墳時代中期後半の状況をふまえて、看護職員宿舎 3・5 号棟地点における古墳時代集落の変遷を整理すると以下ようになる。

第一に、看護職員宿舎 3 号棟地点で検出された竪穴建物の大半と、本報告 5 号棟地点の SI236・SI242 からなる古墳時代前期前半の竪穴建物群が形成される。

そして、前期末頃や中期前半の空白期を経て、第二の集落形成期である中期後半に、SI201・SI212 を中心とした建物群が再度つくられる。

その後、中期末~後期初頭に属する SI203 を最後に、本地点の古墳時代集落は衰退していく。

これらの大きく 3 つの画期があったことは、竪穴建物の主軸方向の差からも明らかである (I-5 図)。建物の主軸が西に 60° 振れる古墳時代前期前半の建物群に対して、中期後半の SI201・SI212 では西に 30° 振れている。さらに、SI203 では主軸はほぼ南北方向を示す。

本報告 5 号棟地点出土遺物の検討を基礎として、看護職員宿舎 3・5 号棟地点における古墳時代集落の変遷案を提示した。次節以降では、周辺の調査成果を加味しながら本郷台地の集落が弥生時代から古墳時代にかけてどのように変遷したか、その概略を論じてみたい。

第 2 節 弥生時代の本郷台地

1 表は、本郷地区キャンパス構内の遺跡調査で確認された弥生時代から古墳時代の遺構と、その地点の一覧である。一見して、本郷地区では古墳時代の集落に関する検出例が多いのに対して、弥生時代の遺構は浅野地区に集中していることがわかる。以下、文中で用いる地点番号は、I-I-1 図、本章 1 表および 4 図に対応する。

弥生時代の遺物や遺構に関して、本郷地区では理学部 7 号館地点で弥生時代後期~古墳時代前期の土器片が出土した (東京大学理学部遺跡調査室 1989) ほかに、近年まで目立った発掘調査成果は知られてこなかった。た

だし、東京都下水道地点 D 区 (87) (以下、下水道 D 区) の南西に、扁平片刃石斧と有角石斧が出土したとされる地点 (中谷 1924) があり、その存在は認められていた。

近年、下水道 D 区における宮ノ台式期の竪穴建物の検出が報告されたことで、本郷地区内の弥生時代中期の痕跡が明らかになりつつある (東京大学埋蔵文化財調査室 (以下、調査室) 2021b)。

本郷台地上に立地する他の遺跡では、下水道 D 区から北に約 1.2km 離れた千駄木三丁目南遺跡で、宮ノ台式期の竪穴建物 4 軒と環濠と推定される溝が確認され (共和開発編 2005・2007)、その北側に接する団子坂上遺跡では、当該期の方形周溝墓が検出されている (CEL 編 2020)。また、下水道 D 区から南に約 1.2km 離れた弓町遺跡と、その南側の本郷一丁目南遺跡でも宮ノ台式期の竪穴建物が確認されたほか、本郷一丁目南遺跡では、当該期の環濠とみられる溝が検出された (武蔵文化財研究所編 2005・加藤建設埋蔵文化財調査部編 2006)。

このように、同じ台地の縁辺部で集落が確認されていることをふまえれば、下水道 D 区の周辺域にも、弥生中期後葉の集落が同様に存在した可能性があると考えられる。

弥生中期の遺構や遺物の検出例が乏しい一方、浅野地区や弥生地区の発掘調査においては、複数の調査地点で弥生時代の生活痕跡が確認されてきた。「弥生式土器」という名称の由来となった壺形土器の出土地点の推定をめぐって、学史的に重要な意義をもつ向ヶ岡貝塚 (28-c) の調査では、弥生後期後半の環濠と理解される 2 条の溝が検出された (東京大学文学部考古学研究室編 1979)。

浅野地区の工学部風工学実験室支障ケーブル地点 (30) や工学部武田先端知ビル地点 (61) では、後期後半の方形周溝墓が計 3 基検出され (調査室 2009)、言問通り横断管路 (297) でも方形周溝墓の一部が確認された。また、新タンDEM棟地点 (7) の試掘調査では弥生時代終末～古墳時代初頭の竪穴建物 1 軒が報告されている (同 2011)。

弥生地区に所在する分生研・農学部総合研究棟地点 (94) でも方形周溝墓が検出され、方形周溝墓の分布は南側の谷筋に沿って弥生地区から浅野地区まで広がるのが推定されている (同 2012b)。

このように弥生時代には、本郷地区から小支谷を挟んで北側に位置する舌状台地上に後期の集落が展開したことがわかる。中期までの遺構や遺物は依然として検出事例が乏しいが、本郷地区側の舌状台地の、小支谷に面した段丘上に集落が形成されていたと考えられる。

第 3 節 古墳時代前期の集落域

古墳時代になると集落の中心は浅野地区から本郷地区へと移り、現在の医学部附属病院やその関連施設に占められる東側の台地縁辺部に集中的な居住が認められる。この区域を対象とした調査において特に重要な成果が、看護職員等宿舍地点 1 号棟 (19) (以下、看宿 1) や臨床試験棟 (21) の古墳前期の竪穴建物群や、クリニカルリサーチセンター A 棟 I 期 (125-1) の周溝墓群である。

看宿 1 や臨床試験棟地点の調査に関しては、東京大学埋蔵文化財調査室 (2021a) による詳細な報告がある。その報告によれば、看宿 1 では古墳前期の竪穴建物 6 軒、臨床試験棟では 4 軒が検出されている (2 図)。竪穴建物群のなかでも、看宿 1 の SI1001 は遺存状態が良好であり、出土遺物も豊富である。いわゆるヒサゴ壺 (3 図-3) や、体部に櫛描沈線文や波状文、刺突列点文が施された小形壺 (同図-4)、あるいは椀形の坏部をもつ小形高坏 (同図-7・8) や器台 (同図-10) などは、在地の器種にはない外来系土器として注目される。

なお、肩部に突帯を貼り付け、櫛描沈線文や山形文、赤彩によって体部を装飾する壺 (同図-2) は、いわゆるパレススタイル壺が在地で変容したものと考えられる。

外来系土器が目立つ傾向は臨床試験棟 SI01 住居にも認められる。3 図-11・12 は口縁端部が外方につまみ出された形状の S 字状口縁台付甕であり、同図-61 は小型器台である。このような甕は、ヒサゴ壺やパレススタイル壺と同様に伊勢湾西岸地域に系譜をもつ器種である。看宿 1 と隣接する臨床試験棟地点一帯は、古墳前期において、新たな土器様式を採用した人びとの居住域の中心であった可能性がある。

古墳前期の居住域は、本報告が明らかにしたように、上述の 2 地点に限られるわけではない。入院棟 II 期 (113) で前期から後期にかけて 15 軒程度が確認されている (調査室 2015、同 2017a) ほか、基幹整備 (流域⑧排水) A 区 (97-1) や、 دونالد・マクドナルドハウス東大 (101) で前期の竪穴建物が検出される (調査室 2012c・2012d) など、台地の縁辺部一帯に濃密に分布する。

さらに、クリニカルリサーチセンター A 棟 I 期 (125-1) や、隣接する国際科学イノベーション総括棟 (148) では、複数棟の古墳前期の竪穴建物に加えて、複数基の方形周溝墓の周溝が検出されている (調査室 2017b・2017c)。この周溝墓群に関しては詳細な報告を待って論じるべきではあるが、過去に示された復元案 (4 図) では、10 基程度が図示されている。

方形周溝墓群と竪穴建物の対応関係等の問題については、所属時期に関する詳細な検討が不可欠ではあるが、一步踏み込んだ理解を示すならば以下になるだろう。古墳前期には、東へ注ぐ小支谷に南北を挟まれた舌状台地上のやや北寄りの範囲に、墓域を含む集落が形成されていたと考えられる。ただし、看宿1や臨床試験棟地点で確認された外来系土器が目立つ状況は、看護職員宿舎3・5号棟地点では認められず、居住域によって様相が異なる可能性も示唆されている。

第4節 古墳時代中期以降の集落域

古墳時代中期になると、看護職員宿舎5号棟地点へと居住が集中する様子が窺える。周辺の地点に目を向けると臨床試験棟や入院棟A(23)で古墳時代中期の竪穴建物複数軒が確認され(調査室2016・2021a)、基幹整備(流域⑧排水)B区でも中期の遺構が検出されている(調査室2022)。また、筆者が土器を観察したところ、看護師宿舎ゴミ置き場(25)にも中期の遺構が認められた。

しかし、本報告5号棟地点と同程度の竪穴建物や遺物が検出された地点はなく、古墳時代中期における集落の中心は本地点付近であったと理解できる。

ここで、本報告5号棟地点と同様な時期の集落遺跡について若干ふれよう。本郷台遺跡群の周辺では、板橋区赤塚氷川神社北方遺跡(赤塚氷川神社北方遺跡発掘調査団編1989)や世田谷区喜多見陣屋遺跡(喜多見陣屋遺跡調査会編1996)に同じ時期の竪穴建物群が認められる。特に、赤塚氷川神社北方遺跡H-48号住居やH-59号住居は類似した遺物が多く出土している(5図)。

報告書では、H-48号住居が5世紀中葉～後半、H-59号住居がその一段階前の時期に属すると理解されている。前者にはカマドが採用され、出土遺物にはより後出的な土器が多く含まれる。H-48号住居からは、本報告地点SI201・SI212の所属時期を判断するうえで重視した筒抜け状の甗が出土しているが、高坏脚部の形状や不定形な埴が採用される状況はH-59号住居との類似性が高いと考えられる。総合的にみればSI201・SI212はH-48号住居と同様な時期ととらえられるが、本報告地点から出土した大形甗は甕形のみでカマドも未検出であるなど両者には差もある。各要素の採用状況とそれに基づいた所属時期の問題については、周辺遺跡の状況に目を配りながら、引き続き検討が必要である。

近年、調布市染地遺跡でも古墳時代中期の竪穴建物が10棟以上検出されており、それらのなかには炉に3つの石を配置した「三石炉」が検出され、古墳時代中期の支脚を用いた炉の使用が指摘されている(東京都埋蔵文

化財センター2023)。看護職員宿舎5号棟地点SI201との類似性が注目される。

しかしながら、東京都域では現状でも同様な時期の資料は豊富とは言えず、東京都域西部を対象とした集成研究でもこの時期の資料の少なさが指摘されている(大西2011)。

古墳時代後期になると、本郷台遺跡群では竪穴建物が集中する地点が不明確となる。Ⅱ-第V章で中期末～後期初頭の竪穴建物1軒を報告したが、同様な時期の遺構は、他の地点で検出されていない。医学部附属病院中央診療棟(4-1)でカマドをもつ古墳時代後期の竪穴住居址が1軒検出されているが(東京大学遺跡調査室1990)、両者の時期的な隔たりも考慮すると、後期の居住域の範囲は現状で不明である。

第5節 まとめ

本郷台遺跡群における弥生時代から古墳時代にかけての集落動態の概要を図に示した(6図)。内容は既に述べたため繰り返さないが、最後に、注目すべき二、三の点を指摘して本稿をまとめた。

注目すべき集落の変化の一つは、弥生時代後期後半の集落と立地を違えて古墳時代前期の集落が発達する点である。その一方で、古墳時代中期の集落が前期の集落と範囲を重複させながら形成された点は、対照的である。しかし、現状の限定的な資料から導いた、集落の立地における弥生時代後期と古墳時代前期の排他的にもみえる状況、あるいは古墳時代前期と中期の継続性は、検証が不十分であり今後さらなる検討を必要とする。

時間的な連続性に重きを置けば、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半の方が、前期前半と中期後半よりも連続的であると理解することもできるため、立地が同じであることと集落の継続性は見極めるべきであろう。

今一つ注目すべきに墓域の状況がある。弥生時代後期後半と古墳時代前期にいずれも集落に隣接するかたちで墓域が形成されている点は、本郷台遺跡群の集落の特徴としてとらえられる。本遺跡群の前期集落は、各遺構の所属時期や出土遺物について依然として不明瞭な部分が多く、本稿で他地域の集落動態と比較検討することが叶わなかったが、方形周溝墓による墓域に隣接する集落として、関東地方における古墳時代前期の集落類型の一つを代表する例となる可能性がある。

しかし、本郷台地の古墳時代前期集落の特徴を正確に把握するためには、現状で一括りとなっている「前期」の遺構・遺物が所属する時期に関する詳細な検討が不可

欠である。6図に古墳時代前期の中心的な居住域の候補となる地点をいくつか挙げたが、所属時期の細分に取り組むことでより集住域や墓域の規模や範囲、存続期間などの基礎情報を充実させ、古墳前期の集落の盛衰を具体化をふまえて類型化を進めなくてはならない。それは「弥生時代後期後半」についても同じである。

おわりに

本章では、看護職員宿舎5号棟地点SI201およびSI212出土土器の年代的な位置づけを明らかにし、既往の調査成果を整理を通じて本郷台遺跡群における弥生時代から古墳時代の集落変遷を論じた。今後に向け、二つの大きな課題をあげたい。

第一に、集落変遷を議論するために不可欠な時間軸が用意できなかったことは重大な問題であった。古墳時代中期に関しては依拠する年代観を示したものの、ほかの時期に関しては、検討の内容を十分に示さず、慣用的な時期区分の使用に止まった。分析対象が集落の推移である以上、解釈の根幹に関わる時間軸の設定は重要であるため、今後機会をあらためて論じなくてはならない。

第二の課題は、本郷台地上や周辺の台地にみられる他遺跡に関する検討である。本稿でふれられなかったが、弥生時代後期や古墳時代前期におけるほかの遺跡の様相について理解を深める必要があった。

本郷台遺跡群は、東京大学本郷地区キャンパス構内に位置するという立地の特性上、これまで広域に及ぶ調査が継続的に実施されてきた。そのため、地点同士の関係性も理解しやすく、集落動態の把握やモデル設定に適切な対象と考えられる。しかし、そのためには周辺遺跡の動向をふまえた相対的な評価が必要である。

上の二つを解消し、本郷台地の集落動態モデルを提示できた先には、視野を南関東地方へと広げ、他の遺跡の集落動態パターンとの比較を進めることも可能である。出現期古墳が築かれた地域や、大型の前方後円墳が築造された地域と、本郷台地がどのように異なるのか、古墳時代社会に対する人びとの対応の差異は、墓のみならず、各地の集落にも反映されている。その差を読み解くために、本章のような古墳時代集落の分析を積み重ねたい。

本章を執筆するにあたり、公益財団法人高梨学術奨励基金による令和3年度若手研究助成を受けた。

【引用・参考文献】

- 赤塚水川神社北方遺跡発掘調査団（鈴木敏弘）編 1989『赤塚水川神社北方遺跡(1) - 1983～1986年度発掘調査報告(その1)』文化財シリーズ 第64集 板橋区教育委員会
- 大西雅也 2011「多摩丘陵を中心とした古墳時代集落の展開」『東京考古』29
- 小沢 洋 1999「房総の古墳中期土器とその周辺」『東国土器研究』5号
- 加藤建設埋蔵文化財調査部編 2006『東京都文京区 本郷一丁目南遺跡-学校法人桜蔭学園新校舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』桜蔭学園・加藤建設
- 喜多見陣屋遺跡調査会編 1996『喜多見陣屋遺跡Ⅲ 東京都世田谷区喜多見1丁目22・23・29・32・33番の発掘調査記録』世田谷区教育委員会
- 共和開発編 2005『東京都文京区 千駄木三丁目南遺跡-（仮称）文京区立本郷図書館等建設用地埋蔵文化財調査報告』文京区・文京区教育委員会・共和開発
- 共和開発編 2007『東京都文京区 千駄木三丁目南遺跡 第2地点』東洋大学・共和開発
- 公益財団法人東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター 2023「調布市染地遺跡-第128地点（多摩川住宅商業施設建設に係る埋蔵文化財発掘調査）-」東京都埋蔵文化財センター調査報告 第374集
- 財団法人千葉県教育振興財団文化財センター編 2010『千原台ニュータウンX X V - 市原市草刈遺跡（L区）』千葉県教育振興財団調査報告 第646集 独立行政法人都市再生機構千葉地域支社・財団法人千葉県教育振興財団
- 白井久美子 2012「第1章 集落出土土器等の様相」『研究紀要27』財団法人千葉県教育振興財団
- 東京大学文学部考古学研究室編 1979『向ヶ岡貝塚-東京大学構内弥生二丁目遺跡の発掘調査報告-』東京大学文学部
- 東京大学遺跡調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1997「医学部附属病院看護婦宿舎ゴミ置き場地点埋蔵文化財発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999「医学部附属病院看護婦宿舎建設地点（Ⅱ期）発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2009『東京大学本郷構内の遺跡 浅野地区Ⅰ』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2011「本郷7 新タンDEM棟地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』7
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012a「本郷74 医学部附属病院看護師宿舎地点Ⅲ期」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012b「本郷94 分生研・農学部総合研究棟地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012c「本郷97 基幹整備（流域⑧排水）A区地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012d「本郷101 医学部附属病院ドナルド・マクドナルドハウス」『東京大学構内遺跡調

査研究年報』8

東京大学埋蔵文化財調査室 2015「本郷 113 医学部附属病院
入院棟Ⅱ期 1 次」『東京大学構内遺跡調査研究年報』9

東京大学埋蔵文化財調査室 2016『東京大学本郷構内の遺跡
医学部附属病院入院棟 A 地点 報告編《第 1 分冊》』

東京大学埋蔵文化財調査室 2017a「本郷 113 医学部附属病
院入院棟Ⅱ期 3 次」『東京大学構内遺跡調査研究年報』10

東京大学埋蔵文化財調査室 2017b「本郷 125 医学部附属病
院クリニカルリサーチセンター A 棟 1 期」『東京大学構内
遺跡調査研究年報』10

東京大学埋蔵文化財調査室 2017c「本郷 148 国際科学イノ
ベーション総括棟新営」『東京大学構内遺跡調査研究年報』
10

東京大学埋蔵文化財調査室 2021a『東京大学本郷構内の遺跡
医学部附属病院 看護職員宿舎 1 号棟地点 臨床試験棟地
点 看護職員宿舎 3 号棟地点 (1)』

東京大学埋蔵文化財調査室 2021b「東京大学本郷構内の遺跡
東京都下水道地点発掘調査報告」『東京大学構内遺跡調査
研究年報』14

東京大学理学部遺跡調査室 1989『東京大学本郷構内の遺跡
理学部 7 号館地点』

長谷川厚 1991「7 関東」石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・
白石太一郎編『古墳時代の研究 第 6 巻 土師器と須恵器』
雄山閣

長谷川厚 1998「古墳時代中期土器分析への一視点－神奈川県
内の出土例の検討から－」『神奈川考古』34 号

長谷川厚 1999「神奈川県における古墳時代中期の土器につい
て－変遷と画期の側面から－」『東国土器研究』5 号

中谷治宇二郎 1924「東大人類学倉庫跡より発見されし二個の
石器に就て」『人類学雑誌』39 巻 7-9 号

成瀬晃司 2018「先史時代の本郷キャンパス 二万数千年前の
痕跡」東京大学キャンパス計画室編『東京大学本郷キャン
パス 140 年の歴史をたどる』東京大学出版会

比田井克仁 1988「南関東五世紀土器考」『史館』20 号

福田健司・清野利明・中山弘樹 1999「東京都における 5 世紀
の土器と問題点」『東国土器研究』5 号

武蔵文化財研究所編 2005『東京都文京区 弓町遺跡第 4 地点
－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』住友
不動産・武蔵文化財研究所

山口正憲 2000「古墳時代中期の有段高杯について」『青山考古』
第 17 号

CEL 編 2020『東京都文京区 団子坂上遺跡－（仮称）千駄
木一丁目計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』野村不
動産・CEL

挿図出典

1 図 （財団法人千葉県教育振興財団文化財センター編 2010）
をもとに一部改変して再構成。

2 図 （東京大学埋蔵文化財調査室 2021a）を一部改変。

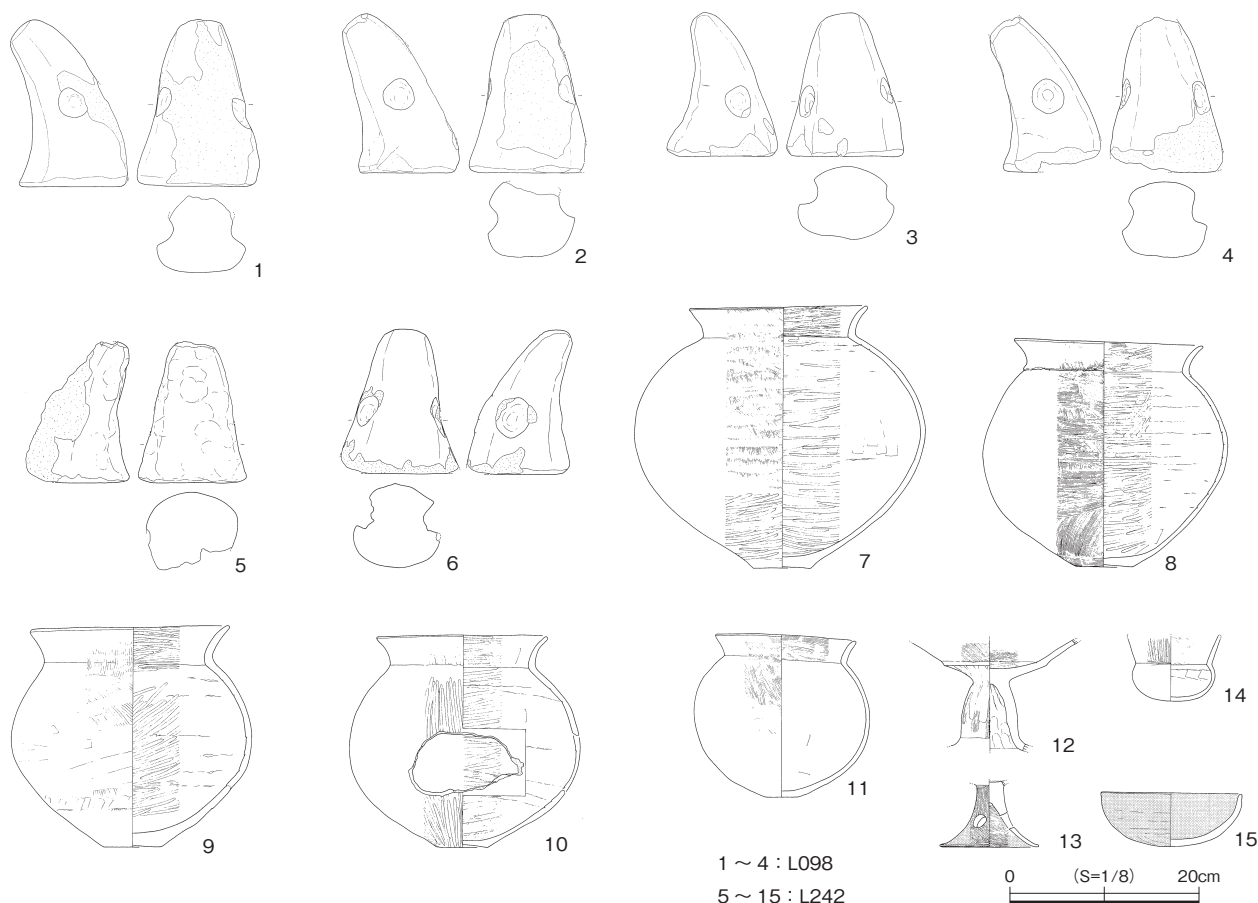
3 図 （東京大学埋蔵文化財調査室 2021a）をもとに一部改変し
て再構成。

4 図 （成瀬 2018）をもとに筆者作成。

5 図 （赤塚氷川神社北方遺跡発掘調査団（鈴木敏弘）編 1989）
を一部改変して再構成。

6 図 筆者作成。

1 表 筆者作成。



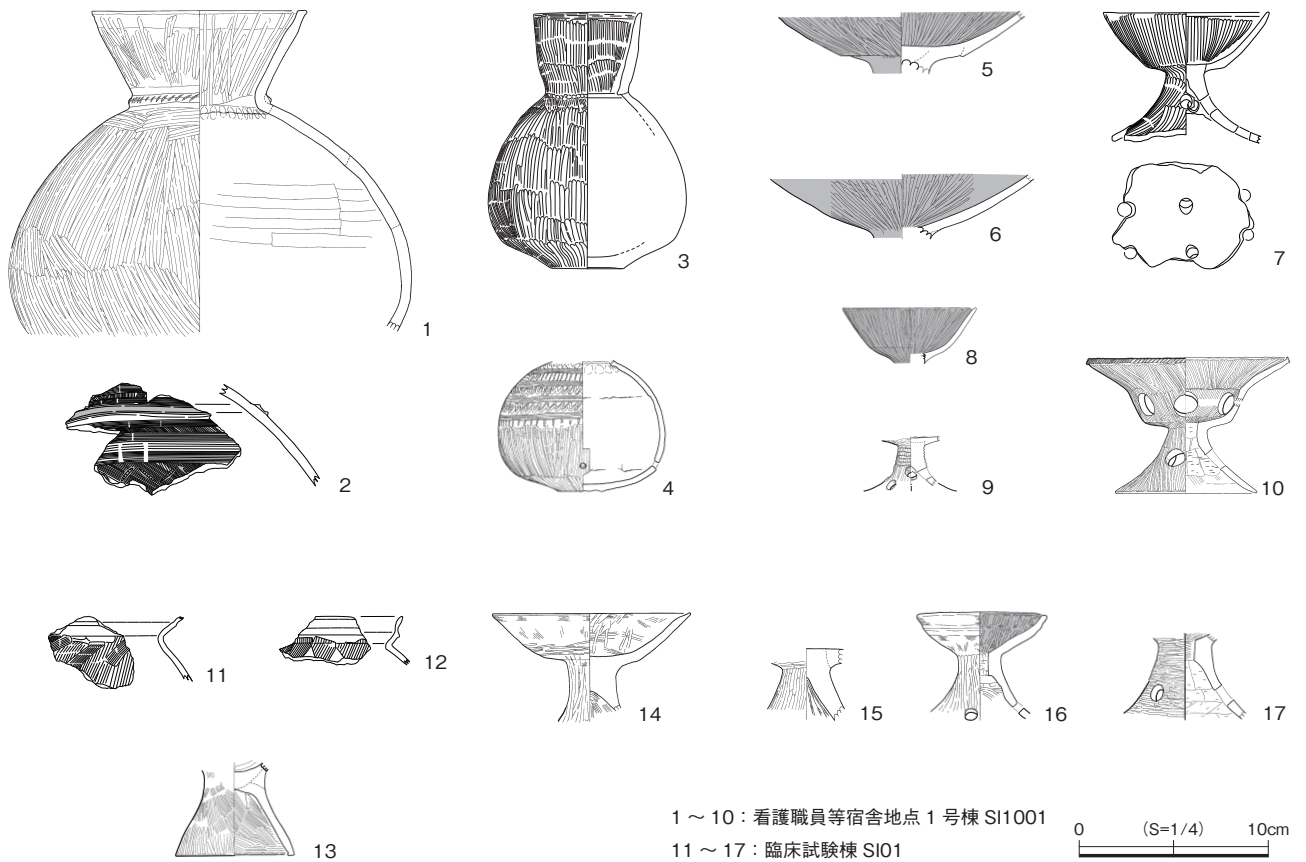
1 図 千葉県市原市草刈遺跡出土土器

1 表 本郷地区キャンパス構内の弥生時代・古墳時代の調査地点

地区	No.	地点名	遺構の時期	遺構種別
本郷地区	4-1	中央診療棟	古墳後期	竪穴建物
	19	看護職員等宿舎地点1号棟	古墳前期	竪穴建物
	21	臨床試験棟	古墳前期	竪穴建物
	23	入院棟A	古墳前～後期	竪穴建物
	25	看護師宿舎ゴミ置き場	古墳前期	竪穴建物
	48	看護職員等宿舎3号棟 (本報告)	古墳前～中期	竪穴建物
	55	第2中央診療棟	古墳後期	竪穴建物
	74	看護職員等宿舎5号棟 (本報告)	古墳前～中期	竪穴建物
	87	東京都下水道地点D区	弥生中期	竪穴建物
	97-1	基幹整備 (流域⑧排水) A区	古墳前期	竪穴建物
	97-2	基幹整備 (流域⑧排水) B区	古墳前期	竪穴建物
	101	ドナルド・マクドナルド・ハウス東大	古墳前期	竪穴建物
	113	入院棟Ⅱ期	古墳前～後期	竪穴建物
	125-1	クリニカルリサーチセンターA棟Ⅰ期	古墳前期	竪穴建物・方形周溝墓
	148	国際科学イノベーション総括棟	古墳前期	竪穴建物
277	医学部附属病院基幹整備共同溝	古墳前期	竪穴建物	
浅野地区	7	新タンデム棟試掘	古墳前期	竪穴建物
	28-c	向ヶ岡貝塚 (史跡 弥生二丁目遺跡内)	弥生後期	環濠
	30	工学部風工学実験室支障ケーブル	弥生後期	方形周溝墓
	61	工学部武田先端知ビル	弥生後期	方形周溝墓
	297	基幹・環境整備 (言問通り横断管路) Ⅱ期	弥生後期	方形周溝墓
弥生地区	94	分生研・農学部総合研究棟	弥生後期	方形周溝墓



2 図 看護職員等宿舎地点 1 号棟 (左) と臨床試験棟地点遺構配置



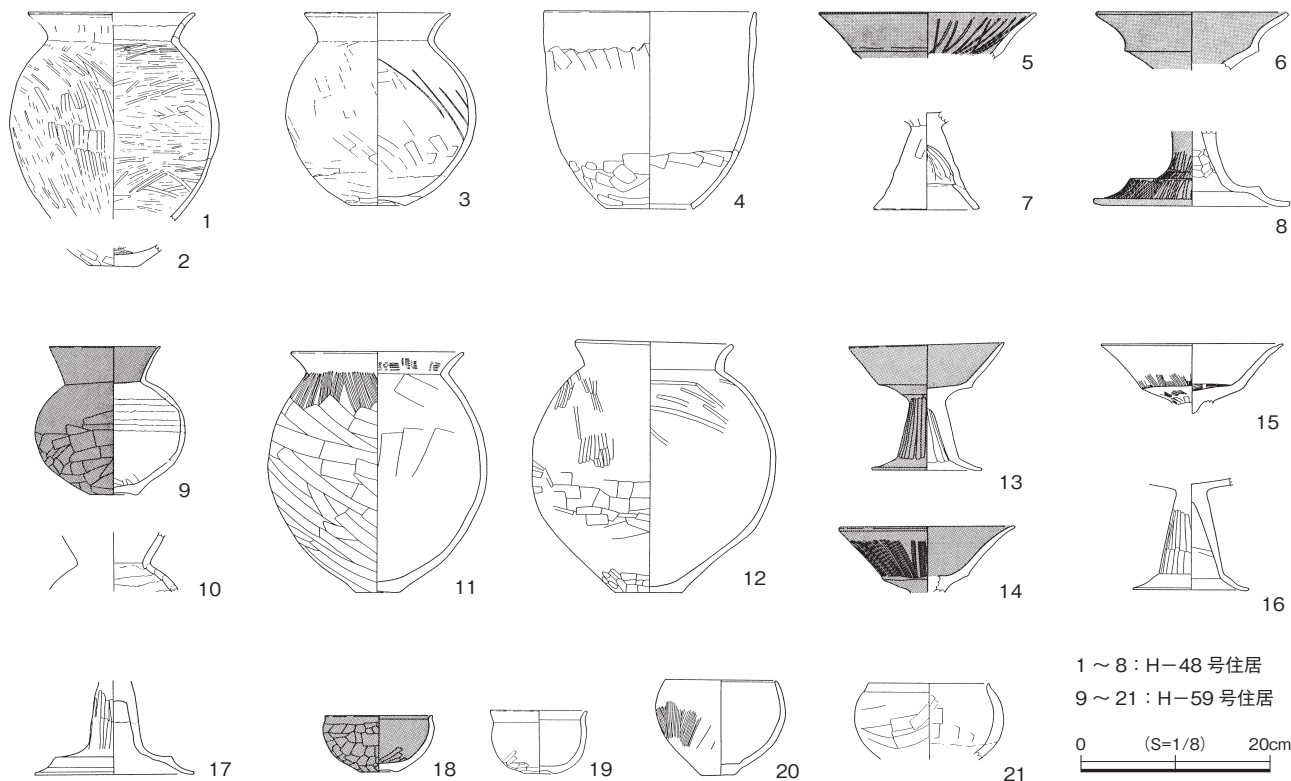
1 ~ 10 : 看護職員等宿舎地点 1 号棟 S1001
11 ~ 17 : 臨床試験棟 S101

3 図 看護職員等宿舎地点 1 号棟 (左) と臨床試験棟地点出土土器



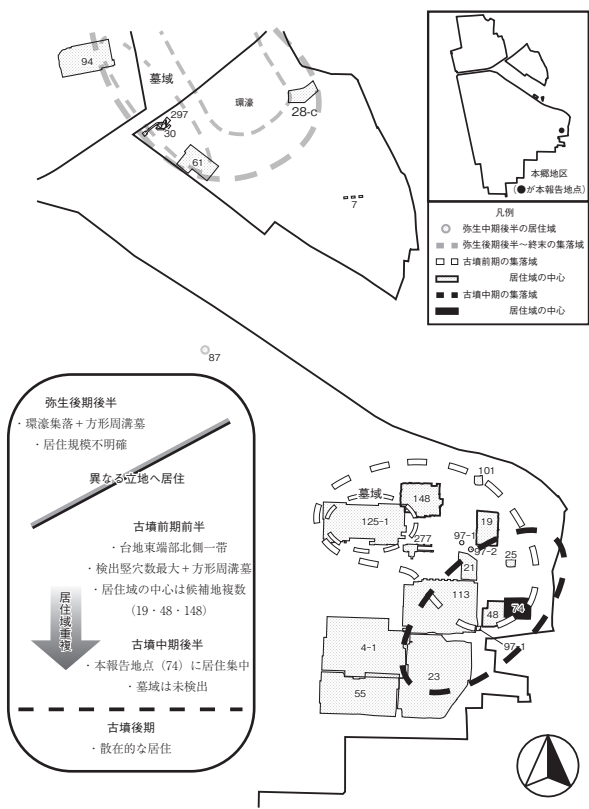
- 弥生時代中期堅穴住居
- 方形周溝墓
- 環濠
- 明治16年地形図等高線にみた環濠推定範囲
- 古墳時代前期堅穴住居
- 古墳跡(周溝)
- 発掘調査地点
- 国指定史跡 弥生二丁目遺跡

4図 本郷地区キャンパス構内の弥生時代・古墳時代遺構分布



1 ~ 8 : H-48号住居
 9 ~ 21 : H-59号住居
 0 (S=1/8) 20cm

5 図 板橋区赤塚氷川神社北方遺跡出土土器



6 図 本郷台遺跡群における弥生時代から古墳時代の集落変遷

医学部附属病院看護職員等宿舎5号棟地点の中世～近代の土地利用

堀内秀樹

はじめに

本地点は、東京大学本郷構内東端、本郷台地の東縁部にあたり、周辺ではこれまで十数地点の調査が行われ、本地点に西隣する看護職員等宿舎3号棟地点およびその北側の看護職員等宿舎1号棟地点、臨床試験棟地点の調査とそれを踏まえた富山藩邸東域の調査成果は2021年に出されている（東京大学埋蔵文化財調査室2021）。藩邸東域ならびに看護職員等宿舎3号棟地点の詳細は、それを参照されたい。本稿では、それを踏まえて看護職員等宿舎5号棟地点から確認された土地利用とその変遷について触れるものである。

1. 近世期に確認された遺構・遺物と土地利用

本地点から確認された江戸時代の遺構数は176遺構、出土した遺物はコンテナ数にして100箱であった。また、遺物が出土した遺構数は、15遺構にとどまり、この数量こそ本地点の特徴とも言え、人間の活動が活発に行われない場（庭園）の性格が反映していると考えている。こうした性格は、遺物による年代比定が困難な遺構が多く、年代的な変遷へのアプローチを難しくしている。他方、最も困難であったのが、調査時における凹凸が多い庭園関連遺構の確認であった。後述するが、本地点からは庭園に伴う苑道や多くの植栽痕などが確認されているが、当時の庭園地表面の確認はできなかった。凹凸が顕著な庭園遺跡の調査の難しさを痛感した。また、遺物出土量の少なさに加えて本地点が地形的制約と土地利用の変遷から、近世期の遺構面が確認できなかったことで、層位的に年代的変遷が追えなかった。

以下、数少ない年代が推定できる明確な遺構を中心に年代別変遷を復元した。

(1) 年代別遺構の分布

① 中世～17世紀（1図）

西隣する看護職員等宿舎3号棟地点では、D面の遺構群に該当する。本地点近代面であるA面の下位面(B面)で確認されている遺構のうち、切り合いで最も古い大型遺構がSD206であった。SD206から出土した遺物ののは

とんどが周囲の遺構を壊した際の古墳時代の土器類であった。最も新しい遺物は、2点のみであるが古瀬戸期の遺物が出土していることから、遺構の埋没が中世に遡る可能性がある（2図）。この溝は埋土も黒色土を中心とした大きな含有物が少ない埋土で構成されていたことから、当初藩邸開発初期に行ったとされる「寛永三（1626）年丙寅、始て四界に木墻を環らし」（カッコ内筆者加筆、「東邸沿革図譜」（石川県図書館協会1938）との関連性を想定した。初期の藩邸境である可能性は否定できないものの、出土遺物や医学部附属病院入院棟A地点で確認されたSR717、SR718、SR832などの複数の断面が広く開く溝状遺構との形状的類似性から、中世の遺構としてとらえておきたい。

その後、出土遺物から明確に17世紀に比定できる遺構は確認されていない。寛永16（1639）年に第3代当主前田利常が、利次と利治に分知してそれぞれ富山藩と大聖寺藩が成立する。以降、当該地域は富山藩邸として経営されることが知られるが、本地点における状況は土地利用の頻度が高くなかったことを示している。

② 18世紀（1図）

看護職員等宿舎3号棟地点では、B、C面の遺構群が該当する。調査で確認された多くの遺構からは遺物が出土していない。最も多く確認された遺構は、いわゆる植栽痕であるが、そのほとんどから遺物が出土していない。人工遺物が廃棄、使用される場ではなかったことが推定されるが、どの段階から植栽が多く植えられたのかも明確ではない。数少ない18世紀の遺物が出土する遺構にSU149がある（3図）。遺構の南側が調査区域外なので、全体の様子は復元できないが、室内部に工具痕が明瞭に残っている点や室部の張り出しが小さいことなど比較的短期間のうちに廃棄されたと思われる。出土遺物は、銘款が認められる肥前薄手半球碗（1、東大分類JB-1-f）、肥前梅樹文碗（3、JB-1-v）、高台径が大きい肥前蛇ノ目剥ぎ皿（12、JB-2-m）、瀬戸・美濃灰釉丸碗（18、TC-1-c）、瀬戸・美濃御室碗（20、TC-1-d）、「泉川麻玉」印の塩壺（51、DZ-51-m）など東大編年V a期（18世紀前葉）に比定されるもので、良質の製品も確認されるが、陶磁器の他、硯や温石なども含まれており、藩邸内の生活財で構成されている。この他、生活施設に関わる遺構などが確認できないことから、建物付近に構築さ

れた地下室ではなかったことが考えられる。18世紀後半の遺物が出土した遺構は確認されていないことから、18世紀後半には庭園であったことが推定される。

③ 19世紀 (1図)

看護職員等宿舍3号棟地点では、A面の遺構群が該当する。出土遺物から19世紀前半に下限を持つ遺構は、確認されていない。18世紀後半から引き続き生活空間とは異なった場であったと推定される。遺物が多く出土するようになるのは、東大編年Ⅷd期(19世紀中葉)である。SK59(4図)、SK60(5図)、SU82、SK97、SK106などの遺構で、これらは調査区南東部に集中している。例えば、SK59では木型打込や幅広高台の瀬戸・美濃系磁器端反碗(4、5、JC-1-d)、爛徳利(6、JC-4)、蓮華(14、JC-20)、三彩土瓶(30、TZ-34-c)、ロクロ成形塩壺(47、DZ-51-y)など幕末期の様相を呈している。また、SK19を含めて、SK59、SK60、SU82、SK97は、遺構間接合例が多く確認されていることから(遺物実測図Ⅳ-20～24図、1、2、4、5、6、11、13、14、16、17、19、20、22、23、24など)、これらはほぼ同時期に行われた廃棄行為に伴うものと考えられる。SK19は、近代遺構の遺物も混じっていたことで近代の遺構として扱った。しかし、遺物の多くはⅧd期の陶磁器であり、近代の土地造成の際に混入したか周囲の遺構の遺物が多く混入した可能性が高い。

(2) 文献史料、絵図面との対比

① 17世紀

調査地付近が描かれた初めての絵図面は、寛永期を描いた「江戸全図」(白杵教育委員会蔵)である(6図)。これを見ると加賀藩下屋敷として描かれている「松平肥前守」東側には不忍池と池西岸に「町」と道が描かれている。この道を挟んで「法界寺」と「松平式部大輔下屋敷」(榊原家、当時館林藩)が位置していた。この法界寺は、「講安寺文書」によると、京都知恩院の乗誉上人が幕府に言上して創建された寺で、現在の地へ元和2(1616)年に移ったとされる(文京区教育委員会2020)。その後、正保2(1645)年、寺域に建てられた庵(無縁寺、後の称仰院)と寺域を分け、講安寺(法界寺)、称仰院の二院が成立している。その際に表口70間を35間ずつ均等に分けられている。現在、無縁坂下から70間(127mあまり)は、たんぼば保育園(旧東京大学保育所)と講安寺門前の民地境付近で、現在も表口の境界として残っていると思われる。

当該地に始めて触れた藩邸の文献は、前述した寛永3(1626)年の藩邸の初期開発に触れている「東邸沿革図

譜」と共に「三壺聞書」の中では「草ほうほうたる小笹原に谷峯も有て、所々に番人又は下々の者のミ有て、屋敷ノ内またらに茶園してそ居たりける。先四方二塀を懸させられ、御屋形共建させ給ひ、別而寿福院様¹⁾の御屋形も立、又ハ御姫君様の御屋形、千勝様²⁾、宮松様³⁾の御屋敷も建させらる」とある。この中にかかかれている千勝様は、前田利常の次男で、寛永16(1639)年に富山藩立藩の際に初代藩主となる前田利次である。前田利次は、元和3(1617)年に生まれ、寛永8(1631)年に15歳で元服をするので、寛永3年時点では、まだ数えて10歳であった。この段階でどれほどの規模の「御屋形」であったのか?あるいは「御屋形」の場所などの詳細は不明である。前述の様に寛永16(1639)年23歳の時に分知した富山藩主となる。藩邸は、この段階から加賀藩の拝領した当時下屋敷であった本郷邸の東側を分与する形で利用しているが、当初の藩邸内部の状況は明確ではない。藩邸の外郭は、延宝7(1679)年「江戸方角安見図」に記されている(古板江戸図集成刊行会1958)(7図)。これによると加賀藩域の東側、無縁坂から一筋北に入った道から北方、不忍池沿いの道、北限が「水戸裏門」と書かれた部分に「松平大内蔵」と記されているエリアが富山藩邸に相当する。こうした点は既にいくつかで触れられているが(小松2015、宮崎2016、大成2021)、基本的な位置は幕末まで大きな変化はない。

② 18世紀

藩邸は、元禄16(1703)年、寛政5(1793)年に「全焼」と記される火災に見舞われている。元禄16年の火災は、水戸藩上屋敷内から出火したもので、富山藩邸の他、加賀藩邸、大聖寺藩邸をも全焼している。これまでの発掘調査でも加賀藩邸(3御殿下記念館地点、66薬学系総合研究棟地点)、富山藩邸(19看護職員等宿舍1号棟地点)などから焼土層や後処理遺構が確認され、広域の被害が確認されている。一方、寛政5(1793)年の火災は、小松によると「政隣記」の検討から、「焼失範囲は講安寺境内借地部分にとどまり、御殿空間については焼失を免れたと考えられる」としている(小松2015)。これまでの発掘調査では、寛政5(1793)年の火災の痕跡は確認されていないことから、小松の言及は首肯できる。

当該期の邸内の様子を描写した絵図面は確認されていないが、「文政八乙酉年十二月八日類焼前ノ分」と但し書きされた「江戸御上屋敷御殿御間続御絵図」(富山県立図書館蔵)に描かれた基本的な建物配置が、文政8年以降の絵図面と本調査区と関係する「御玄関」から東側、「大御書院」付近の位置関係が大きな変化が看取されないことから、元禄16(1703)年の藩邸焼失後に再建された

状況が、大きく変化なく幕末まで継続していると推定している。

③ 19世紀

19世紀には文政8(1825)年と弘化3(1846)年に藩邸が全焼する火災が起きている。弘化の火災後を描いた絵図面が3枚現存している。8図は、安政5(1858)年の藩邸状況を描いた「江戸御上屋敷図」(富山県立図書館蔵)をトレースしたものに看護職員等宿舍3号棟地点と5号棟地点を落としたものである。これによると両地点は、富山藩邸の東側「大御書院」東に広がる庭園部分の南側にあたる場所であることが判る。看護職員等宿舍3号棟地点における土地利用の変遷については、原、成瀬、大成によって検討されているように(原2014、成瀬2021、大成2021)、19世紀には上野の山を借景にした庭園であった。前述の様に元禄16(1703)年以降、当該域に大きな変化がないと推定されることから、18世紀以降庭園として機能していたと考えられる。

庭園の様子に関しては、原によれば松平定信が文化11(1814)年11月29日に来邸した際に「書院のあたりまで、ミナ先立てミセ給ふ。高どのも眺望よし。不バズの池ハ、こゝの為にまうけしやうにて上の山などより、はるかの家々かぎりなふミゆ。…(中略)…この庭は小堀政一のつくりしとかいふ。」とあり、不忍池と上野の山々の借景と庭園が作る景観を賞賛している(原2014a)。松平定信が書院から見た景観の配置は、西から書院→庭→不忍池となり、これは、定信が訪れた時期から「江戸御上屋敷図」に描かれている状況が、文政8年以前にも大きく異っていないことを物語っている。

(3) 庭園関連遺構について

9図は両地点から確認された植栽痕、苑道、塀(ピット列)の分布状況である。1節で触れたように5号棟地点では17世紀の遺構はほとんどなく、多く確認されている植栽痕と推定される円形土坑は、調査区が庭園として整備された元禄16(1703)年以降と考えられる。本節では、庭園関連遺構について、看護職員等宿舍3号棟地点、5号棟地点の遺構検出状況から検証したい。

看護職員等宿舍3号棟地点と5号棟地点では、植栽痕と推定される円形土坑の分布状況に大きな違いが認められる。5号棟地点では、図示した21遺構が植栽によるものと推定しているが、その分布は、調査区東域と南域に集中しており、北西側から確認されたものは、SK325、SK332など少数であった。また、植栽痕の規模をみると東側のSK71が長径380cm、SK113が直径310cm、SK55が長径300cm、SK87が長径270cm、

SK128が直径260cm程度と3m近くある大型の遺構であるのに対して、西側ではSK325が直径110cm、SK162が直径120cm、SK332が直径100cm、SK304が直径130cm、SK384が直径130cmと1m強程度であった。一方、3号棟地点では、植栽痕が非常に少なく、富山藩邸と大聖寺藩邸境となる支谷へと続くSX1以北の庭園範囲ではSK38-1、SK38-2、SK75の3遺構のみであった。これらは調査区南東際で確認された遺構で、詳細は復元できなかったものの、絵図面では庭園から「御作事所」、「大工固家物置」、「畳方細工所」、「呉服御土蔵」などと書かれた屋敷内の建築営繕などを所轄する空間へ降りる階段が設置されている位置にあたる。

植栽痕以外には、5号棟地点南壁に沿って出土した1号ピット列は、支谷へと続く崖線際、庭園との境に設けられたものである。このピット列は、書院からの眺望について「左右の視角は塀によって遮られる」(原2014b)と作庭に関わる原の指摘のように不忍池南畔に連なる池之端や茅町町屋を遮蔽する南側塀に該当すると考えており、絵図面にも庭園南崖線上に東西に延びる塀が描かれている。9図は、5号棟地点の1号ピット列、3号棟地点のSX1の位置を基準に、崖線(土手)を看護職員等宿舍1号棟地点、3号棟地点の報告や考察で使用した合わせ図よりやや南に下げた位置に補正した(9図灰色のトーン部分)。塀の構造は小型のピット列ということで、板塀、竹垣などのそれほど堅牢なものではなかったであろう。また、5号棟地点北側から確認されたSD70は硬化面を伴う溝状遺構であり、溝底より約数cm上には硬化面が貼られ、道としての機能を有していたと考えられる。南に向かって徐々に標高が上がっており、同様の硬化面が確認された南側にあるSK80の方へ向う坂道となっていた庭園の苑道と推定される。

上記、遺構の検出状況から、以下のような景観が復元できる。庭園南境界には遮蔽のための塀を設置し、庭の東域が濃密で大型樹木(高木か)を中心とした植樹域を形成するのに対し、南域・中央は小型樹木(低木か)が配されている。庭園の苑道は樹木を避けて、高低差を持って作られている。おそらく中央には園池が備わった回遊式の庭園であると思われるが、発掘調査では確認できなかったことから、看護職員等宿舍3号棟地点、5号棟地点の北側にあったと推定される。

(4) 小結

これまで看護職員等宿舍5号棟地点を中心に、出土した遺構、遺物の状況と関連した史料や絵図面などに触れてきたが、これらをまとめると以下のような土地利用プ

ロセスが復元される。

① I 段階

—藩邸の活動域の中心的な場ではなかった段階—

看護職員等宿舍1号棟地点では、17世紀から遺構や遺物量が多く出土し、遺構の主軸方位も固定化、複数の井戸の存在など、建物を含めた藩邸の居住空間的な様相が看取されている。また、元禄16(1703)年の火災による焼土層の形成も建物に隣接する場であったと考えられる。また、西接する3号棟地点では、総括においても大成が言及しているようにD面、C・D面の遺構検出状況は、北域と南域とで濃淡と年代的ラグがあるものの、居住空間が北域から南域に広がる状況が看取されている(大成2021)。

これに対して5号棟地点では、生活空間を想起させる遺構や遺物の量も少なく、藩邸東端の空閑域であったと推定される。

② II 段階

—藩邸庭園として利用されていた段階—

元禄16(1703)年の火災後に屋敷の大きな変化があったと思われるが、再建後の状況は絵図面によっておおよその推定が可能である。他方、5号棟地点の調査で確認された多くの庭園関連遺構と西隣する3号棟地点の状況—庭園に関わる樹木の配置や苑道など—の存在から土地利用が復元できた。近世末には東大編年VIII d 期に比定できる多くの遺物が出土した遺構群が確認されている(3号棟地点SK2、5号棟地点SK59、SK60など)。これらから出土した遺物は、内容を見ると生活道具としての使った陶磁器類と推定でき、火災などのダメージを受けていないにもかかわらず多量廃棄を行っていた。これは、小松によると慶応4(1868)年4月に新政府が富山藩に対して問い合わせた江戸藩邸の人数の回答が「10人ばかりで彼らも追々帰国予定」であったことを指摘しているが(小松2015)、この段階で、上屋敷のみならず江戸藩邸はほぼ人はいなかったことが判る。ここには動物遺体も一定量出土していることから幕末期には庭園の一部をゴミ廃棄の場に利用し、幕末～近代初頭の藩邸退去時に所持していた道具類を廃棄土坑を掘って埋めたものと推定される。

2. 近代初期の土地利用

(1) 確認された面、遺構、遺物

看護職員等宿舍5号棟地点、標高約12.2(南東隅)～12.9m(北西隅)からA面と命名した近代初期の硬化面が確認された。面はおおむね平坦で、緩やかに北西か

ら南東方向に傾斜を有していた。B面と命名した近世面より20～30cm上であったが、調査区東側(E2区、E3区周辺)はやや深度を有していたが、近世面からそれほど盛土が厚くなかったことから、藩邸時代の庭園の地形を盛り上げて平坦な場としたと推定された。また、中央には平石(SX14、SX181)、立石(SX36)、飛石(1号石列、SX11～13、15～17、37、38)などが確認された(II-4図)。これらの検出もほぼフラットで、当該期の生活面が起伏がない地形であることが傍証された。飛石の一つとして使われていたSX13は、いわゆる織部灯籠、キリシタン灯籠と呼ばれる竿石で、その下部にアーチ型の窓が掘られている。灯籠石が飛石に転用されている例は知らないが、藩邸内にあったものが近代に入って庭園を整理する際に取り外されて、転用した可能性も考えられよう。

一方、調査区中央から南東域にかけて40基の動物骨が集中して出土したピットが確認されているが、これら動物骨は、ウサギ、イヌなどが中心で、その量や特定の種に偏在することから実験動物と考えられる。加賀藩本郷邸は、近代になると帝国大学として利用されるが、当該地は、明治6(1873)年東京医学校の移転以降、現在まで医学部の利用地であった。ピットからは動物骨以外年代の推定ができる遺物が出土していないことから、これらの廃棄年代は不明である。

(2) 文献史料、絵図面、写真との対比

前にも触れたが、慶応4(1868)年4月、新政府は富山藩に江戸藩邸の人数を調査させている。10人ばかりとの富山藩の返答からは、幕末段階で藩邸内にほとんど人がいなかったことになる(小松2015)。江戸城開城後の5月の上野戦争ではこうした中で行われたことになる。東京府は、明治4(1871)年6月に加賀藩に対して上地を行い、富山藩邸もこの時点で東京府の管轄となった。先述した明治6(1873)年6月に東京医学校に引き渡される時点で既に外国人教師館も建設されていた(森2018)。初期の当該地を描いた絵図が『東京大学医学部一覽 明治13-14年』に掲載されている(東京大学医学部1880)。刊行年が明治13(1880)年であることから、この段階の様子が看取される(10図)。ここに描かれている「別課醫學教場」と書かれた建物は、富山藩邸の表御殿であったものを、近代に入っても医学部や法学部が明治26(1893)年まで利用したものである。表御殿の東側にあった庭の位置はほぼ藩邸時代を踏襲しているように思われるが、眺望の為の南北の塀は、北側は確認できるものの南側は描かれていない。また、大書院は同書に書かれた利用図によると「教場」として利用されて

いたようであるが、ここから南東端に向かって飛石状に石が連なっている。庭園の北、東、南側は緑色の着色がされ（図では薄い斑点）、樹木域を表している。この庭の北側には「教師館」と書かれた建物があり、この建物が明治9（1876）年、御雇外国人教師として東京医学校に招かれたベルツが居住した家である。11図は明治16（1883）年、陸軍参謀本部による「東京府武蔵國本郷區本郷本富士町近傍」では、園池を含む庭園が別課医学教場より北域に認められ、「ベルツの庭」として有名な記述は、この庭園の北側、彼の居住区付近と考えられる。『ベルツの日記』（エルウィン・ベルツ、菅沼竜太郎訳、岩波文庫）によると、明治9（1876）年6月26日に東京医学校に赴任したベルツが居住する外国人教師の住居を以下のように書いている。「さしあたり前任者ヒルゲンドルフ博士の客分としてこの家へ迎えられたのです。この住居はいわゆる加賀屋敷、すなわち旧加賀侯の邸宅である大学の構内にあります。…（中略）…この家の庭は、老樹の木立があって非常に楽しいので、これを自分の趣味どおりにしつらえることのできる日を、今から楽しみにしています」。つまり明治9年には、既に庭付きの外国人教師館が建っているが、明治7（1874）年11月に文部省から東京医学校に本郷の地が引き渡された後、程なく建てられてものと考えられる。この測量図には所々標高が記載されており、対照することができる。現在池之端門から上がってくる道付近には小さい谷筋があり、低いところは11.5、庭がある付近では12.3、別課医学教場の北側が14.8と書かれている。発掘調査で確認されたA面の標高は約12.2（南東隅）～12.9m（北西隅）であり、この記載と描かれている等高線表記と矛盾しない。また、ここでは「別課生教場」と書かれた旧富山藩御殿の下に「動植物学実験場」と書かれている。東京大学では、明治13（1880）年からのキャンパスの建物変遷図が保管されている。これを見ると、明治13（1880）年の図には上記のように「別課醫學教場」、明治19（1886）年が「(医)別課醫學教室」、明治24（1891）年～25年が「法科大學仮教室」と用途は一定ではない。その後、明治26（1893）年には、別科医学教場の移転と小児科病室、小児科・産科婦人科病室、婦人科病室が新しく完成し、明治30（1897）年までには、教師館が撤去され、付近の土地利用は大きく変化した。

(3) 小結

以上の分析により、A面は近代前半の庭部分に該当し、これは藩邸時代の庭園をベースとして盛土を行いある程度平準化を行った上で、飛石を配する構造であった。

この景観は、富山藩邸が収公された明治4（1871）年以降、明治13（1880）年までの間に行われたと推定される。また、当初別課医学教場として使われた建物が、移転までに用途が変化している状況も見られた。特に「動植物学実験場」と記された明治16（1883）年前後までに動物骨の廃棄場として利用されている可能性が高いと考えている。現在付近の標高は、15.3m程度であり、この間に2m以上の盛土がされている。この盛土された時期であるが、明確にできなかった。A面で確認された遺構の中で最も新しい時期の廃棄は、SK40である。遺物の中にいわゆる統制番号が付されているものやクロムの顔料を用いたいわゆる国民食器類が含まれていることから太平洋戦争を含む時期まで機能していた可能性がある。

おわりに

ここでは看護職員等宿舍5号棟地点を中心に発掘調査と文献、絵図面などの情報を用いて近世～近代の土地利用とその変遷について触れた。上記のように発掘調査で得られた遺構、遺物の情報量はそれほど多くはなかったが、先行して行った19看護職員等宿舍1号棟地点、48同3号棟地点、21臨床試験棟地点などと合わせて評価を行うことによって、庭園を中心とした富山藩邸の様相の一端が明らかにすることができた。その後、富山藩邸内の調査は、113医学部附属病院入院棟Ⅱ期（表御殿エリア）、125クリニカルリサーチセンターA棟（御殿、馬場、詰人空間エリア）、148国際科学イノベーション総括棟（御殿エリア）などの建築に伴う事前調査を行っている。これらを踏まえて成果発信を行いたい。

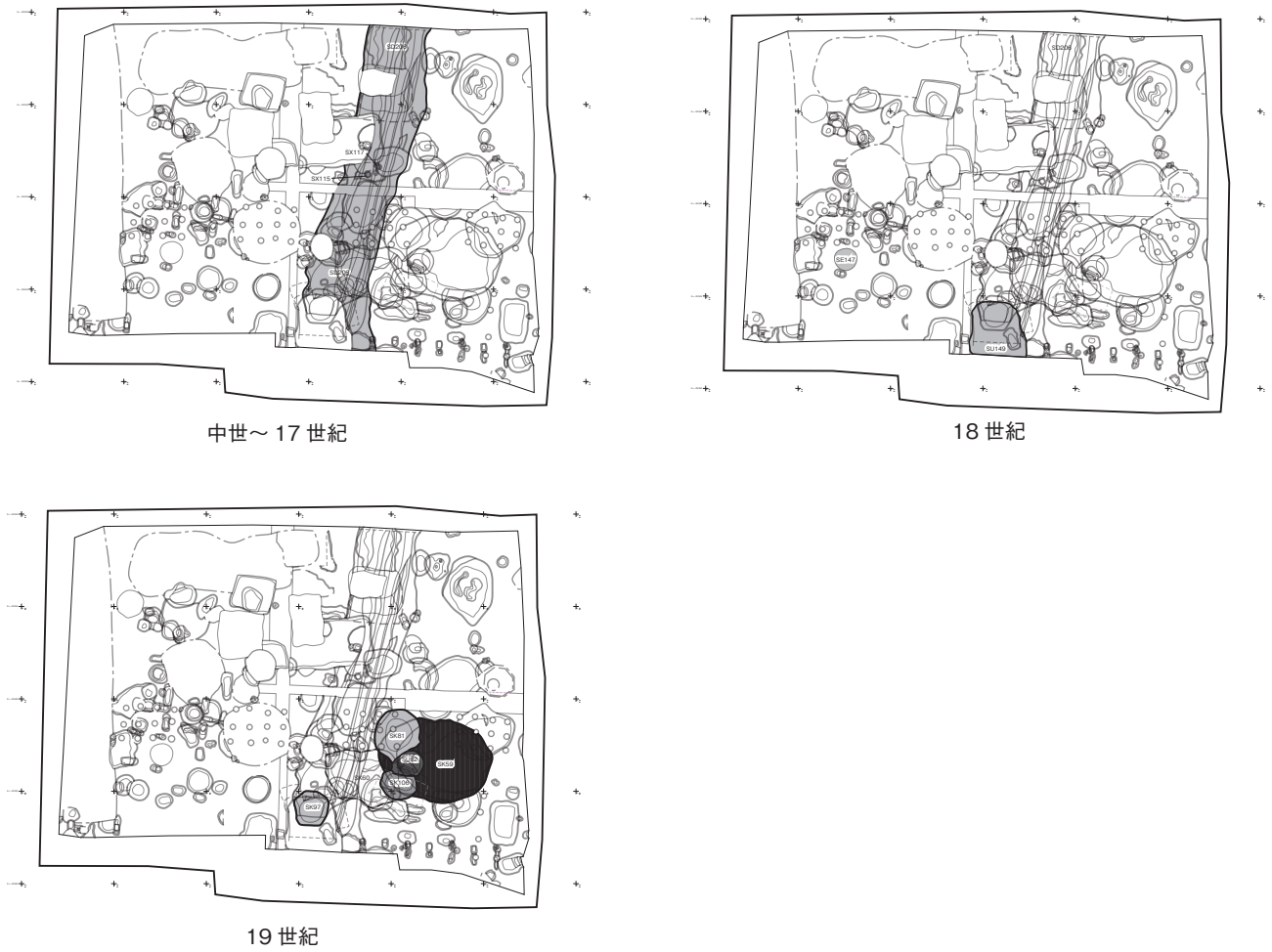
【註】

- 1) 前田利家の側室千代。利常の生母。
- 2) 前田利次。前田利常の次男。初代富山藩主。
- 3) 前田利治。前田利常の三男。初代大聖寺藩主。

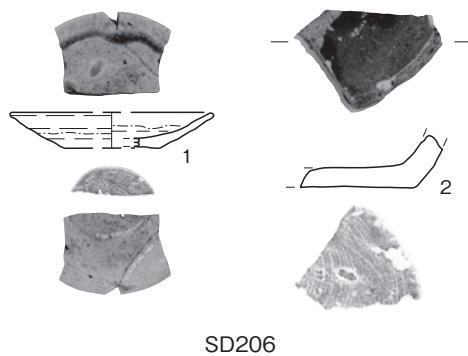
【引用・参考文献】

- 石川県図書館協会 1938 「東邸沿革図譜」『景周先生小著集』
 江戸文化資料刊行会 1970 万治年間江戸測量図
 大成可乃 2021 「藩邸内斜面地における空間利用について」
 『医学部附属病院看護職員等宿舍1号棟地点・臨床試験棟
 地点・看護職員等宿舍3号棟地点(1)』東京大学埋蔵文化
 財調査室
 金行信輔 2007 『寛永江戸全図』之潮
 古板江戸図集成刊行会 1958 『古板江戸図集成』

- 小松愛子 2015 「文献・絵図資料にみる富山藩江戸屋敷」『東京大学構内遺跡調査研究年報9』東京大学埋蔵文化財調査室
- 東京大学医学部 1880 『東京大学医学部一覽 明治13-14年』
東京大学総合研究博物館 2011 『弥生誌－向岡記碑をめぐって－』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999 『東京大学構内遺跡調査研究年報2』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2015 『東京大学構内遺跡調査研究年報9』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2016 『医学部附属病院入院棟A地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2017 『東京大学構内遺跡調査研究年報10』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2021 『医学部附属病院看護職員等宿舍1号棟地点・臨床試験棟地点・看護職員等宿舍3号棟地点(1)』
- 成瀬晃司 2016 「加賀藩本郷邸における斜面地開発と変遷－入院棟A地点1区の調査成果を中心に－」『医学部附属病院入院棟A地点 研究編』東京大学埋蔵文化財調査室
- 原祐一 2014a 「富山藩邸庭園の造園と借景に関する一考察」『平成26年度日本造園学会関東支部大会事例・研究報告集』第32号
- 原祐一 2014b 「Ⅲ 富山藩江戸藩邸の庭園を巡る」『富山市教育委員会埋蔵文化財センター所報15 富山市の遺跡物語』
- 文京区教育委員会 2020 『文京区史料集 講安寺文書(改訂版)』
- 宮崎勝美 1994 「大名藩邸の境界装置－表長屋の成立とその機能－」『武家屋敷 空間と社会』山川出版社
- 宮崎勝美 2016 「江戸時代の文献・絵図史料からみた入院棟A地点」『医学部附属病院入院棟A地点 研究編』東京大学埋蔵文化財調査室
- 森朋子 2018 「東京医学校の本郷移転」『東京大学本郷キャンパス140年の歴史をたどる』東京大学出版会編
- 本郷區役所 1937 『本郷區史』



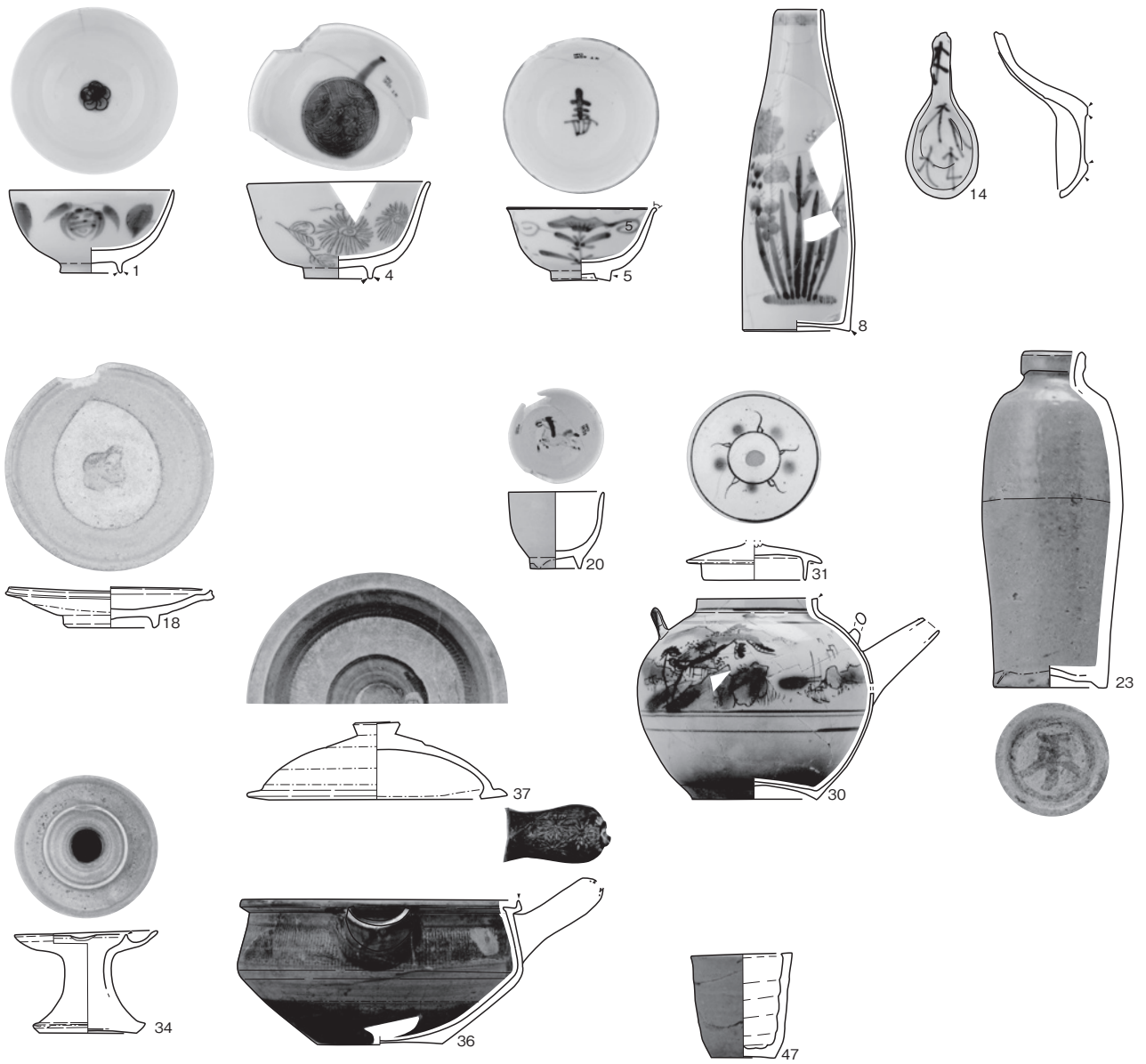
1 図 年代別の遺構分布



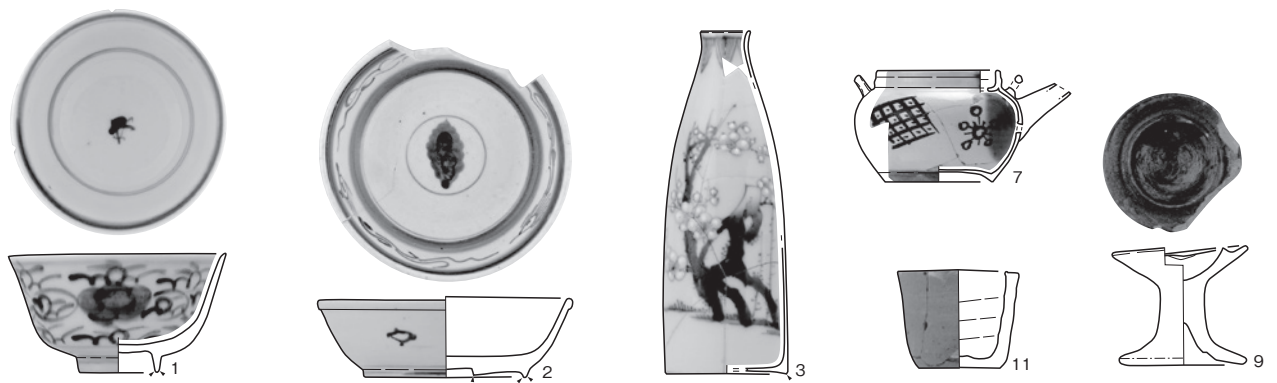
2 図 SD206 出土遺物 (S=1/4)



3図 SU149出土遺物(S=1/4)



4図 SK59 出土遺物 (S=1/4)



5図 SK60 出土遺物 (S=1/4)



〔江戸全図〕(臼杵市教育委員会所蔵に一部加筆)

6 図 寛永期の加賀藩本郷邸周辺



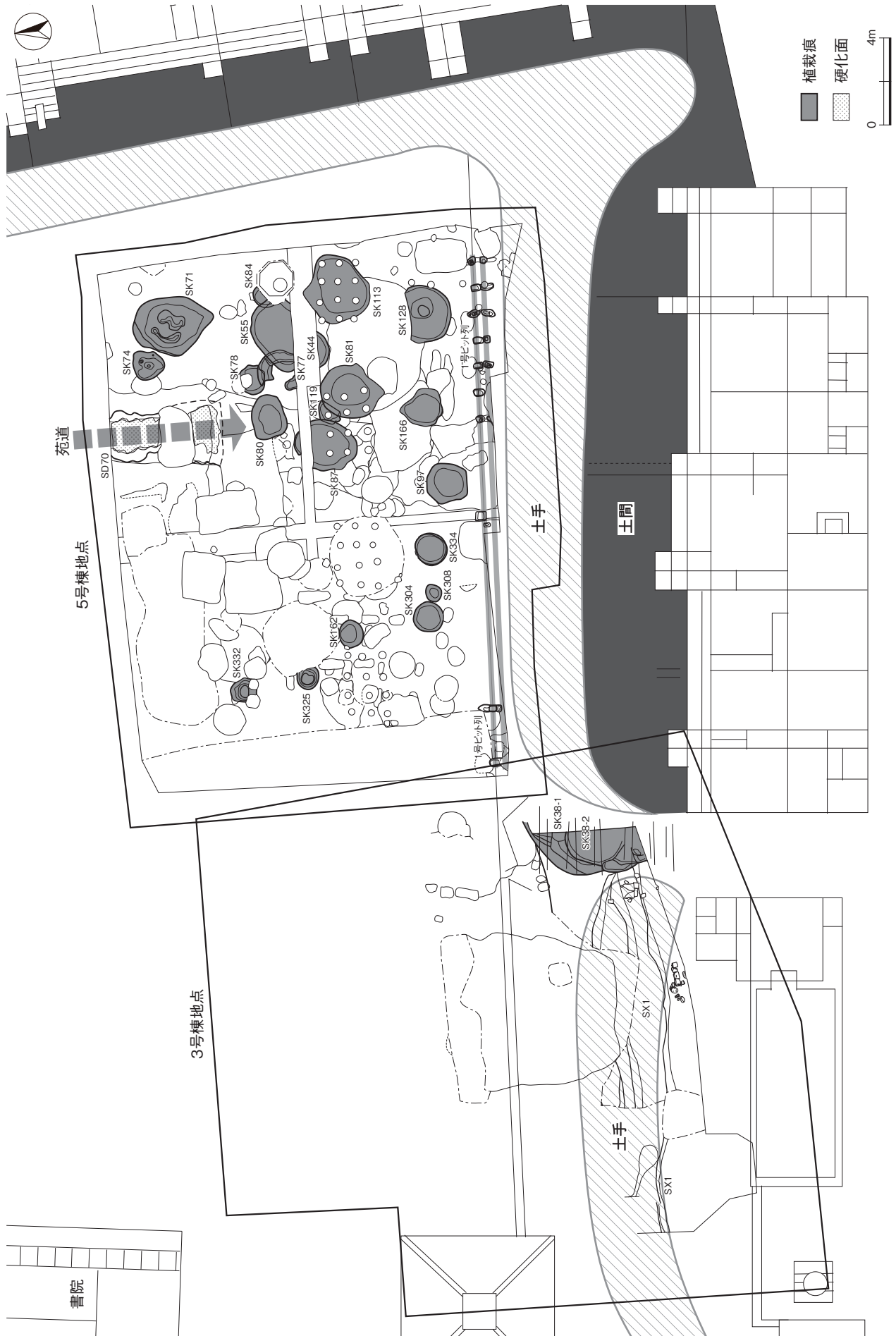
〔江戸方角安見図〕(延宝7(1679)年)

7 図 延宝期の富山藩上屋敷



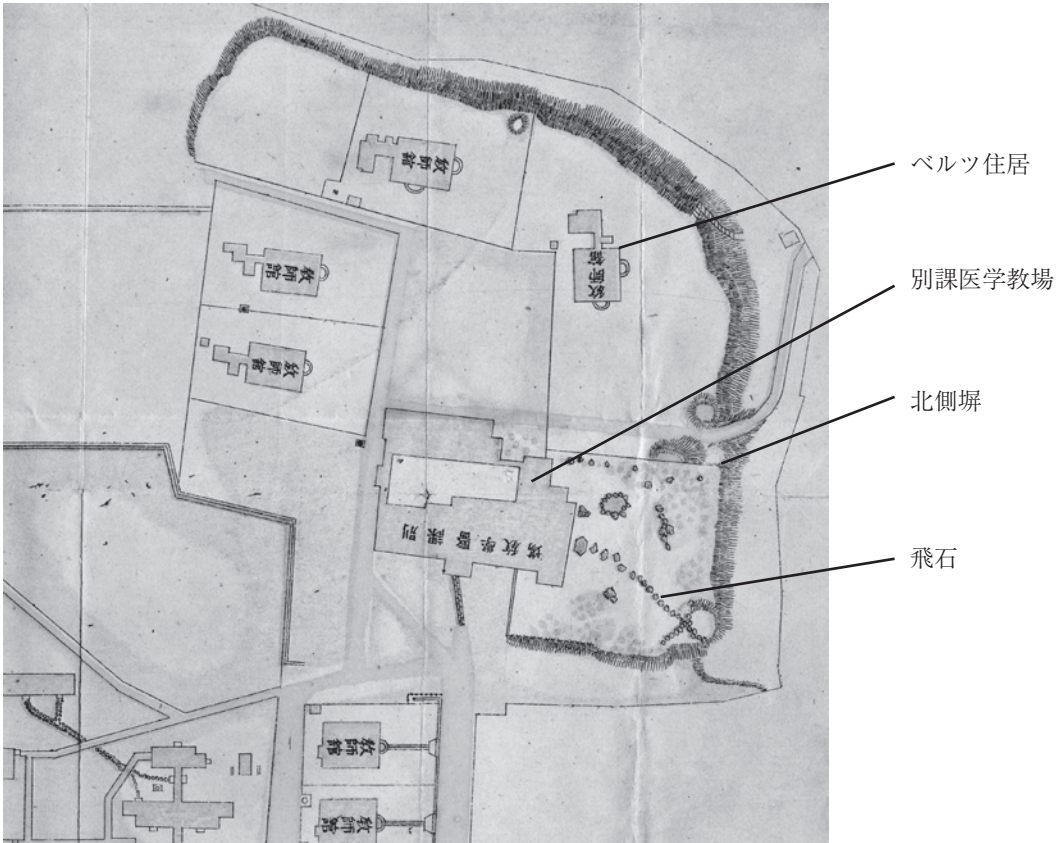
- 19 看護職員等宿舎 1号棟地点
- 21 臨床試験棟地点
- 48 看護職員等宿舎 3号棟地点
- 74 看護職員等宿舎 5号棟地点

8 図 「富山藩御上屋敷図」(富山県立図書館蔵をトレース)と本調査地点とその周辺



9図 SE149 出土遺物 (1/4)

9図 庭園関連遺構の分布



10図 『東京大学医学部一覽 明治13-14年』(部分に一部加筆 東京大学医学図書館蔵)



11図 『東京府武蔵國本郷區本郷富士町近傍』(部分に一部加筆)

医学部附属病院看護職員等宿舎5号棟地点出土の動物遺体

阿部常樹・高橋怜土

はじめに

本調査地点の動物遺体は、まず、ウサギ科を主体に哺乳類骨がまとまって出土している遺構（以下、ウサギ科骨集中検出遺構）に関しては、現場にて土壌ごとサンプリングをおこない、その後、最小で1mm目までの篩を用いた水洗選別法によって採取された（水洗選別法）。それ以外のものは、発掘調査現場にて調査担当者が目視で確認できたものを任意で採取してきたものである（ピックアップ法）。以上の方法で採取された動物遺体は、阿部と高橋が整理・分析をおこなった。その後、図表作成は阿部と高橋が分担で、執筆は阿部が中心におこなった。なお、ウサギ科骨集中検出遺構（2表）は39か所（遺構内37+外2）で、その資料総重量は23.7kgと膨大な量であった。そのため、整理期間の都合上、SK18(5.24kg:22.2%)のみ全量の分析をおこない、他の遺構のものは、ウサギ科と「モルモット」以外の動物遺体を抽出して分析をおこなうに留めた。以上の整理の結果、29群の動物遺体が確認された。内訳は、貝類が14群、魚類が4群、鳥類が4群、哺乳類が7群であった（1表）。以下、詳細な報告は、以上のカテゴリーごとにおこなう。

1. 貝類（4表）

1-1. 計数方法

貝種組成は最小個体数で提示する。なお、計数方法は以下のとおりである。巻貝類は基本的に殻高が2分の1以上残存している資料を計数対象とした。しかし、アワビ類など殻口部分が広くそれによって形状が笠・皿形のもの、殻頂部分が残存している資料を対象とした。

二枚貝類は、殻頂部分の残存している資料を計数対象とし、それらを左殻と右殻に分類してからそれぞれ計数した。そして、そのうち多いほうを最小個体数とした。

以上の計数対象以外の資料は、「破片」として一括して扱った。なお、各サンプルの分類群内において、計数対象資料が残存せず「破片」のみである場合は、一括して1個体として計数をおこなった。

ハマグリに関してはサイズによる料理の使い分け（桜井1986）や、採集場所の違い（阿部2003）が指摘されている。そこで、殻長50mmを基準にそれ未満（中小型）と以上（大型）に分けて計数をおこなった。

1-2. 分析結果

14種543個体が出土している。最も多いのがハマグリで264個体出土し、全体の48.6%を占める。次いで、ヤマトシジミが多く158個体出土し、29.1%を占める。さらに、アサリ（72個体・13.3%）とサザエ（35個体・6.4%）が比較的多く出土している。その他にマダカアワビ（4個体・0.7%）、アカガイ（2個体・0.4%）、カワニナ、アカニシ、ボウシュウボラ、イワガキ?、サルボウガイ、シオフキガイ、ミルクイ、イタヤガイ（各1個体・0.2%）が出土している。

なお、ハマグリは、「中小型」が223個体で41.1%を占めるのに対して、「大型」が41個体で7.6%である。

1) SK19: 6種33個体が出土している。最も多いのがハマグリで20個体出土し、全体の60.6%を占める。その他に、ヤマトシジミ（5個体・15.2%）、アサリ（4個体・12.1%）、マダカアワビ（2個体・6.1%）、ボウシュウボラ（1個体・3.0%）、サザエ（殻破片・3.0%）が出土している。ハマグリの内訳は、「中小型」が16個体で48.5%、「大型」が4個体で12.1%をそれぞれ占める。なお、ボウシュウボラは、殻頂部分が欠損していることから、笛であった可能性も推測される。

2) SK59: 9種312個体が出土している。最も多いのがハマグリで197個体出土し、全体の63.1%を占める。次いで、ヤマトシジミが多く91個体出土し、29.2%を占める。さらに、アサリが15個体で4.8%を占め、比較的多く出土している。その他にサザエ（4個体・1.3%）、カワニナ、サルボウガイ（1個体・0.3%）、アカガイ（左殻1点・0.3%）、ミルクイ、イタヤガイ（右殻1点・0.3%）が出土している。ハマグリの内訳は、「中小型」が169個体で54.2%、「大型」が28個体で9.0%をそれぞれ占める。

・上層: 9種312個体が出土している。最も多いのがハマグリで194個体出土し、全体の63.4%を占める。次いで、ヤマトシジミが多く90個体出土し、29.4%を占める。さらに、アサリが14個体で4.6%を占め、比較的多く出土している。その他にサザエ（3個体・1.0%）、カワニナ、サルボウガイ（1個体・0.3%）、アカガイ（左殻1点・0.3%）、ミルクイ、イタヤガイ（右殻1点・0.3%）が出土している。ハマグリの内訳は、「中小型」が167個体で54.6%、「大

型」が27個体で8.3%をそれぞれ占める。なお、イタヤガイの右殻は、殻の後半分に径5mm程の2つの正円の穴が開いていることから食物残渣ではなく貝杓子である。

3) SK60: 5種79個体が出土している。最も多いのがヤマトシジミで36個体出土し、全体の45.6%を占める。次いで、ハマグリが多く25個体出土し、31.6%を占める。さらに、アサリが15個体で19.0%を占め、比較的多く出土している。その他にサザエ(2個体・2.5%)、イワガキ?(右殻1点・1.3%)が出土している。なお、ハマグリは、そのほとんどが「中小型」で24個体(30.4%)出土しており、「大型」のものはわずかに右殻1点(1.3%)である。「大型」のものは、採集時や廃棄後などに混ざりこんだもので、サイズを意識して持ち込み利用されたものではないことが推測される。

4) SU149: 6種60個体が出土している。最も多いのがアサリで27個体出土し、全体の45.0%を占める。次いで、サザエが多く25個体出土し、41.7%を占める。その他にハマグリ(4個体・6.7%)、ヤマトシジミ(2個体・3.3%)、アカガイ(1個体・1.7%)、シオフキガイ(左殻1点・1.7%)が出土している。ハマグリの内訳は、「中小型」が右殻3点で5.0%、「大型」が1個体で1.7%をそれぞれ占める。

2. 脊椎動物

2-1. 分析方法

同定に際して、阿部所蔵の現生標本を用いた。

まず、綱より下位まで同定可能な部位を「同定対象資料」として抽出した。綱より下位の同定が困難な部位は「同定対象外資料」として対象からはずした。なお、同定対象外資料には計数困難な細片も含まれており、表中では“○”、文中では“+a”と表記し、その上で計数はおこなわなかった。また、それ以外の「同定対象資料」の内、同定するための特徴的な部分が欠損しているために同定することのできなかった資料は「同定不可」と記載した。さらに、一致する現生標本が手許になく、調査期間の関係などから同定に到らなかった資料は「未同定」と記載した。一連の作業を経て、綱より下位まで同定できたものを「同定資料」とした。組成は破片数で提示する。なお、魚類の分析方法は樋泉(1999)に準拠する。

イヌのサイズ計測定義は、Driesch(1976)に基づく。また、体高推定式は、山内(1958)を用いた。

イヌの齢査定には、歯の萌出時期に関して森(1930)、四肢骨骨端の閉鎖時期に関して浅利(2003)を用いた。

2-2. 分析結果

2-2-1. 魚類 (5表)

68点の魚類遺体が出土した。その内、76.5%にあたる52点が同定対象外の資料であった。なお、同定対象外とした資料の内、SK19の40点は鱗棘でマグロ属のもの可能性が推測される。以上の同定対象外とした資料を除く16点(23.9%)に関して、綱より下位まで同定をおこなった。以下、同定資料内で組成比率を算出する。

同定の結果、4群が含まれていた。マグロ属が12点で最も多く、全体の75.0%を占める。その他に、ブリ属(2点・12.5%)、マダイ、ヒラメ(各1点・6.3%)が出土している。マダイとヒラメの出土しているSK19とブリ属の出土しているSK59は19世紀前葉から中葉とされている。つまり、近世に属するものと推定される。その他の遺構・場所より出土しているもので科より下位まで同定できたものは、マグロ属のみである。マグロ属は尾椎のみで構成されており、さらにその内、5点が尾鰭椎前椎体である。つまり、尾に近い部分、魚市場でも廃棄されるような部分が持ち込まれている。特に尾鰭椎前椎体は、A層とB層の遺構外とA面のSX31から出土している。近代以降、学内で学生らによって食されたものとも推測される。

2-2-2. 鳥類 (6表)

8点の鳥類遺体が出土した。すべて、同定対象資料であった。

結果、4群が同定された。詳細には、ガン族[マガン]、ハト科(各2点・25.0%)、キジ科、カモ亜科(各1点・12.5%)が含まれていた。なお、SK19の右手根中手骨1点と四肢骨骨幹(破片資料:併せて「1点」と計数)が同定不可(25.0%)であった。

SK19のマガンの右肩甲骨及びガン族の右鳥口骨、さらに同定不可とした右手根中手骨は同一個体のものである可能性が推測される。さらに、SU149より出土しているハト科2点に関しても同様の可能性が推測される。

SK03のキジ科右上腕骨のみ近代の可能性が高く、それ以外は近世に属する遺構より出土している。

2-2-3. 哺乳類 (7~20表, 1・2図)

7群の哺乳類遺体が出土している。そのほとんどは、ウサギ科骨集中検出遺構に由来している。そのサンプル群は39か所から検出しており、その内、遺構内が37、遺構外が2となっている(2表)。先述のように資料の量が膨大であったため、SK18のみ全量分析をおこない、その他のサンプルは、ウサギ科と「モルモット」以外のものを抽出して分析をおこなった。

(1) SK18の分析

1) 分析方法

ウサギ科と「モルモット」に関しては、できうる限り種類(科より下位)の分かるものを抽出したが、手根骨や足根骨より遠位の部位や脊椎部分などは、特にこの2群で分類が困難であった。そこで、抽出した部位の内、明確に2群で区別(同定)が可能な下顎骨、環椎、軸椎、仙骨、肩甲骨、上腕骨、尺骨、橈骨、寛骨、大腿骨、脛骨から最小個体数を算出した。それ以外の分類群は全ての部位を抽出し、その上で最小個体数を算出した。以下、最小個体数で組成を算出している。

①ウサギ科の計数方法

ウサギ科は最小個体数を算出するにあたって、それぞれ以下の方法で計数している。

- ・**下顎骨**:前・後端が残存しているものをそれぞれ計数し、多い方と前後共に残存しているものの数を足して最小個体数とした。
- ・**四肢骨**:近遠位端の有(○)無(×)で分類をおこなった。具体的に近遠位どちらかが残っているものを「近位○遠位×」「近位×遠位○」で分類し数が多いほうを、近遠位両方残るものの数と足して最小個体数をそれぞれ算出した。
- ・**寛骨**:寛骨臼が2分の1以上残存しているものを計数対象とした。
- ・**仙骨**:第1仙椎の残存しているもののみを抽出し計数対象とした。

②「モルモット」について

歯の形状から頭骨(上顎)と下顎骨はモルモットと同定できた。一方で、報告者らはモルモットの現生標本が手許にないため、頭部以外の部位の同定ができなかった。四肢骨をはじめネズミ科のものと近似する資料が含まれている一方で、モルモット以外の齧歯目の頭部資料が全く含まれていないことから、本報告では、これらのネズミ科近似資料を「モルモット」のものとして組成分析に用いることにした。そのため本報告の「モルモット」データは、今後、モルモット現生標本との比較が必要であることを明記しておく。

2) 分析結果

4群90体の哺乳類が含まれていた。ウサギ科が最も多く82体含まれており、全体の91.1%を占める。その他は5体以下である。詳細には、「モルモット」5体(5.6%)、ウシ2体(2.2%)、イヌ1体(1.1%)含まれている。重量では、ウサギ科が1969gで62.6%、ウシが534.2gで17.0%、イヌが159.1gで5.1%、「モルモット」が30.6g

で1.0%であった。なお、14.4%にあたる451.4gは今回分類をおこなわなかった資料である。これらのほとんどは、ウサギ科と「モルモット」のものと同定される。

今回、分析をおこなわなかったウサギ科骨集中検出遺構も概観すると、そのほとんどは、ウサギ科が9割を占めるのもので、SK18と大きく異なる組成であることが推測される。

(2) ウサギ科

ウサギ科は、動物学者の福田史夫によると、頭蓋骨と下顎骨形状からノウサギとアナウサギ(カイウサギ)に区別することができる¹⁾。本報告では、遺存状況の良さから下顎骨を用いる。具体的に、下顎切痕の角度が、アナウサギはほぼ90度であるのに対して、ノウサギは90度以上であることが指摘されている。阿部所蔵のアナウサギ(No.104)及びノウサギ(No.152)の現生標本と比較した結果、福田の指摘する形態的特徴の違いが確認され、本資料群はアナウサギであると同定された(PL5)。

(3) ウシ(11・20表)

ウサギ科骨集中検出遺構であるSK18から3点と表土から1点出土している。SK18は全て脛骨(左1右2)、表土は左橈尺骨が出土している。すべて、骨幹部分が鋸状の刃物で切断されている。西洋料理のスープの出汁などに用いられたものと推定される。

(4) サル類(12表)

ウサギ科骨集中検出遺構であるSX39より1体分出土している。部位は、上半身(胸椎より上部)は、頭部から胸椎までの中軸部分はないが、上肢部分は左右共に出土している。一方下半身(腰椎より下部)は、中軸部分は尾椎が出土していないが、腰椎と仙椎は出土している。なお、腰椎は化石化の途上のため、詳細な位置は不明である。下肢部分も左右共に出土している。

(5) イヌ

8か所(遺構内7、遺構外1)より出土している。各場所で1体ずつ含まれている。

1) **SK18(10表)**: ほぼ全身の部位が出土している。推定体高は41~43cmで、現生では小型に分類され、柴よりやや大きく、紀州、北海道、甲斐などよりも小さいサイズである。頭蓋骨はストップ(額段)の凹みが強く、上顎部分はやや細く短い。阿部所蔵の現生シバイヌ標本

とサイズ及び前述の形態については近似している。一方で、頬骨弓はあまり外側に膨らまない。項稜や外矢状稜はあまり発達しない。左右共に下顎犬歯の前側の一部において磨り減りがやや顕著で、象牙質が露出する。なお、上顎第3切歯の後側には顕著な磨り減りは見られなかった。四肢骨は全体的に細く華奢な印象を持つ。仙骨において、背面より観察すると仙骨翼部分が左右共に右側に傾いている。

2) SK19 (13表)： ほぼ全身の部位が出土している。幼獣で、頭蓋骨など遺存状況は良くない。歯の萌出状況から生後5ヵ月以上6ヵ月未満。四肢骨の骨端閉鎖時期では、分析可能なもので最も早いものが上腕骨顆(内・外側共に)の5ヵ月である。右上腕骨は近遠位端共に閉鎖していない(未癒合)。以上から生後5ヵ月前後と推定される。

3) SX25 (14表)： ほぼ全身の部位が出土している。若獣で、頭蓋骨などの遺存状況は良くない。歯はすべて永久歯の萌出が終わっていることから生後7ヵ月程。四肢骨の骨端閉鎖時期では、まず脛骨の遠位端部が完了していることから5ヵ月以上である。一方で上腕骨顆(内外側共に)と大腿骨近位端部が未癒合である。その内、一番閉鎖時期が早いのが大腿骨の大転子で6ヵ月以上9ヵ月未満となっている。以上から生後7ヵ月以上9ヵ月未満と推定される。

4) SX39 (15表)： ほぼ全身の部位が出土している。幼獣で、頭蓋骨など遺存状況は良くない。歯の萌出状況から生後5ヵ月以上6ヵ月未満。四肢骨の骨端閉鎖時期では、分析できるすべての四肢骨骨端の閉鎖が完了していない(未癒合)。SK19同様に分析可能なもので最も閉鎖時期が早いものが上腕骨顆(内外側共に)の5ヵ月である。右上腕骨は近遠位端共に閉鎖していない(未癒合)。以上から生後5ヵ月前後と推定される。

5) SK40 (16表)： 全てではないものの、頭蓋骨から脛骨にかけての部位が出土していることから、もともと全身の部位が揃った状態であったことが推測される。頭蓋骨は一部しか残っていないため全体像は不明。冠状縫合や矢状縫合部分が未癒合であることから比較的若い個体であると推測される。四肢骨は出土しているすべてにおいて骨化は終了している。推定体高は40～42cmで、現生では小型に分類され、柴よりやや大きいサイズである。腰椎において、前側椎頭縁辺に骨増殖が認められる。右乳頭関節突起が長い。さらに、右横突起が欠損したまま治癒している。

6) SX51 (17表)： 全てではないものの、頭蓋骨から足根骨にかけての部位が出土していることから、全身の

部位が揃った状態であったことが推測される。全体的に遺存状況が良くない。上腕骨が左右共に遠位端部が残存しているが、共に癒合しているものの骨端線は残る。この骨端線の閉鎖時期は5～8ヵ月であることから、8ヵ月未満と推定される。上顎骨は全て永久歯であることから、生後6ヵ月以上であると推定される。一方、歯根部分が薄手であり、形成途中である。7ヵ月には歯根の形成が完了することから、生後6ヵ月程と推定される。

7) SK59・上層 (18表)： ほぼ全身の部位が出土している。四肢骨は全て骨化が完了している。推定体高は50cmで、現生では中型の紀州、北海道、甲斐などのサイズである。頭蓋骨の項稜及び外矢状稜の発達が顕著で、さらに下顎骨の咬筋窩も深い。右上顎第3切歯の咬合面後側の磨り減りが顕著で象牙質部分が露出している。左下顎犬歯の前側の摩耗も顕著で髓腔まで露出している。上顎第3切歯後側と下顎犬歯前側は噛み合わせで接する面であることによるものと推測される。近世江戸遺跡から出土するイヌ遺体のなかには下顎犬歯の前方において抉ったような溝状の縦の摩耗がみられるものがある(猪熊・阿部2020)。これらは、上顎第3切歯によって摩耗したものと推定される。江戸市中で生活していたイヌ特に町犬は、人の食べ残しなどを食していたことが想定される。人の食べ残しであれば、硬いものや噛み切ることが難しいものは少なく、結果、顎が退化し、噛み合わせの悪い歯列になったものと推測される(阿部2023)。左橈骨の骨幹内側(背面)遠位、尺骨の遠位との接点に骨増殖が認められる。仙骨は、左右耳状面と第1仙椎部分腹側に骨増殖が認められる。陰茎骨が中位で骨折し、治癒の途中であったためか未癒合の状態である。

8) A層 (19表)： 頭部(軸椎より遠位)が出土していないのははじめ出土部位は少ないものの、全身の部位が満遍なく出土している。第7腰椎の椎体後側・椎頭腹側縁辺に骨増殖がみられる。

8体中四肢骨の骨端が未癒合の幼若獣は4体であった。また、成獣4体全てに腰椎もしくは仙椎に病変がみられた。他の部位との接合部分に歪みが見られるものが2体、椎体に骨増殖が見られるものが3体である。骨増殖はすべて腹側にみられる。

イヌの出土している遺構の内、SK19とSX59が19世紀前葉から中葉で近世のものと推測される。それ以外のものはウサギ科骨集中検出遺構から出土している。

(6) その他 (20表)

以上の他に、SX40(近代)からブタの左上腕骨、

SU149 (18世紀前葉) からネコの左中手骨 (第2~5) がそれぞれ出土している。また、SX39 (近代?) から同定対象外とした尾椎が8点出土している。

(7) まとめ

ウサギ科骨集中検出遺構では、食物残渣と推定される動物遺体がSK3でキジ科 (ニワトリ?) 右上腕骨1点とSK18で切断痕のあるウシの脛骨3点、SK40でブタの左上腕骨1点とわずかに入る程度である。以上の食物残渣と推定されるもの以外には、アナウサギ、「モルモット」、イヌ、サル類である。これらの分類群に関しては、実験動物として主体的に挙げられるものであり、特にウサギとモルモットは、1947年に設立され、当時は医科学研究所に間借りしていた国立予防研究所で用いられた実験動物の主体であったとされている (田嶋1984)。モルモットは、1843 (天保14) 年にオランダより初めて日本にもたらされ、翌年には2対が江戸に向い、そこで子をなしているという記録がある (山口2023)。そして、明治時代には愛玩用、実験動物用に飼育されていたとされている²⁾。具体的な実験動物としての導入時期は不明とされているが、1892 (明治25) 年に北里柴三郎が使用したことは確認されている (田嶋1984)。なお、アナウサギの実験動物化の開始時期について、田嶋は不明としている (田嶋1984)。

近代のアナウサギに関しては、実験動物としての導入の有無は不明であるが、東京府下で明治5 (1872) 年頃から外来のアナウサギが珍重、愛玩用として飼育され、その流行は値を高騰させ、投資対象にもなったほど熱狂的なものであったことが知られている (赤田1997)。特に東京大学本郷キャンパスのある本郷と本郷に隣接する小石川、神田は売買世話人及び飼育者が多かった³⁾ (赤田1997)。あまりに加熱する流行に東京府は、明治6 (1873) 年12月7日には府達を發し、ウサギ1羽に付き毎月1円を徴収するなどのウサギの飼育や売買の統制に乗り出している。その税額はあまりに高かったため⁴⁾、その後、さまざまな形でウサギの処分が始まり、当然、殺処分という方法も含まれていた。なお、「兎税」は明治12 (1879) 年6月まで続いたとされる。

分析をおこなったSK18において、アナウサギ以外の分類群は最小個体数が5以下であるのに対して、アナウサギは82で出土率も91%を占めている。SK18 (5.24kg) と同様のウサギ科骨集中検出遺構は他に36基 (18.16kg) もあり、その重量比率から調査地点全体で少なくとも366羽が含まれていたことが推定される。詳細な廃棄時期やその廃棄が一時的なものか継続的なものであったか

など不明な点が多く想像の域はでないが、これらのアナウサギは明治6 (1873) 年の「兎税」導入後に処分に困った人々が東京大学に持ち込み、それらを解剖実習や実験に用いた可能性も仮説として考える必要もあるだろう。

【註】

- 1) 参照した福田史夫氏のブログのURLは以下の通り。
<https://tanzawapithecus.blogspot.com/2022/11/how-to-discriminate-between-skulls-of.html>
- 2) 足立区生物園HP「もっともっとモルモット」
<https://seibutuen.jp/special/mottomotto/guineapig.html>
- 3) そのほかに本所が挙げられている (赤田1997)。
- 4) 大人1人3か月分の飯量に匹敵したとされている (赤田1997)。

【参考文献】

- 赤田光男 1997『ウサギの日本文化史』世界思想社
- 浅利昌男 2003『新・犬と猫の解剖セミナー—基礎と臨床—』株式会社メディカルサイエンス社
- 阿部常樹 2003「近世遺跡出土の貝類遺体とその採集方法について」『奈和』第41号 奈和同人会
- 阿部常樹 2023「納戸町遺跡出土動物遺体」『新宿区納戸町遺跡Ⅲ』公益財団法人東京都教育支援機構 東京都埋蔵文化財センター
- 猪熊花那子・阿部常樹 2020「四谷一丁目遺跡出土の爬虫類・哺乳類遺体」『新宿区四谷一丁目遺跡 第3分冊 史料・分析編』公益財団法人 東京都スポーツ文化事業団 東京都埋蔵文化財センター
- 桜井準也 1986「貝類・魚類の大きさとその分布について」『麻布台一丁目郵政省飯倉分館構内遺跡』港区麻布台一丁目遺跡調査会
- 田嶋嘉雄 1984「一実験動物学者の歩んだ道—実験動物の過去と現在—」『Experimental Animals』33-1 公益社団法人日本実験動物学会
- 樋泉岳二 1999「魚類」西本豊弘・松井章編『考古学と動物学』同成社
- 森 忠男 1930「本邦産雑種成犬ニ於ケル歯牙形態及び其ノ二代齒列發生ノ時期ニ就テ」『日本歯科学会誌』23
- 山内忠平 1958「犬における骨長より体高の推定法」『鹿児島

大学農学部学術報告』第7号鹿児島大学農学部

山口美由紀 2023『出島動物図鑑 象から駱駝から「ドードー」
まで』長崎文献社

Driesch (1976) A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF
ANIMAL BONES FROM ARCHEOLOGICAL SITES,
Peabody Museum of Archaeology and Ethnology

第1表 動物遺体種名表

軟体動物門 Phylum MOLLUSCA

腹足綱 Class Gastropoda

古腹足目 Order Vetigastropoda

ミミガイ科 Family Haliotidae

マダカアワビ *Haliotis (Nordotis) madaka*

サザエ科 Family Turbinidae

サザエ *Turbo (Batillus) cornutus*

盤足目 Order Discopoda

カワニナ科 Family Pleuroceridae

カワニナ *Semisulcospira libertina*

フジツガイ科 Family Ranellidae

ボウシュウボラ *Charonia lampas sauliae*

新腹足目 Order Neogastropoda

アクキガイ科 Family Muricidae

アカニシ *Rapana venosa*

二枚貝綱 Class Bivalvia

フネガイ目 Order Arcoida

フネガイ科 Family Arcidae

アカガイ *Anadara (Scapharca) broughtonii*

サルボウガイ *Scapharca kagoshimensis*

イタヤガイ目 Order Pectinoida

イタヤガイ科 Family Pectinidae

イタヤガイ *Pecten albicans*

カキ目 Order Ostreoida

イタボガキ科 Family Ostreidae

イワガキ? *Crassostrea nippona?*

マルスダレガイ目 Order Veneroida

バカガイ科 Family Mactridae

シオフキガイ *Mactra veneriformis*

ミルケイ *Tresus keenae*

シジミ科 Family Cobicalidae

ヤマトシジミ *Corbicula japonica*

マルスダレガイ科 Family Veneridae

ハマグリ *Meretrix lusoria*

脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA

硬骨魚綱 Class Osteichthyes

スズキ目 Order Perciformes

アジ科 Family Carangidae

ブリ属 *Seriola* sp.

タイ科 Family Sparidae

マダイ *Pagrus major*

サバ科 Family Scombridae

マグロ属 *Thunnus* sp.

カレイ目 Order Pleuronectiformes

ヒラメ科 Family Paralichthyidae

ヒラメ *Paralichthys olivaceus*

鳥綱 Class Aves

キジ目 Order Galliformes

キジ科 Family Phasianidae

属種不明 gen. et sp. indet.

カモ目 Order Anseriformes

カモ科 Family Anatidae

ガン族 Tribe Anserini

マガン *Anser albifrons*

カモ亜科 Subfamily Anatinae

属種不明 gen. et sp. indet.

ハト目 Order Columbiformes

ハト科 Family Columbidae

属種不明 gen. et sp. indet.

哺乳綱 Class Mammalia

霊長目 Order Primate

オナガザル科 Family Cercopithecidae

ニホンザル? *Macaca fuscata?*

齧歯目 Order Rodentia

テンジクネズミ科 Family Caviidae

モルモット? *Cavia porcellus?*

ウサギ目 Order Lagomorpha

ウサギ科 Family Leporidae

アナウサギ *Oryctolagus cuniculus*

食肉目 Order Carnivora

ネコ科 Family Felidae

イエネコ *Felis silvestris catus*

イヌ科 Family Canidae

イヌ *Canis familiaris*

偶蹄目 Order Artiodactyla

イノシシ科 Family Suidae

ブタ *Sus scrofa domesticus*

ウシ科 Family Bovidae

ウシ *Bos taurus*

2表 ウサギ科を主体に出土した遺構のサンプル量と出土動物遺体

	サンプル量		哺乳類			哺乳類 以外
	重量(g)	比率	ウサギ科+ モルモット	イヌ	その他	
SK1	70.8	0.4%	◎			
SK2	62.6	0.3%	◎			
SK3	3019.0	15.1%	◎			鳥類
SX4	265.4	1.3%	◎			
SK5	40.7	0.2%	◎			
SK6	223.1	1.1%	◎			
SK7	289.4	1.4%	◎			
SK8	228.4	1.1%	◎			
SK9	5472.3	27.3%	◎			
SK10	15.2	0.1%	◎			
SK18	5240.0	26.1%	◎	○	ウシ	
SK21	310.2	1.5%	◎			
SK22	71.0	0.4%	◎			
SK23	44.3	0.2%	◎			
SK24	815.0	4.1%	◎			
SK25	79.5	0.4%	◎	○		
SK26	82.2	0.4%	◎			
SK27	53.4	0.3%	◎			
SX29	10.6	0.1%	◎			
SX30	150.6	0.8%	◎			
SK32	355.3	1.8%	◎			
SK33	395.2	2.0%	◎			
SK34	92.5	0.5%	◎			
SX39	1238.7	6.2%	◎	○	サル、同 定対象外	
SK40	1175.0	5.9%	◎	○	ブタ	
SK47	34.5	0.2%	◎			
SK49	26.4	0.1%	◎			
SK49・50	264.1	1.3%	◎			
SK51	411.2	2.1%	◎	○		
SK53	325.8	1.6%	◎			
SK56	132.6	0.7%	◎			
SK57	66.1	0.3%	◎			
SX58	188.6	0.9%	◎			
SX61	140.9	0.7%	◎			
SX63	120.8	0.6%	◎			
SX69	79.3	0.4%	◎			
SX188	1810.0	9.0%	◎			
南北トレンチ南	91.3	0.5%	◎			
A層	127.8	0.6%	◎	○		貝類, 魚類
総計	20048.5					

※サンプル量の比率は、ウサギ科主体サンプル量のなかでのもの。

3表 ウサギ科の含まれない遺構での動物遺体一覧

遺構名	哺乳類			貝類	魚類	鳥類
	イヌ	ウシ	ネコ			
SK19	○			○	○	○
SK31					○	
SK59	○			○	○	○
SK60					○	
SU82				○		
SU149			○	○	○	○
B層					○	
表土		○				

4表 貝種組成表

出土遺構	貝種	マダカアワビ		カワニナ	ボウシユウボラ	アカニシ		アカガイ		サルボウガイ	イタヤガイ	イワガキ?	シオフキガイ	ミルクイ		ヤマトシジミ		アサリ		ハマガリ [「中小」]		ハマガリ [「大」]		最小個体数	備考
		殻	蓋			左	右	合	右					右	左	右	左	右	左	右	左	右			
						左	右	合	左					右	左	右	左	右	左	右	左	右			
A層B面南東トレンチ		1												1		1					2	1		5	
SK19		2	F		1									3	5	4	3	16	11	2	4			33	
SK59一括		1												1	1	1	1	3	2	1	1			7	
SK59上層		3	2	1			1	1	1				1	84	90	12	14	146	167	15	27			306	イタヤガイ右：杓子
SK59 [全体]		4	2	1			1	1	1				1	85	91	13	15	149	169	16	28			312	
SK59・60一括		2	3											25	24	13	9	34	24	4	7			84	
SK60		2									1			31	36	15	8	24	12		1			79	ハマガリ左：小剥離
SU82					1																			1	
SU149		25				1	1					1		1	1		27	22		3	1	1		60	
合計		4	35	2	1	1	1	2	1	1	1	1	1	146	157	72	57	223	221	24	41				
MNI		4	35	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	158		72		223		41				543	

5表 出土魚類遺体一覧

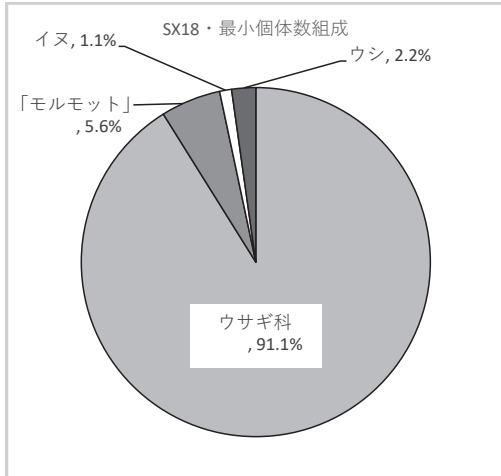
遺構名	種類	部位	左右	数	備考
SK19	マダイ	上後頭骨		1	ほぼ完存。
SK19	ヒラメ	尾椎		1	
SK19	同定対象外	鰭棘		40	マグロ属?
SK19	同定対象外			4	肋骨、椎骨棘部分などを含む
SX31	マグロ属	尾椎		5	椎体部分。横径5.0mm程のサイズ。内3点尾鰭椎前椎体。他、尾椎のものと推測される破片も含む。
SK59上層	ブリ属	歯骨	左	1	全長60mm程。歯槽後側欠損。
SK59上層	ブリ属	舌顎骨	右	1	
SK59上層	マグロ属	尾椎		2	椎体部分破片。横径4.0mm程のサイズと推測される。
SK59上層	同定対象外			6	破片×4、鰭棘（マグロ属?）と推測される棒状の破片資料×2
SK60	同定対象外			1	鰭棘（マグロ属?）と推測される棒状の破片資料
SU149	同定対象外	鰭棘		1	カツオ程度のサイズ。
A層B面南東トレンチ	マグロ属	尾椎		2	椎体部分。横径4.5mm程のサイズ。内1点、尾鰭椎前椎体。
A層	マグロ属	尾椎		1	椎体部分。椎頭形状は横長の楕円形。横径4.6mm×縦径4.0mm。
B層	マグロ属	尾椎		2	椎体部分。横径4.0mm程のサイズ。内1点、尾鰭椎前椎体。

6表 出土鳥類遺体一覧

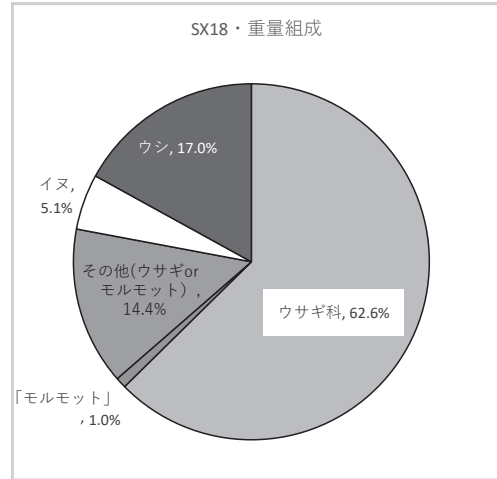
遺構名	動物種	部位	左右	数	備考
SK3	キジ科	上腕骨	右	1	中位～遠位が欠損。ニワトリ標本と同サイズ。
SK19	マガン	肩甲骨	右	1	近位残存。含気性の窩が鳥口結節の外側面にあり（ヒシクイorマガン）。サイズからマガン。
SK19	ガン族	鳥口骨	右	1	近位残存。鎖骨関節面が鳥口上溝の上まで張り出す。右肩甲骨と手根中手骨と同一個体のものと考えるとマガンか?
SK19	同定不可	手根中手骨	右	1	中位から遠位にかけての骨幹部分。形状・サイズからガン族の可能性が推定される。右肩甲骨と鳥口骨と同一個体のものと考えるとマガンか?
SK19	同定不可	四肢骨		○	四肢骨骨幹破片
SK59上層	カモ亜科	手根中手骨	右	1	近位端一部、遠位端部など欠損。オナガガモ標本と同サイズ。
SU149	ハト科	橈骨	右	1	近位端欠損。右尺骨と同一個体か?
SU149	ハト科	尺骨	右	1	近位端欠損。右橈骨と同一個体か?

7表 SK18出土哺乳類遺体組成

	最小個体数		重量	
	MNI	比率	g	比率
ウサギ科	82	91.1%	1969	62.6%
「モルモット」	5	5.6%	30.6	1.0%
その他(ウサギor「モルモット」)			451.4	14.4%
イヌ	1	1.1%	159.1	5.1%
ウシ	2	2.2%	534.2	17.0%
合計	90		3144.3	



1-1 図 SK18 出土哺乳類遺体組成グラフ(最小個体数)



1-2 図 SK18 出土哺乳類遺体組成グラフ(重量)

8表 SK18出土ウサギ科部位組成

部位	近位	遠位	左	右	部位	近位	遠位	左	右
下顎骨	前後あり		71	63	寛骨	寛骨白2/1残存		45	43
	前のみ		2	5		腸骨のみ		6	11
	後のみ		4	5		坐骨のみ		10	14
	MNI		75	68		MNI		45	43
環椎			20		仙骨	第1仙椎あり		25	
軸椎			34		大腿骨	○	×	52	50
肩甲骨	頸部あり		50	46		×	×	9	11
	○	×	5	1		×	○	7	11
上腕骨	×	×	4	2		○	○	16	20
	×	○	62	65	MNI		68	70	
	○	○	9	17	○	×	20	22	
	MNI		71	82	×	×	33	22	
尺骨	○	×	47	50	脛骨	×	○	29	35
	×	×	4	1		○	○	11	13
	×	○	8	4		MNI		40	48
	○	○	4	1		踵骨		22	17
MNI		51	51	距骨		7	3		
橈骨	○	×	45	50	MNI (全体)		82		
	×	×	10	7	MNI: 最小個体数				
	×	○	13	10					
	○	○	4	9					
MNI		49	59						

9表 SX18 出土モルモット部位組成

部位	左右	点数	重量(g)	備考
頭蓋骨		1	0.9	
上顎骨		5	5.6	左右未分類
上顎骨		1	1.6	左右連合
下顎骨	左	2	2.1	
下顎骨	右	5	3.8	
切歯		1	0.1	
遊離歯		—	0.8	
椎骨		1	0.2	
仙骨		1	0.2	
肩甲骨	左	1	0.1	
上腕骨	左	3	1.3	
上腕骨	右	4	1.9	
橈尺骨	左	1	0.4	
橈尺骨	右	1	0.3	
橈骨	左	1	0.2	
橈骨	右	2	0.3	
尺骨	左	1	0.2	
尺骨	右	1	0.2	
寛骨	左	3	1.5	
寛骨	右	2	1.1	
大腿骨	左	2	1.6	
大腿骨	右	3	1.8	
脛骨	左	4	1.9	
脛骨	右	4	2.3	
腓骨	左	1	0.1	
肋骨		3	0.1	
破片数		54	30.6	

10表 SK18 出土イヌ遺体一覧

部位	左右	点数	重量 (g)	備考
頭蓋骨		1	52.1	切歯骨, 左頬骨弓欠。上顎骨左 (×P× ²³⁴ M ¹²) 右 (×P× ²³⁴ M× ²) 柴犬標本とはほぼ同サイズ
上顎骨	右	1	1.8	切歯骨部分。(I×23C) 左側との連合部は未癒合。
上顎骨第三切歯	左	1	0.4	
上顎骨犬歯	左	1	1	
上顎骨第一後臼歯	右	1	0.9	
下顎骨	左	1	8.5	M2歯槽～下顎枝欠。(I×××CP× ²³⁴ M ₁ ×)、軽度な歯周症がみられる
下顎骨	右	1	15	完存。(I×× ₃ CP× ²³⁴ M ₁₂ ×)、軽度な歯周症がみられる。犬歯の前端が ³ やや磨り減っているか。 全長(Id-Goc): 109.7mm/ (id-mid) : 110.16mm=推定体高: 40.9cm
環椎		1	3.2	
軸椎		1	3.1	
第四頸椎		1	0.6	椎弓は右側のみ残存。椎体あり
第五頸椎		1	0.6	椎弓は右側のみ残存。椎体あり
第六頸椎		1	0.6	椎弓は右側のみ残存。椎体あり
第九胸椎		1	1.5	完存。
仙骨		1	2.8	背面から見ると全体的に右側にやや傾いている(傾きが見られるのは仙骨翼部分のみで椎体部分は正常)。
尾椎		1	0.2	
肩甲骨	右	1	1.6	関節部分とその周辺のみ残存。
上腕骨	左	1	6.8	両端欠損。
上腕骨	右	1	4.6	近位欠損。滑車上孔開く。
橈骨	左	1	4.7	骨幹部分のみ残存。
橈骨	右	1	2	近位～骨幹中位まで残存。
尺骨	右	1	1.9	骨幹部分のみ残存。
尺骨	左	1	2.4	骨幹部分のみ残存。
寛骨	左	1	7.2	恥骨付近で骨増殖がみられるか
寛骨	右	1	4.3	坐骨部分のみ残存。
大腿骨	左	1	11.4	大転子欠損。全長: 142mm程 = 推定体高: 約43cm
大腿骨	右	1	8.3	大転子及び遠位端内側欠損
脛骨	左	1	8.2	近位欠損。全体的に華奢、細め
脛骨	右	1	1.5	近位骨幹のみ残存。近位端部は欠損。
踵骨	左	1	1.9	
破片数		29	159.1	

11表 SK18 出土ウシ遺体一覧

部位	左右	点数	重量 (g)	備考
脛骨	右	1	216.0	骨幹部分。近遠位共に外側後方から内側前方に向かって鋸で切断。最後、へし折っている。遠位は海綿質が多く、端部ギリギリで切断している。また遠位内側の切断面より15mm上の位置に横位の切痕が残る。残存長: 170mm。
脛骨	右	1	141.3	遠位。内側から外側に向かって鋸で切断。最後、へし折っている。残存長: 103.0mm, Bd: 66.4mm
脛骨	左	1	176.9	骨幹部分。近遠位共に内側から外側に向かって鋸で切断。最後、へし折っている。残存長: 115mm
破片数		3	534.2	

12表 SX39 出土サル類遺体一覧

部位	左右	点	備考
腰椎		7	椎体及び椎頭部分。未癒合な椎頭部分は平滑であり、サル標本に近似する。椎頭部分は癒合直後のものがほとんどで、剥離している部分も癒合途上のものがほとんどである。
仙骨		1	第1仙椎右側付近のみ残存。前側の椎頭は癒合はしているが、剥がれかけている。化石化途上。
上腕骨	左	1	近位端部は未癒合。近位端部あり。遠位端は化石化完了。
上腕骨	右	1	近位端部は未癒合。近位端部あり。遠位端は化石化完了。
橈骨	左	1	近位端は化石化完了。遠位端部は未癒合。
橈骨	右	1	近位端は化石化完了。遠位端部欠損。
尺骨	左	1	近位端は化石化完了。遠位端部欠損。
尺骨	右	1	近位端は化石化完了。遠位端部欠損。
第1中手骨	左	1	
第2中手骨	左	1	
第3中手骨	左	1	近位端部の一部と遠位端部欠損。
第4中手骨	左	1	
第3中手骨	右	1	
第4中手骨	右	1	遠位端部欠損
寛骨	左	1	腸骨部分と寛骨臼下部から坐骨にかけて残存。坐骨結節部分化石化途上。
寛骨	右	1	腸骨部分と寛骨臼下部から坐骨にかけて残存。坐骨結節部分化石化途上。
大腿骨	左	1	遠位端部未癒合
大腿骨	右	1	遠位端部未癒合
脛骨	左	1	両端部未癒合。近位端部残存。
脛骨	右	1	両端部未癒合。近位端部残存。
腓骨	左	1	両端部未癒合。
腓骨	右	1	両端部未癒合。
踵骨	左	1	
踵骨	右	1	
距骨	左	1	
手/足根骨		1	
基節骨		6	
中手骨		1	両端部欠損。サイズと形状からサル？
中足骨		1	近位欠損。遠位端部未癒合。サイズと形状からサル？

13表 SK19 出土イヌ遺体一覧

部位	左右	点	備考
頭蓋骨		○	破片資料
上顎骨	左	1	I1~M2の歯槽部分。(I123c [C] P12××××)P12を除いて永久歯は歯根形成途中。乳犬歯も含む。乳犬歯の歯根内側は永久歯(犬歯)によって削られている。
上顎骨	右	1	I1~M2の歯槽部分。(I123 [C] P××34M12)永久歯は歯根形成途中 (P4M1は不明)。犬歯は萌出途中。
下顎骨	左	1	下顎枝が欠損。(I12×CP123×M12×) I12は歯根形成完了。Cは萌出途中。P23は歯根形成途中。その他は不明。
下顎骨	右	1	下顎枝先端が欠損。(×××CP1××4M12×) ※C萌出途中。P1は歯根形成完了。P4~M2歯根形成途中。
環椎		1	
軸椎		1	椎頭は両端共に未癒合。
第6頸椎		1	両椎頭未癒合。
頸椎		1	椎弓関節部分
頸椎		1	右側残存。椎頭は未癒合。第3?
頸椎		1	椎体部分と右側椎弓一部残存。椎頭は未癒合。第4?
第1胸椎		1	椎体部分と右側椎弓一部残存。椎頭は未癒合。椎体と椎弓の間も癒合したばかり。
胸椎		1	椎体部分と右側椎弓一部残存。椎頭は未癒合。第2?
胸椎		2	棘突起部分破片
椎骨		1	椎体部分。椎弓及び椎頭部分とは未癒合。
椎骨		8	椎弓部分破片。
肩甲骨	左	1	体部破片。
肩甲骨	右	1	関節部分未癒合。
上腕骨	左	1	遠位端部。未癒合。
上腕骨	右	1	両端部未癒合。近位端部あり。滑車上孔が開く。
橈骨	左	1	遠位欠損。近位端部未癒合。近位端部あり。
橈骨	右	1	近位欠損。遠位端部未癒合。遠位端部あり。
尺骨	左	1	遠位欠損。近位端部未癒合。
尺骨	右	1	両端部未癒合。遠位端部あり。
中間腕側手根骨	左	1	現生柴標本よりサイズ大きめ
第4手根骨	右	1	現生柴標本よりサイズ大きめ
第4中手骨	左	1	近位のみ残存。
第5中手骨	左	1	近位のみ残存。
第2中手骨	右	1	近位のみ残存。
第3中手骨	右	1	近位のみ残存。
第4中手骨	右	1	近位のみ残存。
第5中手骨	右	1	近位のみ残存。
寛骨	左	1	坐骨部分。坐骨結節部分が化骨化の途中。
大腿骨	左	1	遠位部分。端部は未癒合。
大腿骨	右	1	遠位端部。未癒合。
脛骨	左	1	両端部未癒合。遠位端部あり。
脛骨	右	1	両端部未癒合。共に端部あり。骨幹中位が欠損。
腓骨	左	1	骨幹部分一部欠損
腓骨	右	1	骨幹部分一部欠損
距骨	左	1	
踵骨	左	1	
距骨	右	1	
踵骨	右	1	
中心足根骨	左	1	
中心足根骨	右	1	
第3中足骨	左	1	遠位端部未癒合。近位端部癒合済み
第4中足骨	右	1	遠位端部未癒合。近位端部癒合済み
第5中足骨	右	1	遠位端部未癒合。近位端部癒合済み
中足骨?		1	近位端部欠損。遠位端部未癒合。
中手/足骨		9	近位欠損。遠位端部全て未癒合。内1点遠位端部。
基節・中節骨		16	全て近位端部未癒合。
肋骨		16	残存箇所での分類では以下の通り。近位端のみあり4, 中位(両端なし)6, 遠位端のみあり6。両端共に化骨化途中。

14表 SK25出土イヌ遺体一覧

部位	左右	点数	備考
頭蓋骨		○	破片資料。
上顎骨	左	1	(P×234) ※I2~C・M1の遊離歯あり
上顎骨	右	1	(P1234) ※I1~C・M1の遊離歯あり
下顎骨	左	1	I1からM3までの下顎体のみ残存。下顎体高が低い。下顎体頬側上部に全体的に凹みが見られる。(I123CP×234M12×)
下顎骨	右	1	切歯歯槽と下顎枝上部欠損。下顎体高が低い。下顎体頬側上部に全体的に凹みがみられる。(I123CP1234M12×) ※切歯遊離歯
環椎		1	左右横突孔付近破片2片。
軸椎		1	椎体後側椎頭未癒合
第3頸椎		1	椎体後側椎頭未癒合
第4頸椎		1	椎体後側椎頭未癒合
第5頸椎		1	椎体後側椎頭未癒合
第6頸椎		1	椎体後側椎頭未癒合。椎体前側欠損。
第7頸椎		1	椎体後側椎頭未癒合
第1胸椎		1	椎体後側椎頭未癒合
第2胸椎		1	椎体両側椎頭未癒合
第3胸椎		1	椎体両側椎頭未癒合
第5胸椎		1	椎体両側椎頭未癒合
第6胸椎		1	椎体両側椎頭未癒合
胸椎		3	棘突起部分のみ
胸椎		1	椎体と椎弓右側。椎頭は前後共に未癒合。
腰椎		3	椎弓部分破片
腰椎		2	椎頭部分。未癒合。
腰椎		4	椎体・椎弓それぞれ一部。残存する椎頭部分は全て未癒合。
仙骨		1	第2仙椎椎体部分が欠損し、2片。仙骨椎体椎頭は前後ともに癒合済み。椎骨同士も癒合済み。
肩甲骨	左	1	関節部分とその周辺のみ残存。
肩甲骨	右	1	関節部分とその周辺のみ残存。
上腕骨	左	1	近位未癒合。近位端部はあり。大結節が欠損。骨幹部分が細い。滑車上孔が広い。全長約114mm
上腕骨	右	1	近位未癒合。近位端部はあり。近位大結節と遠位端部が欠損。骨幹部分が細い。
尺骨	左	1	両端欠損。全体的に細い感がある。
尺骨	右	1	遠位端欠損。近位端部は癒合しているが骨端線がわずかに残る。全体的に細い感がある。
橈骨	左	1	遠位欠損。近位端部癒合済み。全体的に細い感がある。骨幹の断面形状が内側に凹んでいる。
橈骨	右	1	両端欠損。なお、遠位端部が未癒合な状態で残存。全体的に細い感がある。骨幹の断面形状が内側に凹んでいる。
中間橈側手根骨	左	1	
副手根骨	右	1	
第3中手骨	左	1	
第2中手骨	右	1	
第3中手骨	右	1	遠位にビリアナイトの析出(変色)がみられる。
第4中手骨	右	1	遠位にビリアナイトの析出(変色)がみられる。
第5中手骨	右	1	
寛骨	左	1	腸骨から寛骨臼上部、寛骨臼下部と坐骨の一部の2片に分かれて残存。
寛骨	右	1	腸骨から寛骨臼上部、寛骨臼下部から坐骨結節の2片に分かれて残存。坐骨結節部分は未癒合。
大腿骨	左	1	骨頭が未癒合。骨頭部分はあり。大転子と遠位が欠損。小転子の発達が顕著で内側に大きく出っ張る。骨幹部分は細い。
大腿骨	右	1	骨頭・大転子・小転子・遠位端未癒合。骨幹部分は細い。
脛骨	左	1	近位端部欠損。遠位端部は癒合済み。骨幹部分は細く、そのためか遠位端部の幅が広く見える。
脛骨	右	1	近位端部欠損。遠位端部は癒合済み。骨幹部分は細く、そのためか遠位端部の幅が広く見える。
距骨	左	1	
距骨	右	1	
踵骨	左	1	
踵骨	右	1	
第3中足骨	左	1	遠位端部欠損
第3中足骨	右	1	
第4中足骨	右	1	
第5中足骨	右	1	
中手/中足骨		3	近位欠損

部位	左右	点数	備考
基節骨		8	短〔前肢側〕5, 長〔後肢側〕3
中節骨		1	
〔同定対象外〕		2	破片資料。イヌ?

15表 SX39出土イヌ遺体一覧

部位	左右	点	備考
頭蓋骨		1	後頭骨頭頂部（右頭頂骨+右前頭骨）+大孔周辺（頭蓋底）
上顎骨	左	1	（P×4M1）P4は萌出途上。M1は萌出済みだが、歯根は形成途上。
上顎犬歯	左	1	歯根は形成途上。
上顎犬歯	右	1	歯根は形成途上。
上顎第1後臼歯	右	1	歯根は形成途上。
下顎骨	左	1	後臼歯歯槽部分下顎体。（M1×）M1は萌出途上か？歯根は形成途上。
下顎第4乳臼歯	左	1	
下顎骨	右	1	（dm×34M1）※M1は歯根形成途上。
下顎犬歯	右	1	歯根は形成途上。
下顎第1後臼歯	右	1	歯根は形成途上。
環椎		1	
軸椎		1	前後共に椎頭未癒合。
第3頸椎		1	前後共に椎頭未癒合。
第6頸椎		1	椎体部分のみ。椎頭未癒合。
腰椎		6	全て前後共に椎頭部分は未癒合。
肩甲骨		1	関節部分のみ。左？
上腕骨〔同定不可〕	左	1	遠位端(滑車部分)のみ。なお、端部は未癒合。滑車上孔は開いている。
上腕骨	右	1	近位部分。近位端部未癒合。近位端部あり。
上腕骨	右	1	遠位端部。骨幹部分とは未癒合。
橈骨	左	1	近位残存。近位端部未癒合。
尺骨	左	1	肘頭部分。近位端部未癒合。
寛骨	右	1	寛骨臼部分
大腿骨	左	1	近位・遠位部分。共に端部は未癒合。
大腿骨	右	1	遠位端部。骨幹部分とは未癒合。
踵骨	左	1	
第3中足骨	左	1	遠位端欠損
第4中足骨	左	1	遠位端欠損
四肢骨〔同定不可〕		14	骨幹部分。骨質から幼獣、サイズからイヌのものと推測。

16表 SK40出土イヌ遺体一覧

部位	左右	点	備考
頭蓋骨		1	右前頭骨と左頭頂骨部分のみ
下顎骨	左	1	(×P×23●M12) ※●：歯槽閉鎖。
第4頸椎		1	全体に被熱
腰椎		1	前側椎頭縁辺に骨増殖。右乳頭関節突起が長い。右横突起が欠損したまま治癒。
橈骨	左	1	近位欠損。
尺骨	左	1	遠位端部わずかに欠損。
上腕骨	右	1	近位骨頭部分欠損。GL:129.27mm=推定体高：42cm
橈骨	右	1	完存。GL:124.95mm = 推定体高：40cm
尺骨	右	1	遠位欠損。
寛骨	左	1	腸骨近位、恥骨部分欠損。
大腿骨	右	1	近位端部欠損。中位から遠位欠損。
脛骨	左	1	近位端部のみ残存。
脛骨	右	1	完存。GL:145.06mm=推定体高：42cm

17表 SK51出土イヌ遺体一覧

部位	左右	点	備考
頭蓋骨 [同定不可]		○	破片資料。イヌ？。
上顎骨	右	1	歯槽部分 (P×4M1)
上顎第2後臼歯	右	1	歯根部分欠損
下顎骨	左	1	歯槽部分破片
下顎骨	右	1	歯槽部分破片
下顎犬歯	左	1	歯根部分欠損
下顎第1前臼歯	左	1	歯根部分欠損
下顎第2前臼歯	左	1	歯根部分欠損
下顎第4前臼歯	左	1	歯根部分欠損
下顎第4前臼歯	右	1	歯根部分欠損
下顎第1後臼歯	左	1	歯根部分欠損
下顎第1後臼歯	右	1	歯根部分欠損
下顎第2後臼歯	左	1	歯根部分欠損
下顎第2後臼歯	右	1	歯根部分欠損
第3頸椎		1	椎弓部分
上腕骨	左	1	遠位端部。骨端線が残る。
上腕骨	右	1	遠位端部。骨端線が残る。
寛骨	左	1	寛骨臼～坐骨付近
寛骨	右	1	寛骨臼付近破片
大腿骨	左	1	近位+骨幹部分。骨頭部分未癒合。
距骨	右	1	
踵骨	左	1	
四肢骨 [同定不可]		○	破片資料。イヌ？。

18表 SK59上層出土イヌ遺体一覧

部位	左右	点	備考
頭蓋骨		1	前頭骨部分、幼獣 ※同遺構イヌ資料と別個体
頭蓋骨		1	左右上顎、前頭骨、後頭骨に分かれて残存。全体的な形状は柴標本に近似する。サイズは大きい。矢状稜と項稜は強く張り出す。前頭骨上の矢状方向凹みは強い。左 (P××234M12) 右 (I××3×××××××) 右第3切歯の咬合面は磨り減りが顕著で象牙質が露出。
下顎骨	左	1	ほぼ完存。全体的な形状は柴標本に近似。咬筋窩は深い。P2~P3頰側歯槽に軽微であるが歯周症による退縮が認められる。(×××CP×234M1××) 犬歯前面の摩擦が顕著で髓腔まで露出。 下顎骨長(Id-Goc) : 149.0mm/ (id-mid) : 149.6mm = 推定体高 : 49.6cm
環椎		1	
第3頸椎		1	
軸椎		1	
胸椎		4	破片数は5、第3胸椎含む
胸椎		1	
腰椎		2	
仙骨		1	第1部分のみ。以降は欠損。左右耳状面及び腹側に骨増殖が認められる。
尾椎		2	
肩甲骨	左	1	関節部分他破片3
肩甲骨	右	1	遠位欠損。
上腕骨	左	1	近位欠損。
橈骨	左	1	完存。骨幹遠位内側、尺骨遠位との接点に骨増殖認められる。 GL:165.73mm=推定体高 : 50.4cm
橈骨	右	1	ほぼ完存
尺骨	左	1	遠位端欠損。
尺骨	右	1	完存。GL:193.98mm=推定体高 : 49.2cm
第3中手骨	左	1	
第5中手骨	左	1	
第2中手骨	右	1	
第4中手骨	右	1	
寛骨	左	1	腸骨体内側に横位の傷。腸骨近位と恥骨欠損。
寛骨	右	1	腸骨および恥骨部分欠損。
大腿骨	右	1	近位・遠位の一部など欠損。
脛骨	右	1	近位欠損。
脛骨		1	骨幹近位の一部欠損。
腓骨	左	1	遠位部分。
腓骨		1	骨幹部分破片。左?
腓骨	右	1	近位。近位端部一部欠損。
距骨	左	1	
距骨	右	1	
踵骨	左	1	
第4足根骨	左	1	
中心足根骨	左	1	
第2中足骨	左	1	
第4中足骨	左	1	
第2中足骨	右	1	
第5中足骨	右	1	
陰莖骨		1	骨折※2つに分断。
中手/足骨		1	近位欠損。
中手/足骨		2	近位欠損。
基節骨		4	
基節骨		3	
肋骨		15	内関節有2
肋骨		21	内、関節有7点
[同定対象外]		○	破片資料。イヌ?

19表 A層出土イヌ遺体一覧

部位	左右	点	備考
第3頸椎		1	
第4頸椎		1	
頸椎		1	椎弓部分
第1胸椎		1	椎弓左側部分
胸椎		1	
第3腰椎		1	
第4腰椎		1	
第5腰椎		1	
第6腰椎		1	
第7腰椎		1	後側椎頭腹側に骨増殖が見られる。
上腕骨	左	1	近位部分のみ残存。
上腕骨	右	1	近位端部と骨幹の一部が欠損
上腕骨	—	—	骨幹破片 4
脛骨	右	1	両端部欠損。イヌ？

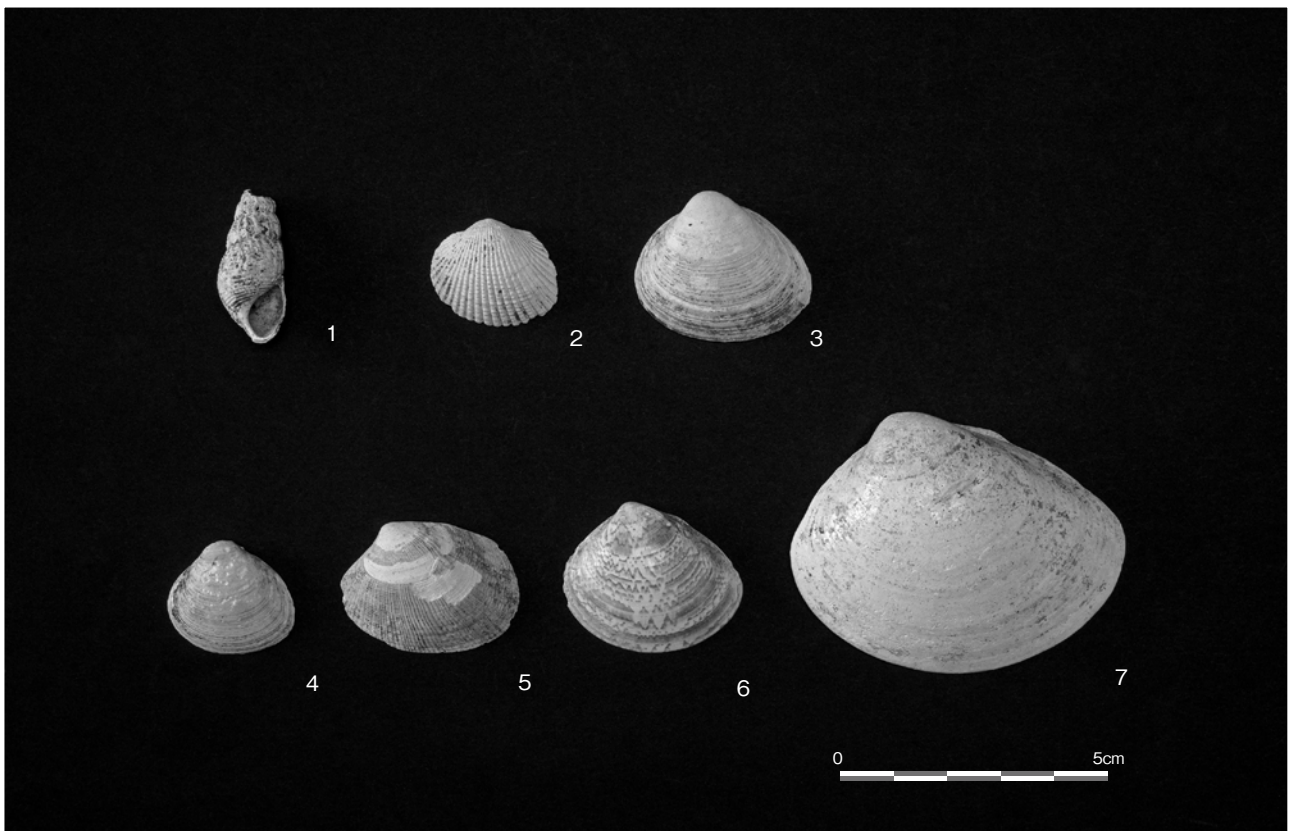
20表 その他の哺乳類遺体一覧

遺構名	動物種	部位	左右	点	備考
SX39	同定対象外	尾椎		8	大型。化石化は完了している。キツネ（イヌ科）とイエネコとで比較した結果、ネコにより近似するが明確な違いは認められなかった。サイズ、成長度合いなどから本遺構の他のイヌのものとは異なる。
SK40	ブタ	上腕骨	左	1	近位及び遠位端部が欠損。
SU149	ネコ	中手骨	左	4	第2～5。同一個体。
表土	ウシ	橈尺骨	左	1	遠位部分。近位に切断面あり。遠位端部欠損。



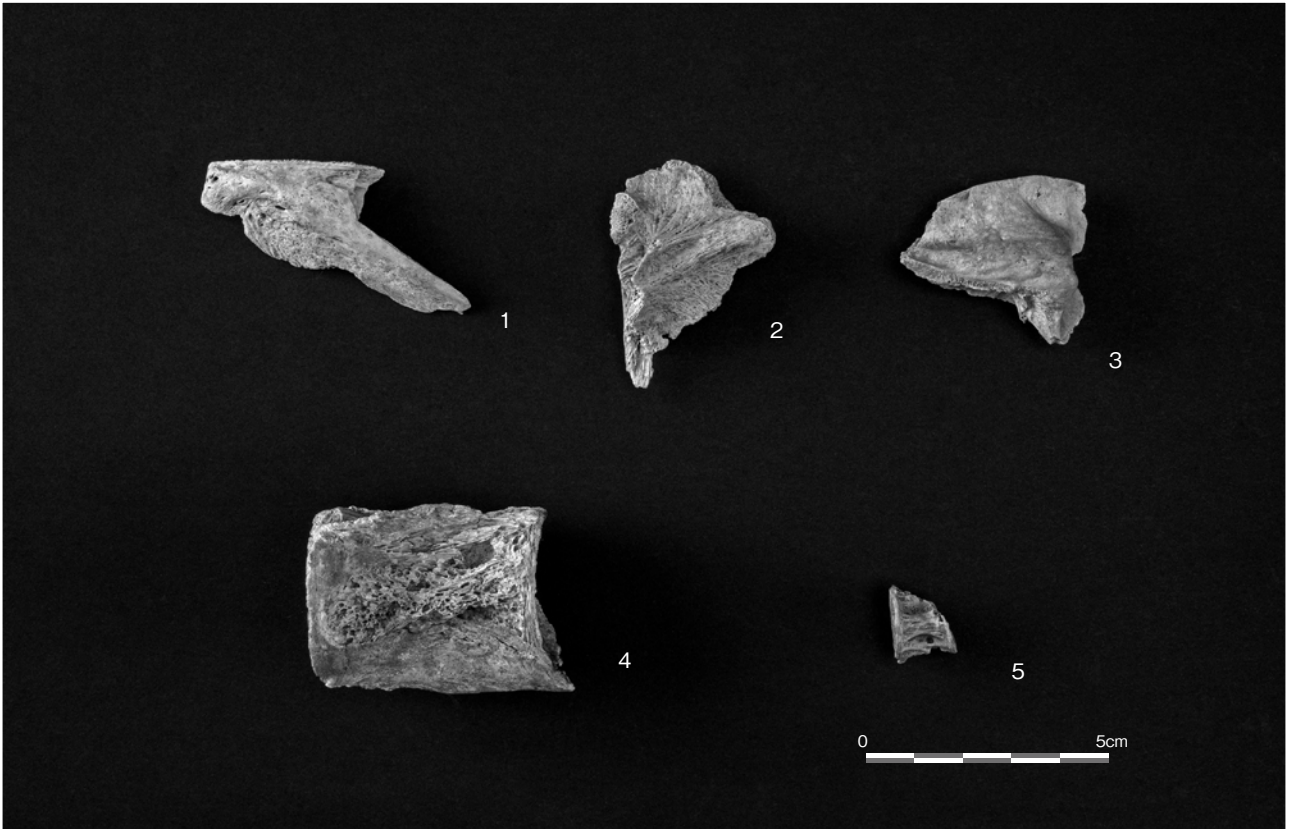
PL.1 貝類遺体 (1)

1. サザエ 2. ボウシュウボラ 3. アカニシ 4. アカガイ・左 5. イタヤガイ・右 [貝杓子] 6. イワガキ?・右
 7. ミルクイ・右
 1・4・5・7. SK59上層 2. SK19 3. SU82 6. SK60



PL.2 貝類遺体 (2)

1. カワニナ 2. サルボウガイ 3. シオフキガイ 4. ヤマトシジミ 5. アサリ 6・7. ハマグリ ※二枚貝類は全て左
 1・2・4~7. SK59上層 3. SU149



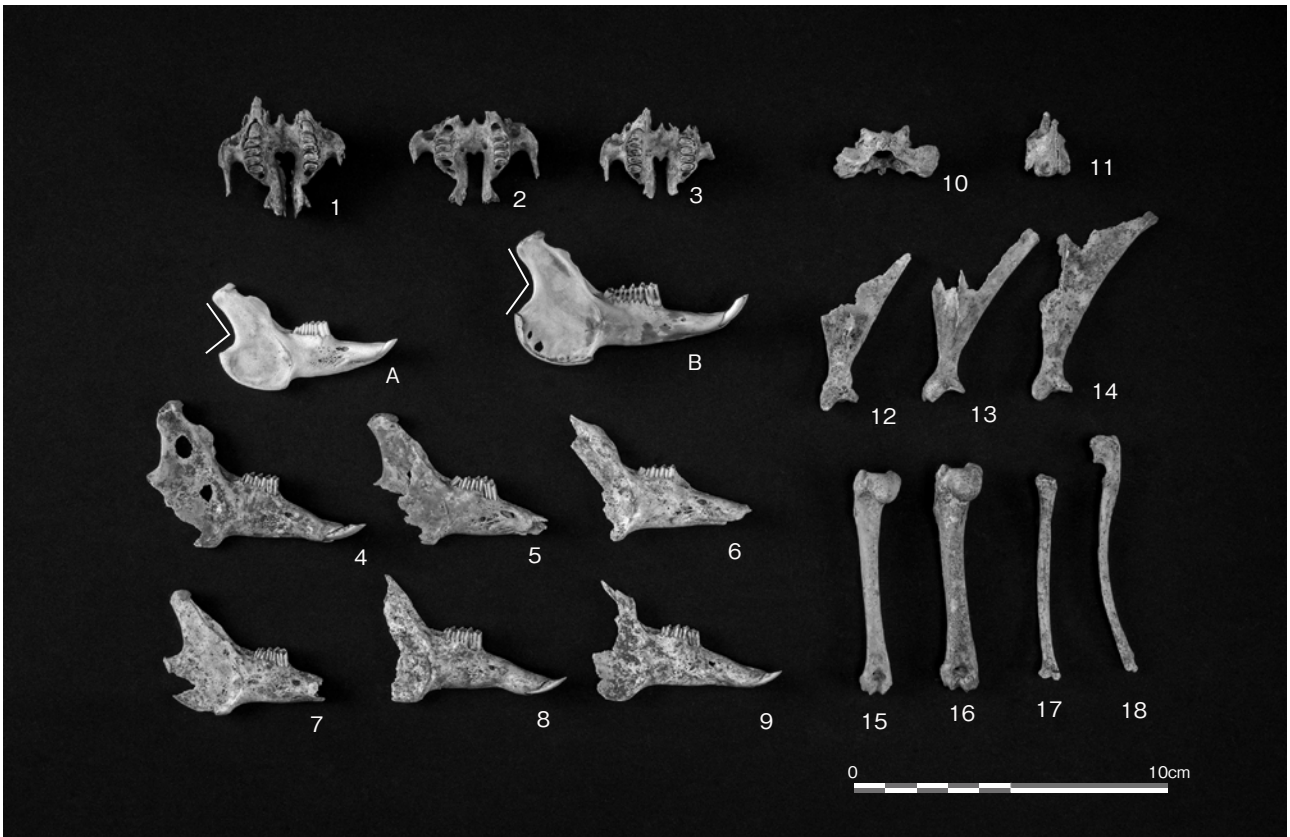
PL. 3 魚類遺体

1・2. プリ属 (1. 左歯骨, 2. 右舌顎骨) 3. マダイ・上後頭骨 4. マグロ属・尾鳍椎前椎体 5. ヒラメ・尾椎
1・2. SK59 上層 3・5. SK19 4. SK31



PL. 4 鳥類遺体

1. キジ科・右上腕骨 2. マガン・右肩甲骨 3. ガン族・右鳥口骨 4. カモ亜科・右手根中手骨
5・6. ハト科 (5. 右尺骨, 6. 右橈骨) 1. SK3 2・3. SK19 4. SK59 上層 5・6. SU149



PL. 5 ウサギ科 (1) [SK18 出土資料]

1～3. 上顎骨 (底面) 4～9. 右下顎骨 10. 環椎 11. 軸椎 12～14. 左肩甲骨 15・16. 左上腕骨 17. 左橈骨 18. 左尺骨
A・B. 現生標本・右下顎骨 (A: アノウサギ [標本番号: 104], B: ニホンノウサギ [標本番号: 152])



PL. 6 ウサギ科 (2)・「モルモット」 [SK18 出土資料]

1～7. ウサギ科 (1. 左寛骨, 2. 仙骨, 3・4. 左大腿骨, 5～7. 左脛骨)
8～16. 「モルモット」 (8・9. 上顎骨 (底面), 10・11. 左下顎骨, 12. 左上腕骨, 13. 左橈尺骨, 14. 左寛骨, 15. 左大腿骨, 16. 左脛骨)



PL. 7 サル類 [SX39]

1. 上腕骨(a. 近位端部) 2. 橈骨 3. 尺骨 4. 寛骨(a. 腸骨部分, b. 坐骨部分) 5. 大腿骨(b. 遠位端部) 6. 脛骨(a. 近位端部)
7. 腓骨 8. 踵骨 9. 距骨 ※すべて左



PL. 8 ウシ (切断面を有する牛骨)

1~3. SK18: 脛骨 (1・3. 左, 2. 右) 4. 表土: 左橈尺骨
※矢印: 切痕



PL. 9 イヌ (1) [SK18 出土資料]

1. 頭蓋骨 (a. 右側面, b. 上面) 2. 右下顎骨 3. 仙骨 (a. 背面, b. 腹面, c. 正面) 4. 左寛骨 5. 左大腿骨 6. 左脛骨



PL. 10 イヌ (2) [SK40 出土資料]

1. 左下顎骨 2. 腰椎 (a. 正面, b. 腹面) 3. 右尺骨 4. 右橈骨 5. 右上腕骨 6. 左寛骨 7. 右脛骨



PL. 11 イヌ (3) [SK59 上層出土資料 - 1]

1. 頭蓋骨 (a. 上面, b. 左側面) 2. 左下顎骨 3. 仙椎 (a. 背面, b. 腹面, c. 正面) 4. 陰茎骨 (a. 上面, b. 左側面)



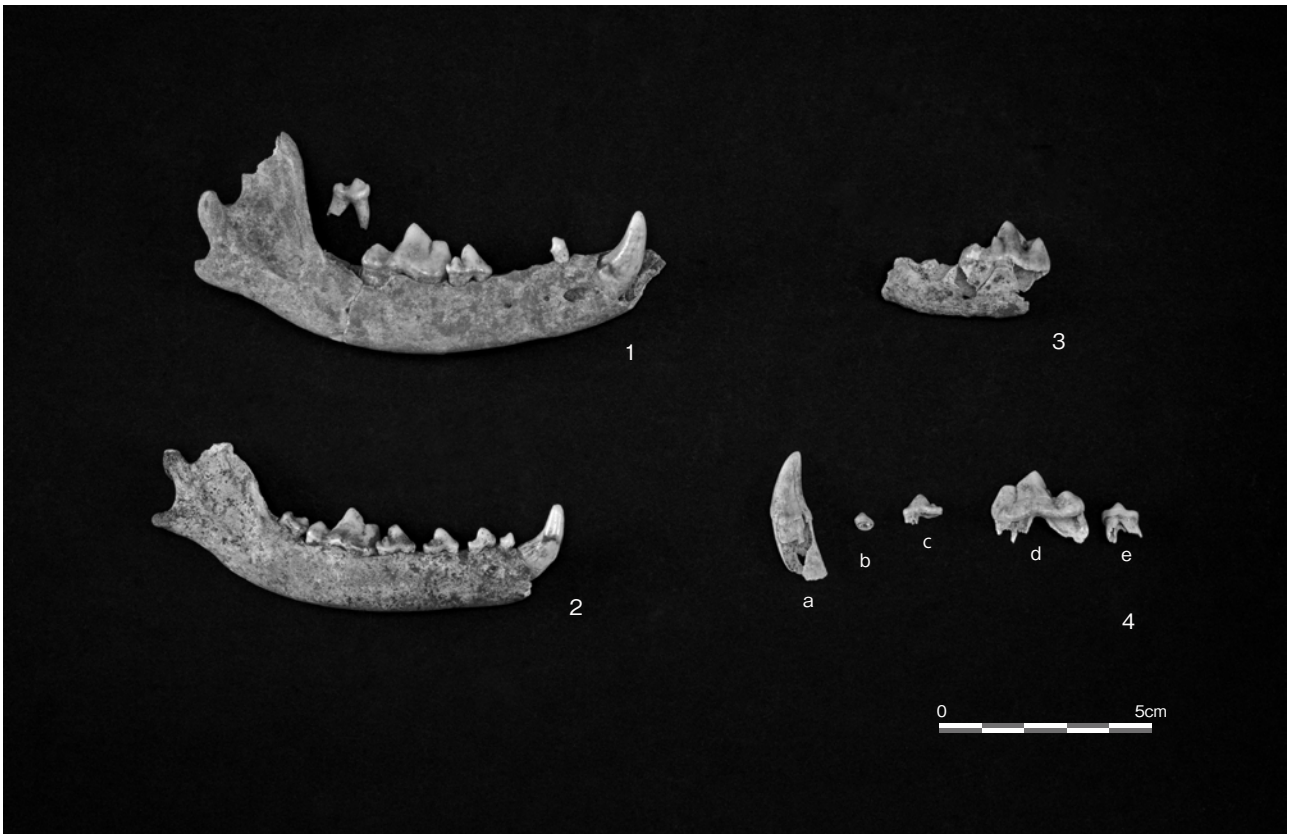
PL. 12 イヌ (4) [SK59 上層出土資料 - 2]

1. 右肩甲骨 2. 左上腕骨 3. 左橈骨 (背面) 4. 右尺骨 5. 右寛骨 6. 右大腿骨
 ➡: 骨増殖部分



PL. 13 イヌ (5) [A層]

1. 第7腰椎 (a. 腹面, b. 後面[天地逆]) 2. 右上腕骨 3. 右脛骨



PL. 14 イヌ (6) [その他]

1. SK19: 右下顎骨 2. SK25: 右下顎骨 3. SX39: 左下顎骨 (舌側)
4. SK51: 左下顎歯 (a. 犬歯, b. 第1前臼歯, c. 第2前臼歯, d. 第1後臼歯, e. 第2後臼歯)



PL. 15 そのほかの哺乳類

1. ネコ・左中足骨（第2～第4：SU149） 2. ブタ・左上腕骨（SK40） 3. 不明哺乳類・尾椎の一部（SX39）

【引用・参考文献】

- 安芸毬子・小林照子・堀内秀樹 2012 「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」『東京大学構内遺跡調査研究年報8』東京大学埋蔵文化財調査室
- 安藤雅之 2010 『縄文時代早期を中心とした煙道付炉穴の研究』私家版
- 石川県図書館協会 1938 「東邸沿革図譜」『景周先生小著集』
- 市川創 2023 「近世大坂における瓦の生産と流通」『ヒストリア』301
- 江戸文化資料刊行会 1970 万治年間江戸測量図
- 及川良彦 2003 「炉穴内外の集積礫の再評価（炉穴研究の集落研究を進めるために - T.N.T.No.200 遺跡の研究・縄文編1）」『東京考古』21 東京考古談話会
- 大成可乃 2011 「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(2)」『東京大学構内遺跡調査研究年報7』
- 大貫浩子 2009 「東京大学工学部武田先端知ビル地点出土陶器製インク瓶について」『東京大学本郷構内の遺跡浅野地区1』（東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書9）、東京大学埋蔵文化財調査室
- 加藤晃 1989 「江戸時代の瓦における「江戸式」の展開：軒平瓦・軒棧瓦の瓦当文様の変遷」『史学研究集録』14（国学院大学日本史学専攻大学院会）
- 加藤晃 1992 「江戸瓦の変遷：加賀藩本郷邸出土の瓦について」『国学院雑誌』93（12）
- 加藤晃・金子智 1990 「御殿下記念館・山上会館地点検出の瓦について」『山上会館・御殿下記念館地点 第3分冊』東京大学埋蔵文化財調査室
- 金持健司 2002 「多摩ニュータウン遺跡群における早期後半の遺構と遺物」『研究論集 XIX』東京都埋蔵文化財センター
- 金持健司 2012 「縄文時代早期の遺跡と定住の開始」『研究論集 XXVI』東京都埋蔵文化財センター
- 金子智 1996 「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平・軒棧瓦の地方色」『古代』101
- 金行信輔 2007 『寛永江戸全図』之潮
- 続群書類従完成会 1964 『新訂 寛政重修諸家譜』
- 小林達雄編 2008 『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 小林義典 1999 「遺構研究 炉穴」『縄文時代10』縄文時代文化研究会
- 古板江戸図集成刊行会 1958 『古板江戸図集成』
- 小松愛子 2015 「文献・絵図資料にみる富山藩江戸屋敷」『東京大学構内遺跡調査研究年報9』東京大学埋蔵文化財調査室
- 財団法人印旛郡市文化財センター 1994 『木戸先遺跡 御成台団地宅地造成事業地内埋蔵文化財調査』
- 斉藤進 1991 「炉穴の時代」『研究論集 X 創立10周年記念論文集』東京都埋蔵文化財センター
- 斎藤忠一 1986 「露地の構成」『座敷と露地（二）』（茶道聚錦8）小学館
- 桜井準也 2019 『増補 ガラス瓶の考古学』六一書房、初版：2009年
- 鈴木正章 1989 「遺跡の層序と地質学的調査・分析」『理学部7号館地点』東京大学遺跡調査室
- 諏訪間順 2019 『相模野台地の旧石器考古学』新泉社
- 諏訪間順・野口淳・島立桂 2010 「第二章 旧石器文化の編年と地域性 四 関東地方南部」『講座 日本の考古学』1 旧石器時代上（稲田孝司・佐藤宏之編）青木書店
- 瀬戸市文化振興財団 2015 『瀬戸後期の様相：古瀬戸系施釉陶器窯の成立と展開』地図資料編纂会 1988 『江戸・東京市街地図集成』柏書房
- 東京都教育委員会 1985 『都心部の遺跡』
- 土岐津町誌編纂委員会 1997 「生産者別標示記号（統制番号）」『土岐津町誌 史料編』土岐市土岐口財産区
- 成瀬晃司 2016 「加賀藩本郷邸における斜面地開発と変遷 - 入院棟 A 地点 1 区の調査成果を中心に -」『医学部附属病院入院棟 A 地点 研究編』東京大学埋蔵文化財調査室
- 日本建築学会 1908 「卷末附図説明 前田侯爵邸建築工事概要」『建築雑誌』263
- 橋本真紀夫 2009 「東京大学浅野地区の方形周溝墓における土壌分析」『浅野地区 I』東京大学埋蔵文化財調査室
- 文京区教育委員会 2020 『文京区史料集 講安寺文書（改訂版）』
- 堀内秀樹 1997 「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報1』東京大学埋蔵文化財調査室
- 本郷區役所 1937 『本郷區史』
- 本郷仏教会編 1984 『本郷の寺院 - 街と寺誌』
- 松田重雄 1988 『切支丹灯笼の信仰』恒文社
- 松橋英二 1978 「飛ノ台貝塚発掘調査概報」飛ノ台貝塚発掘調査団
- 宮崎勝美 1994 「大名藩邸の境界装置 - 表長屋の成立とその機能 -」『武家屋敷 空間と社会』山川出版社
- 宮崎勝美 2016 「江戸時代の文献・絵図史料からみた入院棟 A 地点」『医学部附属病院入院棟 A 地点 研究編』東京大学埋蔵文化財調査室
- 吉田伸之 1988 「近世の城下町・江戸から金沢へ」『週刊朝日百科日本の歴史別冊 歴史の読み方 2 都市と景観の読み方』朝日新聞社
- 吉田伸之 1992 「都市の時代」『日本の近世9 都市の時代』中央公論社
- 和田慎治 2010 「縄文早期末の住居跡と遺構 - 富士見市内

- の事例から-』『縄文海進の考古学 ～早期末葉・埼玉県打越遺跡とその時代～』六一書房 打越式シンポジウム実行委員会編
- 東京大学埋蔵文化財調査室関連刊行物
- 東京大学遺跡調査室 1989 『理学部7号館地点』
- 東京大学遺跡調査室 1990a 『法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』
- 東京大学遺跡調査室 1990b 『医学部附属病院地点』
- 東京大学総合研究博物館 2000 『加賀殿再訪』
- 東京大学総合研究博物館 2011 『弥生誌-向岡記碑をめぐって-』
- 東京大学総合研究博物館・東京大学埋蔵文化財調査室 2017 『赤門-溶姫御殿から東京大学へ-』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1997 『東京大学構内遺跡調査研究年報1』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999 『東京大学構内遺跡調査研究年報2』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2002 『東京大学構内遺跡調査研究年報3』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004 『東京大学構内遺跡調査研究年報4』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005a 『医学部附属病院外来診療棟地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005b 『工学部1号館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2006a 『工学部14号館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2006b 『東京大学構内遺跡調査研究年報5』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2008 『東京大学構内遺跡調査研究年報6』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2009 『浅野地区I』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2011a 『教育学部教育研究棟地点・IML地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2011b 『東京大学構内遺跡調査研究年報7』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012a 『東京大学構内遺跡調査研究年報8』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012b 『総合研究博物館新館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2016 『医学部附属病院入院棟A地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2017 『東京大学構内遺跡調査研究年報10』
- 東京大学総合研究博物館 2018 『赤門 溶姫御殿から東京大学へ』
- 東京大学キャンパス計画室 2018 『東京大学本郷キャンパス140年の歴史をたどる』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2019a 『東京大学構内遺跡調査研究年報11』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2019b 『東京大学構内遺跡調査研究年報12』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2019c 『医学部教育研究棟地点報告編』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2019d 『医学部教育研究棟地点研究編』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2021a 『東京大学構内遺跡調査研究年報13』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2021b 『東京大学構内遺跡調査研究年報14』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2021c 『医学部附属病院看護職員等宿舎1号棟地点・臨床試験棟地点・看護職員等宿舎3号棟地点(1)』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2021d 『薬学部新館地点・薬学部資料館地点』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2022a 『医科学研究所附属病院A棟地点 報告編』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2022b 『医科学研究所附属病院A棟地点 研究編』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2022c 『東京大学構内遺跡調査研究年報15』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2023 『経済学研究科棟地点』

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくほんごうこうないのいせき かんごしよくいんとうしゆくしゃ5ごうとうちてん、 かんごしよくいんとうしゆくしゃ3ごうとうちてん(2)
書名	東京大学本郷構内の遺跡 看護職員等宿舎5号棟地点、看護職員等宿舎3号棟地点(2)
副書名	
巻次	
シリーズ名	東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書
シリーズ番号	19
編著者名	阿部常樹、内田仁、香取祐一(編)、小林照子(編)、高橋怜土、堀内秀樹(編)、山下優介、湯沢丈
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 TEL: 03-5452-5103
発行年月日	令和6年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	所在地	遺跡番号	° ' "	° ' "			
とうきょうだいがくほんごうこうないの 東京大学本郷構内の いせき 遺跡 かんごしよくいんとうしゆくしゃ 看護職員等宿舎 5ごうとうちてん 5号棟地点	とうきょうと ぶんきょうく 東京都 文京区 ほんごう 本郷 7ちようめ 3ばん 1ごう 7丁目3番1号	13105	47	35° 42' 42"	139° 46' 02"	2008/4/1 ~ 2008/8/1	550㎡	医学部附属 病院看護職 員等宿舎5号 棟新営に伴う 事前調査
とうきょうだいがくほんごうこうないの 東京大学本郷構内の いせき 遺跡 かんごしよくいんとうしゆくしゃ 看護職員等宿舎 3ごうとうちてん(2) 3号棟地点(2)	とうきょうと ぶんきょうく 東京都 文京区 ほんごう 本郷 7ちようめ 3ばん 1ごう 7丁目3番1号	13105	47	35° 42' 42"	139° 46' 01"	1996/11/5 ~ 1997/1/31	525㎡	医学部附属 病院看護職 員等宿舎3号 棟新営に伴う 事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
看護職員等宿舎 5号棟地点	包蔵地 集落 屋敷	旧石器 縄文 古墳 中世 近世 近代	旧石器:ブロック3、礫群2 縄文:竪穴建物2、炉穴、 陥穴 古墳:竪穴建物16、土坑 中世:溝 近世:地下室、井戸、塀、 植栽痕、廃棄土坑、 土坑、ピット 近代:飛石、実験動物骨	旧石器:石器、石核、剥片 縄文:土器、石器 古墳:土器、管玉 中世:陶磁器 近世:陶磁器、土器、瓦、 金属製品、石製品 近代:陶磁器、土器、 金属製品、ガラス製品	古墳時代中期の拠点 集落、近世富山藩邸 庭園遺構、近代実験 動物骨が多量に出土
看護職員等宿舎 3号棟地点	包蔵地 集落 屋敷	縄文 古墳 近世	縄文:土坑1 古墳:竪穴建物	縄文:土器 古墳:土器	

要約	<p>古墳時代中期を中心とした多数の竪穴建物が確認され、本郷台地東縁部に弥生時代後期から古墳時代中期の集落が移動しながら経営されていたことが確認される。</p> <p>富山藩邸庭園遺構が多数確認され、庭園の景観が復元できた。</p> <p>近代初期に東京医学校から帝国大学期の庭と実験動物骨が多量に出土した。</p>
----	--

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 19

東京大学本郷構内の遺跡

看護職員等宿舎 5 号棟地点
看護職員等宿舎 3 号棟地点 (2)

2024 年 3 月 31 日発行

編集・発行 東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場 4 - 6 - 1
<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp>

印刷 明誠企画株式会社
